光学の超高密度収縮粒子砲戦記

コルサ号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
光学の超高密度収縮粒子砲戦記

【Ｎコード】
Ｎ９５６７Ｒ

【作者名】
コルサ号

【あらすじ】
ここ学園都市に、すごい奴が現れた！！
光学高密度収縮装置っ！！別名光学使い（プラトニックマスター）
あらゆる光を自由に操り、光の収縮や濃縮…更にかなり異質なプラトンやスペクトルの原理を自分自身に持ち合わせ
その超高密度に収縮された一撃は、ありとあらゆる物体を一撃で消滅させる！！
そんな強大な力の持ち主

葛城　光雄　１６歳

その彼と偶然に出会う事になる一人の魔術師…

形上…ローマ正教に属しつつ
彼女も又、魔術サイドの中でも最も異質で世界中でも数人しか存在しない精霊を操りし『古代魔術…アクエリアスの涙』を用る、

その少女の名は

マリオン・オヴ・シュペー

そんな二人はこの世界で何を見…そして何を望むのかっ！！

光雄とマリオン…そんな二人は共に学園都市で出会いそして共に歩み…二人の運命は…はたして……その先にあるのは残酷な結末か！！それとも！？

てな訳で？そんな暗いイメージは全部まとめて吹き飛ばしっ！！そんな二人が織り成すドタバタラブコメ風学園物語っ！！みんなっ…よろしくねっ！！

◆◇◆◇◆……

注：プロローグ手直し完了しました……

注：第一話手直し完了しました……

注：第二話手直し完了しました……

続けてゆっくりだが手直し次々とやる予定です

……――プロローグ――……　とある世界に落とされたっ！？（前書き）

初めまして……かな？

『とある科学部の発明家』
を書いていましたコルサ号と申します。

まぁ～この作品も前作同様、禁書系二次小説なのですが……

この作品も前作同様オリ主が出て来ます…（汗）

しかもオリ主に続きオリヒロインと……更に次々とオリキャラや、しかも原作キャラも巻き込みつつとんでも無い原作崩壊をもたらします…

それでも『俺は別に良いよっ！！』っと思うお方……よろしくお願いします

そうでないお方も、これを見て興味を持っていただけたら、とても嬉しいですねっ！！

それではっ！！そんな訳でっ！！

マリオン「光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！みんなっよろしく

ねっ！！」

…――プロローグ――…　とある世界に落とされたっ！？

……――この世界この世のありとあらゆる仕組
光り、それに相対するように闇が存在する

そんな何処までもつづくかのような漆黒の世界を照らすように
そして、宇宙――異次元――異質――更に幾つもの折り重なる平行世界――

そう、とある科学者の学説いわく、この世界は幾つもの折り重なるような平行世界があり、それぞれが同じ刻を刻み存在していると言う、
そんな平行世界の一つにある異変が起きる、『魔法石（マジック・ストリングス）』その神に与えられし力を用い――――この宇宙（そら）の中心地点から一筋の光が舞い降りる、その刻に深々と刻み込むように――…

――――――――――――…

――――――――――――……

―――――……

―――――…

――…

「うぅっ…ヤッパ外は寒みっ…」

…――ここは、東京都台東区、上野駅前に位置する公園の広場―
―時に暦２０１１年、冬…それは今年一番のとても寒い日

その公園の周りに生い茂る木々やそこから下側に広がる広い広場まで、総てを白い世界へと染め上げる雪……

そんな雪が降りしきる静寂が支配する、そんな世界を雪を踏みつ

ける独自の音を立てつつ広場から駅に向かい歩いて来るベージュのコートに身を包む人物が居る……

そう、その人物の周りもかなり冷えているのか、吐く息が白く凍てつく大気に溶け込むように、

そしてようやく駅の入口付近に到着したようで、器用に自身の周りに着いた雪をはたきながら、自動改札機を抜けつつ足早にそのまま駅のホームに向かいエスカレーターを駆け上がる、

そう…更にこの数分後に待ち構える…自身に降り掛かる、そんな事件に巻き込まれる事も知らずに…

そんな彼の名は、葛城　光雄　２０歳、
いわばこの世界に住むごく普通の一学生、
一件パッとしない黒髪のごく有りふれた顔立ちの青年なのである、
そんな彼が通う専門学院アニメーション科の居残り授業後、いつものように、待ち合わせの友達に会いに下校中だったのであるが？
……

そして、駅のホームで
ふと柱に設置してある時計を見る彼……そんな彼は？？

げげっ！
も、もうこんな時間かよ～…
たしか、メールにゃ～いつものゲーセンでって、くっそ～……あん

のくそタヌキめ、しかし今日に限って電車来るのおせーな……ん？

そんな事を思いつつ、更にその柱時計から視線を下に戻す彼、その視線の先に駅のホームに設置してある黄色い線の先に一人の学生が佇むのが見え、

えっ？あの子一体なぁ～にやってんだ!？

その学生はなにかしら自分の足元に、
彼女の持ち物と思える黒い学生用カバンを置きつつ彼女が佇む位置から先…
ホームの真下をずっと眺めつつ立ちすくんだまま動かないのである…

そんな妙な様子の学生を、通りかかるサラリーマン達とか、その他の通行人達が、目を背けながらそそくさと行く…

そんな様子を見ていた彼は、その彼女が今からやろうとしている行為を見て、何となく嫌な予感がしていた……

「アイツ……まさか…」

ちっ！…ったく、こっちはそれ所じゃねぇ～っつーのに…しゃぁ～ねぇ～なっ…

ふと彼は、何故か、その学生に一言訪ねようと歩み寄るのだが…

その時…丁度次の電車が来るアナウンスが耳に入り、

その彼が近付こうとした瞬間…

ドサリ……と、鈍い音を立てつつ彼の眼前からその学生の姿は消え……

その学生…幼い少女はホームの下に…

落ちた！！……

周りからその場に居た通行人達は、悲鳴を挙げる者、面白い物見たさにはしゃぎあう者…

「くそっ、やっぱりだ、だから言わんこっちゃ無いっつーのっ！！」

そんな様子を見つつ、身体が先に動いたのか!?彼も又目の前の少女と同じように、瞬間的にホームに飛び降りていた。今自分自身がやるべき事は一つ、

そして彼はとっさに
その少女に向かって全力で駆け出す。

正義感？　人助け？

ちっぱかばかしい…

…――後１０m（メートル）――…

俺はさぁ～…そー言うわがままな奴等を見てるのはスンゲームカつくんだよっ！

…――あと５m（メートル）――…

そして、いち早くその少女の手を思いっきり力いっぱいに掴み、
そんな突然目の前に現れた彼に一瞬驚きながら目を見開きつつも、
再び少女は目を座らせ、キッ！と、そんな彼を睨み付けながら　捕まれた手を思いっきり振りほどくかのように暴れ！！

「キャッ！！痛い痛いって！なにするのよ！！」

「おいっ、アンタその痛いって感情あるんだったら、何でそんなばかばかしいを事する！」

「そんな事……私の勝手じゃないの、　いいから放してっ、　ほっといてっ、好きにさせてってばーーー！！」

その少女の一言で更に頭に来たみたいな彼は更に暴れる少女を今度は両手で押さえつけ、力を溜め込みつつ

「くそっ！！だから暴れるなっつーのっ！！アンタ…　自分の命は自分自身だけじゃ無いんだぞ！アンタはここで死のうが勝手だけど俺が嫌なのはっ！！もしアンタが消えたらもっと苦しむ人とか…家族だってっ！！…あ～も～っ！！この分からず女ッッ！！」

そして彼は、自身の溜め込んだ力を解放するように目一杯力任せに、その暴れる少女をホームの上に…放り投げる。

そして、一息着いたつかの間、
ふぅ～……これでなんとか後は俺も……な！？

「っつ――――――！？」

しかし、その時、グワッ！！…と、突然凄まじい衝撃が彼を襲い…

ふと気付くと…自身の身体が遥か上に突き飛ばされ、
全身に駆け巡る凄まじい激痛と共に、自身の物でもある真っ赤な血がゆっくりと…まるでスローモーションの如く宙に舞い、

そんな朦朧(もうろう)とした、意識の中…真下に佇みながら…
先程まで彼が助けた命……その少女がその彼を思ってか、泣きながら叫んでるのが見え、それを取り囲むように野次馬達がうじゃうじゃと、写メを採る者、はたまた何かしら叫んでいる者、そんな人達を眺めつつ……

……――ああ、ヤッパ俺って、ハハッそうだよな、そんな格好良い、まるで俺が何時も憧れていた、
そんな正義のヒーローなんてなれっこ――…

……――――――――

――――……

◆◇◆◇◆……

……――そして、彼、葛城光雄２０歳は、事実上、この世界から消えた……

あ～あ……俺ヤッパ死んだんだよな、何だかな～

しかしあの彼女が助かったから、まっ、いっか…

いや……と言うか、まてよまてよおいっ、そんなオチでいいんか？俺の人生……うぅ～くそぅっ、死ぬ前に、あんな事やこんな事色々やりたかったな～グズッ

あれっ？何だ……俺の…涙か……

「……」

「……」

……――えっ？っつーかなんで涙が出てるんだ？しかも涙が宙を漂う所から上から下に落ち……

って？ちが――――――――っ！！

ハァッ…ハァッ…っつーか宇宙じゃねぇーっつーのっ！なぁーに

が涙が宙を舞うだっ！ガ〇ダムですか？

いや…ついつい専門学校ののりでやっちまったが……誰も突っ込まねーし……（汗）

でも一体全体ここはっ！？にしても地面……があるよな…しかも息を吸って…吐いて……再び深呼吸……？？

って！？つかさっき俺は電車に跳ねられ

「っつ！――――」

そして一気に飛び起き、自身の身体中あちこち見つつ……

あれっ？そぅ～言えば身体中痛くねーし…しかも全然ピンピンしてるしっ

うっは～！俺ってもしかして無敵って奴かァ？何処かのもやしキャラみてーに逆に跳ね返したりしてっ、

「んな冗談は後にして……ははっ…マジで俺、一体全体どーなっちまったんだよぅ～……ヤハリ…ここはっ？」

そんな先程から呆然とその静寂が包み込む謎の空間にただ…ただ…ポツリと1人淋しく佇む…そんな彼を背後から見つめる人物が……

そんな人物が、ふと彼に語り掛けるような、

まるで意識を通して彼の脳裏に直接話し込むように……

……――光りを司る運命の者よ、何故迷う事があるのですか？
そう――――あなたが来るのもそして――この先も…あなたの運命は――――……あなた自身が切り開く物ですよ――…

「えっ……なにっ？」

その語り掛けるような響きに反応するかのように自身の背後に佇む人物の気配に気付きつつ振り向く彼……そして、そんな彼の眼前には、
ニッコリと微笑む一人の女性が佇んでいたのである。

「うぉっ、あっアンタっ！いきなり現れるなっつーのっ！マジビビったから心臓に悪いからこんなの……っつーか今の俺…心臓あるんか！？」

更に…そんな彼をただただ微笑みながら見つめる女性……その女性の姿は真っ白な、まるでかのギリシャ神話に出てくるような神々しい服装、

その服装の胸元付近…両手に抱えるとても鮮やかに蒼白く光り輝く”なにか”を用い更に彼女の肩辺りを観察してみると、

同じく蒼白い翼が、真っ直ぐ伸び、更に彼女から目をずらしつつ、先程まで気付かなかったが、周りは透き通るような暖かな空が広がる、更にその下はとても綺麗な草原が広がり、その遥か向こう側には小さな丘が見えるのである。

えっ??ええっ!?、やっぱこの景色…あのやや黄緑色の丘があるしやっぱり、その丘の向こう側にゃ〜??

「川がありますよっ!!…ふふ」

「そうなんすかっ…ヤッパ死んだ爺ちゃんの仮設は正しかったねうん、そうだね!?って」

「んじゃゴラァ――――――っ!!爺っちゃん既に死んでるから…っつー事は?なんですかっ!?もしかしてこの俺様は既に死んでいます文句が有るなら神様に言えコノヤロ――――とか?アンタはそれが言いたいんかっ!?」

「ほえっ!?…（汗）…い…いえ?アンタさっきから何言ってんのか訳分かりませんけど??、
ええ～と…た…たしかにご名答ですねっさすがですっ（注：何が?）」

「そうですっ!!そうなんですっ!?あなたの人生はズバリそこで止まりましたんですっ」

「て～事は、俺は!?」

「はい!その通り、ご名答――っ!!あの世ですねっキャハッ!!」

「あ…あのね～キャハッって!?他人事だと思って……うぅ……（涙）」

そう…光雄は今現在自身を取り巻くこの世界や状況…更に目の前に佇む予測不可能な妙な姿の女性……
そう、一瞬今までの思考が全て音を立てながら崩れて行くような…

そんな感じで…じっと自身の人生を振り返るよう雲一つ無いこの薄い菫色に染まる空を見てめていた

そんな彼に首を傾げつつ可愛い笑顔で話しかける女性……そしてっ！！

「あ…あの～……あなた…」

「んあ？……そうだっ！！なあアンタ…一つ質問があるんだが…」

「ええ……なんでしょうか？もしかして私の事が気にな？？」

「って！？おいっ！！んなわきゃね～だろっ！？このエセ東〇キャラが？……」

「なっ！？ふふふ……いいですよどーせ人間風情がこの第１８天使たるこの私の魅力なんか……あ～あっ……せぇ～っかく神様の頼みで勇敢なアンタを好きな世界に転生させようと頼まれたのになぁ～……ふふふ？」

その彼が何気なく言った質問に？、その天使みたいな彼女は、とんでも無いテンプレ発言を彼にぶつけるのだが！？

「おいてめ――今何と？」

「えっ？？だからぁ～私は～神様に頼まれて……っつーかぶちゃけ私はずっと、あなたに付いていた守護霊様がっ！！生前のあなたの行いは、とても、勇気があり、正義感が強く、神様も大変に褒めていらっしゃいましたと言ってるのっ！！聞いてませんでしたっ？？……聞いてないなら別にあなたなんかどーでも……」

「へっ？？…」

何か……何かが違う？アイツ……天使様じゃね～よ…絶対違うよっ…俺の脳内イメージの天使様が……（汗）いや…んな事よかアイツ…又々テンプレ発言言ったよな？たしか…

そう…先程の彼女の発言で『転生先で』　とか　『自由な所』とか、そんな単語に違和感を感じつつ、光雄は！？……

「て事は、……あの～、もしかして！？にっ…に…二次元世界とかも可能なんか！？でもまぁ～～やっぱりそれは無理ですよね～……　…何ちて（笑）」

とまぁ～…そんな彼の”アホ”質問に帰って来た答えが！？

「いえ、問題無いと思うっ！どれにするの？ブ〇ーチでもワ〇ピでも…あ！ガ〇ダムの世界はちと人気があって無理かな～……」

その答えに超が付く？程のアニオタ（バカ）な光雄は？

「うっははぁ――――マジかよおぃっ俺……死んでよかったかもグズリ……」

と？なにやら謎のハイテンションで！？

うっしゃ――っ！！これで二次小説とかで見ていたあの様々な世界に行くっつーあれかっ！？マジでっ！？さっ…ささささあ～て…ど…どれにしよ～かな～ハハ、

あれもいいな～、いやこれも……いやいやまてよ？でも北〇の拳はちと怖え～っつ～か…

そんなウハウハな思考中、ハイテンション中な彼を見つつ突然その天使様は！？腕時計を見て…時間切れ？と

「えっ！？なっなに？？え～と時間切れってとかってなに？（汗）」

「ふふ…そういう決まり事なのよね～だからさぁ～、まぁ～……これでいいわねっ（笑）

『とある魔術の禁書目録』っ！！…」

げげっ！！そこって??

たしか……（汗）

スンゲー魔術師とか能力者とかバトルする!?

超危険地帯な場所じゃんかっ！?これって、転生してもしかしていきなり死亡フラグみたいな!?

ち…ちょ……まっ！?

……――そして、意識が遠退いて行き――……

――――――――……

――――――……

――――……

――…

……――ん？？――――ここは？？――――――……

「はっ！？……誰かの家っ！？っつーか学生寮か！？」

たしか…俺は神様か天使様に無理矢理この世界に飛ばされ！？
そしてここは……うぅっ！？かっ……身体が重い……

いや、違う！重いというかなんか……なんだろう…この違和感は…

あれっ！？これっ！！俺の身体がっ！！

そんな事を思いつつ…先程前に仰向けに倒れていたようで…背中に感じるリビングの堅い床の感覚…そんな彼は片手で自身の頭を抱えつつ上半身を起こしつつ……

時刻は夜なのか…その薄暗い学生寮の窓越しに映り込む自分の顔形と…一番驚いたのは自分自身の頭の髪の毛の色なのである！！

うげぇ――――っ！！なっ！？なななっ！！
これ俺かっ！？俺なんかっ！！しかもこの何処かしらの萌えキャラみたいな甘いマスクにこの薄いピンクのバカみたいな色素の髪っ！！女？？の子っ！？いや……

て事は、あの王道のパターンて～事だぁ～なっ！
今流行りの女顔の主人公はぁ～っ！！誰かさん…多分本編の主人公のお隣りに、偶然引っ越しちゃったーってやつかっ？？

でもま～…こんなベタなパターンでいいんか？？
あっ！そうだっ！！んな事よか…や…やべっ！
この世界は、たしか禁書目録ってぇ～事はっ！？

そんな事を思いつつ突然立ち上がり？身構えつつ！？ガラス越しに映る自身の姿に向かい手をかざし
ニヤリ……と？

そしてっ！！

えいっ！！……おりゃぁ――――っ！！電撃でも何でも良いから出ろっ！！

えいっ！！えいっ！！
どりゃぁぁぁ――――――――っ！！

◇◆◇◆◇◆……

更に数分後??

あはっ!?や…ヤッパダメダメかっ!!（汗）

分かっているが……俺……何も……マジなぁーんも能力が使え無いではないか～??
ま…ままさか～

どっ……どーしよう（汗）

そんな感じで両手に頭を抱え考え込んでる光雄……
そんな時突然学生寮に設置してある電話が鳴り響き!

とっさに電話を取り恐る恐る準話機に耳を近づける彼…

「えっ……ええーと…もしも?」

『あっ!繋がった繋がったっ…私はさっきあの世に居た、天使様だよ～ん……』

「へ？？……なっ！…なな何といきなりっ！？つかアンタっ！！俺が悪かった…能力も無いし…は…早く元の場所へ戻してくれ～！！」

と？なんともまぁ～かなりまいってるのか必死に元に戻せとせがむ彼に対して…その天使様はキッパリと！？…

『いえ…それは…無理かな……あっ！！そうそう、その事でいい忘れていたんだけどさぁ～……あなた、今何の能力も無しに、とか言ってたよね……しかしっ！！そんな事もあろうかとっ！？ズバリ！あなたはとても素晴らしい能力があるんだよね～！まぁ～……この先絶対バトル的な事態に陥るとおもうから…まっ！！実戦で色々と試したら分かると思うよ……ああ～そうそうっ！！後今のあなたの年齢は１６歳という事でっ！！では…良い高校生活をっ！！……キャハッ！！』

「えっ？ええ～っ！？…お…俺様に能力がっ？って！？ちょっと待っ……！？」

っつーか既に、電話は切れてるし…（汗）

しかし、なにやらとても暑いな～季節は夏か、しかも明日から高校生活か……ははっ…悪くないな…よ…よしっ！こーなったら仕方ないっ！！覚悟を決めて青春を再び横臥するのも悪くないな！！

と?、その前に、

そして、その自分の部屋を確認するべく歩きだし、キッチン奥にある冷蔵庫を開け??

やっぱり空っぽか…ま…当たり前か……

さてとっ!!只今時刻は?１９：３０かうし!自分家の探索がてらに食材を買いに、ちと夜風にでも当たってくかっ!!

そして玄関に、

ガチャンとドアを開け出かける彼

この真夏の独特の空気の匂いがツン…とあたり……

肌に触るそよ風……ふと、空を見上げると星々がきらめいていた……

やべっ…でも俺、このとある世界にきちゃったんだよな～……

ま!すぐに死亡フラグっつー事も無いし戦時中の真っ只中って事も無いし…いつの世もそうだが、平凡に生きてきゃあ大丈夫だよなっ!!

と、夜空を見上げながら、一人呟く光雄であった……

そして、このとある世界での彼の人生の第二幕が開くのである……

次回へ続くっ！！

……――プロローグ――……　とある世界に落とされたっ！？（後書き）

……いやいや…てな訳で…なんだかんだで？半強制的にこの”とある世界”に事実上”転生”という形で落とされてしまった主人公っ！！

果してそんな彼の運命はっ！？
更に次回っ！！そんな彼と同じくして学園都市で出会う一人の幼き少女……
そんな少女と彼の偶然の出会い…そして二人の物語の歯車がゆっくりと回るっ！！
そんな訳でっ！！次回もお楽しみに～っ！！

第一話　私っ！！魔法少女じゃないよっ！！魔術師だよっ！！（前書き）

さてさて…前回に続いて主人公は買い出しの為に…学生寮の外に赴きます…

そんな主人公は？彼にとっての運命の人と出会い！？そこで見た物とは？
更にこの物語のもう１人の主人公が初登場しますっ！！

それではっ！！

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～っ！！

第一話　私っ！！魔法少女じゃないよっ！！魔術師だよっ！！

ここは学園都市…総人口２３０万人の内その七割が学生という学生達の街

その街に住む学生達の殆どが”能力開発カリキュラム”と言われる独自の教育システムによって、常日頃からこの都市の代名詞とも唄われる超能力を開発…更に研究をする…更にバイオ分野…及び科学分野にも置いても同じ日本国の都市とは比較にならない程の飛躍をもたらしているのである…

更に?その街は独自の治安体制を引き…同じ日本国内の街でありながら…独立し…一つの小国家と言っても過言ではないのであるのだが…

そんな煌びやかなこの街にやはり世界中の主要都市と変わらない様々な思惑…疑惑…更にその闇に紛れるかのように蠢く者達が存在するのである…　そんな未来都市のとある路地裏では??

「ハァッ…ハァッ…ぐっ！！」

その闇から逃げるかのような幼い少女が駆け抜ける！！更に突然スライドするように立ち止まり斜め後方を睨み付け！！その少女の背後の人影らしい人物に向かい手に持つ１ｍ（メートル）位の杖を翳しっ！！

「食らいなさいっ！！『激流の水圧（Ｔｏｒｎａｄｏ－ｗａｔｅｒ）』っ！！」

瞬間その翳した杖の先端を中心に轟っ！！と巨大な水流の渦が発生！！その塊が周りのゴミやその他を粉々に粉砕しつつ路地裏奥の人影に吸い込まれるように！！

瞬間ゴバァ！！と地響きを立て電柱をなぎ倒し着弾っ！！

たちまち辺りに立ち込める砂煙…

その余波で少女の羽織るマントもバタバタと音を立てつつ勢い良くなびき…

それが治まった頃突然少女は自身の背後に佇む人物の気配を感じ瞬間その場を飛びのき…鋭利な刃物で切り付けられたのか…体魔法防御のマントがビリビリに破け少女は自身の肩に激痛を感じその自分の肩に手を添えつつ地面に片足をつける……

更に後から鮮血が舞い少女の白い体を赤く染め上げるのであるっ！！

「ふふふ……そろそろ貴様の魔力もそして体力も限界のようだなっ！！」

「ふぅっ…ふぅっ…そっ…そんな事無いわよっ！！……っつ！！」

「さてと……散々てこずらせてくれるわ…さてと…姫様…貴様の身体に宿す『魔法石（マジックストリングス）』ゆっくりと貴様の白い首をを切り落としてから！！我が君に貴様の首と共にささげようぞっ！！」

「くうっ！！……や…止めろっ！！来るなっ！！汚らわしいっ！！」

そんな悲劇もこの巨大都市の裏側ではあまり変わらず日常なのである…

そしてっ黒きマントから長い手を翳し再び何かしら唱える人物……
そしてバキバキと１ｍ（メートル）以上の長剣が再び具現化！！
その者が扱う何かしらの投影術式なのか…はたまた錬金術なのか……

「ふふ…ここまで来て今度は命乞いか？？まぁ良い…冥土の土産に教えてやろう…貴様の魔法石を欲しがる我が君とは…貴様が常慕う最愛の者…■■■■ー■■■■……ふふふっはぁーっはっは！！…んっ！？」

更に絶望に顔を歪ませる少女の目の前に嘲笑いながら黒服の男は天高く自身の長剣を掲げ!!その時!!

「がぁっ!!……」

瞬間何処からか飛んできた鋭い風圧によりバギンッ!!と、男が持つ長剣が砕け!!中に舞い!!少女の眼前の地面に突き刺さる!!

今だっ!!はぁぁ――――――――――っ!!

「これでも食らいなさいっ!!『引き裂かれし水の刃（Ｓｐｉｎｅｔｌｓｐｉｔｚｓａｂｅｒ）』っ!!」

そんな、自身の魔力は既に限界の筈の少女は更にそんな身体に鞭を射つかのように大魔術を瞬間的に組み上げ正にゼロキロ射撃で解き放ち!!その爆風に紛れ逃亡!!

その黒服の彼も自分達の眼前に突如現れたこの街の住人（スキルアウト）に阻まれ今回の彼女の追跡を諦めつつ姿を暗まし消滅したのである!!

「ふふふ……まぁ～良い…まだ次回はタップリある、どの道奴もあの体力だ…後はこの街の無法者達が勝手に始末をしてくれるだろう……その後に彼女の死体から魔法石を貰えば良いさ」

そんな事を言いつつ路地裏の遥か上方…その犇めく雑居ビルの上方から
今度は更にボロボロになりつつ逃亡する少女を追いかけ始めるスキルアウト達の様子を覗き…不敵な笑顔を醸し出しつつ闇に紛れるかのように去って行ったのである……

◆◇◆◇◆◇◆……

一方その頃我らが主役っ!!葛城光雄はと言うと?

すげーなっ!!リアル風車だぜ!!たしかに風も無いのに、よくもまー回るよな〜

それにっ!?うぉっ!!
来た来た来ましたよっ
これがあの清掃ロボットって奴かぁ〜っ!?
思ってたよかちとデカイな…(汗)

と？光雄は只今食材を買いに行くがてらに、学園都市の見学の真っ最中でかなりご機嫌状態なのであるっ！

ふっふっふ…備え有れば憂い無しってか？うっしゃ――――っ！！食材もたんまりゲットできたしっ！！

今日は俺様のこの世界に来た歓迎パーティーっ！！

ぱぁーっと行こうじゃないかっ！！ぱぁーっとっ！？

「……」

「ありっ！？……とは言っても一人淋しくゴチだけどな……ははっ…（汗）……いや…帰るか…」

と？正にバカ丸出しのその彼のなんともまぁ～オーバーアクション気味な態度に周りの通行人達は？ひそひそと？？……かなり恥ずかしい光雄であった……

「しかしまぁ～よかったよかったっ…今俺が持っているサイフの中身が生前の頃のまんまで助かったよな？しかもキャッシュまで使えるとは、なんとも……」

そんな謎の絶好調的な光雄の目の前の視界に突然！！

「えっ？？」

「キャッ！！」

どんっ！！と…どこかしらか全力で駆けて来たのかかなり無防備な状態の彼におもいっきりぶつかりその反動で

「ぶろぁっ！？」

っと！？謎の叫びを残しドガシャ！！と思いっきりすっ転びつつ？更に！？両手に持つ荷物も地面にばらまく始末……（笑）

「うぐふぅ――――っ…（汗）なんなんだよもうぅ～っ！！おっ…俺様の食材っ…（涙）一体誰だ……よっ！？」

「んんっ……」

「へっ！？いや……さっきのは別に良い……」
（注：どんな時も可愛い女の子だったら許しちゃう奴（バカ））
「っつーか…こ…こいつは？？」

そして、何とか立ち上がり、そのぶつかって来たであろう少女をまじまじと覗きこむ彼なのだが？？
ん？？何かの：コスプレ？？

いやコイツ…、見た感じじゃぁかなり幼いな多分…中一位かな??

更にそんな事を考えながら更に自身の目の前に倒れている少女をよくよく観察しだす光雄?

へぇ〜……ううわっ…凄く綺麗な薄い水色のショートヘアだな…そして未だ幼さが残る整った可愛い顔、

更に?ちと破けているが…紫色の綺麗なマント……これ何の生地だろ…艶があるな……そして?何かしらの紋章か?白い生地に銀の刺繍が入ったシャツに紫の短めなスカート…そして同じく紫色のブーツに手袋…しかも?うおっ!?血がっ!!肩から……コイツはっ!?

魔法少女っ!?んで?なにかしらの敵と戦って……相手は魔女かっ!?

って?ないない……ったく……んなわきゃねーっつーのっ!!番組違っちゃうだろうがボケェ――――――ッ!!

はっ!?

いや…んなアホやってる場合じゃねぇーぞっ!?

それよかこの子早く傷の手当てをっ!?

「えっ!?あれって……」

更に向こう側にさっきぶつかった時に手放したであろうなんとも奇妙な杖を発見する光雄…

そして、その杖にこの目の前の謎の少女の何とも奇妙な服装と照らし合わせるように、顎に手をやりつつ考え込む彼…そしてその応えは!?

やはりっ!!コイツっ!魔術師だっ!!

その瞬間!光雄は、覚った……

この今現在自分が居るこの世界……ヤハリ、紛れも無い禁書目録の世界に落とされた自分自身の事を!!

そして、その目の前に倒れている魔術師がうっすらと目を覚まし…ゆっくりと上半身を起こしつつ目の前に佇む光雄を見つめつつ

「えっ!?もしかして私……って!?わわわっ!!すっすすいません!!突然に私っ!あなたにぶつかっちゃってっ!!あのっ!!お怪我はっ!?」

「うおっ!?いいいえっ!!おっ俺の方こそあんな場所に居てごめんっ!!……」

（注：なんのこっちゃ！？）

つか…コイツ…っつーかこの子っ！！かっかか可愛いい――――っ！！魔法少女だぁ……むふふ…むふっ！？

いいやいや……ヤバイヤバイって…いきなり厄介事巻き込まれフラグか？俺！！　いや…しかしこの魔法少女チックな服装と言い……俺の…俺様のツボにもろ直球……って！？

だっだからヤバイっつーの！？いやしかしこの子…以下略っ（笑）

…

とまぁ～……そんな目の前に佇む普段滅多にお目にかかった事もない美少女に…かなりあたふたとパニくる始末…（汗）

そんな彼をなにかしら冷や汗をかきつつどん引き寸前の魔術師なのだが？？

そんなアホやっている内に突如…彼等の佇む遥か向側から…誰かしら怒鳴る声が！！

「おい！どこ行ったぁぁ～！！探せ探せッッ！！」

と!?

その怒鳴り声にビクリッ!!と反応する二人…そして魔術師は??

「あのっ!!さっきは本当にご免なさいっ!!私っ!!……さよならっ!!」

そんな事を言いつつ光雄に対し水色の髪をフワリ…てさせ優しく微笑み…そして、別れを告げ駆け出そうとする魔術師…

そんな幼げななんとも痛々しい彼女を黙って見てる光雄ではないのである…そして…その彼女の手を掴み??

その光雄に目を見開き驚く彼女……その子に先程落ちていた杖を渡し……

「くそっ!!走れるか??こっちだ!!」

と??その彼女の手を引っ張り……一緒にその場所の裏路地へ逃げこむ光雄!!

くっそ~!!こんなの黙って見ているお人好しじゃね~っつーの!!

何でいきなりこんな事に??

まあ…いっか!!この子可愛いいし……

と??自らその少女が巻き込まれている厄介事に首を突っ込む光雄…

更に…向こう側の怒鳴り声が複数バラバラに!!

くっかなりの人数かよ!!いったい何処へどうやって逃げれば!!

そして、かなり広い場所に出て、裏路地を抜けたと思ったら目の前は……

何故か、行き止まりだった!!

そしてだんだん複数の足音が近づく……

くそぅっ!!逃げ場がねえな万事休すとはこの事か??

どうする!!

そして…その自分の脇側で肩口から更に出血が酷く息が荒い少女……

けっ!!ヤッパ俺がやらなくちゃなっ!!

でもどうするっ!?俺は、このかた２０年…まぁ～生前だが喧嘩なんか一度もした事がねーし……やっべ～な……落ち着け…俺……

何か…手は!?…

たしか?あの世の天使様が俺に何かの能力があるって言ってたよな??

たしか…

「おっほ〜っ!!居た居たっ!!」

「こんな所まで逃げやがってよ〜……へっへっ」

「いいからさぁ〜…怖い事無いから俺達といい事しようぜ〜子猫ちゃんっ!!」

しかしそんな思考も虚しくとうとう見つかってしまったのである!!

「おう!おめ〜……誰だ??まぁ〜、その子を俺達に渡してくれりゃ〜見逃してやるけどよ〜ああんっ!?」

「くそっ!!おいっ!!誰がアンタなんかにっ!!」

「けっ！おうおうこれはこれはナイト様ご登場ってか？？だがよ～……」

その一言をニヤケながら告げるスキルアウトの一人が…そっと腕を真上に上げたと思った瞬間！！

ブワァッ！！と、彼の真横を何か突風かなにかしらの音と共に通過！！

瞬間！！

遥か後方でドガァ！！

と、壁の横に設置してあるエアコン本体が落下！！そしてその表面は…なんとっ！！かなり綺麗に切断されていたのである……

くっ！！まじぃな……こんな事って！！ありえね～！！

あのヤローは能力者かよ！！

「へっ！どうよ！！俺様の能力！！『風流使い（エアロマスター）』今度は外さねえなからなっ！！腕か？？それとも足か？？」

や…やべぇ…俺…自身の能力わからねぇし…やっべなんか背中にかなり汗かいてんな俺っ！！

ちくしょうっ！！かなりヤバイ状況だぜっ！！ったくよ～……こんな…こんな幼気な少女一人守れねえのかよ！！なさけねえっ！！

そんな思考を巡らせば巡らすほど冷静じゃいられなくなる！！そんな自身の心を押し殺すように小さな少女を両手で庇いスキルアウトの前に無防備ながらも立ちふさがる光雄！！

そんな冷や汗をかく光雄の表情を見つつ…コクリッ…と、なにかしら決心したのか、その光雄の懐から突然飛び出しつつ片手に杖を構え身構える彼女！！

「おい！！アンタっ！！ちょっとまてよ！」

そのさっきまで肩口を抱えていた彼女が逆に光雄を庇う形で前に出て、更に、後方の光雄に対し…振り向き…そしてニッコリと可愛い笑顔で…

「さっきから本当にありがとうねっ！！ここは私が引き受けるからっ…あなたはその隙に…逃げて頂戴っ！！」

「こんな私の為に、関係ないあなたを巻き込んじゃって本当にっ！！ごめんねっ！！」

そのなんとも弱々しく…しかし！！なにかを悟ったのか！自分が守る間に逃げろと！？

そんな少女を見て…俺の中の何かが変わった！！いや…変わったというより自分自身の中の何かがあの子だけは絶対に守らなくてはと！！

そして…

弾けたっ！！……目を瞑り…何かを感じる…自分自身にこみあげて来る何かが！！……これが……え…ん…ざ…んっ！？……なのかっ！？

刹那！！

今度は俺を庇うように立つ彼女目がけて第二撃目の斬撃がをその彼女に向かって行き、その斬撃が少女に当たる寸前に何か光る物が

っ！！…

「うぁぁぁぁぁ――――――――――っ！！さぁ――せぇ――るぅ――かぁ――――っ！！」

瞬間！！眩ゆい一筋の光りが！！その斬撃を切り裂いた！！

「え??あなたっ！それは??もしかして魔術を??」

「ああ…ちと違うかな?…待たせちまったなっ！！何かさぁ～俺…アンタを見ていたら……能力が使えるようになったみてぇーだなっ！！アハハ……っつーかこれ一体何っつー能力だっ??」

そう…それは…光雄の手から一直線に伸びた眩ゆい光…

正しく光の剣なのであった！！

彼は今、彼の中の『自分だけの現実（パーソナルリアリティー）』に目覚めた瞬間であるっ！！

更に次回へ続くっ！！

第一話　私っ！！魔法少女じゃないよっ！！魔術師だよっ！！（後書き）

遂に、自身の身体に秘める力に目覚めた主人公…

対するは複数のスキルアウト達っ！！

次回っ！！彼は…未だ名前も知らない少女を守る為…挑みますっ！！

そんな訳でっ

次回もお楽しみに～…

第二話　私っ！！魔法少女じゃないよっ！！魔術師だよっ……――その2――……

と？前回に引き続き、とある路地裏で謎の魔術師の少女を守る為に
自身の能力に遂に目覚めた主人公っ！！
そして、周りを取り囲む輩に戦いを挑みますっ！！

果たして更にその後にっ？？

てな訳でっ！！

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！
始まり始まり～…

第二話　私っ！！魔法少女じゃないよっ！！魔術師だよっ……――その2――……

ここは学園都市第七学区内のビル街がひしめきあうメインストリート…幾つもの店が連なりその街並みを様々なネオンで彩られ
そんな未だ夜の帳の中を行き交う学生達　皆それぞれ家に帰宅する者未だ放課後からの楽しい一時を過ごし会う者…そんな何時もと変わらない風景……

そして、そんな煌びやかな街並みとは裏腹に…メインストリートの裏側、そんな幾つものビルの影…そんな闇にも様々なドラマが展開されているのである…

◆◇◆◇◆……

そんな中……第七学区内…路地裏では…

「なっ！？俺の…一撃を斬り付けた何だとっ！？　しかもさっきから奴の身体が…光り輝いて…あれは一体！？」

そう…　彼は、目を見開き疑う、先程自身が放った斬撃は、確かに目線の先に佇む二人を吹き飛ばすには充分過ぎる程手応えがあったはずなのであるが……

何事も無かったかのように佇み、

それ所か逆に謎の光り輝く剣を構えそれら自らが発する光に周りの壁やその他を明るく照らし…こちら側にも毎散るようなキラキラと鮮やかな光の粒子……

正に意表をつくかのような状況に…額から流れる汗を拭いながら…

奴はまさか!?　いや…それにあの俺の攻撃をいとも簡単に受け止めた…奴の腕、あの光剣みたいのは!?

ヤハリ…光学系…奴の能力か!!

更に　その一方の光雄は?、

自分に向かって放たれたその能力者からの斬撃を庇う為に目の前に立つ…

その幼気な魔術師の少女を見て、

何かが弾け!!それからなにがなにやら解らない内に演算を無意識に開始!!

無我夢中で目の前に迫る斬撃を何とか打ち返したい一心で念じる

！！

その結果、自身の手の平からいつの間にか光剣が出現！！

瞬間…

見事にその斬撃を真っ二つに切り裂いた！！

そんな光雄は、正に信じられないような自身の能力に光る剣を眺め…かなりニンマリと酔い痴れるように…

うは～！？マジ？？
これってもしや？俺の能力！？
しかも　光る剣って！？

これ…一体全体どんなオプションなんかっ！？
うはっ！！今…目の前のアイツ…ビビった！？ヤッパビビってるんかっ！！あの冷や汗をかく間抜け面っ！！ビビってるよねぇ～っ！！

「ねえ……」

しかもなんか今の俺様……なんかスンゲーかっこいいんかっ！？

「ね…え……？ちょ？？……イラッ」

うっはっは――っ！！あんのクソバカ天使の野郎っ！？…いや…それはちとマズいか…ひょっとしたら　何処かしら見られているかも…訂正訂正っと！！

天使様…ついに、ついにあなた様の証言通りこの俺様は自身の能力に目覚めましぃぃっ？？

へっ？

「んもぅ～……い・い・加減に気付けやこんのクソアンポンタンガァ――――ッ！！」（注：とうとう本来の地が？（笑）…）

「のわわっ！？……」

と？なんとも恥ずかしい事に自分自身の自己満足的な妄想中！？幾ら彼女が話しかけてもシカトぶっこいてる光雄（バカ）に？イラついたのか！？顔を引く尽かせ？突然目の前にドアップに迫る魔術師！？

……いや…そんな猫を被っていたのを自ら崩壊させちゃ～折角の可愛い顔が台無しだからねっ…（汗）

「はっ！！」

「そうだっ！！俺、戦闘中だったんだよなぁ～…あはっははは…（汗）」

「ったくもぅ～…あなたっ！！本当に大丈夫なのっ？やっぱり私が変わろうか？」

そんな自身の魔力が少しづつ回復しているのか、いきなり私が変わろうと言い出しつつ不機嫌そうに両手を腰に当て、光雄の眼前に顔を近づける魔術師

「……」

「す…すみませんでした…魔法少女殿…」

「はァ～？？あなたさぁ～何を勘違いしてる訳ぇ～？？私っ…魔法少女じゃ無いよっ魔術師だよっ！！……ったくもぅ～…これでも自分のこの霊装気にしてんだけどっ！！」

「へっ？？」

や……やや…やっべぇ～…何か俺…かなりじと目で睨まれてる…うん…多分

このままじゃこの俺様の印象ががた落ちじゃ～あないですかいワトソン君っ！！な…ななな何とかごまかさして……あっ！！やべっ！！

又もやいい加減戦闘中だっつーのっ！！

うしっ！！ほんじゃ……
一長かっちょ良く…

「さ…ささささあ～てっ…ちと待たせちまったな？そこの能力者さん達よ～！！」

「「「……はっ！？」」」

その光雄達の様子をなんともマヌケにも先程からちゃんとお利口さんに？？
大人し～く待っていてくれた良い子っ！？みたいな訳わかめなスキルアウト達（笑）

「いや…もういいんか？？……さてとっ……おほんっ…まっ…まぁ～てめえが強くて安心したぜっ！！このまま無能力者を殺すのもつまらね～しなぁ～！！」

っというか…光雄達も光雄達だがこの妙な迫力の無い野郎等って…（汗）

そして数秒後、更に待ってましたと言わんばかりに再び演算を開始し…片手を真上に上げつつ手の平になにかしらの大気が揺らぎ…

それが段々と渦の塊みたいな物に変化っ！！

そして後方から一気にスイングするような形で、正にソフトボールを投げるような仕草で間髪入れずに斬撃を飛ばす風流使い（エアロマスター）

ヒュヒュ……と、風切音と共に凝縮された幾つもの見えない刃が…　その先にある対象物、葛城光雄に向かって行く

瞬間、その音源が近づく前に、右手に具現化した光りの刃を構え…その風圧の流れを肌で感じ取り、構え…そして振りかぶるっ！！

瞬間又もやズバッ…と幾つもの接近する斬撃を次々と切り裂き、咄嗟に目の前の男に向かって駆だす光雄！！

更に幾つもの斬撃が大気を切り裂きながら接近！！それを勢いにまかして回避しつつ、

そのままの軌道で一瞬で懐に詰め寄り！！それにたじろぐ間抜けな風流使い（エアロマスター）　お互いに距離が縮み！！

光雄はすかさず右手の光剣を地面に突き刺し、それを軸に回し蹴り！！

その蹴が風流使い（エアロマスターの顔面にクリティカルヒット！！

「ぐは！！」

と変な声を上げて地面に崩れ落ちる！！

続けてその地面に刺した光剣を引き抜き残り数人の男達に、走りだす光雄!!

しかし!目の前の地面が突然砂埃を巻き上げながら爆発!?

その風圧に押し倒され地面に転がる光雄!

「なっ!!何だ?今のはっ!?爆弾かっ!?」

そう…一瞬で目の前の景色が変わり冷たい地面に倒れている彼…先程何故突然に自身が吹き飛ばされたのか一分からないのである更に何とか立ち上がりつつ服に付いた埃をはたきながらもう一人目の男に視線を送ると?

「ああっ!?あの構えは?…」

「つっ!!」

更に額の汗を片手で拭いながら見つめる彼の軸線上には、此方に銃を向けるように片手をかざしつつ佇む男…

「まさか奴は『発電能力（エレクトロマスター）』なんか？……しかもあの構え…」

「れっ！？『超電磁砲（レールガン）』かっ？？いや…んなチート過ぎる技扱えんのはこの世界じゃ御坂美琴様位しか……」

そんな引きつる表情の光雄に対し、不敵な笑顔でニヤケながら此方を狙うように右手を伸ばし、
更に人差し指に弾丸（コイン）を載せ、今度はもう片方の手を添え、そして両手で構え……

右手指に載せた弾丸（コイン）を軽く弾いた瞬間！！

ズダァ――ン――……

と、銃声みたいな音とともにそのコインが弾丸の如く光雄に迫り！！後ろの壁に着弾！！

後からライフル特有の発砲後の音源が周りの大気にこだまする……

やっべーぜおいっ！！コイツは正にインスタント『超電磁砲（レールガン）』っ

てか!?

しかも後から漂うこの特徴的な臭いは!?

「なっ!?火薬…か?」

「はっはぁ〜っ!!驚いたか?まぁ…俺様の能力はよぅ〜…その名の通り『薬物混破(ミラクルボンバー)』ってンだァ〜
ようは、水素、火薬、窒素あらゆる危険性のある物質同士を絡める事が出来るっつ――訳だよ!!」

「くっ!!…なんだとっ!?」

「それにぃ――っ!!」

更に、彼が趣味の悪いチェック模様のスラックスのポケットからジャラリとなにかしら取出し、

「ほぉ〜らよっ!!」

その掛け声と共に只今手に持っていた大量のパチンコ玉をバラマキ更にぐるりと回し蹴り、

それに弾かれたパチンコ玉がまるで自動小銃の如くズバババッ！！

と鈍い音と共に光雄の居る地面や周りから砂煙が！！

「へへっ！！どうよっ！！」

と？案外お茶目なのか…そんな彼方側で謎の決めポーズでご機嫌な男（バカ？）を置いといて、

先程の連続爆発のあった地面を恐る恐る見てみると…

「うおっ！？なっ…なんじゃこりゃ！？」

なんとも地面にまるで一面に機銃掃射を受けたかのような小さなクレーターがずらりと並び！！

壁は壁でやはり一面に何かが着弾した後が！！

へっ？…しっ！シュ―ティングゲームじゃねえっつーの！！

くそっ！！今度の奴は飛び道具かよっ！！…一体どーすりゃ…

しかも一人倒したが男等は後三人…しかもその中の一人は又々能

力者と来たか……此方は傷ついた少女を庇いつつあのシューティング野郎と戦うにはちと分が悪いかっ！！

って！？あれっ？あの子は？

と？先程まで自分の真後ろに隠れるように居た少女が居ない事に気付き辺りを見回す光雄…そしてその少女はそんな光雄の遥か斜め後方に居る事に気付きしかも、

その少女は壁に右手に持つ自身の杖を向け、グルグルと回しながら？

更に左手にもいつの間にか、なにかしらの分厚い本を抱え、その本と睨めっこしつつ何かぶつぶつと唱え初めていたのである！！

「えっ！？何だ？」

と？光雄が只今妙な能力者と対陣し、大変だというのに？そんなのお構いなしの様子なのであるが？

っつ―か…あいつ一体さっきから何やってんだ？

いや……違うっ！！あれは…まさかっ！！

「って？のわわわっ！？」

と、そんな思考を掻き消すように再び連続爆発が光雄を襲い吹き飛ばされる光雄!!

「おいおいっ…なァ〜にをボ――っとしてンだァ？おめぇ〜…ま！今から俺様の大技でョ〜木っ端微塵にバラバラなんだけどなっ…（笑）」

更に今度は両手を使いゴッソリと得意のパチンコ玉を持ち光雄に両手を向けて演算を開始する『薬物混破（ミラクルボンバー）』

そして

「食らえッッ!!爆裂百列け!?って??なンだァァァ!?」

その男の大技!爆裂百列拳?（ネームダサ?）を今正に光雄にお見舞いしようと、した瞬間っ!!今度は光雄の遥か後方で突然辺りを眩しく照らしながら蒼く輝く魔法陣が突如展開され…

そんな予想外の展開にその男に続き後ろを振り向く光雄も冷や汗をかきつつビビるのだが?

「なっ!!アンタまさかこれって?」

「そっ『荒れ狂う水柱（Ｔｏｒｒｅｎｔ－ｗａｔｅｒ）』…文字通り魔術よっ」

「ふぅ～…あなたのおかげで、やぁ～と術式が完成したわ…あのさぁ～さっきはありがとうねっ！！後は私が戦うからもう下がっていいよっ」

更に壁際に大きく展開する魔法陣を背に魔術師の少女は佇み光雄と対陣する男に自身の杖を向けながら男に向かい最終警告を言う少女…

「もう終わりよあなた達っ！！勢いを増した水圧の破壊力はあなた達にも分かるわよねぇ～……ふふ？…それとも一発食らってみたい？」

その警告と同時にその少女が手に持つ杖の先端部分が更に目をつんざくように蒼白く輝きを増し！！

そのようすに恐れたじろぐ男等は？

「おいっあの子…実はかなりの高能力者だったんかよっ…」

「くそっ！やっぱりこんな事だろうと思ったんだよ！！おい！兄貴そこで寝てないで起きろよ！」

「なっ！なんだよあれはよぅ～…ちっ！めえらっ！！ずらかるぞぉ～！　」

と？何とも間抜けにぞろぞろと尻尾巻いて逃げてく男等を眺めつつ

けっ！あばよっ！！

よしっ！初勝利っ！！俺勝ったんだよな～…はは…は？……

というか…結局はその子の魔術で勝ったんだよな～……なんか俺っ結局意味ゃぇ――ではないかっ！

まっ…何とかなったという事で…だな、うぅ～（涙）

あっ！！そ――いやぁ～あの少女…まだ名前聞いて無かったよな…

「なあ…アンタさぁ～自己紹介ってまだ……！？……ってぇぇぇ――――！？……」

そして、その子の方に振り向いて…未だ始動中の魔術にかなりビビる光雄！！

そんな光雄を無視しつつなにやら一生懸命自身の本のページを捲りつつあたふたとなにやら騒がしい少女なのだが？？

「ちょ！？……あ…あの～……敵さんは既に退散したが…アンタは一体全体なにをやってるのでしょうかっ？？」

「――――えない――」

「へっ？？よ…よく聞きとれなかった……で？なになにっ？」

「だから消え無いって言ってさっきから言ってんでしょうがっ！！」

「なっ！！おいてめ――まさか……アンタこの魔術もしかしてっ？？」

「な…なによぅ～…」

「んで？…そのアンタが発動させたこれ……あまり聞き辛いんだが…実は発動させたはいいが消し方が分からんって事で！？」

「うんっ！！もちろんそうよっ！！分かってるじゃない」

とキッパリと・・・（汗）

つか！？なにそれっ！！それってその子・実は私～っ♪魔術学校の習いたて魔術師で～・・・実は～魔術を使えるけど消し方がわかんないの～・えへっ♪♪

みたいな？？

やべぇ！超やべぇぞ！！マジそのシュツエーションかなり萌え！？って？？

今それどころじゃーーッッ！！

どーすんの！一体どーすれば？？

そっか♪上条さんに頼めばパキンって♪♪

つか！？まてまてまてっ！！

上条さんこんな場所にわざわざ居ねーっつーの！！

俺一体全体なにやってんだ？？

しかもそんなアホな思考を断ち切るようにその魔術師の少女は？

「へ？？……」

「あの～…なんかさぁ～・完全に発動しはじめちゃって……」

げぇぇッッ！？　な・なにやら魔法陣から巨大な水柱みたいな何かが吹き出して……！？

そこにはもう既にその魔方陣の中心付近から渦を巻きつつなにかしらが吹き出す前触れみたいなのであった！！

「へっ？？」

「にっ…逃げるぞっ！！」

「えっ！？で…でもこれ…なんとかしな？」

「だァァァッ！！もう無理だって！だからっ！！」

「「ちょっ？？」」

と？一難去って又一難と今度は自身が発動させちゃった魔術に今度は襲われる光雄達っ！！

はたして彼等はこの路地裏から無事脱出する事が出来るのだろうかっ？？

っつー訳で無理矢理だが次回へ続くっ！！

第三話　学生寮と愉快な仲間達！？（前書き）

いやいや‥
毎度の事だが
やっと来ましたー♪♪

っつーか‥やはりこの作品‥‥毎度毎度あの科学部の犠牲者に‥‥
（汗）

ま‥まあ今回からもゆっくりペースだが‥ぼちぼち行くっつー事で
♪♪

光学の超高密度収縮粒子砲戦記♪
始まり始まり～♪♪

第三話　学生寮と愉快な仲間達!?

ここは…第七学区内
とある学生寮……

一見パッとしないたんなる普通の学生寮……
しかし!!その学生寮のお向かいには??

その片側一車線の道路を挟みその向かえ側には…何とも全然場違いな巨大な赤煉瓦（あかれんが）の建造物が…

その巨大な横須賀にあるような建造物も又々学生寮なのである!!

何とも皮肉にも彼…葛城光雄は、お約束??の上条当麻の学生寮では無く…
その常盤台のお向かいのショボい普通の学生寮に転生してしまったのだ!!

勝ち組と負け組!?…そんな可哀想な光雄は??

そのショボい学生寮の三階のとある一室…
早朝6時…やかましい目覚ましと共に目覚め??何故か周りを見渡すとソファーの上で寝ていたみたいで…その奥の部屋…そこにあるベッドには??

ある小さな少女と??もう一人…大人の超セクシー美女が!?

「うへ??…な…なに??」

とまぁ

未だに自分の今の状況が把握出来ずに半分寝ぼけながら奥に寝ている少女と女性をぼんやりと見ているのである……

そんな中…ふと昨日この世界で出会ったその少女とのいきさつを思い出す……

∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞

∞∞∞∞∞∞∞∞∞

∞∞∞∞∞∞∞∞

∞∞∞∞∞∞∞

∞∞∞∞∞

∞∞

その発動し…今正に二人に襲いかかる水流系魔術!!

その水柱が迫り来る正にその時!!

「「ちょ！？……お…お助けを～！！」」

と…間抜けに身構えながら恐る恐る目を…

「って？？あれっ？？」

な！？……俺はたしか？？

つかここは？？

「うふふ♪……あらあら相当恐かったのね♪♪

そんな顔をしたら…お姉さん二人を襲っちゃうぞ♪」

と！？

で…で…でっっ！？でか？？

「あら何かしら？？」

いや……な…なんでもないっす……

と！？二人を危機一髪！！飛行術系トラップを発動！！

その危機を救ったなんともデカ？？…もといっ！…綺麗な女性…

少しウェーブがかかった綺麗な金髪…年上の気品が漂う綺麗な顔

…さらにその下の胸は！？……デカイ…（汗）

その人物こと

あの追跡封じの…とてもデンジャラスクラッシャーな危険な運び屋

！？

オリアナ・トムソンであった!?

その時光雄はある事を思い出し‥

その人物!!‥俺は知っている!‥俺様の前世２０年間の脳内目録‥第??章‥その人物はかなり危険極まりない色仕掛け??デンジャラス女ッッ!!

その人物を追跡しようものなら当たり構わず魔術を発動しまくり、上条さんを苦しめた超危険人物っ!!‥‥‥まあ今の彼女は‥‥ピンチを救ってくれた恩人?でもあるが‥‥

つか‥あれ??‥‥ち‥ちょっとォォ??

な‥何であの魔術師の子がそのオリアナに近しく話しして??

ま‥まさか‥‥知り合い??‥‥へ??

そんなかなりマイナス思考中に突然その危険なお方が話しかけ‥‥

「は‥はひっ!?」

「へえ??あなたがマリオンチャンを??
お姉さんからもお礼を言わなくちゃね♪♪」

「うぇっ!?‥‥え‥ええーと‥‥ど‥どうも〜♪‥ハハ」

って!?俺、な‥なんでこんなに緊張しちゃってんのよオレェェ〜ッッ!!

これじゃまるで何処ぞの愛の告白5秒前ですか??それとも??突然初恋の相手とパッタリ出会いカチコチな主人公みたい‥って!?ちがーーーっ!!
番組全然変わっちゃうだろ??

つか‥‥あの魔術師の名前マリオンチャンか~♪♪

うふふ‥マリオンチャンね~♪♪ふふんっ‥‥

と又もや意味の無い脳内妄想中のアホな光雄‥‥その思考中の光雄を無視し勝手になにやら二人共話しが進んでたみたいで!?

「まあ、ここじゃ何だから別の場所に移動しましょう」
「ええ‥‥と♪その前に‥」

と、不敵な笑顔をみせながらその魔術師ことマリオン・オヴ・シュペー

その只今脳内ダウンロード中の為、機能停止中の光雄にそっと優しく近づき
耳元で囁く‥‥

すると??

「ウホッッ!?」

と!?妙な声と共に一気に全機能オールグリーン状態に!?‥‥
まったく(汗)

なんともまぁ～出会ってから数時間の内にもう既に彼の扱いを完璧にこなす天才魔術師マリオンであった・・・アホだ・・

∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞

∞∞∞∞∞∞∞∞

∞∞∞∞

で！所変わって、とある学生寮・・・

その学生寮の一室・・・

その室内に三人の人物が・・

真ん中の机を挟んで片方に光雄・・その右斜め前方に相対するように座る美女・・オリアナ・・

その後ろ側でなにやら本棚を物色中な魔法少女マリオン、と、かなり妙な組合せである・・

そのオリアナが光雄に話しかけ・・・

「ううん・・まずは自己紹介ね♪・・私は・・オリアナ・トムソン・・で！その私の後ろにいる彼女が・・私のお友達かな？？・・名前はマリオン・オヴ・シュペー・・あと二人ともローマ正教なの・・」

ま・・マジで転生していきなり本物のローマ正教の魔術師達に出くわすとは・・ま・・俺にゃ～そんな厄介事フラグあるんか？？ま・・まあとりあえず・・・

「そ・・・そそそうっすか？・・ま・・まあ・・でも何でそんなローマ正教

の方々がわざわざこの学園都市に来たんすか??」
と頭にはてなマークの光雄にたいして、ニッコリ微笑みながらオリアナは??

「そうね〜♪ま!坊やは大丈夫そうだから話してもいいかしら‥‥その私の他にも約数人も探索中なんだけど
一昨日、このローマ正教からある魔術師が持ち出し、ここ学園都市に持ち込んだある物を探しているのよ〜‥‥」

「それって??俺‥聞いていいんすか?」

そんな答えに只今向こう側でコミックを立ち読み?してたマリオンが振り向き‥

「ちょっと!!待ってよオリアナ〜!!そんな事彼にはなしちゃっていいの??」

と‥このまま話しが進めば自分達の問題に何も関係ない彼を巻き込むんじゃ無いかとかなり心配そうである‥‥

しかし‥その彼、葛城 光雄はそんなのおかまい無しでマリオン達に質問する

「だ‥大丈夫だから‥マリオンチャンだっけか??
ま!この出会いも何かの運命って事で!!
あ!悪いっ俺の自己紹介まだだったな‥俺は葛城光雄‥ま‥まぁ、ある事情があってこの街に住む事になった、ただの学生さ♪」

そんな光雄を何か驚いたような顔でみるマリオンだが‥‥だんだ

んなにやら安心したようにニッコリと微笑んで

「うん♪さっきもそうだけど色々とありがとうね♪♪そして…これからもよろしくね♪♪」

と！や…やや♪ヤッパ可愛いい～！！

うしっ！！決めた！

この俺！！この世界に転生して来てこんな厄介事巻き込まれフラグだが

この子！！

マリオンチャンと、共に俺は行くっ！！

そして絶対に強くなり守りぬいてみせるっ！！

よぉ～し！！やるぞぉ～っ！！

と！かなり心に誓う光雄であった！

そして…そんな彼ら達を嘲笑うかの如く運命は！！

次回へ続く！！

第三話　学生寮と愉快な仲間達！？（後書き）

な・・

もう完璧に魔術サイドやな～・・ハハ・・（汗）

っつーか・・
科学サイド→科学部
魔術サイド→光学の
みたいな！？なにやらいい感じかも！？

ま・・まあ
そんな訳で、次回　皆さんの目的が明らかに！？
てな訳で
お楽しみに～♪♪

第四話　アクエリアスの涙（前書き）

な…何とか、間に合ったぁぁ～♪♪

まあ…今回は、ちとシリアス的な展開で♪

では！！

光学の超高密度収縮粒子砲戦記

始まり始まり～♪♪

第四話　アクエリアスの涙

【とある学生寮内】

その狭い一室の真ん中の机に三人の人が……
その手前側、しいて言うならベランダの正反対側に葛城光雄、その光雄の居る位置から右斜め前方に座る人物オリアナ・トムソン、そのオリアナから見て丁度隣側に九時方向に佇む人物マリオン・オヴ・シュペー……

そして、なにやら決心したような感じの光雄、

「うしっ！！そうと決まれば、オリアナさんっ！！その君達が探している物とやらを俺にも教えてくれないかな？？」

「う～ん……どうしようかな？？」

そんな考え込むオリアナに変わってその隣側に佇むマリオンが、光雄に相対するように座り込む、そしてゆっくりと口を開く、

「ねえ…本当にいいの??この事を聞いたらもう後戻りが出来なくなるんだよ!」

そんなマリオンに対して、光雄は、

「ああ!ここまで来たんだ!!もう既に後戻りは出来ないよ♪マリオンちゃん達と同じ道を行くって決めたんだ!!!だからっ!!」

「分かった♪
まずは、これを見て??」

と、部屋の済に立て掛けてある彼女の杖…しいて言えばいかにもRPGに出て来そうな魔法使いの杖をおもむろに光雄に渡す……

「で…その杖と何かしら関係があるの??」

「そう!その杖の先端部分…そこに何か埋め込められているでしょ??」

そんな事を言われ、手に取りふとその杖をまじまじと見つめる光雄……

なにやら、思ったより軽いな…しかも、表面はザラザラしているようで触るとかなりツルツルしているな…更にその先端部分を手前に持って行き、よく見ると?

うわ～……何か透き通るような蒼いのが……こんなデカイ宝石見た事が無いな……!?

……

今、何かしら奥の方が光ったような!?

そんな不思議な杖をまじまじと見つめる光雄……

その光雄にニッコリ微笑みながらマリオンが話しかけ……

「どお??このクリスタル……”アクエリアスの涙”を見た感想は??」

「アクエリアスの涙あ～!?　それって……」

その吸い込まれるような蒼いクリスタルを眺めつつ質問する光雄

……そのクリスタルに電気の光りがただ単に反射しているのか……

はたまたそのクリスタル自体の輝きなのか…そのクリスタルを除く光雄の顔が蒼く神秘的に照らされる……

「そう…かなり綺麗でしょ♪このクリスタルは、水を司る精霊を宿すもの…その精霊の導きに己の運命を誘えばきっと未だ見えぬ未来をも変えて行くであろう……それが、このアクエリアスの涙……」

「未だ見ぬ未来……ねぇ～……！？」

その時、光雄は凍り付く！！そのクリスタルに映る自分の顔……いや！！顔じゃあ無いっ！！

これは？景色っ！？この景色は！！俺は知っている！！東京都○○区！！俺の学校ッッ！！しかもっ！！あいつら…内田っ！、菊地っ…みんなぁぁぁ～っ……いつものゲーセンだ！！しかも時計も今この時間帯と同じっ♪♪

ああ……

あいつら……

未だにバカやってんだな……ハハ

あれっ??

そお言やぁ～～俺……もう……

二度とこちら側には……

戻れないんだったな……

分かっていてもっ……

……

あ！……涙が……ハハ　何やってんだろう…俺っ…

「そうね……今、この瞬間貴方の本来有るべき未来に精霊が答えてくれたかしら♪」

はっ！？……あれ？？

そしてゆっくりと今居る現実に引き戻される光雄……

「ああ……信じらんないが……」

「そう♪まあ、話しはそのクリスタルと、同じ物が後二つ存在してるの」

「その私の持つこれ、アクエリアスの涙…それと、深紅のクリスタル…ドラゴンの瞳…それと、最後に天使の雫(しずく)…」

そんな、まか不思議なクリスタルに、何も言わず黙ったまま聞き入る光雄

「そう！そのクリスタルが全部そろうと、この世界を一辺してひっくり返すような大魔術が発動…その世界を全部自分色に染める事が出来る…そんな伝説が私の居る国…トルコにあるの…」

そのトルコ共和国と言う単語になにやら反応する光雄…

「そう、私の今まで居た国…そしてかつて世界に名を馳せた強大な軍事国家…オスマン帝國の末裔がこの私マリオン・オヴ・シュペー……」

「そんで、その私の家は昔から代々その王族に仕える様々な魔導師の家系で…私の他にも兄弟が居るの…その二人の兄…その一番長男マンフレン・オヴ・シュペー…彼が今その深紅のクリスタルを持ち出しこの学園都市に亡命…私達は、その彼が今やろうとしている事を阻止する為にそこのオリアナさんに手伝いしてもらい動いているのよ♪」

そして、そんな彼女に質問する光雄…

「ああ！だいたい話しの内容は分かったよ！！わざわざありがとな…で！そのマリオンちゃんの兄、マンフレンさんは、一体ここ（学園都市）に亡命してまで何をしようとしてるんだい？？」

「そ…それは……うぅ…」

そして、何かを言おうとして…ためらい、口をつぐむマリオン…
多分これを彼に言っては本格的に彼を巻き込んでしまう事の恐怖に下を向くマリオン…

そんなマリオンに変わってかなり緊迫したかの表情で口をゆっくりと開くオリアナ

「もう、この先お姉さんと一緒に行く覚悟はいいわね♪」

そんなオリアナの言葉を聞きつつ、ふとおもむろにその下を向いてただ黙っているマリオンを見る…
そのなんとも幼い小さな肩を震わしながら…光雄はこの小さな彼女に載せられたかなり過酷で残酷な現実を少しでも救わなくちゃ！こんな俺でも少しは彼女の為にと！そして、

「はいっ！！もう覚悟は決めていますっ！！お願いします！！」

「分かったわ♪
その彼女…マリオンちゃんの実の兄マンフレン・オヴ・シュペー…

彼ね～……多分ここ（学園都市）のとある研究所に逃げこんだと思うのよ、その深紅のクリスタルと学園都市のバイオ技術の力を借りて、この世の最も残忍で獰猛なあの伝説の生き物…”深紅の龍”（ドラゴン）を復活させ、その後二つのクリスタルを奪いこの世界を滅ぼすつもりなのよ！！」

「……！！」

その深紅の龍（ドラゴン）とか世界の滅びとか、なんとも現実じゃ無い…まるで何処かの三流ＲＰＧ（ロールプレイング）みたいな単語にかなり動揺する光雄！！

しかし！だったらそんな馬鹿げた事をしようとする彼女の兄に…そこで震えているかわいそうな妹に代わって思いっ切りぶん殴って改心させてやる！！

と、心に誓う光雄だった！！

次回へ続く♪♪

第四話　アクエリアスの涙（後書き）

な…なにやら完璧にＲＰＧ（ロールプレイング）だな？？

こんなゲームみたい展開でいいんか？？

ま♪何とかなるって！？

そんなかんじで

次回もお楽しみに～♪♪

第五話　科学と魔術が交差？？いや…科学と科学か？？（前書き）

いやいや…今回は勢いと言うか……

何故か光学を先行して行きます

という訳で

光学の超高密度収縮粒子砲

始まり始まり～♪♪

第五話　科学と魔術が交差??いや…科学と科学か??

そして…前回から、時間は一気に進み、早朝7時００分…

光雄は、キッチンに立ち昨日の夜とあるスーパーで買い溜めした食材を使い朝飯を…

その向側の洗面所で顔を洗い只今その隣の部屋の机に座る二人の人物…オリアナとマリオンが居る……

何故か彼の転生初日に知り合い、彼の学生寮に居座る事になってしまった二人……その二人と光雄…

これも彼、光雄の運命なのか何とも奇妙な彼らの物語が始まる!!

「対魔法装備品ん～??…ってなんじゃそりゃ!?」

その一室のにそんな光雄の突拍子もない一声がこの狭い部屋にこだまする…

丁度真ん中に一つの机…その机を取り囲むように座り朝食を食しながら三人の人物が居る…普通の三人の人物ならまだしろ…事もあろうにこの三人!?

ヤハリ普通じゃ無いのである!!

それは??

「そうっ！！これ！今私が身につけているこれと同等の装備をあなた？…」

「ちょーーーっと待ったぁぁ！！」

「なによ～…」

「マリオンちゃん？？もしやあれですか？？俺にも、コスプ…もといっ！！こんな格好をしろと？？」

「そうよっっ♪♪」

何げにエッヘンと無い？胸を張るマリオンだが？？

「へええ～？？…マリオンちゃん自ら勧めて来るなんてねぇ～…お姉さん嫉妬しちゃうぞっ♪」

へ？？な……オリアナさんもマリオンちゃんの味方か…みんなして……

つか…なんで男の俺がこんな格好をせにゃならんのだぁぁぁ～！！

そんなこんなで魔術師と

一般人…ヤハリと言っていいのかマリオンは、今後一緒に行動…イ

コール敵の魔術師の襲撃に備え彼の身の安全を気にしつつ、自分と同じく対魔法防御用装備を勧めるのだが、
この服装…ヤハリ彼にとっては恥ずかしく……

「あ…あの～…二人して、一体俺にどおしろと??」

「だから♪これ！この装備は今後…絶対に必要になるから…」

「へ??……」

と…まぁ、その魔法使いヒロイン??みたいな服装にかなり拒否をする光雄…

そんな会話の中もう一人…オリアナは??
「うふふ♪諦めなさい♪♪」
と……（笑）

つか…なにそれっ！！
それってこの服！！あれですか??
やっぱあれですよねぇぇ～！！魔法少女○○かる??
おっと……（汗）

もしくは
そなたは…これから私達
の仲間になる証として、

これを託すっ！！
とか？？はたまた、これを伝説の魔法使いのローブじゃ！！受け取れっ！！
みたいな？？
で？？装備するんか？
俺これ装備したらＭＰ（マジックポイント）上がるんか？？
つか…二人して！！
来るな…俺に近寄るな！！
や…やめっ……

……

……！！！

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

☆☆☆☆☆

☆☆☆☆

☆☆

１０分後……

「うふふ……似合っているわよ♪」

「何か、光雄君いいわよこれ！！ハ○ーポッターみたいでかっこいいかも♪♪」

「うぅ……これ絶対学校で何か捕まりそうですハイ……（涙）」

つか…これ、何かスカスカして…しかもこの白いマントっ！！スンゲー恥ずかしいんだけどーー！！
しかもこれが対魔法防御？？マジでこんな……ハァ～…俺の初登校…魔法学校じゃね～っつーの！！ていうか…普通の学生服で行きたいんだが……（涙）

そんな可哀相な光雄……

「あのさ～…これ非常に有難いんだけどさ～俺…今から学校……？？」

そんな光雄を無視しマリオンは？？

「そうよ♪大概の魔術師の攻撃は愚か…対能力、対物のありとあら

ゆる攻撃から身を守る魔法の鎧かな??」

や…ややっべぇぇ～

何とな～くこいつの性格分かって来たような……

もういい!!

ええいっ!!適当にあしらいつつ何処かトイレとかで着替え直せば??

と??そんな事を思いつつ…ふとおもむろに部屋の壁に設置してある時計を見る光雄だが??

は…8時10分ん～……

……ハッ!?

「な!!や…ややっべぇぇ～っっ!!遅刻しちまうっ!!」

「あらあら♪もうこんな時間??後はお姉さん達が食器とか、かたすから頑張って行ってきなさい?」

「行ってらっしゃ～い♪♪」

とまぁ～…そんな感じでニッコリ微笑みながら見送る二人を後に…

泣き泣き学校へ行く光雄……（笑）

その光雄に先程渡された小さな数枚の紙…その紙は、飛行系魔術やら…対防御系魔術…はたまた色々と…それを見つつ学校へ走る光雄…

こんな紙…もし発動さしたら、俺…一様能力者だぞ??能力者が魔術発動させたら…
ま!全てトラップ系魔術らしいから大丈夫かな??

そんな事を思いつつ学校へ急ぐ光雄だが…そんな走る光雄の背後から忍び寄る影が!!

「ねえ……」

な…なんか間に合わんかも…ていうか学校の場所…
たしかこのパンフの地図わかりずらいな……

「ちょっとぉぉー……」

つか…一様転校生あつかいだよなー俺……!?

「止まりなさいっっ!!」

「って!?あれっ??」
ええっ!?まさか……止まれって??俺??
しかも…あの声…何処かで聞いたような……??

や!!……やっべぇぇ…絶対”アイツ”だ!!

そんな背後からの声に恐る恐る振り向く光雄!?

「うわぁ〜……本物だぁ…」

その光雄の目の前に…仁王立ちしながらその茶髪を片手でかき上げる人物!!
その人物を見つつ

や…ややっべぇぇ〜…
御坂美琴だ!!……ＬＥＶＥＬ５にして、最強の発電能力者（エレクトロマスター）
いつかは出くわすとは思っていたが…俺の学生寮のお隣常盤台だし……

あの上条さんにいつも何処でも電撃を飛ばしまくる、かなり危険性のある人物!!まぁ…うかつに危害をくわえなきゃ大丈夫だと思うが!?
ど……ど〜しよ〜つか何で?俺に??

「アンタっ！！……」

「は…はいっ？？……」

「ついこの前引っ越して来た人よねぇ～」

「そ……そうだが…何故それを？？」

「ま！……昨日丁度見かけたからなんだけど…」

「ていうか…アンタのその格好！！なんなのよ～！？」

「え？？……エエエエッッ！？」

うげげっ！！

ヤハリこの服が原因かぁぁぁ～……！！

とまぁ…そのなんとも超恥ずかしい魔法少女な可愛らしい！？…

（バカ♪）
服装に食い付いて来た美琴に対し
ぁぁぁぁぁぁ～…もうダメダメだぁぁぁーーーっ！！と言わんばかりに頭を抱えぶんぶんする始末……（汗）

「ちょ……ねぇ大丈夫？？」

いや…もういいっす……いや…いいんか？？
ハッ！！そうだっ！俺にゃ～あれがあったんだ♪♪

そうと決まればこの状況を打破するにゃ～……

と…その目の前の光雄に対してポカーン…と間抜けに見てる美琴に対し……

「ふはははは…この服が気になるかっ！！何を隠そうこの私こそ、大魔法使いだからなのだよ♪」

と…さっきオリアナに貰ったその紙…トラップ式魔術を発動させるべく、一枚の紙切れを口にくわえる光雄…

「へ？？な…なんなのアンタ……」

と…以前にもましてポカーンと見つめる美琴を無視しつつ

その一枚の紙切れをちぎり

次の瞬間…彼の足元から、なにやら黄色く光る魔方陣が出現！？

「ではさらばっ！！」と言い　つつ空高く舞い上がり何処かへ消えて行く光雄……

その様子に未だその場所で固まっている美琴が居た！！

次回へつづくっ♪♪

第五話　科学と魔術が交差??いや…科学と科学か??（後書き）

ふはははは…

最近何故か魔術が楽しくなって来たような♪♪

次回…いよいよ彼の学校が明らかに!?
え??お約束のあのお方が??
いやいや…

まあ…
次回もお楽しみに~♪♪

第六話　新たな仲間??そしてそれぞれの決意!?（前書き）

いやはや……

今回は、いよいよあの原作キャラ達が!?絡みそうっすね～♪♪

てな訳で!!

光学の超高密度収縮粒子砲戦記

始まり始まり～♪♪

第六話　新たな仲間!?そしてそれぞれの決意!?

只今時刻は8時15分……その彼が今日初登校初日……とある高校前の通学路…

その時間帯でもかなりの人数の生徒が登校中である……

そんな中、一人の学生が向こうから走って来る…

「ふう…ふう……ハァ～……何とか、逃げ押せたぞ♪ハハ…おまけに、今日は遅刻しないで済みそうだし!!今日は、ついてるぞ～♪♪」

と、なんとも今日はラッキー!!と言わんばかりにはしゃいでいるツンツン頭の学生が……

その学生も、光雄と同じく登校中に、御坂美琴に遭遇!!

その美琴から何とか逃げ押せたのである!?

そんな彼だが…目の前に倒れている何かを発見!?

「うおっ!?……な…なんだこりゃ?!……インデックス?!じゃね～な……魔術師か!?」

そんな、一難去って又一難？…と、そんな元祖♪厄介事フラグ男…上条当麻…そんな嫌な予感をしながらもその人に声をかけようと、近づく当麻だが？？

「おい……大丈夫か！？何があった？？」

「う〝……ぎ…ぎもち悪い……」

「意識はあるんか…た…立てるか？？」

「うぅ……な…何とか…」

その倒れている光雄に声をかけ肩を貸す当麻……

そんな、中…彼らの後ろから近づく人影が……

「あちゃ～…こいつ…何か…微弱な魔力を感知して来たが…こいつ…霊装してるが魔力師じゃねぇ～にゃ～」

と、今度は、グラサンをかけたハデな男と、その隣には…なんとも背がデカイ赤髪の神父まで!?
その二人は、
そのツンツン頭の男…上条当麻の知り合いのグラサンの男は土御門元春…
そしてその隣に佇む赤髪の神父…ステイル・マグヌスである!!

「な!?土御門にステイル?? おまえらいつの間に??」

と、後からいつの間にやら現れた二人に声をかける当麻…

「まったく…次から次えと…この間のアウレオルスを何とかしたと思えば…ローマ正教絡みの霊装の男…上条当麻!!おまえがらみか??」

「おい!! かみやん…こいつ…おまえの知り合いか??」

「知るか!!……つか…こいつ…道端で倒れてたんだ…何つーか…ローマ正教??」

その当麻のローマ正教と言う単語に、顔をしかめながら口を開く

元春…

「たしか…かみやんは知らないんだったか??そのローマ正教っちゃ〜…まぁ…そこのステイルが所属するイギリス正教…あともう一つの組織ロシア正教っつ〜のあって、
その二つの組織より一番巨大な組織がローマ正教なんぜよ…」

「へ〜え??そんじゃこいつが今着てるその霊装だっけか??そいつがそのローマ正教ねぇ〜」

「まぁ…こいつ自体は、ただの能力者で着てる服がローマ正教の??」

そして、何か分かったように当麻は??

「つー事は……俺達が知らない内に、このローマ正教絡みの何かが起きていると言う訳か??」

「まあ…そうとは断言できんがねぇ〜…よし…とりあえずその男を何処か涼しい所へ!!」

――――――

――――――

――――……

――……

……

そして、数十分後…その彼らは、とある路地の街路樹下の机を囲み座っていた……

そんな中…さっきまでグロッキーだった光雄は、何とか回復し…現在に至るが？？

ん！？ここは……

たしか…俺は、さっき上条さんに助けられ……ええっ!?
か…上条当麻!!って……本物??しかもステイルに土御門!?
うわぁ～♪♪ま…マジで～??禁書目録の!?しかも主人公チーム
じゃんっ!?
いきなり、出くわすとは……ま…まぁ…とりあえず…

「あ…あの～…俺…」

そんな、光雄に当麻は??

「おっ!気が付いたか♪」

「た…助けて頂いて、ありがとうございます…あの…俺…」

そんな、光雄にステイルは、何かを忠告するように、口を開き……

「ああ…気が付いたか…まったく…君は、今回は軽い脳震盪位で済
んだ物の…素人が…例えトラップ式でも魔術を使えば下手したら
命も危ないぞ!!まぁ…見ず知らずの君がどうなろうと勝手だがな
……」

「まぁまぁ…そんな事より…アンタ…この霊装…何処で手に入れたんかにゃ??」

「いや…それには深〜い訳がありまして…」

「でも、今はあまり聞かないでください……」

「ああ…でもさ〜…何つ〜か…おまえ…何を隠してんだ??何かに巻き込まれていたとしても一人で背負いこむなよ……」

「いや……」

「例えおまえが強い能力者だとしても…おまえだけじゃ解決出来ないそんな時は他人だろうが人を信じた方がいいぜ」

「まあ…さっき知り合ったばかりだけどな♪」

そんな…当麻の質問に、少し違和感があるが…
ヤハリ何かを決心したのか…

その今自分の周りで起きている事…この学園都市…いや…下手したら世界が破滅するかも知れない事…そして、それを阻止する為に今自分が絶対にやらなくてはいけない事を…ゆっくり話し始める光雄……

その事実を知り…多分当麻やこの人達も巻き込む運命なのかと……一人落ち込む光雄だが……

しかし…そんな光雄に対して当麻達は??

「まさか…僕達が知らない内にそんな事がここ学園都市に起きてるとはな～」

そして、その光雄に知らされた、ここ（学園都市）で起こっている事になにやら考えこむ元春だが、

「ああ…まったくだぜ…あ！！そうだ、まぁ…この事にしても俺達は、別行動で動くから心配無いにゃ～…アンタらローマ正教と交わる気はないし…そのほうがアンタらも楽に動けるだろ？？」

それに対して、光雄は…

「ああ…その方が助かります……」

「まあ…そんな訳で、おい！かみやんっ！！」

「ん？？何だよ！！」

「かみやんの携帯…あいつに教えてやれ…」

「ん？？……ああ……」

「よろしくお願いします上条さん!!」

「ああ……後、この事は俺達も俺達なりに動くから…そちらこそよろしくな!!
葛城光雄だっけか??」

「ああ…ありがとう!!上条さん」

そして、二人は携帯の番号を交わし、それぞれ別々に動くことになる……

次回へ続く……

第六話　新たな仲間??そしてそれぞれの決意!?（後書き）

な……

何か…ちとベタな展開のような……

次回!!まぁ…色々ともっとベタに??ならなきゃ良いが……

次回もお楽しみに～…ハハ♪♪

第七話　身体検査（システムスキャン）しかしやはり"チート"

いやいや……

や…やっとお待たせしました久々ですっ♪

いや～…又々、最近の作者の悪い癖!?の為に”とある科学部”の犠牲に!?

でもまあ…ちゃんと今後も進めますので…すんませんしたーーッッ!!

ま…まぁそんな感じで

光学の超高密度収縮粒子砲戦記

始まり始まり～♪♪

第七話　身体検査（システムスキャン）しかしやはり"チート"

窓の無い…はたまた出入口という物も存在しない、巨大な建造物……

それは、まるで遥か昔の頃の超文明が造り出した産物みたいに…遺跡を現代に蘇らせたような……

そんな塔のような巨大建造物のある一室……

そこは薄暗くその内部には床から天井まで、植物のつるが生い茂るように配線が走りその周りには大小様々な計器類やら様々な装置が所狭しとずらりと並び…その装置の様々なコンソールパネルやら計器類から光が綺麗な夜景のようにキラキラと…何とも妖しく光る機器類…

そして、その一室のほぼ中央部には、幻想的にもその光に照らされ…薄らと浮かび上がる巨大な水槽?? いや…調整槽とでも言うべきか…

その調整槽の中には人が逆さまになり浮いている……

その人物も又、男とも女とも…又、老人とも子供とも言えない中性的な美しい顔……薄い緑色の白衣みたいな服装…そして髪は長く…その銀色の髪が…その培養液に満たされた調整槽の中で、ゆらゆらと揺れて、はたまたかなり幻想的な人物なのである……

その人物とは!?

この学園都市の最高権力者であり統括理事長でもある人物…アレイスター・クロウリー……

そのアレイスター…外見は若く見えるがその歳は１７００歳とも言われるが……

その彼の目の前に突然下方の装置が光りだし…その装置からホログラムによって、一人の人物が映し出される…

その人物が口を開き……

『おい!!分かっているのか??このまま彼を野放しにしたらその内、取り返しが突かなくなるんだぞ!!』

と…アレイスターに対してくってかかるその男だが…そんな男に何かを気付いたようにアレイスターは、喋りだす……

「ふふ…誰だと思ったら、君か……君はそんなにその彼の存在が嫌いかね??むろん、私としては、問題無いんだがね……その彼の輝

かしい光りが私の計画（プラン）をより早く進めてくれるからね…」

『その計画か…その計画のせいでそのイレギュラーな彼を…いや…これ以上世界の法則を歪めれば全てが消滅する恐れがあるのに……ええいっ！！もうどうなっても私は知らんぞっ！！』

「ふふ…もちろん分かっているさ……」

その光りとは！？アレイスターが今後やるであろうその壮大な計画とは？？

色んな謎を秘めながらそのホログラムの謎の男との会話を切り……眠りに尽くアレイスター…そして…再び部屋が静寂に訪れるのであった……

∞∞∞

一方、その頃……

彼…葛城光雄は、何とか午後から無事登校し…只今自己紹介も終了し…その後急遽、身体検査（システムスキャン）の為…校庭に居た、

あ…あ……あ〝づ　ぃ～～……

か…身体中の水分がぁぁ～は…速く終わらせて気持ち良い冷房の中に～……

とまぁ～午前中の疲れもあってか、かなりへばっている光雄である、

「それじゃ～……始めるか！！」

「あ！！はいはい…」

と、そんな中先生らしき人の掛け声で我に帰る光雄だが！？

え？？…いったい、俺は何をやれば！？

と、そんな感じでオロオロと辺りを見回す光雄……

「それじゃあの鉄板を君能力で破壊出来るか??」

そんな掛け声をかける先生、つか…一体その鉄板とやらは何処に??

と、更に周りを見渡す光雄に対して、目の前の先生はその先にある鉄板を指差す…

その鉄板とやらは、今光雄が立っている位置から約５００m(メートル)先にあるのを発見!!

ああ!あったあった!!あれか♪

でもその自分の位置からの距離もかなりあるな…と

まぁ…とりあえずは♪集中しなくちゃ……

そして、その手に一昨日出来たように集中し…目を閉じ…一昨日のあの時の事を思い出す……

たしか…あの日、初めてそのマリオンちゃんに出会ったんだよな～……

そのマリオンちゃん、何のきっかけか分からんがスキルアウトに追われていて…俺は…あの時、

そのスキルアウトから俺のふところで小さく蹲り震えるマリオンちゃんを守ろうと……

そんな事を考えながら片手を真上にかざし…あの時出来た一筋の光りの剣を感じ……

そんな時……

「なっ!?おいっ」

たしか俺の中に眩ばゆい

「おいっ!!ちょっと!!」

え??今何??

「こらっ!!中止!!演算中止だってば!!」

って!?ち…中止い～!?

「って!!こりゃ何だぁ～??」

その時、目をゆっくりと開いて今真上に翳している自分の腕を見た光雄は??

その腕…いや手から伸びた一筋の光剣じゃ無く…
物凄い巨大な光りの粒子の塊がサーベルの如く天高く延びていた!!

それは、光剣と言うよりも正にビー〇サーベル!?
なんじゃこりゃ!?
こんなの振り下ろした日にゃ～向こう側の鉄板どころか、その向こう側の木々や建物まで溶かすぞ??

「おお～いっ!!もういいから早くそれ…消してこっち来い!!」

って簡単な事を……しかし…これ…どうやったら!?どうすれば!?って言うか…やべぇ…（汗）

消えんだがなーーッッ!!

「お〜い!!何やってる!!早く来いっ!!」

って!?消えないんだろがーーーッッ!!

な…何か、腕がしびれてきた……うぅっ…　あ!な…何か腕の感覚がー……ハハハ
いやいや!ここで腕を下げたら!?
やばいやばい……ふぅ〜……

……

……って!?もう腕が限界かもしれん…

「おいっ!!君〜……いい加減に…」

!?って??ちょ…先生っ!!こっち来ちゃ!!
うぅ…もう…だめだぁぁ〜……

そんな、彼が能力で只今出したビーム〇ーベルだが…その解除のやり方が解らず腕を暫く翳しっぱなし…そんな彼は結局その腕が限界で…下に下げる事に!?
しかも、その腕を下げ正に振り下ろされようとしているサーベルの軸線上に…こちらに近づく先生が!!

危ないっ!!

「ヒッ!!や…やめっ!?」

「うわぁっ!?……き…消えろっ!!」

その振り下ろされようとしたサーベル…
その軸線上の先生に後数(センチ)ｃｍで当たる瞬間!!
その彼が強く念じ
あっという間に粒子が散り…眩ばゆい光りとともに消滅!!周りに…未だ粒子がキラキラと散りながら浮遊する……

そんな…中尻餅をついてる先生……

「す…凄い……いや…素晴らしいっ！？」

◇◆◇◆◇◆◇◆

数十分後…

只今、その彼は職員室の中に居た…

その彼が今立っている位置から、その先の職員室の恥側に…さっきまで居た能力判定の先生と、後数人の先生方がなにやらひそひそとお話し中なのである…

そんな中、彼、葛城光雄は何やら非常にいやな予感がしていた……

うぅ…な…な～んか、俺…ここに居てはいけないような……
もしかして！？あのパターンか！？やっぱあの”べた”なパターンだよね♪……ハハ

い…今の内に…逃げるか！？、いや！！しかし……ど…ど～しよう……（汗）

と、そんなマイナスな事を考えている光雄の元に、先程話しが終わったのか、その能力判定の先生が近づいて来て…その先生が一言……

「えっ!?先生??今何て??」

「だから、今の君の能力判定は、ここじゃ無理だからね、常盤台に!!」

「えっ??えええええーっ!?」

と、まぁ～……やはり、彼のいや～な予感は的中!!急遽、その常盤台中学で再度身体検査(システムスキャン)をする事になったのである!!

はは……もう好きにして……(涙)

じ…次回へ続くっ!!(汗)

第七話　身体検査（システムスキャン）しかしやはり"チート"

今回も又超ベタな展開で～♪♪

次回はいよいよ彼…葛城光雄の真の能力が！？

まぁそんな感じで、ちゃんと今後も進めますっつー事で

次回もお楽しみに～♪♪

第八話　必殺！！「ライ〇ーソードッッ！！」って！？　ちょっと待ったのお約束

何故か……最近ちょっと…科学部の方がやる気が……

その結果♪光学を先に行きますっ！！

まぁ…今回は、彼葛城光雄の能力…ズバリ！！ギャグみたいに”チート”です…ハハハ

さ…さ～て…

光学の超高密度収縮粒子砲戦記

始まり始まり～♪♪

第八話　必殺！！「ライ○ーソードッッ！！」って！？　ちょっと待ったのお約束

葛城光雄が…只今身体検査（システムスキャン）の為に、学舎の園に向かっている頃……

やはり、彼の運命とは皮肉なものか…時を同じくしてここ、光雄が向かっている学舎の園…、その学舎の園のとある路地裏で、ある人物が二人歩いていた。

その二人とは！？

「何か、私達…浮いて無いかしら？、さっきまで周りの視線がちょっとね…（汗）」

「あら、そうかしら♪きっとマリオンちゃんかわいいからね～♪♪」

「お…オリアナ～…
本当意地悪なんだから！！
でもオリアナのそのスーツの方が良かったな～……
この常盤台の制服…落ち着かないというか……」

「でも……私は…霊装の方が…」

とまぁ～……お約束の展開？？…もといっ！
この二人の人物、オリアナとマリオンは、ここ…学舎の園の外れにある、とある小さな教会に向かっていた……

「あ！見えてきた♪ここだよ！！エクスマスさんが居る教会！！」

そして、二人は小さな裏路地を抜けてから、なにやらかなり広い広場に…

その広場から更に続く、かの有名な美しい街…ドレスデンを放物とさせるレトロチックな大通り…

その先の一角には、つるが生い茂る何とも幻想的な小さな教会がポツリ…と…

その周りのレトロチックな景色と、交ざりあい…かなりシックリ来る雰囲気を醸し出した、
この教会……
何とも言えないような……そんな空気が漂う中を掻き分ける用に、彼女達は、その古びた教会に、足を踏み入れるのであった。

「ごめん下さ～い！……んっ！？誰も…居ないのかいな？？」

と、その教会の入口のドアを叩きながら、様子を伺うマリオンであったが、残念ながら、誰も居ないみたいである。

ふと、考え…
留守なんかな??と思いつつ、そのドアに力を入れると??

ガチャン!!

と??

えっ!?あ…開くんだ~♪♪そ…それもそうだよね、確かに教会だし…皆さんお祈りする所だし…
アハハ……私…何を考えてるんか……
で…では、早速♪

と、

ゆっくりドアを開けつつ中を恐る恐る覗く彼女…と、その時
そのツン…と、鼻に当たるような、ほのかな香りが…これ…この臭い……まさか!?

お線香ッッ!?!?

その鼻にまとわりつくような、まるでお香のような臭い…
その臭いを彼女は知っていた、
こんな臭いの人物は、ただ一人ッッ!!

「ステイルさんっ!?」

と、そのドアを開けた彼女視界には、背丈はかなり高い神父の後ろ姿が、
その神父と、なにやら会話中の奥側の人物…白いローブに身を包む人物…エクスマスも居たのである!!

そして、その彼女…マリオンの声に気付き、後ろを振り向くステイル…

「やあ、久しぶりだね♪」

「っ!?……あ……あう…」

と、そんな彼にマリオンは!?目を見開いてポカーンと…何でこんな場所に来ているのよ~!!と言わんばかりにじと目で見つめるのである……

そんな彼女に奥側に佇むエクスマスは

「あ!!誰かと思えばマリオンちゃん??
久しぶりね♪♪
あぁ…ステイル!アンタの占いはこれで終了~!!
ほら!帰った帰った…」

「な!!……まったく…まぁ…ここの目的は済んだし、邪魔者は帰るとするか……」

と、何とも間抜けにたじろぐステイルであったが、目的は済んだみたいで、その赤髪を片手で掻き上げつつ帰って行く彼であったが…

そんな彼とすれ違いぎわにマリオンに一言……

「そうだ…君の知り合いの彼…たしか光雄君だったか??彼も今日…ここ（学舎の園）に来ているぞ…」

「へ？？……」

「ははは…それじゃ…僕は帰るか♪」

そのステイルの一言が、かなりきいたのか…その場で固まるマリオンであった…

―――――――――

―――――――

―――――

―――…

…

一方、その頃、学舎の園行きのバスを降り…その停留所に一人佇みながら、さっき先生に渡された常盤台中学への地図を眺める光雄が居た……

うはぁ～……とうとう来ちゃったよ学舎の園……
まぁ、今回は、身体検査（システムスキャン）な訳だし…だ…大丈夫だよね♪
ではっ！！いざ、冒険の旅にッッ！！
とまぁ～勢い良く、その学舎の園の入口へ、足を踏み越えていざ中へ突入！！

しかしっ！！

そんな彼を待ち受けて居たのは……

「ち…ちょっと何よあれ！！」

「うぅ～……わぁ～！！」

「何？？…あの恥ずかしい格好……ぷぷ♪」

とまぁ～……何とも、さっきまで賑やかだった広場が一気に静まり帰り、なにやらひそひそと…おまけにすんごい視線で、その彼にプレッシャーを与える彼女達……

「！！……うぐぅ…」

や…やっぱ分かっているよ…分かっているとも…
俺が、ここに超似合わね～イレギュラーなのは……ハハハ……ハハハ！？

「……」

「だぁぁぁぁぁぁぁーー！！」

「ひっ！？こ…こっち来るなっつーの！！」

「ちょッツ！！？や！！いゃぁぁぁ！！！」

「「「きゃぁぁぁーーっ！！」」」

と！！彼の中の何かがふっきれたのか、いきなり叫びながらもうダッシュ！！
フルスロットル状態で一気に！！
まるで、敵拠点に特攻をかける兵士の如く強硬突破をかける葛城光雄であった！！……（爆♪）

そんなこんなで…只今常盤台中学校門近くの通り添いの小さなファンシーショップ内……

うぅーーー……ん

えっ??こ…こんなに種類増えたの??

……ど～しよぅ……

別に全部購入しても問題無いんだけどね～……でもね～……

と、そんななんともチッコイ可愛らしいグッズに悩む少女に対して、店の外から…困り果てたような声が……

「まったく…お姉様ったら……、今から待ち合わせの時間間に合わないですの!!早くしてくださいまし!!」

「んなの分かっているわよ黒子!!
でも…これ……うぅ～」

「まったく…まぁあと少しだけならまだ間に合いそうだし…」

そんな事を言いつつ不機嫌そうに、腕を組みつつ、店の入口前の壁に持たれる歳は、マリオンと変わらないツインテールのその彼女白井黒子と、その壁の向こう側…只今ファンシーグッズを物色中の彼女…御坂美琴が居た……

そんな中??やはりお約束の展開!?というか……（笑）

ふとなにやらその店の遥か向こう側の通りから悲鳴声が聞こえたような気が!?……と、眉をしかめる黒子……

しかし!!

周りを行くその他の生徒達がその方向を向きつつざわざわと……

「ん??……」

「はて??……一体何ですの?」

そんな、遥か向こうを見つめる黒子の顔がみるみる内に、引きつる!?

「へ？？……げえ…え！？　な！！……何なんですの！？」

そして！！それは、明らかに！！
その黒子に迫る人々の山！！というか……その悲鳴を上げながら逃げる彼女達を追い立てるようにこちらに迫る光雄！！

「ち……ちょ！！…お…お姉様！？」

「ん？？どうしたの黒子？？
えっ！？黒子っ？？」

と、まぁ～そんな異常事態にさすがに気付きつつ店の外に出る美琴…そんな黒子の顔をまじまじ見つめるが……

その黒子の顔は、口を…お姉様の、”お”の形のまま…何故か固まっていた……

そして…その黒子が見つめる方向を恐る恐る冷や汗をかきながら見る美琴だが！？

「ひっ！？……な…ななんじゃありゃ～～ッッ！！？」

そんな美琴に迫り来る人々が！！そんな人々が走り去りその後ろから葛城光雄が涙を流しながら迫る！！

ど…どけどけぇぇぇ～っ！！俺はすぐには止まれないんだぁぁぁーっ！！

そんな卑屈な絶叫を出しながらの彼の快進撃だったが、運命は皮肉にも、アノお約束人物に出くわす事で幕を閉じる……

「ひっ！？……っていうか…誰かと思えば！！今朝の魔法少年ッツ！！アンタかぁぁ！！」

「げえっ！？……びりび！？…」

とまぁ～一気に怒りを爆発させる恐ろしい彼女を見た瞬間！！

なんともかわいそうにも…彼の意識が飛んだのであった……（笑）

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

数十分後……

光雄は、何故か巨大なプールの前に居た……

その彼が佇む斜め前方に能力検定の先生と、その後ろ側に、何故か先ほど光雄の暴走劇を止めた人物二人が、

そんな彼女らを横目に見る、彼…は??
その白い魔法防御服は、所々焦げ…なんとも無惨にもボロボロであった…（汗）

ハァ～……何で、いつもいつも俺はこんな目に…グズ…（涙）

ていうか……この服装…対能力も有効だったよな??しかし…なんで又、ここまで破壊されるんだ??…

しかしな～…あいつら何で又ここに居るんだよ～……いい加減帰

れよな～……

とまぁ～…そんな彼の思考を断ち切るように、その向こう側の彼女達は??

「ったく…思考がだだもれですの!!」

「いいからちゃっちゃと終わらせなさいっ!!
その後聞きたい事が山ほどあるんだから!!」

って??げげっ!!全部筒抜けだった!?
や…やべぇ～……（汗）

つか、さっき俺に聞きたい事がって??
い…一体な…何を～っ!?

そんな凹む光雄を無視するように、容赦無く測定係の先生が、

「ほら!ぐずぐずするな!!早く始めるぞ!!」

と…

「あ～わかりました～…」

あ～も～…やればいいんでしょう!?やれば!!
って!?一体全体こんなプールで俺は何を??

と…又もや、何を??みたいにキョロキョロする光雄……

そんな光雄に先生は、

「おまえ…聞いて無かったのか??…
それ!!その真下のプール、その水におまえの能力をおもいっきりぶち当てるだけだよ、簡単だろ??」

えっ??…っていうか……おもいっきりって…何か、それどころか多分…プール事消滅しかねないような……（汗）

ええいっ!!こうなったら好きにやらしてもらうっ!!

と…まぁ…先ほどの学校でのように、再び目を閉じ…集中する光雄……

たしか……さっきやったように、でも、まぁ…能力解放したらこれ…一体どうなるんだろう……
俺の能力……身体の奥底から光りを感じ……

そして、目を閉じながら念じる光雄の周りから、キラキラと…しかも、渦を巻きながら光りの粒子が再び彼の周りから、発生……
まるで、純度の高いエーテルがパチパチと反応するように……

そんな…光雄を、遠くから眺める二人……

「うぅわぁ～…何あれっ!!又魔法とか??」

「魔法う～??又々そんなオカルトじみた事を…お姉様ったら!!」

そんな目をつぶる彼…そのまま、今度は片手でじゃ無く両手を天高くかざし…その手に先ほど発生した粒子の粒がその両手に集中…
…みるみるうちに輝きはじめ一つの光りの塊を形成して行く……
その塊……正に…天高くかざす巨大な剣……いやサーベルに!!

瞬間!!

目を見開き、そのかざすサーベルにもっと力を加え…その彼の目

は…遥か彼方の大空に輝く一つの小さな星を…その空…その遥か先……只今衛星軌道上に、浮遊する…とある巨大衛星の残骸…その残骸を捕らえ…

そして!!

「見えたッッ!!……切り裂けぇぇぇぇーーッッ!!」

次の瞬間!!

その両手から更にゴワッ!!と眩ばゆいまるで空一面が物凄い巨大な光りに包まれ!!その光りの粒子が…

その正に!あのアニメを放物とさせるような……大気圏外まで届く巨大なサーベル…正にライ〇ーソード!?みたいに…その粒子の塊が大気を切り裂き…震え…そして!!

衛星軌道上にある残骸を粉砕!!消滅させ!!!

その凄まじい光りも消滅!!その粒子の粒がキラキラと、まるで綺麗な光りの雪が降りそそぐように……

「な……なによ……あれ…」

「何か…こんな能力見た事無いですの……」

そんなオカルトじみた能力に…冷や汗をかきつつ固まる二人……

そんな静寂を打ち消すように…測定機の判定がこだまする……

――粒子収縮率…７２％

――濃縮率……８３％

――速度……∞％

――測定結果…ＬＥＶＥＬ５

その瞬間！！今ここに新たなＬＥＶＥＬ５が誕生した！！

次回へ続くっ！！

第八話　必殺！！「ライ〇ーソードッッ！！」って！？　ちょっと待ったのお約束

いやいや……

超お約束的な展開に～♪♪なにやら自分で書いてて恥ずかしくなってしまった……（笑）

次回…科学話しは、これで終了～♪♪つー事で、再び魔術に！！

てな訳で

次回もお楽しみに～♪♪

第九話　（映）大脱走～♪♪それとも??（映）逃亡者!?（前書き）

いやあ～……何故か魔術話しにする予定がなにやら又々科学話しに!?……

今回は、ズバリ!!その題名の通りです…ハイ……

まぁ…そんな感じで

光学の超高密度収縮粒子砲戦記

始まり始まり～♪♪

第九話　（映）大脱走～♪♪それとも??（映）逃亡者!?

総合評価ＬＥＶＥＬ５!?
な……なんだって～～ッッ!!

とまぁ…そんな、只今その測定機が出した判定に、耳を疑いつつ驚きながら
その光雄の後ろ姿を見つめる、二人……
御坂美琴と白井黒子……

「ねえ…黒子!?……アイツの能力って分かる??それとも…本当に??」

「ちょっと待った!!……魔法使いとかは、無しですの!!…そんなここ、科学の街学園都市ですよ??そんなオカルトじみた…幼稚な…」

「でもさ～…さっきアンタも見たわよね??こう…眩しくパァーッと!」

「だ～か～ら!さっきのは、彼の能力ですの!!だいたい魔法やら魔術やらまったくお姉様は!!」

「でも～～…」

「でももへったくれも無いですの！！だいたい普段からお姉様と来たらいつも……って??お姉様??……」

「ねえ…黒子?……あいつさ～……さっきまであのプールの上に居たわよね～…」

と、そんな二人の会話の最中…美琴の質問で、黒子は只今プールに佇む目の前の彼が居ない事に気付く……

「はて?さっきまであそこに……何処か別の所に移動したとか??」

そんな様子に、何故かそのプールの向こう側でキョロキョロと、その彼を探す先生が……

「おお～い！！葛城光雄君！！……おかしいな……」

「おい！白井～…さっきまで居た…彼…葛城を見かけなかったか??」

「いえ……さっきまであそこに……もしやっ！！あの彼逃げやがったですの！？……って？？お姉様？？……」

「へ～え？？……やっぱ…アイツ…逃げたんだ……」

そして、その隣側で驚きの表情が…だんだんと怒りの表情に代わりその肩もだんだんと小刻みに震える美琴の様子になにやら嫌な予感がする黒子だが……

「逃げたねぇ～……逃げた…と……ふ……」

「へっ？？…お…お姉様？？」

「ふ……」

「ええ？？何ですの？？」

「ふ……」

「な！！……やばいですの……」

「ふ……ふ……ふぅ～ざぁ～ぁけぇ～んなぁぁぁ！！！」

「ちょ！！お姉様っいけませんのっ！！」　そんな怒りを露にした美琴になんとか気を沈めようとする黒子であったが？？

「あんのクソ魔法使い野郎～…裏切りやがったなぁぁぁ～ッッ！！……」

とまぁ～…次の瞬間ドガシャーン！！と、雷が！！
なにやらとても恐ろしい雷々様に変革を遂げた彼女に！？

ああ…もう手遅れですのと諦める黒子がいた……（汗）

そして……今、そんな恐ろしい事態になっているのも知らずに、とにかく早く帰宅したく、常盤台の校門から出る光雄が居た……

そんな光雄は!?

ったくマジ冗談はよし子ちゃんだっつーの!!

俺がＬＥＶＥＬ５だって??

まあ…ちとやりすぎたかも知れんが、このままあんな場所に居たらイコール絶対にあの奴等に捕まり、挙げ句の果てにゃ～

「”アイツ”がほぼ確実に勝負しよ～ぜ～てへ♪♪」

なぁ～んて事になりかねんっ!!……って??

えっ??

そんな愚痴を溢す光雄…

しかし…その背後に??

「だぁ～れぇ～が勝負しよ～ぜてへ♪じゃ!!」

と??

そんな……冷や汗をかきながら恐る恐る後ろを振り替える光雄……

そして…真後ろに居る”何か”と目が合い…なにやらとても怖い物を見たように汗がどっと吹き出し……

「や……ややや〜……ハハ？？……」

そのままニコニコと……後退りしつつ……

そして…

もうダッシュ！！

「って！！又逃げるかぁぁぁ〜！！」

それは、光雄にとって
人生初めての経験であり、初めて”猛獣か何か??”に追われる恐怖を味わうのである!?…(笑)

「うはっ!?い……息がっ……ぜぇっ……ぜぇっ…」

その恐ろしい”何か”から必死に逃亡する光雄!!
しかし…さすがに朝っぱらからの疲れのせいか…もう体力の限界とばかりに息が荒い……そんな彼の後方に約六時方向にぴったりと、張りつく”何か”!!

真後ろからじりじりと、距離を詰めつつ、その照準に只今前方を逃亡中の光雄の背中を捕らえ!!
電撃を放ちまくる”何か”!!

「いい加減に止まれやゴラァァァー!!……」

その後ろから少女とは思えないような雄叫びをあげつつ追い掛けて来る恐ろしい”何か”!!

正に…そんなこんなで逃亡者…葛城光雄とその彼を追う追跡者…御坂美琴との…

ここ学舎の園の空の下での必死の追いかけっこが幕を開けたのである！？……（笑）

◇◆◇◆◇◆◇◆◇……

一方その数十分前……

同じく、学舎の園の外れ、とある教会では…

「ふふ……本当久しぶりね～…たしか……アンタと会ったのは、トルコの町外れの教会だったっけ？

たしか……あの時、父親に連れられ…あんな小さかったのにねぇ～…あれから、もう数十年…だいぶ大きくなったわね♪」

「うんっ♪エクスマスさんっ！！わ…私……あなたがここに居ると聞き…うぐっ…」

そんな彼女に対してマリオンは、なにやらその目じりから涙を浮かべて見つめるのである……

そんな、成長したマリオンをまじまじ眺めながらその久しぶりの再会に喜ぶエクスマス・ザキ・ツェッペリン…そんな彼女は、その白い顔まで隠れたローブを捲り…綺麗な黒い瞳…そして、ユダヤ系民族独特の濃い茶髪を掻き上げながら…マリオンの頭を優しく撫でる……そして、一言…

「本当…辛かったわね…」

と…

その彼女、マリオンの父親…ロイド・オヴ・シュペーの知り合いであり…

母親が居ない彼女にとってエクスマスは、そんなマリオンの母親代わりみたいな人物であった……

しかし、とある事件によって、その彼女…マリオンはその故郷で

あるトルコを去り…そして、マリオンの父…ロイドも、もうこの世には、居ない……

「エクスマスさん……うんっ♪、でも大丈夫だから!!心配してくれてありがとうね♪私!!今は、その……あの……」

そんな、どぎまぎする彼女に対してニッコリと微笑むエクスマス…

「ん??そう♪大丈夫なのね??たしか……葛城…光雄君だっけかな??さっきステイルから聞いたわよ??凄く優しいんだってね?…きっと彼ならあなたの支えになってくれるから…大事にしなさい♪♪……」

と、そんなエクスマスの一言で、更に顔を赤らめながら……下をむきつつ…

「いやっ!!私…光雄君の事…そんなんじゃ……」

「あ！そうだったね♪うふふ…ごめんなさいね♪
幼なじみだもんね♪…でも、あの人は…もうこの世に……ううん！
大丈夫よきっと！！」

そのエクスマスの一言で、下をむきつつ更に顔を赤らめコクッと
…うなずくマリオン……
はたして、その”彼”とは？？一体誰なのか…！！

――――――――

――――――――

――――……

――……

そして、丁度その頃…
その教会の外側では…

「何か…嫌な、予感がするな…この胸騒ぎ？……ふっ…まったく！アイツ、上条当麻の悪いくせでも移ったか…」

と…その教会の外で、只今喫煙中のステイルと？？

「うふふ♪…坊やが胸騒ぎをねぇ～……ふふ？」

「なっ！！……オリアナ・トムソンっ！！君がもしマリオンの友達じゃ無かったら今頃消し灰にしてやるとこだがっ！！……」

と…そんな彼女を待っている、とてもにあわね～…二人がいたのだ……（汗）

そんな中……なにやら変な違和感にかいなまれつつふと…今、光雄が身体検査（システムスキャン）をやっている常盤台の方角を見るステイル……その見てる方角が少し光ったと思った矢先！！

何とも言えないような地震にも似た地響きがし！！
次の瞬間！！グワワー…っと凄まじい一筋の…まるで、その光りを境目にして、空が真っ二つに割れたみたいに凄まじい光線が天に…その衝撃波で、大気が震え！！

その光景を見て、口にくわえているそのタバコを地面に落とす！！

「……なッッ！！
おいっ！！オリアナ！あれは何だ！？」

「えっ？？そ…そんな……そんな事……嘘でしょ！？だってあれはッッ！！」

「そう！！僕は”あれ”を一度いやと言うほどに見ているんだが…
…いや…あの天まで届くあの質量の光線はッッ！！」

「竜王の殺意（ドラゴン・プレス）ッッ！！」

そんな、何とも卑屈な表情を浮かべてその天まで届く一筋の光り

を眺めつつ
オリアナは!?

「そ…そんなっ!!たしかあの大魔術は、普通の常識じゃ不可能!!いや…そんな事出来る奴は!?…せ…聖人っ!!!
いけないっ!!あっちの方角は!?常盤台っ!!光雄君が襲われている!!」

そんな外の状況に、慌てて出てきたマリオンも、みるみるそのあり得ない強力な光りを見て!!

「私っ!!行かなくちゃッッ!!光雄が……光雄が!!
待ってて!!今度は私があなたをッッ!!」

そう言い残し!!その場を飛び出し常盤台に向かう!!

「ちっ!まったく……おいっ!!マリオン!!君一人じゃ!!」

「待って!!二人共!!あなたたちがかなう相手じゃ!!」

そう言いつつ、オリアナとステイルも後に続くのであった！！

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

一方その頃…その問題の彼葛城光雄は？？

「ひっ！？な…な…何でいつもいつもこんなオチになるんだぁぁぁ～！！」

と……只今学舎の園の路地裏を逃亡中で…その背後から迫りくる……

「待てやゴラァァァーー！！」

とまぁ…電気を撒き散らしながらそれを追跡する恐ろしい美琴が居た……（笑）

そんな彼光雄の逃亡劇も遂に終わりの時が？？

うひっ??ややべぇ～!!あんなのに捕まったら、只じゃ……

そんな美琴から必死に逃げる光雄…
更にその前方にも人影が??

つかあれって!?

マリオンちゃんっ??おまけにオリアナさん…と……す…ステイルさんっ??

一体何で??
と……混乱する彼であったがそのマリオン達の物凄い形相に戦慄する!!

マリオンちゃんは…いつもの可愛いマリオンちゃんじゃ無く…とても恐ろしい魔術師とかした…魔術師マリオンに!!

その後方を行く、ステイルやオリアナも、ステイルは、あの恐ろしい魔女狩りの魔術師に!!オリアナも、あの追跡封じの彼の良く知ってる恐ろしいオリアナに!!

い……一体何が??みたいに、立ち止まり、前方と後方から差し

迫る能力者と魔術師に…未曾の絶対絶命のピンチに!!

そんな中、只今居る自分の位置から斜め前方に、更に別の通路を辞任っ!!

その通路目がけて、再びフルスロットルをかけつつ、飛び込みつつ再び逃走を開始する光雄!!

その暗く…そして長い通路を必死に走り抜ける……その遥か後方から、魔術師達と能力者が合流!!ズドド…と、その狭い通路に響き渡る複数の足音が更に迫りくる恐怖を誘うのである!!

「ひぃっ……マジ…もう限界かも……って??」

その息も絶え絶えに、なんとか走りきりその路地裏を抜け広々とした広場に脱出!!しかも、その先には!?ゴール地点でもある、学舎の園の出入り口ではありませんかっ!!

すかさずその彼葛城光雄のさっきまでの卑屈な表情がみるみる内に笑顔に!!

や…や…やったぁぁ～♪♪けっ！！俺は、助かるぞぉ！！と言わんばかりに

その前方に見える脱出口に再び、アフターバーナーに点火するが如くもうダッシュ！！

しかし！！運命とは何と非常なのか……その彼の目の前の視界に突如二人の人物が！！

「のわっ！！」「きゃっ！！」と、その人物達とお互いに激突！！更にその人物に追おいかぶさるように転倒！！

「いたた……なんなのよもう……って??」

「うぅ……うへ??」

その転倒した彼の手に…なにやらなま暖かいマシュマロみたいな感覚が！？…（汗）

「へ??……」

「き……き……きゃぁぁぁ！！こんの変態がぁぁ！！」

そんな、彼女に追おいかぶさる光雄に…思いっきり殴りつける彼女！！

どべしっ！！となにやら良い音と共に飛ばされ、その落ちた地点で…周りからの殺気に気付き顔が引きつる光雄！？

「うぐぅ……な……なんでこんな…って？？」

「ひっ！？……ま…待て！！俺は、これは不可抗力であって！！」

そんな、テンパる光雄の目の前に…此方に向けて、コインを弾く？？美琴と！？

その隣側…なにやら、此方に杖を向けつつ呪文を唱えるマリオン！？

更に、後ろを振り向けば…その光雄を目で睨み付けるさっきぶつかったであろう佐天涙子と、その隣側の初春飾利……

そんな、四面楚歌状態の脂汗をかく葛城光雄……なんともかわいそうである（笑）

そして、

「観念せいやゴラァ～！？」

「光雄君！！信じてたのにぃぃ～！！」

「ひっ！？……何でいつもいつもこうなるんだ？？ふ……ふ…不幸だぁぁぁぁ！！」

次の瞬間ここ学舎の園に一人の悲惨な男の悲鳴と…天に轟く凄まじい雷鳴がこだましたのであった！！……（爆♪）

次回へ続くっ♪♪

第九話　（映）大脱走～♪♪それとも??（映）逃亡者!?（後書き）

あはははは～……♪♪

な……何か…かなりギャグっつーか……すんませんっ!!

じ…次回からちと魔術絡みにシリアスにしたいと思うんだが……だ…大丈夫なんか??

ま…まぁ…そんな感じで

次回もお楽しみに～♪♪

第十話　水晶の魔術師…前編（前書き）

いやいや……まぁ～

今回は、前回に続き…ちとぐだぐだかも……

いや…そのぐだぐだの先にあるシリアス的な展開…になるんか？？

てな感じで

光学の超高密度収縮粒子砲戦記

始まり始まり～♪♪

第十話　水晶の魔術師…前編

ここは、未だ学舎の園、その外れにあるとある教会…そこへ向かうべく、レトロな街並みを歩く人物二人が居た

「なあ、マリオン…その…あの、さっきは、ほんと…マジ誤解だから…不快な思いさせちまってごめんな」

「ん??なに?…そうそう♪そこに、その教会にあなたに会わせたい人がいるのよ…」

「って～??あの～……マリオンちゃん??聞いてる?」

「そうっ!!その人の占いが又々良くあたるから…」

っていうか…こいつ…全然違う事を??……ハァ～…（汗）

ま!いいけど…ね…ハハ

とまぁ～全然話しが噛み合わないマヌケな二人であった……（汗）

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆…

その数十分前……

「うぐぅ～……カクンッ」

っと…まぁ～…水流系魔術と超電磁砲…（もちろん威力は押えて？）の直撃に合い只今そこでのびてる可哀想な光雄……（笑）

「へぇ～？…アンタもやるじゃない♪それ…水流系能力（アクアマスター）とか～♪」

「ハァッ…ハァッ……えっ？？……えええ～っ！？光雄君？？わわっ……私一体な…なにをっ！？」

そんな美琴の声に我に帰り、目の前にのびてる光雄を見つつ、かなりテンパるマリオン……ってやったのお前だろ！？ってのは置いといて…（汗）

「うわ～……いやいや……でもさっきの佐天さんも凄かったです

ね♪」

「うえっ！？…あんな抱きつかれ方されたら誰だって一発ぶん殴るっつーの！！
所で初春～…御坂さんと白井さんは、分かるんだけどさ～…あの人達……」

「あ！…確かに…一体誰なんでしょうね……」

それに気付いたのか、その場で冷や汗をかきつつかたまっていたステイルとオリアナ……

そのステイルがゆっくりと口を開く……

「あ？僕達の事かな？？…ああ…僕達は、君達と違って魔？……うぐえっ！！」

そんな、質問に答えてやろうと言わんばかりに語りだそうとするステイルに対して、思いっきりみぞおちを食らわすオリアナが…

「あらあら…お姉さん達は、あの子光雄君の知り合いなのよ♪」

「ふ～ん??ま!別に気にして無いけど…
所でさ～…私達は、今からあっち側に居る佐天さんと初春さん達と
約束でここ学舎の園見学ツアーに行くんだけどさ～…
アンタ達も一緒に行く??」

その、美琴の誘いに対して、オリアナは??

「うふふ♪ありがとうね♪でも…お姉さん達もちょっと用事がある
から又今度さそって頂戴…」

そんな事を言いつつステイルを連れて、何処かへ行くオリアナ達…

「ああ…行っちゃったね…」

「行っちゃいましたね…」

そんな、何処かへ行くオリアナ達を見送る涙子と飾利…そんな、二
人の前に只今のびてる光雄の服装に気付き…

「所でさ～…今まで気が付かなかったんだけどさ～…あの彼の服装…コスプレとかいう奴じゃない？？」

「う～ん…たしかに……あっ！！思い出した♪この服私っ！！見た事ありますっ！！魔法少女り○かるな……？」

「ちょぉーーっと！！待ったですのっ！！」

「ほえっ！？」

「初春！？あなたもですの？？まったく！！どいつもこいつも魔法魔法って……いいですの！？…ここは、学園都市ですよ学園都市！！ほんっとに！お姉様までならまだしも……って？？お姉様？？」

っと、さっきまで居た美琴が居ない事に気付き周りを見渡す黒子であるが？？
その向こう側でなにやらマリオンとの会話に夢中みたいである

「いいよ♪気にしないで！！まぁ…こんなボロボロにしちゃったの

私のせいもあるしね…
その彼のサイズに合うかわからないけどね♪」

「うん♪…本当になにもかもすいません……あの私マリオン……マリオン・オヴ・シュペーって言うの♪」

「ん??え～と…マリオンおぶ…??」

「マリオンでいいよ♪」

「そう♪私は、御坂美琴♪宜しくねマリオンさん♪」

そんなこんなで、科学と魔術が交差しすぎでくっ付けてしまったマリオン……って!?この先大丈夫なんか??

「それじゃ又後でねマリオンさん♪」

「あっ!!後…新しい服貰ったらちゃんと返しますんで!!それじゃ御坂さん達も後でね♪」

とまぁ～…美琴の友達等四人組は、そのまま学舎の園見学ツアーに、

マリオン達メンバーは、オリアナとステイルは、又々別の場所に、……そして、そんな中マリオンは、…光雄と、共に新しい対魔法防御装備をもらいに再び教会へ行く事に…その後に再びこの学舎の園の入り口付近で何故か集合する事になってしまった光雄とマリオン……はたして!?

◇◆◇◆◇◆◇◆◇……

……

そして、現在に至るのである…

…只今学舎の園の中じゃ一番レトロな風格な通りをゆっくり歩く葛城光雄は、何とも、珍しそうに周りを見回していた…

まったく…すげーな、ここ学舎の園の景色は…

さっきは無我夢中で走り回ってたせいか良く分からなかったが、良く良く見渡すと……

俺…海外旅行に行ってるんじゃ無いよな～…

そんな、なんとも落ち着かない光雄を見て、隣側を歩くマリオンは…

「ねえ…たしかに…めったに来ない、ここ学舎の園は珍しいのは分かるけど…そんな田舎者みたいに…何か恥ずかしいんだけど」

「ん??……ああ…悪い悪いっ……」

っていうか…マリオンちゃんの服装…今気付いたんだが…常盤台の制服だよな～…つか！周りの視線感じないと…思えばなんで！？！？

俺……今のかっこう……

あれっ??おかしいな…さっきまで……これ！！ひょっとして??マリオンちゃんと…おそろ??……てへ♪って！！ちがーーーーーッッ！！

つか何これっ！？コスプレの次は、ただの……変態かぁぁぁーーーっ！？

しかも…いくらなんでも、完璧に女装変態にしか見えねぇぇーーっ

！！

ど～する？？一体これっ！！
いや？？まてよ！？何か…サマーセーターの下側に刺繍が？？御坂美琴って……

なぁ～んだマリオンちゃん借りたんか♪…ハハハ…ハァッッ！？

えっ！？

でも…なんで？？
しかも、俺が？？

そんな、かなり変態に近い服装のなんともま～…可哀想な光雄……いったい、この主人公……特定の衣装がまったく無いマヌケな主人公である……（笑）

そして、なんだかんだでその目的地でもある…古びた教会に到着する二人……

「ふぅ～…やぁ～っと、着いたよ♪

そうっ！！ここが、さっき言ってた……エクスマスさんの教会…」

そんな古びた教会の前に佇む二人……

「うわ～…何とも……かなり、歴史的な教会だな～…」

「さあ！！早く行きましょ♪」

と…その出入口付近で固まってる光雄の手を引っ張りいざ中へ侵入……

そこには、その、こじんまりとした…広場…そこに、

ズラリと…所狭しと並んだ椅子…やら机が……

その机やら椅子が天井から差し込むステンドグラス越しの日の光に照らされ……あたかも…魔法使い関係の映画〇リーポッターみたいな幻想的な雰囲気に…息を飲む光雄……

「ん？？……あそこに…人が……」

と、そんな……中…彼の佇む位置から…少し遠くに…なにやら人が居る事に気付く……

「あの～……おじゃましてます……」

「うふふ…あなたが……その噂の葛城光雄君??」

そんな、幻想的な雰囲気を更に醸し出している…真っ白なローブに身を包む人物…

その人物の魔力みたいな何かを感じつつゆっくりと…近づく光雄…

そして、その人物がゆっくり微笑みながら口を開き……

「初めまして……私は、そこにいる子…マリオンの昔からの知人の、エクスマス・ザキ・ツェッペリンと言います♪」

「今日…あなたに会う事も、そして、この世界にあなたが来た事も全ては、あなたが望んだ運命なのです…」

!?……この人っ!!……俺の事を…いや??俺がここに来た事も全て知ってるんか!?
いったい……こいつはっ!?

はたして……この水晶の魔術師エクスマスは??そして、その彼…葛城光雄のこの先に待つ運命とは??

次回へ続く!!

第十話　水晶の魔術師…前編（後書き）

うわぁ～……ハハ

何か…又々お約束な展開っつーか……う～む……

じ…次回こそ、マジシリアス的な展開にしたいっつーか……

次回…魔術的な感じで行きますっ！！

てな感じで

次回もお楽しみに～♪♪

第十一話　水晶の魔術師後編だか！？…その水晶…必殺！！顔面アタックで別世

うはっ……

こ…今回は一言で言えば……

ズバリ！！変態ですハイ……（汗）

はは…そんなこんなで
光学の超高密度収縮粒子砲戦記…

始まり始まり～♪♪

第十一話　水晶の魔術師後編だか！？…その水晶…必殺！！顔面アタックで別世

【学舎の園内】

その一番西側の外れ…煉瓦（レンガ）がちりばめられた通り沿い…その街路樹が続く広い通路の先、

まるで17世紀初等に迷い込んだような古い街並みのその先の一角に佇む古い教会…

今、その教会内の広場の先にある向こう側の一室に……白いローブを纏う姿の、エクスマス・ザキ・ツェッペリン…

その彼女の座る目の前の小さな机…その机の上には……サッカーボール位の…透き通るような水晶が！！

その水晶を挟んで扉側の位置の椅子に葛城光雄…その隣側にマリオン・オヴ・シュペーが座り、その水晶を囲む3人をその蒼白い光が照らし浮かび上がらせ…何とも不思議な雰囲気を醸し出しているのである…

そんな中…光雄は？？

その水晶にまじまじと、顔を近づけ、

「へ～え??こんなバカデカイ水晶初めて見るぜ…」

と、かなり珍しい物を見るように…
その隣側のそんな光雄を見つめながら……

「この水晶はね…私が持つこのクリスタルと、同じように…精霊が宿ると昔から言われている物なの」

そんな、マリオンの言葉を聞きつつ更に、顔を近づけつつ眺める光雄……って、そんな顔近づけたら水晶がくさ??……いやいや

そんな光雄に、エクスマスは…

「うふふ…そんなに気に入ってもらえて水晶の精霊達も喜んでいるんじゃない??」

「は…はぁ～…精霊ね～…以前にも、俺…精霊になにやら当たり出くわしたよな～…たしか…あ！…思い出したっ！！スポーツドリ??」

次の瞬間光雄の顔が引きつった!!

「へ～え??アンタはこの私のアクエリアスの涙にケチつけるんだ……ふぅ～ん??さっきさ～言い掛けた事～…もう一辺言ってみる??」」

「ヒッ!?……」

「す…すすすいませんっしたーーーーッッ!!」

と…なにやらおとなしい筈のマリオンが美琴様みたいな!?あのドス??のきいた恐ろし～声に変貌し……その彼女の持つクリスタル……それをバカにしよう物なら……とても恐ろしい魔術師とかすマリオン……

って??ここ…怖え～…今後はこのネタは死亡フラグだな……ハハ……

「ケッ!!分かりゃ～いいのよ分かりゃ～……ハッッ??ええっ!?わわっ……私一体……なにを??」

「いや…もういいです…ハイ…（涙）」

そんな、夫婦漫才みたいな二人になにやら固まるエクスマスだが??

「……ハッ!?そそ…そうね…たしか水晶の占い早速行ってみる??」

って……エクスマスさん??そんな無理をなさらず自然体…自然体で……

つかマリオンちゃんの持つクリスタル…そして、この水晶…何か又々……
不思議な事がおきなきゃいいんだが……

そして…エクスマスはなにやらその水晶に手をかざし初め……色々と喋り出し……って……呪文か何かかな??

そんな、不思議な彼女と水晶にうっとりと眺める光雄……

◇◆◇◆◇◆◇◆◇…

数分後……

「葛城光雄……」

「え？？」

「あなたの未来が分かったわ…」

「うぇっ！？」

「って俺？？」

「ほらっ！？はやく……今水晶に映っているでしょ？？」

そんな…なにも見えんがな？…って？？マリオンちゃん？？

「だ～か～ら！！これをっ！！除くのっ！！」

って？？ななななにを～？？

って……怖いから…マジダメだから……

「ったく！！……早くしなさいっ！！」

だ…だァァァ！！押さないでだからみえっ！？……無理無理…

…見えんがなーーーッッ！！！

ちょっ！？……まっ！？

どげしっ！？っとまぁ～……何をとちくるったかマリオンは無理矢

理…光雄の顔をその水晶に押しつけ……顔面から水晶に激突！？

次の瞬間…光雄の意識が飛び??

「み……雄……」

あ……な何か……俺……大きな星が…点いたり消えたりしている……

「光雄……君…」

刻が見えちゃったよ～な……うふふ??

「ねえっ!!光雄ッッ!!」

大きいっ!?彗星かな??

いや…彗星はもっと

「ねえってばっ！！」

！？

「って！？のわっ！！！」

「ま…ままマリオンちゃん？？そ…そんなに顔をドアップにしなくても」

い…息がっかかるって♪♪やべぇ～……マジドキドキするんだけど……

「ねえ！！やっと気が付いた♪♪……ねぇ光雄～…ここって……」

ん？？マリオンちゃん…一体何を言ってるんだ？？

でも…言われてみれば……たしかに……この耳をくすぐるような騒めき……

遠くに聞こえる駅のアナウンス！？

近くを通る車の音ぉぉ～っ！？

しかもっ！？何か…知ってる電気屋さんの曲が街中に流れ！！

排気ガスのこの臭いっ！！までまでまでまでよおいッッ！！！

しかも……ここはッッ！？

そして…ついさっきまで居た……教会の中とは、明らかに違う自分の周りに…かなり動揺しつつ……

さっき…いつの間に地面に寝ていたであろう自分の身体をゆっくりと起こしつつ……恐る恐る周りを見渡すと！？

「むぐぐっ！！――――――！！――――！？」

「ねえっ!!光雄!!ここの建物とか……何か…いつの間に私達外に??
あ!!あそこのデパート…せ……セブンスミストじゃ～無いよね～
……何か…よ?…ヨドバシって??何??ここ……一体…学園都市なの??」

そんなテンパるマリオンに気付き…冷や汗をかきながら

「いや…ここは、学園都市でも無く…全然違う街かも」

と……

そんな…光雄はこの街を知っていた…いや!!住んでいた!!
その、今…二人が佇むここは……東京都!!!

そんな、なぜ??いまさらここに俺は帰って来たんだ!?あの水晶の幻想??

そんな又々不思議な事が!?しかもっマリオンちゃんまで一緒に??この精霊…そしてこの世界との繋がり…一体俺にどおしろと??

あ~も~……なにがなんだかさっぱり分からん!!

でも…

いつか、すべて解決したら、俺が今居るこの東京に再び戻れるのか??

いや!!しかし……この世界の俺……一度死んでいるんだぞ??

いや!!まてよ!?

もしかして、俺の身体…ひょっとしてまだ死んでいなくて、意識だけこのとある世界にとか??そんで全て終わり又々帰る事ができるかもっ!!

そしたら……

マリオンちゃんとも…お別れなのか……

いや…嫌だ!絶対にっ!!だって、俺ッッ!!どうしたら……

……マリオンちゃん……

そんな色々な思考で混乱する光雄であったが……

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

「……ハッッ！？」

「うふ？？……」

そんな……未だに幻想が残る思考回路を断ち切るように…現実に戻される光雄…

更に今…自分の顔を…眺めながらおおいかぶさる人物が……

水色の綺麗な髪が…俺におおいかぶさり……つか…マリオン？？…にしちゃ～同じ感じじゃ……！！？

「ヒッ！？」

「うおっ！！……ああ気が付いたか…悪い悪い……貴様のその……

美しいから…つい」

「って……きみは…誰??」

そして…自分の位置から少し下に視線を戻し……目の前に倒れている二人……まっ…マリオンちゃん!!エクスマスさんっ!!

「おいっ!!おまえ……誰だ??…」

「ん??…ああすまんっ…先ほどはレディに対して……無礼を許されたい……私は、今とある事情で参上したマンスレン・オヴ・シュペーと申す者だ……」

ん??マンスレン……はて…何処かで!?……!??

「なっ!!――――――――!?」

そんな考えこんでる光雄の前で、なにやらドデカイバックに水晶を入れてる男…マンスレン……

そんな彼をなにやら…気が付いた光雄!!しかしさっきの行動といい変態さんかと!?
ていうか女装する彼も変態だが……

しかしそんな光雄に??変態!?な彼は??

「まあ…貴様と別れるのは名残惜しいが…私は急いでるのでな……このアクエリアスの涙は貰って行くぞ!!」

「って??……ハァ～……おいおまえ……それちが??ううん…それを黙ったまま見過ごすと思うか??」

「それとっ!!この俺は～ぁぁ……」

「お～と～こ～だって言ってんでしょ～が～!!いい加減気付けやゴラァァァッッ!!」

次の瞬間直ぐ様演算を開始…光雄の身体から物凄い量の粒子を放出!!
その彼にかなりビビったのか仰け反るマンスレンだが!?……

「ヒッ??き……きき…貴様っ!!常盤台の生徒のくせに…ま…魔術師だったんか!!」
って未だに彼が男と気付かないアホな奴……(汗)

しかし……かなりテンパりながらも逃走を開始する彼……

「へっ??……だから俺は男だっつーの…って??ま……待ちやがれ~!!俺の話し聞けってんでしょ~が!!」

そんな彼を慌てて追尾する光雄!!

ハァ~……マジで次から次えと……何か…俺…今日一日中走ってね~か??

又々そんなこんなで再び学舎の園を舞台にした…今度は追跡者…葛城光雄と…逃亡者…マンスレン・オヴ・シュペーとの追跡劇が幕を開けたのであった……（汗）

じ…次回へ続くっ！！

第十一話　水晶の魔術師後編だか！？…その水晶…必殺！！顔面アタックで別世

いやぁ～…

とうとう……変態的になりつつあるこの作品？？

まあ…女装主人公だし……

じ…次回……

もう…皆さんを又々巻き込みながらのかなり頓挫の予感が……

そんな訳で次回もお楽しみに～♪♪…ハハ

第十二話　科学ＶＳ魔術??とある二人の!?追跡??いや……大レース!?

いやはや……今回はかなり能力バトルっつーか??能力レースみたいな??

そんなこんなで
光学の超高密度収縮粒子砲戦記♪始まり始まり～♪♪

第十二話　科学ＶＳ魔術??とある二人の!?追跡??いや……大レース!?

学舎の園の、とある街路樹……

その夕方にさしかかる穏やかな日差しが射し込む中…その街路樹を歩く学生達…

いつものごく当たり前の風景…みなそれぞれの授業を終え、帰りにおしゃれな喫茶店に寄る者…楽しい仲間達と話に夢中になる者…

それぞれのごくありふれた下校風景……そんな中その街路樹の下ではしゃぎ会う学制達……

「そう♪それでね、その彼が来てね♪」

「うんうんっ!!それでそれで??」

「そう♪その彼に…今度…暇があったら那須高原行かないか!!ってね!!ドライブ誘われたのよ~♪♪」

「いいな～…でも外へ出るのって色々と大変何でしょ??」

「そうそう!!それなのよ～…たしか、何処かの施設で能力を無効にして貰ったりとか～…」

「何か色々と面倒くさそうよね～…ねえ!めぐもそう思わない??」

「ねえ??め…ぐ…み??どうしたの??」

「いや……な……何か向こう側……何か光りが…えっ?爆発??……」

「「えっ!?」」

そんな中、1人その”いつも”と違う事に気付く学生

更に!?

「…ちょっ!?あれ……こ…こっちに物凄い早さで近づいてないっ!?」

「「えッッ!?――――――なにっ!?」」

とまぁ～…そんな中その彼女達が歩く進行方向上の遥か先に、かなりの異常を感じ……

「「「げえッッ!?――――――!!」」」

そんな異常な変な奴等はあっと言う間に目の前にッッ!!

「ヒャッホゥゥゥゥーーーッッ!!ぽぽぽぽぽ～ん!!」

とまぁ～……意味ありげな魔〇～の言葉～??を発しながら迫り来る変出者??とその後方からも……ズドドっと!?

「まてまてまて～いっハッハァーーーッッ!?」

と又々物凄い勢いで追い掛ける女装男っ！！

「ひっ！？あれはもしかしてっ昼間の？？」

「って又々こっち来るな近づくなっつーの！！」

「な！！今度は増えてるしって！？ひぃぃぃッッ！？」

そんな一気に迫るありえね～変態二人に仰け反りつつ逃げ惑う学生達！！……

「「「き…キャァァァーーッッ！！」」」

そんな逃げ惑う学生を追いたてるどころかあっという間に追い越して行くとんでも能力な二人？？

「あ…あはは……（汗）」

「もう…何か頭痛くなってきた」

そんな呆然とする彼女達を遥か後方に置いといて…

赤いマントを翻しあたかも最高速戦士みたいな恥ずかしい魔術師??とその背後から、追尾する1人の少女??……じゃなかったとある魔法少年っ!!……（笑）

「は…速ッッ!!……ってありえねーから!!……」

そんな魔術師を全力疾走で追跡中の葛城光雄……しかし奴のぽぽぽぽ～ん??

とまぁ～……なにやら謎の術式を発動中なのか、飛んだりはたまた障害物を回避起動で除けたりすんごい早さである!!……変な意味で……（汗）

そんな彼に追い付くどころかそうとう引き離される光雄……

そんな光雄が取った行動とは??

うげげっ…何て速さだよ～…正にソ○ックってか♪

奴は恐らく…何かしらの術式仕様中か～……

俺も、飛行術式ならトラップ式持っているが…んなもの発動さ？？……

いや待てよっ？？

俺の能力って今までの経験で思ったんだが…空気中やら色々な場所から素粒子や光りを感じ取りそれを自由自在に操れるんだよな～……

だったら…粒子を用いた飛行も出来る可能性は？？

たしか、昔見ていたアニメで似たような……！！

これだっ！！よよ～しっ！！ふふんっ♪

その瞬間彼の身体中から再び光りの粒子が発生!!その粒子を撒き散らしながら足元の一転に意識を集中させつつ……

すると??さっきまで全力疾走中だった彼の体は…いつのまにやら宙に浮いているじゃ～ありませんか!?

うはっ!?

で……でで出来ちゃったっ♪すげーぞ俺の能力ッッ♪♪

「ささあ～て……これより目標を駆逐するってか♪♪」

とまぁ～……超お約束のG○粒子で飛行する??…〝あれ〟の如く今度は逆に…その魔術師に追い付く彼!!

その背後から迫る彼に気付きつつ冷や汗をかきながら振り返る魔術師??

「うげぇ～ッッ!?なななんじゃそのチートな能力はぁぁぁぁ～ッッ!?魔術か??」

「うおおおおーーーッッ！！ト○ンザ！？……おっと？？それ以上はヤバイヤバイ……へっへ～んっ♪……追い付いちゃったもんね～♪さあッッ！！レースの再開だぁぁぁぁーーー！！」

「くっ！！…この私に追い付くとは…おもしろいっ！ならばっ！！どっちが速いかッッ！！」

「「勝負だッッ！！」」

とまぁ～なにやらお互いに睨み合い……追跡劇から、いきなりレースに展望！？とんでもな展開になりつつある”アホ”な二人である……（汗）

◇◆◇◆◇◆◇◆◇……

一方所変わって、
丁度そのとんでも追跡劇がおこなわれている頃……又別の逃亡劇が繰り広げられていた…

「ハァッ…ハァッ……ええっ!?」

同じ学舎の園のとある路地裏で必死に逃亡中なのか、かなり息が荒い彼女…
すると…突然その彼女の目の前に現れた人物は??

「…ふっふっふっ……ここで会ったが百年目ってね!!この眉毛の恨み!!って??又消えた??」

とまぁ～…そんな彼女の目の前に現れた…佐天涙子……その顔は…何故か面白眉毛が書かれていた…（汗）

しかし、その彼女に逃げられ……しかし…

そんな彼女、重福省帆（じゅうふくみほ）は、焦っていた……

彼女の能力…視覚阻害（ダミーチェック）で、能力を使用した場合…まるでカメレオンかなにかのように普通の人じゃ見えない筈なのだが、

彼女が逃げる場所全てに、待ち伏せされているのである…

そんな中、その彼女に、先回りをする白井黒子は路地裏に居た……

そんな黒子は、耳元に取り付けてある通信機に手を掻け……その通信の相手…只今風紀委員支部(ジャッジメント)で、学舎の園の監視カメラに全アクセスしてあるパソコンを見る初春飾利に通信を試みるが??…

「初春??ここでいいですの??」

「はい！大丈夫ですよ♪でも…それより白井さん…」

「え??なにか問題でも?」

「それがですね～……その別の場所で……へ…変な変態さんみたいな二人が暴れ回っているみたいなんですよ……」

「へっ??」

「なな……なんですのッッ!?」

とまぁ～……なにやら、その彼女達が追う重福省帆の他にも問題が発生!?
そんな状況に??

「も…もしや、またもやあいつですの??…ったく!!次から次えと……」頭を抱える黒子であった……

◇◆◇◆◇◆◇……

所変わって色々と…てんやわんややってる街路樹通りから離れた地点…

とある公園になにやら数人の人影が歩いていた……

「まったく……何か嫌な感じがして来てみたらエクスマスが居ながら」

と…なにやらその赤髪を掻き上げながらため息をつくステイルと…

「ああ……すまない……まぁ…そこのマリオンちゃんのアクエリアスの涙は無事だった訳だから……ね♪」

「しかし…まぁ…その結果、光雄が単独で、あのもっとも危険な深紅の魔術師マンスレンを追跡……その結果彼の行方は解らずと…土御門さえ居ればあいつの魔術…理派四陣で奴の居場所が解らずも無いが…」

そんな自分の大切な水晶を盗まれながらもマリオンの心配をするエクスマス…そんなエクスマスに水晶を盗まれた事やそれを追跡し行方不明な光雄の事そんな事を色々と文句を言う…そんなステイルにマリオンは？

「ちょっとお～…ステイル～…そんな怒らなくても…ねぇ～…でも私…信じてるから、絶対光雄が取り戻して来てくれるから！！」

「でも…エクスマスさんの水晶が犠牲になっちゃったのはちょっと……エクスマスさん…そんな気を落とさないで…」

「ごめんなさい…本当私がいながら……水晶は盗まれたが彼葛城光雄が心配だわね…」

「あ…あの～…ええ～と…その水晶ってまさか…これの事ですか？？」

「「「……えっ？？……」」」

と、そんなエクスマス達の会話を、その向こう側のベンチで聞いていた人物が突然話しかけ……皆が、その人物に振り向く……

そんな、エクスマスを宥めるオリアナ……

「あれ？？……あの子は？？」

そんな彼女にマリオンは？？

「あれっ??御坂さん?何でこんな所に?それと…その水晶っ!?もしかしてッッ!!」

「あれ??マリオンさんっ♪そうその水晶……何か私がここに来る途中拾ったんだけど……もしかして…これの事??」

「そ……そうそうっ!!この水晶…私の兄…マンスレンが持ち出して…よ…良かったぁ～♪」

なんとも偶然なのかその逃亡中にマンスレンが落としたであろうこの水晶をたまたま拾っていた美琴であった……正にご都合主義?みたいな展開に胸を撫で下ろすマリオン……

そんなこんなで…無事水晶を取り戻す事が出来て…一件落着に見えたが??

「なんとか逃げ切ったですのっ!?」

とまぁ～…その場に血相を変えて突然現れた白井黒子と佐天涙子…それと何故かその捕まえる目的である重福基帆が…かなり無理をしたのか完全に雇用オーバー状態でテレポートそんなくたくたな黒子に??

「あ～黒子に佐天さん？一体どおしたの？？…って言うかその彼女…犯人の重福さんだよね…？？」

「どーしたもこーしたも
無いですのっ！！
いいですのっ！？一大事ですのっ！！お姉様達も早く逃げてくださいましっ！！」

「ええっ！？逃げるったって……」

そんな何故かそんなテンパる黒子達…そんな中よっぽど怖い思いをしたのか…もうイタズラはしませんと涙子にしがみ付きなきじゃくる基帆……
そんな様子を又々固まりボーゼンと見守るマリオン達……

そんなマリオンは、その原因が分かったのか…深々とため息をはきつつガックシと……

そんな目の前にテンパるかわいい後輩達…そして、そんな様子を見てため息をつくその他のメンバー達……そんな様子を見て美琴は、その原因を瞬時に分かってしまった……次の瞬間又々”あいつ”かと……（笑）

「ったく……こりずに……」

とまぁ～…前にもまして…その表情が更に恐ろしくなる美琴様！？その身体からは？？以前よりもまして？？かなり電気が漏れているご様子である…（汗）

◇◆◇◆◇◆◇◆……

一方、そんな恐ろしい事になっているとも知らず…その先に待っている死えのゴール地点に走る二人……

「ゼェッ……ゼェッ…こ……このぉ～…いい加減に……」

「ハァッ……ハァッ……そ…そっちこそ」

「み…見えたぞ～…って？？

「えっ？？……」

そして、ズドド…と二人仲良く??その公園に到着??

しかし…そこで待ち構えていたのは??

「「……へっ??……」」

「やはり……ねぇ～…何かと思えば又々…」

「「……げぇっ!?…」」

「アンタ等か……覚悟はいいわね♪」

「「ひっ!?す…すすすいませんっしたーーーッッ!!」」

次の瞬間…学舎の園に再び物凄い雷と…今度は二人のかわいそうな男の悲鳴がこだましたのであった……（爆♪♪）

その後…そのマリオンの兄マンスレンは？？……かなりボロボロになりながらもいつかアクエリアスの涙を又々頂きに来る！！とまぁリベンジを光雄に願いつつ退却し……ここから彼葛城光雄とそのライバル的な存在マンスレン・オヴ・シュペーの戦いは始まるのである！！

次回へ続くっ♪♪

第十二話　科学ＶＳ魔術？？とある二人の！？追跡？？いや……大レース！？

うははっ……かなりいい加減な展開で……

ま…まぁ…次回はちとほのぼの系とか？？……いや…多分この作品にかぎってそれは無理だな～…ハハ

ま…まぁ…そんな訳で
次回もお楽しみに～♪♪

第十三話　とある二人の探偵家??（前書き）

いやはや……かなりギャグ路線真っ最中のこの物語……このままアホな展開にっ??

ってちが――――――ッッ!?

そんな訳で…??

まあ…ちとシリアス的展開に??って!?……いやいや…無理かも……（汗）

つー事で
光学の超高密度収縮粒子砲戦記

始まり始まり～♪♪

第十三話　とある二人の探偵家??

学園都市第??学区、とある博物館…

いや外見は博物館だが…その内部…博物館というよりも周りは薄暗く電気は無い…

その通路らしい廊下も入り組みその先にはかなり広々とした空間が…

その空間内も薄暗く、周りにはズラリと蝋燭（ろうそく）がその空間内を怪しく照らす……

そんな空間内に一人の人物が佇む……

その人物は…ぼんやりと、ある一点を見つめ…その視線上に浮かび上がる巨大な石像…

石像というよりも石化した”なにか”に見え…まるで生きてるような、

かなり艶めかしい物……そんな巨大な石像を見つめつつ……微笑みながら口を開き…

「……ふ……まったくこいつはいつ見ても美しい…遥かいにしえから産み出されしその者に魂をささげん者はその者の全ての願いを謡わん…餓鬼…修羅…物…性…様々な人々の怨念を総て我に委ねならば…その欲深き者は…その総てを滅ぼす力となろう……か……」

その一人呟く声がその広々とした暗黒な空間にこだまする……なにかの術式か……

そんな中…その人物に近づく者が……

「ん??……何だ??」

「サラっ!!いえ…元オスマン帝国大魔導師サラ・ウーデット様っ!!……あ…あのっ!!マンスレンが失敗し…その後彼は行方をくらまし…やはり奴は裏切り者かと…奴の処分はどうしますか??」

「……しておけ……」

「ははっ!!」

そんな中その人物はその空間内の漆黒の天井を仰ぎ……ぼんやりと見つめ……怪しく嘲笑う……

「この世界…そのクリスタルに導かれし運命を持つ者達よ…今…最後に光りの者…そして、ここに総てのクリスタルが揃い……その力が集まり、存在している……それに従う者……抗う者……はたして……ふふ…アレイスター…君はこの世界に何を望む??……」

そして…又…その空間に静寂が訪れる……

……

┃……

…

同じく、

学園都市内第七学区

その学区内…とある学生寮のある一室の前に佇む人物が二人…

「たしか…この階でよかったんだよね～…」

「ん～…でもまぁ～…名札はちゃんと書いてかるから問題無いかと……あれっ??居ない…のかな??」

とまぁ～…せっかく来たのにその肝心の人物がやはり、留守みた

いで困り固まる葛城光雄と??

その後ろ側に佇む魔法少女ことマリオン・オヴ・シュペー……

そんなマリオンは??

「えっ??だったら強引にドアをぶち破って……」

「えッッ??……あ…あの～…マリオンちゃん??そ?それ…マジっ!?」

「そうッッ!!マジ!……」

「……?」

「へっ?????????……エエエエーーーーッッ!?」

ていうかマリオンちゃんってこんな性格か??

いや!こんな性格だったんか??

つか…最近段々と凶暴化してるような……まあ…それはそれで新たな…ぐへっ??って??ちがーーーーーッ!!

ヤバイ…ヤバすぎるよマリオンちゃんッッ!!

ハッ!?…もしかして……”奴”（御坂）の影響か!?いや!絶対そうだッッ!!奴のダークホースとやらが!?

ってあれっ??

「ねえ……」

「な……なにっ??」

「ドア……空いてるよ??」

「いや…それは違うと思うんだが…空いた♪っと言うよか勝手に開けた??みたいな……」

って!?入ってるしーーーーッッ!?それマズいマズいって!?

そんなこんなで結局、その学生寮の部屋に勝手に上がり込んでしまったこの二人……それって犯罪ですハイ……（汗）

「お…おじゃましま～す」

うわぁ～…この玄関と言い案外広いな～…何か…俺の居る学生寮とはえらい違いだぜ……

ん?? …何か…でも壁にベタベタと……何だこりゃ??

とまぁ～…そんなヘンテコな張り紙に近付こうとする光雄!?そんな時、突然!!

「ちょっとおお～!!触っちゃダメ!!」

「うぇっ??」

って!?あっぶねぇ～……こいつもトラップ式魔術か??

そのなにやらあからさまに怪しい貼り紙に仰け反りつつかなりビビる光雄??

……ていうかかなりオーバーアクション気味である……

「ああ……ごめんっ…」

と…かなりあせっているそんな彼に対してなにやら不機嫌なマリオン……

「だから私だけ行くって言ったのに～……ったく…あなたは魔術に対して素人なんだからっ!!」

「ぐずっ……ずみばぜん……（涙）」

「ま!光雄のおっちょこちょいは、前から知っていたけどね♪」

でもまぁ…やはり、この二人……能力者と魔術師とまぁ～妙な組み合わせだがなんだかんだで良いコンビのようである…そして、そ

んな膨れ面のマリオンに対して光雄は？？

うぅ～……なんなんだよ～……やっぱマリオンちゃん最近性格変わったな……うんうん……

そんな意味のね～事を考えていた光雄……

「う～ん…やっぱ昨日の夜の内に、行った方がよかったかしらね～」

と…又々ハズレか？？みたいな…なにやらこまりはてている彼女……そんな彼女の携帯が突然鳴りだし…その着信相手を確認しつつ電話を取るマリオン……

「あ！！電話だ……もしもし？？オリアナ～？？そっちは？？」

『私の方は、いちよう昨日調べたところを一通り見たんだけど…やはり居ないわね～…でも絶対ここ（学園都市）の何処かに潜伏してると思うんだけど……』

「う～ん……うん…やっぱダメかぁ～…私の所ももぬけの殻だったよ～…あ！！そうそう後で初春さんに調べてもらったもう一軒の資料……私にも回しといてっ♪それじゃ！！」

『はいはい…後…そのお隣さんの”彼”にもよろしくね～♪…喧嘩しちゃダメよ♪♪』

「えっ？？そそ…そんなに心配しなくても……もう～…オリアナ～…」

『うふふ……それじゃ～ねっ♪♪』

「……」

とまぁ～…オリアナが最後に言った一言で顔を赤らめて固まるマリオンだった……（汗）

そして、その部屋を物色しはじめるマリオン…

そんな様子を何げにぼんやりと見つめる光雄……

いいっ??……さ…さっきの電話絶対オリアナさんだったよな…
…つかいったいな…なにを会話してたんだ??なにやらマリオンちゃんかなり顔が赤く??
いやいや……ま…まぁ俺にゃ～関係無いかな??

と…なにやら意味不明な感じの彼…かなり鈍感かも??……いやいや…

◇◆◇◆◇◆◇◆……

そんな人探しをするオリアナ達……その事の発端は……

学舎の園の一件以来…
マリオン率いるオリアナやそして光雄…

その協力してくれているステイルや上条達と……

その他御坂達であの一件以来姿を眩ましたマリオンの兄…　深紅

の魔術師ことマンスレンを探すべく行動する事に……

そして現在に至るのだが……

その未だにさっきの電話で考え中の光雄!?そんな光雄の思考を断ち切るようにマリオンは??

「ねえ!!」

「えっ??」

「ほらっ…何を又々ぼーっとしちゃっているの??次いくよ次っ!!」

とまぁ～かなり張り切るマリオン…

「えっ??ああ……つかもうこれで終わりじゃ……って??わかったわかったからそんな目でみるなって…」

なんか…でも…以前よりしっくり来るっつーか♪マリオンちゃんと色んな意味で…かなり距離が縮まったんかな??俺…

よしっ!!がんばってその兄マンスレンを見つけなくちゃ～な♪♪

「ほらほら…又々……も～……あっ！　そうだ♪この一件探索終わったら何処か行こうか!!」

「いっ!?ままま……マジですかそれはっ!!うしっ!!さぁ～てっちゃっちゃと終わらして行こうか♪」

と、そんなマリオンの誘いに??やはりみたいに??なにやらかなりテンションが上がる光雄……

ま!この先何が待ってるか分からんが俺はこの子…マリオンを守り抜くっ!!

そんな、事を思いながら……その夕焼けにうつる真っ赤な真夏の入道雲を眺めていた……

はたして、そんなマリオンの兄マンスレンは未だ見つからず……

そして、この先に彼らを待ち受けているのはいったい何か??

そんな感じで次回へ続く!!

第十三話　とある二人の探偵家？？（後書き）

さてさて……物語も急展開な感じになって来ました♪♪

はたして？？

でもまぁ～多分無理だな……結局は変態ギャグ路線に～！？

まぁ…そんな訳で

次回もお楽しみに～♪♪

第十四話…恐怖　連続術式で?ビルを倒壊させた男!?（爆♪）（前書き）

いやあ～…今回は…シリアスの筈が??やはり流石ギャグ要素満載の主人公～♪♪
正にありとあらゆるシリアス的展開を即座にぶち壊しギャグにぃぃ～っ??
ってこれ以上はネタがぁぁ～っ!?
てのは置いといてっ!!

光学の超高密度収縮粒子砲戦記♪

始まり始まり～♪♪

第十四話…恐怖　連続術式で？ビルを倒壊させた男！？（爆♪）

ここは学園都市第五学区付近の荒れた路地裏……

先程から来た第七学区とは偉い違いで…壁のあちこちに意味ありげな落書きや…いつ乗り捨てたのかわからない錆付いたスクーター……

そんな通路の周りの壁には様々なゴミ？？の山がいたる所に積まれ……その破けたであろうゴミ袋から中身が散らばりそのゴミを……

カラスが啄む……

そんなカラス等が、何かに反応するが如く一斉に音を立てつつ飛び立った……

そのカラスを追い払いつつその路地裏の中を進む人物が二人……

「うっわ～…なんとも言えない臭いだな？？」

「本当ね…ここ学園都市にもこんな感じの場所があったとはね…」

そんな場所になんとも違和感を感じつつ突き進む二人……時間的には…既に１９：００時近く夕焼けが更に真っ赤に、その怪しい路地裏にある様々な物を染上げる…なんとも幻想的な光景である……

「な…なんか、この雰囲気……あの物陰からスキルアウトがガバァ～っと、みたいな??」

「えっ??……もっ…もう～…脅かさないでよ～…」

「あはは……冗談、冗談だって♪　まぁ…そんな奴が来た時は～?…」

「私の魔術であなたを守るッッ!!」

なんとも…かなり頼もしくも私が守るっ!!
とまぁ～光雄に言いはるマリオン…
そんなマリオンの姿に目を見開いて驚きつつ眺める光雄……

「えっ??ま…マリオンちゃん??」

「な!?…なによ～…別にあなたに守ってもらうより私の方が強いし…敵の魔術師には有効とか……あの…その……」

かなり強がりを言うマリオンだがやはり女の子…場所が場所だけに、なにやら心細いご様子で……

「ア…アハハ悪い悪い…確かに敵が魔術師だったら…そうだね……」

「えっ??…な!!そんな笑い方!!何か感に触るんだけど……

そんなしょうもない会話をしつついつの間にかその路地裏を抜け…かなり広い広場にさしかかり…その広場の先にある何かを見たように立ち止まる二人……

そんな周りを古びたある意味レトロな!?雰囲気を漂わせつつ佇む雑居ビル…

そのビルの一部にそれはあった……

正に昭和の古き良き高度成長期に建てられたであろう、県営住宅か市営住宅みたいな巨大な団地……

兄の探索…その只今マリオン達の目的地でもある団地に丁度真下から見上げる二人……

「うぅわ……何とも……これって……」

「たしかにね～…ねえ、光雄～ここ（学園都市）が出来る前…多分今居る私や光雄とかの生まれる前かな??東京都の西側にある団地だったっけ??」

そんなマリオンの質問に何か考えこむ光雄だが…何かをふと、思い出してた…その自分が今居るこのとある世界じゃ無く、生前の頃

の記憶……そんな記憶を頼りにおもむろに喋り出す光雄、

「ああ…たしかにここにあったよ!!、俺がこの街に来る前かな??噂によれば―（嘘だけど）

こんな場所に団地があったっけ……たしか、立川西街団地??だった…か…」

「ねえっ!!それっ!!当たってると思うよっ!!」

「えっ??…」

「だって…ほらっここに…」

そんな突然のマリオンの言葉にかなり驚きつつその彼女が指を差す方向を見ると??

その時光雄は、凍り付く……えっ??何で??と……

確かに、生前の俺の記憶が正しかったら…そこにあるのは立川団地だか……でも…いくらなんでも……

いや??

待てよだったらこの世界…生前に居た頃の世界…

何か……でも何か繋がりが……よくわからないが、

この一件が終わって全て解決したら、ちょっくらここ（学園都市）の外…まぁ～…生前に居たであろう数々の思い出の場所に赴くのも良いかもな……

そしたら今のこの頭の中の生前の記憶とか色々な意味での混乱も一つ一つ解れて行くかもな……

ハハ、な～んか、今日の俺……かなりテンション低いような……気のせいか??

そんな事をふと、思いつつその巨大な団地を見上げる光雄……

同じくその隣側のマリオンも見上げていたが…そんな中…夕焼けに照らされ真っ赤に染まるその団地の中の……その一部に何か動く物を発見!!

「あっ!!……」

「な…なに??、どおしたっ??」

「ちょっとっ……うんっ……光雄はここで待っててて!!」

「何だよ…誰か居たのか??」

「だったら俺もっ!!」

「ダメだって…あなたは魔術には疎いからっ！！」

そんな、セリフを吐きつつマリオンは、その薄暗い団地に呑まれるように入って行く…

えっ？？そんな俺留守番なんか！？やっぱ俺は魔術にかんしちゃど素人だが……それにしても、ねぇ～…

どーしよーー！……って！？まてまてまてよおいっ！！俺ッッ！！

そんなか弱い女の子一人であんな場所行かせていいんか？？

もちろん…そりゃー……

いくらなんでも……いいわけないだろうがぼけぇぇぇーッッ！！

うしっ！！そうと決まれば

「ま…まま待ってよ～…マリオンちゃんっ！！」

とまぁ～…暫く思考停止してた光雄だが、すかさず復帰！！その団地の中へ行ったであろうマリオンの後を追いに行くのであった！！

◇◆◇◆◇◆◇◆◇……

所変わって、その団地の七階辺りのある一室にゆっくりと侵入するマリオン……

たしか、

この辺りだったよね……でもさっきの人影……やっぱ気のせい？？かな？？

そんな、さっき見かけたであろうそんな人物が居たその部屋を見渡すマリオン……そして、そんな部屋に…何かしら感じつつ…

やっぱりね～…この部屋何か微妙に少量だが魔力みたいな物を感じるな…

「あっ！！あそこっ！！」

「ねえっ！！あなたっ！！一体ここで何を？？」

「ちっ！！」

そんな彼女に見つかり逃げる人物…

それを追おうとするマリオンだが…

ゴワッ!!となにやら次元を歪めながら迫る斬撃!!

「くっ!!」

その目の前に突然迫る斬撃に対して、杖を構えつつ両手を前に突き出しつつ防御術式を即座に発動!!
綺麗な水色の魔方陣が形成され、

グワンッッ!!と凄まじい地響きと共にその目の前の魔方陣に干渉…即座に消滅する……

更にその男の周りになにやら数ヶ所から…まるでその空間を引き裂きながら出現した何かが発生…次の瞬間!!続けて彼女に繰り出される斬撃!!

しかも今度は複数である!!

しかしそんな差し迫る斬撃に対して、杖をおもむろに振り下ろしつつ地面に突き刺し即座に式を完成させるマリオン!!今度はその彼女の魔方陣もそんな斬撃と同じ数に!!

そして、

次々にその魔方陣に吸い寄せられるように消滅!!周りからあちこちで連続爆発の花を咲かせる!!流石世界有数の精霊式魔術師の一人マリオンである!!
…しかし…こんな強かったか??

「その術式…あなたもしや…ベルギーの??…でも無駄よ♪私の精霊式魔術はそんなありとあらゆる組合せでも瞬次解読…そして消滅させるんだから!!」

「くそっ!!俺の術式がかき消されただとっ!?」

「だから…もう降参して……あなたはマンスレンの知り合い??それとも??」

「くっ!!誰がそんな事言えるかっ!!…くそっ!!こんな小娘にこの俺が…舐められてっ……たまるか〜!」

そんなセリフを吐きつつその黒いローブのそでから凄い数の小さな紙切れをバラ撒き散らしつつ逃走

「ち…ちょっと～待って!?」

「あっ!!」

そんな彼を追いかけようとする彼女だが!?
突然立ち止まり自分の足元に散らばる何かに気付き…

「この紙……まさかっ!!」

うわっ!!あいつ時限発動式やらトラップ式??なんかめちゃくちゃにっ!!

あ～あ…もう無理か…結局逃げられちゃったな～…でもあいつ…
…ま…まぁ～今度会った時聞き出せばいいか……

まぁ～…今は、外に待たしている光雄の方がなんか心配かも…あいつに出くわしていなければいいんだけど光雄は能力者だったら問題ないんだけど魔術師には……そうと決まれば、

えっ??……あっ……足音ッッ!?まさかッッ!!

そしてそんなマリオンの予想が的中!!

やはりと言っていいのか突然その部屋に駆け込む別の人物が??

「マリオンちゃん!!どおしたっ!?大丈夫だったか??」

「ちょっ!!……み…光雄~!!勝手に動いちゃ……あれほど……って!?」

更にそんな地面に無造作にバラ撒かれた時限発動式魔術の紙切れを踏みつけ
パキッ!!と!?

「へっ??」

「あっ!!」

しかも、何をとち狂ったか後退りしつつ、かなりの数を踏みつけ

まくる哀れな彼!?

「えっ?? えええええーーーッッ!? ち…ちょっとぉ~…そ…そんなに踏み潰したら……」

そんな光雄を冷や汗たらたらな表情で見つめるマリオン……あちゃ~…やっぱりこいつはやってくれると言わんばかりにじと眼で睨むマリオン……(汗)

そして、そんな光雄の足元から…あちこちで地響きが??

「ち…ちょ!? ままま…マリオン様?? こ…これはどういう??」

「もう……知らないッッ!?……自業自得よ♪諦めなさいっ……」

次の瞬間まるでダイナマイトでも仕掛けるが如く音を立てつつ一つの団地が崩れ落ちた……?

その後々語られる…その突然の団地の倒壊事件…その犯人は、正

に彼葛城光雄だったのは誰も知らない……（爆♪）

じ…次回へ続くッッ♪♪

第十四話…恐怖　連続術式で?ビルを倒壊させた男!?（爆♪）（後書き）

あはははは♪♪

やはり結局はこんなオチにぃぃ～ッッ!?

もうこの主人公…完璧にシリアスは無理かも…ｗｗ

まぁ…次回は??そんなアホな主役葛城光雄にとうとうマリオン様が激怒!?みたいなっ??いやいや…

じ…次回もお楽しみに～…ハハ♪♪

第十五話　魔法のアイテムは??むやみやたらに人には見せてはいけないよ♪♪

いやあ～…今回は??ぐだぐだっつーか??

かなり、ベタなパターンです…ハイ……（汗）

まぁ…そんな感じで今回はシリアスはちと休憩と言う訳で♪

光学の超高密度収縮粒子砲戦記♪始まり始まり～♪♪

第十五話　魔法のアイテムは??むやみやたらに人には見せてはいけないよ♪♪

ここは、第七学区内、とあるファミレス

【ｊｏｓｅｐｈ- Ｓ】

まぁ～…なんつーか……”ｊｏｎａｔｈａｎ- Ｓ”…とか??…”Ｊｏｌｌｙ Ｐａｓｔａ”とかは突っ込まないよーに??

そんな店内……窓際のテーブルになにやら相対するように座る二人組……

その内の一人只今常盤台の制服に身を包んでいる魔法少女ことマリオン・オヴ・シュペーと、

さらに!?その反対側に座る!?

黄色いリボン!?白いブラウスに何故か黄色いフリフリスカート??に身をつつむ魔法変態こと葛城光雄（笑♪）

なにやらそのなんともま～怪しげな…まるで…とある魔法少女アニメのマ○ちゃんか～!?みたいな…?

（注：ファンの人すんません）

そんな服装のかなりかわいそうな彼、そんな彼葛城光雄は？？只今周りの視線を気にしつつ？？……例えるなら…とある市街地で…いつ何処から敵兵に狙撃されるかビクつきながら潜む兵士のように？？…（汗）

ディナーメニューを眺めていた……

「あ…あの～……この新しい対魔法防御装備なんすが、いくら何でも…」

そんな事を言いつつ更に？？周りをキョロキョロと見回す光雄…

さすが時間的にゃ～もろディナー時らしく周りには、学生達やらその他の家族連れとか様々なお方が夕食を楽しんでいるんだが……

やはりと言っていいのか、周りの方々がチラチラと？？

「あの～…ま…マリオン様？？ねえ、聞いてます～？？さっきから一体何で俺だけこんな格好なのでございましょーか！？ねえっ…もしも～し……」

そんなひそひそ声でその相対するマリオンに質問する光雄だが、
そんなマリオンは？

「うんうん……ここと…あれと、後明日に、さっきオリアナがくれたこの地点を探索かな……」

と、そんな光雄に気付いてんのか気付かないのか、なにやら無視のご様子で……（笑）

そんな、只今無線封鎖状態のマリオン様に、再度通信を試みる光雄だが！？

「ねえっ！！あの～っ…聞いてますか～？？だ……だからそのふ！？……」

「う・る・さ・いッッ！！気が散るから少しはだまってろッッ！！あなたが散々時限発動式やらトラップ式の魔術にひっかかるからいけないんでしょうがっ！！っとにもぅ～…おかげであなたのせいで私の霊装ボロボロなんだからねッッ！！」

「うぇっ？？……」

「あとっ！！これッッ！！そんなホイホイ間抜けにひっかかるあなたのためにエクスマスからわざわざ買ったんだから！！文句言わな

いッッ！！…分かった？？」

「…ひ…ひゃい……ずびまぜん……（涙）」

「っとにも～…素人なんだから……」

「うぅ……？」

とまぁ～かなりご機嫌斜めな様子である彼女…

あ…あはは、やっぱそうですか…そうですよね？？

”そんな事”よか明日の事っすよね～……

あの惨事を引き起こした張本人は俺だし…

分かってるさ♪分かっているとも……うんうん……も…もう帰りたい……（涙）

とまぁ～なにやらマリオンに更に怒られかなり凹む光雄だが？？

「んっ！？……」

ふと…なにやらかなり嫌～な視線を感じ！？

「ハッッ！？……だっ…誰かが見ている！？」

「えっ？？」

そんな、突然自分達に向けられた鋭い視線に冷や汗を流す光雄…
そんな光雄にマリオンは、もしかして新手の魔術師かっ！！
みたいに只今足元に置いてある杖をそっと掴み！！

「光雄……いいから、悟られないよう、冷静に…」

「ああ…」

そんな中…二人に緊張が走る…嫌な汗がツン…と背中に伝う

そんな中…マリオンはそっと…その視線の主に悟られないよう、

冷静に光雄の後ろ側を除くが??…そんな表情は段々薄れつつ逆に今度は呆れ顔に??

「ハァ〜…ったく……」

「へっ??」

「ち…ちょっと〜…光雄ッッ!?こっちまで勘違いしたじゃないっ!!」

「えっ??な…だ……だからっ…俺の後ろっ!!…さっきから変な視線を感じてひょっとしたら」

「それでっ??」

「だ……だから…うぅ……」

「ま♪別にいいけどねっ!!でも…さっきからの視線って…もしかして……”あれ”の事??」

とまぁ～…そんな呆れるマリオン……しかし…その”あれ”っつーその視線の原因を指差し……

そんなマリオンが指を差してる方角を今度は別の意味で恐る恐る見ると??

「ヒッ!?」

そんな光雄の表情は??一瞬凍り付いた!!

そんな、光雄達をなんとも艶めかしい視線で眺めるなんとも怪しい集団を…

その集団の一角に頬を赤らめて見つめるとても不気味なスキンヘッド……

多分絶対にマリオンじゃ無くその魔法少女みたいな姿の光雄に対して見つめる彼……

うげげッッ！？き…気持ち悪ッッ！？だからこんな格好嫌だと言ったのに～ｗｗ

とまぁ～…やはり、この二人……かなり良いコンビである……別の意味で…（笑）

◇◆◇◆◇◆◇◆◇……

そんな二人が只今そのファミレスで明日の探索の相談で、お茶をしている頃…なにやらお約束というか……新たな脅威？？…もといっ！…新たなメンバー二人が？？

「ちょ！？お姉様ッッ！！いくらなんでも？？」

「大丈夫♪大丈夫だって♪♪ほら…早くっ置いてくよ」

「……うぅ……仕方ありませんわね…」

とまぁ～その只今光雄達が居るファミレスに又々違う用事があり

…ある情報を聞き出すべく来ていた…そんなこんなでいざ侵入……
そんな黒子は??

「はて?…さきほど初春達が言ってた集団は??」

と、何かを探すべく店内を物色しつつ侵入する黒子達だったが??…

しかし!!…そんな見渡している黒子達になにやらその店内の一角に??…かなりエグい物を見てしまったのか…そこで突然立ち止まる彼女…!!

「ひっ!?」

「……ねえ黒子??」

「……」

「どしたのっ??」

そんなその場でなにやら固まる黒子を眺める美琴……

「ハッッ？？…お姉様ッッ！？」

「あれは一体！？…何ですのっ！？…」

と…かなり見てはいけない物を見てしまったのか、そんな黒子が眺める目線を恐る恐る見てみると？？

「いいッッ！？」

「なッッ！？……なななんじゃありゃぁぁぁ～！？」

美琴は見てしまった…その広い店内…その一角に座るとある魔法少女ことマ○ちゃん……もといっ！！…そのヘンテコ少年光雄を！？…

「あはは……又々なんちゅう格好を……」

そして、やはりと言って良いのやら……その隣側に固まる黒子を連れながら、そんな姿の光雄に接近…接触を測りつつ接近する美琴であった……（笑）

◇◆◇◆◇◆◇◆◇……

一方、そんな新たな脅威（美琴）が差し迫りつつある事も知らずのんきにコーヒーを飲みつつなにやら色々と調べているマリオンを眺める光雄……

「なあ……」

「ん？？なにっ！？用があるならさっさと言いなさいッッ！！っ…」

「ごめん……そう、その夕方マリオンちゃんが出くわした…たしか

ベルギーとか??」

と、突然の光雄の質問になにかを思い出したかのように反応するマリオン…
そして、その表情も段々と、真剣な物に…そして、

「ん??そう、そのベルギーの魔術師……その昔から伝わる術式で…その繰り出される斬撃はね、そもそもその国特有の分厚い氷壁を切り裂く為の技で、その民族特有の魔術なの…」

「民族特有の??」

「そう!!でもそんな人が何で、ここ（学園都市）に、しかもあんな場所……」

「何か、多分そのベルギーのあいつの他にも、様々な国の人達が今回の事件に関係してて既にに侵入して……潜伏していると思うんだけどね～…」

そんな、下を向きつつ思い詰めたようなマリオン…そんな悩むマリオンに光雄は…

「だ…大丈夫だってそんな大げさに考え無くても、俺も…いや俺達仲間が付いてるんだ!!だからさ～…一人で悩むよか、皆で悩もうぜ♪」

「う～ん…うんっ!ありがとうね♪とにかく今は、お兄さんの探索だね……」

「あ!!あと、そうだ…光雄にこれ…忘れてた」

と、そんな事を言いつつ、いつの間にやら持っていたバック??をテーブルの上に置きゴソゴソと??……て言うかそんなバック持っていたか??

そして、何かにんまりしながらその光雄に渡すプレゼントみたいな袋を勢い良く取り出すマリオン…

「ジャジャーン!!はいっこれっ♪♪」

そんなマリオンの表情を眺める光雄……ああ…こんな楽しそうな笑顔も見せるんだな!?と……

「ねえねえ♪開けてみてよ♪」

そして、そんなニコニコするマリオンを横目に袋から何かを取り出すと??

「で??どおっ!?」

「うげげッッ!?もっ!!もしやこれはッッ!?」

その袋から出したそれは、かなり謎めいた指輪である……

そんな指輪をマジマジと眺める光雄……なにやら只ならぬ編な予感が!?

ち…ちょっと……こ…これって??

もしかしてもしかすると??いやいや待てよおいっ!!

そんな俺達……むふっ♪♪むふひははははッッ!?

ハッ!?いやいや待て…冷静に考えても見ろ…多分こるは何かのアイテムとか??マジで??でも指輪だし……むへへへｗｗ……

って??ハッ!?

「ち…ちょっとぉ〜…」

「何か…気持ち悪いんだけど……勘違いしないでよね??……それっ!!とりあえず指にはめてちょうだいっ!」
「うぅ……ふぁい……」

そんな勘違いか??みたいなかなり凹みつつ指輪を左手の人差し指にはめる光雄……

「こ…これでいいんか??」

「そう!!それで私も同じのはめてるんだけど…私みたいに、手を広げてみて…」

そんなマリオンを不思議に思いつつ同じく手を広げる光雄…

「そう、そしてっ!!目を閉じ…無心に…空気中に漂う自然な感じの空気かな??
それを擦りながら燃やす感覚を感じながら……こう!!」

すると!!そのマリオンの手の平にまるで発火能力者（パイロキネシスト）のように、小さな炎が発生!!そんな様子を見つつ驚きの表情の光雄……魔法??いやっ!!これはッッ魔術ッッ!?

「そう!!こんなアイテムとかも貰って来たの…これなら、能力者

のあなたにも関係無く使用出来るし…対魔術師の護身用にもなるし…」

そんな、まか不思議なアイテムを見つつ光雄は気が付いてしまった！！

いや…これって??このアイテムって??やっぱ”あれ”ですか？”あれ”でしすよね～♪

ズバリ！！『（映）魔〇使いの弟子』！？…ドベシッッ！！

「ぼふおっ！？」

「アンタねぇ～……それ言うたら殺すッッ！！」

「ヒッ！？」

て言うか、やっぱ当ってるから…マジヤバイからｗｗ…色んな意味で……（汗）

とまぁ～訳分からない内にそのアイテムは何故か没収され??

「でも…あなたみたいな能力者でも唯一魔術を使用出来るアイテムだったんだけどな～…」

「いや…それかなり無理があるから……ハハ」

「だったら、ハイこれっ♪♪」

て??今度は何だ??みたいな再び妙な魔法アイテムを貰う光雄

……

「いや…もう俺…魔法使いでも何でも無いんだけど……今度は…なにっ??」

「そう!!だったらそんなあなたにこれっ!!この笛は…魔物とかを呼寄せる為の……」

「いや…もういいから……ていうか…これ以上は??その内”ポー○ョン”とか色々とヤバイ物が出て来るような…（汗）」

とまぁ～…そんな、まか不思議な事をやっている二人をさっきから遠くで観察してる人物が??

その人物達が急接近のようである……

「ねえ……マリオンちゃん??」

「な…なによ!!このアイテムに又ケチ付ける気??」

「いや…そうじゃなくて後ろ後ろっ…」

「えっ??」

と…なにやらさっきから光雄が指を差し…その方向を振り向くマリオンだが??

「えっ??」

「ええ～と……さっきからの道具…気になるんだけど」

「えええ～っ??」

「こんばんわ♪マリオンさん♪♪」

そんな二人の前に突然現れた二人組……

それになにやらあたふたと!?その机の上の道具を慌てて隠すマリオン…??

そんなのお構いなしでそんな魔法アイテムに??目を輝かせる美琴様が??

そんな突然の来訪者に色々とヤバイ物を見られ…なにやら嫌な予感がする光雄と??

果たして、こんな混乱状態(カオス)の二人……この先どうなってしまうのやら!?

無理矢理だが…次回へ続くッッ!!

第十五話　魔法のアイテムは??むやみやたらに人には見せてはいけないよ♪♪

いやいや……お約束な展開だな～…うんうんっ♪♪

で??こんないい加減でいいんか!?

ま…まあ次回も続きと言う訳で……同じく??

いや!!シリアスにするさっ!?

じ…次回もお楽しみに～♪♪……ハハ

第十六話　知ったかぶりの自慢話しも迂闊にべらべら喋ると!?とんでもない自

アハハ……（涙）

今回は…もう完璧にカオス状態かもです……

まぁ…そんな感じで
光学の超高密度収縮粒子砲戦記
始まり始まり～……ハハ♪♪

第十六話　知ったかぶりの自慢話しも迂闊にべらべら喋ると!?とんでもない自

只今光雄達がいる日本国から遥か離れた国――――

――ドイツ、世界有数のかの美しい街、ドレスデンその王宮の近く、そこに幻の魔法都市ハンディがある、そのハンディの更に最南端に佇むとある教会、その教会を経営する神父シャルンホルスト二世その彼は、かつて…若かれし頃、あの伝説の化物、深紅の龍（ドラゴン）と戦いそして、倒した最強の魔導師としてその名を轟かせた伝説の魔術師でもある!!そんな彼の息子、

レイヤー・オヴ・シュペー…彼はその育ての親でもある最高の魔術師の指導の元その教会を受け継ぐ後継者になる筈が、

何故かそんな物は関係ないと自由気ままに今日も魔法学校をさぼっていた…

――――ドレスデン郊外のとある平原――――

「――――――雲か――」

「雲は、いいな、自由気ままで、それに引き換え俺は……」

――――只今そんな、彼、レイヤーは、その平原で草枕で仰向けでぼんやりとそのゆっくりと、自由気ままに流れる雲を眺め、一人呟いていた。

そんな、寝そべるレイヤーの前に突然別の人物が…

「よっ♪こんな所で又サボりかっ??」

「あん??、何だ、ルチアか…あれ?アンジェネちゃんは??」

とまぁ～…そんな、只今サボり??中のレイヤーに話し掛ける一人のシスターが??

「ええ…ちょっと今回は、私だけなんだけどね…そうそう、レイヤーさあ～明日、朝の便で日本国に行くんだって??」

「ん??そのつもりだけどな～……あの頑固親父がちょっと……ね♪」

「そっか……たしかお兄さんと妹さん…連れ戻しにだっけ??」

「ん??……まあ…そんな感じだけど……よっと!!」

そして、そんなシスターとの会話中に突然勢い良く立ち上がるレイヤー、

そして、そのシスターに向かい合い更に話し掛けるレイヤー……

「そんな、おまえ達は、何時イタリアに帰るんだ??」

「ああ?…うん……アニェーゼ様に聞いてみないと…かな??」

「そうか~……あっ!!そ~言えば、アニェーゼに最近会ってないな~…」

と、そんな、何かをふと思い出しつつその空をぼんやり眺めるレイヤー…そのアニェーゼと言う人物に、なにやら以前から色々とあったようで……

そんなレイヤーに対し、その黒服のシスターことルチアは??

「いや…多分、会わない方が……あと…そうそう、これ!!」

とまぁ~…いつの間にやら持っていた、小さな袋を袖から取出し、それをレイヤーに渡すルチア…いったいその袋の中身はなんなのか??

「ん??何だこれ??」

「日本に行くんでしょっ??そしたら、このアイテム…妹さんに渡してほしいんだけどな…」

とまぁ～…そんなまか不思議な袋…やはり魔法アイテム??なのか??

「ん??……まぁ…ついでだし、別にいいよ♪」

「ありがとう～♪♪さっすがレイヤーッッ!!あっ!!後向こうに着いたら、妹さんマリオンにもよろしく言っといて…」

「ああ!!…んじゃ、またなっ♪♪」

と、そんな事を言いつつその平原から立ち去るレイヤー…

そんな、レイヤーの後ろ姿を眺めつつ見送るルチア……

「レイヤー・オヴ・シュペーか…」

――そんな、広い平原で只今その向こう側に小さくなりつつあるレイヤーを眺めながら一人呟くルチア――かつてそんな彼女達のような似たような光景も過去に…その場所で……

そんな、ほんの小さな出来事、その出来事もその街の歴史のほんの小さな1ページにすぎない――

――――その穏やかな暖かいそよ風がその長い金髪をなびかせながら……ふと、一人のシスターが佇む…その平原の向こう側…深緑の森がその地平線に続き…その遥か先には、チラホラと見えるオレンジ色の建物の屋根――――――――

――――ここは、美しき街ドレスデン…その美しい街並みもかつて、いくつもの世界大戦にその場所は、炎の業火に焼かれた曰く付きの土地――――――――

そんな、土地で――――

――――

――――

――――

――――

―――

―

所変わって、ここは日本国…その日本国の関東地方……その西側に位置する一つの街……

―――――学園都市―――――

――――第七学区付近、とあるファミレス、

そのファミレスに只今食事中だった、ある怪しい集団の前に立ちはだかる一人の勇敢な??魔法少女巴〇ミ??……じゃなかった……魔法変態こと葛城光雄と!?その相対するように向こう側からなにやら……

「あん??…誰だ?お前」

「い……いいや～ええ～と……俺はっ??じゃ無かった…私は…」

そんな、なにやら冷や汗たらたらな彼……そんな彼はちらっと…
まるで助けてくれと言わんばかりに??その真後ろを振り向くと??

とても恐ろしい形相で、速くやれですのっ!!と睨み付ける白井黒子が??

ハァ～…わかりましたよ……やりゃ～いいんでしょ??やりゃ～…
マジもうヤバイ……限界かも…

そんな思考を断ち切るように??その集団の一角のとても不気味なスキンヘッドは??さらに頬を赤らめて??

「あっ!!やっぱりマ○さんっすよねぇ♪俺は昔からファンで…」

「ええっ??……そそうなんだ……へへ…?」

って??うげぇぇ～…な…ななんなんだこいつは??さそってんのか??やっぱさそってんだよねぇ～…やべぇ…マジ…俺、今までの人生の中でこんな生命の危機を感じたの初めてのような!?いやいや…

とまぁ～…そんな冷や汗たらたらな彼…しかしそんなのお構いなしでなにやらその集団のあやしい彼らは??

「おい……よくよく見てみると、なかなか…」

「だろ～!?やっぱ魔法少女最高や～ｗｗ」

「いんや…俺としちゃ～…そこの○ミちゃんよか、ま○かちゃん…かな??」

ウヒィィッッ!!……ややや、べぇ…ちょ??俺逃げてもいい?逃げてもいいんだよねぇ～……マジ超逃げたいんだが……

と、更に超悲惨な表情でじと眼で黒子に訴いかけたが??

そんな黒子は??

「ほらっ!!今ですのッッ!!速く聞き出すですのッッ!!」

とまぁ～…更に手に汗握るしまつである……

「アハハ……（涙）」

そんな、とある情報を聞き出すべく、その集団に一人無謀にも突っ込んで行った、なんともかわいそうな彼……

何故そんな状態になったか??と言うと??

◇◆◇◆◇◆◇◆◇……

数十分前……

その店内の窓際の座席には??只今、その机に置いてある道具の説明をする魔法少女こと、マリオン・オヴ・シュペーと??

その隣席でまるで子供のようにうんうん♪♪と、その怪しげな道具に夢中の!?御坂美琴……

更に、その机を挟んで相対する座席には??　そんな、美琴を只今呆れ顔でため息をつく白井黒子、その隣席で、なにやら冷や汗をかきつつビクつく魔法変態こと葛城光雄が座っている……

「ねえ……ちょっとあなた……」

「いっ??」

そんな、なにやら眉をしかめつつ複雑な表情で睨む白井黒子…そんな黒子に対して、

ヤバイ…色々ともしやッッ!?バレたか??と言わんばかりに、ビクつく光雄

「ええ…っと～…し…白井さんっ??ここれには深～い訳がありまして……ハハ」

「はあっ??あなたに名乗った覚え…無いんですけど??」

「へっ??……」

って!?～やべぇ……しまったッッ!!……俺は昔から知ってるが、この白井さんは、未だに自己紹介もして無いんだった～ッッ!!

とまぁ～…そんないきなり墓穴を掘るまぬけな光雄だが…そんな光雄に対して黒子は??

「まぁ…普段から風紀委員（ジャッジメント）の仕事をしてる私とかは、知らない人も居ないようですし…」

「うぇっ??そ…そそそうっすよね～……ハハ」

ふぅ～……何とか誤魔化せたが危ない危ない……

「所で……あなた、この前身体検査（システムスキャン）中に逃げ出した…たしか、光学使い（プラトニックマスター）ですわよね…」

「えっ??ぷらぷらとん??……！?」

「えっ??」

「ええッッ!?あなたっ!!まさか自分の能力自体分からないんですのッッ!?
ったく……これだから…」

と、いきなり自分の能力名を言われ、ヤハリと言っていいのやらそんなもんは当然知らない光雄…
かなりテンパるが??

「えっ!?…いいや…その…ええ～と…プ…プラスチックス??…」

「ハァ～……だ・か・らっ!!いいですのッッ!!あなたは光学収縮装置で略して光学使い（プラトニックマスター）!!光りとか素粒子を自在に操れる能力ですのっ!!って??ちゃんと先生から聞いてますの??」

「そ…そそうだっ!!思い出しちゃったなぁ～♪♪……なんて……
ハハ」

「まったく…分かって言っているとは思いますけど……」

「うぐっ……別にそんなむきにならなくても…」

「自分の能力くらいちゃんと把握して下さいましっ！！…ったくそんなへらへらして、いいですのっ！？お姉様もそうですけど…あなたも一様はＬＥＶＥＬ５になったんでしょうし……ＬＥＶＥＬ５としての自覚がなって無いですのっ！！」

「は…ハァ……」

「まったく……あれから常盤台に戻ったら大騒ぎでしたわよ？？能力判定後突然姿を暗ました幻のＬＥＶＥＬ５……ひょっとしたらぁ～？？魔術やオカルト関係の奴らかッッ！？なぁ～んて…かなり有名人ですのよ？？……まぁ別にあなたの事ですし関係ございませんけど…」

とまぁ～…そんななにやらその常盤台中学に、良からぬ噂の都市伝説を造ってしまったなんともまぁ～お約束な彼……別の意味でさすがである……（汗）

そんな、先ほど黒子に言われポカーンとなんとも間抜けな彼だが…その彼になにやら黒子は??更に妙な相談を持ちかけるのであるが??

「はて??そんな事よりもそう言えば、ここに来る目的があったのですけど……あちらに居るお姉様はもう既に使い物になりませんし…」

と、そんな黒子の一言で気が付いたのか、さっきから忘れていたであろう相対する席に座る美琴達を恐る恐る見ると??

「そうそう♪そんでこうすると♪ほらっ!!」

「わわっ!!出てきて出てきたッッ♪♪凄い凄いっ!!でもこれ可愛い~♪♪」

もう……既にマリオンの魔法のアイテムの怪しげなマジカルパワーで??なにやら手遅れのご様子である……別の意味で…??

「アハハ……(汗)」

「で??あなたのその格好……」

「えっ??な…なにっ??」

と??かなり不敵な笑顔で睨むように見つめる黒子様??

そんな変態??みたいな意味ありげな黒子に見つめられ…

いいッッ!??ななんだ??俺が何か又々しでかしたんか??と

まぁ～……冷や汗たらたらに仰け反る彼だが??

そんな彼の更に向こう側…そちらのとある集団に、なにやら目的

がお有りのようで……

「ふむ……所で、あなた、幻想御手（レベルアッパー）と言う言葉はご存知なくて??」

「えっ??」

と、突然そんな突拍子も無い事を聞かれ、暫く考え込みつつ、何

かを思い出したかのように、ああ!!あれかっ!??とまぁ～気が付

く光雄であるが??

「ああ♪知ってる知ってる♪♪あれですよね♪

一件只の音楽ＣＤ…しかしっ…それを仕様すると、ズバリ！！ＬＥＶＥＬが上がるってアイテム！！…うんうん♪♪知っていますとも…」

「へっ??なんですって??」

「そうそう！！そんな便利な魔法みたいなアイテムだが…所が??ギッチョンチョンッッ！！
そんなん仕様した奴らは…その副作用で……実は…意識が無くなるっ…とまぁ～…そんな怖～いアイテムでぇ～……って??」

「……」
（注：ポカーンとしてる黒子）

「へっ??」

「……??」
（注：更に口をパクパクしてる黒子ｗｗ）

うげぇぇ～！！ややっべ！！ついつい自慢げに！？

たしか…これって??もしやッッ!?
……ハァ〜……そうだった…あの向こう側の怪しげな集団…更に今ここに偶然居る御坂さんと白井さんッッ!?……ましてそんな白井さんが俺に問い掛けた幻想御手!?

うげげッッ!?やっべ!!
思わずぺらぺらと〜!?
どどど〜しよ〜……（汗）
もうダメダメだぁぁぁー……

とまぁ〜…そんな彼は??隣席の黒子をなにやら謎の再起不能状態にし!?…更になにやら自爆したらしく…うがぁ〜……と頭を抱えブンブンする始末っ!?

……そんな怪しげな様子に周りの客達もなにやら冷や汗を流しつつ何事かッッ!!みたいにザワザワと!?

今正に!?……混乱（カオス）とかした店内であるが??

そんな状況に流石にお向かいのマリオン達も気付いたらしく??

「ち、ちょっと〜…光雄っ!!今いい所なのに」

「ったく……黒子っ！！さっきからアンタ等はうっさいっつーの！！」

「って??黒子??ねえ……って言うかアンタも…どしたの??」

とまぁ～…そんなただならぬ状況の二人に流石の美琴達もさらにテンパる始末……（汗）……まぁそんな状況にしたのは彼だが…

◇◆◇◆◇◆◇◆◇……

数分後……

「ふ～ん??で??その幻想御手（レベルアッパー）にかんして、べらべらとねぇ～…」

「そうですの……でも…」

「まってっ！！……て言う事は??アンタ！！その推理力……凄いじゃないっ！！」

「へっ??……」

「まぁ～…たしかに、聞いてみてまさかッッ!?と思わずテンパってしまいましたが……でも彼の推理はたいしたものですわね♪
そうだっ!!あなたっ!!その推理で探偵になりなさいなっ!!」

「うぇっ??……いい…いや～…そりゃ～どうも…ハハハハ」

ううっ!!ささ流石は御坂様ッッ!!この場をうまく取り仕切り……ハァ～…一時はどうなる事かと、

でも何とかバレずに……次回からはマジで気を付けねば…だな……ハハ♪

とまぁ～…なんとかその場は、上手く誤魔化せホッと胸を撫で下ろす光雄であるが!?

「えっ??白井様…今なんと??」

「だ～か～ら～…聞いてませんでしたの??」

「そうそうっ♪♪」

「だからっ光雄～！！御坂さんもあんなに褒めてくれてるんだしっ！！そのあなたの某探偵さんも真っ青な推理力であいつ等から聞き出すのっ！！」

「なっ！！何でこうなった??」

っていうか…マリオンちゃんまで奴等の味方に……

いったい俺の何処が……ハハハハもうやぶれかぶれだッッ！?

「よよよぉ～しっ！！この私こと葛城光雄の推理で解決してみせるさっ！！じっちゃんの名の元にッッ！！……ハハ」

「凄い凄いよ光雄～♪♪何か尊敬しちゃうかもっ！！」

「まぁ……ここは、アンタに譲ってあげるわね♪」

「流石ですのっ♪♪」

「ハハハハ……ま…まっかせなさ～いッッ！！で…では…行って来ちゃお～かな～♪♪……」

「うんっ♪♪行ってらっしゃ～い！！」

とまぁ～皆さんにかなりよいしょされ？？いざっ！！聞き込みに、1人の名もない探偵もどきがその集団に聞き込みにおもむくのであるが？？

はたして…そんなにわか探偵もどきの彼…（バカ♪）は？？本当に大丈夫なのであろうか？？

なにやらその後すんげ～頓挫の予感がするのであるっ！！

又もや？？無理やりだが……

次回へ続くッッ！！

第十六話　知ったかぶりの自慢話しも迂闊にべらべら喋ると!?とんでもない自

うはっ！！

もうぐだぐだを通り越し超ギャグ的な展開やな～……（汗）

いやいや…

まぁ…次回も同じく（又かぁ～！！）似たような感じで……（汗）

じっ…次回もお楽しみに～……♪♪

第十七話　例え心に思った事でも、思わずベラベラ言ったら、とんでもない事態に

ハハハ……

ま…まぁ～今回も、前回の続きと言う事で……（汗）

て言うか、いったい何時までこんなぐだぐだギャグパートは続くのやらっ！？

とまぁ～……まだまだファミレス編続きますっつー事で♪♪

光学の超高密度収縮粒子砲戦記♪

始まり始まり～♪♪…ハハ

第十七話　例え心に思った事でも、思わずベラベラ言ったら、とんでもない事態に!!

――ここは、未だ第七学区内…とあるファミレス

その店内で、只今一人の若き勇敢な、なんちゃって探偵擬きが、とある情報を聞き出すべくそのある集団に聞き込みを開始する、

そんな、彼に何を期待するのか只今その彼の仲間とその他の友人達が手に汗握り、そんな様子を眺めているのであるが、はたしてっ!!

「ねえ??黒子??」

「なんですの??」

「なんかさ～…さっきから気になるんだけど…あいつさ～…幻想御手（レベルアッパー）の情報を聞き出すのよね～…」

とまぁ～…只今その幻想御手を、聞き出すべく、その集団に一人突っ込んで行った彼…しかし、そんな彼等の会話を聞きながら、なにやら疑いの眼差しで見つめる美琴様と?…

「はて??たしかに、さっきまではそれらしからぬ事を会話してたと思うのですが…気のせいですの??」

とまぁ～…黒子様までそんな美琴の質問に眉を顰めながら、そんな彼を疑い初める始末である……そんな状況の中…もう一人の人物が!!

「う～ん…どうしたのかしら～…なぁ～んか～…さっきから魔法使い?とか、魔法少女がどうたらとか、全然関係無い事を言っているような気がするのだけどね～…」

とまぁ～…そんな二人の疑いに更に拍車をかけるように喋りだすマリオンちゃんっ!!……っておいっ??魔法少女はアンタだろ♪

「はぁ～…さきほどのあの真実を付いた演技はいったいどうしたんですの…」

と、かなり期待を裏切られたようにため息をつく黒子だが…

「ん??はて、いったいなにやら??なぁ～んか、いつの間にあいつらの座席に座り初めてなにやら注文しはじめているのですけど…マリオンさんはどお思いですの??」

そんな、聞き出す所かとんでも無い事態になりつつあるその光雄達と集団を更に、眉をしかめながら質問する黒子だが…そんな質問に対して、マリオンは身を乗り出し、その向側の光雄達を眺めるのだが!?

そのマリオンはと言うと??

「どれどれ~??…わわっ!!本当だっ!!…まったくバカ光雄っ!!私、行って来ようか??」

「いや…それはちょっと!!お待ちになってっ!!…でも…う~ん…はて??何か彼に作戦でもあると思うのですが……」

「……ったくなにやってんだか…」

と、そんな黒子達になにやら反応しそんな彼等をさらにマリオンの上に身を乗り出し眺める美琴だが??…なにやら、深々とため息を吐く有様である……

「えっ？み…御坂さん？？」

「…あれっ？お姉様？？どうなさいました？？」

そんな彼等を眺めながら少し様子がおかしい美琴だが

「ねえ黒子？？それって？どう言う事なのよ…」

そんな状況になにやら驚いたような表情の美琴だが！？、なにやら？？そんな彼のふざけた態度が感に触ったみたいで、いつの間にか怒りの眼差しに～！？…（笑）

「ちょっ！？お姉様？？……」

「ほ～う？？そ～なんだ…

注文ねえ～…」

「いっ！？いやまぁ～…あれも多分演技ですのっ！！
お姉様っ！？…い…いけませんの？？」

そんな美琴に又もや焦りだす黒子だが？？一度ハートに炎が点いてしまった彼女を止めれば自分も危ういようで？？……（汗）

「ちょっ！！お姉様？？突然立ち上がって一体なにをっ！？」

と、突然立ち上がる美琴になにやら嫌な予感がする黒子であるが？？

「ごめんっ！！黒子っ！！ちょっと行って来る！！」

とまぁ～…ヤハリと言っていいのやら、そんな光雄らに一言文句を言おうと、突然その集団に向かう美琴様…（笑）

「ちょっと！！ダメですのっお待ち下さいましっ！！」

「あはは♪行ってらっしゃ～いっ♪♪」

と、そんな苛々状態の美琴をニコニコと見送るマリオンであるが

……っていうかこんな空気が読めないマリオンもさすがである……

（汗）

◇◆◇◆◇◆◇◆◇……

一方その頃??

そんな、なにやらあちら側で??雲行きがあやしくなる状況とも知らずに只今その集団といつの間にやら仲良く会話中の光雄が!?

「あはは♪そうですか～…まぁ～私もそうかな～なぁ～んて思ったんですよ♪」

「そうそうっ!!でもまさか、自分の考えと同じとは♪ヤッパ!!カ○ミンさんの人気は凄いが、俺としては○ミさんの方がッッ!!俺はっ…俺は～…!!」

「おいおいっ…泣くなって…しっかしな～…それよりアンタ…そのコスプ??いやその衣装一体何処でどうやって手に入れたんだ??」

「いや…それと、これとは…（汗）」

「まあまあ、ジュンタもそんな突然聞くなよなぁ…彼女、困っているだろ??」

「えっ??いいや…まぁ～…別にいいっすよ、そんな俺は??…じゃなかった、私は…でもこの衣装なんだけど～…とある魔法の場所で??かな??」

と、いきなり待ってましたと言わんばかりに…おもむろに、片手を広げさり気なく自分の能力で粒子をキラキラとさせる光雄、

「で♪それに私…こんな事も出来ちゃったりして♪」

そんな光雄に目を丸く見つめるスキンヘッド達だが??

「えええーーッッ!!ま…魔法の衣装!?ってこれ本物??」

「いや…あの子本当に魔法少女なんか！？」

…って言うか、俺…男なんだけど……

ま…まぁ、上手く食い付いて来たんか？？だとしたらもうそろそろ”あれ”を聞き出すタイミングってか？？うしッ！！さっすが俺ッッ♪♪

そんじゃいっちょ！？

「ええ～と…この衣装を頂いた魔法使いを紹介してあげてもいいんだけどね～…それと、ちょっと…あなた達に聞きたい事があるんですけど…」

「「「ええっ？？」」」

「「「で？？なにをっ！？」」」

「うん…噂に聞いたんだけどね…あなた達の只今持っている”音楽ＣＤ”の中身なんですけど…」

「ええっ??〇ミさんっ!!どおしてそれを?……って言うか、アンタにゃ～”魔法”と言うもっと便利な物が??」

よっしゃッッ!!さすがスキンヘッドッッ!!（ちと不気味だが…）ナイスタイミングだぜっ後一息ってか??…でもまぁ～…本当はそんな情報聞き出すよか俺は知っているんだけどね～…??あ!!いけないっ!!危うく……さて演技演技っと♪♪

そんな思考中の彼…しかしその思考中にいつの間にか目のの前に居るとある超危険人物に気がつかない光雄なのであるが??

「実は……って!?おわッッ!??!?」

「はぁ～い♪♪初めましてっ♪♪」

「「「えッッ!?…誰っ!?…」」」

とまぁ～…突然その光雄の目の前に居る美琴にたいして、仰け反りビビる光雄……そんな様子に只今ポカーンと見つめる集団……何だか、かなり頓挫の予感が??

そんな中、その目の前に居る彼女になにやら絶対に言ってはいけない禁句（タブー）を？迂濶に言ってしまう集団の一人…

「おいっ！？何だ？？その”ガキ”は？？」

「えっ？？」

「そうだそうだっ！！ささっ○ミさんっ♪
そんなションベン臭い”ガキ”は、ほっといて早くその話しの続きをしましょうよ♪」

「あ…いや…ええ～と…」

「……」
（注：何故か黙っている恐ろしいお姉様…）

うわっ！？やべぇ！！……いくらなんでも……

とまぁ～…そんな状況で冷や汗たらたらな彼だが、そんな起爆前状態の美琴様に更に追い撃ちをかけるように新たな脅威が出現し!?

そんな彼、上条当麻は??目の前に佇む少女、美琴達を発見っ!!そして、そんな彼女に対して絶対に言ってはならない禁句（起爆スイッチ）を言ってしまうのであるが!?

「おっ♪♪誰かと思えば、”ビリビリ”と光雄じゃねぇ～か??」

「げえッッ!??…あれはっ!?」

「ようっ♪♪一体そこで何やってんだ??”ビ・リ・ビ・リ”っ♪♪」

「……ビキッ!!…」

（注：更に??肩を震わせながら下を向きつつピクピクと??超危険状態のお姉様♪）

あはっ♪♪終わった……いや!?…ここは、素直に退避した方がいいんか??いや……しかし…

そんな突然にやって来た混乱(カオス)に更にテンパる光雄だが??
そんなのはお構い無しのようでなにやら初める当麻と集団がっ!?
…（爆♪）

「あんっ!?誰だ??テメー…」

「おまえらこそ、こいつ等に何の用だ!!」

うわっ!!こ…こ…これ以上事態をややこしくするなっつーの…
…や…やべぇ……

「いきなり出て来て、なに言ってんだテメー…」

「ささっ…○ミさんからも一言…こんな”ガキ”とこの野郎に言って下さいよ～」

ってぇ～……ち??…ちちちょっと待てっ!?何故俺に話し降るんだこのハゲッッ!!

無理無理っ！！絶対に無理だからましてやこんな！？……
…げげぇー……

と、なにげなくそんな美琴をちら見する光雄だが……その美琴様の複雑な表情に凍り付く光雄が！！

「ああ～ッッ！？……何だアンタか……今の私に話しかけないでくれる？？……焼くわよ…」

「ヒッ！？……」

うわっ！！やべぇ目があっちまった…て言うか、何か瞳孔開いて…あれ何デスカ？？人間デスカやっぱ人間デスヨネーー…こ…ここ怖ぇぇ～……

しかしそんな光雄の思考とは裏腹に事態は既に収集不可能な緊急事態に陥る有様なのである！！

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆……

そんな中只今その手前席の黒子達は??
なにやら机に連続して何かをぶつけるような…そんな妙な音がするのであるが!?……

「あああ〜……お姉様っ??ああ♪お姉様ッッ!!」

「あははっ♪おもしろいおもしろい〜……キャッキャッ♪♪」

なんともまぁ〜……そこでもなにやらまるで何処ぞかのパンク歌手がするが如く黒子が頭を連続スイング!!連発で机に刻むビートを聞きながら、その隣で何にはまったのやらキャッキャとはしゃぐ変なマリオン……

更に、そんな只ならぬ状況に周りの客達もザワザワと!?正にとんでもな状況になりつつ店内である……(汗)

◇◆◇◆◇◆◇◆◇……

と、そんなこんなでその光雄達は??

「ちょっと…おいっ!!上条さん、聞いてますか??」

「ああ…聞いてるぜ、待ってろよ…おまえも、そこに居る御坂も、俺の大切な知り合いだからよっ♪今からこいつ等から助けてやるっ♪だからここで大人しく……」

て…なに言ってんだ”こいつ”……(汗)

「てんめぇ~……可愛い○ミさんの前だからって…」

「おまえ等こそ、よってたかってこんな幼気な女の子を!!恥ずかしくねえのか??ましてや一人は中学生の”ガキ”じゃねぇかこんな”ガキ”しか相手に出来ねぇのか??」

……っていうか”こいつ”全然勘違いしてんだけど…しかも俺は男なんだが……もう限界かも……逃げちゃおっか♪…ヤッパ逃げた方が良さげだよな……ハハハハ……不幸だ…(涙)

「けっ!!ヒーロー気取りってか??ささっ♪そこの”ガキんちょ”と、○ミさんっ♪こんな訳分からん奴はほっといて早く俺達の後ろに避難を…」

「うぇッッ！？」

「おいっ！！おまえ等こそ、そんな可愛い子になにサカってんだよ！！……さあ、光雄も御坂も俺の後ろにじっとしていろよ♪」

いいっ？？な…何で？？こうなるのっ！？一体俺はづおすれば？？……えッッ！？今何か隣側でパチン！って！？

「げぇぇ～……ひ…避難しなくちゃ…」

そんな状況下…只今隣側に居るであろう美琴の周りからいつの間にやら電気が迸り今正に起爆寸前の核弾頭に恐れおののきつつ逃げる準備をする光雄…そんな状況なのだが…

「てんめぇ～……言わせておけばっ！！」

「おまえらこそ！！いいぜ～……もしおまえらがまだ続けると言う

のなら、そんな幻想……」

「ぶ・ち・こ・ろ・すッッ♪♪」

「「「……えっ??」」」

次の瞬間!!ドガシャーン!!と、その店内に物凄い雷がっ!?そんな店内は、当然あっと言う間に停電!!周りの客達も悲鳴を上げながらそんな店から逃げ出す始末……まるで、何処ぞのパニック映画デスカー??みたいに……（爆♪）

◇◆◇◆◇◆◇……

数分後……

そんな突然の落雷騒ぎで停電した店内だが……何とか予備電源で灯りが点き……そんな店内には、先程の皆さんは誰も居ないのである……

そんな状況に、只今トランス状態からいつの間にか復活した黒子であるが??

「あれっ!?私は一体……ハッ!?お姉様はっ??」

「ん??……何か、あの後皆して何処か走ってちゃったよ??」

「へっ!?……」

「いっいけませんのっ!!マリオンさんっ早く私達も後を追いますのっ!?」

そんな、状況の中、忽然(こつぜん)と姿を消す美琴達…そんな美琴達になにやらかなり不安な様子の黒子……別の意味だが……

そして、その隣席に居るマリオンを連れ、そんな美琴達を追うべく探しに行く黒子達…

はたしてそんな中、黒子達は無事に美琴達に追いつく事が出来るのであろうか、

そして、その店内から姿を消した光雄達は一体何処で何をしてるのかッッ！！

又々無理やりだが、次回へ続くッッ！！

第十七話　例え心に思った事でも、思わずベラベラ言ったら、とんでもない事態に

あはっ♪♪

もうダメダメかもっ！？

た…多分次回でようやっと、この恐怖の？？ファミレス無限ループ状態も完結だぁ～な♪うんうん♪

てな訳で次回もお楽しみに～♪♪

第十八話　皆で、集団行動はちゃんと仲良く行かないと、死亡プラグ決定だよッ

あはは♪

もうめちゃくちゃやなぁ～……

しかしっ!?その後にゃ～……いよいよメインディッシュの!?って、これ以上はネタがバレるからっ!?

えっ!?!?

もうバレてるって!?

いやいやｗｗ

まぁ…そんなこんなで

光学の超高密度収縮粒子砲戦記…

始まり始まり～っ♪♪

第十八話　皆で、集団行動はちゃんと仲良く行かないと、死亡プラグ決定だよッ

――――学園都市内――――

只今時刻は２１：３０、今日は、明日から夏休みという事もあって、その時間帯でも普段と違い街はかなり賑わっている…、仲の良い友達等と楽しくはしゃぎあう学生達、その青春の思い出の一時を過ごしているのである……

そんな中…学園都市、第七学区、とある駅前通り付近、その歩道添いに一台のスポーツカーがハザードを出しながら停車している…

そのスポーツカーの車内では…

「高橋君っ今日も色々と、とっても楽しかったよ♪」

「ん？？そうかぁ～？所で、めぐみ～…今度那須…」

「うんっ…！！その事何だけどさぁ～…ヤッパ…ここ（学園都市）から外出するのは…ちょっと…ねぇ～…」

と、そんな事を言う彼女は…やはり学園都市から外出するには、かなり難しいらしいのである、

「ああ…まぁ…仕方ないか、まぁ、その内めぐみが卒業して…そん時かな…」

「うん…高橋君っ…本当にごめんなさい…」

「えっ??…ああ気にしなくていいって!!それよかさ～…今から俺の行き付けのＪａｚｚ・Ｋｉｓｓでのんびりと……??」

と、そんな落ち込む彼女に何とか機嫌を良くしようと彼の行き付けのお洒落な喫茶店にさそうが??

そんな時、隣側でなにやら様子がおかしい彼女に気付く彼!?

「へっ??」

「ど……どおした??そんな青い顔をして??」

と、そんな彼氏との会話中、何となく、バックミラーを眺めていた彼女は??

その自分の居る位置から遥か後方になにやら、いつぞやの変態らしからぬエグい物を見かけてしまった

みたいで!?
冷や汗を流す彼女!?

いやいや、なんともその変態遭遇率が高い彼女である……（笑）
更にそんな輩がどんどん差し迫る状況のようで!?…

「……出して……」

「えっ??」

「いいからっ!!はっ…早くッッ!!」

「へっ??……って、一体ナニを出せって??じ…じじ冗談はヨシ子ちゃんって?何を大胆に??…」

「か??…勘違いも程があるっつーのッッ!!いいから早く車出せっつてんでしょうがッッ!!」

「ヒッ!?…わわ分かったから出します出しますって……」

しかし!!そんなアホみたいな夫婦コントをやってる間に、その”何か”に追われるスンゲー数の奴等がズドド…と、迫り…そして、その後方から、まるで巡航ミサイル（トマホーク）のように”それ”が直撃ッッ!!

…”あれや”、”それ”が立ち去り、座席だけ残し車は大破…（爆♪）

一体何が起こったのか解らずそんな悲惨な中その彼女達は??

「あ…あはっ♪♪」（注：なにやら壊れた彼女?）

「……」

（注：アフロになりつつ死んでる彼氏♪）

とまぁ～…一昨日から続き、又もや悲惨な事になってしまったのである……て言うか、お約束なのか!?

そして、そんな車を遥か後方に置いて、皆仲良く??みたいな、遥か彼方の明日に向かって疾走する青春のランナー達（バカ??）が、夜の学園都市を行くのである!?

そんな中、その怪しげな集団の先頭を走る奴等は??

「うひっ!?って?!まてまてまてよおいッッ!!な何で皆さん!!又俺の逃げる方に着いてくるんだァァァ〜!!」

「ふっ…おまえを見捨てるような上条さんじゃ無いぜっ!!」

「つか…上条さんっ!!別に俺の進行方向に着いてこなくてもッッ!!」

さらに、その後方では?!

「ま…◯ミさぁぁ〜んッッ!!…待って下さいよ〜…!!」

「ヒッ!?息が……み…皆さんっ!!見捨てないでぇぇぇ〜…!!」

と、なにやら皆さん必死のようで…さらに皆が逃げる遥か後方には?!

「うふふふっ♪♪あははは♪…何処まで逃げても無駄だってんでしょうがァァァ——…ッッ!!」

とまぁ～…それは恐ろしい魔女??…もといっ!!美琴様がまるで草食動物の群れに襲いかかる猛獣の如くその獲物達を追尾するのである!!

そう、今正に、逃げる奴等…それを追尾する奴と、夜の学園都市、その煌めくようなネオン街の元…生と死の、ドラマチックサバイバルゲームが開始されるのである!!

そんな、中、只今疾走中のグループ集団の一人、そんな彼はと言うと??

「はっ…早く出ろよ、何やって…くそっ!!」

「おいっ!!菊地、こんな時に電話かっ!?彼女にか?」

と、必死に逃亡中なにやら携帯片手に走る彼、そんな彼を見て文句を言う友達だが…

「いや…これには、ちっとな…只今ＧＰＳでな、多分俺の友達(ダチ)が近くに来ているはずなんだが…よしっ!!繋がった」

「おいっ!!伊藤ッッ!!お前今何処に居る??」

『あん??何だよ、まさか又々風紀委員(ジャッジメント)に追われているんか??』

「いや…そうそうっ!!そんで今俺達の位置は分かるだろっ!?だから、その」

『OK分かったよ!!今其方に向かっているからよっ!!その路地裏を抜けた所に待機してなっ!!じゃあ後で…』

「うしっ!!さっすが伊藤ッッ!!じゃあ、お願いしますッッ!!」

てな感じで、只今そんな友達に連絡した彼だがはたして??

◇◆◇◆◇◆◇◆◇……

一方その頃先頭集団では??

「なっ!!かか…上条さんっ!!速ッッ!!て言うか、たのむっ…置いてかないでくれ~!!」

「おおっ見えた!!こっちだ!!……ん??ほらほら光雄っなん

だもうへばってんか??」

「ゼェッ…ゼェッ…そ…そんな事言われても、さすがに…ていうか上条さんってこんな早いっ早すぎるって…もう少しペース落そうぜっ」

「あはは、まぁ…着いて来れね～か、まぁ俺は普段から色々と追いかけられてるからなぁ～…まぁこればっかは、慣れだな??」

「な…慣れって??、いやいや、そんなしょっちゅうこんな逃亡劇をっ!?……ていうか、さすがと言うべきか、もう尊敬しちゃうかも♪」

「うしっ!!あの橋まで来たら一休みするか??」

「あの橋って」

ま!!まさかっ!?あの橋は??アノ場面の最終目的地、俺が知ってる禁書目録の記念すべき最初に出て来た、あそこかっ!!

まずい……まずいって…おいっ!!これ完璧に俺達死亡フラグじゃね!?

とまぁ～…そんな前方を走る当麻の後ろ姿を見つつなにやらあの

橋は?!もしやッッ!?と、スンゲー不安でいっぱいの光雄である…

◇◆◇◆◇◆◇◆…

一方そんな中、その遥か後方のさっきの集団は?!

その路地裏を抜けた大通りの歩道沿いに、一台のミニバンが停車している…

しかし!!そんな、ミニバンの車内ではとんでもな事態に!?

「うおっ!!おまえ等!!こ…これ以上入って来るなよ!!無理、無理だからっ!!これ以上は車がァァァ…」

「「「そんな事言わずに菊地さぁ〜ん…み…見捨てないで♪」」」

と、なにやら超定員オーバー状態で、サスがギシギシと悲鳴を上げつつ、超ローダウンにっ!!

何か、昔に似たようなCM（全部でこんなに乗れるよ!!!てへ♪）みたいのがあったような…（汗）

そんな状態のミニバンだが全員乗れた??みたいの用である…しかし??

「うげぇぇ〜…きっつ〜…」

「ぐはっ…い…息が…」

「つかこれって…ちゃんと走れるんか??」

「うぐうっ…きっ菊地!!いいからっ早く車を出せ!!」

「うっは!!無理やりだな〜…うしっ!!そんじゃ…」

「行くわよっ……♪♪」

「「「……えっ!?……」」」

「ん??なによ、」

「ヒッ??……で…でで」

とまぁ～、なにやらいつの間にか助手席に座っている美琴様……

何か、お約束のパターンで…（汗）

◇◆◇◆◇◆◇◆◇……

数分後……

「あははは……ハァ～…ガクン…」

とまぁ～…そんな歩道沿いになにやら煙を吐くミニバンと…

その車内で??全員仲良く黒焦げ&アフロ化…もうめちゃくちゃであった…（笑）

◇◆◇◆◇◆◇◆……

そして、そんな頃
光雄達は、とある河川敷の近くにある、あの橋に無事到着、ゴールインしてたのであるが??そこに、ある以外な人物達が??

「ハァッ…ハァッ……ふぅ～…やっと御坂を撒いたか～……何とかここまで来れば、」

「フゥッ…フゥッ…か……上条さんっ…違う場所に行きましょうよ、ここ、絶対ヤバイって」

と、そんな彼等に、その様子を遠くから見ていたある人物達が、接近…そして、

「よっ♪カミやんっ、待ちくたびれたぜよ♪」

「まったく、君たちは、今起きてる状況も解らずに、呑気な物だよ」

「なっ!!つ…土御門っ!!おまけにステイルまで??何で、おまう等が?」

更に、もう一人、今度は光雄に話しかける一人の少女が!?

「やっと見つけたましたわ、光雄さん??今から私の言う事を、落

ち着いて聞いて欲しいんですの…」

「えっ!?!?し…白井さんっ!!な…何で??」

「あれっ!?あの～…何で泣いていらっしゃるのですか??…つか、そんなじと眼でにらまなくても、俺…何かしたか??」

「そ…そう言えば…ま…マリオンちゃんは??」

「ねえっ!!マリオンちゃん??何処に隠れているんかなぁ～…なんて♪♪」

「ふざけないでッッ!!
し…失礼、す…すみません」

「えっ!?」

そして、そんな真剣な表情で黒子がゆっくりと、口を開き……

「光雄さん…本当にごめんなさい…マリオンさんが……」

「ッツ！！……」

「マリオンが、複数の男に襲われ…」

「さらわれましたの……」

「！！――――――――！！――」

そして、マリオン達と出会い、楽しくも危なっかしいそんな、暖

かい日々
そんないつもと変わらない日常…

そんな掛け替えのない日々は、今日も、そしてこの先も永遠に続く♪と思っていた…

しかし!!その黒子の一言で、そんな、夢のような幻想も…なにもかも音を立てて崩れ落ちるような、そんな気が…

「そんなっ!!何で??何でだよっ!!いつもどこでも一緒なはずだろっ!?くそっ!!マリオンちゃんっ!!……」

「おいっ!!光雄っ!!いったい何処へ行くつもりだ!!」

「はなせっ!!はなせよ〜…皆!!俺はマリオンをっ!!」

と、そんな、時…
光雄は冷静さを失っていた、そんなステイルとか当麻を振りほどき、マリオンを助けるべく充ても解らず行こうとした、そんな時!!

その橋の向側から、一人の人物が……

「ふふんっ！！相変らず貴様は、そんな猪みたいに突っ走っても無駄だと言うのに」

「ん？？もしかして、君は？？」

「あっ！！あなたは？？」

そう、その向側から歩いて来る謎の彼は？？

はたして、

次回へ続くっ！！

第十八話　皆で、集団行動はちゃんと仲良く行かないと、死亡プラグ決定だよッ

さてと……ふふんっ♪♪

ようやっとギャグパートは、終わりっと♪

次回からこの物語のクライマックスへ向けてだな…

でも、多分シリアス的展開は、無理かな??

多分大丈夫さっ!!よしっ!?（注：かなり自信無しな作者）

まぁ…そんな感じで

次回もお楽しみに～っ♪

第十九話　そんなあなたの為♪に集えし者達よ（前書き）

……

うぅ～む……

ま…まぁ～…一様今回からは、超シリアスパートの筈だが！？

なっ！？なにかがおかしい！？

いやいや……（汗）

てな感じで？？

とりあえずシリアスで？？みたいなッッ♪♪

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～♪♪

第十九話　そんなあなたの為♪に集えし者達よ

――――――んっ！？ここは？……

――――――ふと、ぼんやりと目を覚ますマリオン…その虚ろな顔を、夜の月明かりが照らす、

――――――そして、そのぼんやりとした目で自分の居る周りを見渡す……その目にうつるのは、暗闇、そして…ツン…と冷たい空気に曝された一室…只今自分が座っていたであろう椅子…そして月明かりに照らされた、一つの何の変哲の無い一つの机――――――

――――――そして、何処かの旧い洋館であろうか、床に張り詰められた真っ赤な絨毯(じゅうたん)更に目線を上に持って行き、そこに見える大きな窓……そして、同じく真っ赤なカーテン、――――――

多分、その向側の大きな扉もその反対側の窓も、何か、とてつもない結界が張られ脱出不可能だなぁと…

そこで、改めてぼんやりした頭がはっきりして来た……

――――――ああ、自分はさらわれそして何者かに捕らわれたんだなぁ～と――――――――――――――

――――そして、その窓際に一人立ち尽くし、その洋館と言う名の<ruby>檻<rt>おり</rt></ruby>に捕らわれの小さな小鳥は小さな声で<ruby>囀<rt>さえず</rt></ruby>る――――――……

「光雄……たすけて…」

と――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――

――――――

――――……

――――……

―……

……

◆◇◆◇◆◇◆◇……

マリオンが、さらわれたッッ！？そんな、突然にやって来た現実を、自分自身受け止めらるず、動揺し混乱しそしてその場に崩れ落ちるように脱け殻みたいになる光雄、

そう、そんなとある世界に一人淋しくやって来た、そんな彼、葛城光雄、その彼に最初に出会い、そして、何処までも、この先もずっと一緒に過ごして行くであろうかけがえのないパートナー…そして、そんな彼のもう一つの一部、そんな彼女を今失い途方にくれる彼……

しかし、そんな光雄とマリオンを、まるで自分自身の事のように、心配してくれる大切な友達……

いつの間にか知らず知らずの内に様々な人達と出会いそして出来た大切な絆、そんな仲間達に支えられ…そして、

「あ、あなたはっ!?」

「まぁ…突然失礼するが、コホンッッ!!私は、」

「名乗らなくて、結構ですのっ!!まったく…今更しゃしゃり出て来て何様ですのッッ!?……まったく……皆して、あなたを探し廻って大変でしたのよっ!!」

「ふん…まぁ彼女の言うとおりだな、そこの白井や、マリオンと、あっち側の光雄やその他…行方をくらました君を散々探してこれだよ……まったく君は今更…何しに来たんだか…」

と、そんな今頃になって自らしゃしゃり出て来た彼、マリオンの兄であり深紅の魔術師ことマンスレン・オヴ・シュペー…しかしそんな彼に皆してため息をつく有様なのである…

「うぐぅ……いや…そ…そんなに皆して睨むなよ…俺だってさ～…あの、その…」

「いやまぁ～皆の目的は、これで完了したわけだし、後は、奴等の居所に乗り込みマリオンを救出って所だにゃ～…なぁー…カミやんっ」

と、なにやら一段落ついたのかその後の事を当麻に相談する元春、そんな当麻は??

「つか…俺に降るなよ!!それより、オリアナさんは??」

「そうそうっ!!オリアナは、何か探りに行くとか言ってたぜよ、」

「ええっ??…一人で行かせちまって大丈夫なんか??」

そんな、一人で、その奴等のアジト??を探るべく行動しているオリアナに心配する当麻だが??

そんな、オリアナになにやら頼もしい味方も一緒に付いて行くようである、

「まぁ…ねーちんも後で合流するみたいな事言ってたし、大丈夫だろ」

「それよか…なぁ～カミやん…あいつ…」

「ああ…まぁ～何か、あいつ、俺達と違って弱いからなぁ～…まぁあいつ立ち直れっかな、」

「ま！！男の俺等よか、あっちの御坂や白井にまかせるかにゃ…」

とまぁ～…そんな、落ち込む光雄に、心配して彼に話しかけてる美琴を横目でみつつ、多分大丈夫だろう、と安心する当麻達であるが？？…

そんな彼女、美琴はと言うと？？

「ねえっ、ちょっとッ！！…なぁ～に、しみったれてんじゃ無いわよ！！アンタ男でしょ？？」

「マリオンちゃん…俺…どうしたら……」

「ったく！！ほらっ…大丈夫だからちゃんと立ちあがりなさいってば！！」

「そうだぜ～…○ミさんっ！！俺達もみんなアンタを応援しているんだからっ！！シャンと！！」

「えっ！？！？っていうか、アンタ等まだ居たのっ？？」

と、なにやら以外な奴等に動揺する美琴なのであるが？？

「いやいや…俺達は、そこの○ミ？？……もといっ！！光雄さんに会ってから、このハートに直撃してだな～…なぁ～皆っ！！」

「そうだそうだっ！！ジュンタの言うとおり、俺も、そして皆も光雄さんの為ならたとえ火のなか水のなか～♪♪……って！？」

「な…何なのアンタ等……（汗）……いや、ていうかそんな事されても彼困るんじゃあ…」

と、そんな冷や汗をかきつつ呆れる美琴にいつの間にか、近くに居た黒子は??

「おっ……お…お姉様ッッ!?こ…こんなにゲボク達をいつの間に調教し…わたくしと言うものがありながら……!?」

「あっ……」

「へっ??……」

「なッッ!?なな…なにを言うとんじゃあ~!!アンタはぁぁーーッッ!!」

とまぁ~…突然の黒子（元祖変態♪）の登場に??仰け反りつつ更に動揺する美琴様♪♪
しかし…そんな様子を横目で見ている彼等は??

「ふふんっ♪♪これ…そこの少女達、〇ミ様親衛隊たる俺達に対して!!そのような暴言…万死にあたいするっ!!」

「……ささっ、〇ミさんっ!!こんな変態二人組はほっといて…」

と、なにやらそんな黒子に挑発するありさまで??
しかし!!そんな黒子はと言うと!?

「はんッッ!!なぁ〜にをおっしゃるかと思えば、そんなにわか親衛隊擬きが、良く吠えますこと」

「なっ!!にゃにおぅ〜ッッ!!貴様……我が〇ミさん親衛隊を侮辱するかッッ!!」

「はんッッ!!…よく言いますこと!?……まぁ〜??もっともぉ〜??お姉様とわたくしみたいにぃ〜!?一つ屋根の下に一緒に住む切っては切れない仲みたいに、あなた達もそこの殿方と同じ事を出来て??」

「うぐぅッッ!!…そ…そそれは誠であるかッッ!?
何とハレンチなっ!?
も…もしかして」

「うふふふ…どうよ！！ですの♪♪」

てな感じでなり変態的口論が続く中…なにやら、そこで顔を真っ赤にしつつプルプルと震えるお姉様が？？……（笑）

……

て言うか、せっかくのシリアスパートが台無しのようなｗｗ……

「あ…あ……アンタ等…いい加減に……」

「へっ？？……」

「えっ？？……ええっ！？……ちょ！？お姉様ッッ！？」

で？？ヤハリお約束な展開になりつつ、又もや美琴様ッッ♪♪一体”何に”スイッチが入ったのやら…電気をパチパチと溜め込みながらワナワナと？？

「こんのぉ～！！ど変態どもがぁぁぁぁーーーーッッ！！」

◆◇◆◇◆◇◆◇……

数分後……

「んっ！？一体俺は……つかこの惨状って！？まさかッッ！！敵かっ！？」

と、なにやら訳分からん内に我に帰り復活を遂げた光雄なのだが？？

「えっ！？いや…これは、ちょっと…ねっ♪
ハハっ……ハハハ…（汗）…」

そんな周りの悲惨な？？惨状を造り上げてしまった彼女…なにや

ら色々と訳ありのようである、

そんな冷や汗をかく美琴に光雄は??

「えっ!?!?ま…まぁ…えーと、御坂さん…ありがとなっ!!」

「うぇっ!?……な…なによ」

「何かさぁ～…そんな御坂さん等を見ていたら、何っつーか…バカバカしくて…ハハ……俺、なんか、ふっきれたよ♪♪」

「はぁ～!?……それ…どう言う事よ、もしかして、喧嘩売ってる訳??」

「うげっ!?……ちょ!!ち違うからっ!?……って!?何かパチンって!?無理無理ッッ!!」

と、そんな様子を見ていた当麻達だが…何か御坂に任せて正解だったと、こうなる事は解っていたみたいで??

「うんにゃ、なにやらあっちの彼、光雄も復活したみたいぜよ♪」

「い…いや…何か、ビリビリが半強制的に復活させたような…彼も俺と同じく不幸だな…ハハ」

と、そんな、光雄やマリオンをとりまく仲間の存在、そんな彼の周りでいつの間にか、そんな堅い絆が出来上って…

そんな、仲間達に励まされ光雄とマリオンにその後…更に降り掛かるであろう悲惨な運命に立ち向かう勇気をもらい

「うしっ!!みんなっ!?待たせたな♪♪それじゃあマリオンを助ける作戦会議と行こうじゃないかッッ!!」

「おうッッ!!マリオンを救いに行こうぜっ!!」

「「「よっしゃぁぁぁっ!!」」」

そして、そんな光雄の一言で科学と魔術が一致団結!!今ここにマリオン救出チーム、略して??特攻野郎〇チーム…（ネームダサ

ッ！！）が結成！？

マリオン救出大作戦&敵拠点上陸作戦が発動したのであるっ！！

はたして、そんなにわか結成チームでマリオンを無事救出出来るのか？？そんであの強敵の大魔導師サラ・ウーデットの野望を打ち砕く事が出来るのだろうかッッ！！

このまま次回へ続くッッ！！

第十九話　そんなあなたの為♪に集えし者達よ（後書き）

あっ…

あはっ♪♪

や…やっぱこうなるのか…こうなっちゃうんっすねぇ～…

いやッッ！！次回からはだなぁ～…こうシリアスでだな♪

って！？やっぱ無理だって？？

いやいや……（汗）

ま…まぁそんな感じで多分大丈夫だろっ！？っつー事で？？

次回もお楽しみに～……（汗）

第二十話　絶望から生まれし希望の燈（ともしび）（前書き）

ふっふっふ……

さてっ♪この物語も本格的に原作から脱線??……もといッッ！！オリジナル的に盛り上がって来ましたが…

今度こそマジ”シリアス”で行きたいんだが……多分この作者だから無理たから!?……ハハ…（汗）

とまぁ～こんな感じで

光学の超高密度収縮粒子砲戦記ッッ!!

始まり始まり～♪♪

第二十話　絶望から生まれし希望の燈（ともしび）

――とある一室――

その一室の大きな窓際に佇むマリオン…その大きな窓から差し込む月明かりに照らされ、うっすらと浮び上がる綺麗にまとめられたショートの水色の髪…幼さが残る綺麗な気品ある顔…そして、何か高貴な人なのか、その真後ろにある机の上には、

いつ置かれたであろう綺麗なドレスがキチンと折り畳まれ、その上に様々なネックレスや貴金属類が…

しかし、そんな物にも目をくれず窓越しに佇む一人の小さな少女はぼんやりと外の景色をただ…ただ眺めるだけである、

そんな、彼女の後ろ姿を眺める人物が、

「ふふ…やはりお気に召しませぬか、第四十三オスマン帝国神官に支えし、シュペー家のマリオン姫…そのような性格、やはり、そなたの父に似て……」

「下がって……」

「んっ？？今何と……これからサラ大魔導師にお会いなさるというのにそのような…」

「いいからっ！！下がりなさいっ！！……あなたの顔何か二度と私の前にみせるなッッ！！」

「ふんっ！！…まったく、何とも、だからそなたは？？……」

「ふふふ…クラーク…してやられたな、」

「なっ！！これはこれは、あなた様がわざわざこのような所に…」

「うむ、もう良い、下がっていいぞ」

「ははっ！！」

と、そんな佇む人物の真後ろにもう一人の人物がいる事に気づき…そんな人物がゆっくりと、

「ふふ…これはこれは、姫…ようこそ我が次元城に…」

「えっ！！あ…あなたはッッ！？」

「ふふふ…ははははっ！！驚いたかっ！！私はっ！！貴様の父…そしてシュペー一族に、根絶やしにされたっ！！」

そんな、真後ろの人物の声に反応したのか、その人物と相対するように振り向くマリオン、そしてその人物にかなり恐怖を感じ……

「たすけて…誰か……たすけてッッ！！」

「光雄……」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇……

一方そんな中光雄達は…オリアナ達がくれた情報と、かつてその屋敷に潜伏してたマンスレンの記憶を頼りに…とある地下通路からマリオンを救うべく向かっていた……そして、

――薄暗い通路の中―

それは、深く…何処までも続くような通路…その通路の脇役の所々にポツン……と設置してある松明（たいまつ）……そのメラメラと揺れる灯りに映る影、そんな影が幾つも続き……

そんな、空間に響き渡る複数の足音、その暗い通路を突き進む人物達…

「うぅ…何かさぁ～…俺達、これって、迷ったとかじゃ～…」

「なっ！！何を言うかっ…以前ここに来た私の記憶じゃぁ確かに……」

そんな、薄暗い、まるで何処ぞかの、ダンジョンデスカー？？、みたいな入り組んだ通路、やはりと言っていいのやら…迷ったみたいである、そんな中マンスレンと口論中の光雄なのだが…

「あらあら、確かに…ですわねぇ～……で？？この行き止まりはどお説明すればよろしくて？？」

そんな、かなり疑いの眼差しで睨む黒子…そんな彼は??

「あ…あれぇ〜…?? おかしいな〜…ちと間違えちったかな??
…てへ♪」

「ったく…てへじゃねぇ〜っつーの!!」

と、なにやらそんな変態??…もといっ!!…そんな彼に対し、苛立つ黒子と美琴だが…

そんな言葉は、彼に聞こえていないみたいのようでそんな事より??

その場に佇み、更に考え込むマンスレンだが…

「でもなぁ〜…たしかにこの先にも続いてた記憶あるんだよな〜…
……やっぱ勘違いだったか??」

と、何か、ついこの前までの自分の記憶と一致しない!?

とまぁ〜未だに納得がいかないで固まるマンスレンだが、

そうこうしてる内に時間は刻一刻と過ぎて行くありさまである…

そんな様子を見ていた当麻は、こんな所で時間潰すよか、とにかく行動しようと、そんなマンスレンに話しかけるのであるが!?

「そりゃおまえの錯覚だろ～??…なぁ～光雄～…ま!!しゃぁ～ないが…引き換え……」

「まってっ!!」

とまぁ～なにやら閃いたのか??そんな当麻に待ったをかける美琴だが??

「何だよ??ビリビリ…」

「って!?ビリビリ言うなぁぁ――――――ッッ!!」

とまぁ～…”何に”反応したのやら??そんな当麻に容赦無く電撃を飛ばす美琴様っ!!……マジ…シリアスパート台無しのよーな…（汗）

「うおッッ!!危ねぇ～だろっ!?だから電気を飛ばすな??」

と、そんな美琴等がお約束な夫婦コント??をやっとる最中、未だ、その行き止まりの壁が気になるのか、今度は仕掛けか何かを探すように色々と調べ始める光雄達だが…

そんな光雄達を横目に、さっき言い掛けた事をふと思い出し、光雄に話しかける美琴…

「あ!!…そうそう、葛城～…」

「えっ??何っ??」

「アンタ等がそこまで気にするんだったらさぁ～…」

「えっ??」

「私的にはねっ♪」

「ちょッッ!?」

と、何をとち狂ったか不敵な笑顔でその壁を睨み付けるお姉様??…

ふと、おもむろにポケットから一枚のコインを取り出すお姉様!?

「こんな所でぐずぐずしてるよか、」

さらに、そのコインを弾きながらバチバチと??

と、そんな、目の前に妨げる物があろうものならそれを破壊して踏み潰して進撃!?

とまぁ～…まるで旧ドイツ軍デスカ～!?みたいな危険な彼女……そんな彼女の進撃を止めようと必死な光雄だが、なんとも、無駄のようである…

「げえええッッ!!み…御坂さんストップ、ストォーップ!!」

「遅いっ!!ぶち抜けぇぇぇーーーッッ!!」

「ヒッッ!!ややめてぇぇーーッッ!!」

次の瞬間!!耳をつんざく轟音と共に、そのコインがマッハ３の勢いで射出ッッ!!

その壁に放たれる超電磁砲!!その凄まじい破壊力でそんな壁どころか、その壁の遥か向側まで貫通!!辺りに凄い量の砂煙が立ち…

しかしっ!?

やはりと言っていいのか、こんな場所で”そんな”物を使ったら結果はお約束みたいのようで??

辺りから、何やらゴゴゴ…と、まるで、巨大な何かが近づいて、いるような地響きが??…（笑）

「へっ??」

「みみ…御坂さんっ??…あれっ!!あれッッ!!」

「うえっ!?な…なな!?」

「ヒッッ??み…みずッッ!!水がぁぁ〜ッッ!?……皆、にっ…にに逃ろぉぉ――――――ッッ!!」

「「「ぎゃぁぁぁぁーーッッ!!」」」

とまぁ～、なにやら何処かの水路に穴を開けてしまい、そこから怒涛の如く押し寄せる水!!まるで、沈没する船から直ちに退艦せよっ!!みたいな??、超お約束な展開で必死に逃げ惑う光雄達なのである…（爆♪）

はたして、無事にマリオンが居る場所へたどり着けるか心配である…（汗）

◇◆◇◆◇◆◇◆◇……

そんな地下で光雄達がてんやわんややってる頃…

――とある一室――

「ははははッッ！！しかしあんな小さなガキが、こんな上玉になるとはねぇ～…」

と、脅えるマリオンに差し迫る変態ロリ？？…もといっ！！サラ・ウーデットだが……ていうか、シリアスパートなので……（汗）

「ヒッッ！？来ないで…来るなっ！！来るなッッ！！……いやぁぁぁぁぁッッ！！」

「んっ？？何を怯えているマリオン姫……そうか、怖いか…ははっ！！」

そして、そんな一室で逃げ惑うマリオンを追いかけ、その小さな手を思いっきり掴むサラ・ウーデット！！

「いぎっ！！……いたいッッ！？いたいッッ！！はっ！！放してっ

！！放してよぉぉ――――――ッッ！！」

「ふんっ！！痛いか？？ははっ！！こんな痛みなど…我が一族が受けた痛みとくらべれば！！」

そんな嫌がるマリオンを無理やり自分に引き寄せるサラ！！

「ふんっ！！…まぁ良い、そんな昔の事は、忘れるとして……うぅ～む…」

更に、そんな嫌がるマリオンに顔を近づけるサラ……まさにそんな絶対絶命のマリオン！！
いくら叫ぼうが、そんなマリオンにたすけてくれる人物も居ない、

そんな、サラに対して、さっきまでの強気な態度は既に消え失せ、その彼女の精神を、逆に恐怖が支配し、震え、そして脅え、命乞いをするマリオン！！

「うぅ……ぐすっ…ゆるして…お願いします」

「ふふ…見れば見るほどそなたは美しい……まぁそなたは、このまま我が妻になるのだがなぁ～…」

そんな、力なくぐったりするマリオンに自分の妻になれ!!
そんなサラに絶望するマリオン……

「や…いや……私はっ!!こんな奴にッッ!!……たすけて……」

そんな、その小さな小鳥はもう二度と、

そしてこれからも、自由な世界に飛び立つ事は無く…

そして、絶望……

そう、この先に待っているであろう地獄のような日々

そんな中…その小鳥は、今までの、あの日、あの時の楽しくも危なっかしい日々を、　そんな…光雄達と過ごした夢のような幻想を思い出していた……

そして、現実はそんな幻想も簡単に跡形も無く崩れ落ち…そんな彼女の大きな眼から、止めど無く流れる涙のように……

そして、泣きじゃくる彼女の唇に無理やり自分の唇を近づけるサラ！！

しかしっ！！

後少しでマリオンの唇を奪うッッ！！その時、奇跡が起こる！！

次の瞬間もの凄い地響きと共に！！

多分…その地下で美琴が超電磁砲をぶっ放したと思われる震動と轟音がその一室をも揺さぶり！！

そんなマリオンを引き離し辺りを見るサラ！！

一体何事だ！！と……

そんな時、

突然その一室に入って来る数名の兵士達…そんな兵士の姿はまるで古き良き時代の装甲兵のような姿である…

そんな兵士達がなにやら慌てるように、報告する！！

「お取り込み中の所失礼しますっ！！、サラ大魔導師様ッッ！！只今、下の地下室辺りで何物かが、我が城に侵入した模様でありますっ！！」

「んっ？？何だ…そんな事か、まぁ良い、そんなネズミ如き、殺せ……」

「ははッッ！！」

「んっ？？いや待てよ？？たしか地下と？？」

と、何かを思い出したかのように不敵な笑顔をみながら、そんな兵士に質問するサラ…

「は…はぁ～…地下ですが」

「ふふふ…飛んで火に入る何とやらか、ふふふ…」

「えっ??大魔導師様っ??まっ…まさか!?」

と、もしかしてっ!!みたいにその兵士の顔が引きつる!!

「ふふんっ♪その”まさか”かな??……直ちにそのネズミ吃を例の地下広場へ誘い出せ…」

そんな、何かとてつも無い事を考え出すサラ!!
その顔は、まるで虫けらを肉食動物に食わせる子供のような…そんな悪魔のような笑顔を見せ…

「ふふんっ…そしてッッ!!例の魔物を解き放てぃっ!!」

「えっ??お言葉ですが、まさかっ!?……」

「そうか…まぁ君達は知らないか……まぁ良い、我々のこの世界と違う世界…まぁ、魔界とでも言っとこうか??…そんな世界に巣食う者達…いわば魔族という者達を…君達にも見たいがね…」

「い…いえ…それはちょっと…」

と、その”魔物”とか、まるで現実ではあり得ない、ＲＰＧや映画みたいな物語に出て来る化け物みたいな物を、

そのような招かざる者を使い侵入者を実験台にするようである…

「まぁ良いこの間…召喚した”あれ”の実験台にしてくれるわ…直ちに私の特等席を用意しろッッ！！」

そして、そんな化け物から逃げ惑う侵入者達を見に赴くのである！！

「ははぁッッ！！」

そして、そんな中…マリオンは、さっきまでの絶望と違い、その死んだような眼に再び光が戻り、けして揺らぐ事の無い希望の火を灯す!!

そんな彼女は、両手を胸に宛て、そして思う……

私の為に…こんな私の為に!!光雄が!!そして大切な仲間達!!…皆が来てくれたんだと!!

はたして!!そんな彼女を助け出す為に!!光雄達は無事に、ここ、次元城にたどり着く事が出来るのであろうか!!

そして、そんな彼等に差し向けられた、この世の物で無い者、”魔物”に果たして撃ち勝つ事が出来るのかッッ!!

更に次回へ続くっ!!

第二十話　絶望から生まれし希望の燈（ともしび）（後書き）

や……ややべッッ！？

ちとやりすぎたかも！？

これじゃあ～まるでド〇クエやらF〇じゃないかぁぁぁ――ッッ！？

いやッ！！これ以上は、某制作会社から苦情が？？

って！？いやいやｗｗ

ま…まぁ～次回も同じくＲＰＧで？？多分このパート終わらん限りじゃこんなパターンっつ～事で……

次回もお楽しみに～♪♪

第二十一話　ペットを飼う時はほったらかしにしないで下さい……（汗）（前編）

ちゃらららら～…

○○○○が現れた

▼たたかう　じゅもん
どうぐ
にげる

って!?ちがうからッッ!!そんなんじゃ無いからっ!!

あ…あはは…

いやっ…しかし…

まぁ～そんなかんじで??

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ!!
始まり始まり～♪♪

第二十一話　ペットを飼う時はほったらかしにしないで下さい……（汗）

――――――あれから、数時間後、再び静寂が訪れたその場所でゴソゴソと、壁や、その壁に設置してあるあちこちにある棚やその棚の引き出し…さらにそこに置いてある物など色々と物色を始めるマリオン、――――――――

――――光雄に、早く光雄に会いたい！！そしてっ！！――――――――

――――――そんな、彼の側にずっと居たい、これからも、そして、この先も、ずっと――――――あなたと――――――――

――――――――――――――

――――――――そんな彼女の表情は、さっき迄の屈強な表情と違い、希望に満ちた表情で、ダメで元々な、その閉ざされた一室から脱出を謀るべく様々な得策を練っている最中なのである！！

◇◆◇◆◇◆◇◆◇…

一方その頃、

――――――とある洋館、――――――その別の一室…その一室からクラークと言う名の一人の老人にと、共にその一室の机に設置してある巨大な水晶を眺める人物が…

いったい、何を覗いているかと言うと、その水晶…そこに映し出される数人の人物を、眺めていた…そして、そんな人物達に今から起こるであろう、とても残忍なそして、残酷な惨事を今かと待ちわびながら、

そんな水晶を眺める人物、サラ・ウーデット、その彼の顔も又マリオンと又々違う意味の不敵な笑顔でニヤケる……

只今、そんな水晶越しにに映る彼、光雄の恐怖、そして、絶望に歪む顔を楽しみにしながら、

◇◆◇◆◇◆◇◆……

数分前……

――――あっ……――

ここは??……何処だ!?、さっき水攻めに、あって……俺は一体、

と、さっきまで気絶していたような……そんな未だ思考回路が回復しない光雄、そして……

あッッ!!そうだっ!?ここは?そして皆はっ!?

そんな、突然今までの事を無理矢理思い出すように飛び起きようとするが??

そんな、彼だが目の前にとある人物の顔が??

更に、後頭部の辺りになにやら違和感を感じつつ更に混乱する彼…

そして、その人物も気が付いたのか、そんな彼に話しかけ…

「あっ??やっと、気が付きましたか、」

と…??

「うぇっ!?……ま…まままさかッッ!?…俺…」

「はい…そのまさかです、溺れかけているあなたを助けました、始めまして、私は、神裂火織と申します」

と、そんな彼…光雄は??そんな彼女に助けられ、しかも!!…その彼女の膝枕の上で間抜けに寝ていたのである、そんな、なんともまぁ～さり気なく”ラッキースケベ”な彼だが、そんな彼の目の前に佇む別の人物が居る事に気付き??

「ふ…やっと気付きやがったか…まったく、君達は自らあんな場所で派手にやらかすから」

と、その彼女の隣で愚痴る人物が??

「えっ??ま…まさかッッ!?ステイルさんっ??」

「それと、俺も居るぜよっ♪」

「なっ??土御門さんまで??」

と、更にその隣側の彼に更に混乱する光雄…

そして、今自分の居る場所に気付きつつ立ち上がり周りを見渡す光雄だが、

「んっ??ここは??」

「まぁ…僕達もこんな場所は初めてだよ」

「えっ??でも、ここって、只の広場にしか見え…」

「まっ!!素人のアンタにゃちとむずかしいかにゃ〜…ねーちん」

「まったく……貴方達のおかげで、こんな結界だらけの罠にはまるとは、不本意ですが、仕方ないですね…」

「まぁ…そうだが、こんな時に限って嫌な予感がしてならないんだがねぇ〜…」

そんな、何か胸騒ぎがしてならない、そんな苛立ちを押し殺しながら喫煙するステイル、そんな彼を横目に光雄は、

「なるほどねぇ～…まぁ…大体状況は読めて来たよ…まっ！！ようするに、あなた達魔術師にゃ～この結界とやらが邪魔して脱出不可能だが、俺ならやってみる価値あると思うんだが、」

そんな事を、思い付きで言ってみる光雄、しかしそんな素人の考えは甘いようである…
それを容赦無く指摘するステイル

「まったく……素人の考える事は、呆れて何も言えんな、以前君の連れマリオンに魔術の恐ろしさを散々説教されたの覚えているか？？」

そう、そんな彼光雄は、常に後先考えず行動！！その結果…様々な罠や魔術やらにほいほい引っ掛かり
挙げ句の果てには？？自分の失敗でマリオンの霊装までもボロボロにするありさまなのである…

そんなマリオンにかなりこっぴどく怒られ説教された事を思い出していた…

ハハ♪いけねっ！！そういやぁ～今日もマリオンちゃんプンスカ

怒っていたよなぁ～…ごめんごめんマリオンちゃんっ♪……と??、

あっ!!そうか…俺、一体何を勘違いして……ハハ…

――――マリオンちゃん――――――……今は居ないんだったんだよな……くそっ!!俺はこんな時に何やってんだよっ!!こんな事してられないんだ、早く…早くっ!!

でもどうやってここから……

そんな苛立ちをかくせない彼、葛城光雄を、じっと見つめるステイル、

やれやれ、まったく、こんな時だからこそ冷静にしなくちゃいけないんだがね……と、

そんな又々動揺しはじめた光雄に対してステイルは、色々と思考を巡らして、不敵な笑顔になるステイル、

そして、マリオンに色々と光雄に関して相談されていた事や、その他の恥ずかしいような??事を散々話し始めるステイルだが、そんな彼、光雄は、やはりかなり反応しているみたいで、

「いいッッ!?……す…ステイルさんっ??……ていうか何故それをっ??」

とまぁ～……なにやらさっき迄の落ち込む彼は、何処へやらっ!!一気に無理矢理回復させられるのである、……まぁ…荒療治って

!?奴なんか??

そんな冷や汗したたる彼に更に追い討ちをかけるように…（汗）

「はは……まぁ…色々とな…まったく…マリオンは、君の事をかなり心配して色々言ってたぞ…」

とまぁ～やはりと言って良いのやら……そんな光雄の事でかなり頭を抱えていた彼女のようであった……

「あっ…あはは……」

「まぁ～なんにせよ俺…そんなマリオンを、絶対守るって誓ったからなっ!!…なあステイルさんっ♪」

「ああ…まったくだ、僕達も君と同じだよ…」

と、そんな会話中…光雄の隣側に居た火織だが…何か…とてつもない魔力みたいな物を感じ…その暗闇をじっと見つめる…

その暗闇の向側に何かが居ると…

「えっ！？」

「ふっ…まったく…次から次えと」

「不本意ですが…」

更に、そんなとてつもない殺気を感じ取りステイル達までもその漆黒の闇の向側を睨みつけ！！

「そんな…まさかッッ！？」

「なっ！？何か居るの？？」

「みんなッッ！？早くッッ！！散って！！」

そんな！！火織の叫びに慌ててその場を離れる皆…

瞬間！！

グワンッッ！！と、地面を揺さ振るような地響きと、共に巨大な火炎の塊みたいのが、さっき光雄が居た場所に直撃！！その炎の熱で地面が、まるで溶解炉のように溶け渦を巻く…

そんな様子を何故か、いつの間に演算を開始…すかさず粒子を加速させ、その地点から急上昇！！その真下を眺める光雄、

「うぅわ……危ない危ないっと……」

更に、その炎の光りに照らされ、そのたった今、そんな火炎を撃ち込んだ”何か”が浮かび上がる、

そんな”何か”の姿を見つつ皆は震え上がるが！？…

そんな中光雄は、そんな”何か”の姿を見つめ…

「うおッッ!!ななな……もしかしてあれはっ??すすすげぇー―っ!!炎龍（ドラゴン）の、ご登場ってか!?」

そんな、皆がその化け物に震え上がる中…一人だけ??なんともまぁ～シュールな光雄であった……（汗）

そして、そんな光雄は??その上空から、その炎龍（ドラゴン）の、向側に佇む、妙な姿の男を発見??そんな男に話しかけ?

「なあ!!そこの”おっさん”、これって!?もしかして、”おっさん”が召喚したんか??」

「おっ??おお”おっさん”言うな――っ!!」

「って!?……な!?なにぃ～!?……き…貴様っ、この私が見える…のかッッ!?」

「ていうか…”おっさん”にあんな反応するって…（汗）」

「ああ、見える…っつーか、おまえっ!?その霊装ステルス機能か??、しかしマジこんな恥ずかしい格好、かなり目立つよーな……」

「ていうか、おまえっ!?それとも何デスカーッッ??”おっさん”も変態な趣味デスカーッッ!?」

まぁ…俺も人の事を言えないが…（汗）

と、なにやらかなりその自分の恥ずかしい姿が気になるようで??

「うぐぅ……そ…そんな事言われても、だって…私は……」

とまぁ～…何ともその彼と同じく女装??…もといっ!!魔法変態なキモい”おっさん”と、又々妙な会話を始める光雄……（汗）

と、同じく、何故か??さっきまでの緊張した空気は何処へやらっ!?

その場で、冷や汗を流しつつ固まる三人が??

「あ…あはは……（汗）」
（注：そんな状況にかなりテンパる火織…）

「……バカだあいつ…」
（注：何故か意味不明に固まる元春）

「…い…いのけん…ちゅ…うす……（涙）」
（注：イノケンさんを召喚し損ねイジけるステイル）

とまぁ～…そんな、固まる三人を置いといて…なにやらおっぱじめる怪しげな二人…（汗）

「きき…貴様だって!!…何だ??そのハレンチな格好ッッ!?○ミかッッ!?巴○ミさんのつもりかッッ!?」

「うぇッッ!?ばばバカを言うなッッ!!……おお俺だって好きでこんな格好したつもりじゃ無いんだからねっ!!し…し仕方が無くこんな格好何だからねっ♪」

「あとっ!!そんなおまえこそっ!!」

と、ズビシッッ!!とまぁ〜…”おっさん”に指を差しながら叫ぶ光雄、

「そんなおまえのその格好っ!!人の事言えるのかっ!?…もしかして”あれ”か?”そっち系”なんかっ!?……同じ○ミでも”魔法の天使ク○ィーミー”…」

「ばっ…バカ!!…そ!?…そそれを言うなぁぁぁ――――ッッ!?」

と、そんな彼の恥ずかしい姿を一発で当てた光雄、さすがである…別の意味で…（汗）

そして、なんともまぁ〜そんなク○ィーミー○ミ??…じゃなくて”おっさんは”??光雄にいきなり変態宣言をズビシッ!!と言われ、やはり気にしてたのか??プルプルと顔を赤らめながら、

「きき貴様っ!!いくら貴様が○ミさんでもっ!!…もう泣いても許さん…ゆるさんぞぉー――ッッ!!」

とまぁ〜!?そんな”おっさん”に散々挑発しまくった挙げ句そ

んな彼を本気で怒らせてしまったようで!?……いったい何をやっているのやら……（笑）

「さあっ!!”ユウちゃん”っ、あの魔法少女を殺っておしまいッッ!!」

そして!!そんな只今ボーゼンと、呑気に浮遊する光雄に目がけて処刑開始の合図をする”おっさん”!!

その危険が差し迫りつつある事に未だ気付かない光雄!!…まさに絶対絶命か??と、更にそんな時…彼が浮遊する真下でそんな彼に叫び、必死に呼び掛ける人物達が!!

「へっ??……（汗）」

「おまっ!?…こらっ光雄!!更に挑発して…はっ!!早くっ!!そんな場所に浮いてたら良い的になるだけだろッッ!!…早く下りて来てこっちの防御術式の魔方陣に避難するぜよ!!」

「くっ!!ど素人が…やむおえんっ!!『Ｆｏｒｔｉｓ９３１（我が名が最強である理由をここに証明する）』っ!!」

「この私に名乗らせるとは…『Ｓａｌｖａｒｅ０００（救われる者に救いの手を）』ッッ！！光雄さんっ！！早くっ！！私の後ろへっ！！」

そして、その場に緊張が走り！！その迫り来る炎龍（ドラゴン）に光雄を守りつつバトル開始かッッ！？

とまぁ～…そんなはずだったが？？

「あっ！？あれっ？？」

「「「……なっ！？……」」」

と、そんな、炎龍（ドラゴン）だが、そんな”おっさん”の命令を無視♪、しかも？？なにやら！？…さっきのまでの彼等の会話が長引いたのか鼾（いびき）をかきつつ昼寝中みたいのようである…（汗）

「ええっ!?な…なな、何をしているんだ??…ハハっ…ハハハ」

「ふぅ～…まったく、緊張して…まぁ…今の内に、」

「そうだな、逃げるチャンス到来だにゃ!!それより光雄っ…アンタ……（汗）」

「はぁ～…まったく一時は、って??……なっ!!」

「ふ…ふふ…光雄さんっ…さっき私が言ったのは、後ろ側に隠れろと…」

と、そんな皆が冷や汗をかきつつ見つめる中、光雄はというと??

「は…早く……」

「う??うへっ!??……」

そんな、彼は先程かなり慌てたのだろうか??…どさくさ紛れに

??なんとっ!!

そこに居る火織様に抱き付きつつさらに、その手は無意識の内に彼女のデカイ物にッッ!?…（笑）

そんな状況の中なにやら顔を赤らめつつプルプルと震える火織様が??……（爆♪）

「早くこの私から離れろって言ってんだろうがこんの変態野郎がぁぁぁぁぁ――――――ッッ!!」

「ヒッ!?ひぃぃぃぃ――――ッッ!?」

とまぁ～…そんな彼女の超必殺!!七閃が襲い!?そんな斬撃から逃げまくるありさまのようで…（笑）

「ふんっ…まったく彼は、何をしているんだか…呆れて何も言えんな、」

「いやいや、まったくぜよ……（汗）、ま!!とにかく、そんな事をしているよか

……ん??おいっ!!ステイルっ…あれは??」

「ん??なんだ…別動隊か??」

そんな光雄達が、アホな事をやっている最中、なにやらその広場に又々別動隊が到着した様で、そんな奴等は一体ここは??みたいにキョロキョロと…そして、そんな彼等だが??……

◇◆◇◆◇◆◇……

「ハァ〜…しかし、〇ミさんに合流する所か、こんなに迷うとは、しかもさっきは謎の水攻めから逃げまくったあげく…こんな」

「て言うか、ジュンタが、そんな知らない姉ちゃん連れてくるからだぞっ!!」

「ああ〜!?、うっせぇなこのハゲっ!!おまえこそさっきから事ある毎に〇ミさん〇ミさんって…あぁ〜いやだいやだ、そんなに光雄さんに会いたかったらさっさと自分で勝手に行けってんだ!!」

「うぅ…そんな事言うなよ～、お…俺だってよ～……」

「なあ、オリアナの姉さんっ！！本当に俺達ちゃんと進んでいるんだよな～」

「うふふ♪……ほぉ～んと……あなた達ってせっかちね♪♪
そんなせっかち君は、彼女に嫌われちゃうぞ♪」

「いや…まぁ…俺達彼女いないし…（汗）
それよか、姉さんっ！！早くこんな場所から…」

「もう…焦らないっ！！……そんなせっかち君達にほらっ♪彼方側を見てみなさいっ……」

そんな、オリアナが指を差す方向に皆が注目し、その先に居る人物達を発見！！そしてっ！？

「うおっ！！あれは？？」

「光雄さんだっ！！」

「「「……おぉ～い○ミさぁ～ん……」」」

とまぁ～そんな向こうに居る光雄に皆して一斉に声をかけ、

そんな彼等になにやらもしやっ！？あの時のファミレスでのあいつらかッッ！？みたいな？？ビビる光雄なのであるが？？…

「うおっ！？……な何だ？？、つか…あのスキンヘッド……もしやっ？？あいつらかっ！？しかも…その向こう側…お…オリアナさんまで？？」

てな感じで無事にオリアナ達とも再会を果たしたのである！！

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆……

数分後……

そんな中、そんな奴等と…合流し光雄はこの場から、そしてあの火龍（ドラゴン）と、謎の召喚系魔導師から逃げるべく色々と皆で作戦中なのである…

「ハァ～……とにかく人数は揃ったのは良いが、ここを打破する手立ては無しと来たかぁー」

「だよな～……まぁとにかく今は”あれ”を何とかしないかぎりは無理なんだがなぁ～」

と、いつ起きて襲って来るか分からん炎龍（ドラゴン）、そんな状況に皆して、途方に暮れる有様なのであるが??そんな中、元春は、自分の隣側何げに置いてある、ある物に気付き??

「所で、さっきから気になるんだがにゃ??そこのアンタ…」

「えっ！？」

「ジュンタっ！！おまえだよおまえっ！！」

「うおっ！？なっ…何すか？？」

そんな元春に言われ、自分かっ！？みたいにキョロキョロするジュンタだが、そんな彼に、今度はステイルが？？

「ふんっ…まぁ～君達には興味無いから安心してくれたまえ、それより君が今持っている”それ”に興味があるのだがねぇ～…」

とまぁ～…そんな彼の隣側に何気なく置いてあるかなり大きなバック、そんなバックに皆さん興味津々のご様子である、

「これすか？？これはたしか、此処に来る前に…たしかあの橋の上で白井さんが置き忘れた物なんすが」

「これだぁッッ♪♪おまえっ！！でかしたぞっ♪」

と、思わずよっしゃぁぁぁぁ――――――ッッ！！と叫ぶ光雄っ、いったいそんな彼は何が閃いたのやら??

「「「……ええっ！？……」」」

そのいきなり叫び出すそんな光雄に皆が反応し！？そんな中、元春までもなにやらニンマリと、

そんな様子の光雄達にやれやれ…と呆れ顔のステイルなのである、

「ハァ～…光雄君、君は又々素人の浅はかな事を考えているのか？？、たしかにそのバックは、気になりはしたが…」

「たしかに、あなた方素人の発想には、私達に無い物がありますが、ですが、ステイルの言う通りです、そんなあなた方の発想の為に皆を危険に曝すのは、私は反対しますっ！！」

「うぅ…神裂さんでも…しかし…」

そんな、マリオンが持って来たであろう魔法のアイテムバック…

そんなバックを使いこの状況を打破!!とまぁ～…そんな素人である光雄の考えなのだが??

ヤハリ魔術師(プロ)の考えは違い、そんな素人一人の考えで、皆を危険に曝すのは、やはりリスクが大きいみたいなのであり…

そんな中、黙り込む光雄を横目に、今度は元春が口を開き、

「い～んや…今回の彼の閃きにゃ～…俺も同感なんだがねぇ～…なぁ～み・つ・えく～ん??…いんや、○ミさんだっけかにゃ??”勇者○ト”の剣??とかぁ～??…もしくは”レイ○ング○ート”とか??喜んで使わせて頂きたいんだがにゃ～…」

「いや…土御門さん…そ…それ以上は!?…ていうかそんなん無いから…あっても使わんし…（汗）」

とまぁ～…そんな怪しげな??マリオン様の魔法のアイテムバック!?

そんなバックの中身にゃ～!?一体全体なにやら非常に得体の知れない”何か”に既に気付いているみたいな元春なのである……しかし…その、彼女のバック…なにやら非常に嫌な予感が??

◇◆◇◆◇◆◇……

更に??数分後??

そんな、なにやら怪しげな事になりつつある皆を無視しつつ、未だに炎龍（ドラゴン）の”ユウちゃん”が起きず??格闘中の”おっさん”、しかし…そんな中、一人の魔法少女??いや…魔法変態が近づきつつあり…

そんな彼、光雄の手には??とある物が??

その、彼の後方から眺める皆……そんな皆に彼は!?ぐっと♪親指を立て、正に、俺に任せろっ!!と言わんばかりに余裕な表情である…

そんな、皆の思いを一心に彼の考えた、炎龍（を、一撃でノックアウトっ！！なおかつ、この広場のスンゲー結界をも破りここから脱出ッッ！！とまぁ～…そんなハリウッドさながらのミッションが、只今発動されたのであるっ！！

◇◆◇◆◇◆◇◆◇…

一方その頃…当麻達は??

「ふぅっ…ふぅっ…ハァ～…何とか逃げきったぞぉぉ～っ！！…」

「ったく、あんな場所に水路があるなんて、聞いて無いわよっ！！あぁ～もぅっ！！服はびしょびしょだしっ！！」

「つか、やったのおまえだろっ!?俺に文句言うなよ!!」

「で??はて??光雄さんは??まさかっ！！」

「いや…多分奴の事だ…大丈夫だろう」

「まぁ、彼は、一様ＬＥＶＥＬ５だし、所でマンスレンさん…どうやらわたくし達、何とか外に出れたのはいいのですが、ここは??いったい、何処ですの??」

と、そんな事言いながらその遥か向側にうっすら見える建物に向かって歩きだす黒子だが??

「なっ!!ばかっ!!そっちに行くなっ!!」

「あん!?だぁ〜れぇ〜がバカですのっ!?」

と、そんな行こうとする黒子にバカ呼ばわり、そんな彼の言葉に反応し近づく彼女だが??

「だ、だから、そっち…これ以上行くと結界がっ!!」

と、まぁ〜…そんな慌てふためくマンスレンのそんな様子に、なにかあちら側に居た当麻達も何かしら気付き、

「結界かっ??だったら、んなもんぶち壊しゃあ～いいんじゃねえか??」

そんな、何げにけろっと軽く言う当麻、そんな当麻の右手には、そんな結界どころか、魔術だろうが神様だろうがお構い無く撃ち消せる何かしら秘密があるのだが…

当然、そんな秘密も知らないマンスレン…

「えっ!?そんなむちゃくちゃなっ!?上条君だったか??君は、その結界の恐ろしさが分かって無いみたいだな、まっ、このさいだから素人の君達に説明すると、そもそも結界とは……」

と、なにやら語り始めるマンスレン…そんな彼に美琴はなにやらかなり余裕な表情で??

「あ～はいはい、んな事クドクド説明するよか、よ～するに、アンタ等が言う結界って、ようは魔法でしょ??」

「えっ!?…ま…まぁ～、君達からしてみれば確かにそうだが、」

「そんな君もさっきみたいな、超能力だったか??しかしなぁ～…威力はある!!、だがそれだけじゃあこの複雑な入り組んだ結界を

突破するのは、…」

「って！？」

「上条君ッッ！！だからダメだって！！そっちに行っちゃあ！！」

そんな、慌てて引き止めるマンスレンを無視し、
突き進む当麻、そして、

「ああ…分かっているさ、これがどれほど危険な物かぐらい」

「だけどさ…」

「なぁ～…マンスレンさんよぉ～…こんな結界だろうがなんだろうが、俺の知ったこっちゃねぇ～んだよ…」

「その先にただ一人淋しく待っている俺達にとっちゃぁ～大切な友達が！！いやっ、そんな仲間が待っている、そんな友達を妨げる物は何もねぇ～んだ、」

「だからっ！！こんな壁ッッ！！そんな俺達を阻むような壁がある
と言うなら、そんな物は…」

「そんな俺達を阻む物はどんな物だろうと！！」

「ぶっ壊すッッ！！」

そんな台詞と、共に振り下ろされる当然の右手！！
その右手に結界が触れたのかっ！！

バギィッッ！！

と、何とも何かしら撃ち砕くような独特な音と、共に周りのそん
な空間事態も無理矢理ねじまげ！！バリバリと、空間事…まるでガ
ラスの板みたいに崩れ落ち！！

そして、マンスレンは、そんな信じられん光景を目の当たりにし
その顔は、かなり引き連り…

「うっはぁぁ――――ッッ！？な…ななんじゃ？？あの常識を無
視したチート過ぎる技はぁぁッッ！？」

とまぁ…そんな当麻にかなりビビったのかっ??口をパクパクさせつつ鼻水を垂らし…固まってしまうのである…（汗）

そんな、彼を横目に、黒子達は!?

「まったく、ばっちいですわよ??そんな些細な事でビビるあなた、大丈夫ですの??」

「まっ!!ビビるのもしょうがないかもねっ♪あいつの能力はズバリ!!どんな能力でも撃ち消す能力なんだからっ!!」

とまぁ～…只今アングリと固まる、マンスレンに対し、ふふんっ!!どうよ♪

てな感じに、まるで自分の事のように自慢げな美琴なのである!!

そんな、美琴達に、後ろを振り向きつつ、

「さあっ!!厄介な結界は無くなった訳だし、マリオンを助けに行

こうぜっ！！」

そんな、爽やかな笑顔で皆に話し掛ける当麻、

そしてっ！！

「言われなくてもっ！！さぁ～て…皆っ！！行くわよッッ！！」

「さあっ！！ほらマンスレンさんっ置いてきますわよ」

更に、暫くして??我に帰るマンスレン……しかしそんな当麻達は遥か遠くに小さく見え…既に、置いてきぼりな彼……

「うえっ??……あ…ああ、よよ…よしっ！！……って！？ち…ちょっとまてまってくれよぉ～…」

とまぁ～…そんな当麻達を追い掛けつつ走るマンスレンであった、

そして、そんな当麻達もマリオンを助ける為にミッションを開始！！

地下の光雄達、そして地上からの当麻達！！

そんな、彼等のミッション…その目的地マリオンの居る場所を求め、二つのグループ、正に上と下で開始なのである！！

果たして、そんな彼等はあの強敵サラ・ウーデットを撃ち破り、無事にマリオンを救出出来るのであろうか！！

そして、只今行われようとしているあの恐ろしい魔物、炎龍（ドラゴン）を倒し地下から脱出！！なおかつマリオン救出とまぁ～そんな光雄が考えた秘策とはっ！？

又々このまま次回へ続くッッ！！

第二十一話　ペットを飼う時はほったらかしにしないで下さい……（汗）（後

あ…あはっ！？

な…なにやら展開がかなり……このパターンって！？
正に、ティ○ズ？？
って！？ちがうちがうッッ！！

ま…まぁ～次回もこんなパターンだが…
”じゅもん”やら”どうぐ”やら！？
いやいや…早く…こんな安いＲＰＧパート終わらしたい…（涙）

じ…次回もお楽しみに～…（汗）

第二十二話　あ…あの～…むやみやたらにペットに餌を与えると、トンデモな事に…

ははっ…ここ今回は??一言で言えば!?”カオス”ですハイ……

（汗）

ていうか…ヤハリと言って良いのやら??シリアスが段々と本来のドタバタギャグ要素満載になりつつ…（汗）

ま…まぁ～きっと大丈夫??っつー事で♪

光学の超高密度収縮粒子砲戦記♪始まり始まり～♪♪

第二十二話　あ…あの〜…むやみやたらにペットに餌を与えると、トンデモな事

――――――とある洋館、その一室内、その薄暗い一室の中央に設置してある固定式のレトロな机、その机の上に設置してある怪しげな光を発する水晶…そんな水晶に照らされ浮かび上がる人物達が、その人物の一人オスマン帝國第四十三代大神官大魔導師サラ・ウーデット…そんな彼の顔は、まるで悪魔にでも取付かれたかのような邪悪な表情でその水晶を見入る、

「ふふふ、クラーク、見たまえっ♪又々我が鳥籠（とりかご）の密閉式空間にネズミ等が引っ掛かりおったぞっ！！」

「うむ、予想通りと言う所か、ふふふ…しかし彼等も哀れな者よのぅ〜…」

そんな嘲笑うサラを横目に自分の髭を片手で撮み伸ばしながらその隣側に位置する老人、クラークもそんな光景に嘲笑いながら、

「ふふふ……♪♪確かに…無論もしもあの魔導師を敗ったとしても、常にその空間を投影増設し具現化している式者事態を、見つけ出さなければ……ふふふ…さあっ…どうする？光を持つ者よ…」

そんな、奴等が創り出した、そんな怪しげな空間を、はたして光雄達は無事脱出出来るのだろうか！！

◇◆◇◆◇◆◇◆…

一方、そんな邪悪な彼等が見入る中、正義の魔法戦士達御一行はというと！？

光雄は、今正に皆が見守る中、未だ眠り続ける獰猛な生き物、炎龍（ドラゴン）と、その炎龍識者（ドラゴンマスター）、”おやじ”に、そっと…そして悟られ無いように近づきつつあった、

そんな彼の右手の中にある鮮やかな色をしたあるアイテムが？？

…これは一体？？

そんな、彼の様子を手に汗握る奴等、その中の一人、スキンヘッド（注：原作でも名前が無いから??）

「なあ、ジュンタ…〇ミさんがさっき持ち出した物って一体何だろうな、」

「さあ、俺にも…何かは分からんが…とにかく一撃で象も倒す代物らしい事は、たしかだが…う～ん…」

そんな、彼等の会話を聞きつつ何やらニヤケる元春……そんな彼は??

「うんにゃ!!多分、さっき彼が持って行ったのは??ズバリッッ!!”ソ〇ルジェム”だったかにゃ??」

「「「……ええッッ!?そ…ソ〇ルジェムぅぅ～ッッ!?」」」

「いやっ!?ままままさかっ!!光雄さん変身するんか!?」

「すすすげぇぇ～っ！！本物の魔法少女ってかっ！？だったらこんな炎龍（ドラゴン）だろうが結界だろうが余裕でッッ！？」

「そうそう、更にっ！！そんなラスボス？？までも一撃でッッ！！」

とまぁ～…なにやら、元春が、そんな彼等をからかい半分で言った事を超真に受けつつ盛り上がるバカな奴等？？

そんな、彼等をかなり呆れ顔で眺めるステイル達なのだが？？

「ハァ～…やれやれ、いくら僕達魔術師でも魔法少女みたいな、あんなバカげた能力なんか……まったく呆れるのを通り越して笑ってしまうよ…」

「へぇ～？？そんな事を言うステイルくんっ？？もしかして？〝魔法少女〟とか知っているみたいだにゃ～？？…」

「ばッッ！！……な何を言いだすかと思えば！！そそそんな…僕

は、魔法少女なんか知らんしっ！？馬鹿馬鹿しいとっ…」

「うんにゃ…そんな事を言っていいんかにゃ～？？
たしか…アンタの部屋で高機動魔法……」

と？？只今冷や汗滴るステイルに、留めの一言を言おうとする元春だが？？

「ふっ…それより彼方側の彼、光雄君だが…今、無事に炎龍（ドラゴン）に取り付いたみたいだぞ♪」

とまぁ～…いきなりスル～……更に？？只今あちら側の光雄の話題に無理やり持って行く彼…

さすが自ら、俺はっ！！魔法少女大好だぁぁぁっ！！どうよっ♪♪みたいな？？
そんな地雷を踏むような真似を？？…さすがである（汗）

◇◆◇◆◇◆◇◆◇……

一方、そんな彼…光雄はと言うと??

よ…よよよぅ〜しっ!!何とか奴に、覚られずたどり着けたぞ♪

あとはっ!!”こいつ”を奴の口に放り込みさえすれば……

とまぁ〜…そんな彼は只今右手に握り締めているとあるアイテムを眺めつつ、さっきオリアナに言われた事を思い出すのである…

この魔法の薬はマリオンの愛用している魔物封じの薬らしいと??

しかしっ??

「えっ??……つか…何これっ!?」

て??

そんな、彼がさっきまで大事に握っていたのは??なにやらマリオンの愛用なのはたしかなのだが??

「げえええッッ!?どんな料理にも一撃で美味い……こ…香辛料って!?」

しかも…更に彼の身に降り掛かる災難が??

「「「……おおーーいっ!!〇ミさんっ!!早く変身して下さいよぉぉーーーっ♪♪」」」

「いいッッ!?つか…バカバカッッ!!こんな時に、皆して大声出すなっつーのっ!!」

とまぁ〜…あちら側で、なにやら勘違いみたいで盛り上がる彼等……

そんな、彼等の　大声で、なにやらそんな”おっさん”も気付き…更に起き出す炎龍(ドラゴン)！！まさに最悪の事態になるはずなの

だが？？

しかしっ！！その結果、何故か

何をとち狂ったのか

そんな炎龍の口に放り込みそこねたあげく間違えて持って来た香辛料…それをあわてて手放したが良いが勢いあまって炎龍(ドラゴン)の鼻の穴にスッポリと！？

それに気付くおっさんも振り向いたが？？

「えっ？？……きさま？？」

「あ……あはっ♪…あははっ♪♪」

しかし！！一番の問題はそんなおっさんよりも…そんなん鼻に射

した炎龍（ドラゴン）であるっ！！

その、何とも……只でさえその”香辛料”を口に含むだけで超激辛な（多分タバスコ以上！？）みたいな香辛料…そのような！？

かなり危ない？？代物をよりにもよって”鼻の”中に突っ込まれた日にゃ～…当然！？

「へっ？？」

「あっ！！　」

「ぐ…ぐぐぐ……」

（注：目尻に涙を浮かべる炎龍…（汗））

「「ひっ！？」」

「グモモッッ……」

「グモォォォォォォ――――――――――――――――――――――――――――――――ッッ！！」

「「ヒィィィィ――――――――――――――――ッッ！！」」

とまぁ～！？もう何ともかわいそうに？？驚き飛び起きる所か目をスンゲー見開きもぅ～鼻水涙（ハナミダ）をぶちまけながら超悲惨な表情でスンゲー暴れだす炎龍（ドラゴン）

もう、あのトランス状態の黒子様をも凌駕する！！超高速スイングで頭を所構わずバキバキとッッ！？

しかも！！火炎弾をまるで艦砲射撃の如く大量に！！

そんなとんでも混乱（カオス）を造りだしてしまった彼等は？？そんな、暴れだす炎龍（ドラゴン）から二人仲良く？？腕を組みつつ逃げ惑う始末であるっ！！

◇◆◇◆◇◆◇◆◇……

一方そんなとんでもな事態になりつつある事に気づかいアホな彼等はと言うと??

「へぇぇっ♪♪ステイルさん…アンタも実は…」

「ば…ばばバカを言え!!そそそんな下らん物にだなッッ!!」

「いやいや、ジュンタ君の言うとおりッッ!!そんな顔を赤らめて否定するもんじゃあ～無いぜよっ♪♪」

「なあ!!ねーちんからも??って!?」

「あ…あの～…神裂さん??もしも～しっ…（汗）」

「あれ??スキンヘッド達もどうしたんかにゃ??」

とまぁ～…そんな只今、光雄が居るであろう方向を見つつ冷や汗をかきつつ固まる火織とスキンヘッド……

そんな火織達に気付きつつ皆がその光雄が居るであろう方角に振り向くと!?

「「「えっ??」」」

それはまさに何があったんだかまるでレシプロ機のプロペラの如くスンゲー勢いで頭を超高速回転しながら暴れまくるとても普通じゃ無い??炎龍(ドラゴン)……

そんな、変態と化した炎龍(ドラゴン)から涙を流しながらなんともまぁ～超悲惨な表情で逃げ惑う光雄&おっさん!!

とまぁ～…そんな変態軍団がスンゲー勢いで只今元春等が居る位置に差し迫る状況なのである!!

「ちょ……」

「ヒィィッッ!?…」

「おいっ!!こ　こここっちに来るぞっ!!」

「逃げましょうっ！！」

「「「「ヒィィィィ――――――――――――――――ッッ！？」」」」

そんな、暴れ狂う炎今度は光雄達に続き皆一斉に必死に逃げ惑う始末なのである！！

◇◆◇◆◇◆◇◆◇…

一方そんな変態的混乱（カオス）と化したそんな状況を只今水晶越しに眺めつつ冷や汗を流しながら固まる二人が……

「……」

（注）：何やら鼻水をたらしつつ謎の停止中に陥るサラ）

「……はは…」
（注：口をあんぐりと、同じく固まるクラーク…（汗））

そんな、さっきまでの、あの邪悪な雰囲気は一体何処へやら??な二人である……（汗）

そんな中、突然慌てたようにドアを勢い良く開けその一室に入って来る兵士達!!

「サラ大魔導師様ッッ!!しっ失礼しますッッ!!只今大変な事態がッッ!!」

「……」
（注：未だ機能停止中のサラ）

「あ…あのぅ～…（汗）」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇……

数分後??

「なっ!?ななな……なんだとぉッッ!?」

「ははっ!!たしかに何者かによって我が完璧なる結界が破壊され消滅ッッ!!」

「ま…まさかッッ!?バカなッッ!!奴等の中にそんな優れた魔術師がッッ!?」

そんなまさか結界が破壊された!?と、とても常識じゃありえない!!そんな信じられない状況にかなり混乱の表情のサラ・ウーデット…

「更に!!そんな結界の破壊によって、呪術室の我が魔導機の魔法石も粉砕ッッ!!多数の呪術者が負傷ッッ!!」

「なっ!?……し…して??結界の再構成の復旧は??ま…まさかッッ!?」

「ざ…残念ですが、我が結界は……もう……この次元城も消滅するのは時間の問題かと……」

次の瞬間…そんな信じられない事態にその場で膝をつき頭を抱えるサラ……

そんなどんな優れた魔法を持ってしても難攻不落の無敵の結界、そんな非常識な状況に、サラに初めて芽生える今まで経験もしなかった感覚……”恐怖”を……

サラ・ウーデットは、後悔していた、けして敵に回してはいけない奴等を敵に回した事を……

そして、彼は知る、この学園都市の能力者の力と、幻想殺し（イマジンブレイカー）…その恐怖を……

はたして、そんな状況を機に、光雄達は一発逆転になるのであろうか！！

更に、マリオンを無事に救う事が出来るのだろうか！！

又々無理やりだが次回へ続くっ♪♪

第二十二話　あ…あの～…むやみやたらにペットに餌を与えると、トンデモな事

さ…ささささぁ～て……残す所も後少しでこの安いＲＰＧパートも終わりだなぁ～……うんうん♪

その後は、よーやっと原作（まぁ…暫くは科学話だが）に起動変更と♪♪後々の光雄＆当麻達率いる正義の魔術師達ＶＳあのＡＩＭの怪獣との夢の展開?…いやいや

まぁ…次回も同じパターンでと言う事で

次回もお楽しみに～♪♪ハハ

第二十三話　その、滅びゆく城の中で…（前書き）

いやいや…何故か、今回は短いが…まぁ～次回のこのパートの最期の長編への序章みたいな話しのつもりで書きましたっつー事で??

前回と、ガラリと変わり、ちとシリアスで行きます…

てな訳で??

光学の超高密度収縮粒子砲戦記ッッ！！

始まり始まり～♪♪

第二十三話　その、滅びゆく城の中で…

――ここは、この次元城の様々な情報を集約する、言わばここの物質を制御する制御室、だがそんな室内は、まるで戦場とかしていた…

数分前に起こったこの城の周りを囲む総ての防御結界の喪失…そう、上条当麻による、幻想殺し（イマジンブレイカー）によって、総ての結界が一斉に無くなり、それが仇となり、そんな総ての制御装置が大破!!その結果、最悪の事態に陥る事になるのである!!

グワンッッ!!と、連続して再び爆発を繰り返す魔法制御室内…その中心を担う人工で創られた魔法石が暴走し、完全に沈黙しているのである!!

「魔導機装置（マジックストニング）ッッ!!機能停止ッッ!!」

「だっ誰かっ!!…助けてくれッッ!!ここにっ負傷者がっ!!くっ……」

「ダメだっ…あちらは危険過ぎてっ!!諦めるな!!早くっ!!衛生兵を!!」

そんな負傷した呪術師を励ます兵士達、しかしそんな彼を救う事は不可能…そんな事実を打ち消すかのように、叫び続ける兵士達、そんな中…もうここには、これ以上居たら危険と判断する士官が！！

「いかんっ！！このままでは、この装置の魔力が暴走！！この魔法室事態が消滅しかねないっ！！」

そして！！

「誠に残念であるが、これ以上ここに滞在しうるのは危険と判断！！まったくもって、如何ながらここ制御室を放置する！！全員直ちに退去せよッッ！！」

そんな士官の一言で皆がゾロゾロと、ここの制御室から退去して行く、

只今そんな光景を、うっすらとした虚ろな眼で、眺める一人の男……その破壊された魔導機の破片に身体を挟まれ脱出したくても出来ない負傷した魔導師、

そんな彼は、その傷の為か、意識が遠退いて行く中…ふと、その一室の天井を仰ぎつつポツリと――――――

――――――そうか…僕の人生は、こんな場所で幕を降ろすんだな

あ～……と――――――――――――――――

――――――――――――――――

――――――――――――――――

◇◆◇◆◇◆◇◆――

――あれからしばらく、どれ位時間がたったのか……そんな中、再び意識が快復する彼――

――そんな、思考の中……

――この一室に赴くある一人の少女が……

その少女はその暴れ暴走する半壊した魔法石にそっと、優しく語り掛ける…

「大変だったね…本当に…あなた達…もう大丈夫だから…あなた達を縛る苦しみも…そしてそんな哀しみも……だからねっ♪」

――――――そんな、疲れきった…魔法石の聖霊達にそっと、優しく手を当てて語り掛ける人物、

「おまえっ!!は…早くっ!!此処から逃げろ……」

そんな、自分の身体よりその佇む幼い少女に、必死に叫ぶ彼、

その彼の声に、応えるかのように振り向き、そっと優しい笑顔で、

「大丈夫だよっ!!この聖霊達は、きっと怯えているだけだからっ!!この子達を何とかするし、あなたも助かるから心配いらないよっ♪♪」

そんな優しい表情で、そんな彼に語り掛け、そして、そんないつ爆発してもおかしく無い危険な状態の魔導機に近づく彼女……

そんな彼女は??

そんな、崩れ行く制御室の、半壊した魔導機の前に佇む人物…

そんな中……その人物にまるで答えるかのように再び輝き出す魔法石……そして、……その魔法石がその優しき彼女に応えるが如く輝きを増し、そして…消滅した……

その光の粒子がキラキラと、降り注ぐ中、その彼女の眼から、一筋の涙が……

「本当に、辛かったねっ、でも大丈夫だからね♪だから！！もう、二度と悪さはしないでね！！」

そんな、消え行く魔法石の聖霊達を見送るように、そっと上を見上げる彼女、

その彼女の顔を、眺めつつ傷ついた魔導師達が、口を開く……

やはり、マリオン様だと……

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆……

一方その頃、

魔力を失われ、消滅するのも時間の問題な、そんな次元城の広い中の通路をひた走る数人の人物達が居た!!

「ったくっ!!やっとこさ到着したと思えばこんな騒ぎに!!……んっ…とにもぅ～ッッ!!なんなのよ!!」

「ハァッ…ハァッ…俺に降るなよ!!、つか!!早く問題のマリオンを探さねぇ～と…マジヤバイぜ!!」

「ねえ!!マンスレンさん??本当に、わたくし達、ちゃんとマリオンさんが居る所に向かっているんですの??」

「ん～…それをはっきり言われると……」

「「「……えっ??……」」」

そんな、曖昧な事を迂濶に口にした、マンスレン……そんな彼に

「ちょっ！？」

「あのねぇ～ッッ！！こんな時にそんないい加減なあなたッッ！！はっきり言って、最低ですわよッッ！！……聞いてますの？？……だ・か・らッッ！！そんなたい……」

「ねえ、黒子……そこまで言うこと…」

「お姉様は黙ってッッ！！
」

「うぅ～　そんな気合い入なくても…」

そんな、なにやら、そんな彼のいい加減な態度に等々ぶち切れる黒子!?、そんな黒子に散々説教されかなり凹むマンスレンなのである……

そんな、只今後方でヒートアップ中の黒子達を置いといて、そんな前方を歩く当麻…そんな当麻の目には??その遥か向こう側に歩み寄る人物達を発見!!

すかさず走り寄る当麻だが……そんな当麻達に、遥か向こう側の人物達も気付いたみたいである、

そんな向こう側の人物達は??

「誰かっ!!早く手をかしていただけないでしょうか??」

と……

そんな人物をマジマジ見つつ、そんな当麻は??驚きながら、話し

かける…

「なあ、もしかして、おまえ??マリオンか??」

と、そんな人物達も何か気が付いたみたいで??

「あっ!!もしかしてッッ!!上条…さん??」

そして、そんな崩れ行く次元城をバックに、再開する当麻達とマリオン達!!

そんな、彼等に遂に再開を果たすマリオンだが??

なにやら謎めいた状態で??―

次回へ続くッッ!!

第二十三話　その、滅びゆく城の中で…（後書き）

なにやら非常〜に中途半端やな〜…ハハ、しかも主人公の光雄出て無いし…

さてっ！！次回は??そんな中、当麻達は??光雄達と合流??そしてその先に待っているのはッッ！？

次回お楽しみに〜♪♪

第二十四話　栄光は遥か彼方へ、そして滅びへの、レクイエム（前書き）

まずは、最初に??

このパート終わりませんでした……

なにやら活動報告で終わり宣言したが!!

無理っす!!

そんなわけで??何回か別けて進みますっつー事で??

光学の超高密度収縮粒子砲戦記!!

始まり始まり～♪♪

第二十四話　栄光は遥か彼方へ、そして滅びへの、レクイエム

――――――――かつての繁栄、そんな栄光も権力も力も総て深い奈落の底に沈みゆく帝國、

――――――トルコ共和国

――――――――現在の国名である、そんな国は、その遥か昔、オスマン一世と名乗る人物が、アナストリア…言わばアジアの西北部に勢力を確立…

西暦１２９９年建国、その時代オスマンは、周辺のキリスト教徒、ムスリムの軍事集団と同盟したり対立したりしながら次第に領土を拡大、

のちに”オスマン帝国”　へと発展する……

西暦１３２６年、オスマンの後を継いだオルハンは、東ローマ帝国の地方都市プロウサ……まぁ…現在はブルサだが……そこを占領

し、その先のマルマラ海を含むヨーロッパ大陸や東ローマ帝国首都コンスタンティノーブルをも占領

そして、次々に周辺の小さな国々もオスマン帝国に下るのであった……

しかし!!そんな栄光と繁栄もそう長くは続かないのである!!

表向きは普通の帝国を装い、その裏側では、魔術、魔導、魔法の発掘…及びその聖霊石の発掘……そんないにしえの禁断の間違えし力…”魔力”に特化した国家とも言われ、何人たりともゆるがない強大な魔界に君臨する軍事国家とも恐れられていた…

そんな中、第一次大戦、その大戦を境にして…近代国家へ急遽急ぎすぎ、そんな軍事的政治的な問題で国が疲弊し衰退し……

その後に、王家の暗殺!!王族の消滅、そして滅びの道を歩む…
…しかし、その中で人知れず滅ばないで存在していた本来の魔力の帝国、もう一つのオスマン帝国……そんな帝国も、やはり……滅びの道を――――――――――――――――

◇◆◇◆◇◆◇◆……

度重なる、爆発、そして魔力を失い、崩壊する次元城、あたかもオスマン１２００年の栄光の最期の時、

その崩れ行く次元城の一室で、真っ赤な血溜りの中に佇む一人の老人が……その老人の足元には、

元第四十三代オスマン帝国大神官大魔導師サラ・ウーデットがその血溜りの中に倒れていた……

「ふん……愚かな奴め、だから言ったのだよ！！そんな魔法石の聖霊を集めるような甘い考えより、暗黒に君臨せし者の力の解放をな……ふふふ」

そんな、ある艶めかしい存在の物の発掘……そんな封印され眠りし産物をただ己のコレクションとしてただ眺めるだけのサラ、そんな物を扱うよりも三つの魔法石を用いて世界を統括する野望を抱く、そんな彼を前々から否定……そんなまどろっこしい魔法より、対する魔物を扱うほうがより簡単に、世界を支配出来ると……

そして、今回の次元城の魔法石の破壊に伴う…この城の崩壊……
それを、こともあろうに、その混乱を利用し、彼の直接の次官でもあるサラを、殺害!!

そんな、彼はいよいよ己の欲望を満たす為にあの禁断の過去の産物、悪魔が、保管されているであろう場所に、赴くのである!!

◇◆◇◆◇◆◇◆◇……

そんな邪悪な野望抱きつつ悪魔を復活させるクラーク……未だそんな事が起きている事を知らない当麻達は??……

――――――おまえ…マリオンか??……

――――――そんな、彼方から歩み寄る当麻達を見つつ、なにやら安心したのか、その場に膝をつくマリオン、

「も、もしかして、上条さん？？」

そして、そんな当麻の佇む位置から走り寄る数人の人物達、

「ったく、そんな所で何つっ立んのよ！！早くマリオンさん探さないと！！」

「ん？？ああ…そうだなそれよかあっち側見てみろよ…」

と……そんな事を当麻に言われそのまま立ち止まりつつその向側の人物を見つめる美琴……

――――――あっ！！まさか！？マリオンさん？？

「ああっ！！もしかして…御坂さんっ！！」

そんな、崩壊する次元城の中、マリオンは、そんな彼女の大切な仲間達に無事再開を果たすのである！！

◇◆◇◆◇◆……

そんな、只今上でマリオン達が当麻達と無事合流を果している中、光雄達団体さんは？？

グルルル……

そんな、さっきまで”変態”だった炎龍（ドラゴン）なのだが急に唸りながら動かない様子に？？恐る恐る…岩の影から二人仲良く除く光雄と”おっさん”……って言うか？？いつの間にか仲良しな”コイツ等”って…（汗）

「おいっ！！”おっさん”なにやらあの炎龍おとなしくなったぞ？？」

「おっさんじゃないッッ!!ラスカルだ!!私はこう見えても若いんだぞっ!!」

「いや…ラスカルって…（汗）」

と…そんなさっきまで炎龍（ドラゴン）が大人しくなった為なのか、その彼等がいる位置からかなり離れた位置でそんな様子に胸を撫で下ろす元春達だが…

「ふぃ～……一時はどうなる事かと、でもまぁ～…な～んか、あちら側かなり落ち着いたみたいだけど、どうしたんかにゃ??」

「いや…分からんぞ??再び暴れ出すかもしれんっ!!慎重に越したことは無いんだがね……」

「またまた～…臆病なんだからっ??ね♪マジカル……」

「な！！……うぉほんッッ！！……土御門っ！！いいきなり何を言いだすかと思えば、くだらん事を！！」

「うんにゃ…果してそのように否定していいのかにゃ～ステイル君ッッ！！」

そんな様子を眺める元春とステイルだが、なんか全然緊張感の無い会話をしているような……（汗）

そんな光雄達を再び除く元春達だが、いつの間にかぞろぞろと他のメンバー等もその彼の周り、イコールあの恐ろしい炎龍（ドラゴン）の周りに集まっているではないか！！

「うえっ？？ぼ……僕たちも行ったほうがいいのか？？」

「う～ん……つか皆さんいつの間に！？どったのかにゃ？？」

◇◆◇◆◇◆◇……

そんな、こんなで数分後……

「よしよし、いい子だ♪」

とまぁ～…なにやらさっきまでの緊張感は一体何処へやら??みたいに、何をとち狂ったのであろうか光雄になつく炎龍(ドラゴン)

そんな、シュールな光景を眺めている”おっさん”

そんな”おっさん”に話かけるステイルなのだが??

「ふん…まったく、散々追いかけさせられて結果これだよ!!

まぁ～…それは良いとして、所で君は??何物で、一体誰の命令で僕たちを??」

とまぁ～”おっさん”に色々と質問するステイル君だが??そんな”おっさん”はと言うと!?

「うむっ!!…鼻につまった香辛料が取れたんだな♪うむ…鼻だな??やはり鼻を大事……」

「??……おいっ……君は……」

「たしかにっ!!鼻は??鼻だけに!?……いや!!まてよ?俺の鼻……○ャッキーさんに似てねぇーか??」

とまぁ～なにやら意味不明のまま無視されつつ……（笑）

「あのさぁ～…君は何が言いたいのかね??
僕はただ君に一言……」

と、半分キレかかっているのか??ワナワナと、なにやら青筋立ててるステイル君なのだが??

「ん??おい!!そこの坊主!!何か用か??」

とまぁ～…その自慢げな??鼻の穴に指を入れホジホジしながらそんな事を言うおっさん……別の意味でさすがである♪

そんなステイルと言うと??

「――――世界を構築する五大元素の一つ…偉大なる始ま……」

って??いきなりそんな友達居ないステイルさんのマイフレンド♪♪イノケンさんを呼ぶそうです??……つかやりすぎじゃね??みたいな…(笑)

そんな僕キレちゃったもんねぇ～ｗｗみたいなステイル君だが…そんなぶつぶつと物騒な呪文を端で言われなにやら目障りなようで??そして、そんな”おっさん”はと言うと??

「――――その役は剣ッッ!!顕現(けんげん)せよッッ!!我が身を!?……むぐぐッッ!?」

「ったく!!静かにせんかいっ!!最近の若い奴は……」

とまぁ～…そんな”おっさん”は??目の前でぶつぶつ怪しいステイル君が煩かったのか??その指を裏拳の如く鮮やかに!?ステ

イル君の鼻の穴にスッポリとッッ！！

「むぐッッ！？……むぐぐぐっ！！」

と！！何ともかわいそうなステイル君……目尻から涙を浮かべ、その顔は？？
なんともマヌケだったｗｗ…

と、ステイル達がそんなアホなコントをやってる最中、なにやらいつの間にかその広い空間の結界が既に消滅している事に気付いたみたいで、そんな皆はゾロゾロとその遥か先見える、さっきまで存在していなかったその空間の出口を目指して歩き出すのである！！

◆◇◆◇◆◇◆◇……

そして、やっと
そんな空間から脱出し地上に出る事が出来た訳だが？？

そんな地上に繋がる通路の先なのだが、なにもかも瓦礫の山で、その先のでかい広場に出て来た光雄達……その広場は何かの制御室なのかそんな一室は、更に瓦礫の山と化し、その中央に位置する、

巨大な半壊し、もう動かない制御装置……そして…

その先には……何と!!人が挟まれているのを発見!!

そんな光雄は??

元春に話かけられ……

「あちゃ〜…こりゃ〜どうも…むちゃくちゃやなぁ〜……おいっ光雄はあんま見ないほうがいいぜよ…」

「って??見るなって言われても…ヤッパ普通に見るだろ??こんな珍しい装置とか」

「って??……おいっ!!あれ、まさかっ!!あっちにも??……いや…腕……だけ?…」

――――――まさに戦場…光雄は、そんな光景を見るのは生まれて初めてだった……たとえ生前の記憶があったとしても??こんな血生臭いエグい光景は、何処かの紛争国に行かないかぎりは経験しないのである!!

うぐっ!!と何かしら、すっぱい物が込み上げて来てそれを必死

に我慢する光雄、

そんな中、その半壊した装置の真横辺りに数人の人物が居ることに気付き、

そんな時……

その向こう側の数人の中の一人がこちら側を見つめる、

その人物は??

そんな光雄は??

果して??みたいな感じで次回へ続く!!

第二十四話　栄光は遥か彼方へ、そして滅びへの、レクイエム（後書き）

いやいや、又しても話しが煮え切らないうちに次回でみたいな??

次回は、とある二人が久々にさいか??……おっと…これ以上はネタがぁぁぁ……ま!!次回はもちっとまともな感じで行きます…

絶対シリアスにする予定だよ??…みたいな

そんな感じで

次回もお楽しみに~♪♪

二十五話　あなたに会えて、この先も……そして！！（前書き）

いやいや……突然何をとちくるったのか、読者の皆さん誠にすいませんでしたッッ！！

深夜投稿した話は……まぁ～色々と、帰宅後眠い中をちまちまとｗｗ

という事で、”黒歴史”と言う事で忘れてくださいっ……ハハ（汗）

てな訳で、本編をば♪♪

光学の超高密度収縮粒子砲戦記！！

始まり始まり～♪♪

二十五話　あなたに会えて、この先も……そして！！

ここは、崩壊した制御室、そんな一室で、無事再開を果たした当麻達グループと、マリオン、

しかし、そんなマリオンは何故か救けたい人がいると、そんな崩壊した魔導機に、当麻達を連れて行くのである……

そんな場所で見た物は！！

「！！……おいっ、マリオン……これは一体……」

「そう、見ての通りです、ここの装置事態が謎の突然の防御結界の消滅…その結果……」

「えっ！？……け、結界…の、消滅って！？……」

突然視界に入って来た、このような惨状、多分…ここの一室、その他の場所でも多分同じく起こっている、こんな惨状……

当麻は、ふと、おもむろに自分自身の右手を眺めながら固まる……

「ごめんっ！！マリオンっ！！……俺ッッ！！」

「上条さんッッ！！……そんな、そんな事無いですよ、」

「この国、この私達の住む国……オスマン……その遥か昔から繰り返されて来た多くの殺戮…惨殺！！この国の血塗られた歴史…」

「そんな歴史に終止符を打ったのは上条当麻さんあなたなのですよっ！！……そう、幾多の英雄がそんな国に戦いを挑み、敗れ去り…難攻不落の！！そんな邪悪な物を撃ち滅ぼした一人の英雄なのですよ！！」

「俺、間違った事をしてねぇ～とは……」

そんな、色々な事が自分自身の頭の中を交際する当麻、俺、こんな事になるなんて…つか、俺が英雄？？馬鹿だろッッ！？……たとえ、こんな悪い奴等だとしても、生きてりゃ～そんな奴等でも、俺……

そんな、悩む当麻の右手をそっと掴み、優しく微笑みながらゆっくりと、口を開く彼女…

「だからこそ、そんなあなたの人をとても優しく思いやる気持ちだからこそ、もっと自分を大切に…ねっ♪♪あなたは、大丈夫だから、これは、私達血ぬられたオスマンの民が背負う……」

「運命なのだから……」

「ああ……分かったよマリオンっ！！、ありがとなっ！！」

そして、そんな当麻にニッコリと微笑むマリオン…そして、

「うんっ♪♪これからもっ！！よろしくねッッ！！」

「ああ！！」

そんな、自分自身を攻め…悩む当麻にそんな優しく包み込むようなマリオン…そんなマリオンに色々説得され、何とか復活をとげた当麻なのだが？？

「ほらほらっ！！そこの、お二人さん！！早くこのデカ物を、今から取り除くから退いた退いたッッ！！」

「またまた、あなたはッッ！！…なりふり構わずその他の女性方にも飽き足らず！！今度はマリオンさんにまで手を出すとは、さすが、類人猿ですこと♪」

「「……えッッ！？……」」

とまぁ～…そんな二人の間に突然割り込んで来た黒子達に、なにやら顔を赤らめ固まる当麻とマリオン……（汗）
て言うか、マリオンにゃ～…光雄と言うパートナーが居るんだが……（汗）

◆◇◆◇◆◇◆◇◆……

数分後、

そんな、二人がその場を離れ、そこにある巨大な破片を磁力を利用し、撤去する美琴、

そんな最中に、その瓦礫の山と化した制御室……そんな制御室の遥か向こう側からこちら側に近づいて来る人物達……

そんな、遠くから近づく団体を眺める当麻とマリオンだが……

そんな、団体の中のある一人の人物を見つけ、固まる彼女……

――その姿……まさかッッ！？

――――――あの薄い肩までのうっすらとしたピンクの髪…そして、一件少女と間違われるようなトラブル続きなあの顔！！

――――――そして、緑色の私を包み込むような綺麗な瞳……間違

い無いッッ！！
――――みつえだ――

◆◇◆◇◆◇――――

そして、そんな立ちつくす彼女を見つけた光雄も……

――――――――あっ！！

――――そんな……まさかッッ！！

――――マリオンちゃん！？

「――み…み…つ…え？？
――――！！光雄っ！！光雄ぇぇ――――ッッ♪
会いたかった…ずっとずっと！！」

そんな……瓦礫の山と化した一室、そんな一室をバックに突然駆け出す少女！！

「ま…マリオンちゃ！？」
「光雄ッッ！！この臭い…この暖かな温もりをいつも私…淋しかっ

た……会いたかったよぅ～…グズ…」

「ちょ！？……ななな…おまっ！！…こんな場所……で♪」

「バカ…光雄っ…」

「マリオンちゃん…おれも…おまえを…」

そんな、絶望に近い廃棄の中……とある二人は無事再開を果たす……

そんな…皆が見守る中、お互いに抱き締め会い、お互いにその暖かな温もりを感じ会い……そんな中、

そのとても細く…ガラス細工のように簡単に折れてしまいそうなそんな身体を、そっと優しく…そして、力強く抱き締める光雄……

会いたかった…と…そんな自分の胸の中で泣きじゃくる彼女の頭をそっと優しく包み込むように撫でる光雄――――――

そして！！

もう、何処にも行くんじゃ無いぞ！！と――――――

「うんっ！！約束だからねっ！！光雄ッッ♪♪」

◇◆◇◆◇◆◇◆……

そんな、再開をまるで自分たちのように眺める仲間達、

「あちゃぁ～……見てらんないわ…ハハハ」

「まるで、離ればなれの兄弟やら親子の再会を見ているようで、微笑ましいですわね??、マンスレンさん??」

「ああ……うぇッッ！?っていうか白井さんッッ！?普通彼女

の兄であるこの俺にそんな事降るか??」

と、黒子達がいる隣側でそんな彼等を眺めるもう一組の奴等はというと??

「ああ……あのマリオンがあそこまで夢中になるとはな……まったく、奴も上条当麻と、同じくフラ…??」

「へ~え??ふむふむ♪♪ステイルさんっ!?そんな顔赤くして…どったのかにゃ??」

そんな光景に只今なにやら見てられんとばかり顔を背けつつなにやら恥ずかしそうなステイル、そんなのステイルになにやらニンマリとしつつ除く元春だが??

「いい……いやね??…ま…マリオン無事で何よりとねっ!?」

と、なにやら恥ずかしいのか、照れ隠しのような素振りで…さりげなく喫煙する彼だが??

「ま！！そんな、アンタにもたしか禁書目録（インデックス）とか？？たしか……」

と、突然そんな事を言われそんな彼の目線は…その向こう側に佇む当麻に？？なにやら意味ありげのような？？

「えッッ！？何か、俺に向けられる視線が……いやいや、」

そんな、じと眼で睨むステイルを気にしつつ、それに気づいたのか？？そんな視線に冷や汗を？？かきつつそっぽを向く当麻…（汗）

更にごまかすように？？なにやらどの道皆さん無事に再開したから脱出を？？みたいに言いかける当麻なのである…♪

「て言うか、なぁ…皆！！肝心のマリオンは無事再開したし、もうそろそろ」

と、皆さん無事マリオン救出も成功したし、そろそろ帰ろうか！！と言おうとした矢先に？？

突然その皆が居る場所に駆けて来る数人の人物達が！！

「えっ！？」

「何だ？？もしかして、敵襲か？？」

そんな、身構える当麻達を無視し、その先に佇む光雄とマリオンに走っり寄り、その場で膝をつきつつ息が荒い兵士達、そんな兵士達にマリオンは、慌てたように口を開き、

「あなた達、いったい何事ですかっ！！」

「もう、この城は落ちたのです！！あなた達もそんなサラの命令なんか聞く必要は無いんですよ！！」

そんな、ただならぬ状況にさっき救出したであろう魔導師を治癒の術式中のマンスレンや美琴達も振り向き、皆が注目している中、

そんな兵士が…震える口で一言……

「マリオン様っ！！いえっ！！大神官に仕えしマリオン姫様ッッ！！その、サラ大魔導師はお亡くなりになり！！」

「そして、その彼を殺害したであろう、側近に仕えしクラーク様が！！あの禁断の暗黒使（ガルドラゴ）の館にッッ！！」

「な！！……何ですって！？」

そんな、突然にその彼女の元にやって来たであろう、既に撤退した筈の兵士達！！

そんな、恐怖に歪んだ兵士達が言う、”悪魔”とは！！

はたして！！

又々、無理やりだが次回へ続く！！

二十五話　あなたに会えて、この先も……そして！！（後書き）

いやいや……とうとう感動の再開を果たしたこの二人だが？？

又もや再開したばかりのそんな二人にふりかかる悲惨な運命……

次回もシリアス的な展開？？……なのか！？

そんな訳で、

次回もお楽しみに～♪♪

第二十六話　差し迫る最終決戦の足音、つかの間の平穏…そんな中…みんなの思惑

いよいよ最終決戦は近づきつつみたいな……そんな、決戦前夜みたいな感じだが……

なにやら、又もやギャグ的展開前夜とか??

とまぁ～……そんな感じで

超高密度収縮粒子砲戦記!!

始まり始まり～♪♪

第二十六話　差し迫る最終決戦の足音、つかの間の平穏…そんな中…みんなの思惑

ここは、次元城がある区間の遥か先にある小さな洋館……、一件何の変哲も無い、博物館らしからぬ洋館前……

そんな、洋館の周りを取り囲むように複数の武装する兵士や、その兵士達の後方に魔術師達が、その洋館を、警戒しながらいるのである！！

「くっ！！あの裏切り者クラーク、奴は一体何者なんだ…」

「た、隊長殿っ！！全部隊配置完了しましたッッ！！いつでも突入可能ですが……」

「いや……待て……」

そんな、洋館を取り囲むオスマンの残存部隊……只今全員配置完

了との知らせの元……

いつでも突入可能なはずなのであるが、そんな隊長はその洋館に只ならぬ嫌な予感と胸騒ぎが遅い……

ただ…ただ、じっと…そんな洋館の中の様子を伺うだけなのである……

そんな、矢先、その彼の嫌な予感が的中する事になるのだが！！

「いや……な！！何だあれはッッ！？……いかんッッ！！全員一時退避だッッ！！早くしろッッ！！」

そんな、中その洋館が音を立てながら倒壊！！

瞬間凄まじい魔力と共に突如その空高く巨大な真っ赤に輝く魔方陣が空間を割って無理矢理出現……そして、ゆっくりと音も無く回転を開始する！！

「ひっ！！みんな逃げろぉぉーーーッッ！！」

「避けッッ！！みんな避くのだぁぁぁ――――ッッ！！」

そんな惨状に恐怖を抱き逃げ惑う兵士達……

そんな兵士の一人が振り向き、その恐怖に震える口調で、その物を……

あれは……いにしえの失われし魔装兵器……魔導機神……暗黒（ガルド）使（ラゴ）だと！！

そう、その暗黒使（ガルドラゴ）とは！！そんな彼が言う魔装兵器とはッッ！！

◆◇◆◇◆◇――――――

――――その昔、紀元前数世紀前から、伝われし伝説、この魔術と言う未知なる異能なる力と、科学技術と二つの異なる技術が一つに融合した文明が栄えていたであろう…そんな繁栄を遂げた国が存在した時代、

その異文明を持つその国は、素晴らしい発展を遂げ、そこに住む人々は、とても豊かに、そして幸福な毎日を送っていた、
そんな豊かな時代は、これからも、そしてこの先も、永遠に続くかのように思えた……

しかし、そんな繁栄した文化もヤハリそう永くは続かなかった……

その天候をも自分達で操れるようなそんな技術……魔法技術の行きすぎた科学文明、そんな文明に、自ら驕り高ぶり、そんな中、一人の科学者がその禁断の技術をその周辺の他国に売り……

それが原因なのか、全世界を巻き込むような、大戦争にまで発展……

そして、その国を含む異文明は、自らの愚かな行為の結果……

その永遠の歴史に終止符を打ち、そんな国々や、繁栄の頂点にまで達した異文明は……自ら消滅した、

――――――――そんな時代は砂に埋もれ、ただ伝説だけを残し…

人々に密かに語り継がれる――――――

――――それから、さかのぼる事遥か数世紀先の未来……そんな、もう地底の奥深くに眠りし、失われし異文明を発掘、そんな、忘れさられし異文明が生み出した、最悪な兵器――――

――――――”暗黒使（ガルドラゴ）”そんな禁断の異文明の忘れされし産物が今、現代に再び蘇ろうとしていた、

◇◆◇◆◇◆◇◆◇――

――――――そんな、あれは既に処分されたんじゃ無いの??

マリオンは、そんな既に大神官の命令により処分された筈の、禁断の産物が未だ存在している事に、絶句する……

「なあ、マリオンちゃん、その”が〇ばらん”って??何なの??」

「えっ??……」

「あっ……」

「へッッ!?……（汗）」

そんな、シリアス顔でマリオン達に質問する光雄なのであるが！？……（汗）

「そうね、その館の前に、一体どれ位の兵士達が展開しているのかしら…」

「それを言いますと、マリオン様、只今我が生き残り部隊が……」

と??そんな光雄を何事も無かったかのようにスルーし、再び会話を始める兵士とマリオン、

あ…あれっ??な…何で俺空気にされてんだ??何か間違えた……のか??

いや……たしか、今さっきマリオンちゃん達が言ってた……がる…がるぅー……

あっ!!あれかッッ♪

とまぁ～…なぁ～るほどねっ♪と言わんばかりにポンッッ…と手を叩きつつなにかしら思い出した光雄♪そして再び??

「え～と…マリオンちゃんっ♪”あれ”だよね♪”あれ”ですよねッッ!!ズバリ”魔王です○さ”??……」

「!!ッッ」

次の瞬間一瞬そんなマリオンと兵士の表情が!!まるで石化の術

にかかったように固まり……空気までも??

「へっ??……何っ??」

「「……」」

と、そんな固まるマリオンの表情がだんだん呆れ果てた表情に??

「ハァ～……まったく（汗）」

「ちょっとォ～っ!!光雄っ!!さっきからうるさいっつーのッッ!!…デス○サロだか○王だか知んないけど、私達が話しているのは、暗黒使(ガルドラゴ)っ!!が・る・ど・ら・ごッッ!!分かった??本当にもぉ～……実は分かって居ないんでしょ……」

「うんっ♪が…がるがるど??」

「ハァ～……（汗）バカ光雄…あ♪それともぉ～??ねぇ～光雄～♪……久しぶりにさぁ～…”あれ”…食らっとく??♪やっぱ一発食らいたいのよねぇ～??そうすりゃ～あなたの頭……!?」

「ヒィィッッ!!す……すすすいませんした――――ッッ!!」

「ったく…素人なんだから…」

「うぅ……（涙）」

◇◆◇◆◇◆◇◆……

そんな、マリオンと光雄が久々の夫婦コントをやっている最中……

只今その向こう側に居る当麻達御一行様は、なにやらマンスレン

と会話中なのだが、

「なあ、マンスレンさん…そんなに凄いんか??」

「ま、まぁ…魔術とマシンの融合体…そこまでしか知らんがな、」

そんな、マンスレンの言葉に、そっとその自分の右手を上にかざして見つめる当麻、そんな当麻は、

さっき言われたマリオンに言われた事を思い出していた……

―――――――――

―――――――

―――――

――……

――……

『――――そんなあなたは、その右手で幾多の英雄達でも成し遂げられなかった事が出来たのですから……そんな、あなたの素晴らしい右手で――――――』

――――――――――――――

――――――――

――――

――――たしかに、そんな俺の右手……その右手に宿る力……

――――幻想殺し（イマジンブレイカー）――――

それが、例え魔術だろうが神々のシステムだとしても、お構い無しに打ち消せる力……

――俺にも暗黒使（ガルドラゴ）を倒せるのか？？そんな魔術と機械の融合体だとしても……

「ねぇ…ちょっと～……」

「あん？？…何だビリビリか？？」

そんな、考えこむ当麻に歩み寄る美琴、そんな美琴に振り向き無理矢理笑顔を作る当麻だが？？

「何があったか知らないけどさぁ～……らしくないよ？？」

「ああ……」

「ったく、せっかくマリオンさんも無事なんだし、ていうか皆どうしちゃったのよ…」

「いや……何でも無いと思うぞ♪」

そんな、物思いにふける当麻……そんな彼に又々歩み寄る人物が、

「よっ♪上条当麻……まったく…君は、又無謀な事を考えているのか??」

そんな事を言いつつ、そんな当麻に歩み寄り、隣側で、片手で、深々と喫煙しつつ問い掛ける彼…

そんな、遠くの光雄達を眺めつつ

「ステイルか……まぁ、その暗黒使(ガルドラゴ)をな……俺のこの手で倒せるかどうかと思ってな…」

そんな事をいいつつおもむろに右拳を突き出しながら、ステイルを眺める当麻……

「まぁ……あの時……禁書目録（インデックス）を救った時、あの常識じゃあり得ない魔術、竜王の殺息（ドラゴン・ブレス）そんな大魔術をも打ち消した君のその能力なら……」

そんな、事を語るステイルに対し……そっと、さりげなく作り笑いをしながら、うまく誤魔化す当麻……

そして、自分自身初めてその後に病室での、小さな少女禁書目録（インデックス）との出会いとか……色々と思いに更け、

――――――あ……そう言えば記憶が無くなる前の俺、そんな俺がやった事なんだなぁ～……と――――――……

そんな会話中、只今何故か”空気”にされている??人物が、なにやら不機嫌そうに、二人に割って入るのだが、その大きな目を可愛らしく瞬きしつつ下から目線で覗く少女――――

そんな少女にいち早く反応し??目が合ってしまったステイル君

っ！！……さすが元祖ロリコンなのか？？…（笑）

「んぐッッ！？……」

「な？？…き…君は一体だ……誰だいっ？？上条当麻の知り合いか？？」

「うぇっ？？、そういうアンタは……な…何者なのよ……」

とまぁ～…とうとう出会っちゃった、ロリコン神父ことステイル君と美琴様ッッ！？……ていうか、科学と魔術…くっつきすぎのような……（笑）

そんな、美琴にマジマジと見つめられつつ、何故か恥ずかしいのか、くわえていた煙草を落としつつ動揺するロリコン神父…（汗）

「ま…まぁ～僕は君達と違い魔？？……」

「あ～あ……はいはい、こいつ、まぁ～…俺の知り合いのステイル

っつてんだ、……つかまだ居たのかよ、ビリビリ……」

とまぁ～…自分自身をアピールしようと自身まんまんのステイルに、何故か割って入る当麻だが??

「ったく!!私はっ!!ビリビリじゃ無く御坂美琴っつー名前があるのッッ!!いい加減覚えなさいッッ!!」

「あ!!あぁ……君は美琴君と呼べばいいのかな??」

「えっ??ま…まぁ～……そうだけど……ていうかアンタッッ!!」

「いいッッ!?……ぼぼ僕は何も……ただ君のだな…名前を…」

と、そんなステイルにいきなり名前を呼ばれ、
何にスイッチが入ったのか恥ずかしいようで顔を真っ赤にする美琴様……（笑）

「ちょ！！……あ～もぅ～…だぁーかーらーーッッ…いきなり名前を呼ばれても…少しは、他の呼び方とか……その……」

そんな、なにやら謎の動揺中の美琴とステイル君に??なにやらニンマリする
当麻は??とんでもな爆弾を美琴様に落とすのであるが??……（笑）

「なぁ～…ステイル、おまえ、ひょっとするとロリコンだろっ♪こんな”ビリビリ中学生”と…なかなか良い”コンビ”になるんじゃね??」

「ばっ！！馬鹿言えッッ！！
僕の尊敬するタイプは、こんな”子供”では無く……」

「アンタ等……」

「「えっ??……」」

「又々……さっきから聞いてりゃ～何度も何度も…子供子供って…」

「「うぇっ？？」」

「ぼ…僕か？？こ……子供って？？」

「まだ言うかァァァ――――――――ッッ！！」

「「うげぇぇぇ――――――ッッ！！」」

◇◆◇◆◇◆◇◆……

数分後♪♪

「なあ、上条さん、今さっきマリオンちゃんと話し合ったんですが……？？」

「えっ？？か……上条さん？？何を俺に右手を向けて……つか…足元の黒焦げの奴って！？」

「えッッ！？」

「なあ……光雄、いちいち気にしない方がいいぜ♪
それよかおまえの後ろ…」

と、そんな右手をかざしつつ光雄に後ろを振り向けと言う当麻……

そんな当麻に言われつつ後ろを振りむけば？？

「ええッッ！？……ちょ？？」

み、御坂さん??又もやですか……ははっ♪」

「なっ!!なによ……こ……これにはちょっと……それより何??」

「ああ……そうそう、みんなにも聞いてほしいんだけど…」

と、そんな、楽しいひとときもつかの間、光雄は今現在その自分達が居る現在位置から遥か向こう側で、今から行われるであろうオスマン残存兵と、そんなサラを殺害し、そんな”悪魔”……暗黒使(ガルドラゴ)を復活させようと企むクラークと言う人物……

そして、そんな中にマリオンと共に、戦いに赴く光雄、

そんな光雄に次々と、仲間達が反応し、いつの間にかそんな光雄に、ほぼ全員が集う戦いに!!

「よしッッ!!みんな!!ありがとうな!!そして、みんなで力を合わせ、そんな世界の危機を救う選ばれた勇者になろうじゃないか

ッッ！！」

そして、結局は全員で、そのクラークと言う最悪な人物に戦いを挑むのであるッッ！！

果して、こんな光雄率いる主人公チームは、そしてクラークの野望を打ち砕き、暗黒使（ガルドラゴ）を倒す方法はあるのか！？

又もや無理矢理ですが次回へ続く♪♪

第二十六話　差し迫る最終決戦の足音、つかの間の平穏…そんな中…みんなの思惑

な…なにやら又もやぐだぐだで!?

いや……今回は、まぁ～……しょうがないみたいな??

で!?

次回は、もちっと……的もにという訳で??

次回もお楽しみに～♪♪

第二十七話　その忘れさられし古（いにしえ）の幻想……そんな人と光を持つ者

な……なにやら未だ最終決戦前だが……

いったいいつまで続くのやらこのパート……（汗）

いや……もう既にあきらめかけ？？……おっと、いかんいかん……

ま♪そんな感じで

超高密度収縮粒子♪

始まり始まり～♪♪

第二十七話　その忘れさられし古（いにしえ）の幻想……そんな人と光を持つ者

ここは、既に半壊状態の次元城内……その無人になった城内の一階広場、

そこには天井がかなり高くそんな天井に、巨大なシャンデリアが吊され、誰が灯したのか、あちこちに設置してあるシャンデリアや、周りの壁の蝋燭（ろうそく）が灯り、そんなだだっ広い広場を全て灯している……

そんな怪しげな空間に赴く人影が…そんな広場の中央付近ある巨大な扉が音を立てながらゆっくりと開き、

その空間に勢い良く飛び込みつつその一番奥に設置してある王家の間に向かい一直線に走り抜ける二人の人物、そんな二人の足音だけがそんな広場に響く渡る……

そんな中、突然何かを見たのか突然立ち止まりつつ身構える光雄！！

「えっ！？ちょっと光雄ぇ～っ！！どうしのっ？？早くその王家の間から私のアクエリアスの涙とあなたの武器を取って来なきゃ、あの化物、暗黒使（ガルドラゴ）と戦え無いよっ！？」

「うん……でも、でもね…マリオンちゃん、あそこに、誰か…座っているんだよ……」

「えっ!?……座っているって??……ていうか誰も居ないよっ??」

そんな、マリオンには見えて無いのか、そんな光雄にはその王家の椅子に誰か居るのが見えたみたいなのだが…

あれれっ??……おかしいな、でもさっき絶対あそこの椅子に誰か座っていたんだが??

ていうか、さっき居た奴…あの人……

でも突然…現れたとおもったら消えたのか!?も……もももしかして!?

「うぅ……」

「ちょ！？……ちょっと光雄～っ…なにやってんねよ～…早く…あぁ～も～ッッ！！置いてくよっ！！」

そんな急がなくちゃいけない状況なのに、何に反応したのやら…そんな王家の椅子をじっと見つめる光雄……

「うんっ！！みんな外で待たしているからな……悪いっ！！……とにかく急ごうっ！！」

「えぇっ！？……うんっ……」

そんな、何かを決心したのか、少し頷きつつ再び走りだす光雄、その後から不機嫌そうに同じく走りだすマリオン、

そんな中、光雄は考えていた、

さっき、でも絶対誰か居たよな…でもまぁ～……それが何処の誰だか知らんが、今はそんな悠長な事考えている場合じゃあ無いよなっ！！

とにかく急いでここに保管してあるマリオンちゃんと俺の武器を、

つか俺の武器って??マリオンちゃん何か言ってたけど、

そんな俺……剣とか使った事無いし…まぁ～もっとも俺の武器は、自分自身の能力だけどな、

そんな事を考えながら、いつの間に目の前に王家の間への扉が視界に入り……

「ようやっと着いたよ…」

「だな♪……そんじゃさっそく、アクエリアスの涙を持って、ちゃっちゃとその”がるがるど??”とやらを倒してゆっくりしますか♪」

「もぅ～…だからっ!!がるがるどじゃ無くて暗黒使(ガルドラゴ)っ!!……まぁいいや…」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇……

一方その頃半壊した次元城の外の広場には、当麻や美琴を筆頭に、みなさんぞろぞろと集まる中

なにやら、その向こう側から先程一時撤退して来たであろうオスマン残存兵士達も再び体制を立て直すべく集結していた、

そんな中元春はその残存兵士と接触し、なにやら会話中らしいのだが、

「えぇっ??そんな許可が下りたとは…」

「はい、そんな只今私達が一時撤退を完了次第、一部のトルコ政府軍が空爆を開始してくれると、」

「で??その空爆中に体制を建て直しつつ間髪入れずに俺達が総攻撃っつー訳だにゃ??」

「いえ…これは、私達オスマンの問題でありまして、あなた達民間人を巻き混むには…」

そんな中、その兵士達に歩み寄る一人の人物がそんな兵士に話しかけるのだが、

「あらあら、そんなあなた方の為にせっかくわざわざ私の知り合いに頼みこんだのに…」

「いえ…まさか我がオスマンの民とは正反対なトルコ軍の協力要請をしてくれたあなた様には感謝しているのですが、」

そんな中元春は、兵士との会話中の中のオリアナを眺めつつ……

ヤッパこんなにも知り合いが多く…顔が広い奴は、あいつしか居ないよな、

とまぁ～……そんな事を考えつつ、そんな矢先ふと、半壊した次元城を眺めていた…

そう言えば、光雄やマリオン達、無事に武器を調達したんかにゃ??

◇◆◇◆◇◆◇◆――――

そんな中その向こう側に集合する兵士達を眺める、当麻……

あいつ等、かなり傷ついた奴もいるのかよ……

とにかく、早くそんな奴を倒しもうこれ以上は犠牲者を出したく無いしな……

あ！！そう言えばここって??学園都市の近くなんか??

「なあ…マンスレンさん」

「ん?なんだ??……あの兵士達か??」

「いや……そうじゃ無くてさぁ～……」

「ヤッパここって、ひょっとして、」

「ん??なんだ!?……ここはトルコだが…それがどうしたんだ??…」

ヤハリそんな事だったか～……

とまぁ～何かしら頭を突然抱えつつ謎の機能停止におちいる当麻なのであった……（汗）

「ハァ～……不幸だ…」

そんなマンスレンは、そんな当麻を横目に見つつなにかしら意味ありげに喫煙しながら見つめているステイルに気付き??

「そんなステイル君は、その”次元転送装置”という魔導機とかは初めての経験なのかな??」

「ああ……そのような魔術もお目にかかった事無いしな……まぁ…その代わりにワームホールと言われる現象は少々聞いた事はあるんだが、」

「そうか、たしかに私達オスマンが使用している装置とかは未知の領域だからな～……」

そんな、オスマンの民が使用する精霊を使う古代魔術とは、ステイル達が主に使用する魔術とは、なにかしら共通点はあるがそれぞれ特性とかが違うようである、

と、そんなステイル等の会話を何げに聞いていた、人物がそんな魔術やら魔法に興味津々のようで、話しかけるのであるが…

「ねえ……」

「ん??なっ!!なんだ、聞いていたのか??……君は…たしか先程の、茶髪の少女のたしか……」

「ねえ……」

「ん??な……ななんだね??」

「っつーかさぁ～……その茶髪って……私は御坂美琴っ!!…ったくそう言うアンタこそロン毛のバーコード付きじゃないっ!!」

「なッッ!!し…失礼なっ!!こ……これはだなっ!!ファッションであって……」

そんな、ステイル君に??なにやら興味しんしんのご様子で??なにやら、すっかり懐いてしまった美琴だが??

そんな二人がこれ以上絡めば??なにかしらまずい事になりそうな予感が??

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆……

一方そんな、外の状況を置いといて、光雄達は??

只今その次元城内の王家の間にて、信じ難い現象に見舞われていたのである!!

「ふぅ〜……これで何とか、アクエリアスの涙は無事みたいだったし……」

そんな王家の間に保管してあったアクエリアスの涙を無事確保!!そしてそんな王家の間を出ようとした矢先……その一室の出入り口付近に佇む光雄と、そんな光雄の近くの王家の椅子に座っている、別の人影が!!

「えっ!?……み…光雄っ??…これって……」

「いや……俺にも…これって…ホログラム??」

「ええ、でも…この服装って……私達の知っている霊装とは明らかに違うよ……」

そして、そんな突如その空間を無理矢理ねじ曲げ、王家の椅子に座るこの謎の人物は??
そんな謎の人物がそんな光雄にニッコリと微笑みながら、口を開き……

「お待ちしておりました……光を持つ者よ……」

「「……ええっ??…」」

「し…しし喋った!?」

果たして、そんな彼女は??

っつー訳で又々無理矢理だが次回へ続くっ!!

第二十七話　その忘れさられし古（いにしえ）の幻想……そんな人と光を持つ者

いやぁ～…ハハ…（汗）

何か、今回もぐだぐだやなぁ～…（汗）

ま！！次回こそはまともな感じでやりますっ

てな訳で♪♪

次回もお楽しみにー♪♪

第二十八話　天使の雫…その正体は??そして…そんな彼は??（前書き）

いやぁ～…

この激安ＲＰＧ的パートも残す所後数話で完結だぁ～なっ♪

まぁ…今回も同じくぐだぐだだが??最後に??

みたいな♪……そんな感じで

光学の超高密度収縮粒子砲戦記♪

始まり始まり～♪♪

第二十八話　天使の雫…その正体は??そして…そんな彼は??

「ち…ちょっとぉ～……光雄……一体どうしちゃったのよ!!さっき何か言ったと思ったら急に固まっちゃってさぁ～……」

そんな光雄に何があったかは、分からないがその謎のホログラムにも似た人物の前でじっと立ち尽くすのである、

◇◆◇◆◇◆◇◆◇……

――――――そう…ここは、遥か遠い今は忘れえし国――――……

――――そして、その精霊石の如く輝ける美しき国――――……

――――――暗闇を切り開き使命を、我と共に、

――ん？？ここは？――――――

――――――

――

――――――いつの間にか、ツン……と肌に触れる暖かなそよ風が肌に辺り……それに気付いたのか、

辺りを慌てて見回す光雄……

――――――なっ！？俺は、たしかマリオンちゃんと一緒にさっきまで次元城の王家の間に赴いて……つか、ここはっ！？

『――――光を司る者よ、あなたがこの地に訪れる遥かむかしから、運命は決まっていました……』

――――えっ!?……あなたは??

『――――そう、私はここに遥か過去の時代の名も無き者です――

そして、あなたのその光を宿す力の導き手にあたる者でもあります……』

えっ!?それって??俺の、この能力に関係しているのか??

おいっ!?

――――もしかして、あなたはっ!!あの時

『――――もう、時間がありません、これを早くっ!!…この地に、滅びの闇が埋めるつくすのも時間の問題です…』

『――――そう…数千年後、再び災いがこの地に訪れるであろうその時、遥か古から伝わりし、聖なる光を司る者が現れ、その闇を切り裂き、再び静寂な地を約束せしめんとする――』

おいっ！！ちょっと待てよ、それって？？もう何が何だか俺にはサッパリ！？

『――――残念ですが…あなたに問う有余も無いみたいですね…さあ…我と共に精霊の契約を、この地に降りし光の者よ……我を受け入れ、そしてこの私…聖剣…天使の雫を！！』

――――せ…せい…けん？？これが……でもそんな俺、魔力なんか……

そんな自分に突然精霊と共になれと言われ、戸惑う光雄に、その天使の雫の魔法石が、そんな彼女はそっと微笑み……そして、

――――大丈夫です、色々と試してみなさい――……

そんな、以前にも似たような事を？？……そんな事を思いつつ意識が段々と遠退いて行き――――――――

――――――――――――

――――み……え――

――みつ……――

――みつえ……

――

――――光雄ッッ！！――

「えっ！？」

まっマリオンちゃん？？
っつー事はここはっ！？

「よ、よかったぁ～♪♪
っとにもぅ～…バカ光雄っ！！」

「ああ…ごめんなマリオンちゃん♪……後？？…ええ～とっ…あの～…」

そんな光雄は、何故か今自分の顔を覗きこんでるマリオンの顔がかなり近い事に違和感をかんじ？？

うえっ！？……ここ、これって？？何か俺の後頭部…なにやらやっこくてなま暖かいような……

しかも、なにやらさっきからいい香りが？？

「んっ??、な…なによぅ～…人がこんなに心配しているのにっ！！」

「うわわっ！！……ごごごめんっ！！……あ、ありがとう…マリオンちゃん…」

「って??ちょっとぉ――っ！！バカ光雄っ！！何かスゲーいやらしい顔してんだけど！！」

そんな事を突然言われ慌てて頭を起こそうとする光雄だったが??いきなりゴチンッ☆とお互いに??

「キャッ！！」

「のわッッ！??」

とまぁ～…なんともお約束な展開に??

「いってぇ～…っ！！おまえっ」

「い…いつつ～…ちょっと！！突然頭を上げないでくれるっ！？」

と……お互いに頭をぶつけたらしくなんともまぁ～二人して頭を抱え固まるのであるが？？

そんな、目尻に涙を浮かべながら、さっきから光雄が握っている見慣れない剣に気付き、

「ねえっ…光雄、さっきから気になってたんだけどこの剣って？？一体何処から持ち出してきたの？？」

「えっ！？……これの事？？」

と、そんな剣をマリオンに手渡し、そんな剣をマジマジと見入る

マリオン…

そして！！

、な…なにこれっ！？
凄く軽いし…しかも、この金属…この色？？更に……

「えっ！？！？」

この私と同じ王家の紋章？？しかも、この紋章の中心にあるのはっ！？

まさかッッ！！

「み……光雄っ！？あなた……まさかこの魔法石って！？」

「ふふんっ♪♪どうよっ！！」

「って??何であなたが……まさかっ!!精霊がっ!?」

そんな、光雄の剣のつかに埋め込まれている紋章の中心……その中心にある物と自分が今手に持つ杖の物を見比べるマリオン…

「光雄っ!!……悪い事は言わないわっ!!早くそれっ!!その剣をさっきの王家の間に戻して来なさいっ!!」

そんな、冷や汗をかきつつかなり真剣な眼差しで言いはるマリオン…

そんなマリオンに対して何故か拒否をする光雄!!

「嫌だよ、これ…この剣の中の変な人と俺、約束したんだからっ!!」

「でも、これって??そんな素人のあなた何かじゃ…まさかこんな事になるとは知らず、光雄に言わなかったんだけど、この精霊が宿る魔法石ね……」

◇◆◇◆◇◆◇◆……

その頃、その次元城の入り口付近の巨大な門の前の広場にて、そんな光雄達を待っている皆は??

「なぁ…土御門さん……」

「ん～にゃ??誰かと思えばジュンタかにゃ??」

「あのぉ～…前々から気になってたんっすが…ここって?」

「そうそう!!あの中のマ〇さ……」

「うっせ～ぞ少しは黙ってろハゲッッ!!」

「うぐぅ……（涙）」

「でっ！！なにかにゃ？？」

「ああ…悪いっ……あの～ここの場所って、ひょっとすると？？」

「う～んその事か……ま！！その気になった通りなんだけどにゃ～…でもまぁ～…来た道からそのまま帰りゃ～…何とかなるっしょ♪あんま気にする事無いぜよっ！！」

そんな事を言いつつ適当にあしらう元春、そんな元春も実はちゃんした元の場所への帰り方も分からないようなのか？？

そんな彼は、何となくとても嫌～な、胸騒ぎがしてならないのであるが……

「ここの人達を避難させないのですか??」

と、そんな事を言いつつ元春に近づく人物が……

「よっ!!相変わらず心配性だにゃ~ねーちんは…」

「しかし、もしかしてここに奴が攻めて来たら、しかもあのような者に任せて良いのでしょうか…」

と、その向こう側に集まる兵士達を眺めつつそんな事を言う火織……

そんな火織もなにかしら嫌な予感がしてならないのである……そして……

◇◆◇◆◇◆◇◆◇……

数分後……

ふと…何げに空を見上げていた一兵士……
そんな空をみるみる埋尽くす漆黒の雲が突如発生!!

「あっ!!……あああ……そそ…そんなっ!!」

「あん??……いかんっ!!」

更にここ次元城全体を覆いつくすような凄まじい暗黒な雲!!それと同時に一体に強力な結界が!!そんな異変にいち早く気付きつつ冷静にその向こう側に居る当麻達の元へ走り出す元春達!!

そんな当麻は??

「とうとう来やがったのか??……おいっ!!ステイルっ!!マン

スレンさんっ！！」

「あれ？？御坂っ！！白井は？？」

そんなさっきまで居た筈の美琴達を探すのだが、そんな美琴達は？？

「お姉様…なっ……あれって？？、なっ何ですのッッ！？」

「あっ……あんな凄い魔法……知らないわよっ！！」

そんな偶々運悪く次元城の真下付近に居た白井黒子と御坂美琴、

彼女達は、そんな今まで魔術や魔法とは全く無縁な世界の住人であり、

その頭上にバキバキと天を無理矢理割りながら現れた巨大な魔方陣を見上げつつ、固まっていた！！

更にそんな巨大な魔方陣がゆっくりと回転しはじめ…そんな状況でも恐怖が支配しているのか逃げようにも体が動けず……只立ち尽くすのみのそんな彼女達……

「ひっ……ちょっと…じ…冗談だよね??私…黒子っ!!早くっ!!テレポートを…」

「お…お姉様っ!!」

そんな差し迫る中!!突如彼女達の頭上に降り注ぐ対人用拡散魔弾!!正に絶体絶命の時!!

――えっ??……あの声って??

――――その流れに従えよ…そしてっ!!我が身を守れたまえッッ!!!

そんな頭上からの無数な攻撃に身構える黒子達!!

しかし、そんな彼女達は今から襲って来る筈の無数の魔弾が来な

い事に気付き……

閉じていた目をゆっくりと開きつつ、そこに、

自分たちの目の前にその杖を真上にかざしつつ、防御魔術を発動中のそんな彼女が居る事に気付く……

「「えっ!?ま…マリオンさんっ??」」

それは、正に今まで美琴が良く知ってるマリオンじゃ無く、綺麗な紫のマントをなびかせつつ霊装に身をつつみ、その蒼く輝く長い杖を天高く掲げつつ、鮮やかな綺麗な水色に輝く防御用魔方陣を展開中の魔術師マリオンであった!!

そんな、彼女は、自分の事を呆然と見つめる美琴達に気付きつつ、

そっと、優しく微笑みながらゆっくりと口を開く、

「ふぅ～……白井さん御坂さんっ…何とか間に合ったみたいねっ♪もう大丈夫だからねっ♪」

「えっ!?ま…マリオンさん??アンタ……も、もしかして…本物の魔法使い??」

「うんっ♪今まで隠してて本当にごめんなさい…実は私…魔術師なんです……」

そんなとうとう現れたあの忌まわしき悪魔…魔装兵器…暗黒使(ガルドラゴ)

その差し迫るそんな中、遂に美琴達に魔術師である本当の正体がばれてしまったマリオン!!

その一方、天使の雫に認められた光雄は??

様々な物語が交際する最終決戦前!!果たしてこの先どうなってしまうのか!!

又もや無理矢理だが次回へ続くっ!!

第二十八話　天使の雫…その正体は??そして…そんな彼は??（後書き）

うぅわｗｗ…

この超こっぱずかしー展開の仕方って……（汗）

さてっ!!次回からは、大激戦の予感が??

皆さん思いきり暴れるかも……いやいや、

まぁそー言う事で

次回もお楽しみに~っ♪♪

第二十九話　舞い降りる最悪の翼……そんな中芽生える小さな友情、そしてどんでん返し

ふふふ…このパートもあと少しで……でっ！！まぁ…今回は最終
バトルにゃ～行かないが、

でも、少々ぐだぐだかも……

まぁ～そんな訳で……

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！
始まり始まり～♪♪

第二十九話　舞い降りる最悪の翼……そんな中芽生える小さな友情、そしてどん

「あっ……あれはッッ！？」

「くそぅっ！！」

突如次元城の遥か上方に、一筋の赤い雷鳴と共に現れた巨大な黒雲、そして！！更にバキバキとその空間を無理矢理ねじ曲げながら出現した深紅に輝く怪しげな巨大魔方陣！！

「えっ！？……うそだろっ？？ま…まさかッッ！？」

そんな様子を見つめる当麻の目に移ったのは、そんな魔方陣の遥か下方で、二人寄り添うように震える彼の大切な友達！！そんな様子の彼女達を見る前に、勢い良く飛び出す彼！！

「おいっ！！待てっ！！上条ッッ！！」

「迂闊に奴にちかずくなッッ！！」

そんなステイル達の叫ぶ声を後方に、そんな彼女達に向かい一気に全速力で駆ける！！

◇◆◇◆◇◆◇……

そして、そんな中、更に魔力が増大！！加速し、その異常なまでのエネルギーで大気との摩擦で周りからスパークを始める巨大魔方陣！！

「くそっ！！白井っ！！御坂っ！！」

「間に合えッッ！！間に合ってくれぇぇぇ――――――ッッ！！」

そんな事を叫びつつ必死に彼女達の元に駆ける当麻！！

そんなっ！！……ばかなっ！！なんで……何で寄りにもよってあんな場所にあいつ等がいるんだよっ！！

◇◆◇◆◇◆◇◆……

そう…以前とある路地沿いで不良達に絡まれてる彼女を偶々助けるつもりが、その彼女に逆に電撃を飛ばされ、それを打ち消し、

何故かそんな奇妙な形で知り合い……それがきっかけか、いつも出会う度にそんな彼につっかかり、電撃を飛ばす彼女、

喧嘩友達…そんな奇妙な仲のだが、

彼にとって大切な仲間であり、そんなちょっぴり危険な楽しい日々が彼の頭の中を過る！！

そんな当麻の思考を断ち切るようにその巨大魔方陣は更にエネルギーを溜め込み回転をし始め……

瞬間！！大音量と共にそのエネルギーを放出！！

その魔方陣から、その下方に位置する次元城に向かって一気に放たれる数百…いや数千の無数の深紅に輝く魔弾！！

「み……御坂ッッ！！……うそだろっ！？」

「そんな……いつもの電撃で防げよな……おまえはそんな場所で死ぬような奴じゃないだろッッ！？」

そんな当麻の言葉とは裏腹に容赦なく次元城に降り注ぐ無数の魔弾！！そして、連続する凄まじい爆発！！飛び散る逃げ遅れたであろう兵士達の肉片！！そんな地獄絵図と化した次元城に駆け寄る当麻！！

そんな中、連続爆発で起こったのか、もの凄い砂煙が！！

そんな時、突如彼の知っている人物の叫びにも似た声がこだまし、

えっ！？……何か向側で声が？？あの声の持ち主は、
しかも……あの光……まさかっ魔術っ！？

その砂煙で視界が見えない中をそんな微かに見える蒼白い光りを頼りに突き進み……そんな当麻の目に写ったのは？？

「み…御坂っ白井っ！！無事かっ！？」

「うえっ？？……べべ別にそんな顔しなくても…ほらっ！！ちゃんとピンピンしているわよっ！！」

「それに、そこのマリオンさんに、わたくし達助けられたましたの♪」

その彼女達の前に駆け寄り全然無事だった事にかなり安心したのか、そっと胸を撫で下ろす彼……そして、

「ハハっ……まぁ、無事ならそれでいいんだが、それよか、おまえっ!?まさか??ステイル達と同じ…」

「そう、『Ａｐｕａｒｉｓ．Ｎａｖｙ２２２（蒼く静寂な海の如く）』…それが本当の私の名前、魔法名です、そんな私もローマ正教所属の正真正銘の魔術師です……何か、とうとうばれてしまいましたね……」

「えっ!?アンタっ……さっきもそうだったけど、本当に……そんな人だったなんて……」

「わたくしも、風紀委員（ジャッジメント）の仕事上、噂には聞いていましたが…まさかっ!!マリオンさんがそんな不可解な能力者だったなんて……」

暗黒使（ガルドラゴ）から彼女達をその魔術で守り、その結果、自分の本当の正体がばれた彼女…、

そして、自分は、この学園都市にまぬかれざぬ存在…”魔術師”

としての自分、そんな中、学園都市で知り合った友達、美琴達に、いつかばれると思っていた彼女……

そんな彼女の突然の告白に驚き戸惑う美琴達に対し……黙ったまま下を向くマリオン……そんな彼女に突然手をさしのばされ!!

「えっ!?」

「あはは……さっきはごめんね♪、何か、良くわかん無いけど…ま…魔法?? 魔術師だっけか??
ううんっ……そんなのどうでもいいや♪とにかくっ!!アンタはアンタでしょっ!!だ……だからっ……」

「あらあら、お姉様、そんな顔を赤くして……」

「うぅ……うるさいっ!!……あぁ〜もぅ〜…ッッ!!
だからっ!!そんな事よりっ!!マリオンさんっ!!こ…今度、その魔法とどっちが強いか勝負しなさいよっ!!」

「えっ！？……う…うんっ♪♪改めて宜しくねっ♪♪御坂さんっ♪」

「それとっ……白井さんも♪♪」

「ええ、これからも長い付き合いだと思いますけど宜しくですわ♪♪」

そして、そんなマリオンに手を差し伸べ固く握手を交わす仲間…彼女にとっての大切な友情…そんな様子を微笑ましく見守る当麻……

「え…え～と～……」

「あっ！！ごめんねっ！！それとっ……又々お会いしましたねっ♪上条さんっ♪」

「ああ…御坂達を守ってくれて、ありがとなっ♪♪これからも宜しくっ♪♪」

「うんっ♪♪」

――――そんな、爆撃後のような煙がたちこめる惨状の中、無事再開を果たす仲間達……そして、再び出会う当麻とマリオン……

そんな中、その他の兵士達が駆け寄り、

「マリオン様っ！！只今あちら側に部隊を配置、総攻撃を結構しますっ！！」

「えっ！？……でも、あの城の周りにまだ負傷した人達が……」

「そんな悠長な事を言っている場合じゃありませんっ！！お早くっ！！」

そんな多少の犠牲も構わないような事を述べる兵士達……そんな兵士達も、本当は自分達の仲間である負傷兵を助けたい！！でも助ける事が出来ず、そんな中での非常な選択なのは、分かっているのだが……

「そ…それでもあちら側には……まだ助かるかも知れない人達が……」

そんな屈強な表情の兵士達とマリオン！！やはり、一時的に攻撃が止んでいるだけであって、いつ再び攻撃して来るか分からない……

そんな時間がせっぱ詰まる中での救出はやはり不可能なのか！！そして、そんな時に、そのマリオンの隣側でそんな会話を聞いていた、美琴達は、何か閃いたのか、マリオン達に突然話しかけ……

「まってっ！！ようするに、その傷付いて動け無い人達を避難させるのよね、」

「そ…そうですが、しかし……」

「その事でしたら問題無いですわ、それにわたくしは、ＬＥＶＥＬ４のテレポーターですわよ♪わたくし達に任せてくれれば十分もしないで……」

そんな兵士達に頼もしく自分達も協力するような事を述べる黒子達……そんな彼女達に、なにか不可能な事も可能にしてしまうような、そんな気がする兵士達……そんな兵士達は、その自分達には無い、強い意志のような物を彼女達から感じ取り……

「わかりました、お任せします……但し、その救出の間、空軍に要請、奴の目を引き付けます、その間に兵士達を…」

「オッケー！！そんじゃぁ～チャッチャと……」

と、かなり張り切りやる気まんまんの美琴達、さっきまでの弱気な彼女は一体何処へ？？みたいな、そんな彼女達に、心配そうに話し掛けるマリオンなのだが……

「そんな、御坂さんっ……」

「いや…まぁ～……アンタも色々と大変な事情は分かってるしさぁ～……アンタも大切な私の後輩なんだから、少しは頼りなさいっ！！」

と、そんな心配そうに見つめるマリオンに対して、そっと、優しく微笑む彼女、大切な友情、そんな友情が芽生えつつある彼女達、そんな様子をさっきから見ていた当麻だが、

「アハハ……どうしたんだ？？ビリビリっ♪♪そんな急に先輩風ふかしちゃって」

「うっさいわねぇ～！！……ったく…それじゃ…黒子っ！！」

「はいっ！！お姉様っ！！……それじゃ、後はよろしくお願いしますわ…マリオンさんっ」

「うんっ♪♪本当にありがとうねっ！！それじゃ私も、その間に中ではぐれた光雄を探しに行くからっ！！」

◆◇◆◇◆◇……

そんな兵士達とマリオンや美琴達が救出に赴く中……何げにその上方を見上げる当麻だが、その見慣れない”何か”が浮遊している事に気付き、

「おいっ、あれって??もしかして、あれが……」

そんな当麻の言葉に気付いたのか、同じくその暗黒の空に浮遊する物体を眺め、ゆっくりと口を開く兵士……

「そう、あれが…あの忌まわしき過去からよみがえった悪魔の兵器……暗黒使(ガルドラゴ)!!」

その兵士達が言う魔装兵器!!その全長数百m(メートル)にもなる巨体はそんな様子を遥か上方から見下ろすように静止している……しかし、そんな魔装兵器だが、

そう、次元城のその遥か上方に浮遊する巨大な飛行物体……その姿はとても妖しく光りを放つ巨大な羽…その羽の中心に真赤に輝く巨大な魔法石を中心に……その姿は、優雅にも妖しく……あたかも巨大な昆虫類を醸し出すようなシルエット……そう、正にこの世界に降り立った巨大な蝶…その物である！！

その巨大な蝶の中心付近……その赤く輝く魔法石の上辺り……何か、ガラス穣のレンズにも似た球体の中に一人の人物が浮いている……

その人物は、虚ろな眼で周りを見渡し……そして、悪魔のように不敵な笑顔で嘲笑う……

――――とても素晴らしいな……まったく…まるで私は神にでもなった気分だよ！！……さて…と、醜い虫けら共よっ！！我にひれ伏し……我に従え…ハハハハ！！……

◇◆◇◆◇◆◇◆◇……

そして、そんな皆が急いで傷ついた負傷兵らを救出している中…

…再びその悪魔が活動を再開！！
その巨体な羽をはためかせ更に上昇をする暗黒使（ガルドラゴ）！！

その彼の言葉と共に再び活動を再開！！

更に今度は、その巨体な羽を広げそんな羽に刻む妖しげな巨体な魔方陣！！その複数の魔方陣がゆっくりと回転を始める！！

そんな様子をその下方から眺める当麻や兵士達！！

「……くっ！！こんな時にッッ！！」

「いかんっ！！は……早く、城の中のマリオンや御坂さまに知らせるんだっ！！」

そんな切迫詰まる中…突然耳をつんざくような轟音と共にその妖しげな魔装兵器に音速で突っ込む数機のＦ１６戦闘機！！

そんな暗黒使（ガルドラゴ）の撃破要請を受けたトルコ軍所属の機体！！

その暗黒使（ガルドラゴ）に向かって放たれる空対空ミサイル！！

そんなミサイルに対して、先ほど下方に向けていたその巨体な羽をそのミサイルが迫る方向にゆっくりと向け、複数の魔方陣から凄まじいエネルギーと共に放たれる巨大な粒子砲！！そんなビームに撃ち抜かれドロドロに溶解し、連続して地響きと共に爆発！！

その放たれたミサイル事数機のＦ１６をも巻き込み粉砕しつつ遥か遠方の山に命中！！更に一気にそんな山をも溶かし、粉々に粉砕しつつその更に遠方に着弾！！

その遥か遠方から巨大な茸雲が立ち上ぼり凄まじい衝撃波が襲う！！

かつて、幾多の都市を消滅したであろう……”悪魔”……その名の通り正に、とてつもなく、まるで神の怒りに触れたかのような信じられない破壊力に……只呆然と立ち尽くす当麻！！

そして、更にゆっくりと旋回を始める暗黒使（ガルドラゴ）、それを阻止せんと先程の攻撃から免れたであろう数体の戦闘機もそれに合わせ急旋回しつつ二機は、再び暗黒使（ガルドラゴ）を牽制しつつ襲いかかり、もう一機は、そのままの起動を維持しつつ突然機首を上に向け急上昇をかけ、

「なあ、あの一機…一体何をする気だ??」

そんな様子の当麻達に、いつの間に救出に間に合ったのであろうか、その隣側に佇むマリオンと、その向側に美琴達と光雄が!!

そんな、当麻にマリオンは、

「おかげ様で、全員無事に救出を終えました、トルコ空軍は、今から暗黒使（ガルドラゴ）に対し、ＳＦＴ攻撃の許可が下りたみたいです!!」

「いけないっ!!だから早くここから出来るだけ遠くに避難しないと!!……」

「えっ!?ＳＦＴ兵器って??」

「そう、トルコ軍がＮＡＴＯ（北大西洋条約）から正式採用した禁断の兵器です!!正式名、縮体式火薬、別名ＳＦＴ…空気中の酸素をその破壊力で燃やし尽くす対戦略爆撃機用弾頭!!……」

最悪の兵器……そんな兵器を使用するのにかなり恐怖を感じるのか、震える口で呟く用に言うマリオン……

そんな、マリオンの表情を見つめる当麻や皆……

「そんな、せっかく……皆無事に救出出来たのに、くそっ!!これが正規軍のやり方かよ!!これじゃ皆が!!俺たちも!!」

「ねぇ……だったら…だったらさぁ～……」

「えっ??」

「ねぇ～……葛城…アンタの能力って、空…飛べるのよねぇ～……」

「ええっ？？そ…そうだけど……御坂さんっ？？まさかッッ！？」

「お姉様っ？？まさかッッ！？」

「よしっ！！さっすが御坂さんっ！！その話し乗った！！まぁ……暗黒使（ガルドラゴ）を助けるような形になるが、ようはあの爆弾が着弾する前に何とかすりゃ～いいんだろ？？」

「えっ！？光雄っ！！あなた！！いけないわ！！」

「そんなマリオンちゃん……でも、ここで指を加えて見てるよかいっそ俺達であの爆弾を阻止！！更にこの俺の能力で……奴を！！」

そんな無謀な作戦を考える光雄と美琴達……しかし、そんな光雄達の作戦は果たして暗黒使(ガルドラゴ)に通用するのか！！

そんな中、光雄やマリオン達の無事な姿に気付き、その別の方向から攻撃をしかけようと準備するステイルや火織達！！

暗黒使(ガルドラゴ)……そんな光雄達やステイル達がいくら挑んでも力の差は歴然！！はたして！！

又々無理矢理だが次回へ続く！！

第二十九話　舞い降りる最悪の翼……そんな中芽生える小さな友情、そしてどんでん返し

な…なにやら、未だ最終バトルにならんがな……

しかし、いざ最終バトル始まっちゃうと……あっと言う間に終わる……のか??

まぁ～それはさておき!!
次回こそバトル開始にしますッッ!!

てな訳で次回もお楽しみ

第三十話　ヤッパ主役は俺様だぁぁ！！必殺！！超高密度収縮粒子砲！！最強チート

ふっふっふ……このヘンテコな激安ＲＰＧパートも残す所後少しなのだぁぁ～ッッ！！

つー訳で♪

光学の超高密度収縮粒子砲戦記……

始まり始まりっ！！

第三十話　ヤッパ主役は俺様だぁぁ！！必殺！！超高密度収縮粒子砲！！最強チート

「なあ……彼方さん、なにやら動き出したぜよ」

「そ…そうか、それじゃあいよいよ僕達も行かないといけないかな？…まずは上条当麻と合流して……」

「いえ、上条さんとは違うみたいです、あそこに浮遊している小さな物……まさかっ！！葛城光雄さん？？」

そう、ステイル達が見た飛行する小さい物……それは確かにまぎれも無く葛城光雄その人だった！！……

そして、そんな中戦闘機は再び態勢を整え再攻撃を行うべく二機は真横からミサイルを打ち込み、その遥か上空から本命が突っ込む！！

「いかんっ！！あれは普通の攻撃態勢じゃ無いぜよっ！！」

と、そんな様子を眺めていた元春達や……その反対側に位置する当麻達も身構え、覚悟を決め……

元春達はそんな攻撃の余波から身を守るべく周りに隠れられるような場所を探し!!防御結界の準備を!!…

その一方…当麻達は、マリオンやその他の兵士達のが集結し……それに備えるのだが……

そんな攻撃は無く、

先程までの耳をつんざくような戦闘機の轟音も消え、そんな次元城の周りに再び静寂が訪れる……そんな中茫然と立ち尽くしその様子を眺めていた黒子達……

「なっ!?何ですの??」

「んな事聞かれても、あいつの周りが光につつまれた瞬間に消滅って??……ねえマリオンさん、一体あいつの能力って何なの?」

「あれ??マリオンさんっ??まさかあいつに……単独で!?」

そう、攻撃の最中彼はいつの間にか無我夢中で自身の能力を最大に!!そして何が起こったのか一瞬でそんな爆弾や戦闘機を物質事粒子に転換、その機体のパイロット達をも取り込み、その後そんなパイロット達を地上に転送、そんな常識じゃあとてもあり得ないような芸当をやってのけた彼……

そしてそんな彼が浮遊するその遥か下方に駆け寄るマリオン……そんな彼女に自慢げに微笑む彼だが……そんな自分自身の能力を無理矢理最大にしたのがたたったのか、力なくその身体に纏う粒子が一気に散った瞬間……下に落下……そんな様子に驚き叫ぶ彼女の顔を眺めながら彼の意識が無くなり……

◆◇◆◇◆◇◆……

――――――あれっ??

俺、どおしちゃったんだろう……こんな大事な時に身体が……そうか、たしか俺の真下で叫んでいたの、マリオンちゃんだっけか??

いや…俺はこんな所で、こんな一番大事な所で息耐える訳には、絶対に約束したんだから、

――守る…絶対に、そしてこれからも、だからそんなあなたに俺が……と……

――これで、この戦いで、総てが終わるんだよな……でもまぁ～、このラスボスを倒しゃぁ～今までの一連の学園都市から始まったこの出来事も、もうこれでおしまいだな、

はは……、俺の第二の人生か～……このいまいましい出来事を終わらせ、早くこの世界を色々とエンジョイしたいぜっ！！……そして、俺がこの先本来の原作通りに事が運ぶとしたら……今後…いや…この先に待つ様々な強敵が…一方通行や…あの天使の力を宿すミーシャ・クロイツェフ…ふふふ……まぁ、勝てるかどうかの選択は、まずは頭上に浮遊する”あれ”で色々と本当の俺の実力の実験台になってもらうっ！！……そして俺はっ……？？

――えっ!?――

「あの～…これは?、」

って??まてまてまてよおいっ!!誰かと思えばマリオンちゃんっ!!いきなりこんな変な差し出されても……俺に??何を望む!?いや、でもそれって……そのシチュエーション……

――――いや～な予感がっ――――

そんな先程まで意識が無かった光雄、そんな光雄にいち早く駆け寄り、その身体を優しく抱き抱え、そっと微笑むマリオン……
そんな彼女は何かを思い出したかのようにポケットから何かを取出し彼に差し出すのだが……

「!?これ……は?…」

「さっき光雄が肌身離さず持っていた物でしょ??」

「えっ!?、これが!?」

「そうだよっ、あれから光雄の事助け出す時に落ちていたんだからね!!ったくもぅ～……あれ程手放すの拒否してたのに、その辺に捨てるなんて、信じらんないっ!!」

えっ??こ、これって……そうかっ!!ついさっきの……たしか……ははっ♪♪俺っ!!俺の能力で奴をっ!!……ううん……その前に♪

「あっ!!あれかっ♪♪さっすがマリオン様ですねぇ～♪……」

「えっ??……も…もぅ～……ほぉ～ら、早く…」

って??いきなり首に手を回さなくても……そうか、俺のこれ、いつの間にペンダントにしてくれてたんだ……でも何か、そんな優しいあなたのお陰でマジで決心ついたよっ!!

「ああ、ありがとうな……そして、行って来ます」

「ち…ちょっと光雄っ!!そんなヘンテコな顔しないっ!!これじゃまるで……しぼうふら……」

「えっ?ちょ!?」

って??ななにをいきなり言いだすかとおもいきやっ??……

何でそうなるッッ!?そうか!?…マジ俺死んじゃうのか??いやいや……そんな事したらこの番組終??

いや!!……まてよッッ!?もしやッッ!!ここ最近のアイツ…やけに目立っているよなぁ~……やはりッッ!!

「おいっ！！マリオンっ！！」

「へ？？……な…なによっ！！」

「さてはおまえッッ！！最近やけに目立つと思ったら、この俺様を無きものにしてこの番組を？？……ば…ん……ぐ……」

「ウヒッ！？」

次の瞬間、光雄は暗黒使（ガルドラゴ）なんかよりも恐ろしい”何かを”見てしまい？？

「ハンッ！！だぁ～れぇ～が番組をだってぇ～ッッ！！ったく！！そんなわけわからん事をやってるから読者様が離れて行くのわかんねぇ～のかゴラァァ――――ッッ！！」

「ひいっ！？ごっ……ごごごめんなさいマリオンさまっ！！もうしません何も言いませんっ！！だ…だだだから”それ”だけはぁぁ――――ッッ！？」

◆◇◆◇◆◇◆◇……

す…数分後……（汗）

「って!?……ええっ??……わわ私一体何を??」

「マリオンちゃん、いや……もういいから、何も考えるな……」

そして俺はさとった……奴の本当の狙いを、ヤハリこいつは只者じゃぁ～無いと……その内本当に??……って!?

「あ～はいはいここまでっ!!…ったく…さっきから二人して何をやってんだか……ちゃっちゃと終わらせるんでしょ??ほらっ…行くよっ!!」

「あらあら、光雄さんもマリオンさんも何をこんなに脂汗かいているんですの??」

「いや……まぁ～……」

「えっ!?し…白井さんっ??ここ…これは…その」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆……

そして、そんなこんなの内に、無事ステイル達と合流……そして!!いよいよ暗黒使(ガルドラゴ)を倒すべくラストミッションに赴く光雄達……

そんな中で、

「おいっ!!葛城光雄…先程君が見せたあれは、まさか……」

「んっ??ステイルさん??俺がさっき見せた技ってか??、まぁ～そんな事いちいち気にしすぎだよっ!!……後…俺…自分の能力と…」

「あなたの実力は分かりました、でも、これだけは肝に銘じといて下さい…たとえあなたの身体にどんな不思議な力が働いているか分からないですが、能力者であるあなたが魔術を使用したら……」

「あん?? あはは♪そんな心配性だな神裂さんも…大丈夫だって！！そんな心配性だとお肌に悪いですよっ♪♪」

「なっ！！お…お肌って…（汗）」

そんな、お互いの会話中なのだが、そんな彼等を嘲笑うかのように再び活動を再開する暗黒使（ガルドラゴ）

そんな中、光雄は、

「え～と……だから、何??」

「ええっ!?聞いていなかったの??だからっ!?」

「このわたくしの能力でお姉様をあの城の一番上までテレポート、」

「で！！私が思うに……あの一番やっかいな空に描き、浮かぶあの

マーキングは、アイツの頭上に見えるあの触角!!あそこから何かしら作用しているような気がするよのね……」

「えっ!?言われてみれば確かに……」

そんな会話を聞いていた火織はなにかしら気がついたみたいに口を開き……

「たしかに、それは当たっていると思います、あと、あの巨大な羽さえ封じれば……」

「俺達でも勝算はあると!!」

ふふ……そうかそうか……皆さんそんなラスボスを倒す相談ですよね～…そうっすよねぇ～…

しかしそんな相談するよか、最近落ち目なこの番組をどう盛り上

げるかをな……

と、なにやら皆さんが作戦会議中の中……んなものは無視しつつ、ニンマリと!?とんでもよからぬ事を企み出した彼だが!?……っておいっ!!そんな事しちゃ～…又々いや～な予感がぁ!?

「なあ皆っ!!そんな暗黒使（ザコ?）は俺がちゃちゃっと折り畳むから、そんな事よかこのばん……ぐ……み??……」

「って??な……なに!?」

「「「……（汗）」」」

次の瞬間、そんな光雄を眺めていた皆さんの表情が凍り付き??

そんな視線の先……背後からスンゲー威圧感を感じつつ……恐る恐る振り向く光雄だが!?

「ヒッッ！？……」

「ふふふ……みぃ～つぅ～え～？？さっきさぁ～…言わなかったっけ？？」

「ウヒヒッッ！？……ま…ま……マリオンちゃ！？」

とまぁ～…又もやそんなアホな事をやらかしてしまった彼？？その結果マリオン様が？？……もうこの問題に触れるのは流石に生命の危険をかんじつつ、彼は意識をおとしたのだった……（爆♪）

◇◆◇◆◇◆◇◆……

そんな中……空中に浮かぶ巨大な悪魔、魔装機、暗黒使（ガルドラゴ）

その中心付近……赤く輝く人工魔法石の真上にある球体内では……

「ふふ……あの虫けら共め……まぁ良い……まずはこいつら全員を片付けその後は世界の国々を平らげ……その為の礎になって頂こうか！！…」

そして最終決戦の
狼煙を上げるかのように再び降り注ぐ赤い魔弾！！

その降り注ぐ無数の魔弾が迫り来る前に、その２ｍ（メートル）にもなる長刀、七天七刀を構える火織、
すかさず七閃の七本ものワイヤーが唸りを挙げその無数からなる魔弾を次々に鮮やかに迎撃！！

その見上げる空を一面に爆発の花を咲かせつつ！！

「では、みなさん行きましょうっ！！」

その火織のかけ声と、共に　そして、それぞれが行動開始！！

「ふはははは……面白いな……やっと、骨のある奴等が来たと言う事か……ならばこの魔装機の本当の恐怖とやらを教えてやろうではないか……」

更にそんな邪悪な笑みを浮かべながら、クラークはある事を閃きつつ……その巨大がゆっくりと旋回して行く暗黒使（ガルドラゴ）……

そして、その数百m（メートル）からなる巨大な翼を広げつつ魔力を貯め初め……

その真下では、光雄がそれに対して、両手をその暗黒使（ガルドラゴ）に向けつつ粒子を加速させつつ牽制の準備をする光雄……

「し……白井さんっ！！今奴は動きを止めているっ！！その隙に早くっ！！」

「……分かりましたのっ！！……あなたもあまり無理をなさらずに……」

「ああ……んじゃ、後でなっ！！」

「了解ですのっ！……それじゃ…お姉様！！行きますのっ！！」

「んじゃ行きますか……葛城っ！！後は任せたわよっ！！」

そんな言葉をかわしつつ黒子達は、作戦を遂行する為に、半壊した次元城の屋上付近へテレポートを遂行！！

そんな中、再び暗黒使の方角を向きつつ睨み付ける光雄……嫌な汗が頬を伝う……

こんな奴のあの一撃を俺は跳ね返せるのか？？
でもなぁ～…未だ俺自身自分の能力があまり分かって無いんだよな～…

俺の今持てる力の最大の技……あの天へも突き抜けるあの巨大サーベル……　奴が今狙っているのは俺……まぁ～いわゆる奴を引き付ける囮なはずだが……その隙に御坂さん達が奴の頭を潰してくれれば勝算があるのだが……

今光雄に向けられている暗黒使（ガルドラゴ）の必殺の一撃…その一撃がもし放

たれたら、下手したら今、対暗黒使(ガルドラゴ)を倒す作戦展開中のみんなを巻き込む所か……そんな悲惨な状況が頭に浮かぶ光雄……

しかし、その状況下にふと思い出した今自分自身の首に掛けられている一つのペンダント……聖剣天使の雫……そして、彼が落としたそれを広い再び自分に託したマリオン……そんな事を思い……光雄はそんなマイナス思考を断ち切るかのように……考え、そして閃く!!

だったら、奴が放つのはその強大な翼から魔力を収縮する粒子砲……

だったら!?

この……俺の……

俺の力……俺の光の能力でも奴と同じように可能じゃ??

その瞬間……光雄の周りの大気の動きが変わった……更に光雄の身体中から目一杯の膨大な量の粒子が渦を巻き……そして奴に向けている両手の間に次々と、その眩ゆい光の粒子が滝のようにゴゥ……と、集められて行く……

更に、先程から制止していたで有ろう風や空気の流れも……最初はゆっくりと……そして!!だんだん早くそんな、眩ゆい光の一点に掻き集められるかのように、ビュウ……と、音を立てつつ凄い流れに!!

その様子を先程から眺める火織とステイル……

「やはり、彼は魔術を使用するのか??」

「いえ、あれは多分魔術とは違うみたいですね……でもあの能力は……」

更に、そんな様子を次元城の屋上から眺める黒子達……

「あの彼は、もしやあの時見せた巨大サーベルを放つつもりですの？？」

「いや、でも何かそれとは違うような光や素粒子を無理矢理一点にねじ込み……まさかっ！？……黒子っ！！アイツが攻撃した後私達もやるわよっ！！」

「了解ですのっ！！」

そして、そんな皆が見守る中暗黒使（ガルドラゴ）から周りの大気を引き裂き凄まじい閃光とともに巨大粒子砲が放たれる！！

くっ！！奴の方が早いッッ！！しかしッッ！！

「うぅ……ウワァアアアア！！くぅ～らえぇぇぇ――――――――ッッ！！」

次の瞬間！！グワッと周りを眩ばゆい光と凄まじい衝撃波と共に大気を揺さぶり放たれた！！

瞬間！！

グワワ……と、大気をまるで、その空中の空間をねじ曲げ地面をえぐるような衝撃波と共に辺り一帯を昼間のように照らす閃光！！！

更に、そんな彼が解き放った粒子の塊は、奴の粒子砲をも粉砕！！グワッ！！と空中に浮遊する暗黒使（ガルドラゴ）をも飲み込み天高く更に上昇！！その遥か上方でゴバァッッ！！と一気に眩ゆい閃光を空一面に広げ……まるで雪が降り注ぐが如く光の粒子がキラキラと舞う……

そんな……閃光が晴れ……段々と視界が見えて来た矢先……周りからバチバチとスパークを放ちながら半壊し……あちこちで連続して爆発を起こしつつゆっくりと傾きながら墜ちて行く暗黒使！！そして、それが地面に着地……

「うぅわ……な……なによあれ……あんな凄い技見た事が……」

「おっ！！お姉様っ！！今がチャンスですの！！早く奴の触角を！！」

その瞬間を逃すまいと、次元城の屋上から狙いを定める美琴……

そしてそんな彼女から超電磁砲（レールガン）が留めと言わんばかり奴の頭に命中！！

瞬間！！

暗黒使（ガルドラゴ）の頭部を吹き飛ばし！！

完全に沈黙した……

そんな中…完全に沈黙した破壊の邪神……暗黒使（ガルドラゴ）の残骸に歩み寄

る、当麻やマリオン達……

しかし、その奴の中にはまだ……

更に、無理矢理だが次回へ続くっ！！

第三十話　ヤッパ主役は俺様だぁぁ！！必殺！！超高密度収縮粒子砲！！最強チート

ふぅ～……よーやっとここまで……こ…これで後は、エンディングで終わりかな！？……（汗）

まぁ～…次回でこのパートも終わりっつー訳で……

お楽しみに～♪♪……ハハ

第三十一話　激闘！！主役は葛城光雄っ！！俺様だぁぁ！！って！？ヤハリ上条

いやいや……マジで暫く続いてしまったこの激安ＲＰＧパートも今回でおしまいっつー訳で？？

光学の超高密度収縮粒子砲戦記……始まり始まり～♪♪

第三十一話　激闘！！主役は葛城光雄っ！！俺様だぁぁ！！って！？ヤハリ上条

先程の光雄が天高く解き放った『光学使い』としての最大出力の大技『超高密度収縮粒子砲』その凄まじい光の粒子の余波なのか…未だキラキラと、その粒子が降り注ぐ中、

本体と片方の羽だけを残しあちこちから火花やらスパークを繰り返しながら落下する暗黒使（ガルドラゴ）

あたかも、邪神の象徴、あの魔界に君臨し続けたもう一つのオスマン……その１２００年の最期を物語るかの如く…漆黒の闇に深く沈み行く邪神の象徴……

その暗黒使（ガルドラゴ）に次元城の屋上から狙いを定め美琴の超電磁砲（レールガン）で更に頭部を吹き飛ばされ、瞬間！！その中心で赤く妖しく光輝く人工魔法石も機能停止し、

次元城の裏側のとある施設もろとも倒壊させつつ強制着陸し、その施設に斜めに突き刺さるように制止した暗黒使（ガルドラゴ）

、

更に、バキキ……と、鈍い音を響かせつつ、その巨大すぎる羽の重さに根元の強度が耐えられないのか、グワッ!!とその根元から、爆発を繰り返し、その巨大な羽がポッキリ折れ曲がり地響きと共に地面に激突!!瞬間、ブワッと忽ち凄い量の砂煙が舞う!!

そんな中を機能停止した暗黒使(ガルドラゴ)の残骸に歩み寄る数名の人物達……

「おいっ!!マリオンっ!!いくら奴が活動停止したからと言っても、迂濶に近づくのは危険だぞっ!!」

「えっ??ステイルさんっ??でも、それでも私は……あの中にいる人を……」

そんな悪魔のような邪悪なる人物、クラーク……そんな彼に救いの手を差し伸べようとする彼女……
そんな彼女に、ステイルは、

まったく、上条当麻と言い、こいつ等はどれだけお人好しなんだ……と、苛立つ心で深々と喫煙しながらその反対側を歩く当麻に話

しかける、

「ちっ！！……それより上条当麻！！何故君が？？まぁ～…もっとも君の目的は分かっているけどな……」

と、なにやら意味ありげな発言を言いつつ喫煙するステイル、そんなステイルに対し当麻は？？

「えっ！？何の事なのせうかっ！？俺……何かしたか？？」

そんな当麻はステイルに睨まれながら何を言われたのかわからず冷や汗をかきつつマリオンの方を振り向き！？

「んっ？？、上条さんっ…あなたの気持ちは良く分かっていますよ♪その時は、ちゃんと守ってくださいね♪」

とまぁ～……そんな当麻に作り笑いなのか、なにやら意味ありげ？？な表情でニッコリ微笑む彼女、
そんな彼女に見つめられ、一体何にスイッチが入ったのやら顔を赤らめながら動揺する当麻だが？？

「うぇっ！？……はは……えええ～と～…」

「まったく……君は、どれだけフラグ立てれば……って！？…まぁいいさ…それより早く行こう」

そんな当麻の様子に？？、ヤハリ、”それ”が目的なのか！？とまぁ～……ため息をしつつステイル達は、破壊された暗黒使（ガルドラゴ）に赴くのであった……

◆◇◆◇◆◇◆……

一方、そんな暗黒使（ガルドラゴ）の位置から城を挟んで反対側では？？

半壊した次元城の周りにゾロゾロと人が集まりつつあった、

そう、数十分前まであの恐ろしい悪魔、暗黒使（ガルドラゴ）との戦いで生き残った者、その攻撃から身を守る為避難した者…と、…様々な人々が交差する中、突然その空間をねじ曲げ一瞬で現れた二人、

「えっ！？一体この人達って、何々ですの？？」

「そうねぇ～…きっと奴から逃げ延びた人達とかが集まって来たのかしら……それよか早くマリオンさん達と合流……？？って…」

「ねぇ～…くろこぉ～？？」

「えっ？？…何ですの？？……」

と、突然次元城の屋上からテレポートして地上に下りて来た黒子達、しかし周りの様子に驚きながらキョロキョロする黒子、

そんな黒子の様子に美琴が説明をするのであるが、そんな矢先に、なにやら黒子様の様子が？？

「アンタさぁ～……その手……」

とまぁ～…突然事もあろうにそんな安心したのかその隣側の美琴に抱き付こうとする彼女？？……って言うか先程のシリアスな二人は何処へやら……（笑）

「ええ……そうですわねっ♪♪先程のあの戦いでお姉様にもしもの事があったらと思いっ！！黒子はっ…くろこはぁぁ～っ♪……

！？」

と、突然”そんな”事やら”あんな”事をし始めた元祖変態に？？なにやらいつの間に電気をため込む彼女だが……（笑）

そして！？

「こんな道のど真ん中でなにしとんじゃゴラァァ――――――ッッ！！」

「うぎゃぁぁぁ――――ッッ！？」

とまぁ～……黒子様っ！？ヤハリと言って良いのやらそんな彼女に？？”そんな事”をしてしまったら当然結果は見えているはずなのだが？？

「ハァッ……ハァッ……って！？……えっ！？」

そんな突然そんな怪しげな？？路上パフォーマンスを見せた彼女達に……当然

ヤハリ周りの人々は注目するのは当たり前のようであり、なにや

ら周りからヒソヒソと……！？

「ふぇっ！？……い…いゃ～あ……これは、え～と……って！？」

と、そんな周りからの突き刺さるような視線に耐えられないのか？？ニコニコと冷や汗をかきながらそそくさと退散しようとする二人……しかし、そんな目立ちまくりの彼女達になにやら気付きつつ話し掛ける人物が？？

「あれっ！？あそこに居るの……やっぱり御坂さんと黒子さんじゃ～ないですかっ！！」

「うぇっ！？……ま…マンスレンさんっ？？」

「後俺達も居るぜよっ！！」

と、突然彼女達を見付けたのか歩み寄る彼等……そんな彼等は、次元城の潰れかけ半壊した瓦礫の真横辺りに集まる、元春やマンスレン率いる別の集団なのだが、そんなマンスレンに話し掛けられ、

その後なにやら合流する事になった美琴達であった……

◇◆◇◆◇◆◇◆……

数十分後……

でそんなこんなで、その集団、なにやらみんなしてその次元城の瓦礫の山やその他色々と物色中な彼等、んでそんな彼等は一体何故そんな事しているのかと言うと??

「よう、どうだ??見つかりそうかにゃ??」

「いやぁ～あの時の地下空洞何ですが…全然変わってまして、今まで俺達が来た所全部無くなっていやがるんですが……」

と何故か、困り果てた表情の彼…そんな彼に元春は??

「そうか、だったらあの時通った半壊した制御室辺りから、又々調べ治しかにゃ……」

そう、そんな彼等はというと??先程の色々と来た道をたどり、何とか元の学園都市に帰る方法を探っている最中なのであるが……

「土御門さんっ!!こっちもダメっすよ~……」

「そうか、う~ん……」

そんな考え込む元春に反対側から別の人物が話しかけ??

「おうっ!!何か、こっちの奥の方なんすが♪」

そんな事を言いつつ、地下室みたいな所から、はい上がって来たジュンタ達……そんなジュンタ達だが、いつもと違うメンバーが居る事に気付き、

「うぇっ!?あ…あの～……もしかしてあなたは??」

「あぁ……アンタ等まだ居たんだ…」

と、その美琴達もそんな彼等は、いつぞやのファミレスでの”あいつ等”と気付き??なにやら会話を始めるのであるが??
そんなジュンタはと言うと、

「あれれっ!?……もしや??……あの時のアンタかぁ～……所でアンタ等はあれから〇ミ??……もといっ!!光雄さん見かけ無かったすか??」

とまぁ～当然そんな彼女に質問する事はお決まりのパターンっつー訳であり、

「えっ!?……アイツ??、いや…私達もさっきここに来たばかりだし……でもアイツだったら多分、反対側に居たマリオンさん達と合流してるんじゃ……??」

と…そんな、彼等との会話中……突然、彼女の後ろ側に居た黒子を見付けそんな彼等の集団の中の一人がなにやらただならぬ反応で!?

「ああッッ!!もしやあの時のっ!?へんた??」

「ほ〜う??変態って!?だぁ〜れの事ですの??まぁ〜もっともぉ〜!?あなた達みたいに光雄さん追っかけ隊みたいなキモいストーカー行為はいささか人として問題がありましてよ♪」

「ふははッッ!!……なぁ〜にを言いだすかと思えばストーカー行為だとっ!?ハンッ!!甘いっ!!甘すぎるぞ小娘がぁぁ…それは即ち……一つの愛の形としてだなぁ〜……」

「ほほ〜う??愛ですのっ!?ったく……そんなにわか親衛隊如きが良くもまぁ〜そんな事言います事??……そもそも”愛”っつーのは……」

とまぁ～……ヤハリと言って良いのやら、この怪しげな集団と黒子様が相対すると再びこんな変態的口論が勃発するようで……（汗）

そんな黒子達がヒートアップする中向こう側から誰かしら歩いて来た事に気付くその他のメンバーとスキンヘッドだが??

「うぅ……みず……水を……」

とまぁ～崩壊した次元城の残骸と、その奥に広がる荒野をバックに近づくシルエット……

その吹き荒れる荒野っ!!そこから一人ゆっくりと一歩づつ確実に歩み寄る、そんな人物を見入るスキンヘッド達＋オマケ達（黒子達??）……正にこのシチュエーションはっ!?みたいな、とあるアニメの凄いチートな主人公??みたいな登場の仕方の彼は!?正しくケ○シロー!?もといッッ!?まぎれもない本編の主役の葛城光雄その人であるッッ!!

「み……みじゅ!?……うえええッッ!?」

そんな、先程の能力最大がたたったのか足取りもままならない光雄……
そんな光雄をその遥彼方から見つめる彼女??もといっ！！頬を赤らめつつ不気味な??スキンヘッド……（爆♪）

「――ま…〇ミさま……」

うげげｗｗっつー訳で！?その不気味極まりないスキンヘッドの脳内では（笑）??

――――あの可愛いさと凛々しさを併せ持つ不思議な顔立ち…そしてっ、あの魔法少女みたいなお綺麗な服装……まぎれも無いっ！！あの御方こそわたくしの！?――――――って！?

パチンって！?

「うげっ！?」

「あ～はいはい変態行為はここまでねっ！！」

と、いやいや……そんな不気味な??変態達になにやらその精神が耐えられないのか??いきなりそんな奴等に向けて超必殺電撃お仕置き??を浴びせ全滅せしめんとする美琴様??（笑）

「「「あんぎゃァァ――――――ッッ!!」」」

とまぁ～……そんな光雄や彼達も巻き込んでビリビリ地獄と化した有様なのである……（爆♪）

数十分後??

そんな、惨状に佇む美琴はなにやらそんな黒焦げ状態の??黒子やら光雄筆頭に怪しげな集団を眺めつつ、ある事が頭に引っ掛かり思考中なのであるが??

ハァ～……まぁ～たこいつ等、毎度毎度こりずに……ったく!!こんな奴等にいちいち干渉しては、精神的にこっちが持たないっつーのっ!!

しっかし……葛城光雄、アイツもほぉ～んと…良くもまぁ～こんな厄介な奴等に好まれるわねぇ～……

まぁ……あの顔と言い…、しかもあんな魔法使いみたいな不思議なしかもあんな綺麗な能力……やっぱりかなり人気あるなぁ～アイツ……って!?私……何をっ!?彼にはマリオンと言う大事な人が居るのに……ハハ

にしても、アイツ……って!?

「あの～……御坂さんっ!?」

「ひゃいッッ!?」

とまぁ～何やら色々と思考中の彼女の目の前に突然謎の復活をとげた噂の彼……葛城光雄になにやら謎の動揺中であたふたする美琴なのであるが??

「わわっ!?……あっ……ああアンタいつの間に、な…何の用よっ!!」

「ええっ!?よ…用って別に俺もさっきさぁ～あの瓦礫の辺りで意識が無かったみたいでハハ」

「えっ!?……そそそうなんだ～……」

「へっ??……み…御坂さんっ!?……」

「って!?なによっ!!…聞いてるわよっ!!……で??何が言いたい訳??」

「え??ま…まぁ～…何かさぁ～……俺…自分の能力を解放する度にこう意識が飛ぶって……御坂さんに比べ俺の能力ってまだまだなんだな～って!?御坂さんっ!?」

と、なにやらいつものあの恐ろしいビリビリ様とは違う彼女にかなり動揺する光雄……そんな光雄は??

えっ!?な……なななにをあんなテンパるんだアイツ!?そうか、あの彼女が大好きな上条さんに
会えないからかっ!?

いや…それにしても……何かいつもとは……うげげっ！！やべぇ―――……ヤッパ俺か？？俺が原因か？？俺が彼女になんかしたのかっ！？……いや……でもそれはそれで、この俺様が御坂さんルート！？でへっ♪

って！？

ちち違――――――――うっ！！

断じて違うッッ！！俺はっ！！マリオンちゃん一筋にあの夕日に向かってちかったじゃ～ないかっワトソン君ッッ！！……

でも…あ…あんな表情されると……いやいやっ！！迂闊な発言次第であの恐ろしい雷落とされそうだしな……やっべぇ……ど…どうしよーーー――……（汗）

ま…ままぁ～……ここは落ち着いてだなぁ……こほんっ！！

「「……あのっ！？……」」

「って!?み…御坂さんっ!?」

「うぇっ!?アンタこそっ……」

「「……」」

とまぁ～お互い黙り込む始末……っておいっ!!
そんな沈黙を断ち切るように美琴はなにやら気合いをため込んでいるご様子で??そして、そんな彼女というと??

「あぁ～もぉ～っ!!ど…どうせ…まっ…マリオンさんでしょっ!?」

「うえっ??」

「うえじゃないッッ!!……ほらっ……早くっ…いいから行くわよっ!!」

てな感じで、無理矢理そんな妙な空気を??振り払うが如く、アホみたいに固まる彼の手をつかみつつ、次元城の反対側に居るであろうマリオン達に会いに行くのである……って言うか……この妙な二人って!?……いやいや気のせいか??

◇◆◇◆◇◆◇◆……

一方そんな妙な事態に陥る二人を置いといて、その次元城の反対側では??

「えっ!?ま…まさか……居ないっ??」

「どおしたっ??……おい……マリオン……これは??」

次元城の反対側の施設にその巨体が突き刺さるように機能停止している魔装機、暗黒使(ガルドラゴ)の残骸……そして、その残骸のその中心付近に、未だ居るであろうあの邪悪な人物、クラーク……

その人物を事もあろうにその残骸から助け出すべく赴くマリオンと当麻だが??そんな残骸の中心付近の球体内には誰も居ないのである、

「まさかっ??奴はっ??ねぇ上条さん……これって!?」

「ああ……奴はあの状態から無事脱出し逃亡したみたいだな……」

「はぁ～……なぁ～んか緊張して損したって感じですね♪」

「ああ♪ま!!ちとひっかかる物があるが、これで何とか一件落着って訳だな??……ハハ」

そんな安心したのか、さっきまで緊張していたのが嘘のように肩を落とすマリオンと、そんな彼女を眺め頭をボリボリかきつつ笑う

当麻……

そんな様子のその後ろから安心したのか、やれやれ…と喫煙しながら見つめるステイル……

しかしそんなステイルに歩み寄る人物が！？

「んっ？？神裂か…」

「その様子だと、何事も無かったみたいですね、でも何か……あなたも気付いているでしょ？？」

「ああ、まぁ……微弱な魔力はさっきから感じるのだがねぇ……ま！！そんな心配するような事は無いと思うんだが」

そんな事を言いつつ二人して、その向こう側の当麻達を眺めているのだが？？

「なあ、マリオンさん……あの後…光雄に会ってやったのか??」

「えっ??……か…上条さんっ!?み…光雄は多分大丈夫だよっ!!それに彼…何か危ないし……こんな場所でもしも又……」

そんな、もしもここであのクラークに出くわしたらそんな彼の事だから再び無理をするのは分かっているみたいで、だから自分達だけで赴くと……

その彼女の様子になにやらにっこりと微笑む当麻だが??

そんな矢先、その空気が一気に張り詰めるような感覚と共にその残骸の何処かから響き渡る声が??

「えっ!?」

「くそっ！！まさか！？」

次の瞬間そんな空間をねじ曲げ突然二人に襲いかかる深紅の球体！！

「ええっ！？」

「くっ！！マリオン！！伏せろっ！！」

しかし、そんな球体がマリオンに直撃する直前にワンステップでそんな茫然と眺めるマリオンの懐に飛び込みつつ、その右手を振り払うように！！

瞬間！！

バギッッ！！っと、何かしら弾けるような軽い音と共に四散する

球体！！

そんな球体を放ったであろうその人物を睨み付ける当麻！！

「おまえッッ！！まだ抵抗するのかッッ！！」

「ふんっ……幻想殺し（イマジンブレイカー）か！！まったく貴様は厄介だよ……しかし」

「なっ！？」

その一言を言う前に、奴を取り巻く空間が無理矢理引き裂くように周りから先程見せた球体が無数に具現化！！

「ふふふ……さて、幻想殺し（イマジンブレイカー）の少年、いや、上条当麻君だっけか？？……はたして？その右腕だけで、あのマリオンを庇う事が出来るかな？？」

そんな様子をさっきまで見ていたステイル達も駆け寄るのだが??

「ふふ…そう来るか、まぁ、もっとも貴様等三流の魔術では、この私の魔術は防ぎ切れまいて、」

そんなステイル達に不適な笑顔をみせそんな事を言い放つクラーク……そして、そのクラークは、只今右手を天に翳しつつ具現化している無数の魔弾を制止した状態から、更に左手をステイル達に翳しつつ、何かの呪術みたいなのを唱え初め……魔法封じ（マジックストップ）と、一言唱えた瞬間!!

只今立ち尽くす当麻だけを残し、彼の目の前のマリオンや、その向側のステイルや神裂きまでも、まるで糸の切れた人形の如く地面に崩れ落ち、苦しみだす!!……

「くそっ!!おいっマリオン!!しっかりしろッッ!!……これは何かの魔術??だとしたら……ごめんマリオン…ちょっと待ってろ…」

そう言いつつ、苦しむ彼女をそっと優しく抱き抱えつつその右手を頬や背中にあてがうが……

――――えっ??何故だ!?

そんな彼の右手に宿る不思議な力、幻想殺し（イマジンブレイカー）、その手に触れる物は、どんな強力な魔術や例え神の力さえも打ち消してしまう、そんな右手を持ってしても打ち消しす事が出来ず、
そんな焦る彼の懐でかなり苦しいのか、その声も小さく、脂汗をかく彼女!!

「あ……あはっ…わ…私……ダメだね♪油断した……から……ねぇ上条さん……早くっ、私は大丈夫だから…早く逃げ……うう〃ぁぁ!!」

「マリオン……何も、何も喋るな、大丈夫だから…ちとばっか辛いと思うがここでじっとしていろよ♪」

そんな事を言いつつその苦しむマリオンにそっと笑顔を見せ、そして立ち上がり、キッ!!とクラークを睨み付ける当麻!!

だったら多分奴を!!奴がなにかしら作用している物を破壊さえすればと!!

そして、自分が居る位置に、倒れているマリオンに危害を加えないよう突然駆出し……

そんな様子の彼に、おもしろがるように、その右手を振り翳しつつ!!その空中に浮遊する無数の魔弾に命令をしながら…

「ふふふ……流石は幻想殺し（イマジンブレイカー）と言った所か……我が秘術……魔法封じを跳ね返すとはな……しかし、貴様一人に何が出来ると言うのか……さあっ!!食らうが良い、我が聖霊式魔術、炎の魔神（イフリート）を!!」

そんな一言をいいつつ、その天高く掲げていた右手を真下に振り払うクラーク!!

その無数の灼熱の魔弾が容赦無く当麻に襲いかかる!!そんな矢先……

突然天をつんざくような雷鳴とてもに、その降りしきる無数の魔弾を凄まじい電撃が襲い、空一面がその連続爆発で眩しく輝く!!

そんな、爆発の余波で舞い上がったであろう辺り一体を覆う砂煙が晴れたと思った矢先、その身構える当麻の目の前に、彼が良く知っている人物が!!

「ふぅ〜……何とか危機一発って所ねぇ〜……」

「ええっ??み…御坂かっ??」

「ったく!!何やってんだか……と!!その前にっ!!」

「ふふんっ!!今さら増援か!!しかし、貴様が持つ魔術雷神(ライトニング)か??しかし……」

そんな、睨み付ける美琴に対して、再び呪文か何かを唱えつつ左手を彼女に向け、さっきマリオンやステイルに浴びせていたであろ

う彼の必殺の秘術!!魔法封じ（マジックストップ）を唱え、彼女を倒そうとするのだが??

「ふ〜ん??アンタも又魔法使いって奴??で?何かしたの??」

とまぁ〜……その魔法封じを食らわしたはずの彼女だが、全然効き目が無いみたいにケロっとしている彼女、

「そんなっ!!えっ??何故だ!?何故効かないっ!?奴も幻想殺し（イマジンブレイカー）を持ちいる身体なのか??」

「へえ??魔法封じ（マジックストップ）ねぇ〜……何かおもしろい魔法を使うわね〜アンタ……でもざぁ〜んねん!!さて、私は何で効かないんでしょうねっ♪」

「ふふんっ……しかし私の魔法封じを敗ったからと言っても私にはこれがあるのだよ!!」

さっきまで焦っていたクラーク、しかしそんな彼の表情は再び邪悪な笑みを浮かべつつ今度は、目をとじ何かを唱える、そんな彼の真下に巨大な魔方陣が浮かび上がり……炎の魔神（イフリート）と……

そして凄まじい雄叫びと共に何かしら巨大なものがその魔方陣から具現化する……そんな様子に流石の美琴も冷や汗をかきつつ右手をその巨大な”何か”を構え、迎撃態勢に！！

そんな中、その遥上空から”それ”に向けて一筋の光弾が！！

「なにぃっ！？あれはっ！！」

そんなクラークが叫ぶ間もなく放たれた美琴の超電磁砲（レールガン）それと同時に、空から切り払う光雄の巨大サーベル！！

瞬間！！

グワンッッ！！と大音量と共に、その彼が召喚したであろう炎の魔神（イフリート）を粉砕！！瞬間光の粒子に変換され、キラキラと粒子の粒が弾けるように舞い散り！！

そんな様子に、自分自身の総ての手札を失い、同様するクラーク……そんな中、クラークは思い出す……自分達が使用する魔術とは違う者達、能力者が存在していると言う事を……そんな動揺する彼に対し、その右手を強く握りつつ突然駈け出す当麻!!そしてっ!!

「おまえッッ!!こんな……まだこんな事して、そんな幼気なこいつやその他の何の罪の無い人達を虫けら呼ばわりしてっ!!」

「くっ!!……きさ…ま」

「おまえは知らないだろうがそんな虫けらでも…俺達でもちゃんと平共に生きてるんだよっ!!ちゃんと、泣いて、笑って、そして怒って……ちゃんと一人一人のちゃんとした人生がそれぞれあって!!楽しい事や苦しい事……そしてワクワクする事や……おまえはそんな何の罪の無い人々の人生……いや、」

「うぐぅ……」

「それぞれが歩むべき物語を只の虫けら…そんな一言であしらい、踏み躙り……おまえはそんな自分一人の快感……いや欲望の為だけにやっちゃいけない事を平気でやって……そんな、未だにそんな事をまだすると言うのなら!!まずはその歪んだ感情を……」

「ぶち殺すッッ！！」

その瞬間その邪悪な者クラークは、みんなの想いがいっぱい詰まった当麻の渾身の一撃がその顔面に突き刺さり、数回バウンドした後…地面に激突……そして、その邪神の意識は無理矢理墜とされ、学園都市から始まるこの不可解な事件は、この一人の英雄の渾身の一撃で幕を下ろし……再び世界は平穏を取り戻す事になったのである……

そして、そんな矢先に突然当麻や美琴達の目の前にテレポートして来た黒子達……

そんな黒子は??

「お姉様っ！！やりましたの！！」

「って！？黒子？？……まぁ～…此方も何とか終わった所だけど……何？？」

「ええ……あの殿方が……」

と、黒子と一緒にテレポートして来た彼……そんなジュンタがなにやらニンマリとしつつ口を開き……

「なあ、みなさん大変お待たせしましたっ！！そして、ようやくあの学園都市に帰れるんですよっ！！」

「「「……ええっ！？……」」」

「そう、先程から俺達は必死にあの次元城の地下を探索……で？？何と！！その元来た道を発見！！」

「「「……で？？……」」」

「その結果！！何とっ！？その道がなにやら不思議なワームホールとやらに通じていてそこから行けば、難なく帰れるんですっ！！」

「「「……やったぁぁ！！…」」」」

そして、その後みんな無事に……

っつー訳で！！ようやっとこの激安ＲＰＧパートも終わり、次回からは？？

っつー事で？？次回へ続く！！

第三十一話　激闘！！主役は葛城光雄っ！！俺様だぁぁ！！って！？ヤハリ上条

いやいや……今まで続いたこの激安ＲＰＧパートも終わりなのかっ！？……で♪

その後は……いよいよ待っていましたの原さ？？

いやいや…これ以上は？？

っつー訳で？？

次回もお楽しみに～♪♪

第三十二話　冷蔵庫の食材はちゃんとチェックしないと、とんでもな事態を招き

あはは……とまぁ～……なんだかんだで前回とはガラリと変わり今回から始まる学園都市、幻影御手編、

つー訳で、再びそんな主役に様々な悲劇が??と言うか、ギャグ的な??みたいな…（汗）

て事で、

超高密度収縮粒子砲戦記っ!!

始まり始まり～♪♪

第三十二話　冷蔵庫の食材はちゃんとチェックしないと、とんでもな事態を招き

――――ここは、日本国の西部に位置する街、学園都市、第七学区内のとある小さな学生寮……

時刻は早朝４：３０分、……そんな学生寮の一室のベランダに一人佇む人物が、そんな東の空から昇りつつある太陽がそんな人物をオレンジ色に照らす……

そんなオレンジ色の空におもむろに一つのある物をその空に翳しつつ眺める人物……そんな彼が只今翳している透き通るような一粒の小さなクリスタル……

――『魔法石、天使の雫』――――

俺の魔法石か、でも、もしこいつを迂闊に使用したら……能力者である以上俺の身体は……

――――しかし、あの時の誰かの声……たしか、この俺でもこれを使用出来ると、……俺の使用する”魔術”か、一体どんな力なん

かな??

以外とその魔法剣を使い、あの”おっさん”みたいにカッチョいい炎龍（ドラゴン）とか召喚しちゃったりして～♪♪……うへへ……へっ!?

って!?や、やべぇ～…

危うく又々自分の妄想にカミングアウトする所だったぜっ……はは…

つか今この手にしている魔法石……古の精霊式魔術…正確には魔法アイテムの剣っつー訳だな～…魔法剣　そんな力も執拗になる時が、いつかは来るのかなぁ～……こいつを使う時が、　でももしも、やり合うとしたらあの第一位の彼、一方通行とかに魔法や魔術とかは効き目あるんかな??

そんな事を思いながら、自分の佇むベランダから、その一室のベッドで未だ幸せそうに寝ているマリオンとオリアナの表情を見つめる彼、……っていうか人の寝顔を覗く変態のような……（汗）

――マリオン…か……ハハ♪考え過ぎだな…馬鹿馬鹿しい……さあ、まだ朝早いし又寝よっと!!

そう言ってふっ…と笑いながら下を向きつつ光雄はその魔法石をポケットにしまいつつベランダから再び一室に戻ったのだった……

――ま！！いいかっ♪

そう、今は何も考えたくない……ただ、ようやく訪れたであろうこの平穏をかみしめつつ、俺は自分のベッドに体を沈めつつ、再び意識が遠退いて……

◆◇◆◇◆◇◆……

それから数時間後、

――――――――――――

―――――――――

―みぃ～つぅ～え～―

―――――――――

―いい加減に…

どぶぉッッ!!「ぐはっ!?」

「んなっ!?なななっ!?何事だっ!!……ってあれ??」

と、まぁ～…気持ち良～く爆睡中の光雄だが??、しかし時刻はもう既に朝を通り越し、そんな朝寝坊な彼を起こしに来たマリオン、そんな彼女なのであるが、いくら呼んでも揺すっても全然起きない光雄に対し…

今度は??なにやらニヤリ??と不敵な笑みを浮かべつつ一旦距離を置きつつ杖を向け一撃の如くいつもの水弾を彼に食らわし強制的に起こした彼女……って!?最近やけに凶暴化してるような…

…（笑）

「ぐ……ぐふぅ～……」

「っとにもぉ～ッッ！！……今何時だと思ってんのよっ！！この寝坊助バカ光雄っ！！」

「へっ？……ああ～……何だマリオンか……んじゃおやす！？……」

「ほぉ～う？？そうなんだ、んじゃ仕方ないわねっ♪又々いつもの”あれ”が欲しいんだねっ♪♪」

「げぇっ！！お…起きる！！起きるからこんな狭い所で魔術？？って……キャァァァ！！」

「こんのぉぉ――――ッッ！！」

◇◆◇◆◇◆◇◆……

数分後……

「うぅ……マジ無理だから、こんな起こされ方毎朝やられたら、俺……近い内死亡フラ??……」

「あらら～……又々マリオンちゃんに起こされたんだ♪」

と、そんな会話をリビングの机を挟みオリアナとしている光雄、その頭は??何があったのか謎のバサバサ頭に??

そんな中、只今キッチンでなにやら物色中のマリオンが顔を出し、

「ねぇ～……光雄、朝食作ろうと思ったんだけどさぁ～……冷蔵庫の食材、全滅なんだけど、」

「えっ！？……だってこの前大量に買っといたような」

キッチンから顔を出すマリオンに対してリビングに座りながら後ろ側を向きつつそんな事を言う光雄に対してマリオンは、さっき処分した腐った魚とかを見せつつ……

「だって、ほらっ！！みんな賞味期限切れてるし腐ってるよ……」

「うぐっ！！……ま、マジかよ……ハァ～……」

「さあさあ、光雄さぁ～ん…お姉さんお腹すいちゃって～……坊やを食べちゃおうか？？」

「光雄っ！！私もお腹空いてんだけど、しかも、もうすぐお昼だし……」

正にそんな彼女達に挟み撃ちを食らうかわいそうな彼なのだが、
そんな光雄にマリオンがなにやら閃いたみたいで??

「あ!!だったら皆でファミレ??」

「却下ッッ!!」

「ええ～……もぅ～…何でよっ!!」

「て言うか、以前ファミレスで一体どれだけお金かかったと思ってんだ??だから……強制的に却下っ!!」

そんな提案も、いきなり頭ごなしに却下され、更にふくれるマリオン、

そして!?

「「「ぐぅぅ～……」」」

「は、腹へったよ～光雄～……」

とまぁ～……なにやら三人ともダウンの様子で??

そんな中流石にこんな状況はヤバイと、突然光雄は立ち上がり、

だったら、ファミレスよりは落ちるが、コンビニ弁当をみんなの分買って来ればいいんじゃね!?……と、

そんな光雄の希望の言葉??にいきなり復活を遂げた元気になるマリオンは、そんな光雄にコンビニでの買い物リストを急きょ光雄に手渡し、

「「んじゃ待ってるからねっ♪♪」」

と、なにやら三人の内ヤハリ一番下っぱな光雄が行く事になるのは当たり前のようで……（汗）

「って!?買いに行くのって、…ヤッパ…俺だよね～♪♪」

「もっちろんっ♪♪」

「ハァ～……んじゃさっさと買いに行って来るよ…」

「うんっ♪♪」

と、そんな可愛い彼女達に見送られつつ、あの灼熱の地獄のような外に食料を調達する冒険の旅??に挑むのである!!

って言うか、多分……只のパシリのような…（汗）

◆◇◆◇◆◇◆……

そして、灼熱の砂漠??もといっ!?アスフォルトを歩きに歩いてようやっとたどり着いた冷房のきいた、オアシス、

とあるコンビニ、

うがぁ～……マジ死ぬから、こんな主役の俺に、こんなくそ暑い中旅させるとは、マジ熱中症になって倒れたらこの番組終わ??……いやいや……（汗）

さあ～て、と、んじゃさっさと買い物終わらして帰りますかっ♪

そしてその店内で色々と買い物カゴ片手にペッドボトルを入れ、その後にお菓子コーナーやらお弁当コーナーの食糧を次々にカゴに入れて行く光雄、

ええ～と…たしか、頼まれたのはこれで全部合ってるよな、しかしアイツ等め……俺の分はこんだけなのに何故??どおしてっ!?アイツ等こんなに大食いかっ!?こんな食うんかッッ!?

ケッッ　これじゃーまるで、何処かの誰かさんが飼ってる
白い修道服に身を包む大食いの、イカ的な謎の生物じゃーー無いですかいダンナッッ!!……って!?

いや…もういいから、それよか俺もちゃっちゃと済まして早く帰らないと何かしら恐ろしー事されそうだし……うぅ（涙）

後は?……あ!!そうだそうだいけない、これもだった……

と、その他頼まれた物を思い出しながら、そそくさと雑誌コーナーへ赴く彼、

ええ～と……あった!!あれだ、電撃大王今月号っと!!……
……っていうか……何故この世界にこんなん売ってるっ!?これ…ちとマズいんじゃ……（汗）

ま…あんま気にして迂闊に突っ込まん方が身のためだな……ハハで、コイツもカゴに入れてっと!!

うしっ!!これで終了ーっと、さてさっさと帰って朝飯……いや、もう昼飯か……

そんな事を思いつつそそくさとレジへ向かう彼、

しかし!?

「お会計は１２８００円になります♪」

「えっ!?こんなに??」

「はい??それともカードですか??」

「ああ、すんませんすんません……現金で…」

そんな事を言いつつ、自分の財布を開き現金を出そうとするが、何故か財布の中身を見た瞬間、一瞬彼の表情が凍り付く……（汗）

「って!?……マジ??」

あ…あれぇ～??おっかしいなぁ～……確かまだ下ろしたての４～５万位あった記憶なのだが??

しかも、只でさえこんなに食料持ち込んで恥ずかしい状況なのに、

やべぇ……

そのレジでは!?彼と相対するように佇む店員らしからぬ人物の顔もそんな恥ずかしい状況で引きつり、そんな彼葛城光雄はと言うと??

「かっ…金が足りないので又今度来ま～す……ハハ」

何とも、かなり間抜けににも相当な量の食糧やら色々レジへドッカリ持って行きその後に金が無く、そんな彼の後ろ側でレジ待ちのお客はそんな彼に対してヒソヒソと……

「あ…あはっ……（汗）」

なんとも間抜けにも後ろ側のその他のお客様に愛想笑いしながらその大量の食料を店員に押し付けつつ涙の退却をしたのだった…（笑）

そんな恥ずかしい彼なのだが、先程の超恥ずかしい失態を挽回するがの如く、そんなレジの脇に設置してあるＡＴＭに駆け込み軍資金を下ろすべく自分のキャッシュカードを入れ、暗証番号を、押し、そんな矢先、

そのツイていない日は本当にツイてないらしく、突然店内に風紀（ジャッ）委員（ジメント）が店内に侵入!!

「ほえっ!?」

◆◇◆◇◆◇◆◇……

数分後!?……

「風紀委員（ジャッジメント）ですっ!!」

「この場から早急に避難して下さいッッ!!」

と!?そんな輩が突然の侵入に??カードを入れっぱなしの光雄

はその彼の後ろ側の風紀委員（ジャッジメント）の二名を見つつ深々とため息をしつつ……

ウハァ～……つか、次から次えと……今日は何の日だ？？仏滅か？？厄日かっ！？

「ふ……不幸だ……ハハ」

「ええいっ！！……一体全体何事なのだッッ！！」

と！？とうとうなにやら謎の半切れ状態の彼に？？風紀委員（ジャッジメント）の少女は気付いたらしく、

「あのねぇ～ッッ！！あなたっ！！聞いて無かったのかしら？？この付近で重力子（グラビトン）の爆発的な加速が観測されたから避難しろと！！」

「えっ！？」

重力子（グラビトン）ってぇぇッッ！？思い出したっ！！あれか？あれなんか？？もしやあのダメガネの野郎かっ！？

こんな時にっ！？

「おいっ！！おまえっ！！」

「はいっ！？……」

「まぁ……簡単に言えば、ようはその辺に捨ててあるヌイグルミを探しゃーいいって訳だわな」

「えっ！？……ま…まぁ……そうです……ヒッ！？」

「ふっふっふ……」

「俺にかかれば、そんなチンケなヌイグルミごとき……」

「なっ！？……」

と、そんな自信まんまんな笑みを浮かべながら、指を前に出し……

「三十秒で片がつくっ！！」

そんな、何に”スイッチ”が！？入ったのか、かなり妙な表情で冷や汗をかく彼女に三十秒宣言をする変態的な彼に？？なにやら仰け反り冷や汗をかく少女……ていうか爆弾より奴の方が危険かも？？……別の意味で…（笑）

そんな後ろ側の妙な状況をスルーしつつ、その店内を探索中のもう一人の風紀委員（ジャッジメント）の彼なのだが、

「くそっ！！一体どこに仕掛けてるんだっ！？……」

「きゃっ！！」

「えっ！？」

と、そんな仕掛けられた爆弾を探索中の彼……
そんな彼の近くで誰かしらの声が聞こえ？？
そんな声がする方に振り向きつつ近づくと！？

「おいっ！！どうしたっ！？大丈夫か？？」

「す…すみません、ちょっと挫いて…」

その少女は、そんな爆弾騒ぎでその他のみんなが避難した後に慌てて逃げようとして、足を挫いたらしく、その場にペタンと尻餅をついていた……

「おいっ……立てるか？？」

「はいっ……な…何とか…」

そんな彼女を助けるべく近づき肩を貸す風紀委員（ジャッジメント）の彼だが??

そんな矢先、何故か先程まで彼の後ろ側に居たはずの彼、葛城光雄はいつの間に彼等の目の前に居るではないか、

しかも、そんな彼の手には??先程まで何処かに設置してあった卯（うさぎ）のヌイグルミを大事そうに手に持ち、

「おいっ貴様、そ…それは!?」

「ええっ!?多分これ、爆弾なんかな??」

そんな矢先……

突然ミシミシと音を立てつつその中心から内側に、まるで何かの魔術にかかったようにグイグイと縮んで行くヌイグルミ、

そんなヌイグルミをみつつ、かなりビビりながら焦りまくる風紀（ジャッジメント）

委員達だが？？

「ははっ……多分大丈夫ですよっ！！」

「ばば……バカッ…はっ！早くこいつを捨てろっ！！」

「いけないっ！！間に合わ！？……」

そんなパニックに陥る店内で、そのパニックの中心に佇む彼、そんな彼が只今大事に持っているヌイグルミ、そんなヌイグルミが只今異常な重力子（グラビトン）がかかりグイグイと容赦無く縮んで行く！！

ハハ……もうそろそろ仕上げと行きますかっ！？

と、そんな状況下で何ともあっけらかんとしたシュールな光景なのである……（汗）

そして！？

「えいっ！！」

とまぁ～、一瞬でそのヌイグルミを光の粒子に転換……そして簡単に何事も無かったように、そんな爆弾を魔法のように消してしまいその彼の目の前に光の粒子が綺麗に舞い……

そんな様子に、風紀委員（ジャッジメント）やその他の皆さんは、口をアングリ開けつつ……えっ！？何があったの？？みたいな、

そんな中、その風紀委員（ジャッジメント）の彼は？？そんな光雄に、

「あ…あのっ…あなたの名前は？？」

と、そんな質問をし、そんな光雄はその彼にかっこつけながら背中を見せつつなにやら適当に？？

「ふん…別に名乗る程の者でも無いが、あえて問のなら……私の名前は……」

その後ろ姿に目を輝かせる風紀委員（ジャッジメント）の彼女も、

「あなた様の名前はっ！？」

「そうか、そこまで知りたいのなら私は……」

「”上条当麻”だ！！（爆♪）」

とまぁ～……なんとも適当に、後々やっかいな事になる風紀委員（ジャッジメント）に対してなんともかわいそうにも”当麻”に押し付けちゃった光雄！？

そんな、光雄は先程のお礼とか何とかで食料と雑誌を只で無事ゲットしつつ、只今彼の帰りをお腹を空かして待つマリオン達の元へ帰って行ったのである！！

そのコンビニでの事件の後、そんな又々英雄??にされてしまった当麻の元に、あの恐ろし～…風紀委員（ジャッジメント）のツインテールの誰かさん＋ビリビリする奴に散々追い掛け回された　挙げ句、無理矢理やってもいない事情聴取を受けさせられた悲劇は誰も知らないのである……（爆♪）

次回へ続くっ！！

第三十二話　冷蔵庫の食材はちゃんとチェックしないと、とんでもな事態を招きます

さ～て、大変長らくお待たせしやしたっ！！いよいよ原作編突入しやしたこの物語、

果たして、この先の展開は？？主人公は生き残る事が出来るのか？？っつー訳で、

次回もお楽しみに～♪♪

第三十三話　頭にお花を付けた人には要注意っ（笑♪）（前書き）

あはっ！？

な…何っつーか…今回のテーマは？？

ズバリっ！！”お花ですっ！？”

っつー事で？？

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～♪♪

第三十三話　頭にお花を付けた人には要注意っ（笑♪）

ここは、イタリア国、ローマ、バチカン市内、そこに重要文化財ともなるカステル・ガンドルフォ城が聳え立ち、その一角にカトリック教会の大聖堂、ローマの四大バシリカ、

又の名を、古代ローマ様式の大聖堂が建ち並び、東側からサン・ジョバンニ・イン・ラテラノ大聖堂、サン・ピエトロ大聖堂、サンタ・マリア・マジョーレ大聖堂、と並び城壁の外に位置するサン・バオロ・フォーリ・レ・ムーラ大聖堂が並ぶ、

そんな大聖堂が並ぶ城を挟み反対側に位置する、城壁の外側のサン・ロレンツォ・フォーリ・レ・ムーラ大聖堂と、

その大聖堂を加えれば又五大バジリカと、呼ぶ事もあるのである！！

そんな大聖堂や城は、総てがあの強大なカトリック組織、ローマ正教の権力の象徴でもあり！！

そんなローマ正教の組織の一部でもありながら、その存在事態が驚異となる組織、オスマン帝国、そのオスマンが内部から破滅した事の噂が、ここローマ正教内にも伝わる事となった……

そんな中幾つもの大聖堂が建ち並ぶ中でも一番巨大な建造物でもある　サン・ピエトロ大聖堂内の巨大広場、

約三十万人もの人員を収容出来る位の巨大な広場……

そう、このサン・ピエトロ大聖堂とは世界最大級の教会堂建築であり、元々は紀元４世紀、西暦３１２年頃、コンスタンティヌス１世により、聖ペテロと言われる基地の巡礼を目的として建設され、現在の聖堂は二代目とされ、西暦１６２６年に完成したものであり、

高さは１２０ｍ（メートル）、長径２００ｍ（メートル）、短径１６５ｍ（メートル）の巨大広場、又の名をサン・ピエトロ広場があり、

その北側にはバチカン宮殿、南側に教皇宝物館があり、ルネサンス時代、そしてバロック時代を通じて、正にローマ教皇にふさわしい巨大教会堂なのである、

そんな巨大広場内の大理石の床に、幾つもの使者達が、膝をつき、そんな使者達の視線の先には一人の老人が座る、その老人こそ、この巨大なるカトリック組織を束ねる人物、ローマ教皇なのである！！

「な…なんとっ！！、あの天候をも変える程の大魔導師サラ・ウーデッドが？？」

「はいっ!!その彼ともう一人クラークと名乗る一人の魔術師に…」

「ほう??クラークとな、あの今は無きあのオスマン神官に支えしあの老人の事であるか??」

その、クラークと言う言葉に何かしら反応し、眉をしかめる人物が…

「はいっ…しかしそのクラークと名乗る魔術師は、あのかつて処分された筈の禁断の遺跡を復活させ、」

「なにっ!?それは誠であるか??ならばっ!!早急に対処せねば取り返しの付かぬ事になるぞ!!」

「教皇様っ!!お早く!!我々がトルコに赴きッッ!?」

青系のゴルフの衣装を纏った青年がその禁断の遺跡と言う単語に冷や汗をかきつつ、

そんなローマ教皇に事の重大さを言おうとするが??そんな彼のあせりは、次の言葉で打ち消され更に混沌を招く結果になる、

「ははっ！！アックア様、大変申し訳ないのですが、その遺跡なのですが、ある一人の少年に一撃で倒され、そのクラークとか言う人物も今現在行方不明なのでありますっ！！」

「へえ？？そんな一撃ですか、それを倒す程の強大な力の持ち主ですか、一度拝見したいですね♪」

その使者の言葉に一番興味を抱いた、緑色の礼服に身を包む青年がそんな青い青年の後ろ側から歩いて来て、口を開き、そんな彼に青い青年は、止めておけと……

「ふんっ……テッラか…敵か味方か分からぬ輩に迂闊な行動は慎むべきではないかな？？」

「それもそうですね、まぁ…時間はたっぷりありますし、その時がきたら、この私が奴を見にいきましょうかね……」

そんな会話が…ここ大聖堂の床や天井に響きわたっていた……

そう、その時が来たならか……そんな緑色の礼服に身を包む青年…テッラは、そんな大聖堂の巨大な天井を仰ぎ見つつ、一人呟いていた――――――――

――――――――――――

――――――――――――

――――――――――――

―……

◆◇◆◇◆……

所変わってここは日本国、そして関東の西側に位置する街
――――学園都市、
その第七学区内の学舎の園、その外れに位置する中世の古き良き時代を表現したようなレトロな街並みの一角に佇む小さな協会、その協会内の一室に再び赴く人物達、

――――その一室の略中央に設置してある大きな水晶を囲み三人の人物が座り、そんな水晶の妖しくも神秘的な光に照らされ、うっすらと浮かび上がる三人の顔、

エクスマス・ザキ・ツェペリンとその彼女を挟み相対するように座るオリアナ・トムソン、その隣側の座席には、マリオン・オヴ・シュペー…とまぁ～…あれから、
この、とある二人はエクスマスに、数日前のあの夜から立て続けに起きた、奇妙な事件と、その事件を引き起こした、元オスマンの神官の関係者達、そんな様々な奇妙な出来事を次々に話し、

最後に、その神官に仕える者が引き起こした、封印されし巨大遺跡の使用、その遺跡の快進撃をたった一撃で仕留めた彼、葛城光雄の事を相談しているのである、

「そう、トルコでねぇ～……そんな事があった何て…」

「ええ、私が駆け付けた時には……あの坊や、光雄君が総てを終わらしまして……」

「そうですか、とにかく、葛城君でしたっけ?? あの子がねぇ～……うふふふ??」

「「……ええっ!?……」」

「あの～……エクスマスさん??」

「い!?……ああ、そ、そうですね～……」

と、いきなりさっきまでの真剣な表情はどこえやら!?、光雄の話しになると、なにやら自然に何を思い出したのか顔がニヤケてしまうエクスマス…（汗）

……っていうか別の意味で怖え～よ!?この人……（笑）

そんなエクスマスの表情になにやらじと目で疑うマリオンなのだが??

そのマリオンはと言うと??

いや……さっきぜったいアイツの、あの時のアホ面を思い出していたよね?……エクスマスさん…まあ、あえてそれを突っ込んでもいいのかしら??……いやいや…（汗）

そんな、マリオンに気付いたらしく、話しを戻そうとするオリアナは??

「あらあら、マリオンちゃん、なにをそんな顔しているのかしら??」

「えっ??」

「わわっ!?……私っ!?一体何をっ!?……と、とにかくエクスマスさんっ!?」

「えっ！？ええ、そ……そうね、話しを戻すと」

「あの子、能力者としては、ずば抜けた才能があるみたいですよ…」

「「……ええっ！？アイツがぁ？？……」」

「そう♪あの子が……あの子はねぇ～……」

◇◆◇◆◇◆◇◆……

そんなマリオン達がエクスマスの協会で、彼について話している頃

一方その噂の彼はと言うと？？

あ……暑ぢぃ～……く、くそぉ～っ！！なぁ～んでこの主役であるわたくしめが又もやこんな炎天下の中つっ立ってなきゃならんのだぁ――――――ッッ！！

とまぁ～……マリオン達と一緒にエクスマスに会いに行く予定だった彼だが、エクスマスの居る教会はここ学舎の園の一番奥であり、

そんな彼は？？以前ここで散々な目にあった経験があり、断固拒否！！

その結果、ここ学舎の園の入り口付近のバス停のあるロータリーで彼女達を待つ事になるのだが、

流石に真夏の炎天下で過ごすのはキツいらしく、かなり衰弱しヤバイ状況なのである、……っていうか多分このまま待たされたら死ぬな…コイツ…（笑）

あ…あはっ？？い……意識が走馬灯のようにっ！？って！？やべぇ～……マジこれ以上は無理だから、俺の身体が危険だって訴えてるから……

や…やっぱ、あの敷地内に入って、あの涼しげな木陰にだな？？……って！？いかんいかん……危うくあの限界地点から中にうっかり侵入する所だった……ハハ

でも、もしもうっかり敷地内なんかに侵入した日にゃ～……

又々以前のような悲惨な災難に立て続けに襲われ、更にあの恐ろし～い、放電する猛獣が何処に潜んでいるか分からんし、ブルル……

こ、怖えぇ～……もしも出くわした日にゃ～……死んだふりか？？、いや……待てよっ！？

昔何処かで聞いた事あるぞっ！？山奥で猛獣に出くわしたら死んだふりでもヤバイって！？……や…ヤッパ、

ようは、そんな危険地帯に足を踏み入れなきゃいいんだなっ！！……うしっ！！……さぁ～っすが俺っ！！

と！？そんなとうとう真夏の照りつけるような日射しと暑さにやられたのか、なにやらおかしな思考の彼……っていうか遂に？？”頭”がとうとう来ちゃったみたいな彼！？……いや、多分元からのような（汗）

しかし事もあろうに只今フェードアウトで別世界に旅行中の彼に更に降り掛かる悲劇が差し迫ろうとしていたのである！！

「ねえ……」

「……」

（注：妄想中につき機能停止中の光雄？？）

「……ダメか…」

と、ヤハリ予想通り完全に無線封鎖状態の彼……（汗）

そんな彼の思考は？？

しっかし、アイツ等、くそ長げぇ～よな！！まったく……一体全体何をそんなに長話をしてるんだ？？、まさかっ！？みんなしてわざと、この俺を炎天下に長時間さらし、俺がくたばるのを待っているとかっ！？

いや、間違いないっ！！

とまぁ～……未だに謎の妄想中なのである……（笑）
で、そんな彼女は再び彼にもう一度、

「ねえってばぁ～……」

「……」

と、ヤハリ結果は同じで??そんな彼に対し、少々イラついたらしく、頭から電気を流しながら今度は勢い良く!!

「コラッッ!!葛城ッッ!!」

えっ!?今俺呼ばれ??

「なぁ～に無視してんじゃコラっ!!……って!?」

「ちょっ!?……アンタ大丈夫っ!?まさか熱中症なの??」

と、いきなり美琴と目が合った瞬間、いきなり地面に崩れ落ち、ピクリとも動かない光雄……そんな光雄に顔色を変えていきなりシリアスムードになってしまった美琴様??

どどど…どうしよう、これ絶対熱中症よねっ…早く救急車呼ばないとっ!!

と、その前にっ!!何処か涼しい場所に!!

そんな事を思いつつ、光雄の身体をズルズル引き摺り初めた美琴、そんな状況の中、うっすらと目を開けなにやらビビる光雄、しかし身動きが取れない上にこの状況、

しかも??そんな彼をズルズルとあの恐ろしい学舎の園に引きずり込む真剣な表情のある意味恐怖を誘う美琴の姿??

正に絶対絶命の彼??

しかし、そんな恐怖を振り払うように自らがんばって死んだふり作戦を続行中の光雄、自分自身に自ら暗示をかけるように??

動いたらダメだ…動いたらダメだ…動いたらダメだ……と、永遠に繰り返し暗示をかける光雄??……しかしそんな光雄になにやらいきなり引きずる手を離し不敵な笑顔で放電し始める美琴様??

そして??

「動いたらダメだ…動いたらダメだって!?」

「うひっ??」

「ねぇ〜…葛城〜??さっきからさぁ〜…それ……何の真似??」

と??

うげげっ!?な……何故俺の作戦を見破ったんだ??つか、これって??

「あっ…あの〜…って??御坂さん??なんでビリビリしてらっし

ゃるのでしょうか……」

「へぇ～??おもしろいじゃない??アンタさぁ～、ひょっとして私に出くわしたらどうとかとか思っていたでしょ♪」

「そ、そりゃ～ぁ、もちろん山奥で猛獣に出くわしたら死んだふりするのはあたりま??」

「ひっ!?」

「あっ…あっ…アンタはこの私が……」

「ちょっ!?まてまてまてっ!?ここれには深～い!?」

と、そんなただならぬ状況に更に更に留めの命中弾を食らわし小刻みに震え出しちゃった彼女!?……（笑）

「ウヒッ??」

「でっ……で…でででッッ！？」

と、そんな光雄のセリフの前にすんげー放電をし始める美琴様…（爆♪）

「ひぃぃーっ！！も…猛獣だ！！やっぱた…たすけっ！？」

「って！？アンタはこの私を何んだと思ってんだゴラァァァァ――――ッッ！！」

「び…ビリビリは、や…やめ？？キャァァァァ――――ッッ！！」

と、なにやら又々お約束っつーかっ！？、この二人が出会うと？？ヤハリこのような結果に♪……さっすが期待を裏切らないアホな光雄であった……（爆♪）

◇◆◇◆◇◆◇◆◇……

一方、そんな学舎の園の外で、いつものギャグ的展開に陥る光雄達を置いといて、只今エクスマスの教会では??

そんな光雄の事で未だにその教会の一室で、会話中のエクスマスとマリオン達

そんなエクスマスは、あの常盤台中学での光雄の身体検査(システムスキャン)後で、その常盤台の先生方から聞いた大事事実をマリオン達に話している最中なのである、

「ここの常盤台の先生方からよくお聞きました…あれからここ（学園都市）からあなた方がトルコに行っている最中なのですが、あの後の彼の成績を、お聞き…しまして、そんな彼、葛城光雄は、いつの間にか八人目のＬＥＶＥＬ５に登録され、たしか…序列は第四位だとか…」

「「……ＬＥＶＥＬ５……ですか！？」」

「ええ、この街（学園都市）でもたった数人しか存在していない、ここの頂点に位置する優れた才能の能力者達の事ですよ、」

「は……はあ……」

と、そんな光雄の優等生ぶりをなにやら自慢げに話すエクスマス、しかしそんな会話中でも、なにやら膨れっ面なマリオン、

そんなマリオンはというと!?

ええっ??あのバカ光雄が優等生だって!?一体全体何の間違いなのよっ!!

たしかにアイツの能力は桁外れなのは分かるが、でも間抜けだし、トラップにゃ～ホイホイ引っ掛かるし、バカだし、

私の忠告を無視していつもいつもバカみたいに突っ走るし……そのくせ全然ッッ!!……あぁ～もぉ～ッッ!!……アイツは…アイツはぁ～っ!?……って!?

「マリオンさんっ！？そんな……大丈夫っ！？」

「えっ！？」

「のわわわッッ！？」

ドガシャン！？っとまぁー！……いきなりオーバーアクション気味に仰け反りバランスを崩して真後ろに豪快にすっころんでしまったマリオン！？、なにやら又もやフェードアウトしちゃったみたいで！？

「あらら～…だ…大丈夫かしら…ま…マリオンちゃん」

「き…今日は彼女なにかしら疲れているみたいですね……（汗）」

「す……すみません…（汗）」

◇◆◇◆◇◆◇◆……

一方その頃そんな光雄達はというと??

あのビリビリ地獄と化した後、そんな黒焦げ炭化と化した光雄を無理矢理ファミレスまで引きずって来た彼女??

「あ…あの～…たしかに涼しい所に案内してくれたのは非常～に有難いのですが……俺、さっきの場所で人待たせて??」

「あんっ!?……何か言った??」

「い……いえ…」

「よろしいっ…」

そんな何とか必死の抵抗も虚しく正に独裁者と化した美琴様にゃ～逆らう事が出来ず半泣き状態の悲惨な彼なのである、

そんな矢先この地獄に一人の天使??が舞い降り??

「あっ!!御坂さんすいません遅れちゃいまして、」

「ああ、いいっていいって!!私達も今来た所だからっ!!」

あれぇ～??あの人は??まさかっ!?初春飾利様か??以前ちらっと見かけた事があるが、間近で見ると……

あの花は～っ!?

造花じゃぁ～無かった本物だっ!!やっぱ僕の理論は間違って??なっ!?

「あの～……造花とか生とか何の事ですかっ！？」

げっ！？何故考えが詠まれたッッ！？

さ…サイキックインピレッションッッ！！奴はニ〇ータイ！？

「うげっ！？」

◆◇◆◇◆◇◆……

す…数分後……

「ぶはッッ！？って？？あれ～っ！？初春さんは？？」

「ああ～…黒子が来てさっき何処か連れてっちゃったわよ、」

「えっ!?でもさっき、俺は??」

あ、あれれ??さっき俺、初春さんに、たしかあのお花を見た瞬間、いきなりブラックアウトしちゃったよーな……まさかっ!?あの花って!?…ま…魔術!?

えっ!?

「っつーかさぁ～…アンタ初春さん初めて会ったはずじゃ……何で名前を??」

って!?やばっ!!又々俺は自ら墓穴を掘ってしまったじゃ～ないですかいっ!?

ど、どうする??ま…まぁ～な　、何とかごまかさな～ならんっ!!……しかし、

「あ…あはっ!?そ…それはですねぇ～…」

「あはは♪なぁ～にテンパってんのよ♪何かアンタの顔見てたらどうでもよくなってきたわ、私……帰るね♪、」

「うぐぅ～…くそぉ～…俺ってそんな間抜けか??顔見ただけで笑われるって……うぅ…」

ええいっ!!みんなしてバカにするとはっ!!俺って……やっぱそんなキャラなんか??別の意味で悲しくなって……、

「じゃっ!!あっ!そうそう♪ついでだからもったいないしアンタこれ…食べちゃいなさいよ♪」

「えっ!?……」

「あと、わざわざ付き合わせちゃってごめんねぇ～…♪あとここのお金払ってくから、んじゃっ!!マリオンさんによろしくねっ♪」

と、なにやら突然立ち上がりそそくさと帰って行く美琴、とまぁ～…何かしらおかしいような…（汗）

そんな自分の座る座席ごしにファミレスの外を歩く美琴の姿が見え、

あれっ！？御坂さんもう外に出ちゃったんだ……と、

…そんな事を思いつつ再び何げにレジ側を向いた光雄、

「へっ？？」

と、そんな中只今お会計が終わり何があったのやら気持ち良くお店から出て行く彼女の後ろ姿が……

御坂さんが、二人っ！？んなアホな……ま、まさかっ！？いやいや……気のせいかな？？

と、そんな事を思いつつとりあえずは今俺に置かれた状況はっと！！

初春さんの食べかけパフェ……うへっ！？…し、しょうがないんだからねっ…み…御坂さんが食べろと言ったからなんだからねっ♪

と、さっき見た事をすっかり忘れてしまったアホな奴、そんな今現在の彼の思考は？？

ではではさっそくいっただき??……って??

「ねぇ～…あなたっ!!研修中にサボっちゃダメじゃないっ!!」

「へっ!?…け、研修って!?」

いいっ!?こ、このパターンは??

「ほらっこれっ!!早く付けて!!」

と、いつのまにかさっきまで座っていた光雄の机の上に置き忘れたであろう飾利の風紀委員(ジャッジメント)の紋章……それに気付く間もなく、そんな彼女はこれを付けて研修と??

「ちょ!?」

そんな光雄の目の前に現れた謎の風紀委員（ジャッジメント）の謎のメガネのプリティーガール♪♪

はたして、そんな彼女は??みたいな……（汗）

じ、次回へ続くっ!?

第三十三話　頭にお花を付けた人には要注意っ（笑♪）（後書き）

いやぁ～…かなりぐだぐだやなぁ～（汗）

まぁ……次回も多分ぐだぐだかも??しかもいきなり頭にお花じゃなかったｗｗゴーグル付けた天然ボケナスＶＳ光雄の突っ込み??って!?

ね…ネタがぁ…（汗）

ま、まぁそんな感じで次回もお楽しみに～……あはっ♪

第三十四話　その頭にゴーグル付けた奴…超危険につき!?（前書き）

あははｗｗ……ま…まあ前回の”お花”に続き今回のテーマは??

ズバリ!!”ゴーグル”ですはいっ!?

っつー訳で!?

光学の超高密度収縮粒子砲戦記!!

始まり始まり～♪♪

第三十四話　その頭にゴーグル付けた奴…超危険につき!?

「ほらっ!!これっ!!あなたのでしょうっ!?」

「…いっ!?……こっ固法さんだとッッ!?」

そう、俺は知っている…俺の過去、まぁ…生前に観たこのシュツエーションっ!!たしか、初春さんが連れて行かれてからのこの原作イベントっ!?たしか御坂さんが捕まり……つ…か…ま……あれぇぇ――――っ!?

って!?居ない……御坂か居ないぞっ!?……ハッ!?そ～言やぁ～…奴は、何処か行っちゃったじゃ――――ないですかいっ!?ダンナっ!?……って??誰に言ってんだ!?俺っ……（汗）

って??あれっ!?……っつ――――事はっ!?御坂さんの代わりに俺様がこのイベントに強制参加っつー事訳かっ!?

「……チラッ」

「うんっ？？……なに？？」

う……う～んっ　…ヤッパ生固法さんっ…美人だしセクシーだし…ううへっ！？……っつ～か何を又々別の女性に迷うんだ俺ッッ！！

くっ……毎度毎度なのだがっ！！この……この私わぁぁ～……マリオンちゃん一筋って決めたんじゃないかぁ～っ！！こんのあんぽんたんがぁぁーーーッッ！！

ハァッ…ハァッ……いや…もういいから…（汗）
これ以上余分な思考はだな？？

「はいはいそこまでっ！？
で？あなた、たしか……」

そんな光雄の思考に割り込むように美偉は光雄を完全に風紀委員（ジャッジメント）の新人と勘違いっ！？
で？？そんな光雄はと言うと！？

「はいっ！！お初にお目にかかりますっ！！わ…わたくし葛城光雄と申しますっ！！よ…よよよろしくお願いしますですますっ！？…
…せ…先輩っ！！」

と、そんなアホな彼は??なにやら意味のねー感じで何にスイッチが入ったのやら!?やる気まんまんなご様子で??

「は……はぁ…（汗）……かつらぎ…葛城…はて?何処かで聞いた事あるような」

「えっ!?た…多分気のせいですよっ♪…せ・ん・ぱ・いっ♪」

「ほぉ～ら、そこっ!!茶化さないっ!!それじゃ着いてきて頂戴っ」

「了解です先輩っ♪」

とまぁ～…肝心の美琴が居ないイコール光雄がこのイベントに参加する事に??……って言うか、このままコイツにまかしてなにやらいや～な予感が??何も起きなきゃ良いが……（汗）

◆◇◆◇◆◇◆……

とまぁ～…ここは所変わって、とあるコンビニ前!?

「はいっ!!これっ……」

「へっ??ホウキ??せ…先輩これはいったい……」

と、そんな大通り前のコンビニに連れて行かれた光雄、そんな光雄に美偉は、光雄の分のホウキを手渡しそのホウキを手に取りマジマジと眺める光雄なのだが??

「ええーと、そ…掃除…ですかっ??何かそのまま街の巡回に赴くのかなぁーと、あの…先輩っ??」

「えっ!?言わなかったかしら?風紀委員(ジャッジメント)の仕事は街の治安を守るだけじゃなくて、こう言う仕事も基本だと思うんだけど……」

うげっ!?そそそうだったのか??…確か掃除とかもやってたよな…危ない危ない…（汗）

「うしっ!!ちゃっちゃと終わらして次行きましょう次っ!!」

とまぁ～…何とか無事に何事もなくはき掃除をやりだす光雄、

よ、よしっこんな地味な仕事は速攻で終わらして、

固法先輩と巡回にっ!?うふ……うへへへっ!?……いやいや……

……うへっ!?…

と、なにやらスンゲーアホ面で掃除している妙な奴に周りの通行人も目を合わせないよう、逃げるようにそそくさと行き、正に超営業妨害のような彼なのだが??

そんな彼の前を行く通行人の一人がそんな変態に目の前でぶつけるようにゴミをポイ捨て……

「なっ!?……き…貴様……」

しかし、そんな通行人に気付く間もなく更に留めと言わんばかりに空き缶を投げつけ??

「んなっ!?貴様??……いや??まさかっ!?おまえは??」

「けっ!!そんな美人と仲良くお掃除ですかっ!?と思考がだだ漏れだとミサカは懇切丁寧にそんな変態にゴミをぶつけます♪」

そんな彼を見つめる無表情な彼女……そんな彼女の姿を見て一時は驚き仰け反る彼なのだが…

なっ!?ななな何で??奴が??そう、俺は知っている…奴は外見こそは御坂さんにそっくりなあの彼女をっ!?

「おいっ!?あなたは??……って??にょわわわっ!?って!?危ないだろうがっ!?」

とまぁ～そんな光雄に更に空き缶やらゴミが??そんなゴミをギ

リギリ回避起動で紙一重に避ける彼??

「ちょっとこれ以上は??」

と、更にそんな光雄に対してなにやら何にスイッチが入ったのやら??そんな彼のリアクションに面白がり??次々にミサイル（ゴミ）を鮮やかに射出??そんな光雄はとうとう半ギレ状態に??

「はんっ!!ミサカ妹とてこの俺様にここまで寸分狂わず当てて来るとはっ!!ならばっ!!それに答えようじゃないかガ〇ダムッッ!?」

とまぁ〜そんな彼（バカ??）もなにやら怪しげなスイッチが入っちゃったみたいで??

彼女が放つ攻撃（ゴミ??）を鮮やかに迎撃??次々と鮮やかに撃破??光の粒子に変えて行き??ヤハリと行って良いのやら??なにやらそんな光雄等の周りにはいつの間にやら野次馬がうじゃうじゃと??

と、とんでも混乱（カオス）と化して来たコンビニ前……ていうか一体コイツ等は何やってんだか…（汗）

「うふふふ……ならばっ！！これは避け切れまいっと？？ミサカは絶対回避不可能な軸線上に打ち込みますっ！！」

と？？今度は空き缶入れごと大量に拡散状態で打ち込み？？そんな彼は？？ニヤリと？？

「はっはぁ――――ッッ！！そう来るかッッ！！だが甘いっ甘いぞミサカ妹っ！！」

と、そんな大量に差し迫る空き缶（ミサイル？？）を一斉に撃破！！瞬間眩ばゆい光と共に全てを粒子化！！周りに降りしきる光の粒子が降り注ぎ？？そんな光雄達に喚声を上げる野次馬！？……（爆♪）

そんな戦場?? と化した只ならぬ状況に流石の美偉様もなにやら堪忍袋がキレたみたいで??そんな二人に??

「ったく……いい加減にっ!!」

ゴッチン☆

「「……うげっ!?……」」

とまぁ～…一気に鎮圧、即座半強制的に??停戦してしまい!?

◆◇◆◇◆◇◆……

「はぁ～…まったく、葛城君っ!?筆記試験の時に習わなかったかしら??こういう場所とかではむやみやたらに能力を使わないと……」

「は……ず…ずびばぜん…先輩…すっかり忘れていましたですはい……」

「まったく…まぁいいわ♪次から気を付けてよね……」

「は……はあ……」

「で?.?そこの彼女もそう…いくら彼の友達でも今は研修中なんだから、まぁ…一緒に行動しても良いけど、あまりちょっかい出さない事っ!.!いいわね♪」

「はい……と、深々と頭を下げつつミサカは反省しています…」

「でもでも挑発して来たのは隣の彼かもっ!.?とそんなお隣さんをじと目で訴えますっ♪」

「へっ!.?ちょっ!.?ままままてそれは濡れ衣だって?.?」

「あらぁ～…そんな涙目の彼女にそんな嘘をつくのは今後男として問題あるわよっ葛城君??」

「う～…す……すみません…先輩っ……」

と、その時光雄は悟った??そんな隣側でケッ!!ザマァ～……と、不適な笑顔をする彼女を……コイツ……只者じゃ～あ無いとっ!?

「さてとっ♪休憩終わりっ!!次行きましょうか♪」

「「……はいっ先輩!!…とミサカはハモってみます」……」

いや…そんな無理してハモん無くていいから…（汗）

って言うか!?コイツ着いてくるんかっ!?

◆◇◆◇◆◇◆……

そんな妙な事態に陥る光雄達がてんやわんややってる頃……ここは、同じく学園都市内、第七学区、学舎の園の入り口付近、その広々としたロータリーのあちこちに設置してあるバスの停留所があり、その様々な学区行きの表示板が立ち並び、はたまたそこに停留しているバスから下車する者、そして乗車する者と、様々な学生達が行き交う中、その人混みを眺めながら、二人の人物が佇み誰かを探しているのである、

「あれれっ!?どこ行っちゃったんだろう～…光雄…ここに居るって言ってたのに～…っとにもう～っ……、さては…やっぱりっ!!」

「えっ!?ええ……おかしいわねぇ～…まぁ～…さらわれた形跡とかは無いみたいだし、それよりマリオンちゃん、そんなカッカしなくても、ねっ♪」

と、そんな彼を1人でほっぽりでもした日にゃ～ちゃんと待っているどころか下手したらどっか行っちゃうはのは当たり前で、いつもの事なのだが

さすがにこう毎回毎回やられては、そんなふざけたバカな光雄にとうとう堪忍袋がキレたみたいでかなりイラつくマリオン!?そんな彼女を何とか宥めようと努力するオリアナだが…そんな努力は無駄のようで??

……（笑）

「うがぁぁぁッッ!!あんのバカ光雄っ!!今度から”首輪”か何かで括り付けて置くべきだねっ!!ねぇ～オリアナっ!!」

「えええっ!?……ま…まぁ～…そ…そうね……（汗）…で…でも落ち着いた方が、周りが……」

とまあ～…ロータリーのど真ん中で目立ちまくり変な彼女、やはり予想どおりに周りからジロジロと注目の的である……

「へっ??……わわわっ!?……」

「あらあら、マリオンちゃんそんな熱くなるから…」

「うぐぅ～……それもこれもみんな光雄のせいだ……絶対見つけ

だして…（涙）」

だ……ダメだこの人…（汗）、でもあのマリオンちゃんがこうも感情的になるなんてねぇ～…昔のあの子からはまるで別人みたいね……うふふ♪やっぱりあの坊や、光雄君に感謝しなくちゃね♪

と、なにやら目尻に涙を貯めながらなにやら落ち着かないご様子の彼女!?

……ていうか最近コイツのキャラ変わって来てるよーな（汗）

でもオリアナは、そんな感情豊かなマリオンを見て、これが、あの子の素なんだな♪と、なにやらかなり安心したように別の事を考えていた、

これなら、これからあの子の事は光雄君に任せても大丈夫かな♪

…と……

「うぅ～……あっ!!そうだ♪オリアナ～…私のバックって??」

「えっ！？……マリオンちゃんのあのバックよね～…」

「うん、あの中にある私のアイテムであのバカ（光雄）を突き止めようと思ったんだけど…たしか、」

「あっ！！まさかっ？？…ねぇ～オリアナ…」

「えっ？ええ……たしかあの夜じゃないかしら？……あ！！」

「「……あのファミレスッッ！！…」」

◆◇◆◇◆◇◆……

と、なにやら学舎の園で只今マリオン達がヒートアップ中の頃、光雄達御一行はと言うと？？

「へっ??……バックをですか……」

「そう、さっき第一七七支部から連絡が入って、その忘れ物を捜す事になっちゃってね…研修中のあなたたちには悪いけどそのバックを探すの手伝って欲しいのよ……」

「り…了解っ！！任務再開っと♪そんじゃ…」

「行きましょうとミサカもやる気まんまんなアピールを??」

「いや…もういいから、何かすんげーいやーな予感がするから……（汗）」

と、何故か妙なオプション（ミサカ??）が付いてしまった光雄！?果たして無事任務遂行出来るのであろうか??

「うふふ…又々無理矢理だが次回へ続くとミサカはそんなへなちょこ作者の代わりに??」

いや…もうこれ以上は??

次回へ続くっ!!

第三十四話　その頭にゴーグル付けた奴…超危険につき!?（後書き）

あはっ!?なにやらいつものアホな展開で!?

まぁ～…あのミサカ（番号不明??）は多分、今後も主人公達と??かなり重要な??

いやいや……（汗）

っつー訳で!?次回もお楽しみに～♪♪

第三十五話　外見紳士を装っても中身がエロいと変態ですっ！！（前書き）

ま…まあ、続けて今回のテーマは??エロスな変態だったり!?

いやいや……（汗）

ま!!そんな感じで

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ!!始まり始まり～♪♪

第三十五話　外見紳士を装っても中身がエロいと変態ですっ！！

ここは、先程と同じく第七学区、そのとある国道沿いの大通り、夏の日差しが西日に代わる、そんな頃、街路樹の続く歩道に行き交う様々なサラリーマンや学制達、そんな人混みの中を、只今そのバックを捜すべく妙な三人組の人物が、歩いているのである、

「へえ～??先輩って一人暮らしかと思ったすよ～…」

「あら、以外な事を質問するわね♪、実は同居人と一緒なんだけどね～…でも私ってそんな風に見えるんかしら?…」

「い…いえっ！！す……すすすみません先輩っ！！
でも流石ですねぇ～♪♪もう既に彼氏と同居ですかっ♪」

「うぇっ！?…かっ……彼氏??…って光雄君??何を根拠に彼氏と同居とか……」

「またまたぁ～……そんな否定しつつも何か、顔が赤いですよっ♪
せ・ん・ぱ・いっ♪」

「こ…コラっ！！そこっ！！んとにもぅ～…マセガキなんだから～
……」

そんな”意味ありげ”な??会話をしつつ歩く二人……

そんな二人の後方を歩く肩までの茶髪…くりっとした可愛げな大きな目…そんな未だ幼さを残す可愛い顔の割には全然似合わない怪しげなゴツイ軍用ゴーグルを頭に付けた一風変わった不思議少女…

そんな彼女は??何げにそんな会話を盗み聞きしつつ無表情なのかニヤケているのか??……そんな謎めいた表情の彼女……なにやら先程から…うふふ…ふふｗｗ……とまぁ～…かなり不気味なご様子で！??…別の意味で（爆♪）

「ふふふふふふふ……」

「「……なっ！?……」」

ひっ！?いつの間にやらミサカ妹っ！?……

な…一体何を企みやがってんだ??……つか、コイツの思考……

わ…分からん（汗）…
っていうか怖えーよコイツの顔……（汗）

「うふふ……と、ミサカは、そんなサラリと会話しているそこのエロい”変態”に、先輩の悩殺ボディーをこれ以上堪能すなと忠告をします！！…ですから先輩は？？」

「ウブホッ！！……」

「えっ？？葛城君っ！？」

「だぁぁぁぁっ！！すすストップ！ストォーップ！！」

「ハァッ……ハァッ……い…いえっ！？先輩っ！！…そんな俺エロい？？……じゃ無かった（汗）……そ、そう言う意味で言ったんじゃ無くてっ！？…」

「いえいえ、そんなミサカに遠慮なさらず鼻の下のばしてもっと先輩の○○○や○○○を堪能？？」

「ええいッッ！！ミサカとやらっ！！この後に及んでまだそんなまやかしを言うかっ！？……って！？」

「じー……うふふふっ…図星…っとミサカはあなたの軽率な行動に笑みを浮かべます……ふふ」

「んなっ！？ここコイツっ！？にゃーにを根拠にっ！？」

や…ややべぇー……マジやべぇーよコンチクショウっ！！これじゃぁまるで紳士な俺様が？？……

「……チラッ？…」

「……へ～え？？……」

と、そんななにやら怪しげな空気に変貌した中、かなり冷や汗たらたらで固まる光雄……いや…絶対コイツ美偉様の官能ボディーに反応してるよーな？？……（笑）

うはぁ～…ややべぇ～……絶対俺っ！！変な奴に思われてるぞ？？……うぅ…これじゃぁ～まるでこの俺様が変態という烙印をだな？？……いや……もう既に変態か……（汗）

しかしそんな目で見つめる固法さんも又々これもこれで……
ぐへっ!?……って!?ちち違うッッ!!俺はっ!!マリオンちゃん萌えのはずっ!!……って一体全体俺は何をしてるんだ??
…ま…まぁ…しかし……今俺に置かれている現実をだな??…
…固法先輩の誤解を解かないかぎりは……やべぇ～っすよ…（汗）
……

とまぁ～そんな変態的な本来の葛城光雄に目覚めつつある中??
いつの間にやら、そんな光雄はほっといてその後ろ側でミサカと二人並びつつなにやら怪しげな会話を始めているじゃ～ありませんか!?

「ねえ～…そんな彼女は常盤台みたいだし…誰と住んでんの?それとも～??」

って!?ううわ……固法さん、それを彼女に聴いたらぁ～ｗｗ…
…なにやらかなりヤバいような……（汗）

「ふふんっ!!良い質問だな!!っと、ミサカは鼻を鳴らしつつ胸を張って応えますっ!!とミサカは……」

「あははっ!?こ…こここいつ、ちと言えない事情があってぇ～…
…ははｗｗ…（汗）」

とまぁ～…なにやら冷や汗をたらしつつ何とかフォローをする光雄、しかし迂濶にそんな会話中に彼女達の間に入ったら??やはりその質問の矛先が容赦無く向けられるのは当り前のようで??

「ええっ!?、ま…まぁ～……そうね……だったらそんな葛城君だっけ??ここに来る前は何処に住んでいたのかしら?」

「へっ!?」

「そうそうっ!!、とそんな魔法使いみたいな姿のあなたの過去に興味津々です!?一体何処で契約したのかとミサカは目をキラキラさせつつ質問します…」

「あ……あの～……って!?俺??……しかもミサカ妹っ!!貴様…それを言うか…（汗）…」

うぐぅ……おのれ……そこに突っ込んで来るかっ!!恐るべしミサカ妹ッッ!!

し…しかも…固法先輩まで俺様のこの〇ミさんちっくな服装に疑いの眼差しで見てるし……コイツのせいで……俺、けっこう気にしてんだぞ??、いやいや…言えないっ……俺はバリバリ魔術サイド（マリオン??）と仲良しなんて絶対言えないッッ！！

んなもんばれた日にゃ～…その後がぁぁ……頭に角の生えた魔術師マリオンの顔が……多分俺…死ぬな♪……ハハｗｗ

ま、まぁそんな深い考えはなさそうだし、ここは冷静に考えてだな??

「そうです、実は俺の学校でコスプレが流行ってまして、」

「は…はぁ……」

「そんで実はそんなコスプレ大会が近々あると」

◆◇◆◇◆◇◆◇……

数分後!?

「あれっ??……」

そんな、ならばっ!!その質問に答えようじゃないかっ!!みたいに、適当な理由を並べて答えていた彼なのだが、そんな物全然スルーされ、突然その脇側を歩いていたミサカに服の裾をグイグイと引っ張られ!?

って聞けよおまえ等っ!!ったくマジ頭痛くなって来たわ……しかも、こいつ、スルーしておきながらさっきから何で俺の服をひっぱるんだ??

「へっ!?」

「あそこに居る人はもしかして襲われているんじゃ??とミサカは、風紀委員（ジャッジメント）のあなたに活躍の場を提供したく聞いてみます」

「ええっ!?俺がぁ??……いや…しかし、迂闊な行動はなにかとヤバイんじゃ～…（汗）」

っつってもなぁ～…むやみやたらに能力仕様出来んし……ど…どうする??

ま、まぁ…ここいらで俺様の事を舐めくさっているこのミサカ妹にギャフンと言わせるチャンスだし…しかも固法さん見てるしっ!!うしっ!!そんじゃぁ～いっちょこの俺様が??

「って!?おいっ!!おまえが突っ走っても状況は変わらんと思うよ。……」

と、その路地裏の入り口でナンパ？？中の奴を睨みつつそこへ急ぎ赴こうとするミサカの手を引っ張り冷静に行動しようとする彼なのだが！？

「い…いや……しかし、でも、でもねっ……」

「いえいえ、そんなあなたがもじもじとキモいブリッ子やっていても、肝心の先輩は既に先行って居ないとミサカはそんな変態君に忠告します……ふふ」

「なっ！？……そ、そりゃ～あ無いぜとっつあん……」

「ハンッ！！そんな坊泥棒アニメネタ出すんだったら早くコイツ等始末しろとミサカは偽（にせ）ル○ンに後ろから蹴り上げますっ♪♪」

とまぁ～…いきなりボフォッッ！？とギャグチックな良い音と共に？？ケツに回し蹴り？？を食らいいきなりそんな不良達に顔面アタック？？

ドゲシッッ！！とそのまま一直線に撃ちだされた主砲弾（バカ光雄？？）は奴等の一人目に？？着弾！！見事にもその不良を撃沈せ

しめたのだが??その後にゃ〜…いつものパターンっつー事で!?
……（爆）

「うぐふぅー……（涙）」

「あん??誰だ?おめぇ〜…」

「えっ!?……」

うはぁ〜…な…何で俺様は今日こんな目に会わなきゃならんのだぁ〜…

くっ!!……ええいっ!!こうなったら!?

そんな事を思いつつ立ち上がりぎわにいきなり能力解放する光雄
……そしてっ!?

「ふっ……なにを隠そうこの俺様は?風紀委員（ジャッジメント）の??」

「〇に変わってお仕置きよ☆っと??正義の魔法変態ミツエですっ!!とミサカはさりげなく??」

「なっ!?ミサカ妹っ!!き……貴様??……いや…もういいから…俺、疲れたからｗｗ」

◆◇◆◇◆◇◆◇……

一方同じ頃、マリオン達は、ついさっきまで居た学舎の園を後にして、とあるクレープ屋の前に来ていた……

「あれれっ!?たしか、この辺りに微弱ながら魔力の反応があったんだけど、」

そんな事を言いつつ自分の杖をあちこちに翳しつつ考え混む彼女、

「ええ…でもこの魔法石岳を頼りに捜すのも無理があるんじゃ無いかしら?、一様風紀委員(ジャッジメント)にも連絡しているし」

そんな事を言いつつ街路樹のベンチに座りつつそんなマリオンを

眺めるオリアナだが??

「えっ!?……ま、まぁ～…バックもそうだけど～でも多分この感覚、何となく光雄の他に何人か居たような形跡あるんだよ…」

「う～ん、多分……光雄君、他の誰かと行動しているんじゃ??…だとしたら、彼の友達とか……上条さんとか御坂さん達じゃ…別にそんなに心配する事じゃあ無いと思うんだけど……マリオンちゃん??」

「う～……ッッ!!、こんなにも暑い中必死に探してんのに光雄は…あのバカ光雄はぁぁ～っ!!…」

ハァ～……やれやれ、マリオンちゃんがこんなに張り切るとはねぇ～…

あの坊やに今度あまりマリオンちゃんの事心配させないように少々お灸をしておこうかしらね～…（汗）

でも、あの坊や…光雄君…ほっとけばその内現れると思うんだけど、それよりもあのバックを何とか確保しないと…」

「一様誰も開けられないよう防御術式はしてはあると思うんだけど…でもなまじ素人が”あれ”を開けたらと思うと…少々心配よねぇ～……（汗）

と、そんな事を思いつつも、なにやら嫌～な予感がしてならないオリアナであった、

「そうね、光雄の事も気になるけど私のバック…何事も無く無事ならいいんだけどねぇ～…」

そんな困り果てた様子の二人にその通り添いから此方に歩いて来る人物達に気付くマリオンは??

「あれ?あの人達って…」

「はて??あらあら、あなた達はマリオンさんじゃないですこと??」

「えッッ!?し……白井さん?っと……その隣側の人は??」

「あっ!!初めまして私は此方に居る白井さんの同僚の初春飾利ともうします♪」

「えっ??白井さんの??」

「ええ、でもあなた方って以前学舎の園で見かけませんでした??」

「あ!!あの時の!?改めて私はマリオン・オヴ・シュペー……マリオンでいいよっ♪」

そんな隣側の飾利をマジマジと眺めるマリオン??
そんな中さっきまで後ろのベンチに座っていたオリアナもそんなマリオン達に歩み寄り…

「それじゃ私も自己紹介しなくちゃね♪私は、そちらのマリオンちゃんの友達かな??オリアナ・トムソン、これからもあの子…マリオンちゃんの事をろしくねっ♪」

「は…はぁ……よろしくですの…」

と、そんな黒子達二人だがなにやらマリオンよりもその隣側に立つオリアナのデカイ物を見つつ??冷や汗をかきながら何とか??自己紹介を終わらせ

「そう言えば先程バックを見つけたとお姉様から通報があった公園の場所を詳しくお願いしますわ」

「ええ、この先の通りを真っ直ぐ行きまして……」

そんなこんなでそんな彼女達の会話をじっと聞きつつ、マリオン達は??

「えっ!?まさかっ!?そのバックってもしかして青いバックですか??」

「えっ!?あなた方は何故それを??」

「それっ！！私の大事なバックなんですよっ！！良かったぁ～無事で」

「「ええっ！？そのバックって～っ！？」」

「そう、私達がその前に通報したバックです♪」

◇◆◇◆◇◆◇……

んで、そんな光雄達やマリオン達があちこちでてんやわんやってる頃そんな公園でたまたま見つけた落とし物バックを無事ゲットした美琴だが？？……って言うかなにやら超お約束な展開のよーな…（汗）

何故かその公園のベンチに座りつつ木陰から射し込む和かな日差しと涼しげな微風が気持ちよいのかうとうとと昼寝中のご様子である……

そんな中、先程の大騒ぎの末何とか、その不良達を成敗、拘束し

初のお手柄みたいで美偉に誉められ、そんな美偉に不良達の始末をまかせつつ、

とまぁー…やっとこさおめむいたとある公園……しかし、そんな二人の見つめる目線には??

何故かこのイベントを本来やるべき人物、美琴お姉様がベンチで寝ているじゃーありませんか!?

うっはぁぁ――――!?

なっ…何故奴が居る??しかもあの奴の隣に置いてあるあのバックって!?

もしや??……いや…でもまてまてまていっ!?

たしか、そもそも奴がかかわるのは、犬がくわえたピンクのバックな筈じゃあないですかいっ!?

いや…しかし!?

へっ!?ってやばいっ!!しかも俺の隣には??

と、そんな事を思いつつ恐る恐るそんな隣側に居るミサカに目線を送る光雄??

だが……

「えっ!?……あっ…あれえ～っ!?、うぉ～いっ!!ミサカ妹っ!!一体何処へ??」

くそぅ～っ!!さては奴めっ!!お姉様が怖くて尻尾を巻いて逃げやがったなっ!!

今度会ったらっ!!

って!?あれれ??何か俺のポケットに紙切れっ!?

なっ…何か嫌な予感がするんだが、こんな所でのんびりしている訳にゃ～……

そんな光雄の脳裏にはさっきまでてんやわんややってたミサカの顔が浮かんで……

そうか、アイツ…なんだかんだで楽しかったんだな…なんだかなぁ～……

結局行ったのか…

そんな事を思いつつポケットから取り出した一枚の紙切れを再びポケットにしまいつつ、そんな目の前に気持ちよさそうに寝ている美琴の顔を眺めていた…

と、そんな矢先突然背後に妙な気配を感じつつ振り向くと??

「こら光雄っ!!……っとにさっきまで何処ほっつき歩いてたのよっ!!…もぅー…心配したんだからっ!!」

「えっ!?ま…マリオンちゃんっ!?……って!?あだだだ!!俺が悪かったっ!!だからこれ以上妙な水弾当てて来るなっ!?」

と、突然光雄に襲いかかった水弾をさりげなく回避!?しかしっ!!

「あだっ!!……いたた…ったく人がせっかくって!?」

「「……げっ！？……」」

「って！？……やばッッ！！」

とまぁ～先程から光雄に向けて飛ばしまくっているマリオンが放つ魔術が事もあろうにその向こう側でスヤスヤ睡眠中の美琴様にもろ命中！！
イコールいつものように？？

「ふふ…人が気持ちよく寝ているっつ～のに…アンタは……いい度胸だわね～葛城ぃ～……」

「ひっ！？ちち違うって！？今回はマリオンちゃ？？」

「って！？あ……あの～これってまさか？？」

「うんっ！！魔方陣だけどっ♪」

「ちょっ！？ふ…二人して、仮にも俺…主人公だぞっ！？こんな攻撃…もし当たったら死亡フラ？？」

「「問答無用ッッ！！くたばれやゴラァァ――――ッッ！！」」

「グハァァ――――ッッ！！あべしっ！？」

とまぁ～そんな、いきなりシリアスからいつもの展開になりつつあるとある公園……

そんな光雄達を囲む賑やかな連中達を遠目に、クスリ……と笑う人物が……

そんな、光雄達を眺めながら一人そんな夕焼けに溶け込むように姿を消す人物……ミサカ妹が居た、そして、彼女は？？

そんな彼女は一体何処へ一人淋しく向かうのか、

そんな彼女に果たして光雄は？？

てな訳で？？

次回へ続くっ！！

第三十五話　外見紳士を装っても中身がエロいと変態ですっ！！（後書き）

はは……又々アホ的な展開で？？

んで！？次回は？はたして！！そんなミサカを光雄達は救出！！出来るのかっ！？みたいな……いや…これ以上はネタがぁぁ――――っ！？

そ…そんな感じで次回もお楽しみに～♪♪……はは♪

第三十六話　白髪の少年と銀髪の魔術師（前書き）

ふふふ…何とか間に合ったかな？？

っつー訳でちと短いが

続けて行きます

光学の超高密度収縮粒子砲戦記！！

始まり始まり～♪♪

第三十六話　白髪の少年と銀髪の魔術師

そして、その時間帯からさかのぼる事数時間後、

ここは学園都市第十学区内、その遥彼方まで続くフェンスの真横に佇む人影が……そのシルエットが風になびき…ゆらゆらと揺れる蜃気楼とまっちして、そんな男の姿も霞むように見える……

「ここち良い風だな、しかし、この地に災いの邪心が溢れ、悲しみの魂が徘徊しする…」

「ふっ…そんな因果（インガ）はここでも生まれようとしているな」

そんなフェンスの向こう側を眺めながら何かしら感じるのか、とても哀しそうな眼で見つめる男……

「ん？？……」

「君は、我が人払いの術式に割って来るとは、何者だ??」

そんな何とも怪しげなこの季節には、あまりにも異様さを感じる…そんな白銀の長髪をなびかせる黒服の男、そんな男の目の前に佇む一人の少女…その少女も又そんな黒服の男を見上げるかのように見つめ、そして口を開き……

「そんなあなたもこんな場所で誰かを待っているのですか??、とミサカはあなたの目を真っ直ぐ見つつ質問します…」

そんな質問する一人の学生に眉をしかめつつ、その男は……

「ふっ、おまえ、なかなか面白い反応するな…まぁ、貴様に聞いても無駄だと思うが……〝レイアー〟と名乗る魔術師は聞いた事は??……」

「……んっ??……」

そんな首を傾げる少女にやれやれ…所詮科学側の輩に何を真面目に聞いているのかと、ため息まじりな彼なのだが、

「ふふ…やはり所詮は、まぁ良いなかなか楽しかったぞそこの少女、」

そんな事を言いつつその黒服からそっと片手をそんな不思議がる少女の頭上にかざしつつ、何かを唱え始めた彼…

「そして!!今から見た事は総て忘れる事だな……」

そして、その言葉と同時にそんな少女、ミサカはまるで糸が切れた人形のように倒れ込み、その小さな少女をそっと支えながらそんな路地にある木陰にそっと寝かせ……

そして、その少女の髪をそっと整えながら優しげに微笑み……

「まぁ、貴様には…こんな薄汚れた俺達の世界は一生関わる事は無

い事を願うさ……」

そして立ち上がりぎわに少女の寝顔を眺めつつ…

さぁ～て、ここ（学園都市）の連中に悟られる前に奴（レイアー）とあの光を持つ輩を始末しローマに戻らねば我々がテッラ様悟られ、始末される恐れがあるな、

そんな事を思いつつ踵（きびす）を返すかのように黒いマントを翻（ひるがえ）し、その場を立ち去ろうとする……そんな矢先再び誰かしらの声に気付く黒服の男……

「誰だ？？てめぇ～…」

そんな彼は、只今自分の背後に佇む人物に、やれやれ…と、困り果てたような表情でゆっくりと振り向き……

「！？てめ……ここ（学園都市）の人間じゃ～ねぇ～な」

そんな不適な笑顔で睨み付ける白い髪の少年……

そんな少年に、男は振り向き、ゆっくりと口を開き

「やはり、君の身体からは魔力は微塵も感じないな」

「んだぁ～??魔力だぁ～!?おまえ、笑えねえ～なぁ～…頭おかしいんじゃねぇ～の??」

「ふふ…まぁ…笑ってくれなくて結構、錬金術??いや…君達からしてみれば魔術師……とでも名乗ろうか…」

「んなっ!?……」

あいつ……ただ者じゃ……

動けなかった、正に気が付いたら背後に一瞬ゾクリ!!……と、何とも言えないような寒気、いや、もっと深い物……闇の底から無理矢理引きずり込まれる感覚を!!

そして、そんな彼の意識は無くなり……

「……あっ!?……」

「あの……大丈夫、ですか??」

そう、うっすらとした意識の中……心の中心から熱いものが込み上げるような感覚……何とも暖かな……そして、俺の視界には、見慣れない姿の綺麗な幼い少女がにっこりと微笑んでいた……

「てめえ…俺に何しやが!?」

「動かないで!?」

「あん!?……」

「あなた、多分、後少し遅かったら危なかったわ!!人間の魂を司る聖霊、今それが粗方ごっそり無くなっているの……このまま放置

すれば、あなたの魂は数日で燃え尽きるわ、だからこの治癒の術式で治療中だから」

だが、そのシスターみたいな少女もヤハリさっきの野郎と同じ、胡散臭い連中と同じっつー事だけはたしかだな……

「おいっ!!さっきの野郎と言いよぅ…、てめえ等は一体何者だぁ!?」

「私??私はご覧の通りです、あと、あなたもそうですが、あまり私達の世界に足を踏み入れ無い事ですねっ♪」

そんな事を言いつつ彼女は俺の視界から消えて行き……残されたのは俺だけか……

「肉体再生能力(オートリバース)に……もう一人は……心理堂握(メンタルアウト)かっ??ちぃっ!!馬鹿馬鹿しいっ!!ったくよ~…そんな怪しげな野郎等に何怯えるんだよっ!!」

そんな事をはき捨てるように怒鳴りつつ、そんな白髪の少年は、ポケットに手を突っ込みつつその夕焼けに染まる景色に溶け込むよ

うに、立ち去って行った……

魔術……か…と…

次回へ続くっ！！

第三十六話　白髪の少年と銀髪の魔術師（後書き）

てな訳でオリジナルキャラ二名追加！！まぁ……この先な展開はだいぶ先かな??そんな感じで、ちとオリジナル的展開&ミサカ関係はここで一旦終了で！！

次回からふたたび原作でいきます♪

ってな訳で

次回もお楽しみに～♪♪

第三十七話　退行術式、そんな水晶に導かれ…（前書き）

いやいや、とまぁ～又々ミサカと謎の魔術師編……前回の続きという訳で？？

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～♪♪

第三十七話　退行術式、そんな水晶に導かれ…

――――――――――

――――――――

――――あっ！！

――――ここは？？…わ…た…し…は？？……一体どうしたのでしょうか、

たしか……実験の場所に赴き……そして、あの背の高い人に出会い……そこからミサカの記憶が……

でも今私の居る石畳の見知らぬ路地は？？

えっ！？ミサカはこの道を何処だか分からないはずなのですが、この道を知っているような、気がします

たしか…この道を上りきった坂の先の広場…その更に上にポツリとある一軒家……

――――ミサカの住んでいた家ですっ！！と、あの楠木の根元のあの傷も……そして、あの楠木の近くの井戸にいるあの人は！？

でも、何か周りが白く…もしかして霜（しも）が張っているみたいですね、とても…てても寒そうですね……

あの凍てつく寒さの中を人が居るみたいです、何かしら洗濯しているのでしょうか……

とても辛そうですね、でも……何か、懐かしさを感じます、あの人、あの人はもしかして？？ミサカ…の……いえっ！！

私の母親っ！！そして……ミサカの本当の名はっ！！■■■■・■■■■……あ……あ…ああああ……私の記憶…頭が…混乱します…こんなボタン一つで人口的に大量生産されたこんなミサカに……記憶なんか、ありえませんっ！！

ミサカの記憶…

混乱します、とても、でもとても今は気持ち良く…心地よい感覚です――――でもまた…――――…意識が――――――――

――――――――

――――――

――――

―…目覚め…さ…い

「さあ、目覚めなさい、そして、この哀れなる悲しき者に、精霊達よ……！！」

「――――あの…ここは?と、ミサカは……――――」

そんな、うっすらとした視界に浮かび上がる彼女の目の前にニッコリと微笑む白いローブを纏う一人の魔術師が……

「気がつきましたか??」

「あの…ここは一体何処でしょうか?あと、そんなあなたは誰ですか??と、ミサカは頭をかかえながら混乱する気持ちを押さえつつ質問します…」

そんな、只今気が付き上半身を起こしつつ自分が只今居る場所を朧気(おぼろげ)に周りを見渡すミサカ…

そんな彼女の視線上には見知らぬ白い壁…そしてそんな白い壁を妖しく蒼く照らすその一室の中央に設置してある大きな水晶…そして、

その先に見えるそんな水晶に照らされる白いローブを纏う一人の魔術師…エクスマス・ザキ・ツェペリン……そのエクスマスがそん

なミサカを見つめつつ優しい笑顔でゆっくりと口を開き……

「そう、あなたがここに来る事も、そして、この先に待つであろう運命も総て、あなたがこの世界に来る前から決まっていた事です、」

「そして、あなたの前世…いや…本来望むべき世界もその精霊達の赴くままに自分の運命にしたがいなさい」

「わ…私、いや…ミサカは??未だ自分が置かれたこの奇妙な状況に更に迷います…」

「そう、あなたをここへ導き誘った者…その彼、光を持つ者…葛城光雄、その彼と運命を共に誘いなさい……」

「か…葛城……光雄……とミサカは、ついさっきまで会っていた、あの人ですか?とミサカは更に混乱する頭を整理しつつ質問します」

「ふふ……そうね、あなたを救ったあの方と共に、」

そして、そんな教会内の一室に居るミサカ、そんな彼女を第十学区付近まで探していた光雄、そしてマリオン達は、

そこの路地沿いに倒れているミサカを発見！！

そんな彼女は、何かしらの魔術で意識が無いとのマリオンの意見で病院では無くここエクスマスの居る教会に運び、そんな彼女はエクスマスの下で回復し、現在に至るのである、

そして、何かしらの原因でミサカネットワークから除外された彼女は、この教会で暫く預かる事になったのであるが、

この先そんな彼女も又光雄達と共に自分自身に貸せられた過酷な運命に立ち向かう事に、

そして、あの光雄達を狙う謎の錬金術師と、もう一人…謎のシスターと、そんな彼等の背後に待ち受けるテッラと言う人物……

オスマンを巡るあの事件の後ここ、学園都市に再び新たな事件の

足音が迫るのである！！

次回へ続くっ！！

第三十七話　退行術式、そんな水晶に導かれ…（後書き）

てな感じで今回で、この魔術師編はだいぶ後話しで今度こそ一旦終了で……

で、次回はいよいよ本来の原作展開で??

次回もお楽しみに～♪♪

第三十八話　青い髪の彼っ！！ボクぁ落下型ヒロインのみならず、儀姉儀妹儀母

あはは♪

っつー訳で？？

前回話は一体終了し、今回から原作再び突入という訳で？？

今回のテーマはズバリっ！！

青髪ですはいっ……（汗）

そんな訳で？？又々連続投稿でっ！！

光学の超高密度収縮粒子砲戦記！！

始まり始まり～♪♪

第三十八話　青い髪の彼っ！！ボクぁ落下型ヒロインのみならず、儀姉儀妹儀母

あの怪しげなバックを巡る出来事から、丸一日が過ぎ、ここは、巨大ショッピングモール、セブンスミスト地下街の一角にある携帯ショップ、

その店内に只今目を輝かしながら!?様々な携帯やらモバイルを物色中の魔法少女ことマリオン・オヴ・シュペーと??

そんなマリオンの後ろ姿を眺めながらため息混じりで安物コーナーで物色中の魔法貧乏こと葛城光雄（爆♪）

と、そんな二人は何故携帯ショップ何かに赴くかと言うと??

昨日やその以前から始まった事では無いが、この二人、未だに携帯を持っていないばかりに

常に、そんな彼が毎回フラりと何処かへ行った場合、お互いに連絡が取れず、そんな彼を探し、苦労する始末で、だったら思いきって携帯を契約しに行くことに??……まぁそんな光雄自身はあまり気にしていないのだが……流石に毎度毎度裏切られるマリオンは

とうとう我慢の限界のようで!?

で、そんな二人はというと??

「う〜ん…、一番安いやつはっと……」

「えっ??ちょっと光雄〜っ!!何を貧乏臭い事やってんのよっ!!」

「ええっ??……あっ……あの〜ぅ……マリオン様??」

「えっ??なっ…なによっ!!」

「たかが携帯如きで、そんなに拘る必要は別に無いと思うんだが…って!?おいっ!!」

そんな貧乏臭い光雄はシカトしつつ最新式の航空機の通信機みたいな超コンパクトなこの携帯??（多分、黒子も仕様してるやつ？？）にかなり興味深いご様子で、その携帯をつかみ、何かしらボタ

ンを押しつつ、出てきたホログラムみたいな機能……そんなホログラムごしに光雄の顔を覗き??

「うぅわぁ～♪♪……ねえっ♪……光雄??」

「ぎくっ!?……なっ!?ダメっ!!……（汗）」

「えっ??私なにも……」

「ダメったらダメっ!!」

「もぅ～……けちぃ――!!」

「いいから絶対ダメッッ!!無理だから、こんな…値段見てみろよ」

そんな、頭ごなしに次々と却下され膨れるマリオン、

そのなにやら色々とやりとりしているそんな二人に店員らしからぬ人物が近づき??

「あ…あの～……お客様、だったら、今日から開始しましたカップル限定のお安く、しかもお得な商品がございますけど??」

「「……えっ??…かっ?カップル限定ぃ??……」」

い…いや…いきなりカップルって…（汗）

◇◆◇◆◇◆◇……

数分後、

そんな二人が携帯ショップ内で色々と携帯の説明を受けている頃、同じく地下街のとあるゲーセンに赴くべく三人組が!?

そんなファーストフードやたこ焼き屋、はたまたファンシーショップなど様々なお店が軒を連なえそこに行き交う、家族連れや学生達……そんな人混みの中を掻き分けるように突き進む三匹のさむ?

？……じゃなかった、そんななんとも怪しげな三人組は？？

「うぅ……どっか、こう萌えるよーな、ドッキドキイベントみたいのは落ちてへんかな～……」

「そうだにゃ～……上やんに付いていれば何かしらイベントあるんじゃねーかにゃ？？」

「ったく！！おまえ等っ！！それしかねぇ～んか？？」

そんな訳わかめな怪しげなトークをしながら歩く当麻率いる元春&今回初登場？？的な青髪ピアス？？（注：原作でも名前不明？？）

そんな只今素敵なイベント探索中な三人組の前方には！？、そんな彼等の軸線上に捕らえられた可愛そうな犠牲者？？が約二名居るでは無いかっ！！

「なぁ……上やんっ…あそこにいる二人って??もしかして??」

◆◇◆◇◆◇◆◇……

と、再びそんな二人はと言うと??

「まったくっ!!光雄っ!!何でデジカメの一つや二つも持って無いかな～…（汗）」

「んな事聞くなよっ!!そんなマリオンちゃんこそ……でも、写真が執拗（しつよう）とは…しかも!?」

「んっ!?…なに変な顔でジロジロ見てるのよっ……このエロ光雄ッッ!!」

「なっ!?エロって??そこまで言うか普通～……俺、そんなエロ

だったらマリオンちゃんよりオリアナさんの方が？？……」

「へっ？？」

「って？？まてまてまてそ……そそそんなじと眼で睨むなっ！？しかも？？」

「こ…こんなところでナニをやろうと？？……うげっ！？」

「こ…こんのぉぉぉぉ――――っ！！」

とまぁ～…先程の携帯ショップでなにやら契約する条件として二人のラブラブ証拠写真が執拗みたいのようで、そんな二人というと、

ヤハリと言って良いのやら写真を撮ろうにもそんなデジカメやカメラ付き携帯も、二人してそんな物は持ち合わせていない始末のようで、なにやらそのショップ前でいきなりいつもの夫婦漫才をやりだした二人……っていうか、結局光雄が又々マリオン様を挑発したよーな（汗）

と、そんな時二人に急接近の三人組!?

「うにゃ??誰かと思えば魔法少女マリオンちゃん&光雄かにゃ??」

「ええっ!!……土御門さんに、かっ…かか上条さんっ??……わわわっ??こ…ここれは…えーと……」

そんななにやらあたふたするマリオンの足元には??謎の髪の毛ボサボサになり、伸びてる光雄のが…（笑）

◇◆◇◆◇◆……

一方そんな頃

同じくセブンスミストの出入口付近では？？

「んっ！？」

「御坂さぁ――――んっ♪」

「おっす――――♪あれっ！？初春さんに佐天さんっ！？」

「はいっ！！これから私達ここで洋服を見に行くんですが、御坂さんは？」

「ん――――まぁちょっとねぇ……あっ！！洋服見に行くんだったら私もご一緒して良いかしら？？」

「はいっ！！喜んでっ！！行きましょう♪」

「いや…初春……そんな目を輝かせなくても…（汗）」

「うぇっ！？さ…佐天さんっ！？」

とまぁ～……只今光雄やマリオン達や当麻達がてんやわんややってるセブンスミスト内に更に混乱(カオス)??をもたらす要員が侵入しようとしていたのである!?……っていうか、かなり頓挫(とんざ)の予感が??（笑）

◇◆◇◆◇◆◇……

一方その頃マリオン率いる団体様ご一緒はというと??

セブンスミスト地下街のとあるゲーセン内のなにやらかなり怪しげなプリクラ前にゾロゾロと集まり、そんな皆の目線にゃーそのプリクラの装置の前に立ちつつなにやら説明をする青髪、そんな青髪を中心に皆が取り囲むようにそんな彼の説明を聞いている最中なのであるが??

「んで！！その奥にある試着室で着替え、ここで撮影という訳やっ！！どやっ？？光雄はんっ♪」

「う…うぅ――――んっ…それは分かったっ！！で！これを使い写真が取れるのは分かったんだが…こ…ここんなに衣装がって？？」

「まっ！？……マリオンちゃん？？」

そんな怪しげな試着室内でなにやら固まっている彼女なのだが？？

「た…たかが写真撮影如き、うぅ～……」

なっ！！なによなによ一体全体こんな大げさにっ！？しかもこの衣装……しかもあの青い髪の変態野郎……いったいアイツは……あの怪しげなヤバイ単語をのらりくらりと、忍者？？……死神？？しかも私を見た瞬間魔法少女だとかっ……奴は一体何者っ！？新手の

魔術師かっ!?魔術師なんか??まさかっ!?奴は時空を越えてっ!?

「ひゃっ!?」

うげげッッ!?わ…わわっ私の背後っ!?

「やあっ♪マ～リオ～ンちゃんっ♪♪衣装は決まったかいなっ??」

「ひっ??いやぁぁ――――――っ!?」

そんな、魔術師である彼女の背後に完璧に魔力を消して佇むそんな変態??、じゃなかった青髪っ!!

奴は一体何者なのか!?……っていうか多分何でも無い奴だと思うが（汗）

そんなこんなで、又々無理やりだが次回へ続くっ!!

第三十八話　青い髪の彼っ！！ボクぁ落下型ヒロインのみならず、儀姉儀妹儀母

いやぁ～……又もやぐだぐだ話再開やなぁ～…（汗）

っつー訳で??次回もぐだぐだ!?なのかっ!?

てな訳で!!

次回お楽しみに～♪♪

第三十九話　激突！？とある二人はとんでも能力？？…別の意味で（汗）（前書

いやぁ～…最近ちと私用で色々と筆記時間が……（意味のねー理由？？）

そんな訳で、前回の続きという訳で？？ちと短いが……

光学の超高密度収縮粒子砲戦記！！

始まり始まり～♪♪

第三十九話　激突!?とある二人はとんでも能力??…別の意味で（汗）

ここは学園都市の巨大ショッピングモール、セブンスミスト内、地下街のとあるゲーセン内、そのゲーセン内の一番奥側に設置してある怪しげなプリクラの前に集う勇者率いる??…もといっ!!、怪しい団体さんなのだが…（笑）

「あれっ??光雄おまえ着替えなくていいんか?」

「あっ!!上条さんっ♪…まぁ、俺はこのままでいいんすよ、」

どーせ、今の俺の服装…どっちみちコスプレみたいなもんだしな～……はは…（涙）

くそぅ…もう既にこの服イコール俺みたいな…完璧に定着しつつあるよーな…

いや、もういいから、こんなふざけた格好……（涙）しかし迂闊に着替えでもしたらマリオンに??……まっ…さっきのは無しにとこうｗｗ…（汗）

うぅ～…その内絶対まともな学生服の普通な主役にっ!!

と、その場に出てきた光雄だが、その肝心の青髪達が居ない事に気付きつつ、

「あれっ、そう言えば??あいつ等は??」

「ああ、何か未だ決まって無いみたいだぞ」

そんな当麻の言葉に少々不安になりつつ只今彼女が居るであろう別の更衣室を眺めている光雄……

な、何か非常〜にいやな予感がするのだが…（汗）

◇◆◇◆◇◆◇◆……

そんな光雄達を置いてマリオン達はというと!?

未だそんな謎のプリクラ前更衣室では??一人の魔術師ＶＳ謎の能力者??と一旦距離を保ちつつ相対する二人!?

とまぁ～一触即発!?みたいな??なにやら謎の能力バトル的な展開になりつつあるのだが!?

うわっ!?な、何なの??こいつのこの表情……奴は何者なの??魔術を使うわけでも無いがっ…能力者??でも…こいつの情報がなさすぎる……

ううんっ!!何を怯えてるの私っ!!仮にも私は世界にも少数しかいない精霊式魔術師の中の一人なんだからっ!!一撃で仕留めさせてもらうまでっ!!

そんな事を思いつつ、相対する青髪に対し、まずは手始めにと、基本になる式を即座に組み上げつつ彼女の周りに野球ボール位の水弾を数発形成、すかさず

「…お願いっ！！これで気絶してっ！！くらいなさいっ！！」

次の瞬間彼女の周りに只今具現化している水弾がまるで生き物のように彼女の佇む場所を軸として数週周りつつ加速し、その速度を維持しつつ一気に青髪が佇む位置に真上から次々に襲いかかる！！

が？？

「えっ？？まさかっ！？」

そんな彼の居る位置に次々に勢いを増した水弾が着弾！！周りにズドォン！！と重い塊が勢いを増しつつ次々に着弾するのだが、その位置には既に居ない彼！！…そして！！

「にょほほ――――っ！？
…しかしっ！！当たらんのやでぇぇ――っ…マリオンちゃんっ♪♪
最高やでぇぇ――――っ♪」

「くっ！！こ…ここ、こんのぉぉ――――――――――っ！！」

「なははっ！！ムダムダムダっ！！むだやでぇぇ――――――っ！！」

えっ？？な、なんでなんでぇ――っ！？私の水弾が総て避けられたっ！？あいつやはり只者じゃ！？

と、突然彼女の背後に周り急接近の彼、そんな彼に驚きながらも冷静に対処、即座式を完成させつつ…無数の水弾を形成、そしてその水弾達に命令し！！一気に彼に向け四方から攻撃したのだが、

「くっ！！又避けられたっ！？」

なんともうねりうねりと怪しげな軌道で鮮やかにその無数の水弾を鮮やかに余裕で回避する青髪っ！！

その彼女の攻撃を回避しつつ、その軌道を保ちつつ　あっという間に目の前まで接近する青髪っ！！

「にょはっはぁ――――――っ！！マリオンちゃんは水流系能力者やっ

たんやなぁ～♪又々そんなマリオンちゃんの必死な顔が余計にそそるんやでっ♪」

と、そんな彼女の眼前まで接近する青髪に、顔が引きつりながらもワンステップでギリギリ回避、その彼女と青髪との間の大気がピリピリと揺れ、そのまま回避軌道を保ちつつ身体を捻らせつつ更に術式を完成させ、追撃と言わんばかりに彼の真下に蒼く輝く魔方陣を即座に展開!!

「あなたっ!!もうこれ以上抵抗するのなら、私も本気を出すわっ!!だから、お互いに引きましょうっ!!」

そんな、なにやら先程の表情と違いついついマジになりつつあるマリオン…しかし彼女の警告を無視しつつ更に展開中の魔方陣から空中に避けつつ、その落下速度を利用して真上からダイブ!!まるでその彼の動きはとても素早く、彼女の直上から急降下爆撃をかけるが如く抱きつき体制の青髪っ!!

そしてっ!!

「なはっ!!甘いっ!!甘いぞえぇぇ――――っ!!」

とまぁ～直上から襲いかかる青髪に対し、その杖を天高く掲げつつ、ならばっ！！と言わんばかりに彼女は、只今展開中の魔方陣に更に次の命令を下しっ！！

「しかた無いっ！！だったら少し痛い目みるわよっ！！くらいなさいっ！！」

瞬間！！

ズドォン！！と何かを突き抜ける鈍い音と共に更衣室ごと粉々に粉砕しつつその展開中の魔方陣から巨大な水柱が突き上げられ更に周り一体を地響きと共に揺さ振りつつ更にうねりを上げ辺りを粉々にして行く巨大水柱！！

そんな二人のヒートアップ中な能力バトルに周りは、当然パニック状態の用で？？

「ひっ！？ななな……一体なにがっ！？」

みたいな？？そんな只ならぬ状況に驚きオタオタする光雄達なの

だが??

その中を先程の爆撃の飛び散る破片に逃げ惑う人達に紛れ

「ひゃっほぅ〜…詰めが甘いんやでぇぇ――――っ!!」

とまぁ、謎の雄叫び??を挙げつつ疾走する青髪と??

「こんのぉぉ――――――待てゴラァァ――――――ッッ!!」

ってな感じで、すんげ―形相のマリオン!!

そんな突然の二人の状況に当麻や元春も??

「のわっ!?……なんだっ!?青髪に……ま…マリオンっ!?」

「いい……いかんぜよっ!!かみやんに光雄っ!!俺達も後を追いかけるぜよっ!!」

っとそんな二人を追跡し始める光雄等と、そんな怪しげな二人で戦場と化したセブンスミスト地下街を舞台にとんでも混乱（カオス）な追跡劇が始まろうとしていたのである！！

じ…次回へ続くっ！！

第三十九話　激突！？とある二人はとんでも能力？？…別の意味で（汗）（後書き）

てな訳で？？かなり短いが次回は、ちゃんと虚空爆発（グラビトン）編、最後まで行きますっつー事で……（汗）

次回もお楽しみにっ！！

第四十話　未だ続くっ！？とある二人はとんでも能力？（前書き）

いやいや、前回の続きなのだが、やはり……前回に言った虚空爆発（グラビトン）編終了宣言は、やはり無理で……すんませんっ（汗）

後2～3話は続きます宣言で！？

っつー訳で♪

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～♪

第四十話　未だ続くっ！？とある二人はとんでも能力？

「――我が、最愛なる精霊達よ――――――……その司る者は、水、そして我が力に集え――そしてっ！！
総てを切り裂きえし刃（やいば）となりて敵を凪ぎ払えっ！！」

彼女は唱える、その小さな身体に宿す精霊達と……

彼女は唄う……総てを凪ぎ払えと……

ここは先程と同じく学園都市、巨大ショッピングモール、セブンスミスト地下街……しかし、そこは、とても神聖なる戦場（いくさば）と化し、そこに相対する二人…と、まるでかの、古のコロシアム（いにしえ）を現代に再現したかのように、その聖なる二人を囲みながら興奮し、見守る観客？？達……っていうかたんなる野次馬っ！！

その皆が見守る中、聖なる戦場（いくさば）に狼煙を挙げるべく、彼女はその複雑に入り組んだ術式を唱え終わり……次の瞬間周りの大気は一気に下がり、そんな彼女達の周りにうっすらと立ち込める霧みたいな冷気で彼女達の姿は霞む……そんな中をゆっくりと、不敵な笑顔のまま彼女は口を開き、その相対する青髪に一言告げ……

「もう、これ以上はお互いに止めませんか??」

「にゃははっ!!ぼ……ボクはそんなキュートなマリオンちゃんに抱き付くまで諦めないんやでっ!!」

マリオンは、その相対する青髪に対しまった無しの大魔術を組み上げながら、真面目な表情で警告するのだがそんな警告も無駄のようで…そんな彼女は次の手段に…

「ハァ〜…さっきまで私の魔術を躱（かわ）した事は誉めてあげるわ、でも今度はそうわいかないよっ!!」

「それと、ねぇ〜…あなたっ、もし水を極限まで凝縮し、打ち出したとしたら??」

「だから、ねっ!?分かったなら……って??」

「えっ？？」

「そ…そそそんな打ち出すなんて…だいたんやな～ぁ…そんなマリオンちゃん…ぼ……ぼぼ……」

「えっ！？ぼって、なにかしら？？」

「んん――ぼかぁ～、そんな”いやらし～い”マリオンちゃんっ！！大好きや…いつでもオッケーバッチコイやでぇぇ――っ！！」

うえっ！？な……なな……ななな……この期に及んで何をっ！？……

とまぁ～、水流系魔術の中では、かなりの上級者が使用する大魔術『引き裂かれし水の刃（スプライトスピッツセイバー）』

その高度な式を組み上げ、そんな相対する彼に降伏勧告するマリオン、

しかし、その彼女に対し、なにやらかなり未だにへらへらと余裕寂々な青髪、そんな青髪の”いやらしい”一言で、まるで林檎（りんご）のように顔が真っ赤な彼女……そして、

「なはっ♪ボクと”あんな”事や”そんな”事を考えてる、マリオンちゃん…今から一緒に〇〇〇を??」

「ひっ!?……も…もぅ～泣いても許してあげないんだからっ!!いいわ!!くたばりなさいっ!!」

そして、そんな一言から只今両手を向けている状態で最後の一言を、ボソリ……と、唱え……

――――『ｌＳｐｒｉｔｅ―Ｓｐｉｔｓａｂｅｒ…』

――――――――

次の瞬間青髪に向けている両手を中心に突然約４～５ｍ（メートル）の巨大な水刃が、数個、空間を無理矢理ねじ込むように具現化しつつ輝きを増し!!

更に只今向けている両手を左右に広げつつ、まるでそんな刃ごと

力を溜め込むように身体を仰け反り

そしてっ！！一気にそんな空中に形成された数個の光輝く刃を力一杯前方に打ち出すが如くその位置から、身体ごと両手を一気に前方に勢い良くクロスし、

次の瞬間っ！！

ズバァッ！！……と、その形成された巨大な刃達が大気を切り裂くように、次々と撃ち出され！！更にその塊がまるで艦砲射撃の如く一直線に凄まじいスピードで相対する青髪に襲いかかる！！

グワッ！！と、
そんな相対する変態？？
じゃ無かったｗｗ……
青髪の佇む位置に直撃！！
その彼の佇む後方から総てを横一列に真っ二つに！！

次の瞬間！！

「「「うぉぉぉ――――――――ッッ！！」」」「すげーなあの姉ちゃんっ！！」

「水流操作系（アクアマスター）!!あの姉ちゃんっ!!Ｌｅｖｅｌ４位かっ!?」

「うぉっ!!あいつ余裕で躱してるしっ!!」

「いやっ!!あちら側の青い兄ちゃんもすげーぞっ!!」

と、まぁー、たちまち周りから喚声が上がる!!

そんな中を只今ようやっと追い付いた光雄達は??

「ええっ!?なな…なんじゃこの人集りはっ!?」

「あちゃぁ～…ぁ…一足遅かったぜよ…」

「うっはぁ～…何か、マリオンって、切れるとビリビリよか怖えーかも……つかこの有様……ハァ～…不幸だ…」

と、そんなもう既に収集不可能状態な混乱（かおす）と化した惨状に深々とため息しつつ、そんな惨状を造り上げてしまった二人を探すのだが、既にその場には居ないようである…（汗）

「くそぅ～…マリオンちゃん…一体今度は何処へいきやがった??」

と、そんな中うじゃうじゃと集まり騒ぎ立てる観客（ギャラリー）達をかき分けつつ探す光雄達なのだが、目の前になにやら破壊された非常階段の出入口の扉を発見!!

そして、当麻達はこの地下街を更に探索で、残りの光雄は目の前の階段が気になるのか、二手に別れ、階段を一人駆け登り、他の場所へ移動したであろう二人の後を追跡する!!

うぅ…まさかこんな事になるとは、

◆◇◆◇◆◇◆……

一方そんな地下街でとんでもバトルになっている頃??

ここは、先程の地下街から遥か上の階、洋服店街、その広場には、着物関係から靴屋さん、はたまた水着関係まで大小様々な洋服店が軒を連ねている。

その広場を家族連れやお年寄り達と様々な人達が行き交う、そんな人達に混ざり、三人の学生達、そんな彼女達はと言うと、

「へ～え…でも御坂さんみたいな人も私等と同じくチェーン店行くんだ～…」

「って！！感心してる場合じゃ無いですよっ！」

「あははっ♪……でも初春さん、私って外出時は制服着用が義務付けられてるから、服に拘らない人結構多いのよねぇ～……」

「「そ、そうなんですかっ！？」」

と、そんな何気ない会話をしながら歩く美琴率いる御一行様…

と、そんな美琴達が行く後方をビクつきながら彼女達を避けるようにキョロキョロと辺りを探す光雄なのだが??

うげっ!?なっ…何故あんな場所に奴が居るかな～…しかも只でさえマリオンちゃん達を阻止するのに大変だっつーのにっ!!それかっ!?そー言うオチなんかっ??

いや!?待てよっ??ここって…やっぱセブンスミストだよなぁ～…(汗)

んでっ!?御坂さん率いる白井さん無しのあの三人の軍団……って??

まさかっ!?このシツエーションって??……しかもっ!!かっ…上条さん居ないしっ!?こんな時にあのいつぞやのロリ??……じゃ無かった…ガキンチョが、爆弾抱えて来たらっ!?

や…やべぇ～…ど、どど…どーしよーー……(汗)

と、そんな事を思いつつ周りを更にキョロキョロする光雄……っ

ていうか、女子中学生を尾行しながらかなり挙動不審な変態にしか見えんのだが…（汗）

「あれっ??光雄はん!!何でこんな所に居るん??」

「えっ??」

げっ!?……そ…その独特のエセ関西弁ボイスはっ??

と、そんな冷や汗たらたらな落ち着かない光雄だが、なにやらそんな彼の背後に何者かが声をかけおそるおそる振り向くのだが??

「うぇっ!?やっぱり……（汗）」

「そうかそうかっ……さては、光雄はんも隅（すみ）に置けないやなぁ～♪」

「さては前方を歩いているロリが目当てなんかっ！！さっすが見る目が違うなぁ～光雄ハン！！左から見てあのロングヘアーっ！！なかなかええ乳しとるやないけ～♪」

「いや…もういいっす…（涙）」

って！？青髪さんっ！！

その彼は、マリオンだけなら未だしも、その彼の軸線上に歩く女子中学生にもその魔の手をのばすのであるっ！！……ていうか、多分コイツ等に迂濶に近づいた日にゃ～ビリビリ地獄（笑）が待っていると思うよーな…（汗）

と、そんなこんなで又々無理矢理だが！？

次回に続くっ！！

第四十話　未だ続くっ！？とある二人はとんでも能力？（後書き）

ははっ♪♪な、何やらかなり収集つかない混乱（カオス）状態は未だ続くよーな…（汗）

てな訳で♪次回も似たよーなパターンかも？？

そんな感じでっ♪♪

次回もお楽しみに～♪♪

第四十一話　"青い巨星"墜つ??…このラン○ラル戦いやいや…前回の意味のねー??能力バトルの終止符を撃ったのは??

って!?違うから、

今回は、ちゃんと真面目に原作的展開で??

てな訳で、
光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ!!

始まり始まり~♪♪

第四十一話　"青い巨星"墜つ??…このラン〇ラル戦い

只今光雄達がセブンスミスト店内でてんやわんややってる頃……

所変わってここは、学園都市第七学区内、棚川中学校内に設けられた風紀委員（ジャッジメント）第一七七支部の一室、

その一室に設置してあるごく普通のデスク用の机、その机の上に置いてあるパソコン、その液晶モニターを睨むように真剣に見入る一人の少女が座り……

そんな彼女に近寄りコーヒーをその机に置くもう一人の人物が…

「はぁ〜…やっぱり場所も時間も関連性が認められ無いって…（汗）」

そんなパソコンを操作しながらそのデスクの隣に置いてある、アルミニウムの破片が入った人形を眺めるのである、

そんなアルミニウムは当然、虚空爆破（グラビトン）関連の物でもあり、

まぁ…アルミやら様々な貴金属類にその能力で重量子を急激に発生、加速させ、空間ごと爆発させる能力で、

そんな能力者は書籍（バンク）に該当する人物はまったくと言って良い程無い訳であり、そんな手掛かりは全然無し、しかもここ第七学区内のとある場所での発生を皮切りに、次々とあちこちで被害が出る始末で、

しかも、新たに事件発生する事にその威力、破壊力もだんだんとエスカレートし、

未だ死者は出ていないが、次々に発生する爆弾事件で多数の被害者も出ている最悪の状況なのである！！

そんな中、その該当しそうな人物を必死に探すべく様々な視点から思考中の美偉と黒子なのだが、そんな破壊力のＬｅｖｅｌのある高能力を用いる人物は居ない所か、絆（かすり）もしない状況なのである！！

そんな中、只今風紀委員（ジャッジメント）の一室でパソコン画面を見つめているの

か、何やら考え事をしているのか、何げにそんな一室の白い天井を眺めながら何かを閃いたように口を開く美偉、

「う～ん…もしかして…手口は同じだけど…同一犯じゃ無いとか？？」

そんなパソコン画面を眺める美偉の隣の棚に背もたれしながら、コーヒーを含みながら黒子は？？

「えっ！？ま…まさかねぇ～」

と、やはりため息混じりの黒子…そんな彼女達がいくら考えても手掛かり所か更に煮詰まる始末なのである……

「うーん、ちょっと言ってみただけ、」

「あまりにも関連性がなさすぎるのよね、」

「固法先輩、早く急ぎませんと又々次の犠牲者が出るかもしれませんですの、」

「せめて、手掛かりだけでも見つけないと、同僚が九人も負傷して

いるしね～…」

そんな何げに言った美偉の一言を聞きながら、もう一口コーヒーを含む黒子なねだが、その先程美偉が言った”同僚が九人”、という一言に、まさかっ！！もしかしてっ！？とまぁ～何か頭に引っ掛かり！？

「えっ？？白井さん、どうかした？？」

「ええ、まさか同じ同僚が九人ってちょっとあまりにも多すぎませんん？？」

そんな何げに口にした一言で二人してなにやら閃き反応し？？

「「……えっ？？もしかしてっターゲットは？？」」

と、そんな中突然先程から連続爆破関係の被害の状況やら第七学区内の地図を展開中のパソコン画面から、更に新たに重力子（グラビトン）反応を感知する警告音が鳴り響き！！

そんな中一気に緊迫した空気に包まれる第一七七支部！！

「只今衛星が新たに発生した重力子を確認っ！！」

「まさかっ！！次のターゲットはっ！？」

◇◆◇◆◇◆◇◆……

そんな緊迫した状況になりつつある風紀委員（ジャッジメント）第一七七支部から所変わって、ここは未だ光雄達がてんやわんやとアホな状況になっているセブンスミスト店内、

うわわっ！？も…もうダメだ……ははっ♪♪……というか終わった…俺、死ぬな多分（涙）

と、暴走状態のマリオン達を探しつつ巨大ショッピングモール内のとある洋服店広場まで赴いた光雄、しかし、そんな光雄の前には

何故か怒りを露に放電する美琴様、とそんな彼女の足元にゃ～??

「うぐっ……我が障害にゃ～一辺の食いなしっ…あ、後は頼むぞえ…同志よ……カクン…（笑）」

とまぁ～…先程まで青髪だった人物の黒焦げ状態の亡骸??

って!?な…何故そうなる??しかもスンゲ―恐ろしい形相の御坂さんだし…うぅ…やべぇ～…これって!?ヤッパ怒っていますか?いや、ぜってースンゲー怒っていらっしゃるよねぇ～…
はは（涙）

ヤバイヤバイヤバイって!?マジで!!もしかしてこの展開って!?絶対絶命って奴なんか??そうなんか?ヤッパ俺様はこんなベタなお約束ギャグ的展開で一生終わるんかっ!?……いやいや、こんなアホな思考してる場合じゃあ…

ど…どど、どうしよ――（涙）

「へ～え??、で!?なんでアンタもこの変態と一緒な訳??場合によっちゃぁ…」

「ひっ！？そ…それはちょっと…（汗）」

とまぁ～…なにやら、先程の緊迫した状況の風紀委員支部（ジャッジメント）と違い、この店内も又々緊迫した空気になりつつあるのである！？……別の意味で？？（笑）

そんな青髪と光雄達はほんの数分間に、この洋服店内で偶然再び出会い、しかもそんな青髪は？？

何をとち狂ったのか、なにやらビクつきながら光雄が警戒しつつ様子をうかがっていた、この店内の中でもっとも超危険人物達に単独で

まるで圧倒的な敵艦隊に勇敢に挑むかつての特攻隊の如く？？無謀にも単独で接近、肉迫！！捨て身のルパンダイブを決行し？？その結果！？

当然の如く逆に返り討ちに合い…志し半（なか）ばで撃墜せしめられ！？その結果、眠れる猛獣を叩き起こしてしまう最悪の状況なのである！！

「ひっ！？みみ…御坂様っ！？こ…ここれには深～い訳がありまし……げっ！？」

「ったく！！まぁ～…アンタが変態なのは昨日や今日始まった事じゃぁ無いし…」

「まぁ…もっとも～♪アンタの親友のマリオンさんから、こんな時はキツ～い、お仕置きを頼まれているしね～♪」

うへっ！？ちょっと今…なにやらポケットから？？まさかっ！？いやいや…あのコインを弾く鮮やかな効果音が？？

ってか！！まてまてよおいっ！？御坂さんっ！？…いくらマリオンちゃんに頼まれているとしても、友達の仲間にここまでするか普通～！？……いや……もういいから……多分……俺…今死○星（し○ょうせい）が見えるかも……って！？

とまぁ～…なにやらいつもの？？お約束ギャグ的展開で幕を降ろすはずの店内なのだが？？、そんなお笑いじゃあなくシリアス的の状況に？？

とまぁ～、突然飾利の携帯が鳴り響き、

そんな状況の中、その変態達を冷や汗をかきつつ呆れて見つめている涙子を避けるようにそそくさと離れつつ、そっと携帯を開く飾利、

「はい♪もしも！？…」

『初春っ！！虚空爆破事件の続報ですのっ！！』

「えっ？？」

そんな突然凄い剣幕で怒鳴る黒子！！そして！！

『学園都市の監視衛星が重力子の爆発的加速を監視しましたのっ！！』

「ええっ！？」

電話越しに顔が引き連る飾利！！

「かっ…観測地点は!?」

『ここの近くの警備員(アンチスキル)を急行するよう手配しましたのっ!!』

『あなたは!!いいからすみやかに第一七七支部(こちら)に急行して下さい!!』

「ですからっ!!観測地点をッッ!!」

『第七学区の洋服店っ!!セブンスミストですのッッ!!』

そんな突然なただならぬ状況の飾利の様子に、先程まで変態な光雄のお仕置きで彼とじゃれていた美琴や光雄、

そんな二人を呆れ顔で眺める涙子や、先程までそんな彼女等の足元で伸びていた青髪も気付きつつ、

皆がそんな飾利に注目するのである!!

そんな中光雄は!?もしや”あれか??”あのダメガネか??と気付きつつ電話中の飾利に話かけようとするのだが??

ええっ!?おいおいまさかそれって!?

「なぁ～…ビ○ラン??じゃなかった…（汗）初春さ??」

「うっさいっ!!黙ってろっ!!」

ドゲシッ!!「ぐはっ!!」

「ず…ずびばぜんっ…（涙）」

とまぁ～…ヤハリその隣側の美琴様に”どつかれ”黙り混むかわいそうな光雄なのだが??

うわわっ…み…御坂さんとあいつって??

とまぁ～先程から、そんな二人のお笑い的コントに感心する涙子なのである??……っていうか、どんな状況でもこの主人公って…（汗）

そんな中、未だ電話中の飾利は!?

「セブン…スミスト……丁度良いですっ!!今私っ!!そのセブン

スミストに居ますっ！！直ぐに避難誘導開始しますっ！！」

その一言を言いつつ携帯を突然切り……

◆◇◆◇◆◇◆◇……

そんな状況の中先程まで電話中だった黒子が居る風紀委員（ジャッジメント）第一七七支部では？？

「初春っ！！ういはるッッ！！……なんですって！？……くっ！！」

そんな突然電話を途中で切られ顔面蒼白な黒子！！

その黒子の隣側に佇む美偉は、そんな只ならぬ表情の黒子を心配

し、話しかけるのだが??

「えっ!?初春さんがどうかしたの??」

そんな心配そうに彼女を覗きこむ美偉に黒子は黙りつつ振り向きこくっと、頷きつつ…その現場に急行するのである!!

◇◆◇◆◇◆◇◆……

一方その頃、先程の第七学区内セブンスミスト店内では??

先程まで電話中だった飾利だが、そんな飾利を中心に光雄達が囲み、そんな飾利は、

「みんな、落ち着いて聞いて下さい…犯人の次の標的が解りましたっ!!」

「犯人の標的は…この店ですっ！！」

「「「な…なんですって！？」」」

そんな冷静な飾利に皆が黙りこみ、そんな中光雄は！？

うっはぁ～…やっぱし……くそぅ～只でさえマリオンが何処で暴れるか分からん状況なのに、こうなったらその爆弾ごと俺様の能力であのくそムカつくダメガネに一発ギャフンとっ！？

ゲシッ！！「ギャフンッッ！？」

「「ええっ！？」」

「い…いいから続けてっ！！」

「「「……（汗）」」」

とまぁ～…又々こんな緊迫したシリアスな状況に妙な行動をし始めた変態？？を一撃の如く撃破せしめた美琴であるが？？

「ほえっ！？……」

「ほ～らっ初春っ！！続き続きっ！！」

「あっ！！ああ…佐天さんっ！？」

「ううんっ！！佐天さんと光雄さん達は避難して下さいっ！！」

「うん…初春も気を付けてね…」

「それと、御坂さんは避難誘導に協力して下さいっ！！」

「ええっ！！分かったわ！！」

そして、飾利と美琴は、避難誘導を…そして涙子達は避難を開始…
店内に鳴り響く放送でそんなセブンスミスト内のお客様方がぞろぞろと店の外に誘導され……

◆◇◆◇◆◇◆◇……

数分後……

そんな店内は無人になり、その状況なのだが??
未だその無人になった店内で未だ店の外の人だかりにマリオンの姿が居ない事に再び店内に探しに赴く光雄と、そんな光雄に気付き後を追う美琴と…未だそんな店内放送を無視しつつ同じくマリオンを探す当麻や元春達……

そしてっ!!そんな彼等達は??その後に迫り来る虚空爆破(グラビトン)の恐怖と??

てな訳で又々無理矢理だが次回へ続くっ!!

第四十一話　"青い巨星"墜つ??…このラン○ラル戦い

う〜ん…やっぱし私的にゃ〜原作どうりってつまらな??……いや…（汗）

これでいいんだよね…ちゃんと原作崩壊しないでだよねっ!?

ま…まぁ…（汗）

次回は??マリオン様も再び参戦するし??青髪も!?ふふ……って!?いや…（汗）

ちゃんと真面目に行きますっ!!

てな訳で??

次回もお楽しみに〜♪♪…ふふ?…

第四十二話　メガネ野郎と魔術師と??Ｐａｒｔ１?（前書き）

いやいや……今回はちとグダグダのんびりパートですはいっ！！

ま…まぁ～次回へ続くこのパートの能力バトル最終決戦前夜みたいな?…

そんな感じで

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～♪♪

第四十二話　メガネ野郎と魔術師と??Ｐａｒｔ１?

「あ～れぇ～っ??ん～…　」

「なあ、土御門、どうした??何か分かったのか!?」

「確かにここいらでマリオンちゃんらしき魔力は感じたんだがにゃ～…なぁ―んか気のせいだったかにゃ……」

ここは先程と同じく学園都市第七学区内巨大ショッピングモールセブンスミスト店内…

その店内の二階には、幹線道路みたいな広々とした通路、その通路の先々に設置してある休憩広場みたいな場所が続く、

そんな通路を抜け、その先に見える広場に赴く当麻達なのだが??

その二階の手前側からその遥向こう側まで続く通路の左右には、

食品売り場やらお惣菜がズラリと列をなし、

その広い通路上のあちこちに設置してある空間……そんな子供の遊戯場みたいな、はたまたちょっとしたミニコンサート会場にもなりうる広場は、まさにかつて一世を風靡したお台場や…船橋の巨大ショッピングモールを遥かに凌駕（りょうが）する規模なのである！！

しかし、普段ならそんな巨大な広場やその他の様々な惣菜店はあらゆる人々が行き交う場所でもあるが、

ほんの数分間のとある電気系故障とかの放送を皮切りにその店内は今現在無人になり、只今ゴーストタウンと化していた、そんな無人になった店内の静寂を突き破るように、二人の足音だけがやけに響く……

「なあ、さっきから気になる事があるんだが、これって！？つまり？？」

「あん？？かみやんも気づいていたんか？？、たしかに一途にゃ～言えんが、普通じゃ～無いっつー事だけは確かぜよ…」

そう、元春は、今隣側自分と平行して歩く当麻の横顔をながめつつ、こんな異常な普通じゃない状況を冷静に考え、なにかしら胸騒ぎがしてならないのである、

早く、マリオンや光雄達を探し出し、ここから迅速に退避しないといけない”なにか”が!!

◇◆◇◆◇◆◇……

一方その頃、ショッピングモールの二階から更に上の階の、無人となった、洋服店街の非常階段の近くの踊り場に、一人の人物がゆっくりと登り、なにかしら考え込むように立ち止まり、又ゆっくりと歩く…

そんな人物のシルエットは、紫のマントを羽織り、その手には何かしらの杖を持ち、

そんな杖をあちこちに掲げながら又立ち止まる、そんな彼女だが、下の階の当麻達と同じく先程の店内放送と、周りの様子に、少し首を傾げながら考え込み…

その彼女の軸線上、踊り場の白い壁に設置してある宣伝用ポスターを眺めつつぼんやりと独り言を呟く彼女…

「はぁ～…あの変態野郎の気配も魔力も全然反応なし…か…」

はぁ～…ったくもぅ～…今日はいったい何の厄日なのよ～！！

朝、普通に光雄を叩き起こし、いつものように皆で朝食を食べ、その後にここのショッピングモールに光雄と携帯見るだけだったのにぃ～…

光雄（あいつ）は学園都市（ここ）の優等生になり、給付金も一段と上がってお金持ちのくせして！！事ある事にやれダメだやれ値段が高いだっ！！

しかもそんな矢先にお得品とかで一緒にカップル写真撮るハメになる……わ……

って！？

かっ！？光雄と私っ……かっ……かか…

ああ～もぅ～っ！！そのせいで、あんなムカつく変態ストーカー野郎に襲われ！？ううん…こんな思いさせられてっ！！

う……うがぁぁ――――――ぁっ！！

な、何か又々ムカついて来たわっ！！
こんな…この可愛いヒロインの私がこんな目に合うのは全部あいつが！！ぜぇ～んぶあの光雄のせいよっ！！

うふふ♪光雄っ！！見掛けたらただじゃ～あすまないんだからねっ！！

とまぁ～…何故かそんなへらへらした光雄の顔を思い出す旅に、怒りがこみ上げて来るマリオン、その怒りをぶつける矛先がなにやら青髪から光雄に！？みたいな？？なんとも怪しげに微笑み出す彼女である、

そんな怪しげな思考になりつつある彼女なのだが、その彼女の背後から萎び寄る別の人物が？？

「あ…あのぉ～…そこのお方、」

「えっ！？……」

今…私、誰かに呼ばれたっ！？まさかっ！！又もやあの変態かっ

！？

それにしても光雄とか御坂さんもそうだが能力者って輩は、微弱な魔力は何とか感じ取れるんだけど…何でみんな同じ感覚なんだろうな……これじゃあ誰が誰だかさっぱりだわな……はは♪

しかし…こいつだけは何～か引っ掛かるのよね～…（汗）

まっ！！

気のせいかな？？

そして、そんないやに胸騒ぎを感じながらその声をかけた人物にゆっくりと振り向き？？

「ええっ！？あなたは？？」

「やっと気が付きましたか……ったく、鈍いんだよ…」

えっ！？だ……誰こいつ…しかも、この態度……

「ああ～ごめんなさいっ♪ちょっと私っ考え事してたから、で？？あなたはっ！？」

「……あの……これを、さっきこの先の洋服店に居たあの子に渡してほしいんですが…」

「ええっ!?そんなわざわざ人伝えなんかまどろっこしい事するより直接手渡した方が喜ぶんじゃ……」

「いや……その…それは?」

「それとっ!!あなたっ!!ちゃんと人に話す時は目を見て……って!?」

「おまえ……うぜぇよ…」

「なっ!?」

◇◆◇◆◇◆◇……

と、一方同じくショッピングモール内の巨大洋服店街の無人となった中央広場には??

そのだだっ広い広場のほぼ中央付近に一人佇む人物……そして、

そんな人物の手に持つ携帯が再び鳴り響き、その無人と化した店内にその一人の少女の声だけが響く……

「はいっ！！今全員避難したか確認を…」

『初春っ！！聞きなさいッッ！！』

「いや…だから…」

『今すぐ洋服店（そこ）を離れなさいッッ！！』

「えっ！？」

『過去八件の事件のすべてで風紀委員（ジャッジメント）が負傷してますのっ！！』

『観測地点周辺に居る風紀委員（ジャッジメント）っ！！』

「そ…それって？？」

『今回のターゲットは、あなたですのよ初春ッッ！！』

そんな、無人と化した洋服店街中央広場に響き渡る電話越しの黒子の声、そんな彼女の会話をいつの間に聞いていたのか彼女の後ろからゆっくりと歩み寄る人物が、……って!?ストーカーじゃぁ??

「あれっ!?」

「ほぇっ!?……あっ!!葛城さんっ!!何で??ダメじゃないですか戻って来ちゃ!!」

「あっ!?あははｗｗ……すまんっ!!ちょっちヤボ用～で♪」

というか、マジそんな

くっ!!やはり初春さんだけか……マリオンは、此処にも居ないよな～…

こうなったら、最悪…やはり先にあの爆弾魔のダメガネ君を見付だし、奴をギタギタにしてから、その後からゆっくりとマリオンを探した方が先決かっ!!

しかし…どちらにしろ、ここでそっと待機しないと、逆に目の前の初春さんも危険だしな……

いや??待てよっ!?だったら初春さんと一緒にマリオンちゃんを探しに行けばいいんじゃないですかい??

「うんっ!!さぁーすがっ!!俺様っ♪」

そうと決まればっ!!

「ふっ…初春さんっ…アンタもとんだトバッチリを食っちまったよ～だな…ま!!そぉ～んな事はアンタの仕事上色々と付きまとう相棒みたいなものさっ!!」――キリッ♪

「えっ!?み…光雄さん??…」

「いや…別にそんな意味じゃあ無いんすがね??実は??」

「って!?」

そんなかなり”イケメン??”な、登場の仕方な彼のセリフに反応し…ゆっくり振り向こうとする飾利??

「そう……初春さんをこんな危険な場所から救いに来たたんなる…
…うげっ！？」

「あぁ～はいはい変態はそこまでっ！！ったく…ど～せアンタはマ
リオンちゃんお目当てなんでしょ？？」

「いっ！？と言うか何で御坂さんがここに？？」

「んな事どうでも良いでしょっ！？それよりもさぁ～…早くあの爆
弾魔を何とかしないとでしょ？？」

「い…いや……たしかに…そうなんだが…」

そんな彼の思考を悉く当てる美琴…そんな美琴になにやら感心す
る光雄なのだが？？

「うんっ……御坂さんっ…あ…ありがとなっ、」

「ったく、アンタの悪い所は何でも1人でかってに突っ走る事っ！！ちったぁ～私とかアンタ達の仲間が居るんだから少しは頼りなさいっ！！」

そんな美琴の言葉に目を見開いて驚く光雄、御坂さんと言い、只今下の階でマリオンを探索中の当麻達と言い、そんな仲間達に…何か…心の底から暖かい物がこみ上げる光雄……

そんな仲間に心から感謝の気持ちを込めながら…

◇◆◇◆◇◆◇……

数分後……

「そうそう、突然ごめんねぇ～♪実はこのバカの友達が未だ避難してない人がいるのよっ！！」

って!?ば…バカって……俺かっ!?俺様なんかっ!?いやいや……前言撤回っ!!ヤッパこいつはって!?

「えっ!?だったら早くしないと危険じゃないですかっ!!…でもターゲットは私みたいですし…」

「てー事は、その奴が仕掛けるとしたら、唯一風紀委員（ジャッジメント）の初春さんに仕掛けて来るっつー訳よね、」

「はいっ……だからあの～…早く御坂さん達は私から離れ……」

「「って!?」」

「い…いや……ちょっち!?ヤボ用～…かな??」

とまぁ～…その場を抜け出し又々単独でマリオンを探しに行こうとする光雄だが??ヤハリそんな事は不可能のようで??

そんな、謎の爆弾魔が、いつ現れるか知れない緊迫した状況下で、一体何に反応したのか再び単独行動をとろうとした光雄！！

しかし、そんな光雄や飾利達がのんびりやっている状況では無いみたいで…突然そんな彼等の佇む位置からにも響く連続して起こる凄まじい爆音と地響き！！

「えっ？？」

「って！？あれはまさかっ！？…マリオンちゃんかっ！？…」

そんな只ならぬ状況に突然美琴達を振りほどき駆け出す光雄っ！！

まさかっ！！奴かっ！？しかし…何故風紀委員（ジャッジメント）の初春さんじゃ無く…くっ！！

「ヤハリさっきのは下から？？それともっ！！マリオンちゃんが危ないっ！！」

果たして、その爆音の正体は?!そして、その場を駆け出す光雄は?!

又々無理やりだが次回へ続くっ!!

第四十二話　メガネ野郎と魔術師と??Ｐａｒｔ１?（後書き）

あははｗｗ

ま…まぁ…中途半端な感じだが、多分次回でこの虚空爆破（グラビトン）編終了やな～♪♪

そんな感じで

次回もお楽しみに～♪♪…はは…（汗）

第四十三話　メガネ野郎と魔術師と??　Ｐａｒｔ?（前書き）

あははっ♪♪

な…何か能力バトル的なのだが、ヒロイン何げに活躍して無いよーな??…（汗）

（注：泣き泣き自重したから??（笑）…）

とまぁ～…そんな感じで??

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ!!

始まり始まり～♪♪

第四十三話　メガネ野郎と魔術師と??　Ｐａｒｔ?

ここは、第七学区巨大ショッピングモール、セブンスミスト前の国道と大通りを挟む交差点付近、そこには先程通報があったのか、警備員（アンチスキル）の装甲車や数台のパトカーがパトライトを回しながら停車し、その近くの巨大な立体駐車場下の広場、そんな広場に店内からゾロゾロと出てきた様々な人々がごったがえしていた、そんな人々を誘導する警備員（アンチスキル）達、あたかもそんな周りの様子は壮絶としていて、何かのパニック映画さながらみたいな様子なのである！！

そんな人々に混じりながら、その巨大な建物を見上げる少女、

その少女の目の前に、突然その空間にねじ込むように一瞬でそんな少女の眼前に突如一人の人物が現れ！?、

そんな突然の出来事は、普段から能力者が行き交う学園都市（ここ）じゃ当り前であり、そんな目の前突如テレポートアウトして来た人物の前でも、そんなに慌てた様子は無く、いつもどおりに振る舞うのである、

「うわわっ！?……えっ?? 白井さんっ！?」

「ふぅ～…何とか間に合いましたわっ……」

とまぁ～…遥か遠くの風紀委員支部（ジャッジメント）から慌てて、ここ、セブンスミストに来た黒子なのだがそんな彼女の知り合いの人物が目の前に居る事に気付き、そんな只今キョトン…と見入る涙子の周りを見渡すように、黒子は冷や汗をかきつつ慌てたように涙子に話し掛け！！

「あっ！！佐天さんっ！？一人だけですのっ！？初春は？？此方にはまだ来て居ないとかっ？？」

「あっ！！い…いや～ぁ～…ええっと……未だあの中に…（汗）」

そのかなり慌てて質問する黒子！！
そんな涙子はそのあたふたと挙動不審な黒子と違い、何か…安心している様子なのだが……（汗）

「あ～…でも白井さんっ！！そんな慌てなくても大丈夫ですよ～♪」

「へっ？？いや…しかし、その奴の能力は虚空爆破（グラビトン）ですのよっ！？警備員（アンチスキル）達もその危険性で迂闊に対応も出来て居ないというのに…」

「いえっ！！彼方には、御坂さん達も居ますし…」

「ええっ??お姉様が??」

「そう、あと葛城君もですよっ!!」

そんな事を口にしながら、その今現在店内の様子をうかがうように、じっと見つめる涙子……そんな涙子に続き、黒子も同じくその巨大ショッピングモールを見つめながら店内の美琴や光雄達に頼み込むようにそっと呟くのである……

お姉様…葛城っ…どうか、初春を守って下さいまし……

◇◆◇◆◇◆◇◆……

一方、外で黒子達が心配しつつ眺めている巨大ショッピングモールの店内では??

その遥か上の階の非常階段踊り場付近では、先程の重力子爆弾の連続爆発で周りのコンクリートは、深くえぐれ、中の鉄骨が剥き出しになり、そんな床や天井も深々とえぐれ、そんな周りには破壊された様々な破片が四散し…あちこちで火災が発生…その炎と煙であちこちに設置してある火災報知器が鳴り響き、スプリンクラーが作動し…その降注ぐ水が爆発に出来た高熱で周りに水蒸気が立ち込める!!

正に、市街地での戦場みたいな有様なのである!!

そんな戦場と化した踊り場の広場に一人佇む人物のシルエットが…

「ククククク……アハハハハッ!!」

そんな、凄まじい惨状を造り上げてしまった、一人の少年…そんな彼は、先程の数個の重力子爆弾で相対するマリオンを吹き飛ばし、その自分自身の有余る力におごり高ぶり、可哀想にも理性を失い能力を暴走する寸前なのである!!

しかし、そんな彼なのだが、力を行使すればそれよりも上の力にねじ伏せられる事態になる事を知らないのである、

「力だ……やったぞ！！遂に…遂にここまでの力を手に入れ……！？……」

「おっ！！……おまえっ！！まだっ！！」

「ふふ…あなた…魔術でも無いのに瞬間的に金属か何かを原子事暴走、空間事、無理矢理収縮…加速させ、その反発した力で一瞬に周りを巻き込みながら破裂…」

「でもまぁ、能力者でもここまでの原理の式を瞬時に行うとは…いや、あなた方科学側から言えば”演算”かなっ？？」

「おっ！！おまえっ！？能力者かっ？？しかもおまえの周りに浮かぶ変な模様……何者だ？？しかもＬＥＶＥＬはっ！？」

しかし、その先程の凄まじい連続爆発に、素早く式を完成させ対応、いとも簡単に防御結界を張り巡らし防いだ彼女に、目を見開いて驚く初矢！！

「あなたっ…今のあなたは、とても悪しき精霊…いや、悪霊達に支配されつつある危険な状態ですっ！！だから…」

「ええいっ！！うるさいうるさいうるさいっ！！黙れっ！！俺は…せっかく、手に入れたこの力で今まで俺を踏み躙った奴等と無能

な風紀委員（ジャッジメント）に復讐すると!!」

そんな、彼の思考を何らかの魔力で読取り、その可哀想な彼に救いの手をさしのべようとするマリオン、

しかし、時既に遅く、そんな彼の思考は総てを恨み、妬み、その彼女までも再び殺そうと、演算を開始!!

そんな様子の彼に気付き、再び警戒し防御結界の術式を開始するマリオンだが??

えっ??な…なにこの感覚……今の彼の能力なんかじゃ無いよっ…もっと……その他に彼の意志のその奥に渦を巻く…あの黒々とした邪悪な塊はなにっ!?

「や…やばっ!!考えすぎて術式が間に合わ??」

次の瞬間!!グワンッ!!と、この非常階段のあるホール事揺さ振る爆発が!!

そんな凄まじい破壊力で踊り場の下で身がわえるマリオンをも巻き込みながらその壁や天井を完全に突き破り!!そこにあった総て

を焼き尽くし！！

その半壊した踊り場から総て崩壊した真下を眺め…そんな様子を、まるで狂った悪魔のように微笑む初矢

「ククク……思い知ったか！！これで、うざい邪魔者を排除し…無能な風紀委員（ジャッジメント）や俺を踏み躙った奴等を全部纏めて吹き飛ばっ！？」

踊り場から下を覗き彼にとって厄介なマリオンを木っ端微塵に吹き飛ばし？？、その惨状を眺めつつ嘲笑う彼…しかし、そんな彼の背後にいつの間にか、回り込んだ人物に逆に蹴り飛ばされその破壊した瓦礫の山に身体事突っ込み！！

「ぐえっ！？いったい何がっ！？」

「はぁ～いっ♪惜しかったわねぇ～…爆弾魔さんっ！！」

「なっ！！おまえはっ！？」

「しかもまぁ～…そのさっきの爆発と言い威力はたいした物よねぇ～♪♪
でもざぁーんねんっ！！アンタのお目当ての彼女は…ほらっ！！」

◆◇◆◇◆◇◆……

一方その頃、そんな破壊された踊り場の下の階の洋服店街なの非常階段付近では??

――――…あっ、わたし……――さっき…

「よっ♪何とか危機一髪って所だなっ!!」

「うえっ!?…かっ…上条さん??」

その先程の凄まじい爆風とかを危機一髪彼女の目の前に現れその右手で防いだ当麻…そんな彼と??

「俺達も居るぜよっ♪♪」

「つっ土御門さんっ!?」

そんな突如目の前にまるで、彼女のピンチを狙って登場したヒーローみたいな彼等に、なにやら安心したのかそっと胸を撫で下ろす彼女、

しかし、そんな様子の彼女は…いつの間にか、地面じゃ無く、宙に浮いてるような違和感を感じ??

えっ??でもたしか、さっき土御門さん…俺も…じゃ無く、”俺達も”!?って言っていたわよねぇ〜…

たしか、今私の目の前の上条さんと、その彼の隣側の土御門さん……って!?

誰か足りないよーな??……

「って!?」

「よっ♪マリオンちゃん漸く気づいたんか??」

「わっ！？…わわわ……み…みみ光雄っ！？一体私に…なっ！？何をっ！？」

「んっ！？お嬢様だっこだけど、それにしてもマリオン…おまえ、ちと重？？」

バキッ！！「ぶろぉっ！？」

「こっ…このバカ光雄っ！！今頃来やがったと思ったらっ！！この私が重いですってっ！？」

「へっ？？だから…素直に重　！？」

「まだ言うかぁぁ――――っ！！」

「うひっ！？…おまっ！！せっかくヒロインのピンチに駆け付けてやった主人公に対しこの仕打ちっ……げっ！？」

「あっ…あの～…マリオン様？？そ…そそれは一体？？」

「んっ！？魔方陣だけどっ♪♪」

「ひっ！？……」

とまぁ～、主人公らしく、大ピンチのマリオンを格好よく救った光雄なのだが？？

やはり、その身体に秘められた？？ギャグ要素満載な彼は、またもやマリオンにゲシゲシどつかれ初め？？…（笑）

最期になにやら留めを食らう始末で！？（爆♪）……ていうか、彼女も彼女だと思うのだが…（汗）

◆◇◆◇◆◇……

一方、そんなギャグ？？じゃなかったｗｗ

そんな真下の様子を踊り場から除く初矢…そんなワナワナと内震える彼を向側に佇む美琴はゆっくりと口を開き？？

「ねっ♪言ったでしょ？？だから無駄な抵抗は辞めて大人しく……って！？」

「ふふふ……あっははは！！ふざけるなっ！！僕のっ！！僕の最大出力だったはずっ！！」

「おまえ達が…おまえがいけないんだよっ！！いつもそうだっ！！力を持てば又もっと強い力でねじ伏せられるっ！！」

「ふふふ……おまえを…おまえを殺してやるっ！！」

そんな、とうとう暴走しだした彼は、目の前に佇む美琴に対し、有りったけのアルミニウムをばらまきこの場所もろとも破壊しようと！！

次の瞬間！！

グワァッ！！と、凄まじい閃光と共にそんなばらまいたアルミニウムを総て粉砕しつつそんな彼の真後ろで建物を揺さ振る地響きと共に連続して起こる爆発が！！

そんな彼女の一撃の恐怖にその場に尻餅をつく彼……

「れっ！？超電磁砲（レールガン）っ！？……そ…そんな…」

「ははっ…Ｌｅｖｅｌ５の超電磁砲（レールガン）…今度は常盤台のエース様か、」

そんな、相手が悪すぎるのか、地面に尻餅をつきながらその彼の前にゆっくり歩み寄る彼女に対し、逆に震えだし後退りする初矢、

「知ってる？」

「えっ？？」

と、そんな彼に対し、以外にもそっと優しく口を開く美琴…

「常盤台中学の超電磁砲（レールガン）は元々はたんなる低能力者（Ｌｅｖｅｌ１）だった…」

「それでもそいつは頑張って頑張って頑張ってっ！！
超能力者（Ｌｅｖｅｌ５）と呼ばれる力を掴（つか）んだのよ！！」

「……」

「でもねっ、たとえ低能力者（Ｌｅｖｅｌ１）のままだったとしても私はアンタの前に立ち塞(ふさ)がったわよ！！」

そんな一言を告げ美琴はその場を離れ去り、そんな彼女の後ろ姿を眺めつつ未だ自力で起き上がる気力が無いのか…

そんな彼の前にいつの間にか下から上がって来たのか、マリオンや光雄達が歩み寄り、

「えっ！？おまえ等、まだ！！」

「動かないでっ！！今、あなたの身体にある悪しき者達を治癒の術式で排除しているからっ！！」

「後、光雄っ！！聖水っ！！」

「うえっ！？」

「ほぉ～らっ！！あなたが持ってるそれっ！！そのペットボトルっ！！」

「いや…これ只のミネラル？？」

「いいから、貸しなさいっ！！」

そんな様子を少し離れた場所から眺める美琴達なのだが？？

「ビリビリっ！！あいつ等、あんなに彼に近づいて又々奴が暴れだしたらヤバイんじゃ？？」

「あ～…大丈夫大丈夫っ…あいつにそんな気力残って無いから……にしても、マリオンさん達一体彼に何を？？」

◇◆◇◆◇◆◇◆……

と、そんな美琴達が向こう側でそんな様子を眺めている頃…その彼の周りに何とも不思議な蒼く輝く魔方陣を展開し、彼女は疲れ切った彼の背中に手を当てつつ何かを唱え初め…

その魔方陣から出る蒼く輝く光をうっすらとした眼でぼんやり眺め、初矢は、疲れ切った、今までの事を総て忘れるような、とても暖かなそんな感覚が内側からこみ上げて来るようなそんな何とも不思議な感じでいたのである…

「これでやっと落ち着いたかな??あなたもあなたなりの悩みがあるのは理解してるわ、」

「おまえっ、さっきから僕にこれをやりたくて??それなのに、僕は、こんな自分自身の……うぅ…」

「そう、その気持ち…人を思いやる大切な気持ち、この感覚を忘れなければ、きっとあなたは大丈夫よっ!!」

「あと、さっき御坂さんに怒られ、改善したと思うけど…原点にもう一度戻って、一から努力してみなさいなっ!!あなたにはこんなに素質があるんだからねっ♪♪」

「……おまえっいい奴だな…あ…ありがとう…」

そんな、彼にニッコリ微笑み返すマリオンであった

そして、その後駆け付けた警備員達(アンチスキル)に彼は確保され、連れて行かれたのだが…その時の彼の表情は、悲惨な物じゃ無く、とても爽やかに、あたかも、何もかも吹っ切れたみたいな表情だったのである!!

最期にそんな彼は、ふと何となく、空を見つめながら何かを思い出していた……

そう、そんな不思議な彼女、マリオンはひょっとしたら学園都市(ここ)の能力者達とかと違う、魔術師じゃないかと……

次回へ続くっ!?

第四十三話　メガネ野郎と魔術師と??　Ｐａｒｔ?（後書き）

いや…結局最期にゃ～…原作キャラの美琴様ご活躍で……うぅ（涙）

しかしっ!!次回こそヒロインの大魔術連発をだな??

いや…多分次回はもろ日常パートっぽいし…暫くバトル無いかも…（汗）

ま…まぁ…そんな感じで次回もお楽しみに～…（汗）

第四十四話　魔導具工房（マジカル・エンチャント）??なんじゃそりゃ!?

いやぁ～…昨日の活動報告での、明日の夜遅く投稿宣言じゃなく、

さり気なくこの時間帯に行きます宣言で??

そんな訳で、今回は、前回話しと違い日常編だが…まぁ～…ヤハリ

この二人は普通じゃない日常??みたいな!?

まぁ…そんな感じで、

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ!!

始まり始まり～♪♪

第四十四話　魔導具工房（マジカル・エンチャント）??なんじゃそりゃ!?

あのセブンスミスト大戦??から、翌日、ここ、第七学区内のとあるクレープ屋前の某銀行内に設置してあるＡＴＭ前に、妙な姿をした二人が、佇んでいるのであるが!?

そのなんとも怪しげな目立つ服装の二人、当然普通じゃなく、一人は某魔法少女ちっくな変態と??、彼の後ろ側に佇む彼女と、その彼女も彼と同じく、ヤハリ似たような、正に魔法使いチックな”コスプレ”に身を包む……て言うか実際本物だが??…（笑）

とまぁ～妙な服装な二人に流石に周りのお客様方は、そんなあからさまに目立つような彼女等にちらちらと…とても気になる御様子なのだが??

そんな視線にはもう既に慣れているようで??

……って言うか、それも別の意味で、問題のよーな…（汗）

で、妙な姿の二人はというと??一人は、なにやらそんな視線に気付いているのかそわそわと落ち着かないのである…（汗）

「あっ…あの～…マリオン様っ!?俺様に一体全体どおしろとっ!?しかも俺達こんな場所でスンゲー目立っているよーな…（汗）」

「えっ?なにっ??…何だそんな事!?私じゃ無く、別に、あなたの霊装に皆さん興味津々なんじゃないっ!?」

と、周りから突き刺すぅうな視線にとても耐えられないのか、悲惨な表情の光雄と、それに対して、逆に何ともあっけらかんと平然と、彼に答える彼女…

しかし…その光雄をこんな超恥ずかしい服装にした原因は、ズバリ彼女…マリオンなのだが…（汗）

で、只今謎の挙動不審になりつつある彼…光雄はというと??

うぅ…くそっ、せめて俺だけでも普通の学生服なら……しかし、こいつぜってーいや…どんな状況でも全然気にしない性格!?ひょっとしたら、この俺様より鈍感何か??

いやっ!!まてよ??もしかして!?今まで気付かなかったが…

あいつ……

天然かっ！？そうなんかっ！？いやっ！！ぜってーそうに違いないっ！！

しかしいくら天然でも？？……って！？

「ねえ……」

えっ？？な…なんだなんだ？？なんでそんなじと眼で？？

「ねえっ！！光雄っ！！聞いてる！？」

って！？やべっ！！……又々俺、意味もねー事を考え？？

「ははっ……ごめんっ…な…なに？？」

「だからぁ～…さっきから聞いてんのにっ！！」

「ああっ！！すまんっ…ちと考え事を……」

「ったくもぉ～…そんな事よか光雄っ！！…今までなんでしらばっくれてたのよっ！！」

「えっ？？なにっ！？さっきから全然話しの先が読めないんだが…（汗）」

とまぁ～、思考停止中の彼にいきなり膨れだす彼女なのだが、そんな状況が掴めずキョトンとする光雄に対して、
あからさまに只今二人が見つめるＡＴＭの液晶画面に指を差し、目を輝かせるマリオン、

「ほらっ！！これっ！！今までのあなたの口座の金額っ！！」

「うげっ！？」

とまぁ～…マリオンに言われ、何げにそんな液晶画面を覗く光雄が見た物は、

何とも、普通の一学生が用いる金額所じゃ無く、普通の社会人でさえ死ぬまで必死に働いたとしても、ここまで溜め込むのは到底不可能に近い、正に”チート設定”？？もしくは、

あからさまな”ギャグデスカー？？”みたいな、とんでも金額がいつのまにか彼の貧乏な講座に入金してあるじゃ～ないですか！！

うはぁ～…やはり、”学園都市”（ここ）の決まりっつーか、お約束っつーか、いくら俺がＬｅｖｅｌ５？？でも、ここの街ってｗｗ……こんなに有りすぎは流石にヤバイっつーのっ！！

「で？？別に俺はいつもどおりに執拗（しつよう）最低限しか下ろさんけど…所で、これ…マリオンはどーしろと？？」

そんな、なにやら呆れ果てた様子の光雄に対し、さっきから、なにやら目をキラキラと輝かせているお隣のマリオン様はというと？？

「うんっ♪もっちろんっ！！」

「うげっ！！、やっぱりｗｗ…」

とまぁ～…ヤハリ彼の嫌な予感は見事的中し、かなりニコニコ顔の別な意味で不気味極まりない表情であるのだが…（汗）　しかも…こいつ、目がマジだしｗｗ…

そして、なにやらかなり怪しげな彼女はと言うと??

「ねぇ～…光雄っ…これを使ってさぁ～…」

「ギクッ!?……えっ!?」

「だからぁ～…これで、私の…いや…私達の…」

「魔道具工房(マジカル・エンチャント)やらないっ!?」

「うげげっ!?…やっぱり……(汗)」

とまぁ～…なにやら、そんな彼、光雄の給付金を使い、善からぬ企みをしだす怪しげなマリオンなのであった…(汗)

というのもそんな事態に陥る事になってしまった事の発端は??

今朝、突然に起きた!!

◇◆◇◆◇◆◇……

今から遡る事数時間前??昨日の大惨事から、未だ疲れているのか、そんな彼…光雄は自分のベットと言うオアシスに身体をたくし、幸せそうに爆睡していた、

そんな彼は又々いつもの如く、朝日はとっくに上がり、午前中の日差しが降注ぎ始めた時間帯にも関わらず、未だ夏休み中という事もあるのか、のんびりと
、睡眠中なのである、

そんな中マリオンとオリアナは??いつものように早起き、寝巻きから普段の霊装に着替え、

そして顔を洗い、オリアナはリビングでＴＶを観ながら毎朝のコーヒーを飲み、今日の仕事みたいな??そんな任務の打合せを電話し、

一方、マリオンは??いつもの如く、冷蔵庫の食材を漁り、朝食の準備をするのだが、冷蔵庫の中身を眺めながら、又もやなにやら困り果てている様子なのである、

うわっ…そう言えば、昨日のあの騒ぎで食材買って来るの忘れて

たっ！！、

まぁ～…ヤッパこの時間帯なら、既にスーパーも開いてるかな？？

あ～あ…前から思ってたんだけど、光雄(あいつ)…何でいつもいつも執拗(しつよう)最低限しか買って来ないんかなぁ～…そのお陰で、私まで食材とか買いに行くはめになるしっ！！

おかげで私がトルコから持ってきた軍資金はもう既に底を突き、……あっ！！でもそれは私の魔法アイテムとか買いすぎたからか～♪…えへへ…

でも、あいつったらどんな時でも頭ごなしに…やれ勿体ないだの、これ以上は無理だの…その度にいちいち財布の中身を覗く貧乏くさいクセとか……

もぅっ！！絶対エクスマスさんが言ったようにあいつの給付金だっけか？？いっぱいいっぱいお金入っているはずなのにっ！！

あんのクソ貧乏性野郎がぁ！！…ヤッパ、あいつ……学園都市(ここ)に来る前はきっと、スンゲー超が付くほど貧乏だったんだわっ！！いやっ！！絶対そうだわ！！間違いないっ！！……だっていつもあいつ……

「ん～っ!?俺がどおしたって??」

「へっ!?」

「えっ??」

「わわっ!!……み…みみ光雄っ!!あなたいつのまに起きて来たのよっ!!」

そんな、なにやらキッチンに佇んだまま謎の思考中の彼女……と言うか最近なにやら主人公の妄想病が移って来たよーな…（汗）

光雄は、只今そのマリオンに突然話しかけ、かなり驚いたのか、一瞬ビクつきながら、後退りし、何かに足をひっかけたのか、その勢いで見事にドガシャンッ!!とすっ転ぶマリオン??…（笑）

その只ならぬ様子にさすがのオリアナもそんな彼女を心配そうにリビングから顔を出し覗くのであるが…

◇◆◇◆◇◆◇……

す…数分後…（汗）

「あらあら…それで??軍資金が無くて、食材もねぇ～…」

「まぁ～…光雄君一人ならまだしも私達は勝手に坊やの寮に居候組だし、だったら、私のお金とか使って…」

「えっ??ちょっと待ったっ!!……オリアナさんっ、べ…別にそこまでしなくても俺なりに考えて節約して使っていますし、だからっ!!大丈夫ですって!!」

「あらら……でも困った時は、いつでも言って頂戴ねっ♪でも坊やは可愛いから、お姉さん…なんだったらその他も色々とサービスしてあげても良いんだけどねぇ～…」

「ひっ??ひゃいっ!?……」

「ちょっとぉ～っ！！オリアナっ！！ダメだからねっ！！」

「あらら～…冗談よっ♪」

えっ？？ええっ！？オリアナさんっ！？……しかも一瞬目がマジになったよ～な……（汗）

これって！？いや……危ない危ない……危うくこの紳士たる俺様も、色仕掛け魔女の餌食になる所……って！？

ヤバッ！！

「ねぇ～…光雄っ！？さっきからさぁ～…なぁーんで鼻の下伸ばしきってんのかなぁ～…」

「あはっ！？……いいやぁ～…まっ、マリオン様っ？？これはですねっ？？健康の為に普段から顔面体操を？？……いぎぎっ！！」

「ぐえぇっ！！くひ！！くひひゃはらほふはひひふはふははは！？……」

（注：無理っ！！無理だからこんなに引っ張ったらと言ってる…（汗））

◆◇◆◇◆◇……

更に数分後!?

「ぶはぁっ!!……うぐぐ…顔面全体がジンジンする…」

「ふんっ!!」

「ププッ♪アハハハハ♪光雄君その顔っ!!」

うぐぐっ!?お…オリアナさんがあんな吹き出して笑うとはっ!?…（汗）

ハァ～…まぁ…それはそれでめずらしいんだけど、いくらなんでも……うぅ…（涙）

と、なにやらスケベ顔の光雄にかなりムカついたらしく彼女はそんな彼の頭の上??に馬乗り&顔面やら髪の毛やら力任せに無理矢理引っ張られ、まるで”ダンスマン?”の如く謎のアフロヘアーと化してしまい、

そのなんともまぁ～…間抜け面の彼の様子に、とうとう我慢出来ずに吹き出し、大爆笑なオリアナなのであるが??……まぁ…別の意味でそんな彼女は新鮮のような…

そんないつもの如くアホな感じの彼等なのだが、何とか落ち着いたらしく、リビングには光雄とマリオンが座り、オリアナは、リビングの隣輪の部屋で仕事に出かける支度をするのであるが、

「ねぇ～…オリアナ～っ…今回も遅くなるの??」

と、そのリビングの保々中央に設置してある机に足を入れつつ伸ばしながら彼女の後ろ側の部屋で支度するオリアナに質問するのであるが、そんな質問にオリアナは意外な答えが…??

「う～ん…今回の依頼はちょっと厄介な依頼でね…」

「学舎の園から学園都市を抜け空港まである魔導具の搬送かな?」

「えっ??えんちゃ……何すか??それ…」

「えええっ!?そんな事も知らないのっ??流石バカ光雄ねっ!!」

「うぅ――――っ!!バカとは何だバカとはっ!!昨日から人の事をバカバカって御坂さんと言い??……」

「うげっ!!しまっ!?」

「へ～えっ??ねぇ～…光雄～っ、昨日私がストーカー変態やメガネ野郎に散々な目に合っているのに、アンタは又もや御坂さんと??…」

「いっ!?いや～ぁ…そ、そそそんな事無いぞっ!?現にあん時だって御坂さんと一緒に助けに来た……て……うごごっ!?」

「こ……こんのぉぉ――――――っ!!」

「あらあら、又々…ほんっとに二人共仲良しなのは分かるが、あん

ま喧嘩しちゃうとお姉さん嫉妬しちゃうぞっ！！」

「「……ほえっ！？……」」

そんな事を言いつつせっせと支度して出かけるオリアナなのであるが、

◇◆◇◆◇◆◇……

「ほらほらっ！！光雄っ、私達も出かけるわよっ！！」

「ふえっ？？…って一体何処へっ？？」

「っとにもぅ～っ！！夕飯とか一体どおするのよっ！！冷蔵庫の中身空っぽだし、だからっ、食材もかねて、軍資金下ろしにっ！！」

うぇっ！？又々俺の金か？？俺のもう幾らもない金を下ろすんかっ！？

うぐぐ……こっ…このままではマジで俺様がバイトするハメになるな…多分……いやっ！！、絶対に……とほほ……

「ほらっ！！ぐずぐずしないで支度するっ！！」

「ハァ～っ…はいはいっ、分かりましたよ、マリオン姫っ！！」

そして、そんな彼の軍資金がスンゲー事態に陥っている事も知らずに二人は、出かけるのである……そしてっ！！…そんな二人はっ！？

てな訳で、次回へ続くっ！！

第四十四話　魔導具工房（マジカル・エンチャント）??なんじゃそりゃ!?

アハハハッ♪

まったく…この奇妙な学生寮の仲間たちはｗｗ…

次回もこんな感じでグダグタパートが続くっつー訳でっ!?
と言うか、何やら又々原作キャラを巻き込んでてんやわんやの予感がっ!?例えば、お絞りもった奴??……やばっ!!ネタがっ!?
いやいや……（汗）

そんな訳でっ!!

次回もお楽しみに～♪♪

第四十五話　魔導工房（マジカル・エンチャント）？？なんじゃそりゃ？？――

ふふふ……いやいや…

今回も前回に引き続き日常編っつー訳でぐだぐだ話しなのだが？？

まぁ～…今回のテーマはズバリっ！！お絞りと魔女っ！？

そんな感じで、

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～♪♪

第四十五話　魔導工房（マジカル・エンチャント）？？なんじゃそりゃ？？――

光雄等が、とある銀行で、”アホ”みたいな事になっている頃、ここは同じく第七学区内、学舎屋の園、その一番恥の、一番レトロな街並み…その街並みが続く煉瓦（レンガ）がちりばめられた街路樹が続く道を、数人の人物が、とある目的地に向かっていた…

その人物とは？？

「いやぁ～…、天草式十字凄教内でも到底不可能な、この魔導具（エンチャント）を加工出来る凄腕の輩が居るとねぇ～…誠に、不甲斐ないがその申し入れ…有り難く頂戴したいのだが、ここ以外は無いのかな～ねぇ～五和…」

「ええ、でもまぁ～…その他の工房に行きたいのは山々なのですが、学園（ここ）都市では、この先にある教会しか無いみたいですし、たしか…オリアナさんと言う人物の証言ですと、エクスマス？？とか言う人物がかなりの凄腕の魔導具（エンチャント）の加工師だとか言うのですが……」

「そうなんだ…あっ！！でも五和達が持っているこれ、たしか、偽

装魔術、の海軍用船上槍（フリウリスピア）だっけか？？」

「えっ？私のこれですか？
これは、又々違いますよっ♪まぁ…これは、なっ…内緒ですっ！！」

「あははっ♪冗談…冗談ですよっ♪」

「いえいえ…でもまぁ～…その内に何処で加工したか、教えます…
…」

「あっ！！見えて来ましたっ♪♪」

そう、その彼女等も又、何かしらの理由で、ここ、エクスマスが
経営している、とある教会に向かっていたのである、

「たしか、ここですよねぇ～…」

「うわぁ～…なにここ、この学園都市に、こんな古びた教会が存在
していた何て、」

「ええっ…たしかにオリアナさんが今朝言ってたのはここで合っているとおもいますよ♪」

そんな会話をしつつ、ここ、学舎の園内の一角に佇む、古い教会の前に立ち尽くし、眺める三人、東から降り注ぐ午前中の日差しに照らされたその何とも言えないような、まるで、１６世紀初頭にタイムスリップしたかのような佇まいの、レトロな教会、

その教会の門を開け、周りに生い茂る鬱蒼と生い茂る草花をかき分けるかのように突き進み、その先にある色褪せ、古びたような扉をゆっくりと開けて、教会内へ赴く三人の彼女達…

しかしっ！！

「「「へっ？？……」」」

「――――…フォッ…フォッ…フォッ――――――おぉ～…おぉ～……これはこれは、可愛い赤頭巾ちゃん達が、来おったわい…と、”ミサカ”は…」

「「「ヒッッ！？……まっ魔女っ！？」」」

何と、そんな可愛い三人組の眼前には、

背筋はくの時になり、深々と黒いローブを羽織り、首には、様々な怪しげな飾り物を引っ掛け、正に、

アンタは某ディ〇ニー系アニメから出てきたんデスカ――!?

みたいな、怪しげな魔女が??

「ひっ??いいいっ!!……五和さんっ!?……ここ…この人がエクスマスさんなのっ??」

「はっ……は早く、あれをっ!?」

「うぅ……どっ…どど…どうぞっ!!」

しかし、そんな怪しげな魔女??みたいな奴をエクスマスとなにやら勘違いしつつ、恐る恐る近づきまずは有効的にっ!?と、震える手でお絞りを差し出す五和……ていうか、こんな状況でもお絞り

って…（汗）

「ひっ??」

「ほうほう〜…おぉ〜…そなたは、なんともまぁ〜…この老いたる老婆に…」

「そなたこそ、この地に訪れた選ばれし者ではないかっ!!と、”ミサカ”はそなたの白い手をスリスリ触りながら覚ります……」

「に??にょあああああっ??……あぅ〜…（汗）」

「「いっ!?五和ぁ――っ!?」」

とまぁ〜、その怪しい魔女??にお絞りをそそくさと渡し、なにやらそんな魔女に気に入られたのか、手を捕まれフニフニと怪しげに触られその場で冷や汗をかきつつ謎の思考停止で固まる五和達なのだが??

そんな彼女達を向こう側で発見!!更に慌てるように急接近する人物達が??

「コラッ！！フレイっ！！ダメでしょ！？又々お客さんにちょっかいだしちゃっ！！」

更に、向こう側から慌てるように来た人物に、ローブを捕まれ一気に引き剥がされるとそこには？？

「「「……へっ？？……えぇぇぇ――――っ！！」」」

「ちっ！！後一歩だったのにバレたかっ！！とミサカは、変装魔術が解けても尚も開き直りつつその場から引きます…」

と、先程の怪しげな霊装を引き剥がされ、何かしらの魔術が解けたみたいで、彼女達の目の前に佇む人物は、なんとも不思議な事に、さっきまでのシワシワな魔女じゃーぁ無く、多分、五和達と歳があまり変わらない、黒いマントを羽織るとても愛くるしい魔法少女じゃーぁないですかっ！！

その魔法少女の姿は、髪は鮮やかな青に染めているが、紛れも無く、以前この教会に救われた”ミサカ”なのである！！

◇◆◇◆◇◆……

一方、五和達が、教会で怪しげな事態に陥っている頃、光雄達御一行はというと??

「なっ…なんですってぇ～っ!!お金はちゃんと用意するのに、何でよっ!!」

「いえっ!!ですから先程言ったように……いきなり現金があるからビルのオフィスを貸せというのは少々……（汗）」

「ほほらっ…ヤッパ無理何だからねっ♪」

「光雄は黙ってっ!!」

「うぐぅ～…（涙）」

とまぁ～…彼女の良からぬ野望??を実行するべく、第七学区内

のとある不動産に赴く二人なのだが、ヤハリ予想どおりというか、そんな只の一学生にオフィスを貸すのは常識的に無謀なようで…（汗）

冷や汗をかきつつ、必死に断る営業所のおっさんにくってかかる始末なのである……

「ほらほらっ…だからさっき言ったように俺達はまだ学生なんだし、」

「うっ…うぬぬ――――…」

「ま…まぁ～先程は突然にあのような事を言ってしまい、失礼しましたっ…では……ほらっマリオンも誤って!!」

「けっ!!…このどケチ不動産めっ!!憶えてなさいよっ!!」

「ああ、君達のお役に立てずすまないですね…」

とまぁ～何とか、今にも爆発しそうな危険状態のマリオンを必死

に宥めながら、

渋々と、不動産から出て行く光雄達なのだが、そんな時に突然そのおっさんが佇むカウンターの奥の席で、先程からパソコンを叩いていた、別の営業マンが口を開き、

「あっ！！君達待ちたまえっ！！」

「「……えっ？？……」」

「失礼、君達みたいな学生はまぁ～…家じゃあ無理だがそんなにオフィスを借りたかったら、ここに相談しなさい、まぁ色々と事情がある裏側の世界にも繋がっているみたいだしねぇ…」

「は…はぁ～…」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇……

数十分後……

「ふむふむ、第二学区〇〇研究所??とか、だ…第二十三学区の…なにこれっ!!あのインチキ不動産めっ!!相談しなさいですってぇ〜っ!?」

「みぃ〜んな、全っ然!!関係無い所研究所ばっかじゃんっ!!ねぇ〜っ!!光雄っ??これどう思う??」

「いや…これはこれでかなりヤバげな場所ばっかだと思うのですが……（汗）」

うげげっ!!あの営業マン…俺達が能力者だと知ってか、こんなあからさまに怪しげな施設ばっか紹介しやがって……まぁ、一人魔術師も居るが……（汗）

なっ…なんかこれ以上この不動産関係に関わったらろくな事になる所じゃあ、下手したらオフィスを借りる相談所か、逆にとっ捕まって人体実験??人体解剖って!!

ウハァ――――ッッ!!ヤバイヤバイヤバイっておいっ!!冗談はよし子ちゃんじゃすまな??いや…マジ命が危ういから、まだまだ死にたくないからっ!!

そんなかなりマイナス思考でうだれてる光雄を無視しつつ、なにやらさり気なく携帯を取出し??
(注:昨日セブンスミストでちゃっかりカップル限定ゲットしたやつ)

ふえっ!?

ええええ――――ッッ!!コイツちゃっかりかけてるしっ!!だから言わんこっちゃ無いっつーのっ!!

「ちっ…ちちちょっと待ったぁぁ――――っ!?」

「えっ??オリアナに相談するのにかけてんだけど…なにっ??」

「えっ!?いいいやぁ~…ええ~と……」

「アハハ♪あんな意味の無い研究所なんかかけても無駄じゃないっ!!まったく光雄はバカなんだから…」

「まっ…まぁ~それならいいや……(汗)」

そんなマリオンに顔を真っ青にしながらマッタをかける光雄だが??なにやらかなり空振りのご様子で……（汗）

ハァ――――ッ！！ったく、コイツはそそっかしいと言うか……一体全体俺っ…なぁ～にをやっているんだか……不幸だ（涙）

◇◆◇◆◇◆◇◆……

更に数分後??……

なにやらいつのまに、来たのかとあるかき氷屋前に赴いた二人……そんな時ふと、さっきまでのうだるような炎天下で歩き回ったのかその他の散々な事で疲れはて、街路樹の真下のベンチで死んだようにに座っている光雄と、そのベンチの向こう側でかき氷を買うのに並んでいるマリオン……

そんな、二人はここで休憩後、先程オリアナとの電話での会話でなにやら再び学舎の園に行く事になるのだが、

只今休憩中の光雄に又もやまった無しの悲劇の元が差し迫ろうとしているのであるのだが……（汗）

その彼等の位置に接近中の未確認（アンノウン）機じゃなかったｗｗ……黒子率い美琴様部隊がっ！？……（笑）

しかし未だその恐怖の？？美琴様奇襲部隊接近にレーダーが反応して無いのか？？かなりヤバイ事態になりつつあるのだが未だ気が付かないかわいそうな彼、光雄…（汗）

そして、そんな今から訪れるであろう混乱（カオス）をまったく予想もせずに、のんびりとかき氷を買うのに並ぶマリオン……

はたしてそんな二人の運命はいかにっ！？みたいな…（汗）

次回へ続くっ！！

第四十五話　魔導工房（マジカル・エンチャント）??なんじゃそりゃ??――

いやいや…かなり意味のね～感じで……ははｗｗ

次回も日常編その三っつー事で??……というか一体いつまで続くんだこの意味のね～パートはっ!!

まっ…まぁ～……次回から原作キャラも含めすんげー展開の予感（ギャグ的な??）っつー事で??

次回もお楽しみに～♪♪

第四十六話　意味のねー自信過剰はヤバイ事になるよっ♪♪（前書き）

いやいや…又もや怪しげな展開になりつつあるこの意味のね～パート…（笑）

今回のテーマはズバリっ！！
自信過剰なアホな奴？？かなっ！？

てな感じで

光学の超高密度収縮粒子砲始まり始まり～♪♪

第四十六話　意味のねー自信過剰はヤバイ事になるよっ♪♪

ここは、未だ第七学区内の、国道沿い、そこにある、とあるかき氷屋前の街路樹が下に設置してあるベンチには、両足を伸ばし体全体をダラリと、重力に負けたようにヘタってる、まさに人生に疲れはて、なにもかも投げ出したようなサラリーマンみたいな彼、葛城光雄と、そんな彼が何げに見つめるその先には、

なにやらソワソワとかき氷屋の前に佇む、その彼と正反対に元気よくその屋台内に設置してあるメニューを目を輝かせ選ぶ魔法少女こと、マリオン・オヴ・シュペー…
そんな二人なのだが、その彼女達を何やら見つけ急接近する数名の人物がいるのである…

うぅ～ん…どうしようかな…とりあえず定番のイチゴやらメロンもあるが……

うげっ！！　しっかし、この人気商品がヤシの実サイダー味って……エエッ！！いやいや……ヤシの実サイダーだけならまだしも、普通のイチゴ味もあるけど……でも……かき氷にまでイチゴおでんって……（汗）

うぇっ!?ちょっとこれっ!!その隣側っ!!しかもこれ……す…スープカレー味っ!?なにこれっ!!もしかして氷に熱いカレーぶっかけるんかっ!?そうなんかっ!!んなもん食う奴が居るんかっ!?

あ……あはは…（汗）……わたし……ううんっ!!まぁ～それはそれっ!!これはこれっ!!早く決めなくちゃねっ♪

あ!!……そうだっ♪光雄にはぁ～…このいかがわしい味の実験台に……ふふ……

とまぁ～…そんなこんなでかなり怪しげな善からぬ事を企みだした様子の彼女なのだが??

「うぉ～いっ!!まだ選んでるんかっ!?何でも良いから早くしてくれ～…こっちは暑くて死にそうなんだが」

「ち…ちょっとぉ～っ!!そんなに急かさないでよ～っ!!っとにもぅ～…少しはデリカシーってもん無いのかしらあいつは……」

と、なにやらその彼女の佇む後ろ側で死んでる光雄は、このうだるような暑さで既に限界なのか、そんなのんびりメニューを選ぶ彼女に早くしろっ!!と催促っ!!しかし、未だどれにするかかなり

悩むマリオンなのだが、そんな彼女の背後にはいつの間にか数名の人物が!?

「あらあら、まぁ～又々お会いしましたねっ、マリオンさんっ♪」

「おっすっ!!マリオンさんっ!!」

「ちゃあ～っすっ!!あれれぇ～っ!?マリオンさんっ!!いつもベッタリのあの変態は??」

「えっ!?さ…佐天さんに??御坂さんっ!?」

とまぁ～…只今メニューを眺めているマリオンに歩み寄る涙子達、そんな涙子に光雄の事を聞かれ、何げに只今光雄が座っているベンチの方角を振り向くと??

「「「へっ??」」」

「……あれっ!?、光雄っ!?」

とまぁ～…なにを悟ったのか、さっき迄居たはずの彼は忽然と姿を消し、えっ!?どこにっ??みたいな…慌てたように周りをキョ

ロキョロと見渡す彼女、

「あ……あの～誰も居ないんですけど……って??マリオンさんっ??」

「えっ!?エェェ――――ッッ!?」

と、なにやら又々光雄にいつの間にやら逃げられたみたいで謎の雄叫びをするマリオンに、涙子達はそんな彼女にやれやれ…とまぁ～同情する始末、

しかし!?

「へっ??……ちょ!?マリオンさんっ??」

「うぅ～…ぬぬぬ……一度やならず二度までも……」

「こんのクソバカ光雄めぇ――――っ!!もぅ――っ!!何処行ったぁぁ――――っ!!」

「ううわｗｗ……」

「ちょっ！？マリオンさんっ落ち着いて下さいましっ！！」

「佐天さんっっ！！お願いっ！！あのバカ光雄を探し出し、”ぶっとばす”の協力して欲しいんだけどっ！！」

とまぁ～…一体何にスイッチが入ったのやら！？、ワナワナと震えながら目の前の涙子達にすんげーけんまくで迫る彼女なのであるが？？

「えっ！？……い、いやぁ～ええ～っと（汗）」

「まったくそんな取り乱して…マリオンさんっ…いいですのっ！？まぁ、焦る気持ちもわかりますが、少々し落ち着いて考えたほうがよろしくてよ…」

「し…白井さんっ！？…ううぅ～…たしかにそうなんだけど、でもあいつが……」

しかし、一端取り乱した彼女を何とか冷静にさせようと説得しつ

つ指摘する黒子なのだが、そんな彼女を向側で眺めつつ、さり気なく近づく美琴…

その美琴はというと??

「へ～えっ!?何か面白そうじゃないっ!?マリオンさん、私は別にいいわよっ!!」

と、何げに彼女を後押し（プッシュ）する形に!?

……と言うか、只でさえ爆発寸前のマリオンに起爆剤を放り込むよーな…更にかなり混乱（カオス）になる予感が??

「ちょっ!?お姉様っ!?」

「あちゃ～…いやいやｗｗ…」

てな感じで、先程いつの間に彼女の前から忽然と姿を消した光雄を追撃せんと張り切るマリオン、そのマリオンに何故か怪しげなスイッチが入ってしまった美琴様（笑）……しかしその他のメンバーはと言うと??

「ああ～…又もやお姉様は……（汗）」

「あはははｗｗ…って言うか、マリオンさんと御坂さんって似た者同士だったりして…（汗）」

とまぁ～…かなり深々とため息をしつつ、そんな謎のヒートアップ中の二人に渋々と付いて行くのである……

◆◇◆◇◆◇◆……

数分後、

一方その頃かき氷屋ですんげ――事態になりつつある事をまったく知らず、余裕で逃げて来た彼、光雄はというと??

ウッハァ～…

ふぅ～…危ねぇ危ねぇっと…（汗）

しっかし昨日の悲劇だけならまだしも、
何で又もやあいつ等に出くわすんかな～

もしかして、あれかっ!?あれなんかっ!?ヤッパこの俺様はそういうオチなんかっ!?こんなしょーもないパターンで……

いや!!

しかぁーしっ!!今までこんなベタな展開でも何回も経験積めばだなぁ～流石の俺様でも、ちっとはましになるのだっ!!

ふっ……まぁ今日の俺様はだなぁ～、この雰囲気っつーか奴等の気配をいち早く感じ取りっ!!先を読み～…ふっふっふ……

そう今日の彼はなにやらいつもと違うみたいで??、美琴等がマリオンに接触した瞬間に??、いち早く身の危険をビビッと感じ、その場の状況の冷静な判断と迅速な行動っ!?……っつーか単なる野生の防衛本能の勘が冴えるだけのよーな（汗）

更に、まるで某映画のスパイの如く??彼女等に悟られず鮮やかに逃亡し、大成功の彼であるのだが!?……と言うか、完璧にマリオンを見捨て、生け贄にしてるよーな…（爆♪）

しかし、そんなスパイ紛いな彼よか、ギャグ的要素満載の彼の能

力の方が勝っていたようで!?（笑）
その彼は、なにやら勝利に酔い痴れているのか、謎の妄想中なのである!!

ふっふっふ……
完璧だ……今回の俺様は完璧すぎるっ!!

「……――ふっ……認めたく無いも○だな…自分自身の、○さ酔えの過ちというものを……――」（注：某アニメの赤い誰かのセリフを言う超恥ずかしー奴…（汗））

「まぁ…可哀想だが…マリオンっ!!貴様の死は無駄では無…い…ぞえ♪……」

ふふんっ!!決まったな♪♪

そう……そんなバカ??…もといっ!!そんな彼はそのまま逃亡すれば完璧であったのだが、しかし世の中には偶然と言う言葉が存在するように、彼はある”重大”なミスを犯してしまうっ!!
過去に起きた様々な経験を武器に何故か完璧に逃げ切ったはずの彼なのだが、その場に置き去りにしてしまった彼女、

様々な精霊を操る魔術師である彼女”マリオン・オヴ・シュペー”を、

そんな小さなミスが彼の運命を左右することになるとは、正に己の自信過剰?!自意識増加!?

そのマリオンを置き去り&逆に彼女に狙われる恐ろし～い事態になるとは未だ知らないのであるっ!?…(爆♪)

◇◆◇◆◇◆……

一方その頃
魔法少女マリオン率いる御一行様はというと??

「ねぇ～…ねぇ～…マリオンさんこれは?? 一体何してんの??」

「えっ??まぁ～…ちょっと光雄が現在何処へいるのか、おまじないかな??」

と、なにやらいつの間にやら小さな魔導書を何処からともなく取り出し、その魔導書を開きつつ片手に、ポケットから取り出した数個の石…そんな石を只今地面に描いた魔方陣のあちこちの角に設置している最中なのである、

ええっと、こんな感じかなっ！？後は彼の魔力がどれ程か分からないが、土御門さんの『理派四陣』にはかなり劣るけど、この魔術で調べれば……でも初めてだから大丈夫…かな？？
でもまぁ～マニュアル通りにすれば大丈夫だってオリアナも言ってたしっ！！一か八か使うまでっ！！

そんな事を考えつつ術式の準備を着々と進めるマリオン、その彼女を取り囲むようにマジマジと見入る美琴達、

そして総てが整ったのか、すっと立ち上がりつつ、その地面に描いた魔方陣に杖をかざしつつ隣側に佇む涙子に、

「ちょっと、佐天さんっ、お願いがあるんだけど今から私の魔？？…いや、」

「能力で彼が居る付近の場所をこの絵の中に映し出すから私の携帯…これのたしか…え～と…」

「ＧＰＳ機能ですか??」

「あっ!!そうそう、それを使って何処の場所へ移動したか調べて欲しいんだけどっ」

「うぇっ!?、ああ、了解了解っ!!ＧＰＳですよねっ、」

そんな感じで杖を地面に描いた魔方陣に向け、目を閉じ何かを唱え始める彼女……

「…――我が最愛なる水を司る精霊達よ、この地に降りし大地のマナとの契約
を元に――――……」

そう、今彼女は、自身の精霊達を使い、自然界のマナに語りかけるように式を組み上げて行く……ありとあらゆる精霊達と対話しな

がら……

そんな彼女と涙子の後ろ姿を眺める黒子達、

「ねえ……黒子？？あの子、マリオンさん何だけどさぁ～…たしか以前魔法使いとかなんとか言ってたわよねぇ～…これって、ヤッパ」

「ええっ！？又々そんな事真に受けてお姉様ったら、いいですのっ！？あれは、以前土御門さんや類人？？…いや上条さんが言ってましたでしょっ！？」

「マリオンさんが魔法使いなのは全部嘘だって！！」

「でもさぁ～…なぁ～んか引っ掛かるのよねぇ～…あん時、たしかトルコでの……」

「又々お姉様ったら！！いいですのっ！？トルコでのあれは科学兵器で、彼女は能力者ですのっ！！それともぉ～？？上条さん達が嘘を言っていたとか？？」

「うぅ～…でもさぁ～…」

「またまたぁ～…そんな魔法とかメルヘンチックな……いいですのっ？？彼女の能力は原石とか書籍（バンク）にも書いてありましたように……」

「ちょっ……とごめんっ！！黒子さんと御坂さんっ…悪いんだけどさぁ～…彼女…気が散るから…」

とまぁ～なにやらマリオンの能力について二人して口論、更にかなりヒートアップしてたみたいで、そんな二人の前方に佇む涙子に指摘され黙り込む二人なのだが？？

「「……へっ？？」」

「あ～ごめんごめんっ！！どうぞ続けてっ♪」

しかし、そんな事を言いつつも美琴は未だその彼女の事で何か引っ掛かっていたのである、

なによなによっ皆してマリオン、マリオンって…確かにあの子、葛城と同じく不思議な能力を使用するのよね～…でも、

それにしてもあの子、昨日もそうだけど、幾ら原石だとしてもあ

の重力子（グラビトン）をいとも簡単に防いでしまう能力といい…

もし彼女が身体検査（システムスキャン）受けたらＬｅｖｅｌ、幾つ位になるのかしら……いや、その前に一度手合わせ♪♪……ううんっ！！いけない、いけないっ！！ついついいつもの癖で……だったら今度あの子、マリオンさんに直接聞いてみようかしら……？？

と、そんな事を考えてる間、いつの間にやらその噂の彼女、マリオンは、術式を完成！！

皆が見守る中、只今地面に描いた魔方陣越しに上空から眺めた光雄が居るであろうとある公園が映し出されているじゃ～ありませんかっ！！

「佐天さんっ、ここは？？」

「ええっと、出た出たっ！！たしか…ここからそう遠くじゃないかなっ！！」

ふふっ…見付けたわ光雄っ！！この私を見捨て、勝手に逃げた覚悟はきっちり払ってもらうわよっ♪

とまぁ～…かなりニンマリと、可愛らしく??不適な笑顔の彼女、

「さあっ!!場所は特定出来たし…行くわよっ!!」

とまぁ～遂に光雄が逃亡し…只今身を隠しているであろう場所を特定……早速そんな彼を追跡しようと動き出すマリオン率いる軍団っ!!果たして、彼、光雄の運命はいかにっ!?

てなかんじで、又々無理やりだが??…

次回へ続くっ!!

第四十六話　意味のねー自信過剰はヤバイ事になるよっ♪♪（後書き）

てな訳で、かなり怪しげな展開になりつつあるのだが??

次回、まさかの主役ＶＳヒロイン的な能力バトルに発展するよ～な…（汗）

はたしてっ!?みたいな??

次回もお楽しみに～♪♪

第四十七話　再び!?魔導具工房（マジカル・エンチャント）??なんじゃそりゃ

いやいや…前々回から続くこの意味のねー日常パート編も残す所数話という訳でっ!?

いやいや…（汗）

そんな感じで今回のテーマはズバリっ!!光雄ＶＳマリオン夢の対決!?なんか??

てな訳でっ!!

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ!!

始まり始まり～♪♪

第四十七話　再び！？魔導具工房（マジカル・エンチャント）？？なんじゃそりゃ

――――――…俺は――――…

――――俺は、石だ――――…

只何も言わず動かず、

自然と一体になり……

此方へゆっくりと近づく敵兵数人、覚られず、

只そっとライフルを構え……

そう、俺は今、じっと…身を潜め、敵に覚られず、

じっと――……深く……深く……もっと――――――……

って!?

ちがうちがうっ!!それは冗談だとして♪

現在わたくし事葛城光雄は、第七学区付近の最前戦??……いや、

とある公園に居るのだが、突如遥か彼方から接近中の御坂美琴を含む敵兵数名辞任!!直ちに第一種戦闘配置に付くべく迅速に行動っ!!

その公園内に設置してある自動販売機、と言う名のとおちかに背をもたれさせ、じっとまるで狙撃兵の如く、身を潜め様子を伺っているのでありますっ!!

しかし、かなり深刻な問題が我が部隊!?（注：一人だがな～ｗｗ）??に発生するので!!ありますがっ!?

そう、つい先程前に出会ってしまった!?今俺の隣側で、同じく身を潜めつつ目をキラキラ輝かせ??

「たっ、隊長殿っ!?前方より”ロリ”が数名接近やでえっ♪♪」

と??このエロ仙人事、昨日のあの大戦で美琴様に敗れ去り、見事頃焦げ??にされた筈の彼、しかし今ここに再び復活!?を遂げた……

そうっ!!彼こそはっ!!

「不死身の異能生命体、キ〇コ・キュービーだがや??」

「へっ??……あ…あの~…（汗）」

「じゃ無くてっ!!ええいっ!!黙れこの”エセ”関西人っ!!」

「ほんま、つれないな~光雄はんっ……昨日一緒にロリコンについて熱く語り合った仲やないけ~……」

「いっ!?……いいいったい何を根拠にそんな紛い事の作り話をっ!!」

「いやいや…そんな気にしたらあきまへんがな旦那っ!!どやっ!?今回のターゲットは??僕はとーぜんあの一番右側の黒髪の子やでぇ~……あの乳が又々たまらんのやｗｗ…」

そんな事を言いつつ、かなり鼻の下延ばしながら手をワキワキと嫌らしく動かす青髪っ！！

いや……もうどーでもいいからｗｗ

疲れたから、色々な意味で……（涙）

とまぁ～…そんな隣側で語る昨日知り合った、この怪しげな人物と再び”ロリ”話し復活の？？二人であるのだが、その二人にいきなり背後から迫る気配を感じ？？二人同時に冷や汗をながしつつ振り向くと！？そこにはっ！！

「ふふふ…」

「「うひっ！？」」

「おっすっ！！昨日以来だわねぇ～そこの変態君達っ！！」

「まっ！！…お隣さんの青いアンタは別にいいんだけどさぁ～……そこの黄色い変態さんっ！？葛城っ！！」

「へっ？？……お…俺かっ！？…」
うはぁ～…まさかまさかっ！？マリオンの奴……しかも御坂様が！？

なっ！？

「私の口から言う義理じゃないんだけどさぁ…そこのアンタの大切な親友マリオンさんを…」

「うげっ！？」

うわわっ！？やっぱそうかっ！！マリオンちゃんと同盟し、連合軍にぃぃっ！？

って！？御坂さん怒ってるし、しかもすんげー放電してるしって！？やばっ！！

「こんなにいじめて…アンタ覚悟は良いっ！？」

「うおっっ！？危なっっ！！」

「「……えっ？？……」」

「ちょっ！？まっ……マリオン…さん？？」

「あはは……終わったかも…俺の人生（涙）」

と、相対する光雄と美琴の間に凄まじい風圧と共に巨大な水刃が通過っ！！瞬間お互いバックステップでギリギリ回避！！

そんな風圧が過ぎ去った瞬間二人佇む遥か右側からグワンっと、公園の樹木を粉々に粉砕する水刃っ！！

「ち、ちょっとマリオンっ！！このバカは分かるけど私まで巻き込まないでくれるっ！？」

「いや…御坂さん、あの表情のマリオンちゃん…多分何を言っても無駄だと思います……がっ！？」

と、そんな事を向側で身構えてる美琴に話しかける前に、光雄に襲いかかる、サッカーボール位のデカイ水弾っ！！

「うひっ！？」

その凄まじい速さで数個円を描くかのように彼の佇む周りを数週しながら斜め前方から次々に襲いかかり賺さず能力を使いギリギリ回避っ！！

瞬間！！ドガガァッ！！と、深々と地面をえぐりながら次々に着弾っ！！

「うおっ！！マリオンっ！！おまっ！！いくらなんでもさっきの当たったら普通死ぬぞっ！？」

そんなマリオンに文句を言う光雄なのだが、向こう側に佇む美琴も只事じゃぁないと冷や汗をたらしつつ光雄やマリオン達を見つめるのだが？？

そのマリオンは何やら先程放った魔術から次の術式を再び開始したらしく彼女が佇む真上にバキバキと何か、結晶体みたいな物が形

成され……そして顔を下にむけつつ光雄に対してボソリと、何かを呟いているのだが…

「――さ――……い…」

「へっ!?……」

「又み…か…さんと……――ゆる……ない」

「なっ……マリオン…ちゃんっ!?」

「あ――もうっ!!絶対にゆるさないって言ってんでしょうがァァ――――っ!!」

瞬間彼女の真上に魔方陣が展開!!更にその蒼く美しくも輝きを増す謎の結晶体!!

更に、何かを唱え…

「――…総てを切り刻め『乱れ狂う氷刃弾（Ｉｃｅｌａｈｌ ｄｕｓｔ…）』――……」

次の瞬間彼女の頭上に展開中の魔方陣…その真下に具現化している結晶体の周りから霧が霞むみたいに冷気が漂い…

「うおっ!?マジっ!?」

「ちっ……まったくっ!!」

しかし、彼女の待った無しの大魔術『乱れ狂う氷刃弾（アイス・スラッシュ・ダスト）』が発動する直前、美琴はこのままじゃ光雄所か自分等の後方でその様子をじっと見つめている涙子達や青髪にも影響すると判断、賺さず電撃の槍でその結晶体を丸ごと粉々に粉砕!!

「えっ??何で??……」

と、瞬間的に自分の魔術が掻き消され、驚きとまどる彼女に向かいもうダッシュの光雄！！

そしてっ！！

どげしっ！！と、そんな只今キョトンと、呆然に佇む彼女に身体ごとアタックをかけ彼女におおいかぶさるように、お互いにすっ転び、

彼女、マリオンの暴走劇&光雄との怪しげな能力バトル的展開も幕を閉じるのであるっ！！

◆◇◆◇◆◇◆◇……

一方そんな頃、

「お邪魔しますっ…」

「「わああ……綺麗…」」

「あっ！！あれ、もしかして水晶～っ！？」

「ねえねえ～、五和も早くこっち来てよぉ～っ……これっ！！凄く綺麗だよっ！！」

そう、光雄やマリオン達が第七学区のあちこちで、てんやわんやっている頃、

ここは同じく第七学区の学舎の園の恥側に位置する、エクスマスが経営するとある教会では、

エクスマスがかなりの腕前の魔法関係のアイテム類の加工師との情報を元に、彼女が経営する魔導具（エンチャント）工房に天草式の面子が赴いていたのである、

その他のメンバーがエクスマスの水晶の部屋に案内されそんな中、

その部屋の外ではエクスマスに今回依頼したこの部屋の水晶を用いて、武器類に魔力を与え強化する為の、魔導具加工（マジカル・エンチャント）の説明もかねて聞き込む為に彼女を探す五和、

そう、Ｅｎｃｈａｎｔ（エンチャント）とは、

紀元前、遥か古（いにしえ）から行われて来た行為であり、

只今、天草式の彼女等が、この工房で行っているように、様々な武器や防具と言った類いの物に魔力を与え、彼女等が主に使用する魔装魔術の様に様々な装備品の能力値を上げ強化する行為でもある、

又その他としては、スティルが用いるルーンカードみたいな物も、様々な道具に魔法で出来た粉を与えるなど、特殊な魔術的効果を付与する行為の事である！！

そして、今現在、水晶の部屋にその他のメンバーがエクスマスが赴くのを待っている間、彼女を探すべく、部屋の外をうろつく五和なのだが？？

とある人物が！？

「ふっふっふｗｗ……」

「えっ！？えええっ！？！？……」

な、ななな……なにこいつっ！？さっきの魔女の姿と言い…かなり不気味極まりないんですけど……うぅ～…

と、先程からあちこち見回してもエクスマスの姿は何処へ行ったのか見当たらず、探しに赴こうとするのだが、彼女の目の前に立ちふさがる怪しげな人物っ！！

綺麗に整った青い肩までのショートヘアー、くりっとした大きな目、未だ幼さが残る可愛らしい顔の割には、先程から一体何処へ向けられたかも分からない怪しげな表情で、うふ…うふふふ……っと、

まぁ～不気味極まりない雰囲気を醸し出すミサカ……

そのあからさまに、白を主張とした霊装の上に、黒いマントを羽織り、何とも小悪魔的な？？怪しげな魔術師と化したミサカに？？、冷や汗を垂らしつつ、なにっ！？こいつっ！！新手の魔術師っ！？只者じゃ無いわっ！！

と言わんばかりに警戒する五和なのだが！？……というか、霊装以外は何の魔力も無い、只の発電能力者（エレクトロマスター）だと思うが…（汗）

うぬぅ～…やっぱこいつ不気味だわ……でも、こいつじゃなくさっきまで居たエクスマスさんに早く会いたいのですが……うぇぇ……（汗）

肝心のエクスマスさんは一体何処へっ!?……うぅ……少々不気味だが、仕方がないっ!!こいつに聞いてみよーかな……でも……何か嫌～な予感が…

ええいっ!!何を怖がっているのよ私っ!!……だ…だだ大丈夫だからねっ!!

教皇代理には劣るけど、こう見えても私だって!!天草式十字凄教の偽装魔術師なんですからっ!!

行きますっ!!

「あ……あのっ!!…私は先程此方へ参られたエクスマスさんに用があるのですがっ!!どちらへ参られたかご存知無いでしょ……う……ひぃっ!?!?」

と、意を決して勢い良く彼女に近づき質問する五和に対し、再びその彼女の両手を掴みつつ又してもフニフニフニフニ……と??

「ああうぅ～…こっ…ここまでこれ以上はぁ～ｗｗ」

とまぁ～…なにやら非常～に怪しげな展開になりつつある二人…
…というか、こいつ……よっぽど彼女の手がお気に入りに??…（汗）

と、そんな未曾のピンチ??の五和に近づく人物が??

「コラッ!!又々フレイっ!!」

「ちっ!!おまえ…命拾いをしたなっとミサカは捨てゼリフを言いつつその場を引きます……ふふ」

「……ハッ!?」
（注：又もや謎の思考停止中だった五和（笑））

◇◆◇◆◇◆◇……

数分後……

「あの～っ…本当に色々と加工して頂いて、ありがとうございます、」

「ええ…後その道具類（アイテム）とかの搬送は、私の知り合いのオリアナ・トムソンという者に空港まで届けるよう手配しましたから……」

「「本当に助かります」」

「いえ…そんなお礼なんかよりも困った時はお互い様でしょっ！？」

そして、五和達に依頼された魔導具加工（マジカル・エンチャント）も無事に終わり、この教会に向かっているであろうオリアナが到着するのを待つのだが、そんな彼女達が待つ教会に、別動隊が現れる事になろうとは、

◇◆◇◆◇◆……

一方そんな頃そのとある公園に現在集っている光雄達率いる団体さんはと言うと？？

「「す…すいません…」」

「まぁ～…大体話はわかったわ……ったくっ！！アンタが彼女を置いて勝手にどっか行くからいけないんでしょうがっ！！」

「い…いや～ね？？それには深～い訳？？」
（注：多分その御坂っ！！おまえが来るのが原因だ！！とは身の危険か言えないでいる奴？？）

「あ～はいはい、アンタの意見は却下！！」

「でっ！？アンタは私に謝るんじゃなくてマリオンさん？？ほらっ！！」

「うえっ？？…み、光雄っ！？」

「うぅ～……まっ…マリオンちゃんっ俺、いつも勝手にふらつく癖をなおすから、本当…ごめんなさい。」

「ええっ!?ちょ…光雄…ありがと…う」

とまぁ～……なにやら、光雄とマリオンが座りその後方を取り囲むように皆の衆が…そんな皆さんを取り仕切るかのように、威圧感??……もといっ!!皆さんのまとめ役の美琴先生が説教??とまぁ～……まるで時代劇ラスト数分前のような有様で??

更にその後なんだかんだで光雄達は、その他のメンバーと別れ、いよいよ、彼等の最終目的地でもある、
只今五和やエクスマスが居るであろう、学舎の園に向かうべく旅立つのであった!!

果たして、そんな二人はこの先どうなることやら、

そして、そんな二人を待ち構える怪しげなミサカはっ!?……と言うか、それはそれでなにやら又々混乱(カオス)の予感がっ!?

次回へ続くっ！！

第四十七話　再び！？魔導具工房（マジカル・エンチャント）？？なんじゃそりゃ

ハハハッ♪♪

まぁ今回もなにやらぐだぐだのような……

そしてっ！！次回はぐだぐだ所か？？なにやらとんでも混乱（カオス）な予感がっ！？……（ギャグ的な意味でっ！？）

まぁ～…そんな感じで、次回もお楽しみに～♪♪……ふふ…

第四十八話　乗り物を利用する時はちゃんと静かに乗らなくちゃいけないよっ♪

あはっ♪♪

まぁ～この日常編パート……まさかこんなに続くとはっ！？

そんな訳で、今回のテーマは？？ズバリ”変態的笑顔っ！！”かなっ！？

そんな感じでちと短いが、

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～♪♪

第四十八話　乗り物を利用する時はちゃんと静かに乗らなくちゃいけないよっ♪

ここは、先程と同じく第七学区内、その片側三車線の国道から右折専用車線でウィンカーを出しながら信号待ちの一台のバス、その車内の後部座席を陣取るように座る怪しげな二人、

そのコスプレじみたような普通じゃあない怪しげな姿の二人は当然、周りの乗客等はチラホラと横目で視線を贈りながらヒソヒソと、されるのは当たり前のようで！？

そんな皆の視線が突き刺さり、何とも痛々しい状況なのだが、窓際に座る一人は平然とそんなもんは全然気にしない御様子で、まるで子供のように、外の景色に夢中なのか、フンフン♪と、怪しげな鼻歌混じりでご機嫌な様子なのだが、

その彼女の真横に腰を下ろしているこれ又魔法少女チックな人物はと言うと？？

ぐううぅ～…なんでたかだか学舎の園に行くのにバスを利用するんかな～…

確かに、徒歩で行くよか公共路線を利用した方が早いのは分かるが、

しかし、こうあからさまに目立つ服装で、……ハハッ、もうどーでもいいから、どーせ俺様はそんなキャラだから……もう帰りたい…かも（涙）

と、隣側に座るルンルン気分な彼女と違い、かなり周りの様子が気になるのか、ソワソワと怪しげな挙動不審に陥る変態なのだが、今現在上機嫌なお隣さんマリオンのせいなのか!?朝っぱらから振り回され、散々な目にあったみたいで、相当精神的に参っているのである……（爆♪）

そんな中、バスはいつの間に停車していたのか、ゾロゾロとかなりの人数が乗車、一気に混み初め、只今光雄が座っている辺りにも人が流れて来たのだが、

「えっ!?……誰??コイツ…」

と、そんな一風変わった違和感を醸し出す二人がなにやら珍しいのかさっきから隣に佇む母親にしがみつきながらジロジロと、そんな二人をまるで珍しい動物か昆虫類を見つけじっと観察するように見つめる少女!?……と言うか、多分この年頃の子供にしてみればかなり興味深いような??

そんな、今迄に無いかなりご熱い視線を受けた彼、光雄はというと??やはり当然…（笑）

ううわ…観てる観られてる絶対!!しかも俺様の軸線上のあのロリ!?…もといっ!!あのくそガキッ!!たのむっ!!そんな視線で見ないでくれっ!!俺の……俺様の心（ハート）はそう強くないんだっ!!これ以上哀れな物見るような表情で…!?

へっ!?

今、笑ったよね…そうだよねぇ～ふふっとっ!?

いやっ!!…絶対ニヤケたてるよこいつ……って!?

うげっ!!待たしてもっ!!何とも哀れな奴を見下すみたいにっ!?……って!?

と、更にジィ――……っとまぁ～、観察され彼の挙動不審は更にヒートアップ??

そんな彼はとうとうもうこれ以上は耐えられんとばかりにモジモジ処か小刻みに??まるで、隅っこに追いやられ、バグが発生しぶるぶるぶるぶると高速でブレるゲームキャラの如く!!その異常な行動に窓際に座るマリオンも気付いたらしくその彼に向かい??

ゴチンッ☆と!?

「ギャンッ!?」

「うぐふぅ〜……」

あっという間にリセットされ、一発で回復する彼!?……（笑）

「もぅ〜光雄っ!!退屈なのは分かるけどね、あまり妙な遊びしないでくれる??」

「えっ??でも、ほらっ!!アイツが…」

と!?何かを必死に訴える彼なのだがそんなんお構い無しといわ

んばかりに、退屈で暴れだす小さな子供をしかるようにあしらう彼女……というか、光雄の扱いはかなりベテランのようで!?

「ほぉ～ら、後少しなんだから我慢してっ、あんま変な事したら周りのお客様に迷惑かかるでしょっ!?だからっ…ねっ♪」

「うぐぅ～…はいはいわかりました、わかりましたとも、もういいっす」

……って!?全然聞いてねーし、しかも又々窓際で鼻歌を……ったく、どっちが子供だよってんだ!!

だぁぁぁ――――あぁ～もぅ～ちくしょ――っ!!…もう無理だから、限界だから、これ以上精神的攻撃はっ!!いやっ!?まてよ??あの子、もしやっ!?この俺様に何らかのジェクチャー送ってんのかっ!?

だったらそんな幼気なお子ちゃまに、この俺様は当然答えてあげなくちゃ～いけないんでしょうがっ!!

と、目の前に佇む幼い少女に向かい、かなり怪しげにニパァ～…
…っと!?
まるで某ディ○ニーキャラが織り成すような??頭蓋骨が変形する

ようなとんでも笑顔を造り出し??

「ひぃっ!!」

次の瞬間!!その目の前に佇む少女の表情は、たちまち引きつりその隣側に佇む母親とおぼしき人物にしがみつき、なおもソロリ…とその相対する変態に向かいじと眼で睨み付けるのだが!?

その行動が、何を勘違いしたのか、自分に対し、かなり友好的と勘違いしつつ、ここぞといわんばかりに再びニッパァ~♪♪っとまぁ~周りが見たら即どん引きな笑顔を造り上げその少女に更にジェクチャーを送る彼なのだが??

「あうぅッ!?」

「あら、智美ちゃん、どうしたのかし……ひっ!?」

と、そんな何ともおぞましい物を見たかのように更に涙目で母親にしがみ付き怯えだす少女、その少女にえっ!?なにっ??と、そんな複雑な表情の娘になにかしら違和感を覚え、只今その娘が見て固まっている視線の先を見入る母親なのだが!?一瞬彼女の表情は凍り付き!!

「ひっ!?」

そんな、悲鳴にもならない母親のある意味恐怖を誘う声にもならない引きつった様子に、周りのお客様達も反応！！

「ひいっ！？」

「うおっ！？なっ！！何だあれ…よっ！？妖怪かっ！？」

「うひぃっ！？こここっち観てるわっ！？」

「「「キャァァァ――――ッッ！！」」」

「皆さんお静かにっ！！大丈夫ですからっ？？……ひっ！？ひぃぃぃ――――――っ！！」

そんななんとも混乱（カオス）と化してしまった車内、まるでどこぞのパニック映画デスカ――みたいな？？そんな変態的混乱（カオス）を造り上げてしまった妖怪葛城光雄っ！！

そして、

うげげっ……あれっ！？

「……」

やっやっべぇ～っ！！顔が……顔がっ！！元に戻らんっ！！やべっ！！

顔面がマヒして、

うひぃ――――――っ！？ヤバイヤバイヤバイってこれマジ冗談じゃよし子ちゃんじゃ済まないぞっ！？って言うか俺どおするっ！？いったいこれどお――――すんのよこれっ！！って！？

と、その先程からそんな恐怖映画みたいな惨状を造り上げた張本人光雄も又、自分自身造り上げてしまったこのニッパリの笑顔から元の表情にもどれず冷や汗をかきつつオロオロと、周りに更に恐怖を振りまき、そんな普通じゃないスンゲー惨状を隣側に座るマリオンも流石に気付いたらしく、すかさず！？

ドベシッ！！「ぶおらっ！？」

「う・る・さ・いっ！！少しは大人しくしなさいっ！！っとにもぅ～…他の皆さんに迷惑でしょっ！？」

「ぐふぅ～…（涙）」

そう、そのとんでも混乱（カオス）を再び一撃の如く止めた彼女なのであった！！

「まったく……まぁ～いつもの光雄らしくていいけどねっ♪」

そんな、パニックを平然と阻止、一撃の如くその隣側の妖怪を退治した彼女に周りのお客様達からパチパチと、嵐のような拍手と喚声が！？

「うおっ！？あいつ…」

「凄いぞあの子、あの化け物を一撃でっ！！」

「英雄だ……まさしく英雄だぁぁぁ――――――っ！！」

「「「うぉぉぉ――――――っ！！」」」

「へっ!?な……な…一体何が??」

とまぁ～この場を救った一人の英雄、マリオンに皆さんかなり熱い喚声をおくり、そんな彼女はなにがなんだかキョトン……と!?

そして、なんだかんだで無事にバスは、学舎の園前に到着、二人はバスから降り、いよいよこの旅の終着地点、ここ学舎の園の奥に佇む、エクスマスが居るであろう教会に向け歩きだす!!

はたして、この先二人を待ち構えている運命はいかにっ!!

そんな訳で又々無理矢理だが次回へ続くっ!!

第四十八話　乗り物を利用する時はちゃんと静かに乗らなくちゃいけないよっ♪

あははっ♪

今回も又々ギャグ的な感じで！？

というか、多分この意味もねー日常編パート、シリアス無いかも…（汗）

ま、まぁ、次回こそいよいよ彼等は、あの五和達と接触、その後一体どうなる事やら（ギャグ的な意味で！？）

そんなかんじで

次回もお楽しみに～…（汗）

第四十九話　更に又々、魔導具（マジカル・エンチャント）？？なんじゃそりゃ

うぅ……ようやっとお待たせしました、最近リアルが忙しく、スピードが落ちてるような……いやいや…

そんな感じで未だに続く日常パート編だが…（汗）
多分あと少しで終わりかと、

まぁ～そんな感じで

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～♪♪

第四十九話　更に又々、魔導具（マジカル・エンチャント）？？なんじゃそりゃ

「……――フッフッフ――……一足遅かったな……とミサカは目の前に佇む正義の魔法少女に対して威圧しますっ！！…フッフッフ――……」

「くっ！！あなたっ！！エクスマスをどうしたのよっ！！…まさかっ！？彼女に何かした訳じゃあないですよねっ！！！…場合によってはあなたの身体に直接聞いても良いんだよっ！！」

ここは学舎の園内、その一番奥側に位置するとある教会内の広場、午後の日差しが天井に設置してあるステンドグラスごしに周りの机やら長い椅子に降り注ぎ、あたかもこの古い建物の雰囲気にマッチして、何とも幻想的な雰囲気を醸し出す広場、

その教会内広場の神秘的な景色の中、相対するが如くお互いに構える二人の魔術師っ！！正にその昔１６世紀若しくは１７世紀の時代のある一シーンへタイムスリップしたかのように、その古い教会を舞台とした戦いが切って落とされようとしていたのである！！

◇◆◇◆◇◆◇……

そう、あれから数十分前、学舎の園入り口付近のロビーを抜けて、エクスマスが待つであろうとある教会に向かい、レトロチックな街路樹が続く道を抜け、その先に佇むとある教会にたどり着く二人、

その教会を見上げながら久しぶりに会うエクスマスに胸をときめかせるマリオン、そして教会の門を潜り抜けなんとも古めかしいドアを開け、いざ教会内に赴く二人を待ち構えていたのは、エクスマスでは無く、ある意味かなり怪しげな姿を醸し出すひとりの魔術師匠なのである!!

「あなたっ!!あなたは一体何者っ!?エクスマスは??彼女は何処へ行ったの??」

マリオンは警戒しながらもそのいかにも怪しげな人物に対し、長い杖を突き付け質問する!!

「ふふふ…そう問うか、ふふん知れた事よ!!、だったら自分の目で確かめて見る事だな!!っと、ミサカはあくまでも白を切ります」

善と悪……、鮮やかな紫のマントをはためかせ、手に鮮やかに蒼く輝く杖を向けつつ、薄い綺麗な水色の髪をなびかせ、

正に!!いかにも正義の白魔術師的な??魔法少女マリオンっ!!

対するは、黒いローブを惑いその顔は見えずシワシワの手を翳しつつその手から電気を撒き散らし、いかにも怪しげな雰囲気を醸し出す黒魔術師的な悪役ミサカ??と、そんな一触即発な二人を眺める光雄、

その光雄も又、黄色を中心とした、某魔法少女アニメチックな服装なのだが!?

そんな光雄が眺める中、相対する二人の能力バトル的展開の狼煙を挙げるように、魔法少女マリオンっ!!彼女はその杖を天高く誇らしげに上げつつ、何かを唱え、基本になる術式を開始…瞬間その彼女の頭上に具現化する野球ボール位の数個の蒼く輝く球体!!

その球体がグルグルと、最初はゆっくりと、更に徐々に速度を早

めて行きつつ彼女の頭上を周り初め、

その状態で相対する謎の魔術師に口を開き、

「あなたっ！！あなたは何者か私は知らないわっ！！あなたとも争う気は毛頭無いし……」

「でもっ！！もう一度だけ問うわっ！！あなたっ！！この教会を経営する私の大事な人、エクスマスさん…彼女に一体なにをしたのっ！？そしてあなたの目的は！？まさか…あなた…オスマンの残党？？」

「ふふんっ！！そんな事か……いかにも我が魔術結社ミサカに彼女は？？……」

「はいはい二人ともそこまでっ！！」

「「……ふぇっ！？……」」

とまぁ～そんな能力バトル開始的な展開の相対する二人を眺めつつ、そんな二人に接近し、かなり呆れ顔のエクスマスが二人の間に割って入り、このミサカＶＳマリオンの怪しげなバトル的展開は幕を閉じるのであった！？

◆◇◆◇◆◇……

数分後……

「ちっ！！後少しだったのに、おまえ等命拾いしたな…と、ミサカはこのマヌケな二人に？？」

「コラッ！！フレイっ！！さっきも言ったでしょ？？お客さんにあまり迷惑かけちゃいけないってっ！！」

と、只今光雄達の目の前に佇むミサカをこずきながら叱るエクスマス、その先程まで羽織っていた怪しげな黒いローブを引き剥がされ、髪を青く染めているがその姿は紛れも無く、以前光雄やマリオンに第二学区付近で救助され、ここの教会で暫く預かる事になった

ミサカ……、その彼女を眺めつつ、なにやら安心したのか、先程のあの厳しげな表情はどこへやら、その彼女に対し、自分達の弟や妹を見つめるような、なんとも暖かく、かなり優しげな表情のマリオンと光雄、

「あんなに元気良く完全に回復&復活し、元気いっぱいの本来のイタズラ好きな彼女にもどって良かったね♪」

「ああ、いや…それはそれで逆にヤバイような気がするんだが…（汗）」

そして、何かを思い出したかのように会話を始め出すエクスマスとマリオン、まぁ～この二人は彼女がまだ父親とトルコに住んでいる頃からの仲みたいだし、そっとしておくか……っとそんな会話中の二人を置いて、教会内をぶらぶらと歩きだす光雄、

◇◆◇◆◇◆◇……

……――――そう言えば、以前ここへ来たのって、たしか夏休み前だったよな、あん時はたしか、まだマリオンと知り合ったばかりで、俺自身もまだこのとある世界に来たばっかりで、

何か、彼女と知り合いそして彼女を取り巻くこの世界の様々な人達と出会い、仲間になり、あれからいくらも経って無いのに……俺、この世界に来てから彼女、マリオンちゃんと出会ってからもう何年も…いや何十年も居るような……ハハッ

――――――……一体何を物思いに更けてんだ??俺は……まったく似合わね～っつ～か、何っつ～か……

「おぉ～い……」

「おぉ～いっ!!ちょっと!!」

あははっ!!何か笑っちゃうな!?……って??

「おぉ～いっ……コラッ!!其処のスケベ面っ!!」

って!?す……すけ??

お、俺かっ!?俺なんかっ!!一体……

「って、誰がスケベじゃコラッ!!」

「ふふんっ♪♪」

「うげっ!!き…きさまはまたしてもっ!?」

「ハンッ!!このわたくしこと変装したミサカを見抜けぬとは、お主っ!!魔法使いとしてはまだまだ甘いぞっ!!と、そんなスケベ面に師匠として忠告しますっ!!……ふふ」

「くっ!!…ミサカ妹っ!!貴様……というか…」

「いや…もういいから、俺魔法使いになった覚え無いからｗｗ」

「またまた、だからおまえは甘いんだっ！！そんなおまえに久々の再開を祝してこの師匠直々に試練を与える、と、ミサカは師匠として弟子に……って！？何処へ行くのじゃ！？」

と、なにやら教会内をぶらつく光雄を捕まえ、なにやら症もない事を考えだした、怪しげなミサカからそそくさと逃げ出す光雄、

ったく、一度やならず二度までも、あんなヘンテコリンな奴に関わったらろくな事無いんだっつーの！！

しっかし、以前赴いた時は全然気が付かなかったが、教会（ここ）って！？こんな広かったか？？下手したらこん中、迷うぞっ！？

そんな事を思いながら、先程あのミサカから逃げて来た地点からだいぶ離れた、地点をあちこち眺めながら歩く光雄、その小さな外見とは裏腹に、多分何かしらの不思議な力か結界が張られているのか、内部はかなり広く、今現在歩いているこの広い廊下も行止まり所じゃ遥か彼方まで続く廊下、その廊下のあちこちの壁に設置して

あるランプらしき物に照らされ、ぼんやりとなんとも幻想的に浮かび上がる光雄の姿なのである、

や、ややべぇ～……俺…多分、迷ったかも!?
いやいや…こんな狭い教会内で迷うなんてありえね～から、

んっ!?

なんだなんだ??幾つも並ぶこの廊下沿いの扉、でもその向こう側……たしかに何かしら開いているような……えっ??ヤッパ誰が居るような……いやしかしっ!!この教会に今現在居るのは、俺を含めマリオンと、エクスマスさんとあのヘンテコな、ミサカと……たしかに四人しか居ないはず??

まさかっ!?使い魔!?はたまた召喚獣だったりしてっ!?

いや!!まてよっ!?ヤッパ、オカルトやそれ関係の類いの物じゃあ…たしかにあの魔術師チックなミサカといい只でさえ、摩訶不思議なこの教会、何が出て来ても可笑しくないかも……（汗）

と、そんなマイナス思考な彼なのだが、彼の佇む位置から続く、遥か向こう側の扉が少し開き、その扉の内側から、なにやらひそひ

そと複数の人物らしからぬ会話や物音、その音にかなり不安なご様子の光雄、

そして、その怪しげな一室がある、少々開いた扉から発する魔力みたいな物に吸い寄せられるが如く、その一室の前まで赴き

恐る恐るゆっくりと、半開きの扉を開ける光雄、その扉の支えている金具がかなり古く噛み合わないのか、何処かの恐怖映画にも似た独特のこうか音を醸し出しつつ開き、そこから、まるで何かを確かめるが如くそっと頭のだけを出すように、一室を除くとっ！？

「がぁっ！！」

瞬間彼の身体に強い衝撃が走るっ！！

ぐわっ！！と首の後ろ側から服のえりをギュッと捕まれ、無理矢理力任せに室内に織り込まれる形に身体が逆さのまま凄い勢いでその室内の壁に激突っ！！

「ぐはぁっ！？」

と、余りにもその飛ばされた勢いが強かったのか一気に堅い壁に逆さのまま叩きつけられ肺の内部の酸素をむりやり押し出されたような、妙な声をあげつつ激突っ！！そして、そのまま床に叩きつけられ、背中と腰に凄い痛みを感じつつ、

「う〝うっ！！くそっ！？おまえっ！！……いやおまえ等一体何者だ？？オスマンか！？まさか又マリオンを攫いに？？……ひっ！？」

逆さのまま地面にダイブしたのか身体の痛みを我慢しつつ立ち上がり際にその彼を突き飛ばしたであろう人物に質問しようとする光雄であるが？？

瞬間的にいくつもの鋭く尖った刃の矛先をその彼の身体を突き刺すが如く、眼前に突き付けられ、一気に演算し能力使用する暇も無く、敢えなく両手を上げつつ後退りする光雄、

ツン……といやな空気と共に冷んやりした汗が背中をつたう……

そんな中相対する数名の輩の中一人がその数ｍ（メートル）からなる長槍の矛先を収めつつ、ゆっくりと近づきつつ口を開き……

「私達はオスマンみたいな野蛮な輩とは違いますっ！！勘違いしないで下さいっ！！」

「えっ！？」

「そう、私達は……」

果たして、突然光雄を襲ったその怪しげな謎の輩は一体！！

この先大ピンチな彼、光雄はどうなってしまうのかっ！？

又々無理矢理だが次回へ続くっ！！

第四十九話　更に又々、魔導具（マジカル・エンチャント）??なんじゃそりゃ

あはっ♪

なにやら以外な展開になりつつあるよ～な!?

しかしっ多分シリアスは??いや……絶対無理だから…もうあきらめているから（涙）

てなわけで、次回はあの面子と光雄が??みたいな……いやいや…（汗）

そんな感じで、

次回もお楽しみに～♪♪

第五十話　更に続くっ！？魔導具工房（マジカル・エンチャント）？？なんじゃ

ふっふっふ……

いやいや、未だに終わらんこの意味のねー日常編パート……（汗）

久々に今回のテーマは？？ズバリっ！！”変態的眼差し”？？みたいなっ！？……ぶっちゃけ”ギャグ”です…ハイ（汗）

てな訳でっ！！

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～♪♪…ふふ

第五十話　更に続くっ！？魔導具工房（マジカル・エンチャント）？？なんじゃ

ここは、先程と同じく学園都市、第七学区、学舎の園内の一番東側の位置、

その小高い登り坂が続き、その先に見える鮮やかなオレンジ色の屋根、そして、その白い壁に刻まれた色とりどりの彫刻……かの有名な美しい街、ドレスデンを彷彿とさせるレトロチックな建造物が並び、その一番奥側にある一風変わった佇まいの緑の蔦から見える白い、小さな古めかしい教会、

今、その教会内のあちこちを舞台に、様々な人々が交差し、それぞれの物語がドラマチックに展開していたのであるっ！！……というか、たんに普通じゃ無い変人等を？？無理矢理教会に凝縮しただけのよ～な（汗）

◆◇◆◇◆◇……

その教会の入り口付近の広場の奥側に位置する扉の向こうでは？？

小さな一室があり、その一室の略中央に小さな机、その机の上には大きな水晶があり、その蒼く輝く水晶の周りを取り囲むように座る二人の人物、

マリオン・オヴ・シュペー、そして、彼女が座る位置から相対するように座るエクスマス・ザキ・ツェペリン、

「へえ～？？マリオンちゃんも自分の工房を持ちたいとはねぇ～…、」

「うんっ♪♪でも、どうしても難しい問題が幾つもありまして、何か私達だけじゃ、全然何処も無理みたいで…やっぱり半分諦めかけているというか……」

「そう、問題ね～……でもマリオンちゃんは常日頃から勉強熱心みたいだし、以前会った時よりだいぶ難しい術式も覚えたみたいだしね、後は道具に命を与え魔導具（マジカル・エンチャント）にする為の術式を勉強すれば問題無いと思うんだけどね…」

「い…いえ…そうじゃあ無くて、まぁ…能力云々より色々と在るんですよ…色々と」

「ふぅ～ん??色々ねぇ～……どの道不動産に赴いていきなり断られたとかじゃないかな??」

「えっ??」

「だとしたら、う～ん……ちょっと待って、」

そんななにやらかなり困り果てたマリオンの相談に乗るエクスマス、

しかしその原因を突き止めたかのように立ち上がり、その一室から出て行くのであるが、はたしてそんな彼女は一体何を探しに行ったのやら??

◆◇◆◇◆◇……

一方その頃、その教会内の別の場所では？？

謎の一室、その部屋の壁に未だ両手を上げつつ相対する輩に剣を突き付けられ身動きが取れないでいる、只今大ピンチ？？なのか！？……の葛城光雄と、相対する謎の三人組、

真ん中の彼に歩み寄る美少女、その彼に剣を突き付けている、黒髪ボーイッシュな彼女と、その隣側の同じく黒髪ロングの謎の彼女と、只今妙な光景なのである、

「あっ天草式だとっ！？」

「そう、私達はあのかつての残忍なオスマンの輩では無く、天草式十字凄教です……そんな魔法少女チックなあなたも少しは耳にした事があるでしょ？？」

というか、魔法少女チックって……俺……（汗）
いちよう普通の男子高校生なんだけどなぁ～……うぅ～……いつかは、ちゃんとしたまともな制服姿になりたい……グス（涙）

しかしっ……なんで天草式の連中が、こんな辺鄙な教会に赴いたんだ??

と言うかヤッパエクスマスさん繋がりの何かしらの魔術関係で……とか??……いやいや、あんまり考え込むなっ……葛城光雄ッッ!!

それよか早くこんな状況を打破するべく何とかせねば……（汗）
いや?
?待てよっ!?天草式……で、今この俺の目の前の三人、その真ん中に佇むかなり違和感のある長い槍を持つ黒髪美少女……もしやっ!?

あっ!!思い出したぞっ!?あの何のへんてつも無い玉ねぎカット!!そして母性本能をそそる優しい顔立ち……そして何げに!?

でっ!?デカイ……むっ……むむむ??

って!?「のわわっっ!?」

「おいっ!!テメェ……さっきから鼻の下伸ばして、五和の何処見ているんじゃコラッ!?」

「イヒッ!?ちち違うからっ!!けけけして、そんなチチ??」

と、先程からの彼の目線がなにやら気になるのか、更に剣を彼に突き付け顔を引くつかせる二人、そんなエロい??彼の目線に気がつき、なにやら両腕を前に組み胸を隠すように、顔を赤らめだした五和なのだが!?……(汗)

「えっ??ええっ!?あなた……もしかして、男の子だったんですか??」

と言うか、五和さん……今まで気がつかなかったんか、いや…あえて突っ込みたいけど……ますます俺……自分自身のこの姿にって!?……チクって!?痛っ!?

「いひっ！？」

「ほうほう……ふぅ～ん？？この五和様の親衛隊たる私達、箱守と関川を差し置いて……アンタ、」

「へっ！？」

そんな、なにやら別の意味で彼女を眺めていた光雄なのだが？？元々変態面の彼？？しかもそんな五和をジロジロと眺める変態スケベ野郎にかなり頭に来てるみたいのご様子な彼女達？？（笑）

「イヒヒッッ！？」

やっややややべぇ――――…マジ何かしら剣の矛先がさっきからチクチク当たってるから痛いからっ！！

痛い痛いイタタタ……なっ！？何かしら俺の中のナニカが目覚めそう……てへ♪

って!?ちちが――――――うっ!?マジこれ!?こんなんプスリとやられたらっ!?マジ無理無理もうこれ以上はっ!?

「うへっ!?あ…あんまり……痛くしないでねっ♪♪」

とまぁ～…先程からチクチクチクチクと??突(つっ)かれまくりそんな彼はとうとう身体を怪しげにまるで何処ぞの元祖変態なツインテールの如く??くねくねと??

「ひっ!?」

そんな彼を見つめつつ何かしら恐怖を感じたのか顔が引きつる五和♪、そして残りの二人はというと??

「こっ……こ……ここんのぉ～……ど変態がぁぁ――――――――っ!!」

「ヒッ!?ヒィィ――――――――ッッ!?」

とまぁ～なにやらまるで妖怪退治に赴く勇者の如くスンゲ――剣幕で光雄に剣を振りかざし??
それを彼女達の懐に飛び込むような形で回避しつつ、そのまま反対側の扉まで転がり、謎の雄叫びを上げつつ疾走!!

「「まっ!!待てゴラァ――――――――ッッ!!」」

とまぁ～…そんな彼を青筋を立てつつ追尾し始める彼女達…（汗）

その後、もうそんなかなりエキゾチックな彼だがなにやら謎の疾走し、それを追い掛ける彼女等とまぁ～なにやらとんでもない追い掛けっこが勃発したみたいで（爆♪♪）

◇◆◇◆◇◆◇……

なにやらスンゲー展開になりつつある光雄達なのだが??一方そんな頃、別の通路沿を、ふらふらと歩き、突然立ち止まりキョロキ

ョロと辺りを見渡し、首を傾げ考え込み、又歩きだしと、一体なにかを探すような素振りを見せる謎の人物、黒いマントを羽織りなんとも小悪魔チックな服装、しかもその手には一体何処で拾ったのか光雄の携帯が、

そんな謎の彼女、ミサカはというと??

先程から微弱な電磁波らしき物はかんじたのですが、光雄さん、一体何処へ行ってしまったのでしょうか、とミサカは、私の前から忽然と姿を消してしまった光雄さんの痕跡を頼りに探しているのですが……

でもミサカは、なにかしら分からないのですが、この苛立つような感覚は一体何でしょうか、これが人に対する心配とかいう感覚でしょうか……先程エクスマスさんに渡されたこの謎の装置を早く光雄さんに届けるよう言われたのですが、

そういえば、エクスマスさん……マリオンさんとかいう人に渡す道具とかをいそいそと探してましたが、

いや!!

そんな事よりも早く彼を見つけなければならないような気がします、なにかしら分からないのですが、この胸を突き刺すような嫌な感覚は一体……ミサカは考えます……

とまぁ～、何かしら胸騒ぎを押し殺すようにいそいそと光雄を探すべく広い通路をうろつくミサカ……その彼女は、自分自身この胸騒ぎみたいな苛立つ感覚が分からないのか、かなり混乱していたのである、

そんな中、彼女がぼんやりと見つめる広い通路…その遥か先の辺りで、グワッ!!と閃光の後爆発!!その煙が立ち込める中を飛び散る破片をかき分けつつ近づく人物が!?しかもその近づく人物の後方から次々と地響きと共に閃光!!連続して起こる爆発!!その爆撃みたいな攻撃を回避しつつ急接近の彼!!

「おりゃぁぁ――――――っ!!」

と、謎の雄叫びを上げ素早く回避!!その後方から何かしらの魔術なのか、剣を前方の疾走する彼に向けて振りかざし、謎の光弾を放ちまくる彼女達!!しかしその攻撃を見事にアッサリと回避!!

「くっ!!又避けられたっ!!」

「はんっ!!いくら強力な攻撃技でも、当たらなければ、どうという事はないっ!!」

とまぁ～某アニメの赤い誰かさんのセリフを吐きつつ余裕な表情の彼、葛城光雄……

しかしっ！！

運命は皮肉にもそんな彼に次の試練を与えるのであるっ！！

「ふっ…余裕余裕っと♪」

ふふ…一時はどうなる事かと思ったが、あの天草式の二人、たいした事無いな♪

こんなトロい魔術…当たるかっつーのっ！！まぁ～常日頃からあの恐怖のマリオンの魔術や御坂さんの電撃に襲われてるこの俺様が、あんなど素人丸出しな輩の魔術なんか……

けっ！！何か、思ったよかたいした事無いなっ、うしっ！！このまま速度を上げつつこんな輩を巻いて早くマリオンちゃんが居る場所を探して、多分もうそろそろアイツ等も待っている頃だろ……

そんな事を考え込みながら通路を駆け抜ける光雄なのだが、

その彼の進行方向上の遥か向こう側に佇むなにかを辞任!!

「んっ!?……何だ何だ??……いや…まさかあれはっ!?」

と、なにかしらその前方に位置する未確認物体(アンノン)……

しかしその彼の速度も相まって段々と、その未確認の”なにか”を肉眼で把握出来る位置まで接近すると!?

「うげげぇ〜っ!?」

「うふっ♪♪とうとう見つけましたっ!!とミサカは、前方から接近する光雄に有りったけの笑顔を振りまきますっ!!」

と、瞬間彼の表情は段々と引きつり??まるで、何処ぞの戦場でたまたま敵兵にばったりと!!みたいな??

なにかしらヤバイ物を見てしまったかのように屈強な表情にっ!?

その相対する彼を彼方側のミサカも気付いたらしく??まるで悪魔か何かが微笑むかのように、ニタァ～……っと♪

「ひっ!?」

その無表情な顔からは予測不可能な満身な笑顔を差し向けながら…（爆♪♪）

瞬間!!

その不可解極まりない不気味な笑顔を持続しながら、まるでカタパルトから打ち出された戦闘機の如くスンゲー勢いで前方から迫り来るミサカっ!!

更に後方からは、そんな彼光雄を追撃！！撃滅せんとはたまた急接近の天草式の二人っ！！

只でさえ回避不可能なこの通路上で立ち止まり、前方と後方から迫りくる脅威に戸惑う彼！！

正に敵地のど真ん中で周りを取り囲まれ冷静さをうしないつつある兵士が如く、彼の運命は風前の灯火にもにた状況なのであるが、

そんな中、自分の佇む位置の目の前にある扉を辞任っ！！賺さず総ての運を任せつつ把手を回し部屋に飛び込み鍵を締め、

その部屋にある机やら椅子など様々な物を扉の前に起き、息を整える彼、

しかしその室内で彼の眼前に、佇む先程まで居たであろう純白の綺麗なローブを羽織り、その表情はとても優しく、なんとも幻想的な雰囲気を醸し出す人物、

そして、その人物はそっと光雄に近づきつつゆっくりと口を開き、

「又お会いしましたね、葛城光雄さん♪」

と、

果たして、その謎の人物は!?

この先光雄は無事ここから脱出!!只今彼を待っているであろうマリオンに無事再開出来るのであるかっ!!……ていうか、多分全然待って無いな…（笑）

てな訳でっ!!又々無理やりだが次回へ続くっ!!

第五十話　更に続くっ！？魔導具工房（マジカル・エンチャント）？？なんじゃ

あはははっ♪♪

もうなにやら、むちゃくちゃやなぁ～このギャグパート…（汗）

しかしっ！！そんな中彼はっ！？そしてあの白いローブを纏う魔術師はっ一体っ！？…いや…多分もう既にネタがバレバレかと……（汗）

っつー事で、次回もそんな感じでっ！！

お楽しみに～♪♪…はは（汗）

第五十一話　とある神社の魔法戦争？？（前書き）

いよいよこの意味のね～日常編も残す所あと2話で？？終わるんかっ！？

みたいなっ！！

てな訳でっ！！

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～♪♪

第五十一話　とある神社の魔法戦争？？

ここは、第七学区内、学舎の園の東の外れに佇むとある教会、

先程までのとんでも騒ぎから落ち着いたみたいで、その教会の入り口付近の広場には、壁側に佇む白いローブを纏う一人の女性、エクスマス・ザキ・ツェペリン、

そして、彼女が佇む位置から下側に設置してある長い椅子にエクスマスに相対するように並んで座る、光雄とマリオン、

その後ろ側に座る五和を含む天草式のメンバー三人&ミサカと、

そのメンバーが見守る中、エクスマスは先程この教会内の書物倉庫から見付けて来た、ある一枚の紙切れを光雄に手渡しつつ、

更に、いつ頃から置いてあったのか、この広場の棚からゴソリと、一件何の変哲も無い只の丸い大きな石を持ち出し、それをマリオンに手渡す、それを受け取ったマリオンはそのズシリと重い石をマジ

マジと眺めているのだが、

「これっ……て、ま…まさか!?この石っ!!エクスマスさんっ!?」

「ええ、流石マリオンちゃんねっ♪♪そう、これは以前、学園(ここ)都市に私が初めて来た時、誰かが使ってたか分からないが、ある日本人から貰ったのよ」

「でもまさか、これが役に立つかもしれないとはねぇ～…何の意味かわ分からないが、貴方なら…」

その”誰か”とか、”貰い受けた”という単語にかなり引っ掛かりながらも未だに石を眺めつつ首を傾げるマリオン、

その様子を真後ろから眺めるその他のメンバー、

彼女達はそんな光雄やマリオンを眺めつつ、先程エクスマスが言ってた、ある”日本人”という単語になにかしら引っ掛かっていた、

「ねぇ～…雪絵(せつな)あれって!?ヤッパエクスマスさんがさっき言ってたのってさぁ～、」

と、先程のエクスマスの”日本人”とか”譲り受けた”とかなに

かしら頭に引っ掛かるようで両手を頭の後ろに組み仰け反るようになんとも器用に座り、

顔を隣側の五和を避けるように更に椅子を不安定にも後ろ側につんのめりつつ質問する彼女、

そんな彼女、関川夏海（せきかわ・なつえ）の姿は、白いTシャツに少し緑掛かった青系のジーンズのシンプルなカジュアルルックに身を包み、そして、かなり短めに切り揃えた耳が出る位の黒髪ショート、顔立ちは美人と言うよりは、可愛い感じだが、

その性格は先程光雄に食って掛かかったように、隣側に座る五和とは、正反対なかなりキツ目、正に男勝りの一言の彼女、

そして、

「うん、そうね、まぁ～…一様気になるしね、今回の件に関しては、やはり…」

と、正に何かしら思いついたのか、片手を顎の下に持っていきうん…と頷く仕草なクールな彼女、

箱守雪絵（はこもり・せつな）は、黒髪ロングストレート、その彼女の顔も又、幼いのか可愛い感じで、七分袖の白いブラウスの下には短いのか、わざとらしくへそを出し黒い短めのスカートそして、黒いブーツと、

下手したら何処ぞのゲームキャラデスカー?? という突っ込みは、置いといて!?

そんな天草式の彼女は、何かしら閃いたように二人して、

「ねえ、もしかして、」

「ええ、そのお方はやはりっ！！」

「「女教皇（プリエステス）様っ！？」」

と、なにやら真実を付いた感じに閃めく彼女達、そんな彼女達に五和は？？

「えっ？？いやいや……そんなあり得ませんから…（汗）」

と、そんな彼女達にかなり否定的なご様子で？？

「ええっ！？又々五和は～…」

「こんな面白そうなイベントなのに～…」

「だから五和は、以前から素敵イベントを逃して」

「いつも”チャンス”を逃してるのよねっ！！」

「あうぅ～…何も二人してそれとこれとは違いますのにぃ～…何もそこまで言う事は～…（涙）」

と、そんな謎の挙動不審になりつつある五和を置いていて、かなりこの一件に首を突っ込みたがる夏海達、

まぁ…マリオンと言う輩は良いとして、にしても、アイツ…今まで気が付かなかったけど、あの何処ぞの魔法少女チックな服装と言い、何処かで見た事があるな～……と思ったらヤハリ…

以前ニュースか何かで見た、あの噂の学園都市の能力者達の頂点に君臨する優等生……新生第四位『光学使い（プラトニックマスター）魔法少年』かっ!?でも何で??

しかもＬＥＶＥＬ５の超能力者の癖して何かしら、私達を含む魔術サイドにかなり首を突っ込んでるみたいだし、何か妙～に気になるんだけどなぁ～…

と、なにかしら彼女の前側に座り、未だその手渡された紙をマジマジと眺める光雄の後姿になにやらニンマリと、不適な笑顔を見せつつ視線を送る夏海、

そんな真後ろから突き刺さるような視線??になにやらビクつくように気になる光雄はというと??

い…今見つめられてる…いや!!絶対っ!?まぁ…今までのあらゆる経験からして　そんなプレッシャー送る輩は何かしらスンゲ―ヤバイ事だけは分かるんだが…いやいや、今はそんなどーでもいい事よか、マリオ??……って!?なっ!!一体全体っ!??

とまぁ～先程から真後ろに位置する夏海は、その長い足を使い、前方に座る光雄の椅子をツンツンと、

その行為??に流石に耐えられないのか冷や汗を流しつつ恐る恐る後ろを振り向き??

「よっ♪」

「うげっ!?」

とまぁ～…なにかしらニッコリとジェスチャーを送る彼女、そんな様子の彼女になにやら、かなり汗をかきつつ再び視線を前にゆっくり向ける光雄なのだが??

「うえ??……なっななな…（汗）」

「ねぇ～…光雄っ!?今エクスマスさん大事なお話中なんだからっ!!少しは落ち着きなさいっ!!」

と、なにかしら彼の妙な行動が又々気になるみたいにそんな彼をしかり飛ばす始末……（笑）

「うげげっ！！でもっ…ほらっ後ろにっ！？」

「えっ？？……だぁ～かぁ～ら～光雄っ！！あなたも子供じゃぁ無いんだから、大人しくしてるのっ！！」

「まったくっ！！その前のバスん中と言い……恥ずかしい思いするのは私なんだからねっ！！」

「ふわぁ～い……すんません、以後気をつけます…（涙）」

と、いきなり又々マリオンに頭ごなしに指摘されつつかなり凹む光雄、

そんなマリオンにしかられ凹みだす可哀想な光雄を眺めつつ、何かしら彼女の中に収穫があったのか、更にニヤリ？？っと良からぬ悪巧みを考えだした夏海、果たして、彼に対して彼女は何を企むのかっ！？

◆◇◆◇◆◇◆……

そして、数十分時は遡り??

マリオンの工房を実行するには……この学舎の園から外側に位置するとある場所にあらゆる霊が集まるとされる霊所ポイントがあり、

そして偶然にもその日の夕方、月と太陽が折り重なる時刻に式を敢行、数百年に一度現れると言われる幻の神社、その地に眠りし古の聖なる物が祭られているとされる神社に赴き、この古い書物に書き表された、〝それ〟を手に入れればこの石に命を吹き込む事が可能と言う事で、

只今光雄に相談を持ちかけている所なのである!!

その紙切れをマジマジ見つめながら理解したのかなにやら言いたそうな光雄

「で??それを魔術師でも無い俺がやると!?」

「えっ??ちょっと何言ってんのよ光雄はたしかに能力じゃあズバ抜けて優勝なのは分かるけど、
魔術にかんしちゃ超が付く程ど素人、おまけに毎度毎度、あらゆる罠やトラップにわざと引っ掛かり、周りを巻き込んで、挙げ句の果てには……」

「いや…もうこれ以上はいいから、俺様のガラスのハートはもうボロボロだから…皆さんの有難い視線が俺様に突き刺さり…（涙）」

と、彼がそこに赴くのはとうてい不可能と、マリオンはハッキリ指摘し、過去にあった彼の輝かしき戦暦を暴露??
それにかなり精神的に耐えられないのか、かなり凹みながら怪しげにぶつぶつと一人淋しく??呟き初める変な光雄、
その光雄達にエクスマスはニッコリと微笑みつつ、

「いえ、あなたがやるのでは無く、あなたに協力してくれる…」

「おう、その任務私達も一緒に行ってやるんだから有難く思いなっ!!」

「「えっ??」」

と、光雄達が戸惑う中その他のメンバー達も一緒にご同行するみたいなのである……

「いえいえ…その神社とやらも、多分私達天草式と関係していると、思いますし、それに私達はそこのエクスマスさんにお世話になった身ですので、是非この機会に協力したいだけです、あとそこのあなたっ！！……はいっ♪どうぞっ♪」

「えっ??俺っ！?」

「その隣側に座るマリオンさん…ですか??その彼女の先程のお話をお聞きし、直向きに彼女の危機を自らの身を犠牲にしてまで守りぬくっ！！そんなあなたに掘れました…」

「過去の私の部下達の失礼な行いを謝罪しつつ、私達天草式もあなた達に是非ご協力したいのですが、」

五和は、先程出会ったばかりである、光雄達なのだが、何がしら気に入ったみたいで、ニッコリと微笑みながらお絞り??を差し出すのだが！?……と言うか、この機にもお絞りって（汗）

◆◇◆◇◆◇……

そして、その教会に天草式のメンバーに頼まれた道具を運びに赴いたオリアナには少々待ってもらい、

光雄を含む二人、五和達とこの妙な組合せのパーティーは、ここ、学舎の園を後にそのポイントに向かうのであるっ！！

そう、そのポイントとは、第七学区に位置するとある廃ビル内…
…今そこでは、ちまたを揺るがす噂の、幻影御手を使用し、かなり強力な能力を得て暴れ回るスキルアウト達が犇めきあっているとも知らずに……

果たして、光雄達は、無事にそこにあるとされる、とある神社の入り口に無事にたどり着けるのかっ！！

多分、この最強メンバーだったら？？楽勝！？いやいやｗｗ

次回へ続くっ！！

第五十一話　とある神社の魔法戦争??（後書き）

いやいや……なにやらシリアスチックになって来ましたこのパート!!

そんなパートも次回で終わりだな……（汗）

そして、次回はなにやら主人公と??とある光学系同士のバトル的展開になるんか??更にその後に待ち構える神社での!?

いや…ネタが……（汗）

そんな感じで

次回もお楽しみに～♪♪

光学第五十二話　とある神社の魔法戦争……―その２―――……（前書き）

まず始めに

すんませんっ！！

このパート…もう少しだけ続きます……（汗）

そんな訳で

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～♪♪

光学第五十二話　とある神社の魔法戦争……―その2―――…

只今、光雄達が学舎の園の教会で、てんやわんややってる頃、
同じく第七学区内の街並みから少し離れた位置の小さな通り沿い、
そこには幾つもの学生寮が立ち並び、その中の一つ、
三階建ての少々モダンな佇まいの学生寮、そこの三階の一室内、
二人の学生が並んでベットに腰を掛け、会話をしているのであるが、

そんな二人の学生、黒髪ロングの歳はマリオンと同じ位の少女、
佐天涙子とその隣に座る同じく
頭にガーデニン??もといっ!!頭に花々を鮮やかに咲かせている不思議少女っ!!初春飾利……

と、マリオンや光雄達と、とある公園での”とんでも出来事”から数時間後、　なにやら飾利が、風邪を拗らしてるらしく、それを心配したのか、
美琴達と別れてから、薬局で薬を購入、そして、お見舞いに学生寮まで赴いた涙子なのであるが、

そんな涙子はというと??

「ねえ初春～…私、さっきさぁ～…あの子、マリオンさんの能力、初めてみたんだけどさぁ～、昔見た魔法系アニメみたいで凄く綺麗だったよ…マリオンさんもヤッパ、葛城と同じ系統の魔法的な能力者だったんだね…」

「えっ??佐…天さんっ!?一体どうしちゃったんですかっ!?そんなぼんやりと…」

隣側に座る飾利に、なにやらぼんやりとした表情で呟くように質問する涙子、

「初春はさぁ～…御坂さんやマリオンさん達みたいな高レベルな能力者になりたいって思わないっ??」

と、突然何を言いだすかと思えば、なにかしら憧れるみたいに天井を仰ぎつつ呟く涙子、

そんな突然の質問になにやら、少々首をかしげ、更に涙子と同じく天井を仰ぎつつそれに答える飾利、

「う～ん……そりゃあ～能力は高いにこした事ないし、進学とかもしやすいし…」

そんな飾利を横目にポツリ…と、呟きながら…

「やっぱりさぁ～…普通の学校生活なら、学園都市の外でも出来るし…」

「超能力に憧れて、学園都市に来た人達って、結構居るよね…」

「ええ、でも」

そんな事を呟く涙子に天井を仰いでいた目線をずらしつつ涙子の方を振り向く飾利…更に涙子は、天井に片手をあげつつその自分自身の手を、ぼんやりとした目線で見つめつつ口を開き……

「私もさぁ～…自分の力は何だろう…どんな能力が、秘められているんだろ…って、学園都市に来る前の日は、ドキドキして眠れなかったよ……」

更に先程伸ばした自分の手を目を細めながら眺めつつ、
物思いに更けるのか、何かしら自分自身じゃ到底無理なのか、
その視線を遥か彼方を眺めるように更に飾利に呟きかけるように口を開き、

「それがさぁ～…あなたには全く才能が有りません…Ｌｅｖｅｌ０ですってね！！」

そんな涙子に目線を送りながら、飾利は、再び目線を天井に移しつつ、ポツリと、

「その気持ち、私にも分かります…私も能力Ｌｅｖｅｌ、たいした事ありませんし…」

そして…涙子の方を向きつつ、優しそうな笑顔で、

「だけど、白井さんと仕事したり佐天さんと遊んだり、あのマリオンさんとちょっぴりかわった…変態さんっ！？とか、…ふふっ♪毎日楽しいですよっ♪」

と、いきなり何かしら思い出しつつぷぷっっと？？吹き出しそうになる飾利…と言うか、多分その場に光雄がいたらかなり凹んでいるような…（汗）

「ぷっぷぷ……ま、又々～っ！！初春っ！！変な事思い出させないでよねっ！！」

「たっ…たしかにね…あのアホ面……ふふっ♪♪」

「「アッハハハハ♪……」」

とまぁ～…さっきまでのしんみり感は何処へやらっ！！涙子と飾利はやはりっ！！光雄（アイツ）を思い出したとたんにどっと笑いをこらえ切れなくなり吹き出す二人なのだが！？……と言うか…そうとうバカにしているようなっ…（汗）

◇◆◇◆◇◆……

そして、数分後っ！！

「あ～あっ！！何～か私っ！！、どうしちゃったのかなっ♪初春っ！！色々ありがとねっ！！」

「えっ？？ええって！？佐天さんっ！？」

「ごめんごめんっ！！私っ！！ちょっち用事を思いだしちゃった、」

「あっ！！後さぁ～…風邪を拗らすからあんまり無茶しちゃ駄目だよっ！！後、御坂さん達が来たら葛城君達に会いに行くって、宜しく言っといてっ！！それじゃっ！！」

と、突然なにやら元気が出たのか、飾利に色々と言付けを言いつつ部屋を慌てるように出て行く涙子っ！！

そして、学生寮から元気良く駆け出しつつその手には、なにやら小さな音楽プレイヤーが握られていた……

昨日何げに見付けた幻影御手（レベルアッパー）、…使用する前にとにかく葛城（アイツ）に相談してみようっ！！葛城やマリオンさんに相談すれば、何か良く分からないけど…葛城（アイツ）ならっ！！

そんな事を思いつつ、光雄達に合流する為にひた走る、涙子っ！！果たして、
そんな彼女は光雄達に会い、何を問うのか？？

◆◇◆◇◆◇……

一方その頃、その噂の光雄率いる御一行パーティーはというとっ！？

そのエクスマスのとある教会で見付けて来た、

…――その月と太陽が交わりし時、古の忘れ去られし神社が露る――…

とされるポイントが印されたある一枚の紙に導かれるように、
光雄とマリオンを先頭にその後方から天草式の面子が近づき、
皆して、その最終目的地でもある、
第七学区の外れ側に位置する取り壊し予定の廃墟ビルを仰ぐように見つめていたのである…、

「ううわぁぁ～…ねえねえっ♪♪これって～、何っつーかこんな廃墟ビル、仮面ライダーか何かのロケセットみたいじゃないっ♪…」

「えっ??たっ…たしかにエクスマスさんに渡された紙に印されてんの合ってると思うぞっ!?」

「……と言うか仮面ライダーって…（汗）マリオンちゃん女の子が観るもんじゃ」

「へっ??……う……う…ううるさいっ!!黙れっ!!んな野蛮なのこの私が観るはず無いじゃないっ!!このバカ光雄っ!!」

いや…マリオンちゃんっ!!そんな必死に否定しなくても俺様は

知っている…ちゃんと日曜の朝??

どげしっ!!「うぐえっ!!」

「「「……(汗)」」」

「ほっ…ほら～…五和さん達もっ!!こんな光雄(バカ)は掘っといて、さっさとそのポイントを探し、式の準備をしましょっ♪♪」

「うぇっ!?……そっ…そうですね……(汗)」

とまぁ～…只今到着した廃墟ビルを眺めつつ、何やら怪しげな口論??になりつつある怪しげな二人…(汗)

◇◆◇◆◇◆……

そして、時刻は段々と夕方に差し掛かろうとする中、ぞろぞろと…光雄達&五和、

そして何やら風水師が持ち出すような道具を運ぶ雪絵と、

神社に赴く為の術式の準備を遂行するのに廃墟ビルの中に赴き、

そのビル一階の入口付近では、夏海が、部外者が侵入しないように見張り、

そんな何事も無く順調に事が進むはずだったのであるが、
そんな矢先…何と!!その廃墟ビルの入口付近に屯(たむろ)しだす部外者の輩が…
その輩に気付きつつ様子を伺う夏海、

更に、もう一名の部外者がっ!!

そんな部外者にそっと近づく夏海なのだが、

えっ!?ここって…只でさえ立ち入り禁止地区なのに何で又々こんなに人がうじゃうじゃ集まって来るのよ～…ったく、

まぁ～…入口(ここ)付近に近づき侵入する気配は無いと思うけど……でも、アイツ等って!?もしかして、学園(ここ)都市の風物詩…スキルアウトじゃあ……

その集まりだした輩に気付かれる前に様子を伺いつつ更に近づく夏海、

そんな矢先彼女が見つめるその向側で、スキルアウトとおぼしき輩は、何やら言い争いをしているご様子で…

「おいっ！！そんな勝手にっ！！聞いて無いぞっ！！」

「あんっ！？」

「だってちゃんと金は渡したはずだろっ！？だからっ！！」

「ハァ～…なぁ～んだそんな事かっ…でもよぅ～…たったこれっぽっちじゃ～あ全然足りないんだがねぇ～」

と、そんな輩達は、なにかしらの取引なのか、その人物が持って来た金額じゃ～全然足りないと否定！！

更に上乗せしろと…

「ふ…ふざけるなっ！！話が違うじゃないかっ！！もう帰るっ！！だ…だから渡した金額を返してくれっ…」

「あんっ？？何勘違いしてんだおめぇ～」

「えっ？？」

次の瞬間、ズドンッ…！！と、何かを叩きつけた音と共に、ミシミシ…っと、軋むような、嫌な音を立ててさっきまで口論していた輩の一人が突然真上から何かに叩き落とされるように地面とキス！！

「ぐ…ぐあぁ…」

と、まるで踏み付けられた蛙や小動物が鳴くような妙な声をあげながら、

プレス機にかけられたようにグイグイ地面に押し付けられ始める人物……

その地面に押さえつけられ、もがきながら必死に抵抗しようとしている、そんな人物の前に、更に何処から出て来たのか数人の男達が取り囲むように近づきつつ、

その中の一人がそいつを上から見下すように口を開き、

「ははっ…まったく、持ち金もねぇ～のによく吠える薄汚ねぇ～デブだな、」

「ぐぐぅ～…お、おまえがここのボ!?……ぐああっ!!」

「てんめぇ～っ!!俺達のボスに口答えするなっ!!」

更に、そんな自分の足元に這いつくばる人物を眺め…なにかしら閃いたのか、ニンマリと不敵な笑みをうかべつつ、

「おう、おめえらっ!!」

「へいっ…なんでしょう??」

「ソイツ立たせろ…」

「えっ??」

「おめえ等のＬｅｖｅｌがどれ位上がったか、”そいつ”で試してみろやっ…」

その様子を奴等に悟られぬように、柱の壁にピッタリと張りつきつつ顔を出す夏海…

しかし彼女の眼前に行われている怪しげな展開…

正にこんな是非とも無いシチュエーションは、そう滅多に出くわす事が無く…　只でさえ普段から戦闘狂（バトルジャンキー）な性格の彼女は当然!?

うぅわぁ～……何か分からないけど、超～面白そうな展開になって来たじゃんかよぉ～……っ

くうぅ――っ!!ヤッパ学園（ここ）都市の連中っちゃぁ～最高だぜっ!!

あっ…あ…暴れてぇ～っ!!……

いっ…いやしかし、今の私はあの入り口を守る任務がっ…しかし……うがぁぁ――――っ!!よしっ!!ど～せ五和達は上の階だしわかんね～し、

どの道”こいつ等”ほっといたらいずれビルの中に何時侵入しだすかわかんねぇ～しょう……

それに”あいつ”等魔術師でもねぇ～みて～だしっ!!

うしっ!!新たに魔導具（エンチャント）工房され鳳凰が宿りし我が炎剣、大鳳（たいほう）の初陣（ういじん）もかね、速攻で殺るかっ!!

と、やはりこんな結果に??

そして、勢い良くその輩を片付ける為に飛び出そうとする夏海の眼前に、突如別から覗いていた少女と目が合い！？

「うおっ！？」
「ひゃっ？？」

二人して、慌てたのか思わず悲鳴を上げてしまい
次の瞬間っ！！

「ちぃっ！！そこに隠れてんのは誰だっ！！」

とまぁ～……とうとう悟られてしまった夏海、とその隣側の黒髪ロングの少女っ！！

更に、その彼女達が隠れている場所に迫る数発の斬撃っ！！

しかしっ！！

「くっ！！おいそこのガキっ！！いいから下がれっ！！邪魔だっ！

！」
「きゃっ！！」

そんな身構える前に隣側でキョトン…とする涙子を後方に突飛ばしつつ、

瞬間！！グワン……と、さっきまで彼女達が居たコンクリート製の柱を奴等の解き放たれた炎弾や斬撃が次々に着弾っ！！
巻き上げられた砂煙と共に粉々に粉砕され爆発っ！！

「はっはぁ～っ！！ビンゴっ！！」

「うお～っ…おまえ等やりすぎだよっ！！ありゃ～ぁ、ミンチ決定だなっ！！」

そんな様子をはしゃぎ会うスキルアウト達、そして真後ろに突き飛ばされた涙子は、地面に尻餅をつきつつ空いた口が塞がらないで固まっていた、その彼女の目の前に一瞬展開された防御結界、深紅に輝く魔方陣をっ！！

えっ？？まさか、あの人ももしかして、葛城やマリオンさん達と、同系等の能力者？？

と……

そしてっ！！

「へぇ～……っ？？アンタ等面白い技使うなっ♪能力者か……気に入ったぜっ！！」

「げえっ！？まさかっ？？」

「あいつ……無傷かよ…」

「さ・て・とっ！！こんどは私のターンかなっ？？」

「んじゃ…遠慮無くっ！！」

瞬間、一瞬…正に一瞬でスキルアウトの懐に彼女が得意とする瞬発力で飛び込み際に二人同時に峰打ちを食らわし、炎を吹き出しつつ地面に崩れ落ちる頃には彼女は遥か先に着地っ！！そしてチンッ！…と、剣を鞘に収める頃には、ドサリ……と地面に倒れ、炎も消滅、

正にあっという間に勝負が着いていたのである、
その正に、普通の術式を唱え、
えたり揃えたりして使用する一般の魔術師達と違い、
彼女達天草式の偽装魔術は違う特性であり、主に様々な武器や道具を使用する、更に彼女の服装や普段の一つ一つの何気ない事自体も魔術に関係しているとされているのである…

「さて、何か物足りないがまだやるってんなら別に構わないぜっ♪誰から来る??おまえかっ??」

「「うぐっ……」」

そんな一撃の如く仲間を仕留められ、たじろぐスキルアウト達…
しかし、その様子をなにやらニンマリと見つめていた人物がゆっくりと近づき、

「はっはぁ～っ！！いいねぇ～っ♪正義の味方ってか??俺はよぉ～……そんなアンタ等みたいな高能力者や風紀委員(ジャッチメント)をいつかは、ギッタギタにしたい訳よっ！！」

果たして、天草式の強さを見せ付けた夏海の前に立ちふさがるスキルアウトのボスらしき長身の男、

この先夏海や涙子は??そして、
只今そんな廃墟ビルの中で神社に赴く為の術式の準備をしている光雄達はっ!?

又々無理やりだが次回へ続くっ!!

光学第五十二話　とある神社の魔法戦争……―その２―――……（後書き）

うわわっ！？

も…もう後２～３話欲しいです（涙）

その後すぐに原作突入するので……

次回からは連続して行われる能力バトルという訳で♪

そんなかんじで次回もお楽しみに～♪♪

第五十三話　大乱闘！！神社での攻防…（前書き）

何とか、昨日活動報告にあった、明後日の夜まで投稿宣言よりかなり早いがっ！？

光学の超高密度収縮粒子主砲戦記っ！！

始まり始まり～♪♪

第五十三話　大乱闘！！神社での攻防…

「ハァァァ――――――ッッ！！」

「ふふ…」

夏海はその身の丈三乗もあるであろうこのスキルアウトのボスらしき長身の大男を見るなり、
まるでかなり楽しそうな遊び相手を見付けたかのような表情をしながら瞬間
ズドンッ！！…とまるで撃ち出された砲弾の如くその男が気付く間もなく一瞬で懐に飛び込み渾身の一太刀（ひとたち）を浴びせるが！？

「えっ？？……」

「ハンッ！！」

確かに剣術じゃどんな大男をも一撃で地面に沈める首筋から肩にかけての峰打ちが空振りっ！！
次の瞬間自分の勢いが仇になったのかバランスを崩す彼女に、予測不可能な斜め後方から奴の重い回し蹴りが迫り！！

瞬間！！

グァキィィッ！！

と、鈍い鈍器のような音と共に、
その鞘で受け止めつつ奴の重い一撃の力を受け流し、その回転力を利用しつつ
すかさずまるでバク転するように片手を地面に付け、　今度は真下からズバァッ！！と、
彼女の武器でもある長い足技と靴底に仕込んだ短刀が空を切り裂き奴の胸の服、そして金髪に染めているであろう髪の毛が瞬間的に切り裂かれ、破けた服の一部と共に中に舞い紅蓮の炎が燃え上がり消滅、

そしてお互いに跳ぶように一旦距離を置きつつ相対するっ！！

「ハンッ！！よ～やっと骨のある奴が出て来たわねぇ～♪♪アンタ、面白いトリックつかうなっ！！気に入ったぜっ♪」

「けっ！！いいねぇ～♪♪最高だぜぇ！！面白れぇぇっ！！こんな奴初めて見たぜっ♪♪しかし……いつまで持つかな？？」

更に何回もお互いにぶつかり合い、彼女の剣術の威力なのか、周りの地面は次々とえぐれ、柱や壁は砕け散る！！

そう、彼女は、天草式の中じゃ稀に見る疾速の使い手であり、その長い足を使った瞬発力は、あの女教皇（プリエステスである、神裂火織にも匹敵すると言われ、その速度を利用した重い一撃は、どんな輩でも一瞬で一刀両断すると言われているのである！！

そんな彼女を相手にしてしまったスキルアウトのボス、長身の男なのだが、彼も又、偏光能力（トリックアート）という光雄と同系統の光学系能力者でそんな彼女の疾速の一撃を辛うじて光の掘削を利用し避けているのだが、
かなり限界がきているみたいなのである！！

その二人の凄まじい攻防を先程破壊され、中身の鉄筋が剥き出しの柱の影に身を潜め、見守る黒髪ロングの少女、佐天涙子、

す…凄いっ！！あの人…あんなの私には、でもあの人さっき恐かったけどあの優しい感じの目…葛城君と同じ目をしていたな、やっぱ葛城（あいつ）関係の人なのかな…

◇◆◇◆◇◆◇……

更に能力バトルは続き…

「ハァッ…ハァッ…いっ…一体何なんだよおめぇ～……この俺様の能力、偏光能力（トリックアート）を使っても……む…無茶苦茶だよ～……」

「はんっ♪なぁ～にがギッタギタにしてぇ～ってほざいてんだっ！！折角盛り上がって来たってのに、アンタも大した事無いんじゃ話にならないわねっ！！……もうアンタボロボロみたいだし、降参する？？」

「ぐっ！！くそがぁぁ――――――っ！！」

「ふふっ♪そう来なくちゃ～ねっ！！まだまだ暴れたりねぇ――――んだよっ！！」

そして、彼女に対し破れかぶれにも突っ込もうとした彼！！しかし、そんな彼に好機が訪れ、先程そんな夏海達がバトルしている光景を柱の影から伺っていた涙子、その彼女に別のスキルアウトが背後から近付いていた、

「おいおい、おまえ、なぁ～にぼっとしてんだ、」

「うっ！？いや……放してっ…放してってばぁ――――っ！！」

その嫌がる彼女を無理矢理掴み、人質にするスキルアウト達、

「ちっ！！」

「はっはぁ～っ♪♪でかしたぞおめえ等っ！！」

なんとも卑怯極まりない彼等……更に人質を取られ形成逆転かぁ～！？と、ニンマリしながらナイフをギラつかせ身動きが取れない夏海に一歩、又一歩と差し迫る……正に大ピンチの彼女なのだが？？

その彼の表情は、先程までに無い、かなり異様とも言える殺気に引きつり！？

そんな人質を取られ身動きが取れない夏海は、

先程の半分遊び気分みたいな表情と違い……

目は座り、瞳孔が開きっ放しのような、正に殺しを平然としてきたかのように、

冗談抜きのなんともおぞましい表情に！？

更に今度は深々と身を屈めながら不可解な構えをし、左手には剣の柄にそっと親指を当てつつ右手はその脇に構える剣の持ち手の部分にあてがえつつ、
更に相対するスキルアウトに対し、

不敵な笑顔で睨みつけ、

「おいおいおいっ!!そこの嬢ちゃんどーなっちゃってもいいんかっ??ああ～ん!?しかもおめぇ～…その妙な構えは何だっ!?」

「ふふ??ねぇ～…そんなチンケでベタな罠にこの私が引っ掛かると思って??…それにこの構えは、偽装術式……七斬抜刀術(ななせんばっとうじゅつ)って、アンタに言っても分かんね～かっ♪」

「まぁ……そんな卑怯な手を使った以上アンタはクズ決定だなっ!おめでとさんっ!!だからさぁ～一辺殺してあげるわっ♪
この私が”天草式である由縁”、たっぷりとそのデケエ図体にプレゼントしてやる、もっともコチツを食らって大抵の魔術師達は内臓ぶちまけながら断末魔ってとこだが…多分アンタ頑丈そうだし、大丈夫だろっ♪」

「ひっ!?」

「とにかくごちゃごちゃうっせーんだよっ！！いいから早く来いよっ♪♪ほら～っ♪♪」

しかし、奴は、なにかしら先程の余裕な表情と違い　その彼女から湧き出る魔力みたいな、もしくは気迫みたいな物がより一層強まるのを感じとっていた、このまま闘ってはいけないと、

そんな普通じゃ無い獲物を狩るような、彼女の目を見つめ、一瞬ゾクリ……と何かを…けして踏み入れてはいけない恐ろしい何か魔物のような物を相手にする恐怖を感じ……額からなにかしら冷やりとした嫌な汗が伝う……

しかし、そんな彼に好機が訪れるように更にゾロゾロと彼の仲間のスキルアウト達が訪れているのを横目で確認、そして、彼は…

「おうおめえ等っ！！」

「えっ！？」

「俺の変わりにあの姉ちゃんの相手しろっ！！」

そんな仲間に無謀な命令を下しつつ、その図体には似合わない速度で廃墟ビルの奥へその他の仲間と、人質のいやがる涙子を無理矢理引っ張りに逃げ込み、

「ったく折角”殺しが出来ると”盛り上がって来たってのに！！待てやこの野郎――――――っ！！」

すかさず間髪入れずに逃げ出したスキルアウトを追跡！！
目の前に立ちはだかるその他の輩を次々に一撃の如く峰打ちを食らわせつつ彼女も又ビルの中にっ！！

そして、そのビルの中を舞台に数十名のスキルアウト、更に只今神社に赴く為の術式の準備をする光雄達、更にとうとうぶちギレてしまった、暴走状態の夏海と、人質になっている涙子！！

舞台は、更に廃墟ビル内へっ！！この先様々な人達が交ざりあい重なり合い、混沌の乱戦になりつつ！！

次回へ続くっ！！

第五十三話　大乱闘！！神社での攻防…（後書き）

今回は主役の活躍が…と言うか、殆どサブキャラ同士の能力バトルで…（汗）

まぁ、次回はいよいよ主役を含む様々な奴等が能力バトルっつー罠でっ！！

次回もお楽しみに～♪♪

第五十四話　とある神社の魔法戦争――――その３――（前書き）

すみませんが

未だに今回パートまだまだ続きますｗｗ

でも、後数話で終わるんか??

まぁ～それは置いといてっ!!

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ!!

始まり始まり～♪♪

第五十四話　とある神社の魔法戦争――その３――

……――とある遥か永遠とも唱えれば、そうでは無いと言える古の世界……――その混沌と降りしきる雪、遥か先まで、見渡す限りの白い大地、

その静寂に満ちた凍てつく世界、

その白く続く大地を一人の僧侶らしき人物が、肩から背中に大きな袋を片手で支えながら背負いつつゆっくりと一歩ずつ雪を掻き分けるようにとある場所に赴くべく進む、

周りはかなり津々と冷え込んでいるのか、白い息を吐きつつ、

何かを感じるのか、ふとその場に立ち止まり、その灰色に染まる空を見上げ、……その彼の目に映った物とは……

そう、その灰色に染まる静寂な空をまるでオーロラの如く照らす、美しい光りを……――――――

――まるで…魔法…だな――と――――……

――――――

…―それは、白く染め上げる大地に降り立つ一筋の光り――汝は、この世界、そして…世界と世界を結ぶべく存在しうる場所……其処へ赴き何を望むのか、その先の見えない混沌としたこの灰色に染まりし世界に光りを……そう……――――その灰色の世界、それを色とりどりに染め上げるべく……

――…汝は――……

―――――――……

―――――――……

――……

―…

……――西暦２０ＸＸ年、夏、今その場所は現在、学園都市、第七学区の外れ側に位置する、取り壊し予定の廃墟ビルが建ち並んでいた、そのビルの一つ、その薄暗い広場の奥深く、蝋燭（ろうそく）の光りだけがその広場をうっすらと照らす……

その古の神社に赴くべく着々と、式の準備を進める人達、

「ちょっとちょっとぉ～っ！！光雄っ！！そこっ！！踏まないでくれるっ！？邪魔なんだけど、」

「うえっ！？ああ、悪い悪いっ！！よっと♪」

と、何かしらの床に描かれた線を堂々とふんずけているみたいでそれに気付かない光雄と

そんな間抜けな彼を、当然の如く相対するように佇みながらズビシッ！！と指を刺しながら指摘するマリオン、そして、慌てるように避けたが良いが？？

「ええっ！？ちょっ！！」

「へっ！？」

ドガシャンッ！！と、そこに居た別の人物と勢い良くぶつかり合い

「ううわっ！？すっ…すすすみませんっ！！」

「いえいえ……わ…私もよそ見していましたからっ♪♪」

「マジ…こちらこそ……って！？お、お絞りっ！？しかも何で、スンゲー数が……（汗）……っつ～か、こんなにあいつ持っていたん……うひぃっ！？」

「おいっ貴様……これ以上、五和に近付いたらその間抜けな首が飛ぶ事になるぞっ！？」

と、勢い良く床に描かれた線を避けつつよそ見をし、マヌケにも近くに佇む五和に激突！！

お互い床にすっ転び、彼女の落とした”なにか？？”が気になるのか、マジマジと見入る彼なのだが！？

迂闊に五和様に手をだしちゃったら当然、

「ほらほらぁ～……早く離れないと本当に貴様の！？」

「そっ！？……そそそれだけはご勘弁ぉぉ――――っ！！」

とまぁ～何とも冷や汗をかきつつその場をオーバーアクション気味に慌てて遠退く、なんとも可愛そうな光雄っ！！

うっはぁ～！？ったくこいつ等マジ危ねぇーっつーのっ！！
しっかしマリオンと違い、天草式の連中って、五和さんやあの危険極まりない下に居る夏海（なつみ）さんや雪絵（せつな）さん、みんなして得物振りかざしちゃって…（汗）

まったく…んなもんいちいち突き付けられちゃ～ぁ命が幾つあっても持たないっつーのっ！！

と言うか、雪絵さん…いつの間に、あんなバカデカイ得物持ってたんか？？たしか……あの教会じゃ只の日本刀みたいな剣だったよ～な……何か今まで気がつかなかったが、五和さんや雪絵さんとか♪天草式って結構レベル高いよな～♪♪
武装美少女ってか！？
ぐへっへへｗｗ

って！？いやっ！！何故んなもん気になるっ！？しっりしろ葛城光雄っ！！君はマリオンちゃん一筋じゃないですかぁ～とっつあんよ～……

「……チラ…」

「あんっ！？……」

うひっ!?ややべぇ――っ!!目が合っちまったっ!!可愛いけど……こ…こ怖えぇ――っ!!って!?睨んでんのかっ!?やっぱ俺様の事睨んでいますよねっ!?

そんな、なにやらふと雪絵と目が合ってしまい油汗をかきつつ後退りする変な光雄??、

別に睨んでいる訳でもないが、そんな妙な動作や行動をする彼になにかしら面白いのか夏絵もそうだが、好感的な彼女なのであるが??なにかしら気付きつつ一旦首をかしげ!?何を思ったのか!?ニヤリっと!?

意味ありげな表情をしつつその長い黒髪を片手でかきあげ、ツカツカと歩み寄る彼女、

「そうそう、アンタさぁ～…神社に行くのにその恥ずかしい格好って着替えなくてって??……なに?」

「あっ!?……あ…ああの～せ…雪絵様っ??い、いや何でも無いんだが、その槍みたいな斧みたいなのあんま人様に向けられちゃ～ツンツン痛いんですけど…（汗）」

そんな、かなりテンパる彼に対し、彼女は自分の持つ大刀を彼に

翳(かざ)しつつ、更にツンツンと…と言うか彼の妙なリアクションを見て楽しんでいるような……（汗）

「ああ、月氷飛龍刀(げつがひりゅう)か??まぁ～…これは先程前に、えぇ～と…エクスマスさんに魔導工房(エンチャント)された私の武器がこれなんだけど…それがっ！？」

「あっ！！そう言えば試し切りして無かったわねぇ～……ねぇ～ねぇ～ちょっ♪……ありっ！？」

「あらあら、何か葛城さん、変な雄叫びを挙げつつあっち側に逃げていったけど雪絵さん、あまり彼をいじめちゃ～……」

「へっ！？五和ぁ～…べ……別に私、アイツの事そんな風にした覚えは…（汗）」

とまぁ～そんなニンマリする雪絵(せつな)がよっぽど恐かったのか！？ビビりながら忽然と姿をくらましちゃった彼なのであった……（汗）

◇◆◇◆◇◆◇……

一方その頃そのビルの下の階では、

先程前、涙子を人質に取り、そんな行為が仇となり、逆境に触れてしまい、暴れり夏絵から命がらがら逃げて来たスキルアウトのボス率いる数名の輩が徘徊していたのだが??

「うひぃぃ〜っ!?あんな小娘の癖に、ボス!!こりゃ〜そこのお嬢ちゃん、早く手放して誤まっちまった方が…」

「うっせぇ〜っ!!今俺はスンゲ〜頭に来てんだがよぉ〜っ!!」

「でもこのままじゃあ……アイツ…スゲー切れ味の得物持ってたしスゲー技の使い手…しかも発火能力(パイロキネシスト)、あの戦闘力…Ｌｅｖｅｌ４か!?」

「更に、あんな眼を……ありゃ～…平気で殺人して来た眼だよ…もしかしてなにかしらの暗部の輩じゃ～…」

そんな中、何かしら閃いたのか、ニヤリ…と、先程のあの悲惨な表情と違いいつもの余裕な表情に??

そして、突然携帯を取出し誰かしらと会話する彼、更にその他の彼の周りを取り囲む輩に??ひそひそと

皆して、何かしら相談を初め出し……
善からぬ悪巧みを初め出した彼等なのである、

そんな彼らに人質にされ、黙ったまま下を向きつつこのままじゃ人質として何をされるか分からない恐怖と、自分自身何も出来ない苛立ちと、頭のなかが混乱している涙子……

あ～あ……私……ほぉ～んと何やってんだろうな、
初春ん所にさっきまで居たのに、突然マリオンさんや葛城君に会いたくて、
彼のＧＰＳを頼りにこんな場所まで来たけど…結局彼に会えない所かこんな奴等に捕まり、

さっき…私を助けてくれたあの人を困らし……

私……一体どうしたら……

そんな事を思いつつ、何げに携帯を開き液晶画面を開く涙子……

えっ??まさかっ!?

と、そんな液晶画面を見つつさっきまでの屈強な表情では無く、段々と希望に満ちあふれる笑顔にっ!!

突然奴等に悟られないようにそっと携帯をポケットにしまい込みつつ、周りを見渡す涙子!!

その液晶画面には、そんな彼女が待ち望んでいた彼の名前、そして彼女の見つめる目線の先…遥か彼方にうっすらと見える非常階段……そこに、先程なにかしらの理由で上の階から降りて来たであろう、ひっそりと奴等に悟られないようそっとジェスチャーを送る、葛城光雄の姿だった!!

◇◆◇◆◇◆……

そして、そんなこんなで様々な人達がてんやわんややってる廃墟ビル……

その廃墟ビルに更に近づく新たな人物が二人居るのである…

「確かに、かなり胡散臭い場所ですわね…まさかこんな場所に集まり幻想御手（レベルアッパー）の情報交換等をやっていたとは、初春が教えてくれなかったら分かりませんでしたの」

「ええ、そぅ～ね、さぁ～…ほらほらグズグズしないっ！！黒子、行くよ♪」

「えっ！？ちょっ！！御姉様っ！！迂闊な行動はって、ダメですのっ！！」

と、幻想御手関係の何かしらの情報交換や売買と、
それらを目的に集合するスキルアウト達、
そんな彼等から何かしら手掛かりを貰いに赴いた、黒子と美琴、
彼女達は何故こんな場所を突き止めたかというと、先程から数十分前に遡る……

◆◇◆◇◆◇◆……

ここは、廃墟ビルからだいぶ離れた地点、
同じく第七学区の街並みから少し離れた静かな住宅街の道路沿いに学生寮が幾つも建ち並び、
その中の少々モダンな三階建ての学生寮、
その学生寮の三階に位置する部屋に、風邪をこじらせ只今安静にしている初春飾利……
その彼女に先程部屋を勢い良く出て行った涙子の後、更に二人の学生がお見舞いにやって来ていたのである、

そして、只今ベットに座る飾利、
その部屋のキッチンで紅茶を湧かしている黒子、更にベットの真

横に設置してある小さな机に座る美琴と、

そんな彼女等は、なにかしら相談中なのであるが？？

そのベットに座りつつ、飾利は、只今リビングで紅茶を造り小さな机に美琴の分を置きつつ、

美琴に相対するように腰を下ろす黒子を眺めつつ、

「白井さん、あれから幻想御手（レベルアッパー）とかの、何かしら手掛かりはありましたか？？」

と、そんな黒子は眉をしかめつつ考え込みつつ、

「うう～ん…有ると言えば有る、無いと言えば無いですの…」

「うえっ！？」

更に、何かしら考え混むように紅茶を一口飲みつつ、ポツリと…

「解ったのは、あの能力がＬｅｖｅｌ２と言う事だけ…」

その”能力はＬｅｖｅｌ２”と言う単語になにかしら引っ掛かったみたいで、美琴は、そんな二人に口を挟み、

「でも、マリオンさんと戦ってた、あの時見た彼の能力……あれは絶対Ｌｅｖｅｌ４クラスじゃ…やはり彼も」

その美琴や黒子の会話に首を傾げつつ、飾利は、

「それって、実体とかどんな代物とか、やっぱり更に分からない事が増えた…と言う進展ですか??」

と…

そして、まるっきし何もかも手掛かり無しみたいに三人とも頷きつつ頭を抱えるのであるが、

飾利は、ふとひょっとしたらっ!?と、何かしら思い出したみたいに、二人に話しかけるのであるが??

「「……ええっ!?マジでっ!!」」

「そうなんですよっ!!以前何げにネット掲示板にそれらしいのが

書き込みしてあったの見た事ありますっ！！、……たしか…」

「何処の掲示板か分かりますかっ！？初春っ！！」

と、その初春の一言でいきなり進展したみたいに、更に一気に紅茶を飲み干しながら黒子は初春に質問するのであるが？？

「うえっ！？ええ～…と」

と、自分のマイノートパソコンを何処からともなく取出しつつ、カチャカチャとネットに繋いで行く初春……と言うか、自分のベットにパソコン持ち込んでいるんか？？

そして、二人が見守る中その掲示板のサイトに繋がったみたいで液晶画面を黒子達の方へ向けつつ、

「あの～♪♪繋がりましたっ！！これじゃないですか？？」

「ええっ！！これですわっ♪」

「初春さんさっすが～♪♪」

と、確かに、その掲示板は、様々な輩が幻想御手（レベルアッパー）に付いて、書き

込んでいたのである！！

「後は、奴等の溜り場とかを突き止めればっ！！」

そんなさっきまで悩んでいたのは何処へやら♪
正に今にも調査しに行こうとやる気まんまんな黒子、そして飾利は表示板の書き込んである輩が良く集まるような集合場所を突き止めたらしく、そんな黒子に、

「多分全部までとは言えませんが、よくここの場所に集まっているみたいですよっ♪」

そのいかにも胡散臭そうな、”廃墟ビル前”と言う単語をみつつ、なにかしら確信したかのように頷く二人、

そして、

「ありがとう初春さんっ！！あっ！！後お大事にねっ♪」

とまぁ～逆に、ヤハリ、そんな面白そうな事に、かなり耐えられないのかもっとやる気まんまんな美琴??は当然真っ先に部屋を飛

び出し!?

「お…おお姉様っ!!これはわたくしの仕事ですのよっ!!お待ち下さいましっ!!」

とまぁ～何故か、そんな勢い良く飛び出して行った黒子の跡をテレポートで追い掛ける始末……（汗）

◆◇◆◇◆◇……

そして、現在に至るのであるっ!!

そして、その廃墟ビルに向かい先頭を歩く美琴は、ふと立ち止まりつつ、その場に立ち尽くし……

そんな様子の美琴に後から追って来た黒子は??

「お…お姉様、あれは一体」

そして、そんな廃墟ビルがある現場を見つめる美琴は、何かしら警戒しているのか、身体中電気を纏いつつ、

「黒子、とにかく迅速に警備員（アンチスキル）に連絡して頂戴っ！！」

「ええ、分かりましたわ…でもお姉様は？？……」

「ええ…私は……アイツ等を止めて来るから……」

◇◆◇◆◇◆……

そんな警戒する美琴達の軸線上に、なにかしら複数の能力者同士が戦ってたのである、

そう、先程前に涙子を人質に取られビルの中へ奴等を追い掛けるべく向かった彼女、天草式の夏絵だが、

よりにもよって複数の変わった能力者に何故か苦戦……劣勢中なのであった、

「ハァッ……ハァッ……ちっ！！……て…てめぇ等…」

「ふふ……さっきまで、良く避けられましたよね……しかし私の能力とあなたの得物を使用する能力とじゃぁ～ほぉ～んと、相性が良すぎですわねぇ～！！」

「ったく……さっきからごちゃごちゃごちゃごちゃうるせぇ～んだよっ！！このオカマ野郎っ！！」

そんな先程のあの圧倒的強さは何処へやら…

そうそんな彼は何かしらの音波系の能力者なのか、指をパチン…と鳴らしつつ彼の周から何処からともなく集まり出す蜂達……それが大量に集まりつつ、何かしらの黒い塊と化しているのである！！

「まぁ～…もっとも今からこのわたくしの能力、操彩音波（デフォックスコート）……ふふ…ありとあらゆる微生物から猛獣まで操る事が可能なのですよ…」

次の瞬間！！その指を鳴らした指先に集まる蜂の大群…その大群に更に命令するように、一旦距離を置き、相対するように剣を構える夏海に向けて指を差し…更にパチン…と、その彼の周りに集まる蜂の大群に更に命令を下し…瞬間！！

ブワァ…っとその蜂の塊が一斉に彼女を襲う！！その彼女に迫る蜂の大群！！

でも何とか得意の足技でギリギリ大群を回避しつつ飛び込んだ地点……その地点に今度は異常な圧力が彼女を襲い？？

「へぇ～？？こいつがあの俺達のボスをねぇ～…しかしっ！！」

更に、彼女の３６０度から襲う高重力！！それを得意の瞬発力で何とかギリギリ回避！！

瞬間その彼女が居た地面が巨大クレーターに！！

更に着地した地点に留めといわんばかりに黒服の男が！？

「いかんなぁ～…まったく、天草式と言い少々ビビったが！？やは

り俺達、科学側の敵じゃ～ぁねぇ～なっ！！」

瞬間彼女を襲う予測不可能な広範囲の電撃！！

その光速に繰り出す予測不可能な攻撃に流石に回避出来ずまともに食らってしまう彼女！！

「ぐはあ――――っ！！」

そして、苦し紛れに展開した防御結界のお陰で、何とか大事には至らなかったが、既にその服装のあちこちはボロボロで、先程からの長時間の戦闘の連続がたたったのか、息が荒く、力尽きるかのように膝を地面に着く夏海、

「あらら～…もうのびちまいましたか？？もっとも、こんな奴よりわたくし達はボスを倒し、スキルアウト（ここ）の連中を束ねる新しいボスになるのだがねぇ～…」

そんな新たにその廃墟ビルに現れた謎の能力者達……彼等も又、幻想御手使用者(レベルアッパー)なのか??

果たして、その相性の悪い能力者にかなり苦戦な夏海、その彼女に勝路はあるのか、更に、ビル内で涙子の救出に赴く光雄と、その上の階で、神社に行く為の術式と祭壇の準備中のマリオン達

それぞれの物語が交差するこの廃墟ビル内での結末は??

又々無理やりだが次回へ続くっ!!

第五十四話　とある神社の魔法戦争――――その３――（後書き）

何かしらマジ終わりにくい展開に！？

多分、予定なのですが後二話は続き終わらす予定なので、

次回も更に乱戦に突入っ！！その乱戦に乗じて主人公と誰が？？神社に！？

まぁ～そんな感じで

次回もお楽しみに～♪♪

第五十五話　とある神社の魔法戦争――その４――（前書き）

とまぁ～なかなか先がすすまないこのパート……

まぁ～少しづつちゃんとエンディングに近づいていますから大丈夫って事で！？

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～♪♪

第五十五話　とある神社の魔法戦争――その４――

ここは、学園都市、第七学区内の取り壊し予定の廃墟ビル内……

その薄暗い広場のほぼ中央には、打ちっぱなしのコンクリート剥き出しの壁に囲まれた広場に、かなり不似合いな…祭壇が設置され、その地点を中心にまるで、幹線道路が広がるように白線が描かれている……

その祭壇の中心付近に４～５段位の階段が設置してありその登り終えた先には、

少し広いスペースがありその中心に魔法陣が描かれている…

その近くに小さな机と隣側には何かしらを設置する備え棚が置いてあるのである、

その中心付近に先程登って来たマリオン、　彼女の右手にはいつも持ち歩いている大きな青いバックを持ち……

そのバックを床に置きつつ、開き、中から次々と何かしら意味ありげな小さな魔法石や飾り付ける小物類を取出し机の上に並べている、

更にポケットから綺麗に折り畳まれた一枚のメモ書きみたいな紙を取出し、

目の前に設置してある、小さな机の上に広げつつ、　そんなメモ書きと睨めっこし、
備え棚や魔法陣に設置していく、そして最後にその祭壇の備え棚みたいな場所に両手でゆっくりと、
先程エクスマスの教会から持ち出したサッカーボール位の丸い石をゴトリ……と置き……

「さあ、準備が出来たよ…光雄……」

そんな一言を告げるマリオン、
そして再び自分のバックから取り出した一冊の使いふるした魔導書を取出し左手に持ち、
その脇に立て掛けてある自分の杖を右手に持ち、
そしてそれらが皆意味するようにその祭壇に先程設置した様々な物にかざし、総て整い、
一つの術式が完成し魔導書のあるページを開きつつ

目を閉じ、深呼吸……そして、その祭壇に命を吹き込むべく式を唱えはじめる彼女…

「…――――目覚めよ、そして遥か古から伝わる我が身体に宿りし水を司どりし精霊達……そしてこの世界に存在する命（マナ）に命名する、我が名は『Ａｑｕａｒｉｕｓ－Ｎａｖｙ２２２（蒼く静寂な海の如く）』そして、我に従えし遥か古の路を切り開け――――…」

◆◇◆◇……

すると、彼女の問い掛けに従うようにその祭壇が機能し始め、先程の蝋燭（ろうそく）に照らされる祭壇所からその光を打ち消すように蒼白く美しい輝きを始めるあちこち設置した魔法石達、

そして床に描かれた魔法陣も同じくその魔法石と魔力を連動しているみたいに輝き始め…祭壇に設置してある様々な色とりどりの魔法石達と、様々な物、そしてその祭壇の周りを織り成す光に明るく照らされ始める広い一室……

その様子を祭壇の真下から見上げていた、雪絵、そして五和、

「これが、あのマリオンとか言う彼女の力なのか！？この懐かしくも暖かな輝きは…これが、彼女の身体に宿るせ…い……れい！？」

その祭壇の中心に佇むマリオンを眺めながらかなり珍しい現象を魅入るような表情で口を開く雪絵……

「そう、彼女の精霊（マナ）とか言う霊体を使用する術式は、私達天草式よりも歴史がとても古く…又、世界で最も美しいとされている魔術と、以前女教皇（プリエステス）様から聞いた事あります」

そんな五和も彼女の身体に宿る精霊達の光に満ちていく祭壇を見上げながら、

その蒼く輝く美しい光に照らされながらその様子を、只、ぼんやりと眺めているのであった……

五和は、今までの経験で数々の魔術師達の織り成す理解不可能な現象を観てきた訳でもあるが、

マリオンの織り成す魔術……世界に数えるほどしか存在しない精霊式古代術式……

いわば彼女が形だけ属しているローマ正教だけでも無数に存在している魔術の中でも

出くわす事は無い、

彼女が用いる世界中最も最古の古（いにしえ）の超古代文明の遺産『古代魔術』と言われる分類に、

ただ…ただ、二人してそんな彼女の様子を見つめるだけであった……

◆◇◆◇◆◇……

そして、時刻も既に夕方に差し掛かり、先程まで雲一つ無く天まで届くような青空は、既に日が落ち初め段々と鮮やかなオレンジ色に染まって行く……

その空の真下、オレンジ色に照らされ、真っ赤に染め上げられる廃墟ビル……

そのかつての繁栄を総ての栄光を、遥か彼方時の海に沈み行く遺跡のようなシルエットの真下…

相対するようにお互い一歩も引かない、能力者と魔術師……

かつての何百、何千年と、遥か古から繰り返される永遠とも言える戦い……この小さな戦いもそんな歴史の片隅に……

そして、相対する魔術師は力尽き、能力者はその魔術師に最期を飾る幕引きを振り降ろすように、最大の技を繰り出さんと、彼女に対し……

そんな矢先、彼等の前に立ちふさがる新たな能力者!!

「うっ!?」

なっ!!なんだ今の技は、このわたくしの能力操彩音波(デフォックスコート)が!?総て一瞬にっ!?
そんなバカなっ!!

いや…あの底知れぬ出量とエネルギーはっ!?まさかっ!?

「き…貴様は何物!?……いや!!援軍かっ!?」

その電気を纏いながらこちら側を睨みつける彼女
その彼女に対し、何かの警告をする夏海、

「うぐっ!?助けを呼んだ覚えは無いが…アンタは早くこの戦場から離れろっ!!」

「ったく…そんなボロボロの身体で、よくもまぁ〜…アンタも幻想(レベル)御手絡(アッパー)みの口なの??」

と、キッと相対する二人を睨みつける美琴なのだが、そんな彼女に叫び出す夏海っ！！

「くっそぉぉ――――っ！！次から次えと能力者が来るなんてっ！！こんな所で手間取ってはっ！！おいっ！！アンタっ！！」

「あん！？なにっ？？」

「私はこんな所で立ち往生してる訳にはいけないんだっ！！先程あの奴等に私の大切な友達が捕まり人質になりあのビルの中に逃げこんだ奴を追い……私はっ！！彼女を救けたいっ！！それだけだ！！もう少し…後もう少し力があれ！？……」

「いや、大体事の成り行きは分かったわ……まぁ～…この先は私個人的な喧嘩だからアンタこそ引きなさいっ！！」

◇◆◇◆◇◆……

先程、彼と相対する天草式の夏海（なつみ）に留めといわんばかりに能力を解き放ち、有りったけの蜂（はち）や蝗（いなご）の大群を呼び寄せ、彼女に襲い掛かろうとした瞬間！！その虫達の大群もろとも突然の一筋の凄まじい雷鳴と共に一瞬で総て焼かれ、消滅！！

そんな凄まじい電撃を放てる能力者、

その彼女に対し先程知り合ったばかりの涙子を人質に取られた事の成り行きを恥を忍んで助けて欲しいと語り出す夏海……

その彼女の一言で何となく現在の状況を把握しつつ　能力者達を睨みつける美琴！！彼女の参戦でこの廃墟ビルでの攻防は、一気に！！劣勢からの逆転になるかっ！！

「ふふ……」

「ははっ！！おいっ！！そこの小娘っ！！貴様に問う…貴様も幻想（レベル）御手絡（アッパー）みか？？」

「あん！？」

「貴様はこの俺様と同系等の能力だな…貴様のＬｅｖｅｌは？？」

「へ～え！？アンタ…私と同じ発電能力者（エレクトロマスター）なんだ……って！？」

そんな電気を纏う黒服の男と対峙する美琴、

更にそんな中黒服の男の背後に佇む男が彼女に対し超時空圧力（ギガンティックプレス）の能力で彼女を押し潰そうとする前に！？

「なっ！？俺の能力の前にっ！？さ…砂鉄かっ！？なんじゃこりゃぁぁ――――――っ！！」

そんな彼が叫ぶ前に彼の重力圧力よりも逆に重い一撃が彼を襲い黒い塊に押し潰されもがき苦しみ出す彼！！

その後一瞬眩ばゆい閃光と共に凄まじい風圧と衝撃波が黒服の男を襲い彼の真横を通過する超電磁砲（レールガン）！！

その後彼の遥か後方で連続して爆発！！

「ひっ！？……き…貴様はもしかしてっ！？」

「へ～え！？もしかしてねぇ～…アンタさぁ～…知ってる？？例えアンタがＬｅｖｅｌ幾つになろうが絶対に到達出来ない力の差って奴を…」

「ひいいっ！？貴様っ！？まさか…この学園都市に八人しか存在しないＬｅｖｅｌ５…発電能力者（エレクトロマスター）の頂点っ！！第三位っ！！超電磁砲（レールガン）

御坂美琴かっ！？」

更に、そんな彼等の視界に突然割り込むように現れる人物が！！

「そこまでですのっ！！風紀委員（ジャッジメント）ですのっ！！立ち入り禁止区画への不法侵入及び……」

「黒子っ！！」

「えっ？？お姉様っ！？」

「ここは私に任して……それより多分あのビルの内部に逃げ込んだ別の輩が人質を使い居るみたいっ！！……だからっ！！」

「了解ですのっ！！」

その美琴の一言を聞き、その場からあっというまに消え、ビル内にテレポートする黒子……

◇◆◇◆◇◆◇◆……

一方そんな頃ビル内の二階付近の薄暗い広場…

その広場の中央付近に屯する数十名のスキルアウト達……その彼等に捕まり只今人質になってる涙子、

その彼女がじっと見つめる軸線上の先には、

ひっそりと、非常階段の影に身を潜めつつその様子を伺う、葛城光雄が居るのであるが??…

そんな矢先に突然彼の携帯がその広場に鳴り響く!!

うえっ!?やばっ!!

こここんな時にぃ~……ったく!!なんでこんなベタな展開になるんだよっ!!俺……最近……何げについてないよな……ことごと

く不幸が　いや…もしやっ!?上条(あいつ)か??上条(あいつ)の病気移されたかっ!?

ま…まぁ～それはさておき先程の着信は……
えっ??マリオンかっ!!くそっ!?……いや…マリオンちゃんなら許すっ♪♪……って!?いやいやｗｗ

そんなことよかこの状況を何とかせなあかんやなぁ～……マジで逃げ場無しかいとっつぁんよ～……（涙）

とまぁ～なんともマヌケにもその携帯の音に皆さん気付いちゃったみたいのようで??

その広場に居る全員の視線は、そんなあたふたと間抜けにもテンパる可哀相な光雄に集中っ!?

「誰だおめぇ～…しかもその”服装”」

「おめぇ～知らねぇ～んか??あの”服装”は魔法少……」

うぐぅ～……とうとう見つかっちゃったのは不味いがそれよか、何故っ!?どおしてっ??
こいつ等みんなして、この俺様の超恥ずかしい”服装”ばっかに突っ込むんだ??

そんな、ベタなパターンなんか??そんなんで!?って!?今ポンッ……て俺の肩に??

やべぇっ!!俺の背後っ!!

そんなアホな思考中の彼の背後にいつのまにか近くまで…しかも背後からセクハ??……もといっ!!彼を捕まえようと差し迫るスキルアウト達……

「お穣さん……いや…マ〇さん♪」

「いひっ??……ひゃいっ!?」

そんな顔を引きつらせ冷や汗をかく彼……そんな矢先!!

はたしてっ光雄の運命やいかにっ!!

てな訳で又々無理やりだが次回へ続くっ!!

第五十五話　とある神社の魔法戦争――――その４――（後書き）

はたしてっ！！この先はっ！？てな訳で、
とうとう主人公もこのまま能力バトルに突入か？？
みたいな……（汗）

いよいよ次回は、そのまま神社に？？
そしてエンディングに？？持って行くつもりだが……ヤッパ難しいかな？？

てな感じで

次回もお楽しみに～♪♪

第五十六話　とある神社の魔法戦争……――その５――……（前書き）

いやいや…今回はとある神社に居るある人物の謎が？？

まぁ～……ＳＦが苦手な方はごめんなさいっ（汗）

という訳で！！

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～♪♪

第五十六話　とある神社の魔法戦争……――その5――……

……――遥か、この時空の狭間に埋もれし永遠ともいえる刻の彼方…そんな何処までも続くかのような灰色の空を先程から見上げているある一人の僧侶らしき人物……

そんな彼は、肩から下に羽織っている着物らしき服装の下に、見え隠れするなにかしらこの時代には不具合みたいな服装……いや、服装というよりは、何かの密閉型の特別なスーツにも見えるのだが……

その彼は、先程からその場に佇み…真っ直ぐに仰ぐように、その雲の間から差し込む煌びやかな光りを眺めていたのである――……

「まるで魔法のようだな……」

「いや……あれはっ!!間違いないっ!!あの光りは!?」

その、彼が佇むこの世界…更に今迄に無かったこのあり得ない不可解な現象……

そんな現象を眺めつつ、彼は思い出す…そんな記憶の彼方に埋もれた懐かしきこの輝き……

今更……まさか、しかしあれは間違いなく我々の光り……我が故郷…魔法石（マジックストリングス）が織り成すあの光りを！！
援軍が来たのか！？

彼の既に忘れ去った遠くにある記憶……
そんな遠い過去を思い出し、そっと目を細め…なにかしら物思いに耽るように…
その灰色の空を突っ切るかのように差し込むそんな魔法のような不思議な光りを眺めつつ――……

――――――

――――

◆◇◆◇◆◇――――……

……――――そう――あの時私は……――――カシオペア方面に展開中の第六十八艦隊に合流するべくとある星域を離脱中……

我々を含む第七?艦隊に属する我が艦は、ある不可解な事態に陥ったいた――――……

「かっ…艦長っ!!先程の衝撃で、第四世代型超縮対型推進制御装置(ムゾルバックシステ)出力低下っ!!制御出来ませんっ!!」

「姿勢制御装置っ!!及び第九区画大破っ!!生存者は……」

「……そうか…」

「艦長っ!!」

「なんだ!?今度はどおしたっ??」

「だっ!!駄目ですっ!!全艦総ての魔力継続システムに異常がっ!!」

「くそっ!!一体……この空域で何が起こっているんだっ!?」

そう…私はあの日……この惑星に降り立つ前……我々の乗る艦は、ある作戦の為、亜光速航行中、謎の次元震動みたいな事態にわれ、魔導制御装置…及びその源である蒼白く輝くクリスタル…魔法石（マジックストリングス）（マジックストリングスシステム）の魔力の異常な暴走によりその装置を用いて産み出す亜空間フィールドから強制的にフィールドアウト！！、

そのまま未知の惑星の引力圏に引寄せられ大気圏に落下……

我がシリウス方面の空域から遥か別方面に位置する銀河系とか言う星系の一番恥側に位置する太陽系のとある未知の第三惑星に不時着し――……生き残った者達は

その未知の惑星で幾つもの刻を……我が故郷に帰還する事を夢観て……そして、その夢も刻の彼方に費え、この未知の惑星に住む原住民達と共に我々が用いるそのエネルギー源で次元ジャンプをも可能とする超科学の結晶……魔法石（マジックストリングス）を用いて異文明を築き上げ…　繁栄を……

そしてその彼等も又、その自分達が築き上げた行きすぎた超科学文明と共に滅び行き、

この星に”遺跡”と言う名の彼らが生きてきた証を刻みつつそのまま異国のこの地の土に埋もれて行ったと言う……

そんな中、私は亜空間ポケットと言われる次元断層の井戸に落され、唯一生き残り、今日（こんにち）も、その鎖された空間、この遥か彼方まで続く極寒の地で、ただ…ただ……永遠と言う名の牢獄に囚われている……

……――そう…遥か彼方へ誘えし、時空を越えし刻の迷い子達よ……この刻の片隅に忘れされし世界……その凍てつく氷の大地に今……一筋の光りを携えし者達が――――この私の永遠に続く地獄から引き摺り出してくれるかもしれない――――……

――――――――――

――――――――

――――――

――…

―◆◇◆◇◆◇……

そして、ここは学園都市、第七学区内の恥側に位置する取り壊し予定の廃墟ビル内……そのビル内の広い一室を蒼い輝く光りで照らす祭壇、

……――――先程彼女、マリオンの手によって、発動した祭壇……

その祭壇の中央付近に描かれた光輝く魔法陣、その中心の大気が揺らぎ始め…　この術式が意味する、遥か時空を越えて赴く神社へ誘う為の刻の扉が、今正に開きつつある!!

そんな中、その祭壇に自分自身の体に宿る聖霊を用いて命(マナ)を吹き込む術式を完了し、五和達の元に歩み寄る……そして、そんな彼女達を横目に周りを見渡し、

「ふぅ～……な、何とか式を完了っと!!……」

「あれっ!?光雄はっ??」

と…そんな肝心の彼、葛城光雄が居ない事には始まらないと…辺りをキョロキョロと探し始める彼女、

「あ…あの～……お疲れ様ですっ、はい、どうぞっ♪♪」

「あっ、ありがとうございます……五和さん、ええ～と…」

「そうそうっ♪葛城さんでしたら、先程前に下の階に行ったっきり戻って来ないのですが……一体…」

そんな、時刻は既に夕方を差し準備も整い、後はその神社へ行く予定の彼、光雄が来るだけなのだが、その肝心な彼はここには居なく……

「っとにもぅ～……あの光雄（バカ）一体何処ほっつき歩いてんのよっ！！」

そんな事を言いつつ携帯を取出しつつ彼に掛けるのだが??

「……まったくっ！！」

と、やはり予想どうり全然出ないのである、そんな中痺れを切らし顔がみるみる引くきつつ!?妙な表情になりつつあるマリオン！？……さっきまでの静寂な綺麗な彼女は何処えやらっ（爆♪）

「えっ？…ええっ！？……ま…マリオンさんっ？？……ちょっ！？」

「いやいや……そ…そそんなお絞り引っ張っちゃｗｗ」

とまぁ～…こんな大事な時にも忽然と姿をくらましちゃった光雄（笑）…いつもの彼の事なのだが、流石にこの時刻……唯一刻の扉が開かれようとしているこんな重要な時、

流石のマリオン様も顔を引く尽かせ今にも千切れんばかりに力任せに先程のお絞りをぎゅうぎゅうと無理矢理引っ張りつつ（笑）

「だぁぁぁぁ！！もぅ――――――っ！！五和さんっ！！」

「ひいっ！？」

「これっ！！ありがとうねっ！！後、お願いっ！！この祭壇見ていてねっ！！」

「ええっ！？わ…わわわたしが！？」

「ええっ！！既に安定してるから大丈夫だよっ！！私っ！！ちょっとあのバカ光雄をぶっとばして連れて来るからっ！！」

そう言い残し、非常階段がある方向に駆けて行っちゃったマリオンっ！？……と言うか祭壇放置しちゃう彼女も彼女なのだが！？…（汗）

◇◆◇◆◇◆◇……

一方そんな頃、マリオン達が居る階から遥か下に位置する非常階段から二階の広場への出入口付近では？？

「へっ？？」

「ぐへら……ぐふぅ～、”おらの”マ○さん～♪♪マ○さん”おらの嫁”ぐへへ……ぐへっ！？」

「うっげぇぇぇ～っ！！だっ！！！…だっ…だから抱き付くな――――っ！！、なんじゃこのクソゴリ夫はぁぁ――――っ！？…俺は男だぞって？？…ひっ髭がチクチク……うひぃっ！？」

とまぁ～……なにやらそんな彼も絶対絶命のピンチであった……
べ…別の意味で……（爆♪）

ひっ!?ひぃぃぃっ!!ななな……なんじゃこの提灯ゴリラはぁぁ――っ!?ひぃぃっ!?力任せに、鳥肌がっ!!かっ身体が超拒否反応起こしているっ!!奴は何者だっ??（…いや…只のゴリラだと思うが…（笑））

くっ!!いいいかんっ!!頭が混乱して演算がっ??こ…ここのままではっ!?そういやぁ～佐天さんはっ??

「……チラッ?」

「…じと――――――……」（注：すんげ～軽蔑の眼差しで複雑な表情の彼女…（笑）…）

「……あはっ♪（涙）…」

ですよね――♪そうですよねっ佐天さんっ……分かっていると

も、うんうんっ♪……こんなゴリ夫に後ろから抱きつかれ挙げ句の果てにゃ～……スリスリと……（涙）

と、そんな大ピンチ??な彼の目の前の空間が歪み、突然現れた正義の美少女テレポーター!!

「そこまでですのっ!!風紀委員（ジャッジメント）ですのっ!!立ち入り禁止地区の無断使用及び無関係な一般人を巻き込……み……って!?」

「あはっ♪し…白井さん??」

「……あのっ…一体アンタはここで何しとるんですのっ??」

「うひっ!?……（汗）」（注：只今言葉は出せないかじと眼で訴えてる可哀想な奴♪」

◇◆◇◆◇◆◇……

す…数分後……

「ハンッ!!下に居るお姉様に人質が中に侵入してると言われて慌てて来たのですけれど…いつぞやの変態さんだったとは……見当違いでしたわねっ!?」

「いっ!?いいいやぁ～ご機嫌うるわしゅう事ですのっ♪♪白井様っ…これには深～い訳……（汗）」

「で??はて……そちらさんとお楽しみ中のこの状況ではどんな理由を並べてもいささか問題がありそうですわねぇ～??」

「いやっ!!そそそんな事よか白井さんっ!!後ろっ…後ろっ!!」

そのしかめっ面で首を傾げつつ仁王立ちし、
彼と相対している黒子の背後から
そっと……悟られないように彼女を捕まえようと差し迫る数名のスキルアウト達!?

しかしっ!?

彼女の背後に襲いかかろうとした瞬間!?

「なっ!?」
「消え??」

「「……いぎいっ！！……」」

とまぁ～……突然彼等の目の前から忽然と消えた彼女！！

「「えっ！？」」

と、言葉を発する前に？瞬間二人してアッという間に天地が一変！！そんな彼等は一体自分自身に何が起こったのか状況判断に脳が追い付かないまま地面に逆さにダイブ！！

ズガシャンッ！！と鈍い音を立てつつ堅い床に激突！！そして意識を落とす……

そして、只今ゴリラに後ろから抱きつかれている何とも可哀想な光雄を無視しつつ？？

「なっ！？てっテレポーター？？だ……とっ！？」

「ひっ！？」

「のわっ！！」

と、更に間髪入れずに

踵を帰すように振り向き疑惑に

その彼女の遥か後方側に佇む数人のスキルアウト達を無理矢理１人は空中に放り投げられ、

又１人は壁に逆さに叩きつけらと、

１人…又１人と次々にアッという間に片付けて行く黒子！！

と、そんな無双状態の黒子をただボーゼンと眺める光雄…

す…凄げぇ～…てっ…テレポーターだから為せる技だよな、あんなの的もに戦ったら、いやいや……（汗）んな恐ろしい事を!?

と、とにかく今が好機なのはたしかだな……てな訳で??

と、今がチャンスと言わんばかりに何とか余裕が出て来たのか、演算を開始し能力が使えるようになった光雄っ!!

そして、背後から抱き付いているゴリラを脅かすべく身体中からキラキラと、自分自身の光りの粒子を撒き散らし、その一粒一粒のそれ等が、まるで意志を持っているかの如く彼の周りを、下から上まで螺旋情に流れて行く……その彼の用いるこの一件、まるで魔法使い達が用いる魔法のような現象を口をアングリ開けながら眺める彼、と、ヤハリ予想通り先程まで抱き付いていた奴はというと、ヤハリ予想通り、光雄が織り成すまか不思議な能力に真剣のようで、先ほどまで馬鹿力で彼の身体を押さえていた腕の力が緩み、油断しているそんな隙に待ってましたっ!!と言わんばかりに、奴の眼前で強力すぎる程キツいフラッシュを炊くっ!!

すると??

「うがぁぁぁ――――っ!!目が…目がぁ――――…」

とさすがに目の前のフラッシュはキツかったのか、某アニメの悪役の断末魔のようなセリフを吐きつつ、　デカイ図体に似合わずなんとも猫がじゃれるようにその場に転げ回るゴリラ??……いや…これはこれでチト不気味なよーな??というかコイツ人間なんか??

真後ろのゴリラを撃退した後、無双状態の黒子から避けるように、人質の涙子を連れて、その場を立ち去ろうとする輩を辞任、

くっ!!……って!?オィオィッ!!奴等あのまま逃げんのかっ!?

しかも肝心の白井さんはその他の輩と戦闘中だし……ヤハリっ!!動けるのは俺様だけってか??

くそっ!!しかもここからの距離……ざっと１００m(メートル)以上あるぞっ!?今から駆けて……多分無理かな……（汗）くそっ!!どーする??考えろ葛城光雄っ!!なんか、なんか良い方法があるはずっ!!

あっ!!

そうだっ!!俺には……あれが…

そんな事を思いつつ、冷静に……そして一呼吸置いて……再び目を閉じ…演算を開始!!そして自分自身の足元に能力を集中し、粒子を加速させつつ身体をフワリ…っと浮かせて行く彼……そして、空中に浮遊しつつホバリングみたいな感じで浮遊しつつ…涙子の居る位置を更にもう一度確認、そのまま一気に能力を解放し!!ドバァッ!!と、彼の光り輝く粒子でその薄暗い一室を照らしながらこの混乱に乗じて、人質の涙子に一気に空中から接近!!すれ違い様にスキルアウトから、涙子を一瞬で抱き抱えながら離脱!!

「ええっ!?葛城君っ??」

「よっ♪今頃助ける事になっちまったが、すまんなっ!!でももう大丈夫だからっ!!」

「ちょっ!!そんなっ…私なんか…というかわっ!!私っ無理だからこんな密着し??」

「あっ!!ええ~と、後そんな涙子様の為に白井さんや今下で戦ってる御坂さんや上に居るマリオン…みんな来てるんだぞっ!!だから……そんな悲観的な顔するなよなっ」

「うえっ!?……な…なんで??みんなもっ!?こんな私……なおさら下ろし??」

「いや……今下ろしたら…佐天さん下を見てから

「ひっ！？……あはっあははははっ♪♪
とまぁ～…涙子救出作戦は成功するはずだったのだが？？

よしっ！！これでなんとか！？今ガクンって！？

ひっ！？

「「えっ！？」」
と、能力で自分自身の身体を浮遊し加速させて移動し、更にこの位置から涙子を抱え離脱しようとする矢先

彼の足に軽々と片手で捕まえ不敵な笑顔をする大男！！そんな奴が潜んでいる事も全然気が付かなった彼なのであるが？？

「くっ！！またもや馬鹿力な奴がっ！！ゴリラ二号ってかっ！？」

「へっへっへ……残念でしたぁ～っ♪♪さてっ！！何故俺様はアンタに気付かれずこんな場所に居たんでしょうかっ！！」

とまぁ～…先程撃退したゴリラに続き今度は彼の二倍の身長はある大男が彼に襲いかかるっ！！

「くそっ!!出力を上げようとしてもパワーがっ!!」
「キャアッ!!」

「おらっ!!こんな貧弱な足すぐ引き千切っちゃうぞ!!」

「いっ!?いぎぃぃぃ――――っ!!」
「かっ…葛城っ!!いいから早く私を放してっ!!私は良いからっ!!このままじゃ2人共…」

更に涙子を抱えながらかなり不利な状況の彼の足首をミシミシと引き千切ろうとする大男!!

そんな状況下で演算もままならない最悪の状況の彼!!

苦し紛れに光弾を数発形成奴に放ち勝路を開こうとするが??そんな光弾は彼の身体をすり抜け地面をえぐるのである!!

なっ!?…すり抜けた??もしかして、魔術か何かかっ!?

そんな状況下で足首から来る激痛に耐えられないのか、
冷静さを失いまともな思考がままならない状況下で奴の能力も知るよしもなく
留めといわんばかりに足首を更に強く掴み力任せに涙子如放り投

げられ、その勢いで、
思い切り壁に叩きつけられ涙子をかばいクッションになる光雄！！

その堅い壁と涙子の全体重がのしかかり、ゴキリッ…と彼の胸の辺りから嫌な音が聞こえ！！

「ぐあっ！！……」

くっ！！流石に嫌な音が激痛が身体中を駆け巡り……うぐぅ…いっ息がっ！？…まさかっ骨が肺にっ！？

い…痛いってもんじゃ無いぜコンチキショウ！！

「うぐっ……ゲホッ！！ゲホッ！！…ははっ…なんかこうもあっさりとやられるって…俺かっこ付かな……うっうぐぅぅっ！！」

「葛城君っ！！ダメ！！口から凄い血がっ！！」

私の…私の為に葛城も…そしてあっちで戦ってる白井さんも数で押されているっ！！中でさえこの数じゃ外の御坂さんもっ！？…みんなっ！！……私…私が何とかしなくちゃ！！みんながっ！！私は何で気が付かなかったのよっ！！こんな…こんなにも優しくて、良

い友達が沢山…なのに私はっ！！

そんな自分自身の事、
そんな能力云々のちっぽけなそんな悩み何か吹き飛ばすように私には…

あははっ♪なぁ～にをやっていたんだろうな～私っ！！こんなに素敵な友達が居るのになぁ～っ♪…

だったら簡単じゃんっ！！大切な掛け替えの無い仲間を守るっ！！私が！！

さあっ！！勇気を出すんだよっ！！涙子っ！！今彼を守れるのは私だけなんだからっ！！

「葛城君っ！！そこでじっとしててっ！！こ…今度は私がアンタを！？…」

そんな涙を目尻に貯める涙子の頭ををそっと優しく撫で、

「えっ！？……か…かつらぎ？？」

「ゴホッ！！しっ！！心配するな佐天さんっ…ほらっ！！」

そんな差し迫るスキルアウトのボス、大男にボロボロの身体に鞭を打つように立ち上がり再び相対する光雄、

そして、

そんな状況を打破するように彼等が佇む遥か向こう側からひと声
彼が嫌という程聞き慣れた声が！！その人物が一声唱える……

「その総ての物を凪ぎ払えっ！！『引き裂かれし水の刃（Ｓｐｒｉｔｅｌ Ｓｐｉｔｓａｂｅｅ）』」

「あん？？まさかっ！！援軍？？」
「「うぎゃぁぁぁ――――――っ！！」」

その一言唱えた瞬間！！４～５ｍ（メートル）はくだらない巨大な水刃が次々に間髪入れずに襲いかかり、ビル全体を揺さ振るような地響きと供に凄まじい衝撃波と、周り一面を破壊しまくる彼女が放つ技……水流系魔術！！

「グホッ！！ゲホッ！！さ…流石マリオンちゃん…」

「まったく…こんな大事な時に何処ほっつき歩いてんのよまったく！！」

「ほらっ！！光雄も佐天さん二人とも早く私に傷みせなさいっ！！

治癒の術式で治療するからっ！！まったくこんなボロボロに……」

「……あ…ありがとうマリオンさんっ♪」

「ゴホッ！！……まっ！！マリオンっ！！そんな事より早くコイツ等を…」

「うんっ！！そうねっ！！」

そして、先程からそんな様子を伺いながらへらへらと何かしら余裕なこの大男を睨み付け！！

「ねえ……あなたっ！！私達は時間が無いのっ！！それにあなた達が考えているほど私の魔術は甘く無いよっ！！…出来ればここら辺で引いてもらえないかな～」

「ふふ……いやだ…と言ったら？？」

「そう……だったら仕方が無いわねっ…私の魔術で半永久的に戦闘不能に陥るよっ！！」

そう、そんな彼女と相対する大男……彼は知らない…天草式と違い、

かのローマ正教の神の右腕もそうだが、その強大な魔力や精霊達によって敵を粉々にする高能力な魔術師と言う人物を……

遥か古より語り継がれて来たその気になれば一つの街を滅ぼすとも伝えられる力…

本物の魔術が!!能力者達に牙を向く!!

本気の彼女が用いる強大過ぎる力……『古代魔術の一つ…アクエリアスの涙』が!!

次回へ続くっ!!

第五十六話　とある神社の魔法戦争……――その5――……（後書き）

いやいや…なにやら無理矢理な展開で…（汗）

次回っ！！いよいよ主人公達はとある神社に赴き？？というか…神社なんか？？

てなかんじで次回もお楽しみに～♪♪

第五十七話　とある神社の魔法戦争――その６――……（前書き）

いやいや、まさかのこの神社シリーズ……ここまで続くとは…（汗）

そんな話しもいよいよ大詰めってな訳で??

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ!!

始まり始まり～…（汗）

第五十七話　とある神社の魔法戦争――その６――…

既に時刻は１８：００時にさしかかり、先程より更にオレンジ色に染まる雲一つない空…西側に真っ赤に染まり沈み行く太陽……

そんなオレンジ色の空にはもう一つ、その太陽と正反対に位置する東の空には、うっすらと空のコントラストに溶け込むかのように浮かび上がる月が見え…

そんな空の真下に真っ赤に染まり行く世界に溶け込むようなシルエットを醸し出し、

あたかもそんな何とも言えない幻想的な、遥か彼方の見知らぬ異国の地に趣いたかのような錯覚にとらわれる……

そんな廃墟ビルの周りやあちこちを舞台に、未だ激戦が繰り返されていたのである！！

そのビルの入り口前には、地面があちらこちらで深々と抉（えぐ）れ、無数のクレーターが出来上がり、

壁やロビーに繋がる屋根は、鋭利な刃物で切断されていたり又、所々粉々に吹き飛ばされ、中身の鉄骨すらも一体どんな凄まじい力

を加えたのか、グニャリと千切れ、

そんな建物の残骸に紛れ見え隠れする火傷爛れた何とも無残な大量の黒焦げの死体……いや…死体というよりも息がまだあるようで、全身火傷で皆、もがき、周りに肉が焼けるむせ返るような鼻をつんざく戦場の独特の異臭を放つ……

そんな光景は、まるで空爆に曝された市街地のような有様なのである!!

そして、このような地獄絵図を造り上げてしまった一人の幼い少女と魔術師は、その返り血をあびたのか、はたまた自らの血飛沫(ちしぶき)なのか、まるで戦場を駆る猛将の如く、少女とは思えない、1人は、数億Ⅴ(ボルト)の鮮やかな紫電を張り巡らし、又もう1人はメラメラと燃え盛る炎の剣を携えて、その炎の光で真っ赤に辺りを照らし、まるでこの世に降りてきた堕天使の類か、化け物のようである!!

そんな中、自ら戦線布告しながらも尻尾を巻いて、その戦場から全速力で逃げ出す人物!!

「ひっ!!ひぃぃっ!!…こ…こここんな化け物相手に出来るかってんだっ!!だ…だがっ!!この次に会った時に……はぁぁっ!?…」

「なんだとっ!?いつの間に先回っ??ひいっ!!」

「へ～え？？アンタは仲間を散々利用した挙げ句裏切るんだ……」

「ったく…そう簡単仲間を裏切る…そんなアンタを易々と逃がすかっつ――――のっ！！」

瞬間彼は立ち止まり、自らの目を疑った！！そんな逃げる彼の遥か上空からゆっくりと、まるで何かの悪夢を眺めるかのような屈強の表情で？？

「ひっ！？ひぎっ？？」

その彼の遥か直上に持ち上げられた、１つだけでも数ｔ（トン）はある、ビルの材料に使用する鉄骨がそんな小さな少女から発するとてつもないエネルギーを…　その彼女の桁外れの電気で引き起こした磁力で、無数にゆっくりとまるで生きてるかのようにそんな彼に狙いを定め、撃ち出された砲弾の如く凄まじい速さで大気を切り裂き襲い！！！

瞬間！！

グワンッ！！と、周りを揺さ振りながら凄まじい爆音を立てつつ

彼の周りを取り囲むように次々に地面に深々と突き刺さりつつ着弾！！

ブワッ…と、たちまち巻き上げられる砂煙！！そんな砂煙が風で流され……視界が徐々に晴れて行き、

そして、そこには、無残にも、美琴の常識外れなとんでも能力に散々脅かされたのか、その鉄骨の間で、恐怖で腰が抜けて、身動きが取れなく、震えている、

地べたに這いつくばる、この組織のリーダー、幻想御手（レベルアッパー）によって自分自身の潜在能力『操彩音波（デ゛フォックスコート）を携えた男……

その力をもってしても叶わない、力の差学園都市最強の超能力者Ｌｅｖｅｌ５を敵に廻してしまった事を後悔しつつ、震えながらただ…ただ…その彼に差し迫る少女に震えながら最期の時を迎えていた……しかし、そんな彼の恐怖に染まる思考とは裏腹に？？

「ひっ！？ひぎぃぃぃっ！！」

「ったく！！この人数を相手にしたのは初めてだっつーのっ！！手加減すんの大変なんだからねっ！！」

「ぐえっ！？」

その彼を足で力一杯踏みつける美琴、そんな恐怖に顔が歪む男を

見下ろす隣り側に佇む彼女、夏海（なつみ）は、そのメラメラと燃え盛る炎剣を彼の顔面に突き立てつつ、

「ふっふっふ……後はこいつを血祭りにっ！！さっきは良くもこの私を苔にしてくれたなっ！！」

「ひっ！？あひぃぃぃ――――っ！！だ…だずげでっ！！もうこんな…こんな能力要らないからっ！！この音楽プレイヤーが目当てだろっ！？アンタ達にもこれ？？」

「えっ！？」

「ごめんっ！！ちょっと待って！！夏海っ！！」

そんな彼が苦し紛れに差し出した１つの何の変哲も無い音楽プレイヤー、そのプレイヤーを受け取りつつ美琴は、命乞いをする彼に口を開き…

「ねえ……これ、これの何処が幻想御手（レベルアッパー）なのよ！！まだ白を切るつもりな訳？？」

そんな事を言いつつ、自らの電気で磁力を発生し具現化した、砂鉄の剣を夏海と同じく彼の今度は喉に突き付ける美琴！！

「ひっ！？やっ！！ややめっ！！……ほ…本当にこの…この音楽プレイヤーにダウンロードした曲が幻想御手（レベルアッパー）なんだっ！！だっだからっ！！」

「……なあ、美琴っ、彼のあの表情真剣みたいだぜ？…もうそろそろ許して挙げれば？？」

「ええそうね、……はいはいわかったから……ったく…もうこれにこりて、下手な悪巧みはしない事ねっ！！」

「うぅ……アンタ、Ｌｅｖｅｌ５なのに珍しい奴だな…てっきりこのまま殺され……ヒッ！？」

「ったく！！…私を殺人狂呼ばわりしないでほしいつーのっ！！…
…まぁ～気絶はしてるけどアンタ等の仲間も全員生きてるしね…」

「うぅ……」

「あ～……そうそう、後もうすぐ警備員（アンチスキル）が来るから、アンタの仲間達も助けてもらいなさい、」

その彼を見下ろしつつ一言を告げ、先程から中の様子が気になるのか、じっと廃墟ビルを見上げている夏海の肩を叩きつつ、二人その廃墟ビルの影にに溶け込むように入って行ったのである……と言うかいつの間にやらコイツ等仲良しになったんだ？？

◇◆◇◆◇◆◇……

一方その頃、その廃墟ビル内の二階付近…非常階段前に、未だ一触即発な状態のマリオンとスキルアウト達、そんなマリオンを横目に…光雄はマリオンにお互いに何かしらの合図なのか、ニッコリと微笑む彼女…

そして、無言でお互いに理解しあいコクッと二人して頷きつつ、マリオンの後ろ側から非常階段に駆けて行く！！

「あっ！！てってめぇ～っ！！逃げやが！？…」

「おっと！！行かせないよっ！！」

「こ……この小娘がぁぁ…」

マリオンはスキルアウト達の間に立ちふさがり光雄達が、階段を登って行くのを確認しつつポケットから何かしらのドリンク取出しそれを涙子に投げつけつつ……

「ねぇっ!!佐天さんっ!!これっ!!上に着いたらこの薬をあの光雄(バカ)に飲ませてあげてっ!!味は保証しないが佐天さんの分もっ!!」

「うえっ!?ま…マリオンさ??」

「絶対だよっ♪♪後上に着いたら五和って人が居るからあの人の指示にしたがってねっ♪♪」

と、優しげな笑顔で水色の髪をフワリとさせながら見送るマリオン、と、そんなん知るかと言わんばかりに目一杯の笑顔を作る光雄っ!!

「ああっ!!サンキューマリオ……ウゲホッ!!グホッ!!…」

「あっ！！こらっ葛城っ！！あんま喋ると…これ以上出血したら体力削れるでしょっ！！」

「痛っつ――――っ！！」

「あ～もぅ～…いわんこっちゃないっつーのっ！！…ほらっ！！肩貸すからさぁ～…と言うかこのドリンク？？まさかっ！！ポー○ョ？？いや…それにはあんま触れない事にしよう……（汗）」

とまぁ～（笑）、そんな事を言いつつ非常階段を上がる二人、しかしその向こう側から、

そのタイミングを見計らっていたのか、サッカーボール位の火炎弾を具現化！！それを

まるでドッチボールの玉投げのような素振りで大きく振りかぶり涙子達に投げつけるスキルアウト！！

「くっ！！光雄っ！！佐天さんっ！！伏せてっ！！」

「「ええっ！？」」

その攻撃にいち早く反応しつつ、急く座に式を完成空間を割って防御結界の魔法陣を光雄の目の前に張り、

グワンっ！！と、その魔法陣に吸い込まれ、接触と同時に派手に爆発！！そしてあっという間に消滅し、

その爆発によって出来上がった煙が晴れて行き、その後光雄達の姿は既に無く、

「ちいっ！！逃げられちまったじゃねぇ～かよコンチクショウがぁぁぁっ！！」

血相を変えて彼の後を追い、更に追撃しようとするスキルアウト達！！そんな輩の前に、

立ちふさがるマリオンっ！！

「ねえ…だからさっきも言ったでしょっ！！ここを誰一人通さないと、」

「けっ！！ちょっとばかし可愛い顔してるからアンタは相手しないつもりだったが！！これを見たらアンタも引く気になるだろ？？」

と、相対するマリオンに脅かしをかけるように今度は両手に巨大

な火炎弾を具現化する発火能力者（パイロキネシスト）！！

「おいっ！！なぁ～にをごちゃごちゃと、こんなクソガキと会話してんだっ！！殺れっ……早くっ！！」

「って??ボスっ！！コイツ…まだ子供じゃあ…（汗）」

「ふふ……あなた達っ！！そんな事を言い争いする前に自分達の足元を見てごらんっ♪」

「んだとゴラァ――――ッ！！」

「おいっ！?まてっ！！こ…これっ！！これ……」

「「……ひっ！?……」」

「「「って??……なっなんじゃぁこりゃぁぁ――――っ！！」」」

と、そんなぐだぐだとなにやら言い合いを始めるスキルアウト達

を横目に…そんな隙に式を既に組み上げたみたいで、纏めて血祭りにあげつつ、

クスリ…と不敵な笑顔を見せるマリオン……その先程までの表情と違い、冷酷な眼差しで見つめる彼女、そして相対するスキルアウト達に再び最終警告をする彼女、

「これが、最期の忠告になるよっ!!…私も無闇にあなた達を傷つけたくないのっ!!だからっ!!お願い…どうか引いてほしいんだけど…」

「くっはははっ!!何を言いだすと思ったら!!」

「んな訳無いだろっ!!アンタ、水流系能力（アクアマスター）だろっ!!見た感じＬｅｖｅｌ３か４って所かっ!!」

「おいっ鹿島っ……」

「あん??、なんだっ??そんなガキよかあれ…」

と、それと同時期に彼等が見つめる遥か奥の別側の出入口付近から接近するもう一組の別動隊、

先程その向こう側での戦闘で、保々全員を片付けた黒子、その彼女に合流した美琴達が此方にゆっくりと接近中なのである！！

「おいっ！！もしやあの人数をか？？」

「そおいやぁ～…ボスは？？」

「くそっ！！アイツ…俺達を置いて逃げやがったんかっ？？」

「いや、ボスは……」

「「「うひぃっ！？」」」

そのスキルアウト達は顔が引きつり恐怖する、まさかっ！！知らない内に目の前の相対する彼女によって壁側に幾つもの鋭い氷みたいな蒼く輝く氷山の一角のような巨大水晶を具現化し、その中に、閉じ込められなにかしら絶望に満ちた表情でクリスタルに両手を付けつつ彼等を眺めているのである！！

「なっ！！何だよあれっ！！あれも奴の能力なのかっ！？」

「俺…昔、聞いた事あるぞっ！！この学園都市の何処かに能力を複数併せ持つ女が居るとっ！！たしか白衣か何かしら纏った研究員とか、」

「しかしまさかっ!!白衣じゃなくあんな魔法少女チックのこの少女が??」

「「「あの幻の多重能力者(デュアルスキル)だとっ!?」」」

そんなあり得ない不可解な現象に恐怖しパニくりながら逃げ惑おうとした矢先!!再び、彼女マリオンはまった無しの冷酷な術式を唱え……一言を…

「彷徨(さまよ)える魂達を安静の地へ誘い賜えっ!!『永遠なる絶対氷壁(ＥｔｅｒｎａｌＥｘｐｅｒｉａｔｉｏｍ)』っ!!」

瞬間!!彼奴等が佇む真下の床から蒼く輝く光と共にバキバキと具現化し足元から発生する巨大水晶!!

「うっがぁぁぁっ!!」

「なっ!!何だよこれはっ!?」

更にその二階の広い室内を地響きが襲いあちこちから次々とドゴンッ!!ドゴンッ!!と、壁や天井を破壊しつつコンクリート破片

を撒き散らしつつ次々と連続して一気に纏めてズバババッ！！

と、まるで氷の結晶のような巨大水晶が具現化！！あっという間に残りのスキルアウト達をその美しい水晶に呑まれて行く！！

そして、その遥か向こう側まで続く二階のこの広場を、

一瞬でその空間が煌びやかな水晶の砦に変貌し、総てのスキルアウト達を水晶の結晶体みたいな牢獄へ閉じ込め、

静寂な空間になったその広場に佇む、１人の幼い魔術師……

しかし、先程からの祭壇での術式から相次ぐ大魔術の連続で自身の精霊達を、そして魔力を一気に失い、

糸が崩れた人形のように冷たい床に崩れ落ちるマリオン……

そのマリオンに駆け寄り抱き抱える美琴達、

「ねえっ！！…マリオンさんっ！！しっかり！！」

「なぁ…美琴…彼女多分、アンタの言う能力の電池切れみたいだから心配無いと思うぞっ…今はそっと何処か静かな場所で安静にさせれば……」

「ええそうね、とりあえず…上に居るアンタの仲間達と合流するのが先決かしら…」

「にしても、先程のあの人数のスキルアウト達を一気に纏めて結晶体に封じ込め全、滅しちゃうとは…、この凄まじい能力って彼女、ひょっとしたらＬｅｖｅｌ５になれる素質ありますよねお姉様っ」

「いや…黒子さんとやら、この問題にあんまり首を突っ込まない方が身のためだと思うぜっ」

「「えっ！？」」

「へっ？？……いいやぁ～…彼女の能力、と…特別だから……」、

と、彼女が用いる最終術式の一つ『永遠なる絶対氷壁（エターナル・エクスプローション）』を発動させ、彼女の魔術によって一気に残りのスキルアウト達を鎮圧してしまった彼女、

そんな彼女のとんでも能力を目の当たりにして、何かしら引っ掛かるのか、気になり出す美琴と黒子、しかしそんな彼女達は只今夏海と共に向かうビルの上の階、その先で更に眼を疑うような光景を見る嵌めになろうとは…

◇◆◇◆◇◆◇……

一方そんな頃、更に上の階では??

既に時刻は、月と太陽が折り重なりその祭壇に設置してある魔法陣の中心付近の次元が歪み始め、その光景を眺め慌てるように祭壇の下に佇む五和に口を開く雪絵(せつな)……

「いっ!?いい五和っ!?なっなにあれっ!!ちょっと、こっち来て見てみなさいよ～っ!!」

「へっ??……」

「なに又々ぼけぇ――ってして……さてはっ!?全然関係無い憧れの『幻想殺し（イマジンブレイカー）』のあの少年とか……??」

「うぇっ!?……ちちちがいますっ!!ちょっと考え事してただけですっ!!」

そんな突拍子も無い事をいきなり言われアタフタと取り乱す五和なのだが、そんな彼女の見つめる視線には??

「えっ？？ねぇっ…雪絵っ…あれっあの子っ！！」

「ええっ！！ヤバッ！！凄い怪我してるじゃないっ！！一体下で何があったのよ！！」

その彼女達が見つめる軸線上には、先程下の階に逃げて行った光雄と、その彼をここまでおぶって来たのか、かなり疲労している涙子が居たのであるっ！！

「ハァッ……ハァッ……ふぅ～…やぁ～っとたどり着いたよ……葛城君…」

しかし、そんな彼女の問いかけに全く無反応なのか、肋骨が肺を突き破ったのが致命傷になったのか、その身体は自身の鮮血で真っ赤に染まり目は虚ろで既に光は無く…手足はダラリ…と垂れ下がり、まさかの手遅れな状態の光雄、

はたして、そんな命の灯火も尽き果てかけている光雄っ！！その祭壇の、遥か次元の彼方の神社に誘う時は刻々と迫りつつある中、このまま無事に神社に行く事が出来るのか、

それとも、このまま命の灯火が消え行き……

この番組が？？……いやいやｗｗ

次回へ続くっ！！

第五十七話　とある神社の魔法戦争――その６――…（後書き）

いやぁ～……まさかの主人公がこのような結果にっ??御愁傷様です（おいっ（笑）

さてさて次回からは??あの光雄（バカ）に変わって新番組っ!!『とある魔術のマリオンちゃんっ!!』……っとか??ってないないっ!!

まぁ～…次話しの展開に期待しつつ??

次回もお楽しみに～♪♪…ハハ（汗）

第五十八話　刻の狭間に迷い込む者（前書き）

主人公の身体は既にボロボロでその意識は遥か刻の彼方に??みたいなっ！！かなり謎めいた展開になりつつあるこのパート……まぁ～色々あって書き直しました…（汗）

後、活動報告での明日か明後日の夜投稿宣言よりは早い投稿ですみません…

という訳で、今回はチト短いが…
光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～…（笑）

第五十八話　刻の狭間に迷い込む者

―――――――……

―――――――……

―――……

……

……――――ここは、……

そうだ…俺は確か…マリオンちゃんや佐天さんに助けられながら、
あの薄暗い階段を……

階段……をっ！？

って？そうだっ！！思い出したぞっ、

こんな所でグズグズしてる場合じゃ……ぁ？？

って言うか……俺っ、

「えっ？？」

「や……やあ、どうも…起きたみたいだな、」

「って、アンタ誰？？しかもここは何処！？」

そう、先程第七学区内の廃墟ビルの最上階付近まで、涙子と共に向かっていたはずの彼なのだが、いつの間にか気が付けば見知らぬ病院の救急治療室内で点滴を射ちながら寝かされていたのである、

しかも先程までに受けた身体のダメージが全然無く、肺も、ちゃんと深呼吸出来るほど、何事も無く、気になる点は、頭に違和感があり、なにやら全然関係ない彼の頭には、包帯が巻かれていたのである、

その包帯が気になるのか、ゆっくりと上半身を起こす光雄、そして、更に彼の頭は今自分が置かれている状況に思考が付いて行かず、

「いいっ!?ここは、佐…天さん??」

「あっ!!きき…気が付きましたっ!?あっ…私、あの～さっきは本当にご迷惑をおかけして…」

そんな彼の目の前には彼が良く知っている爽やかな笑顔の彼女では無く、全然違うコート姿の見知らぬ少女が、

更にその隣側に佇みま彼を覗き込むこの病院の先生らしき人物、

しかもその先生の側に座るコートの少女は、あたふたと何を言ってるのかサッパリなのである、

そんな中この病室に数名の人物達がドアを慌てて勢い良く開けつつ侵入して来て、只今ベットで意識を取り戻した光雄に相対するように近づき、口を開き、

「君っ!!意識が戻ったんだね、」

「あっ…あの～…あなた方は??」

「ああ、済まない、まぁ～私達は〇〇駅の鉄道警備員だが、まぁ～…今回の君の勇敢な活躍のおかげでそこの彼女を助けたんだってね」

「えっ？？…」

「まぁ…詳しい事情聴取は明日やるとして、病院の先生は軽い脳震盪位だとまるで奇跡のようだと言ってたぞ、」

「は…はぁ～…ど…ど～も」

と、その少女の服装と彼に話し掛ける男達の服装を眺めつつ、更に頭を傾げる光雄、

えっえええっ？？警備員（アンチスキル）っ！？にしては、しかも全員長袖っ！？

なんだなんだ一体全体っあ～も～……訳分からんっ！！それにっ！！

しかもそんな彼が寝かされているベットの周りには、様々な小さな薬剤やガーゼやその他に使用するような道具が剥奪と無造作に置かれたワゴンが幾つも有り

しかもその白い壁に目を向けると、その壁の周りにもゴチャゴチャと様々なメモみたいな紙が貼られており、

更にそんな状況に冷や汗をかきつつ、何とか自分自身の混乱を押さえるよう一呼吸し、

ゆっくりと視線を戻すと、先生が使用しそうな机が幾つも設置してあり、その机の周りにも様々な物や書類等が乱雑に置かれ、

その机の上に設置してあるトレース台みたいなプラスチック製の表情板の上方から、

一体誰のか不明な黒いレントゲン写真、正に今まで彼が接して来た学園都市での最新設備とは、明らかに違う……正に旧世代の産物のようなレトロな室内なのである、

その室内の様子を、慌ただしく彼の周りを行き来する白衣を纏った看護婦らしき人物達を只朦朧とした目で眺めつつ、段々と思考が回復して来たみたいで、今現在自分がおかれた状況を……そして、そんな彼を心配そうに見つめるブルザーの上にコートらしい物を纏ったこの少女の姿を……

そんな様々な視界に入って来る様々な情報から推測……出た答えは、

今自分が居るこの地点は学園都市じゃ無い、更に皆の服装と、

まるで肌に突き刺さるような冷気…季節も冬だと言う事、そんな又もや自分自身にそんなオカルトチックな次元移動をしてきたみた

いな、見知らぬ場所に放り込まれた状況……
そんな絶望的な状況で何とか冷静に物事を整理し、判断しなければならないと片手を口元を塞ぐような仕草で考えこむ光雄、

俺、こんな大事な時に
しかも周りの状況もサッパリ……

いや、何かしら違和感があると思ったんだが、周りをみわたしても皆の様子まで今まで俺が居た学園都市とは雰囲気や空気まで全然……ぜ…ん……ぜ…

その思考中の彼は、自身の服装を眺め戦慄する!!先程から気にはしていた自身の身体を覆う服装が!!

対魔法防御専用の霊装じゃないっ!!これっ!!あの時の、まさかっ!!

更に慌てたように意識を集中しつつ片手を眺めながら……顔が引きつる光雄!!

えっ!?うそっ??演算が出来ないだとっ!?能力が……俺の、この光学使いの俺の能力が使用出来ないっ!!

更にうぅ〜…っと唸るように眉間に皺をよせ!!

「くっ！！ダメだっ！！」

「あ…あの～……君っ、何のおまじないか知らないが……もう大丈夫みたいだな、そろそろ点滴を外し……って！！こらっ！！」

そんな先生らしき人物を振りほどくようにベットから飛び起きつつ自らの点滴を力いっぱい引き抜き、
何もかも振りほどくように病室から飛び出し駆け出す光雄っ！！

くっ！！まさかっ！！ここは??いや、まだだ…まだそんな状況と決まった訳じゃ無いっ、きっと…きっとこの病院から抜け出せばっ！！

そんな、今やらなくてはいけない使命が！！マリオンや皆が待ってるあの学園都市の廃墟ビルに向かうつもりで必死に駆ける光雄！！そしてそんな思考や幻想を悉く打ち消される事態になろうとは！！

◇◆◇◆◇◆◇……

更に数分後…

えっ！？そ…そんな、あり得ない……あり得ないよっ！！

そして、彼…葛城光雄の姿は学園都市では無く今まで生前に過ごして来た町……東京都、台東区を道行く人々に溶け込むように、トボトボと一人淋しく歩いていた……

そして、ある立体交差点の中央付近で立ち止まりつつ、周りを取り巻く高速道路や様々なビルそのビルに垂れ下がる宣伝用巨大ポスター、

そのポスターに描かれた一人の彼の大切な友達を、この世界じゃ只のアニメキャラクター…そんな人物をおぼろげな眼差しで見上げつつ、周りの彼を見つめる人々には目をくれず、一人その人物に話しかける光雄っ……

「なあ、上条さんっ…俺、何かさぁ～……元々の世界に戻されちゃったみたいで下手したら帰れないかもしれないんですよ、」

「きっと、あなたなら、もしあなただったら!!この状況…いや!?こんな状況をどう切り抜けるんですか??…どうやったらあの大好きだったマリオンちゃんや皆に再び出会えるんですかっ??」

「きっと、きっとあなたならそんな状況も幻想をぶち殺し!!何事も無かったようにまるで皆が待ち望んだヒーローの如く格好良く戻って来るんですよね……」

そんな、今まで帰りたくて仕方がなかった今まで生きてきた生前の世界、そんな世界よりも禁書目録(インデックス)のあの戦乱の学園都市に戻る事を望む光雄、

2つの平行世界、そしてそんな世界の狭間で揺れ動く彼の心……そんな彼も又…あの次元と次元の刻の狭間に取り残された神社に居る彼と、同様…

……――自らの帰る場所を見失い彷徨(さまよい)い続ける哀れな旅人の如く、そんな灰色に染まる空を、ただ…ただ見つめるだけであった――――……

次回へ続く…

第五十八話　刻の狭間に迷い込む者（後書き）

いやいや…でもかなりＳＦチックなのはごめんなさいっ！！

次回は、本来の魔法的展開になりますので…（汗）

果たして、主人公を取り巻く不可解な状況は??そんな彼はあるきっかけで無事復活を遂げ神社に??みたいな…

てな訳で

次回もお楽しみに～（笑）

第五十九話　その魔法石に導かれし者達よ…（前書き）

いやいや、

又々こんな時間になってしまったが…

ちと遅れてしまったが前回の続きという訳で??

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ!!

始まり始まり～（汗）

第五十九話　その魔法石に導かれし者達よ…

ここは、学園都市第七学区の恥側に位置する、取り壊し予定の廃墟ビル内…

そのビル内の最上階に近い場所に位置する広場、既に夕方の時刻も相まって、そのビル内はとても暗く…周りの何のそっけも無い、打ちっぱなしのコンクリート剥き出しの状態の薄汚れた壁や柱が周りをかこむ、そんな薄暗い広場は光りがまったく届かず…

はたまたその出入口やら非常口等を遮る(さえぎ)扉すら存在しない、その筒抜けの空間を大気が下から上まで一直線に通り抜け、それ等が柱と柱の間を通り抜ける風の音なのか…

まるで、かつての迷宮(ダンジョン)や塔の類いのように、

冷やりとした大気を震わし、ヒョ――…ゥ……と、響く風きり音……更にその風きり音に混じり、微かに人々の祈りの声なのか、合唱も交ざりあい、

なんとも神秘的な空間を造り出す……

そんな音源は…薄暗い広場内の深い闇の奥、そして広場内の保々中央付近から聞こえ、そんな合唱と同じくその漆黒の暗闇のその先から蒼白い輝きがキラキラと…

その広場の闇を昼間のように明るく照らす

そして、その場所に設置してある祭壇からの精霊達が奏でる魔法石からの蒼い光り、

その輝きに混ざり合い、溶けこむかのように降注ぐ天井からの光り……

正に光りと風がなす芸術の類いのような、そんな中を神々しくも美しい天使が何者かの魔術によって召喚され、この世界に降臨しているのである！！

「……――さあ、これで彼の応急措置は全て完了いたしました、佐天さん、私達にご協力感謝します――…」

「……ええっと、こちらこそ…雪絵さん、に五和さん…」

そんな3人が取り囲む足元には、先程の天使の召喚を用いた治癒の術式により、

一命を取り留め、信じられない事に胸の傷も肺も統べて元通りに復元…復活を遂げた彼…

後は、彼の意識の回復次第だけなのである…

そんなあまりにも能力と言う類からかけ離れた…

魔法と言った方が早いような目を疑うような光景を目の当たりにした黒子達が、放心状態で佇むのであるが…

「……」

「ねぇ～…黒子？？……さっきのあれってさぁ～、もしかしてって！？ねぇ～聞いてる？？」

「……」

「って……あれっ？？黒子っ！？」

とまぁ～…先程の光景を見て目を輝かせつつ質問する美琴に対し、未だ放心状態から回復しないのか、その場で固まる変な黒子なのである…

そんな彼女達のやり取りを見ていたのか、さり気なく近づきつつ冷や汗をかきながら、上手く誤魔化そうと口を開く夏海なのだが？？…

「えぇ……ええっと……あれはぁ～、多分新手の特殊な能力で、……ってつまりだな？？……チラッ？？」

「……」

「うんうんっ！！それでっ？？」

「うぇっ！？やっぱ…科学側（こちら）の輩にゃ～…ちと刺激が強過ぎた、かな？？」

「まぁ～あえて言えばっ！！あれは正真正銘の魔じゅ？？」

「いえっ！！夏海（なつみ）さんっ！！わたくしは断固として否定しますわっ！！お姉様もそうですけれど……まさかあなたまで…魔法ぅ～？？…とかの類いは無しですのっ！！」

「へっ？？」

「だぁ～かぁ～らっ！！あの彼女達の先程使用した能力も又『肉体再生（オートリバース）』であってけっして魔法とか幼稚極まりないオカルトとはかけ離れた能力間違いないですのっ！！」

「うへっ？？……い…いやまぁ～…た、確かに…でも黒子さ？？」

「シャラップ！！」

「ひぃっ！？」

「発火能力者（パイロキネシスト）ともあろう夏海さんが！！魔法ぅ～…なんて！！しかも彼女等は正にＬｅｖｅｌ５に匹敵すると言う訳ですわよね？？……」

「いや？？……ま、まぁ～それはそれで納得すれば良いんだけど、…あははｗｗ」

「ねぇ～…黒子っ、だったらさぁ～…あそこの彼女、マリオンさんは？？どうなのよ！！」

「そうっ！！マリオンさんもですけれど能力者ですの……」

そんな光景を目の当たりにして『魔法だぁ～…ｗｗ』とか言いつつ更に目を輝かせている美琴に対してなにかしらスイッチが入ったのか、突然放心状態から回復する黒子…（汗）…

まぁ～…彼女も一瞬目を奪われたが、その自分に言い聞かせるようにかなり無理矢理否定しまくるのであるが……かなり無理があるよーな（汗）

と、只今ヒートアップになりつつある様子を横目に夏海は先程の大魔術の使用で力尽き同じく光雄のようにグッタリと意識が全く回復しないマリオンの身体もそっと光雄の隣側に寝かせ、

何か、後はこの二人共意識が戻り次第だな……と、呟きつつ彼等の顔をそっと覗き混む……

「まったく…ほぉ～んと、お似合いのカップルだな…」

と……

そんな彼等の意識は一体何処で彷徨(さまよ)っているのか……

―――――――――――

|
|
|

ても無く彷徨(さまよ)う光雄……

「うっ！？」

あっ！！靴ひもまで解けているし、ったく……不幸…なのか？？

そして、何処かの路地側にしゃがみつつ靴ひもを直し立ち上がりつつ更にその路地側のある宣伝用のポスターが目に入る彼なのだが？？

「えっ？？…世界の名画展……あ～…あれか」

その宣伝用ポスターを何げに見つめる彼…しかし、ある一点を眺めつつ……

「えっ！？…これって？？…まっ！！まさかっ！！こんな所に手掛かりがあるじゃないかっ！！……いや…でもちと違う？？のか？？……と、とにかく行ってみるかっ…」

そんな見つめる先のとあるポスターに一体何を見たのか、そんな宛てもどもなく彷徨う彼を突然突き動かした物とは？？

◆◇◆◇◆◇◆……

更に数分後、……ここは、東京都、台東区上野公園内の奥側の広場、その広場の一角に位置する美術館……

その館内の少し広い通路内を子供連れの家族や、何処かの学校の大学生や専門学生等が行き来する、
その通路内にある一点を見つめつつ佇むベージュ色のコートに身を包む人物、葛城光雄が居た、

その彼が見つめる目線の先にはある通路上に立て掛けてある一枚の油絵

年代的にかなり古いのか…その絵の下側に設置してあるその説明文等が記載されている年代は、”約１４世紀”と印され、

しかしそんな記載されている年代とは裏腹に、

所々色が薄くなり煤けていて、果たしてその年代と照らし合わせて良い物かどうか定かではない、

そんななんとも古めかしい色褪せた絵に、何かしら感じるのか、ふと!!突然なにかしらに気付きつつ慌てるように自分のコートやらズボンのポケットをマサぐる彼……というか、絵を眺めつつゴソゴソとモジるのは些か怪しいよ~な（汗）

「あっ!!あったあった…よしっ!!」

そして、何かを確信したのか、そんな事を言いつつポケットの中に入っているある感触を確かめつつ恐る恐る……取り出そうとする光雄……

うぅ……でも、でももしかして違ったら、俺…

いやっ…まぁ~この感触は間違いないないよっ…指に絡み付くネックレス用のチェーンの冷んやりとした感触…そして、その先にあるまあるい硬いこれっ!!

一体何で彼方側にある”それ”が今俺のポケットに入っているの

か……ヤハリこれは俺と一心同体の存在なのか??もしくは……いや……ども今は、そんな事を気にするより、只それに頼り、縋るしかないということだな……

そして、ジャラリ……と”それ”を掴み…ゆっくりと、ポケットから取出し

自分の目線に”それ”を持って行き……ゆっくりと……恐る恐る指を拡げて行く……すると!?

「……!!……やった…」

そう、その彼の手の平にある”それ”は、漆黒の闇が続くだけだった彼の心に希望の灯火(ともしび)が灯らすのに充分過ぎる物なのである!!

さらにその彼の佇む目線の先には、今まで彼が居た世界とよく似た、ある物が描かれている…それと、彼が手にしている”それ”を翳し…見比べて行く……

「えっ??これって……」

と、そんな彼を押し止めた一枚の只の古い油絵に描かれた”それ

”…そんな絵の前に佇みながら…

その彼の眼に写った物は、何かしらの民族衣装みたいな服装を身に纏う人々、所々薄汚れ、擦り切れ、

時にはその人々の足元に踏まれもがきながらはい上がろうとする輩……

とてもじゃ無いが、目を背けたくなるような地獄絵図が描かれ、その人々の山の上側に舞い降りる背中に白い…とても…そのどす黒い世界とは正反対の輝ける翼を宿した優しくも哀しげな表情を醸し出す天使みたいな人物！！

何かしらの宗教関係の絵なのか、その暗き漆黒の闇が支配するような死の世界、その人々の頭上に一筋の光りと共に舞い降りたる、神々しくも哀しげな雰囲気を醸し出した1人の天使……

その天使がそんな地獄を徘徊するような人々に両手を前に突き出し、その両手の間には、

蒼く…とても蒼く煌びやかな輝きを醸し出す1つのボールみたいな物が！！

彼はその描かれた物を良く知っている、たてえその道の専門家が調べ、それについて只の光る球体かもしくは、希望の光りやら、なんたらとか説明されているガ、誰もが説き明かす事が不可能な、そんな天使の光り……

魔法石が！！そしてその魔法石に宿る精霊達が織り成すこの輝きを！！

「やっぱりだっ！！」

そして、その1つの絵を見つめつつ、彼は何かを悟ったのか…ポツリ……と一言……

「俺、今俺の手にある魔法石！！……天使の雫っ！！」

と……

これと同じ魔法石……だよなっ！！

そうだよっ！！間違いない…多分この人物って、あの時のトルコでこの俺に、この魔法石をたくした人物だ……間違いない…魔法石を用いる後継者って所か??これで…何とか解かりそうだよっ…

まぁ～なにかしらの不思議な現象かなにかでこっち側に来たっつー事は、あの絵に映る彼女と同じように、彼方側…そして此方側と次元移動……若しくは平行世界を行き来出来る能力が備わっているかもしれないな……

あはっ！？あっははははっ♪一体全体なぁ～にを勘違いしていたんだ俺は？？

確かに今の俺は、能力を全く使用出来ない、まぁ、言われて見れば只の普通の何も能力開発何か受けていない人間……しかし、彼方側の俺の身体は一様能力者…イコール当然能力者である俺がマリオン達みたいな魔術を使用すればたちまち土御門さんみたいに全身から血を吹き出し倒れるだろうな……

此方と彼方……多分魂だけかなにかで行き来出来る存在か？？もしくは、無意識の内に”こいつ”…そう、この俺の魔法石を使用しなにかしらの能力で移動する……いや！！この力こそがこの俺の用いる魔法？？

よしっ…よしっ！！何となぁ～く分かって来た……

「うぅ～…やったぁ――――っ！！俺っ！！帰れる……いやっ！！絶対にっ…帰ってみせるっ！！そして、俺は…この俺の人生はっ！！マリオン（アイツ）と…ずっと、これから先も……」

「そうと決まれば学園都市（あちら）に帰るぞっ！！」

あの絶望に満ちたトルコでのあの戦い、あの時のこの魔法石との出会い……まさかこの出会いがこんな形で役に立つとはな、

でも今あるこの世界もその先にある学園都市でのあの世界……2つとも紛れもなく、幻想でもなんでもなくリアルだったじゃないか!!

と、突然そんな彼の背後に佇む人影が??

「おぉ〜いっ…もしも〜し葛城ぃ〜…」
「いや…?バカのミツエちゃ〜ん??」

えっ??……だ、誰っ??
いや…たしかに俺に話しかけて!?

と、美術館から抜け、駆け出す光雄だが??
なにかしらの囁きにいきなり立ち止まろうとした矢先??

そんな彼の肩を思いっきり掴む人物が??

「うごぉっ??なっ!!」

とまぁ〜…自分の勢いも余ってか、バランスを崩しつつドベシッ!!と、豪快にすっ転ぶ彼……

「痛っててて……くっそぉ〜…一体全体何処のどいつだ?……よっ!?」

「ほっほぅ〜…それが俺達をスッポかした奴の台詞か??」

「そうそうっ!!この裏切り者のミツエちゃんっ??」

「へっ??あ……」

と、そんな彼を呼び止めた人物達をなんともキョトン……と、不思議そうな表情で見つめる彼…そんな多状況に多分思考が追い付いて居ない様子な彼なのだが??

そんな彼にくってかからんと眉を引くつきながら覗き混む二人の謎の人物達…

「へ〜へ〜…そうかそうか、毎度毎度学校の居残りやら補習授業やらで裏切りまくり、挙句の果てはまるでボケ老人の如く白を切るってか??」

「へっ??……ち…ちょっと待て待てっ!!おっ!!俺はそんな約束もした覚えは無いぞ内田っ!?……って??う…ち…だ??」

と彼の目の前でふふんっ!!とニンマリしながら見つめる黒髪の男とメガネを片手で器用にたくし上げる知的な雰囲気を醸し出す男…その輩を見つめながら、さっきまでテンパっていた思考が戻って来たのか……

「もしかして、内田……に、菊地かっ??」

そう、その人物は紛れもなく、生前の彼の悪友とも言える友達、

親友の二人なのであった！！

◆◇◆◇◆◇◆……

更にそんな光雄が旧友との久々の再会を果たしている頃…時を同じくして台東区の不忍池（しのばずのいけ）付近のボート乗り場前には、あるもう一人の人物も又此方側に来ていたのである！！

……――――えっ…ここはっ！？たしか私――――あのスキルアウト達を全員懲らしめてから記憶…が…

「あっ！！」

「ここって？？私っ…早く光雄達と合流しな……？？」

「えっ??」

そう…運命のイタズラなのか、又、魔法石を用いる者の宿命なのか…そんな彼女マリオンの意識も又、光雄と同じくこの地に降り立っていたのである!!

はたして、光雄と同じくそんな次元の最果ての地に彼女は……

次回へ続くっ…

第五十九話　その魔法石に導かれし者達よ…（後書き）

何か、多分このパートかなり複雑化して来たよ～な…（汗）

まっ…次回はいよいよこの世界での彼を取り巻く仲間達…そして何故かのヒロインと合流、
そんな仲間の協力となにかしらの偶然がかさなり？？……二人は無事に学園都市に戻る事が出来るのであるか！？

とまぁ～そんな訳で？？

次回もお楽しみに～（笑）

第六十話　その魔法石に導かれし者達よ……――その2――……（前書き）

とまぁ～いよいよこのパートもよ～やっと終わりに近づきつつクライマックスっ！！

そして再びあの学園都市の地に降り立った事が出来るのだろうか？？

てな訳で
光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～！！

第六十話　その魔法石に導かれし者達よ……――その2――…

ここは台東区上野公園、その広い広場から、続く街路樹の元、
午後の暖かな日差しが降注ぐ中を、一体どこかしらか舞い降りたのか、いつの間にかその街路樹の元に集まりだす鳩の群れ…
その群れが先程前にある親子連れがバラまいて行ったお菓子類に我先に群がり啄み初める、
そしてその内の数匹が目の前に接近する人物達を辞任……
そしてその人物達から慌てるように避けつつ一斉に飛び立つ……
そんな中…噴水があるベンチ前を歩く3人の人物達…

「うおっ!?鳩だっ!!」

「なあ…内田、もし…自分が佇むこの世界、そんな世界が一変したら…そんな時、どおする??」

そんな、先程から空はいつ間に晴れ渡り、そんな何処までも続くかのような青空を…更にその先にある何かを見つめるような、遥か遠くの世界を眺めるような……そんな表情の光雄、

その何時もと違うような…ふと目を逸らせば何処か遠くに消えてしまう、そんな光雄に不安を感じるのか、
その不安を自ら無理矢理打ち消すように一呼吸おいてから口を開

く彼の親友、内田幸司（うちだこうじ）
その彼に続く菊地智博（きくちともひろ）なのだが…

「はぁ～??なぁ～にをシケタ面で言いだすかと思えば…」

「そうそう!!とうとう脳内まで2次元に移植され…やれやれ、もう手遅れだなミツエちゃ??……」

「って!?だぁ～かぁ～らぁ～っ!!そのマル?やちゃん付けるのは止めろってんでしょ――がっ!!そのネタは本物のとある妖精様に失礼??って……あれ??」

「そうそう、そこまで自分自身を認めるとは!?流石ミツ??…」

「だぁぁぁ――――ったく!!おまえ等…人が真剣に相談してるのに、何か逆に俺頭痛くなって来たわｗｗ……」

更に片手を自分の顔に持って行きでこを隠すような素振りで頭を抱える光雄を横目に菊地は、

「あはは、そうそう…そんなしょーも無い事よか、おまえ、今度の卒業制作のテーマ一体何を提出するんだ??」

「卒業…制作ぅ～？？」

そんな、様々な自分自身を取り巻く不可解な出来事で既に遠い記憶の彼方にある欠片を探すかのように、更に晴れ渡る青空を仰ぎつつ物思いに拭ける彼…

ああ……そうだった…そんな事もあったなぁ～……と……

そんな以前から続くような何時もと変わらない世界…今までも、もしかしたらこれからも続くかも知れない平和な、彼を取り巻く現実（リアル）、しかし、そんな甘い汁に何時までも浸っている彼を本来この先も保証されている…そんな彼の未来も総てを覆す！！

そんな危険な、下手したら自分の命までも危うい！！そんなこの世界にあって同じ時系列で進む又別の現実（リアル）…

平行世界…現実じゃ理解し難い世界に踏み込みその世界の住民達と出会い、そしてその世界で大切な友達に助けられ…共に戦い、そんな中で人と人との深い絆の大切さを知ってしまった彼……

そんな彼、葛城光雄の心は揺れ動く、果たしてこのままこの平和に勤しんで大丈夫なのだろうか、そして又別の世界でずっと彼の帰りを待つ、彼にとって、彼の人生にとって一番大切な、替えの無い

パートナー……

マリオン・オヴ・シュペー……ふとそんな青空を眺めつつ、つい数週間前に学園都市での彼女との様々な出来事を思い出し…

「…――ああ……卒業制作なんだが、ごめんっ！！俺っあと少し、もう少しだけしたら戻って来るから…そしたら又、この先を続けようなっ内田っ…そして菊地…」

「おまっ！？」

「な…なな何をいきな…りっ！？」

◇◆◇◆◇◆◇……

更に数分後…

とうとうそんな光雄の運命の歯車が再び廻りだす…その彼等3人

を遠くから見つめる1人の小さな少女…そんな異国の世界から赴いたような光雄と切っては切れない運命の人物と再び……

「「……！！……」」

「初めましてっ、あなた達は光雄の友達ですか??」

「そして、又あったね光雄っ！！」

「えっ!?ま…マリオン…おまえ」

「うんっ！！何か分かんない内に私も来ちゃったみたいだよ…」

「あはは……なんだがなぁ～……まぁいいや…そんじゃ帰ろうか、マリオン…」

「うんっみんなあっちで待ってるよっ…光雄っ！！」

そう…そしてそんな中、彼等の視界に突然現れた水色の綺麗な髪をなびかせる異国の少女……そして、綺麗な紫色のマントを羽織り手に持つ魔法使いチックな長い杖…そんなまるで何処かのＲＰＧの

世界から抜け出したようなこの世界とは別の世界に住む住民…その不思議な姿の少女に見とれる幸司達……

「ああ……すまないなっ、もう少し、後もう少しだけ待っていてくれ……」

そして、いつの間にそんな幸司達の目の前に佇む光雄…そんな彼の姿も又その彼女に合わせるかのような何時ものコート姿の彼では無く…腰には１m（メートル）位の白く煌びやかな剣をたづさえ、異国の古き良き時代を彷彿とさせるような綺麗な群青色のマントを羽織り同じく群青色の何かしらの魔法の掛かった服装、更に胸板や腰に装備した銀色に輝く鎧に実を包み、手には同じく銀色の腕宛て…更に銀色のブーツ…

正に今までと違う霊装、正真正銘の彼の用いる魔法石の後継者としてのもう一人の彼…神々しくも天駆ける魔法騎士の姿と化したもう1人の彼…葛城光雄が居た！！

「おっ…おいっ…光雄？？おまえ……」

「ああ…今まで黙っていてごめんな…俺、実はその前に別の異世界を旅して来たんだ……まぁ、詳しい事はもう一度此方に来た時に話すよ」

「今は……自分がやらなくちゃいけない事…そして内田等がいるこの世界、そして今から俺が行く世界…そんな世界を守る為に……」

そして更に彼の魔術なのか彼と相対するように光雄とマリオンが佇み…その光雄達の後ろ側の空間が歪み出し…まばゆいばかりの蒼白い光りが降注ぐ!!

正に魔術師…もしくは魔法使いとしての覚醒を遂げた彼…葛城光雄がおりなす彼の本来身体の中に宿る魔法石…『天使の雫』の桁外れな魔力によって発動した次元を歪める魔術……そのあり得ないとても普通の思考じゃ付いていけない超常現象の中…

彼の親友、内田と菊地はそんな彼を認めていた、
そして爽やかな笑顔で見送る2人…

「ああ……ついさっきから分かっていたよ、おまえが変わった事…」

「ま!!本当はもっと募る話しもあったが……しゃ～ねぇ～な……」

そんな事を言いつつ何かしらポケットから取出しそんな彼に投げつけ

「ああ!!いいから持ってけ!!俺達からの手向けだっ!!」

”それ”を片手で受け止めつつ爽やかな笑顔でハニカムように口を開く光雄……

「ああっ!!サンキュー内田っ!!そんじゃ」

「ああ……元気でな、あまり…マジであまり無茶するなよっ!!おまえの悪い癖なんだからさぁ～」

「ああっ!!ったく…心配性な所は変わってないな…分かっているよっ!!」

そんな事を言いつつ先程手にした物を見る光雄なのだが……

「へっ??……な……」

「?バカ??チ○ノちゃんって??おまっ!!この期におよんで??……って??痛たた……こらっ!!マリオンちゃんっ…無理矢理引っ張るな!!」

「ほぉ～らっ！！なにグズグズして固まってんのよ～……さっさと行くよっ！！バカ光雄っ！！」

「って！？マリオンちゃんおま？？……」

そんな、内田等に一言言おうとした矢先、無理矢理彼女に引っ張られるようにこの世界から旅立ち……さっきまでの現象が何事も無かったように何時もの風景に戻り……

そんな中、未だその場に佇みながらポツリ……と彼方側に行ってしまった彼に告げるように呟く幸司……

「何か、あいつ楽しそうだったな」

「彼方側であの彼女と宜しくやれよ…」

と……

…――そして、未だ暖かな日差しが降注ぐここ上野公園内の街路樹が続く噴水前広場を後にする2人の人物が居た――……

――――――――――――

――――――――……

――――――――……

――――――……

◇◆◇◆◇◆◇◆……

――――――……

――…あっ！！

……――――ここは？？

……――――学園都市だよっ！！

そして、皆が見守る中、うっすらと目を開き…お互いに見つめ会う光雄とマリオン……

……――――ああ、又帰ってこれたんだっ…

そして2人して目を覚まし起き上がりめの前に彼等を取り囲むかのように佇む仲間たち、

そんな仲間たちに、笑顔で話しかけ

「……――ただいま……」

と……

◆◇◆◇◆◇◆……

更に数十分後……

そんな2人の姿は光り輝く祭壇の上に設置してある魔法陣の前に佇み…

その魔法騎士みたいな姿の光雄は、ふとおもむろに自分の右手を目の前に持って行き、そして意識を集中し演算……その彼の光学使いとしての能力も健在のようで、それを核心したかのようにニンマリとする彼…

そう…再びこの混沌の学園都市に降り立った光雄
そんな彼は遂に自分自身の能力と……
更にこの世界の常識ではあり得ない古代魔術の１つ天使の雫…
正に精霊の力を用いる魔術師としての桁外れた本来の彼の潜在能力……

今ここに１人の魔法剣士が誕生した！！

「さあ、行こうかっ！！マリオンっ！！」

「うんっ！！」

その２人は、仲間たちが見守る中、祭壇に設置してある魔法陣の輝きに溶け込むようにとある忘れ去れし刻の狭間の神社に旅立つ…
…そんな２人をこの先に待ち構える物とはっ！？

又々無理矢理だが次回へ続くっ！！

第六十話　その魔法石に導かれし者達よ……――その2――……（後書き）

いやいや…かなり急展開のようで…（汗）

果たしてそんな2人を待つ物とは??

次回もお楽しみに～（汗）

第六十一話　刻の狭間と言う名の迷宮（ダンジョン）で……（前書き）

という訳で??

その祭壇から赴いた光雄達が見た物は??

と、今回から少々ＳＦ入ります…苦手な方はすみません…（汗）

光学の超高密度収縮粒子砲戦記…

始まり始まり～っ!!

第六十一話　刻の狭間と言う名の迷宮（ダンジョン）で……

……――――――――――

――――――――――……

――――――……

――――――……

――――人だっ！！――――…

そう、私がここ、亜空間ポケットと言われるこの時空の狭間に墜ちてから一体どれ位の月日が流れたのだろうか……

魔法石（マジックストリングス）という名の怪しくも神秘的な蒼白い輝き……まさかっ！！再び生きてこの輝きを観る事になろうとは……

そして私はその天から降注ぐ光の粒子達に吸い込まれるように導かれ、そして私の目の前に、突如一瞬目を覆いたくなるような眩ばゆい閃光!!

瞬間!!一瞬でその近辺に積もる大量の雪が蒸発!!周辺に水蒸気が突然立ち込め……その水蒸気が徐々に晴れて行き……

私の眼前に天使の羽が降注ぐが如くキラキラと光の粒子が未だその水蒸気の余波で毎散る中……二人の若い男女が倒れていた……

そう…遥か過去の記憶の彼方に忘れ去られし我が星系の科学技術（マジックストリングス）の結晶……かつて幾多の星の海を渡る為に用いるあの輝く魔法石と共に……

◇◆◇◆◇◆◇……

――――あっ!?――――……

「ここは??……」

何処だろう……とても…果てしなく続く…何処までも続く白い…
…大地……

あれから、何時間経過したのか、先程前に光雄が居る世界から学園都市に次元ジャンプをし、その彼と共に、学園都市の取り壊し予定の廃棄ビル内に設置した、祭壇……その祭壇から更に
エクスマスから頂いた古い書物に書き記されたここ…遥か忘れ去れし神社に赴き……それからの記憶がさっぱり抜けているマリオン……

ふと、先程気が付き、何処かの古い小屋みたいな場所のベットに寝かされている彼女……
そして、うっすらとした虚ろな眼に入った景色は……
先程前の学園都市の薄暗いビル内と違いそこはとても静寂な…
この世の総てを包み込むような真っ白に染め上げられた大地が何処までも続く白銀の世界……

「はっ!?私っ!!たしか光雄とっ!!」

そして慌てるように上半身を起こし周りを見渡し…

自分が寝かされていたベットの隣側には、未だ目が覚めないのか…
その前からの相次ぐ出来事に疲れきっているのか…　未だ目を覚まさないで死んだように寝ている光雄の姿が映り……

「ああ……疲れているんだよね光雄……」

その自分の隣側で熟睡中の光雄の寝顔を優しい表情で眺めつつ、
その彼のサラリとした薄いピンクの前髪をそっと優しく撫でる彼女…

それに反応したのか

「うぅ…まて…まてまてこれは俺の分だぞ……マリオンちゃ…」

となにかしら頷くように寝言をごにょごにょと??……いったい
どんな夢を観ているんだか…（汗）

とまぁ～……そんな彼にクスリ…と笑いながら…ふと再び視線を
光雄から周りの景色に移し…

先程気が付かなかったみたいで今自分達が寝かされているベット
から先程眺めていた外の景色が見える大きな窓…

そこから反対側を向くと…なにかしらパチパチと…煉瓦（レンガ）を積み重
ねて創られた暖炉が見え…

その暖炉の燃え盛る炎に照らされ、一つの古めかしい木で出来て
いる椅子が一つポツリ…と、
よく有る椅子の足の部分が無くそのままよっかかって立てに揺れ
る仕組みの”あれ”かと…
更にその暖炉がある小さな部屋の恥側に設置してある小さな木で

出来た小さなテーブル…
そのテーブルの恥側に設置してあるなにかしらを置く為の小さなバスケットがあり、その中には歪な形の様々な手作りで作られたであろうパンが……

多分この小さな山小屋…それら総てが　今まで彼女が居た学園都市から遠くかけ離れているような……
まるで何処となく…彼女が遥か過去に見た記憶…正になにかしらのおとぎ話か絵本で描かれたような…
そんな何ともレトロチックな古い小屋なのである。

◇◆◇◆◇◆◇……

そんな中、なにやらその静寂な世界を打ち消すように雪を不磨付けるような独特な音が小屋の外から聞こえ、ガタガタと…

多分誰かしらか帰って来たみたいで、その暖炉がある部屋の向こう側に位置す扉が、独特の音を立てつつ開き…そこから見知らぬ人物が赴く、

そんな人物の姿もこの小屋と同様何ともレトロチックな独特の着物みたいな衣装の上に羽織りその上に薄汚れた布切れみたいなコートを着ているみたいで、そのコートを脱ぎ捨て、
更に身体にまとわり着く雪を両手で起用に払って行く、

そして、総ての雪を払い終えたみたいで

「ふぅ～…」

と、一呼吸おいてギシギシ…と、その暖炉がある部屋を横切り只今背中に背負っていたであろうかなり重そうな大きな袋をゴトリ…と、

その小さな机に起きその袋からゴソゴソと、約１ｍ（メートル）はあろう長い剣と、更に長い杖を取出し…小さな机の脇に立て掛ける……

その見知らぬ彼が持って来た物を眺めていたマリオン……

「あっ！！それっ…その杖と剣……私達のっ…」

と、突然彼女の目に入ったのは、彼女達の持ち物でもある魔法石…『アクエリアスの涙』と『天使の雫』なのである！！

その彼女の声に反応したのか突然振り向き、それと同時に彼女も先程のベットから起きだし、彼に近づきつつ口を開き、

「あ、あの～…もしかして私達を此方まで運んでくれたのはあなたですか？？」

と……

「あ…あの…ここ？？…」

「ウッ？？……ゴジャーァルステンシルフッピナ～……アヤカスタラ…」

（注：ああ…気が付きましたね…そちらの方も大丈夫みたいですね…）

「えっ？？……」

その、なんとも彼が発する奇妙な音源に対し、指を自分の顎に当てがいながら首を傾げつつ…う～ん……と、考え混む仕草をするマリオン…

その彼女もオリアナと同じく、一様様々な国を訪れる魔術師でもあり……

自信が使用するイタリア語の他に光雄達が使用する日本語や英語だけじゃ無く…

一様様々な国の言葉をある程度は修得しているのだが、そんな彼女も今まで見た事も聞いた事も無い音源から発する未知の言葉にかなり考え込むのである！！

そんな彼女に頷きつつ彼が座る小さな机の後ろ側に設置してある

棚の引き出しを開けつつ、ゴソリ…と取り出した耳に宛てがうような小さな、まるで補聴器のような装置を取出し、それを耳に掛けろ…となにかしら右往左往でジェスチャーを送り…

”それ”を受け取りつつ自分の耳に宛てがい、彼の指示する通りにその装置の上側にあるスイッチをＯＮにするマリオン…

「ああ…先程はすまなかった、私も人と接するのは本当に久々でねぇ～…」

「あっ！！…」

「どうだ??ちゃんと翻訳されているだろ??」

「あっ…ええまぁ～…」

「あのっ！！先程もしかして私達を此方まで運んで来てくれたのはあなたですか??後、あなたが持ってきた物なのですが…実は私達が先程まで持っていた物なんです」

「ああ…すまない…まぁ～さっきあなた方が倒れていた所に落ちていた物で…やはりあなたは…」

そんな事を言いつつ、真横に立て掛けてある彼女の杖を手に取りマジマジと眺める彼…その彼を眺めつつ再び口を開くマリオン…

「後、あなたは一体何者で、何が目的で私達を連れて来て……それに……ここは…一体何処なのでしょうか…」

そんな次々に質問する彼女に対し…ニッコリと微笑みながら、正に本当に久しぶりなのか、自分以外の人との会話を楽しむような…そんな素振りで口を開く彼……

そして、

「あははは…そんな一辺に質問されたら一体どれから話して良いのか…」

「まぁ…それは良い……まずは最初から自己紹介をしなくてはな…そう、実は私は……」

果たして、その謎の彼の正体とは??

又々無理やりだが次回へ続くっ！！

第六十一話　刻の狭間と言う名の迷宮（ダンジョン）で……（後書き）

今回はちと短いが…
次回はもちっと長くその彼や主人公等の用いる魔法石の謎に更に迫りますっ！！

そんな訳で

次回もお楽しみに～…（笑）

第六十二話　……――その最果ての地に埋もれし者達は？？（前書き）

いやいや…更にこの展開違う番組みたいなのだが…

はたして、彼等はこの地の果てで？？何を見るのかっ！？みたいな

という訳で、今回もＳＦ苦手な方はすみません…（汗）
後少しでこの話しも終わりますので……（汗）

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～…

第六十二話　……――その最果ての地に埋もれし者達は？？

ここは学園都市と違い別次元……そう、そこは全く違う空間と言ったほうが良いだろう…
宇宙（そら）を旅する者達に付き物の永遠の地獄…それとも楽園と言う者達も居るという……

次元断層…
若しくは亜空間ポケットと言われるこの世界は、
元々存在しうる事の無い世界と世界との狭間（はざま）に突如不可解な高エネルギー体の余波によって低確立で出来る、
何時崩壊するかも知れない、とても不安定な危険な空間なのである、
更に時折（ときおり）別次元を亜空間航行する艦隊との高エネルギーとの摩擦なのか、灰色に染まる世界の遥か彼方で……
次元の歪み、それとも又、”特異点（とくいてん）”とも言われるプラズマにもオーロラにも似た現象が所々発生し……
それと同時にたまに…別次元から様々な物が流れ着いて来るという現象が時折起きているのである……

そんな不安定な空間に…偶然墜ちて来た、ある一人の男も例外じゃ～無いのである…
そして、その閉ざされた次元の狭間に赴く人が又数人……
正にイレギュラー…

本来あってはならないこの時空の狭間で一体何を語り何を問うのか……

◇◆◇◆◇◆……

……――そして、今その空間内に存在する一軒の小さな山小屋…その山小屋内の一室で相対する二人の人物……

その星に住まう住民の少女と、もう一人の濃い緑色の独特の色素の髪を器用に片手で癖毛を直すような仕草のもう一人の異なる人種…地球人と異星人、数百年の刻を越え、再び交わるのである……

「あのっ…あなたは一体どんな目的でこの世界に…そしてあなたは一体何者なんでしょうか!?」

と、目の前に座る見知らぬ謎の人物に対して対峙するように佇み次々に質問をぶつける彼女、その真剣な表情の彼女に対し…なにかしら久しぶりに人に出会うのか、ふふっ…と含み笑いを隠せずにいる謎の人物…

「ふふっ……失礼っ！！私もかれこれ人と接するのは何百年になるのか本当久しぶりでねぇ～…」

「そうだね…先ずは自己紹介からだな？？」

ふっ…と、笑いながらそんな事を言いつつゆっくりと立ち上がりつつ口を開く彼…

「そう…私はこの星の種族が使用する音源で言うと、ガレッゼ・ルト・リナヴァザード…って所かな？？」

「えっ？？がると…ぜ！？……」

「ああ…愛唱のリナで良いよ、後あなた方の言語は先程の翻訳装置で解読した…後はもうあなたに渡した装置……もう外して普通に喋って良いぞ…」

「えええっ、分かったわっ私もそっちの方が楽だし…」

そんな事を言いつつ少々不思議がりながらも慣れない手付きで先程の補聴器を耳から外し彼に手渡しつつ…

「これ、お返しします…それで！！話しの続きなんですが、私はマリオン・オヴ・シュペー…マリオンで良いですよっ」

「んでっ、あっちのバカは葛城光雄、まぁ～あいつは～私の…」

「ふふ…君の大切な彼氏って??所かな??」

「ふえっ！？……かっ…か??かか……ううんっ！！ち…違うから、あいつはたんなる私の友達で…って??リナさんっ！！ちゃんと聞いてます??」

そんな突拍子も無いリナの一言で…何かしら頬を赤らめていきなり挫くようにテンパる彼女、　その彼女の反応を見るのが楽しいのか…

いつのまにかその彼女の背後のベットから起きだしキョロキョロしだす彼の姿を眺めつつ小さく微笑みながら…

「まぁ～そうやって青春するのも若い内だから大いに励めよっ！！ほらほら追いでなすった…」

と！？

「えっ??……なにっ!?」

と、そんなリナの謎めいた言葉に気付き??

「ふえっ!?まさかっ!!」

とまぁ〜…その矢先にいきなり自分自身の背後に迫る何かしら気配を感じ取り、ギクシャクと、まるで錆付いた絡繰人形（カラクリ）の如く冷や汗をかきつつゆっくりと振り向く彼女なのだが??

「あ…あのぉ――…??ここ??…」

ドグシャッ!!「はぐわっ!?」

「ったくも〜っ!!なんで起きて来るのよっ!!あなたが関わると折角のシリアスが台無しになるでしょうがっ!?少しはそっちで寝ていろこのギャグの固まりっ!!」

「う゛ぅ……なして??ひどいよマリオンちゃ……カクン（涙）」

と、一瞬何があったのかっ!?みたいにいきなり背後の光雄に対し、繰り出す彼女の容赦の無いエルボーが彼の顔面にクリーンヒット??

そんな一撃を食らい、ゆっくりと放物線を描きながらさっきまで自分が居たベットにドゲシッ!?…

と、なんともギャグチックな音を建ててつつ再び堕ちる可愛そうな光雄なのであった……と言うかそんな事をしでかす彼女も既にギャグキャラですよっハイ（汗）

◇◆◇◆◇◆◇……

数分後……（汗）

先程の光雄達の、何時もの夫婦漫才がかなり刺激が強かったのか？？冷や汗をかきつつ固まるリナに気を使いつつ…只今キッチンで何かしら材料を使い腕を振るいスープを拵えているマリオン…

その彼女が佇むキッチンのすぐ隣側に設置してある小さな机に相対するように光雄とリナが座り…

そんな矢先スープに使用する食材をキョロキョロと捜し出す彼女を眺めリナは…

「久々に良い臭いがしてきたよ…、後下にある扉だがそこに…」

「ああ…これ??って……冷凍庫??しかも……ううわっ！？」

「そうそう……その中に様々な食材が入っているから後…出前側のは今朝狩をしたばかりの新鮮なのだから好きに使ってくれ」

へっ??……えぇ――と…好きに使えっつても……この鳥さんをっ！？

わ…私…こんな鳥さんとか使えっつてもこんなの裁くの初めてだし……

と、未だ固まる彼女に対し、ひょっこりキッチンに顔を出す光雄…

「おまえ、なぁ～にを呑気に固まってんだ??なんだったら俺が？？」

「へっ??光雄っ！？……いいきなりなによっ！！いいから部外者は行った行ったっ！！そっちでおとなしく座っていなさいよもぅ――…私だってこんな鳥さんの一つや二つっ！！」

と、暫く冷凍鳥と睨めっこした挙げ句…心配して赴いた光雄をいきなり追い出しつつ何かしらスイッチが入ったのか
気合いを入れつつ、いきなり腕まくりをしだす彼女…
一体どんなスープを作るのか!?、かなり怪しげなのだが??

◆◇◆◇◆……

そんなこんなで只今その小さな机を囲みながら座り食しながら話しの続きをする三人なのだが……リナは相対するように目の前に座る二人を眺めつつ目を細め…何処か、遥か遠くに忘れさった筈の人との暖かな温もりを噛みしめ……先程から未だに言い争う二人を眺め、なにかしら自分の息子や娘…若しくは家族との久々の再開みたいな…そんな不思議な感覚に囚われていたのである…

「先程はすみません…突然”このバカ”がしゃしゃり出て来たせいで……」

「あ…あの~……マリオンちゃん??その”バカ”とか”ギャグの固まりっ”とか止めてくれませんっ!?目の前のリナさん…変な目でみてるしっ…絶対俺の事アホな奴だと思ってるから俺の株下がるから…」

「えっ??あなたから”バカ”を捕ったら一体何が残??」

「だぁぁ――――かぁ―ら―、その”バカ”とか……ハァ――――…もういいよバカで…」

「うふふ……そうなんだ、とうとう自身を認めたわねっ??」

「ああ…ありがと、別にいいぜっ!?そんなアンタもロ??」

ゲシッ!!「ぐふっ!?」

「ははは…本当に君達は賑やかだねぇ～……久々にこんな暖かな食事するの久々だね…」

「「えっ??……す…すみません」」

そう…それが光雄達の魅力なのか、先程前のシビアな空気を全部纏めて吹き飛ばす彼等…そして、そんな彼等何時もと変わらない仕草なのか…すっかりお互いに打ち解けた雰囲気になりつつある光雄達とリナ…そんな中いよいよ本題に切り出す光雄達なのだが…

「所であなた方は、一体…しかも君達が持っていたというこの魔法石は??……」

そんな事を言いつつ光雄達の魔法剣や杖を再び手に取りマジマジと眺めるリナ…

「そう…これ何すが、あの、俺達……実はこの道具を知らない誰かに頂いたというか……俺達もさっぱり分からないのですが…」

そんな事を突然打ち明ける光雄…その彼に対し…魔法剣を眺めている目線を光雄達に移し…マジマジと見つめながら口を開き…

「そうか、君達もねぇ～……まぁ、君達は良く知らないと思うが、我々が良く使用する魔法石（マジックストリングス）その物だからな…」

「えっ??マジック??何故それを?」

その”魔法石”を、と言う彼の言葉に突然反応するように身を乗り出すような仕草で質問するマリオン、更にリナは??

「そうか、君達は、このシステムの持つ意味も分からずに使用していたのか…これは言わば元々は我々の…いやこの宇宙の何処かで採取しその一瞬で巨大船舶をも時空間移動させられる高エネルギー収縮体…とでも言おうか…、その無限に広がるこの世界は一つの巨大な生命体として存在しているよね…」

「えっ??……」

「その中心が高エネルギー体の核…若しくは我々は宇宙樹……とか呼んでいるがな…」

「う…宇宙??……」

「そう…我々アルカナタ種族がこの膨大な高エネルギー体を採取し…我々の科学技術による、ある装置にかけ高密度に収縮した結晶体……みたいな物かな??」

そんな事を言いつつなにかしらゴソリ…と取出し説明を続けるリナ…

「元は……世界はここにある卵…かな??そんなちっぽけな存在だったそれが…」

「ある種のきっかけで爆発…あなた方が言うビッグバン…この我々が居る世界、言わば宇宙が誕生し…未だにこの爆発の中心点に存在しうる核…」

「この世の常識じゃ計り知れない高エネルギー体の中心……それらのほんの一部分を採取した結晶体、君達が用いる精霊はその世界中

に存在しているエネルギー体の一部……まぁ～その他にも謎が秘められているこの魔法石(マジックストリングス)システム…我々の種族が幾多に渡り年月をかけ完成させた高エネルギー結晶体とでも言おうか…」

そう…彼が言うこの世界の”中心点”とか”世界創世記のエネルギー”とかあまりにも壮大な話しになり…二人とも黙り込み、寄り添うようにマジマジと聞き入る光雄達…そんな中その杖や魔法剣を彼等に手渡しつつ更に話しを続ける彼……

「ああ…すまないな、ついつい以前のアルカナタ宇宙軍科学技術時代の癖が出てしまい……おっと…そうそうまだ私自身の事も話さねばなっ！！」

そんな事を言いつつ…目の前のスープを一口含み…飲み込み……一呼吸置いてから再び口を開く彼…

そして……

◆◇◆◇◆◇……

一方光雄達が赴いた世界から遥か彼方に位置する…太陽系第三惑星…

その惑星の中心付近に位置する一つの街……

学園都市、その中の第七学区の恥側に位置する取り壊し予定の廃墟ビル内……そこに祭壇が設置してありその周りを取り囲むかのように佇む数名の人々…その中の一人、

五和はふと先程から目の前の魔法陣の中心付近に位置する時空を繋ぐ扉が再び揺らぎはじめ不安定になりつつある”それ”に焦りを感じるのか、自分の腕時計を眺めつつ冷や汗をかいていたのである!!

その彼女の様子に気付きつつ雪絵（せつな）は話し掛け、

「ねえ…五和……もしかして、これって??」

「ええ…先程の様々な予想外の出来事のお陰でかなり無駄な時間が立ちすぎたみたいです…」

「その証拠に……ほらっ!!」

そう…その彼方が指差す方向にある不安定になりつつある魔法陣の中心付近…その彼方等の様子に、その他のメンバーもなにかしら

焦りを感じているみたいなのである…

「…すみません、部外者ながら心配で、あの～…もしかして…時間切れ……という事になったらどうなるのですか??」

と、先程前まで黒子達の所にいた涙子もその様子に気付いたみたいで駆け寄りつつ、彼女達に質問するのだが…

「ええ…もしかして…遅れたら……」

「もう二度と光雄君達に会えなくなるかも知れないですね…」

「……!!……えっ??」

雪絵はその最悪の事態を涙子にサラリと伝え……

しかし、そんな涙子は違っていた、先程の奇跡とも言える彼の別世界からの生還の一部始終を目の当たりにしたのも手伝っているのか、

絶対大丈夫と!!何かを核心するように強い意志で彼…葛城光雄を信じていたのである…

「本当にすみません…ひょっとしたらあなたの大切な友達が…」

「ええ…でも、きっと彼…大丈夫だと思いますよ、だってそうでしょ??さっきだって…その前だって絶対みんなの…そして彼を待っている仲間の元にいつも笑顔で帰って来たじゃ無いですかっ!!」

そんな彼女の彼を信じる強い意志の一言で再び一致団結しつつある祭壇前……

その様子を皆が佇む後方で微笑ましい笑顔で眺める黒子達…

「ええ…そうですわね…マリオンさんも葛城君も…わたくしも彼を信じますわ…ねぇ…お姉様…」

「えっ??そ…そうねっ…でも佐天さん…」

「ええ…以前の彼女何かとても不安げだったのですが以前と違って…強くなりましたわね、やはり葛城君達のお陰ですわね…」

「そうね…あいつの魅力……か、にしてもマリオンさんも付いてるのに…一体何をグズグズしてんのかねぇ～……」

ふと…そんな事を隣側に佇む黒子に呟きつつ…先程から不安定になりつつある祭壇を眺める美琴なのであった……

あいつ……か…

◇◆◇◆◇◆……

そんな皆が彼方側で心配している中、光雄達はというと??

「で??そのマリオンちゃんが持って来たこの只の何の変哲も無い…まあるい石が…リナさんが乗って来た小型機の……その…あの」

「だぁ――かぁ――らっ!!さっきの会話…聞いて無かったの??

これだからバ？」

「シャラップッ！！黙らっしゃいっ！！いくらなんでもそれ位分かるっつーの！！」

「はは……ま…まぁ～夫婦喧嘩もその位にし？？」

「「ふうふじゃ無いですっ！！」」

と、いきなり急展開になりつつある小さな小屋では？？

先程の彼との会話で、彼の乗る船が何かしらのトラブルで光雄達の住むこの星に不時着した事、

更にその前に何とか船から小型船で脱出したものの、亜空間航行でのエネルギーの余波を的もに受け、この今ある世界、次元断層に墜ちてしまった事……

そして更に最悪な事に彼の使用した小型船の動力源でもある魔法石（マジックストリングス）をも別次元に飛ばされ…

最終的な事に…その船を用いてこの空間から離脱も不可能で、一番最悪な事態は時間の流れすらもストップしたこの世界で死ねる事も無く、かれこれ数百年の間この極寒の地で生き地獄を味わって来た事なのである…

そんな絶望に満ちていた彼に救いの手を差し伸べようとする光雄達……更に何とも奇跡なのか、マリオンがこの世界に持ってきたエクスマスから託された丸い石……この何の変哲もない石が彼のこの閉ざされた世界から脱出する転機になろうとはっ！！

そして……そんな中彼がこの地へ降り立った地点…その地点へ…彼の宇宙船を直しに出発する光雄達とリナ……

更に、光雄達がこの極寒の地の果てで見た物は??

と、又もや無理やりだが次回へ続くっ！！

第六十二話　……――その最果ての地に埋もれし者達は？？（後書き）

今回はちとグダグダだったのだが？？

次回はいよいよっ！！何故かバトル的展開に？？更にラストにかけて盛り上がって行きますっ！！……

そんな訳でっ！！

次回もお楽しみに～…

第六十三話　目的地に行く前にはちゃんと準備しないとダメだよっ！！（前書き

いやいや…又々かなり異質になりつつあるこの展開っ！！後少しで終わります

果たして！！そんな彼等は？？

てな訳で又々かなりＳＦチックになるのだが、苦手な方はすみません…

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～

第六十三話　目的地に行く前にはちゃんと準備しないとダメだよっ！！

――――――――――――

――――……

「そう…ここ、この変かな??」

「えっ??えぇ――――っと…この辺??」

「ああんっ…違うって、もちっと下側……そうそうそこっ！！」

「えっ??でもここよりも…」

「だぁ～かぁ～らぁっ！！違うって…ほらっ！！ここっ！！ここに…分かった??分かったなら早くしなさいっ！！」

えっ??なになに??ヤバイって！?……

いやいやｗｗ一体この二人は”なに”をやっているのかというと！?

ほんの数十分前に遡（さかのぼ）る…

◆◇◆◇◆◇◆……

「そうか、君達はこれを便りにわざわざ祭壇まで使いここまで来たと…」

「そうなんすよ、元はと言えば”こいつ”のわがままで自分の魔法道具製造工房をやりたい？…と？」

「ち…ちょっと光雄っ？？一体なによ～！！あなたもそれに同意してたんでしょ！？」

「あはは…そうだったか？？まぁ～……それは置いといてっ…実は、そんな出来事よりも様々な事が巡りにめぐって、段々と元々の目的よりかなりややこしく、しかもでかくなってしまいまして、俺達は彼側の世界でとある知り合いからこれを託されて赴いたんですよ…」

そんな事を言いだしながら自分のポケットからある一枚の古めあしい紙切れを取出しつつ彼に手渡す光雄

「ああ……いや??これはっ!!まさかっ!?」

そう、その一枚の紙切れを受けとりつつ起用に広げ、その紙切れを眺めながら突然固まりだすリナ……そしてその視線をゆっくりと光雄達に戻しつつリナはある一言を口にする!!

「「えっ??……」」

「そう、実はこれは…」

◆◇◆◇◆……

――そう、先程まで居た…小さな山小屋、その山小屋内の一室で、光雄はリナに、そのエクスマスから頂いた古い書物に書き記されたポイントを見せるのだが??、

しかも彼は意外な事を口にする、そう、その書物事態も偶然なのか何の因果か…今ここに居る彼…リナが遠い昔…初めてこの地に降り立った朝、その小型艇内の専用コンピュータ端末が記した自機を中心に置いて、

その地点から半径数ｋｍ（メートル）周辺の地形を割り出した物

らしいのである！！

「そ…そんな…この古い書物がまさか…ねえ光雄、これ、本当に偶然なのかしら」

「いや…でも偶然だとしてもきっと…きっとさぁ～…俺にも、俺達にもこの世の中を司る人の想い…とか運命とかそんなシステムはよくわかんない…」

「でもねっ！！それでもこれは偶然…と一言でいっちゃぁ～お仕舞いだと思うが…人の想い…そして彼…リナさんの…このどこまでも続くこの地獄からはい上がりたいっ！！…」

「誰かに救けてもらいたい…そんな救いを求める彼の純粋な想いが…俺達を…そして偶然にもエクスマスさんから頂いたこの古い書物をそしてっ……」

「そんな様々な物達を俺達に巡り合わしてくれたんじゃ～ないか？？俺は…そんなリナさんの想いが時空を越えて奇跡を起こし、」

「そんな奇跡が俺達をここに…そう、様々な偶然がかさなり、その極寒の地獄に俺達を導く事になったんじゃないか？…いや！！……きっとそんな彼の想いが奇跡を起こしたんだよっ！！なあマリオンっ！！」

「うんっ！！私にも運命とかの力は良く分からないけどきっと、そ

うだと思うよっ！！それにその運命のお陰で私はあなたにも……その…あの」

「えっ？？マリオンちゃ！？」

その最後の一言を目を泳がしながら慌てるように小さく飲み込むマリオン……彼女は、その真実にたどり着いたような光雄の爽やかな笑顔をなにかしら見つめる内に…頬を赤らめ彼との出会いや様々な出来事を考えていたのだが？？

「ふぇっ？？わ…わわ私っ！！又々一体なにをっ！？……あぁ～もうっ！！と…とにかくっ！！リナさんっ！！」

「ん？？……」

「そんな訳だからっ！！さあっ！！行きましょうかっ！！後…こんな私達だけど…これからもよろしくねっ！！」

「えっ？？ああ……君達に会えて私も本当に嬉しかったよ…こちらこそよろしくっ！！」

そしてその書き記した通りの情報を元に、彼がこの世界に墜ちてきた最初の場所…そう、小型巡行艇の不時着地点へ向かう御一行様なのである、

更に数ｋｍ（キロメートル）行った地点に、何かしら半分雪に埋もれた”なにか”を発見し、”それ”を調べる事になり、結果、その謎の機械は、何時頃この地に墜ちたのか定かでは無い謎の乗り物であるかとが判明!!

更に”それ”の動力装置に使用する部分には既に機能停止し…只の石ころと化した魔法石（マジックストリングス）が埋め込まれているのを確認……

で、そのシステムに用いる為の動力源でもある魔力を宿し、補充したら再び動かす事が可能カモと判断、そして只今その装置を動かす為に車体の下側に潜り込んでいる光雄なのであるが??……

「うしっ!!あったあった!!ここに能力を注ぎこめばっ??……」

そんな事を言いつつ何故か自信の能力で粒子を造り出した光雄…しかしその前に、只今機械の上側に乗っかっていた彼女は再び慌てるように下側の光雄を覗き混むように怒鳴るのだが??

「ち??ちょっとぉ――――っ!!光雄っ!!ダメダメっ!!ストップストォ――ップっ!!」

「えっ??でもこれ……」

「だからなぁ～にを勘違いしてんのよっ!!まったく…”それ”に能力を当てたら粉々に壊れちゃうでしょ??」

「へっ??」

「へじゃないっ!!本当あなたは魔術に関してど素人なんだから……」

そんな事をいいつつ、自分の荷物から”なにか”を取出しその”なにか”を彼に渡し…

「ほらっ!!これ…あなたの能力じゃなくて魔力を使うのっ!!いいからその魔導書の４５０ページを開けて?」

彼女がゴソリ…と、持ち出した、一冊の使い古した魔導書…それを下側の光雄に手渡しつつ目を閉じ…演算では無く…別の感性で集中しろと言いだす彼女…そして、

「そう…そしてそのページに書き記した通りをそのまま私の言う通り復唱し…それに集中……いいわねっ！！」

「うえっ？？でもこれ…全部ラテン語の言語みたいだし…読め…」

「いいから私が今から言う台詞をそのまま復唱するだけだからっ！！簡単でしょ？？」

と、何とも奇妙な…正に魔法使いとその弟子みたいな二人…そんな二人が今から使用する魔術を隣側不思議そうに眺めるリナ…

もしかしたらこの二人は本当に…この地獄のような牢獄から救いの手を差し伸べて来た救世主かもしかしたら神からの使いじゃないかと？？…そんな感覚に囚われていたのである…

そんな矢先…リナがその様子を見つめる中…光雄達はお互いに合唱しあい、再び彼の異なる力…そう彼が本来持つ精霊式魔術師としての魔力が高まり…それによって、彼の身体から蒼い光りが満ちて行く…その光神秘的な光りが既に死に体になっている魔法石に注ぎ込まれ……奇跡は起こったのである！！

そう…彼等の高まる魔力…更に、それに応えるかのように、なにかしら反応し只の石ころだった魔法石に命（マナ）を宿して行き…再び機能し始め…

「これって!?…俺がか??」
「そうそう、光雄の身体に宿る精霊達が初めて作用した証拠よっ…」

「いや、俺…一様能力者なんだが……何で魔術が??しかも以前の時と違い身体、何とも無いし……せ…い…れ…いっ??……もしやこの精霊式魔術って?能力者も使用可能なのかっ!?」

「うぅ〜ん……まぁ〜私も逆に能力者の脳の構造とか、専門じゃないからわからないよ…その話しは後でするとして…リナさんっ!!」

「ああ……それじゃ行こうか…みんな掴まっていてくれ…」

そんな事を言いつつリナが操縦するＳＦチックなスクーターは皆を乗せながら速度を上げるのであった…

――――――――……

◆◇◆◇◆◇◆……

そして、その書き記されたポイントに向かう事数時間後、遂に光雄達は、この世界に赴いた旅の執着地点に到着するのである、そこで彼等は一体何を見るのであろうか！！

……――――ふぅ～――…

「ようやく到着したな…」

「ええ……」

「ねえっ！！光雄っ…あれ…あそこに埋もれている巨大な機械…もしかして…あれが？？」

そう…そんな彼の視界に突如現れたそれは？？

…――――降り積もる雪……凍てつくようなツン……と冷たい風が頬を掠める……そんな静寂が支配するこの世界、そして…それは音もなくとても静かな……この世界をそして、そこにはこの次元の狭間に突如迷い込んだ俺達を歓迎するかのように、ただ…ただ…目の前にその巨大すぎる姿を見せ付ける、未知の超科学文明…それが造り出した産物……

星間航行型宇宙巡行艇…光雄達が知らない未知の魔法航行システム搭載型小型艦艇が……

「そうだ…これが私がこの地に降り立った時に乗っていた船…アルカナタ宇宙軍所属…特殊巡行艇…君達からして見れば初めての宇宙船…て所かな??」

◇◆◇◆◇◆…

そして、雪に埋もれた巨大な船を見上げる光雄達……

「凄い…こんなのが只の脱出艇何かだったら、リナさんが言うこの船の本体と言うのは!?…」

「そうだな…例えるなら君達が住んでいた学園都市てか言う街の一つの学区位か??全長数ｋｍ(キロメートル)級の巨大宇宙戦艦って所か……」

そんな事を、まるで当たり前のような口振りでサラリと応えるリナ、

そんなリナの一言で目の前の宇宙艇を眺めながら更に唖然と固まる光雄達……

「いや…そんな、全長数ｋｍ(キロメートル)って!?まるでマク○??」

ゲシッ「ほぐろっ!?」

「ったくもぅ～……光雄っ!!それ言うたら元もこも無いでしょうがぁぁっ!!……まったく何でこうショーもないヤバイネタがホイホイ出るんかな”こいつ”は??…」

しかし、そんな彼等の様子を眺めるリナは??なにかしらニヤリ……と??

「「……!!……」」

そんなニンマリする不気味なリナに対し二人は…この”ネタ”はけっして触れてはいけない事を実感したのである!?…というか…何故彼は??

◆◇◆◇◆◇◆……

そして、なんだかんだでその宇宙艇の内部に侵入する光雄達、

船の裏側に半分開きっぱなしになっている後部ハッチをくぐるように侵入…そして、そこには、半分開いたハッチから差し込んだ雪が凍って長い歳月で出来上がったのか…その見上げる広い格納庫内にまるで氷の城のように広がる鍾乳洞のような世界が…それが所々射し込む外からの光りで反射し…キラキラと輝き…

光雄達は実感した、この船もそうだが彼リナも…こんな気の遠くなるような年月をこの難破船と共に過ごして来た事を……

その格納庫内で立ち尽くす光雄達を無視するかのようにツカツカと船内の奥深くへ進むリナ…そして、遥か向こう側の格納庫を抜けるハッチらしい場所から振り向き…

「おおいっ…そんな所でなに固っているんだ??ほらほら先に行ってるぞ!!」

と…

その彼の声に突然我に帰り慌てるように後を追うかのように駆け出す光雄達…

そんな光雄は…

しかし…この船と言い…あの人、一体何年……いや??何年ってもんじゃ無いぞ??多分…俺…良くわかんないけどこの人も、そしてこの船もきっと彼と同様想像を絶する長い年月をこんな世界でたった一人ぼっちで過ごして来たんだな……

それに引き換え俺何か…しかも今隣側のマリオンも、生まれてまだ数十年しかたって無いのに…

何か、今まで俺…この世界…いや、
俺の存在ってこの人から比べれば……ううんっ…今は…今は何も考えない方がいいな…
今俺が遣るべき事は…一つ、この人!!そうこんな次元の狭間に取り残された絶望に満ちたこの人を救ってあげる事!!

でも、この俺に一体何が出来るんだ??いくらあの街でＬＥＶＥＬ５の称号を貰ったとしても…そしていくらあの不思議な魔法石の力を頂いたとしても、それを生かさなけりゃ…只の負け犬じゃぁ～ないかよっ!!

とにかく今は、こんな俺でも何とか役に立つ方法を探さないとなっ!!

と…そんな事を思いつつ、彼の後ろ姿を眺めながら船内を突き進む光雄…

そして、ある目的地にたどり着いたみたいで突然立ち止まる彼等に慌ててぶつかる光雄は??

「うえっ??」

「っとに…なぁ～にやってんのよ光雄っ…」

「ああ……悪い悪いっ…いつもの癖でちと考え事を…ははっ…」
そんな事を言いつつ…作り笑いしながら、ついつい何時もの癖で片手で自分の頭をボリボリかく彼、

そんな彼の様子に、マリオンは??、
又々”こいつ”は得意の妄想か??
と…言わんばかりに呆れた表情でそんな彼を眺めつつ、なにかしら思い点いたみたいでニンマリしながら何か言おうとした矢先??

「ねえ~ちょっと光雄??それはど??……って??」

「君達ちょっといいかな??」

「むぐぐ……」

「あはは変なマリオ??……」
ゲシッ!!「んぼっ??」

「うぅ……うるさいっ!!……で…何でしょうか??」

「……（汗）」

と、そんな彼の一言で　半強制的に台詞を摘まれ!?むぐぐ……
とまぁ~、梅干しを含んだかのような妙な衝動の彼女…
そんな妙な彼女に何かしら受けたのか??突然笑いだそうとする光雄??そんな彼に対し彼女当然再びドツキ初めるのだが??

その二人の様子に又もや固まり出すリナ……
いやいや…いくら何でもこうも夫婦漫才を見せられれば、大抵はどん引きされますよ…（汗）

◆◇◆◇◆◇◆……

そして、数分後…

「あの…もしかして、ここは？？」

そんな事を言いつつゆっくりとその広い一室内をグルリと見渡す彼女…

「そう、この部屋が…この船の中心付近…そして、そこから見えるあの巨大な装置が、『超縮体型推進制御装置（ゾルバックシステム）』いわゆる、君達が持つあの魔法石システム（マジックストリングス）を用い、幾多の星の海を航行可能な、エネルギー増幅制御装置かな…」

その巨大な装置の増下に佇みつつそれを見上げるように応えるリナ…更にマリオンを此方に来てくれと…　その彼の様子に不思議がりながら先程頬に当てていた手を自分の頭に持って行き…
ふわりと水色の短めの髪を片手で器用になびかせ…そして…ゆっくり歩きだし彼に近づくマリオン、

その彼女の紫色のブーツがツン…と硬い床に触れ…コツコツと、その広い室内に響き渡る…
そんな様子を眺めながら光雄は未だに、その広い一室を眺めていた…
正に未知の科学技術…彼が見た事も無いような輝きを怪しく放つ…謎の金属に囲まれた一室、更にその一室を取り巻くかのように幾つもの何かしらの装置が並び折り重なり…一つの巨大な未知の装置に繋がっている、正に、そこは以前彼が見た何かしらのアニメか若しくはＳＦ映画の中に迷い込んだような世界……
そんな錯覚に囚われている彼を…

そんな矢先、その巨大な装置前から、マリオンが此方に来いっ！と、手招きするのである…そしつそれに応えるかのように、光雄も、只今履いてる学生靴をコツコツとその、ひんやりした空間に音を立てつつゆっくりと近づくのである…

そして…そんな彼が見た物とは??

「ねえ…光雄っ…さっきリナさんが言ってたこの魔法増幅装置……多分、これ」

そんな事を言いつつ自分の荷物からゴソリ…と、取り出したまあるい只の石…　その石を床にゴトリ…と置きつつ…

「えっ??これって、あのエクスマスさん所の教会で貰った石だよね…」

「そう…そしてあれ!!あれを見て??」

そんな事を言いつつその巨大な装置の保々中心付近に小さく空いているスペース…そんなスペースを指を差して言うマリオン…

それを確認する光雄とリナ…

「ああ……もしかして、この石の意味する物は??」

「ええっ…私も幾つかの様々な魔法石（マジックストリングス）は見てきたのだが、こんな石みたいな形状なのは…」

更に、なにかしら確信したかのような光雄…は??試しに”それ”をはめ込む為にちょっと飛んでくると??

「おいおい…幾ら何でもあんな高い位置じゃ…なにかしらハシゴかなにかを持って来るからそこで…って??光雄君!?」

と、そんな高い位置までたどり着くのは無理だ…と否定しまくる彼に対し…光雄は任して下さいと言い切りすかさず演算を開始、瞬間リナは自分の目を疑った…彼の能力『光学使い（プラトニックマスター）』としての彼に!?

「なっ…あの彼を取り巻く眩ばゆい光りは何だ??」

「魔法石（マジックストリングス）とも違う…この輝きはっ!!」

その彼の様子に只言葉を失い見つめているのである…

そんなリナ達を横目に自分自身の足元に光りの粒子を集中させ、

瞬間…何とも不思議な事に彼の身体がフワリ…と浮き…そして、

ズバンッ!!と、粒子を煌めかせつつ一気に飛び立ち…そのポイントにあっという間に到達…そして…彼等が見上げる遥か上空から…光雄は…

「あっ、あの～…リナさんっ!!ここですか??と…」

その様子を上空に停滞する光雄を仰ぎつつ、ただ唖然と固まるリナ…そのリナに??コツン…と、こづくようにマリオンは??

「ほらほらっ…リナさん早くっ!!光雄が聞いてるでしょ??」

「……んあっ!?…ああ、すまんっ、こんな魔法初めてお目にかかるからな…」

「そうですかっ、そう彼が持つ超能力と言う能力ですよ、以前私達が居た学園都市という街ではあんな彼みたいな能力者と言われる人達が五万といるんですよっ!!」

「そんな人達が…か??」

「そう、んで！！その彼…実はその能力者の中じゃ～ぁずば抜けて優秀な数人しか存在しない人達の中の一人なんだからっ！！」

とまぁ～…只今上空に居る光雄をそっちのけで彼の自慢をまるで自分自身のように鼻をならし自慢しだすマリオン…

そんな様子を真上から眺める光雄なのだが？？

「うぉ～い……ちょっとぉ～っ…ったく”あいつ”等少しは人の事を聞けっつーのっ！！」

ようは、”これ”この装置にこいつをはめ込めば良い訳なんでしょうがっ！！

あんなのほっといてチャッチャとやりますよっと！！

と、そんな愚痴を零しつつ、その謎の巨大装置にゴトン……と、その石をはめ込む光雄……

「これでよしっ！！と、後は？？……！？」

「んなっ！？」

と、次の瞬間…グワッ！！と眩ばゆい閃光がその広い一室をてらし、それに仰け反るように身構えながら落下！！

「へっ！？……」
「のわっ！！」

「うおおっ！！これはっ！？まさかっ！！」

瞬間この一室内全体を揺さ振るかのような振動と共にマリオンの眼前に落ちて来た光雄だが？？辛うじて何とか一回転をしながら体制を立て直しつつ着地…

そして三人が佇む中まるでさっき迄の静寂が嘘のように次々にあちこちの装置のコンソールが点滅して行き……新たな魔法石（マジックストリングス）システムがはめ込まれ…

ここに再び数百年ぶりに息を吹き返した惑星間航行型宇宙巡行艇
！！

「まさか…あのエクスマスさんから頂いたあの石が？？」

「実はそもそもこの装置の一部だったとは、まったく偶然にもほど
があるよな、マリオン…」

「ええ…そうね、リナさんっ！！」

「ああ……まったく、君達には本当に何てお礼を言ったら…」

そして、その光雄達が起こした奇跡…その息を吹き返した魔法石
の奏でる眩ゆい光りに照らされる彼等を眺めつつ…

「それじゃ…早速この地から脱出の準備だな…すまないが、私に着
いて来てくれ」

と、そんなリナの後を追いながら、機能したエレベーターに乗り込みこの船のブリッジへ誘うリナ…

そして、エレベーターの扉が開き…そんな彼に待ち侘びたように…独特の音声で語り掛けるこの船の中央コンピューター…

その未知のシステムとブリッジ周辺のコンソールから差し込む光りを眺めつつ固まる光雄達…その彼等を横目にリナは…そのブリッジ中央のコンピュータが割り出したデータを眺めつつ冷や汗をかき戦慄する

「なにっ??まさか…ここの地点が!?」

「良くて一時間後には…崩壊だと??」

そのコンピュータが割り出した最悪の答え…そしてっ!!
それと同時にまるでその時を待ち侘びたかのように起こり出す……
この地の崩壊が??

自然界…その世界を元へ戻そうとする力、そんな力が働き、この

不安定な状況で存在するこの空間も例外じゃなく…元の有るべき場所へと戻る……

そんな兆しがこの凍てつく大地が続く世界を崩壊へと誘い…最悪の状況へと変貌しつつある…

そんな状況になりつつある事を未だ彼等は知らない……

次回へ続くっ！！

第六十三話　目的地に行く前にはちゃんと準備しないとダメだよっ！！（後書き

とまぁ～…今回もバトル的展開にならなかったが！？

次回っ！！いよいよラストへ向けて意外な展開で彼は？？まさか光学使いＶＳ宇宙生？？いやいやｗｗ

そんな感じで次回もお楽しみに～！！

第六十四話　"かんちょ～"と言うなっ！！艦長と呼べっ！！

さてさて、いよいよ今回でやっと終わるこのパートっ！！

果たして光雄達はこの地を無事に脱出来るのであろうか…

今回もＳＦチックなのはすみません…

てな訳で！！

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～…

第六十四話　"かんちょ～"と言うなっ！！艦長と呼べっ！！

この遥か彼方まで続くこの最果ての白き大地……その大地に埋もれる巨大な人口建造物……いや建造物と言うよりは、周りを特殊な輝きを醸し出す独特の金属を纏い…なにかの乗り物のような形状の人口物、

更に、その巨大人口物の奥深くから最初は囁くような微かな音源から徐々に周りの大気を揺さ振りかけるが如く…独特の金属音がこの静寂な空間に力強く響き渡る！！……

その人口物内の保々前側に位置する、艦首制御室内、俗に言うブリッジ付近では、

只今先程前にこの船の魔法石（マジックストリングス）システムを発動させた張本人、光雄とその隣側に佇むマリオン、

更にその二人の前方に佇むリナが腕を組みつつその船のコンピュータから目まぐるしく割り出される周りの状況データを睨みながら佇んでいるのである、

「良くて一時間か…」

と、呟きつつなにしら嫌な胸騒ぎをひしひしと感じながら……

その目の前のリナの後ろ姿を眺めつつ…
只今紺の学生ズボンのポケットから両手を出しつつリナと同じように腕を組ながら…前方に佇むリナに、なにか言いたそうな光雄…
そんな態度の彼に何かしら気が着き、口を開くマリオン、

「ねぇ～…光雄っ??、さっきからさぁ～、何をソワソワと落ち着かないのっ?、何か悩む事があったら言ってみてよっ……」

「えっ??マリオンっ?いや～……ちょっと……ね…」

いや……確かに”後一時間”とか言っていたよな、一体何が一時間なのか?
この船が、この空間から脱出可能になる為の時間なんか??
にしても、さっきからあの天井の丸い機械…何かしら喋っているのは分かるが一体何の言葉だかサッパリだな……

と、目の前のリナと同じく何かしら気になる素振りで腕を組なが

ら頭を傾げる光雄…

そんな様子で何を聞いてもそっちのけな彼の態度に、自分のデコに人差し指をつけ??う〜ん…と眉をしかめる彼女…

そしてっ??

「おお〜…そっか!!」

とまぁ〜、突然パァ〜…っと!?何かしら閃いたみたいで、彼の横顔を眺めつつニッコリと可愛らしくほほえんで??

「そっかっ!!あなたもしかしてかんちょ――――??をしたい??」

「って!?ちが――――――っ!!」

「な…なによ〜…」

「ちょ――――って何だよちょ――――って??んなもん延ばすなよ、もしかしてあれかっ?あれなんかっ!?

そんなダサダサ極まりないおやじギャグを一発かまして目の前のリナさんを笑わせようとする懇談かっ！？」

「なっ！？私はただ……」

と、一体なにやら彼にスイッチ入ったみたいで？？

更にズビシッ！！……と指を力一杯射しつつ

「ははんっ！！さてはそんなリナさんの気を引きヒロインの地位を更に盛り上げようー――――っとする懇談かっ！！……えっ？？図星だろっ！！このロ？？」

「……」

（注：なにやらプルプルと青筋立て初めちゃった彼女（笑）

「へっ！？……」

「そうなんだ、前者は別に許すけど、又々この私を”ロリ”呼ばわりしたわよね～」

「いいっ！？しまっ！？」

「遅いっ！！……その”禁句”を又々軽々しく口にした者達はあの”アホ作〇”すらも…尽く私の魔術で再起不能にしてきたの知って

る？？…知ってるわよねぇ～光雄っ？…ふふ？？」

「いいや……まてまてっ！！落ち着け、こんな場所で何を唱え初め？？」

「こんのぉぉぉ――っ！！問答無用っ！！くたばれやゴラァァァ――――ッ！！」

「きゃぁぁ――――っ！！」

◆◇◆◇◆◇◆……

す…数分後っ！！

「んっ？？どうした？？たしか艦長がどうとかって……」

「んっ！？ん～んっ？何でも無い何でも無いっ……」

そんな何かしら後ろが騒がしくて心配そうに振り向いたリナに対して、何事も無かったように、ニッコリと、フワリと綺麗な紫のマントをなびかせつつ可愛らしい笑顔で応えるマリオン…しかし、その彼女の足元にゃ～??

「ぐふぅ――――…（涙）」

とまぁ～…一体”なに”があったのか??なんともかわいそうに、久々に謎のアフロヘアで死んでる光雄の姿があった……と言うか又しても彼女を挑発しちゃって??自業自得のよーな（汗）

そんな好奇心旺盛で尚且つ又々騒がしくなる何時もと変わらないこの明るい二人に対して、やれやれ…と、まるで自分の娘や息子に応えるような優しい笑顔で…

「はは…まったく君達はどんな時でも総て明るく吹き飛ばしてくれるな、そうだ…そんな君達に”こいつ”も話したがっているぞ」

と、何やら彼の佇む位置から斜め上側の丸いコンソールの液晶画面を眺める様子に、光雄は??

「えっ??あの～もしかしてこのまん丸の機械って!?やっぱり」

と、その謎の音源を発する装置をリナと同じく眺めながら質問する光雄、…というか…〝こいつ〟いつのまにかアフロ治ってるし…(汗)

「ちょっと待ってくれ、今この星の住民の言語を解約中だから」

「「はぁ……」」

そして暫くして、再びリナはその謎の装置に話しかけ??

「リンっ、どうだ??離陸可能か??」

『はいっ魔力放出量６５％（パーセント）、魔導エネルギー安定域まで後少しお待ちを』

「そうか…とにかく急いでくれ!!」

『はいっ……承知しています…』

と、いきなりなにかしらの装置で突然光雄達が使用する言語で喋りだす謎の装置に??反応する彼等、

「うえっ!?しっ!?喋った!!」

「そっ……そうみたいだけど、あっ……あのっ!!あなたは?」

『はは…驚かせてすまないね…私は、この艦の総てを司る第四世代型生態端末装置…デリアンリトライブルシステムです、まぁ~相性のリンで良いですよ…』

そんな長々と紹介されつつ、さっきまでの賑やかな二人はどこえやら??みたいに黙り込み、寄り添うようにその液晶画面に移りこむ謎のオッサンをじと~……っと??眺めるのだが…

やはり、未知の科学技術には流石に驚きの連続のようで??

二人して唾を飲み込みつつ返す言葉も無いのである!!

そんな固まりだす二人を横目に、クスリ…と笑いつつリナは…

「はは…驚くのは無理もないな、これは君達が俗に言う単なるこの船の制御装置であって別に怖いもんじゃ無いから…端末装置も君達

の音源にインストールしたから、分からない事があったら”こいつ”に聞くといい…色々と面白いぞっ！！」

「「……は…はぁ～…」」

◆◇◆◇◆◇◆……

そして、なんだかんだでこの船の総てのシステム、及び魔導エネルギーも安定息に達して、遂に離陸準備が整い総てオールグリーン！！

「よし……リン、後は任せたぞっ！！」

『承知いたしましたリナ様』

そんな事を呟きつつ片手を腰にあてがいその室内に佇むリナ

そのリナに応えるように彼の見つめる軸線上…その一室の天井付

近に設置してある丸いコンソール内からリンという名の生態コンピュータの声が響き渡る…

「よしっ！！惑星間航行型巡行艦、グナイゼナウ号発進っ！！続けて高度１５０００ｍ（メートル）まで達した時点でＭ２０２地点まで亜光速システムに切り替え、マゼラン星系を抜けまずは銀河系の太陽系第三惑星までジャンプっ！！良いな！！」

『はいっ…承知しまし…　』

と！！正に離陸する寸前に何かしらの外部からの凄まじい衝撃で船全体が揺さ振られ！？

「うわっ！！」

「きゃっ！！……ち…ちょっとぉ――光雄っ！？何狙っているのよっ！！このエロ光雄っ！！」

と、そんな凄まじい揺れで足が縺れお互いに折り重なるようにすっ転ぶ二人、そんな光雄の右手になにやら暖かく軟らかな感触が??

「うへっ!?」

「はわわわ……いい加減に…離れろこのエロ河童がぁぁっ!!」

更に??彼女の容赦無いコークスクリューが彼の顔面にクリティカルヒット??そして光雄は空を飛んだっ!!(笑)

「いてて…今日は一体なんなんだよ~…ったく、あんまドツカれ過ぎて俺…マジ死にそうなんだけど…」

「って!?……んなっ!!なななな……」

と、頭を片手で抱えながら起き上がり際に目の前の大きな船内窓越しに此方(こちら)に差し迫る何かしら超巨大な物体を辞任……なんじゃぁありゃぁぁ――――っ!!と、突然叫びながら指を差す光雄に対して??

相対するように両腕を腰にあてがいつつ、

「もぅ――――…さっきただ船が強く揺れただけでしょう??大方離陸時に岩盤かなにかに引っ掛かっただけじゃないの??」

「うぉぉっ!?だっ!だから違うっつ――――のっ!!あれだよあれっ、ほらっ、後ろっ!!」

そんなかなり大マジみたいな屈強の表情に流石のマリオンも彼の指差す方向をゆっくりと振り向き??

「えっ!?……ええっ!?なにあれ??」

瞬間っ!!

「全員何かにつかまれぇぇ――――っ!!」

と、突然叫びながら皆に命令を下すリナ!!

瞬間グワワッ！！と先程とは比べ物にならない強い衝撃が彼等を襲いブリッジ内のコンソール類がバチバチと弾け飛び火花を散らす……

その強い衝撃が止んだ頃マリオンは…先程の衝撃で身構えていた身体をお越しつつそっと目を開けると…

目の前のコンソール類に頭をぶつけたみたいで額から血を流し気絶してるリナ…更に未だあちこちからバチバチと…火花を散らし煙が立ち込めるブリッジ内…その総ての電気が切れたような一室に彼女の真上…そのブリッジ内の天井に設置してある液晶画面からの青白い光だけがこの一室を照らす…

そんな中、自分の身体に違和感を感じつつ、目線を戻すと??

「んっ！？どうしたマリオン、大丈夫だったか？？」

「ふえ？……」

そんな強い衝撃の最中咄嗟に彼女の身体を庇い尚且つ自信の能力で防いだ彼…葛城光雄に抱かれていたのである！！

そんな彼は踵を返すように斜め前方を振り向きつつこの船の生体コンピュータ…リンに質問する…

「なあ…リンさんとやら…この船の状況は??それと、あの外の巨大生物は一体なんなんですか??」

『ふふん、一つ質問して良いか??』

「はい??何でしょうか…」

『今君が”抱いてる”かわゆい子君の彼女なのか!?』

「はっ!?……あ…あの～…リンさんとやら、大変申し訳無いが今それを口論している場合じゃ??」

『ふぉっふぉっふぉっ…ジョークだよジョーク…それにおまえさん…自らを犠牲にして愛する彼女を守るその勇気正しくそれ?」

「あ～もぅ～っ!!う・る・さ・いわねぇっ!!”あいつ”只の”友達”だってんっしょ――――がぁっ!!あんまふざけた事抜かすとスクラップにすんぞこの老いぼれジジィ!」

ひっ!?い…いや…マリオンちゃん…そんな必死になって反論するって…やっぱ俺…ううんっ!!分かっているよ…分かっているとも!!俺はマリオンちゃん大好きでも彼女はそうじゃ無いという事

位……

うぅ～くっそぉ～っ！！この当てようも無いムカつきっぷりは一体全体何処へぶつけてやろうかっ！！

はっ！！決まっていんだろっ！？こんなシチュエーションにしてくれちゃった大変ありがた～いあの外の巨大ミミズ野郎……けっ！！待ってろよ？？今からキレイサッパリ折り畳んで俺様の能力で現代アートも真っ青なオブジェにしてやっからよぉ――――っ！！

とまぁ～この彼はバカなのか超が付くほど鈍感なのである…（汗）

しかもその逆恨みの矛先があの巨大モンスターに？？……

と、未だマリオンを抱き抱えつつかなり”アホ”としか言いようの無い鈍感なご様子の彼なのであるが？？…（汗）

◆◇◆◇◆◇◆……

そして、その船の生体コンピュータが教えてくれたのは、
奴はサンドアームとか言う別の砂漠地帯の惑星に生息する巨大ミミズの一種で、その巨大な口で動く物はどん物でも食い殺す性質らしく、
先程突き飛ばされ真後ろの岩盤に激突後機能停止みたいに動かなくなったこの船は既にその性質上対象外みたいのようで、

しかし再び離陸しようとし、船を再発進させよう物なら奴は容赦無く襲って来るのである！！

そして、未だ煙が立ち込めるブリッジ内で光雄はそっと優しくマリオンを床に下ろしつつ、

「なあ…マリオン、ちとお願いがあるんだけど…」

「えっ？？光雄っ！？あなた……まさかっ！！」

「うん、どの道あの化け物を何とかしないとこの船は飛び立てない…んで…さっきリナさんが呟いてんのちょいと耳に挟んだんだけど…」

そんな事を相対するように佇むマリオンに言う光雄、そしてその

目線を斜め上側の丸いコンソールに持って行き、

「なあ…リンさん、この地が崩壊すんのって、後どれ位だ??」

『ふむ…先程の会話を聞いていたとは…私の計算だともう既に数１００Ｋｍ(キロ)圏内まで崩壊が進んでいるぞ…後持って２０分だな』

「と…言う訳さっ!!残念だけど今奴と戦えるのは俺位だし、そんな訳でリナさんの傷の手当てとこの船の発進準備…任して良い……って??」

と、その瞬間突然光雄にどんっ!!と衝撃が走り目をつぶる光雄!!同時にフワリ…と良い臭いが…それに気付いてそっと目を開くと??

「もう…まったくアンタはバカ何だからっ!!そうやっていつもいつも１人で突っ走って!!いつも心配してる私の事も少しは考えてよっ!!」

と、とうとうガマン出来なかったのか突然彼の胸に飛び込み力一杯抱き締める彼女…

「ええ――と……まっマリオンちゃん??だ…大丈夫だか?むぐっ!?」

と、その勢いで光雄の唇に自分の唇をかさね…更に押し付け…

「……ぶはっ!?、まっマリオン??ちょ?俺…こんなの初めてで…ほんと、」

「わ…私だって…初めて…だから……」

そんな事を言いつつ光雄の手をグイっ!!と掴み自分の身体に持って行き…

「えっ!?マリオン??一体なにを?」

「ねえ、私の身体に宿る精霊達…感じてみて…」

と!?

そんな事を言いつつ彼の手を自分の胸元に持って行き…

「ねえ??分かる?」

「そう…ここ、この辺かな??」

「えっ??えぇ――――っと…この辺??」

「ああんっ……違うって何処触ってんのよ!!胸じゃ無くて、もちっと下側……そうそうそこっ!!」

「えっ??でもここよりも…」

「だぁ～かぁ～らぁっ!!違うって…何で胸ばっか触るのよっ!!エッチ…」

「うぅ……ごめん…」

「ほらほらっ!!ここっ!!ここに…分かった??分かったなら早くしなさいっ!!」

と、自分の腹側に手をあてがえと催促するマリオン…そして、

「そう…ここで私と同じように目を閉じて感じてみて」

―――そんな事を言われ光雄はじっと目を閉じ…

瞬間彼の心は信じられないなんとも不思議な光景に見舞われていた…

今、二人の身体に宿る精霊達が共鳴し合い…そして奏でる……そんな中彼の心の中に響き渡るまるでテレパシーのような彼女の声―――…

―――――――

―――――

―――――……

――…

…――――えっ??ここ…この景色は??―――…

ねっ??見えるでしょ?これが私が生まれ育った故郷…トルコ…
そして…

この小さな一軒家は??

そう…そこが私の家かな?もう…既に存在しない、私の心の中にある生まれ育った街そしてこれが…

あなただけに紹介するわこの人が私の父、ロイド…ロイド・オヴ・シュペー…

この人がマリオンの父……で?母は??

うん、私の母は…居ないの…そう私を産んでから間もなく亡くなった…と、聞かされたわ……そして私の父も家も総て…あの時……

そう…そうなんだ…本当にごめんっ！！…余計な事を…

ううんっ…いいのっ、今は、……だからっ！！

――――――――――

――――――

――――…

――…

……――――光雄とマリオン、そんな二人は今、二人して何かしらの術式が発動しているのか…お互い抱き合ながら…そんな二人を精霊達の暖かな蒼い光りが包み混む……

……――そんな二人の様子をいつの間にか気が付き起きていたリナは微笑ましく眺めていた…そう…その光雄達が奏でる精霊達が彼にも暖かな光りで迎えているのか
彼も例外じゃ無く…そんな光雄と同じく信じられない光景に見舞われていた…

そう、自分自身の遠き日の過去、かつてアルカナタ本星に置いて来た、
自分の愛する妻を…そんな妻とのもう叶わない…二度と会う事の無い暖かな自分の家族の事を……

そんな不思議なビジョンの中、ふっ…と苦笑しながら自分の過去を振り解くかのように…
今やるべき事はこの最悪の状況を打破し、この二人をこんな小さな幸せの灯火を消さない為にも、みんなでこの世界から無事に生きて脱出する事だな…と、

そして、再び立ち上がり

「ああ、もう大丈夫だっ!!君達取り込み中申し訳ないが」

「「……ひゃあっ!?…」」

と、二人して驚いたように瞬間突然二人を取り巻く蒼い輝きも突然消え、なにかしらの魔術が溶けたみたいに??

「あっあっあのっ！？…」
「はわわわ……り…リナさんっ！？起きていたなら早く教えて下さいよっ！！」

とまぁ～お互い抱き締め合いつついきなり現実世界にトリップアウト！！更にお互いに、飛び上がるように離れつつ…
二人して、なにやら林檎（りんご）のように顔が真っ赤なのだが？？

そんな中再び響き渡る生体コンピュータ、リンの声…

『もう、時間がありませんここのポイントが崩壊するまで後１０分です…』

と……

しかし彼等は違っていた、３人共お互い向き合い頷きつつ、

そして光雄は踵を返すようにキッ！！と、窓の外に未だ停滞するモンスターを睨み付け！！

更に自分自身の精霊（マナ）達に呼び掛けるように意識を集中させ！！

瞬間！！蒼い白い光りに包まれ、学生服だった彼の姿は、銀色に輝く鎧を纏う霊装に変貌…

「それじゃマリオン、そしてリナさんっ…外の化け物は俺が片付けるからその間、脱出の準備をっ！！」

「ああ…すまないがそうさせて貰うよ…光雄君…」

「ええっ分かったわっ！！でもヤバイ時は…」

「ああ、マリオン…そん時はアンタも来てくれ…」

そして、ブリッジから外へ出る為に駆け出す彼…

◆◇◆◇◆◇◆……

そして…それに合わせるように船も再び魔導エネルギーを溜め込み再指導…

「けっ！！待たせたな化け物っ！！」

瞬間…彼は船外ハッチから飛び出し際にそのモンスターの遥か直上まで飛び上がりつつ右手を広げすかさず演算を開始…

更に目一杯自分の身体から光りの粒子を収縮させそれに伴い彼の大気中の周りの光りまでも手のひらに吸い込まれるように収縮して行く…

「今の俺達には時間が無くてねぇ～…悪いけど…一瞬でっ！！」

そんな事を言いつつ更に大きく振りかぶり…今度は両手の中に眩ばゆい光りを溜め込み…

「決めさせて貰うぜっ！！」

瞬間！！凄まじい粒子の塊と共に撃ち出された…彼の光学使いとしての必殺技！！

『超高密度収縮粒子砲』！！それが大気を引き裂いて光速で気付く間も無く巨大モンスターに命中！！

更に凄まじい地響きと共にまるで核弾頭が直撃したかのような巨大な火柱が！！その凄まじい衝撃波の余波を受けブワッ！！と巨体を浮かせ飛び上がるグナイゼナウ号……

「よしっ！！今だっ！！メインエンジン点火っ！！」

その掛け声と共に急発進するグナイゼナウ号…その船に向かい自身の最大出力で頭痛をこらえ…演算しつつ彼自身も天高く上昇…

しかし、先程の攻撃に何とか耐えたみたいに彼の真下から巨体を伸ばしつつ…ザクリ…とてつもない大口を開きつつ襲い来るモンスター！！

「くっ!!今の一撃を…耐えただとっ??能力が聞かない…だったら!!」

とその開ききった大口の中心…そこに意識を集中……

そんな先程の必殺技の使用と最大出力で上昇したのでかなり脳に附加がかかったみたいで…頭が割れるような…そんな頭痛に耐えながら左手で自身の頭を押さえつつ

今度は、先程前に彼女に託された魔導書を右で広げつつ

「くっ!!どの道俺が何とかしねぇとみんなが……一か八か…攻撃魔術とやらを使用してみるしか勝路はねぇな……」

そして…一呼吸を置いて…魔導書を左手に持ちかえつつ右手に魔法剣を構え…未だ鋭い牙を周りにギラギラさせつつ巨大な花を咲かすように大口を開き差し迫るモンスター…

その奴の口の保々中心付近に狙いを定め…

演算では無く…今度は術式を組み上げて行く彼…そう…彼の脳裏

に先程奴を倒す最大の大魔術の読み方を教えてくれた彼女の事を思いつつ…

…――目を閉じ自身の中に宿る精霊達に語り掛け――…

「……――我が古から伝えられし繁栄たるオスマン帝國…その大魔導書第五十六章三十三説……――滅びの章に基づき禁断のこの地に降り立つ冷酷な精霊達に問う――…我が天使を司る精霊達の契約に従い総ての悪しき呪縛から解き放ち解放せよっ！！」

更に奴の中心に狙いを定め最後の言葉をポツリ…と……

『――Ａｎｇｅｌｓｐｅｋｔｏｒ（天使の導き）――』

その一言を唱えた瞬間大地から目を覆うような蒼白い光りが広がり巨大モンスターを飲み込んで行く……

その信じられない光景に光雄自身も恐怖する…その自身に漲るとてつもない力……彼の本来有るべき潜在能力……

魔力を！！

次回に続くっ！！

第六十四話　＆ｑｕｏｔ；かんちょ～＆ｑｕｏｔ；と言うなっ！！艦長と呼べっ！！

いやいや…後半かなり臭い演技＆チートになってしまい…（汗）

んで！！今回でこのパートは終わりっ！！

次回からはこのＳＦパートから急展開で主人公＆ヒロインは、あのとある世界に無事に帰還っ！！そしていよいよ彼等は原作と絡みますっ…

そんな感じで

次回もお楽しみに～（笑）

第六十五話　刻の彼方（かなた）から無事生還っ！！しかし意外なはたし状！？

と……何とか無事とある世界に帰還した彼…しかしそこで待っていたのはっ！？

てな感じで果たしてっ！？

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～っ！！

第六十五話　刻の彼方（かなた）から無事生還っ！！しかし意外なはたし状！？

……――只今光雄は、先程前に亜空間ポケットと言われる次元断層から無事脱出し、すかさず亜光速航行、　更に銀河系に最も近い星系、大マゼラン雲、その地点で一旦亜光速アウト、
その間に船内確システムのチェック後異常無しと判断次第、そこから一気に最後の亜光速航行の準備中なのである

しかし準備やチェックと言っても船員がその現場に赴くのでは無く、
この船の制御装置、及びシステムコンピューターでもあるリンがその小型船舶の節々まで扱う、
そんな全自動航行装置が設置してある未知の超科学文明の船舶なのである、

そんな船のとある一室で光雄は、船外窓の近くに佇みまながら…

ふと、ぼんやりとした眼差しで、窓の外に何処までも広がる漆黒の宇宙空間…　…更にその一室内の内側が明るいのか、窓に映り込む自分自身を眺めつつ、

もの思いにふけっていた……

……――自身の能力、更に魔術と、そんなとてつもない現実（リアル）に恐怖しながら……

◆◇◆◇◆◇……

先程前、彼女に託された一冊の使いふるした魔導書、その魔導書を読み上げ自身の体内に宿る能力とは異なる力……精霊達の奏でる魔術…

そう…一言自身の身体に宿る精霊達に唱えれば、その桁外れたとてつもない力を発揮し、

数１００ｍ（メートル）にも達する巨大な化け物（モンスター）ですらもいとも簡単に粉砕してしまう力……そう、この世界の総てを、あっという間に灰色一色に変えてしまう大魔術『天使の導き（エンジェル・スペクタクル）』

更にその魔導書に書き記してあるマリオンが用いるアクエリアスの涙と相対する魔法石、ドラゴンの瞳、それを使用する最大魔術、

彼が生前から良く知るあの禁書目録（インデックス）の自動書記（ヨハネのペン）が用いた、

普通の並大抵の魔術師じゃ到底組み上げられない大魔術…『竜王の殺息（Ｄｒａｇｏｎ－ｂｒａｃｅ）』

そんな大魔術ですらも長々と術式が書き記されているのである、

「何か俺…もう普通の人間じゃ無いのか??こんな馬鹿げた現実(リアル)、自分自身の光学使い（プラトニックマスター）としての超能力、そしてその力を試すような数々の立ちはだかる能力者や強敵達、更に極上の超ド級巨大魔法兵器魔装機、暗黒師(ガルドラゴ)に砂漠の惑星に生息する巨大生物(モンスター)、何か今考えるととんでもない奴等と戦い抜いて来たな…俺」

ふっ……

と、体装甲型防御ガラス越しに映り込む自身の姿を見つつ苦笑する彼…

「そうだな…今は只、その自分の力…魔力を俺の力を信じ、この世界で出会った大切な、もう一人の自身…マリオンをこれから先も守り抜くっ!!それだけを考えるか、答えはその後だな…」

ふとそんな事を思いつつ、おもむろにズボンのポケットから取り出した一つの蒼く綺麗な石……自身の魔法石、『天使の雫』を取出し…自分の眼前に持って行き…窓越しにかざし……

俺達は、こいつの、この汚れ無き精霊達の後継者の宿命に打ち勝てるのか??その先に待ってるのは??

一体この俺にこいつを託した、あのトルコで出会った人、あの人は俺にどんな想いで託したのかな……

そして、その答えは……と、様々な想いに浸りながら只宇宙（そら）を見つめている彼……

と、突然船内アナウンスがこの狭い一室にこだまする、

『光雄っ!!一体何処で油売ってるのよっ、リナさんが今から最後のジャンプに入るから大至急ブリッジへ来なさいって、』

「へっ??」

『”へ”じゃないっ!!だから……ねぇ～ちゃんと聞いてる??聞いてるなら返事はっ??』

「あ～あ～…りょ～かいりょ～かいっ…わざわざありがとなっ…今から向かうからそう伝えといてくれっ」

『りょ～かいっ!!それじゃブリッジでっ!!』

「ああ…」

と、先程の彼女の伝言に何が楽しいのかふふっ…と、苦笑しながら小さな一室を後にする光雄であった…

…――さて、この長旅も終わりだなっ…

と、一言呟きながら……

◇◆◇◆◇◆◇……

数分後……

「すいませんリナさん、遅れましたっ！！」

と、そんな事を言いつつブリッジへ慌てるように入って来る光雄、そんな彼の眼前、出前側に片手を腰にあてがい佇むリナ、

更にそのリナが佇む位置からもう一段下の段、大きな船内窓越しに設置してある座席に座るマリオンの後ろ姿が、

その彼女が光雄が入って来たと同時に真後ろを振り向き、彼に何かしらのジェスチャーを送りつつ口を開き、

「もう、目を離したら直ぐどっか行っちゃうんだもん」

「で??何してたの?光雄っ??」

「えっ??いや～あちょっとね……はは」

と、ブリッジに入り際いきなりマリオンに質問され…
それがなにやら恥ずかしいのか、作り笑いしながら誤魔化すような仕草で彼女の隣側の座席に座り、その席に設置してあるシートベルトらしい胴体を丸々挟み込むような装置を自身の身体に取り付けようとする彼なのだが??

「あっれぇ～!?たしか、さっきは出来たのに…ここかな?? このボタン…」

「っとになぁ～にしてるのよ…ほらっ…いいから大人しく座って??」

「いいや……これ位自分で出来??」

「早くしなさいっ!!」

「う゛ぅ……」

そんな不器用な彼に私が取り付けるから…と、彼の座席の前に覆いかぶさるような仕草でカチャリ…と起用にはめ込んで行くマリオン…

その彼女の姿を眺めつつ先程前に起きた様々な事を思い出しつつ目線を天井に持っていく彼…そして彼はなにかしらと目が合い戦慄する!?

「げっ!?」

『若いというのは良いのぅ～まぁ～お前さんも若い内に精々彼女と”励め”よっ…ふおっ…ふおっ…ふおっ…』

「いや…リンさん、その”励め”…とかいったい何を”励め”なんか??というかそんな変な顔で見ないでくれ…俺の心そんなに強くないから…すぐ壊れるから」

そしてなんだかんだで準備が整い…

「よしっ!!全員準備は良いな??」

「「はいっ艦長っ!!」」

「えっ??艦長か……ふふ…悪くない響きだな…」

『ではリナ??いや艦長殿っ!!全艦亜光速航行の準備が総て整いました…ご指示を』

「う??うむっ!!それでは最後のジャンプに移るっ!!目標座標Ｍ２４１に固定っ!!目的地っ!!太陽系第三惑星『地球』へ向けて亜光速システム起動っ!!」

『了解っ！！』

そして俺は再び亜光学航行に入る数秒前に隣席の彼女を何気なく見つめ、

それに答えるかのように優しく微笑む彼女と見つめ合いながら意識が遠退いて行った……

……――その可愛らしい笑顔が永遠に続く事を願いながら――……

◇◆◇◆◇◆……

そして…一方彼等の帰還する場所でもある学園都市第七学区内の恥側に建つ
廃棄ビル前には……

「そうそう、ここら変のポイントを中心に広範囲をもっと捜索しろじゃんっ！！」

「あっあの～…」

「ん？？又何か見つかったじゃん？」

「黄泉川さんっ！！あのビル内にとんでも無い物がっ！！」

「ああ分かったから、今其方え向かうから…それとおまえ達…」

「「はいっ！？」」

「彼方の瓦礫（がれき）にもまだ学生達が埋もれているかも知れないから更に引き続き探索を任せるじゃん？？」

「了解ですっ！！」

そう、もう日はとっくに暮れ、星空の元、その夜の闇にキラキラ

とパトライトを光らせながら停車中の数十台のパトカーやら走行車達、

黒子達が通報した警備員（アンチスキル）達が学生達の救助に赴いていたのである！！

そんな中黄泉川愛穂（よみかわ・あいほ）は、この先程前の能力者や魔術師達の戦場後に赴きながら、疑問に思っていた……

こんな目を反らしたいような惨状に比べ重傷者が誰一人と居ない事と、

そんな惨状と裏腹にそこまでの能力者同士の戦場にも関わらず全然無傷な形状を保っている廃棄ビルの違和感を……

◆◇◆◇◆◇……

「ああっ！！来た来たっ！！みんなっ！！光雄君達がっ！！」

「ええっ！？まさかっ！！」

そう…同じく廃棄ビル内の最上階付近、その広い空間に設置してある祭壇、その祭壇内の保々中央付近に描かれた魔法陣の中心、時空を結ぶ扉が突然眩ばゆく光り輝き、更に蒼い光りの中から一瞬で人影が形成され粒子が降り注ぐ中具現化！！

その人影は正しく先程前に刻の狭間に旅立った葛城光雄とマリオン・オヴ・シュペ―なのである！！

「ふぅ～…何とか着いたみたいだねっ光雄っ！！」

「ああ…何かさぁ～…俺達、ほんの数時間前の出来事がもう何年ぶりみたいだよな…」

「なあ…マリオン？？」

「「「マリオンさんっ！！葛城っ！！」」」

「えっ？？……って？？ちょ？」

そう…何時と変わらない表情で無事別世界から時空を跨ぎ無事帰還を果たした彼等を待っていたのは涙子筆頭に光雄達のこのとある世界で知り合い、そして、彼と共に数週間を過ごした大切な仲間達、

彼がこの世界に降り立ってから間もないのにも関わらず、まるで何年…いや何十年前から知り合っていたかのような…そんな彼とマリオンにとっての親友達なのであった…

そんな仲間達が何事も無く無事に帰還した彼等にまるで自分達のように嬉しそにはしゃぎ更に二人に向かい駆け寄り…そんな人達にそれぞれの彼等への想いをぶつけられ更にもみくちゃにされ、

「ああ…皆っ!!ありがとな…そして…ただいま…」

そう、このエクスマスから託された古い書物、その書物に書き記された、とある忘れ去られし時空の狭間、その謎を解き再びこのとある世界へ無事帰還を果たした光雄とマリオン、

「なあ、マリオン…その…」
「ん?なに??」

「あのさぁ〜…おまえがやりたがっていた魔法工房…本当、ごめん……何かさぁ〜かなり無駄足??」

「えっ？？私…別にそんな事もういいよ…それよりもっと大切な物を…あの…光雄に……」

「えっ？？……」

そんな彼女の爽やかな笑顔に戸惑う彼なのだが？

「だからっ！！あの…」

「あらあら、葛城さんっ？？随分見ない内に男らしくなりましたわねぇ～」

「ええっ？？白井さ！？」

「ねえねえっ葛城っ！！アンタさぁ～彼方側で何があった訳よっ…？…そのＲＰＧみたいな鎧と剣っ！！ミス〇ルソードとか？？今度それ何処で手に入れたか私に教え？？」

「って？？さっ佐天さんまでっ！？というかミス〇ルって！？ヤバイからネタバ？」

「もうっ！！光雄っ！！絶対これ教えちゃダメだからねっ！！後明

日から私ともう特訓なんだからっ！！」

「えっ？？もう特訓？」

更に冷や汗をかく光雄に対し、クスリ…とマリオンは笑い…

「もちろん魔術をね…」

と……

更に様々な質問やらでかなり冷や汗をかきつつテンパる彼にいつの間にか向こう側から近寄る別の人物が？？彼に対しニンマリと？？

「ねぇ～…葛城っ！！アンタさぁ～以前のヘタレじゃ無くなったみたいね…」

そんな光雄を遠くから眺め、彼の用いるスペックや力になにかしら気付く彼女…そして？？留めの一言を？ポツリ…と……

「今度…私と”勝負”しなさいっ！！」

「「「えっ？？」」」

「みっ！？御坂さんっ……それ冗談……だよねっ！？……もしかしてマジ？？」

「そっ！！お・お・マジっ！！」

そんな相対するように何ともまぁ～…片手で自慢の茶髪を起用に掻き上げつつ不敵な笑顔で楽しそうに口を開く彼女…

そんな美琴に、一人前の能力者と認められたのか

とまぁ～何だかんだで

無事にとある世界に帰還した彼、更に彼の苦悩は続くのであるっ！？

次回へ続くっ！！

第六十五話　刻の彼方（かなた）から無事生還っ！！しかし意外なはたし状！？

とまぁ～何だかんだで意外な展開に？？

果たしてっそんな彼は？？

みたいな…

次回もお楽しみに～…

第六十六話　好物は最後まで大事にとっておくと、食べられちゃうよっ！！（前

再びこんな時間帯なのだが、次話し行きます

とまぁ～…以前に何とか無事に遥か時空の彼方から無事に帰還を果
たした光雄だが？
そんな彼に、次から次えと！！
意外な展開がっ！！

そんな訳で

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～……

第六十六話　好物は最後まで大事にとっておくと、食べられちゃうよっ！！

先程のあの出来事から数時間後、ここは第七学区内のとあるショボい学生寮、　しかしそんなショボく狭い学生寮内の一室には！？うじゃうじゃと人々が集まりギッチリと？？……しかも！！

その狭い部屋の小さな机を取り囲み相対するように　五和を筆頭に雪絵（せつな）や夏海（なつえ）率いる天草式の面子…
更に？マリオンとオリアナ率いるローマ正教の面子が占領し、只今テーブルに設置してある鉄板…
その鉄板を見つめつつ？獲物を狩る肉食動物の如く今か今かと食材が調達されるのを待ち侘びている最中なのであるっ！！

そんな中光雄はというと？？

うっげぇ――――っ！！何で寄りにも寄って”肉！？”なんかぁ～？？……
しかも度重なる様々な事態の後で疲労している…そんな”自称可哀想？”なこの俺様が何でこんな時間帯にパシられなきゃいけないんだぁー――…っ！！……
いや、１人でグチっても意味ねーから……
余計に虚しさが倍増されるだけだからっ……（涙）

とまぁ～、ほんの数十分前に、無事に帰還を果たし、その廃棄ビルから警備員(アンチスキル)の事情聴取の為に現場に残る黒子達と別れ…
更にそんな帰り道……突然に??みんなで夕飯食おうぜっ!?
と、そんなありがた～いマリオン様のお計らいの下?
その一言を告げる彼女に?まるで天使でも見たかのような?光雄
……
ああ～…やっぱりマリオン様やなぁ～と??

しかしっ!!そんな彼女と言うと??

「ええっ!?何でこの私が”お金”払ってまでみんなをお持て成ししなきゃいけないのっ!?当然私じゃ無く……光雄っ!!あなたが買って来るんでしょっ!?」

「お金持ちなんだから、たまには私達に俺に任せろっ!!みたいに堂々としていなさいよっ!!」

とまぁ～…自身が言い出しっぺの彼女なのだが?当然の如く全てを光雄に擦り付けてしまうマリオン…

その当の本人もあまり自覚してない御様子で??
と、未だ世間知らずのお姫様のような性格…そんな彼女をどおして好きになってしまったのかっ!?

とまぁ～そんな事を思いつつ近所のスーパーに赴く彼なのである
……

◆◇◆◇◆◇◆……

そしてようやっと赴いた彼の学生寮の近所のとあるス―パ―内……

只今時刻は１９：３０分…しかし、そんな時間帯だというのにそのスーパー内はと言うと??夏休みの真っ最中だけあって、彼と同じく夕飯の食材を買いに来る学生達でごったがいしていたのである、

そんな中…そのスーパーの入り口付近に重ねてある買い物カゴを器用に取り…それを片手に物色開始の光雄の姿があった……

うわわっ!?こんな時間帯だっつーのに結構混んでいるんだなぁ～

ままっ!!とにかく臨機応変にチャッチャと済まして帰らないと後が怖ええし……

とりあえず…

と、そんな事を思いつつ紺の学生ズボンのポケットをまさぐり、ほんの数分前にマリオンから渡された紙を手前側で広げつつ、

そのメモ用紙に書かれた食材を次々に買い物カゴに入れて行く光雄…

ふむふむ…人参に後は…玉蜀黍（とうもろこし）と、んで最後に……肉……だよな…

と、更に精肉コーナーのお手頃そうな肉を物色中…

えっ??肉は肉でも豪華絢爛焼肉セット×１０ってぇ!?

ったくアイツ等こんなに食うんか?マジでこんな量買うんか??

これじゃぁ～まるで某アニメのイカ的な?謎の暴食生物ではないかっ!?

とまぁ～…そんな大量に買い込むにゃ～…カゴじゃ入りきれない始末……

そして更に大きめのカートを探し、それに次々と食材をぶち込む光雄…

そんな彼の後ろ姿を遥か遠くから辞任っ!!更にそんな彼に急接近する人物達が??

「あれっ??おぉ～いっ!!光雄っ!!おまえも買い物かっ!?」

と、そんな知り合いの声になにかしら反応して振り向けば??

「うおっ!!か…上条さんっ??……それとまさかっ!?」

と??そんな人物は彼が良く知ってる友達の１人なのだが更にもう１人の彼の連れを見つつ固まる光雄っ!!

「ねぇ～ねぇ～当麻ぁ～…私お腹空いてんだけど、いいから早くしてほしいかも…」

「ああ…悪りい悪りいっ……おまえっ！！まさかこんなに食うんかっ！？」

「へっ！？ちち違いますよっ！！まぁ～…なんだ……俺じゃ無く…ちと色々とねっ」

「そんな当麻さんこそ…あ、あの～、」

「んあっ？？こいつかっ？？こいつはまぁ～…ええ～とっ…俺の従兄弟って所かな？」

いや、俺は知っているからそんなバレバレの誤魔化しは逆に無理があるから……

しっかし……こいつ…いや、この人が禁書目録（インデックス）かぁ～…初めて見るが、思ったよりかなり幼い感じだな…あの子の頭の中にあの十万三千冊の魔導書を全て知ってるんだよな……その中にはもしかして俺の、あの『天使の雫』も書き記されてんのかっ？？

と、初めて見る彼女をマジマジと見つめる彼……

そんな彼と目が合ったみたいで、そんな何とも不思議な眼差しで

突然何を言いだすのかと言うと??

「むむっ、あなたっ!!もしかして以前から当麻と知り合いのっ!?」

「ああ……初めまして、俺は葛城光雄…宜しくなっお嬢さんっ!!」

と、かくして光雄はとあるスーパーで何故か以外な人物達と出会い、更に予想外の展開にっ??

◆◇◆◇◆……

更に数分後っ??

何だかんだで、大量の食材を購入し、むぐぐっ!!……と只今両手一杯の手荷物を持ちながら、ふらふらと…そんな覚束ない足取りで自分の学生寮に向かう光雄、しかしその彼の後ろから人影が着いて来ているの事に未だ気付かないのである……

うぐぐう〜っ……くっそぉぉ〜っ！！何て重さだよっ…うぅ〜…
…何かあの頃の感覚でホイホイ荷物を車で運ぶのとは訳が違うんだよな……両手に大量の荷物を抱え出てきたのはまだしも、今の俺…まだ１６才なの忘れてたし……

しかも流石にこんな買い物したの、俺…昔以来だな！？

あん時は、内田と菊池……その他にあの面子で同じく狭い俺の学生寮でパーティーしたっけな〜……はは、まぁ〜あの後菊池が酒癖悪くよく絡まれたっけ…あの頃に帰れたら……いやっ！！んなもんよか今は今っ！！過去は……過去だ…な……

しっかしっ！！くそ重めぇぇ〜っ！！腕がっ！！腕が痺れるっ！！…こんな時に俺様の相棒があればひとっ走りで……

そういやぁ〜……俺のインプ号……あのまま彼方側に置いて来ちゃってるんだよな〜……どーしてんかな…俺の…相棒……専門学生時代…か…

と…ふと、真夏の夜空に煌めく星々を仰ぎつつ…そんなパーティー前夜みたいな心踊るような気分がそうさせたのか、はたまた夏風に混じる独特の空気の臭いが原因なのか…
何故か彼は生前の様々な事を思い出し、なんとも懐かしいかつての彼を取り巻く世界や仲間達を夜空に思い描いているのである……

そして、そんな彼は…更にふふっと苦笑し…再び歩き出し……

ははっ…でも……なんでだろうな…今更思いだすなんて、まぁ～過去は過去っ！！そしてっ！！そんな思い出の積み重ねの先に、マリオン達と出会い…今の俺があるんだな……悪くないな…今はそんな気が……！？！？

「えっ？？」

「はは……ええ～と……」

「あ……あの～上条さんっ？？」

「あんっ！？なんだ光雄っ？？」

「どおして俺の学生寮の進行方向…しかも俺の目の前にアンタが居るんだ？？」

と？？そんな自分自身の妄想に浸っている間にいつの間にか光雄の眼前に再び映るツンツン頭の彼！？

更に？そんな彼は何故か先程から光雄の後を着けて来たみたいなのであるが？？

「あっあの～かみ？」

「本当ごめんっ！！…悪いと思っている…しかし今上条さんの財布と腹の中身は空っぽで……俺達も出来れば…たのむっ！！光雄っ！！このとぉ～りっ！！」

と？？一体なにがあったのか彼の財布やその他諸々は何故か持っておらず…かなり空腹みたいの二人……

そんな恥をしのいでか？やはり目の前にたんまりと食材をかかえる彼に付いて来るのは当たり前のようで？？

「というか…上条さんっ……皆は気付かなくても俺には、そんな必死にしなくても分かりますっ！！分かりますともその気持ちっ！！」

そして、ポケットから携帯を取出しつつ…マリオンに電話をかけ…

「あっ…あの～もしも？？」

『こらっ！！誰かと思ったら光雄っ！！一体何時まで待たせるのよっ！！みんなもう食べ初めちゃってるよっ！！』

「うげっ！！食べ初めてるっておまえ…まさか？？」

『だって仕方無いじゃないっ！！もう家の冷蔵庫の食材もヤバイん

だからねっ！！』

「えっ？？ああ…ごめんっ…それと、今無事に買い物終わり此方へ向ってんだけど…ちょっと…問題が…」

『で？？なにっ！？もしかして何かあったの？大丈夫っ？？』

「いや…その事なんだけど…」

そう……そんな彼は何故かマリオン達との焼肉パーティーに思わぬ予想外の人物達も一緒に行く事になってしまった事を伝え…それに反応した彼女はと言うと？

『そんな事…わざわざ掛ける必要ないでしょっ？？、いいからとにかく早くしなさいっ！！こっちは肉が来るまで私がキッチンで変わりの物作るの大変なんだからねっ…早く来て手伝って頂戴っ！！』

と…何故か彼女は部外者が増える事も全然構わないとサラリと言いきり、

『ああ…それと、此方側も更に白井さん達も来ていて後数名増えたからっそれと何かあなたに約束がどうとか…とか？』

「へっ！？やくそ？」

『とにかくっ!!非常〜に合いたがっていたわよっ!?それじゃっ!!先に初めているから早く来てよねっ!!』

と??その最後の一言が相当彼にとって悪夢の始まりの狼煙のようなのであった……

うっげぇっ!?まさかっ?白井さん達まで??いや…これ以上俺様の狭い部屋に人が増えるのは別に良い…しかしさっきマリオン…白井さん達って言ってたっけ!?っつー事は??”アイツ”も一緒かぁぁ〜っ!?

そう…光雄はそんなマリオンの一言で?更にみるみる先程まで普通だった彼の表情は屈強な悲惨な物に変わり果て…

更に顔色が段々と青ざめて行き…まるで片道燃料で敵地に赴く悲惨な兵士の如く…（笑）

と??その苦痛に歪む彼の表情を見つつ…当麻は何となく分かってしまっていた……その原因が彼の良く知る人物である事が……（汗）

◆◇◆◇◆……

そして、なんだかんだで先程の当麻達に荷物運びを手伝って貰いつつ学生寮に無事到着……

そして更に、先程買い出しに行って来た食材をマリオンと共に器用に人混みをよけつつ狭いテーブルの前に、まるでディナー時のウェイトレスのようにせっせと並べて行くのどある…

そして、それも終わり…彼等も又それぞれテーブルの前に座り鉄板のスイッチを入れ…一番腹を空かしているであろう禁書目録(インデックス)を筆頭に?次々に焼上がる肉に、我先にといわんばかりに襲いかかる奴等っ!!

そんな中光雄もようやく落ち着いたみたいで恥側に腰を下ろし早速いよいよ食に有り付けるっ!!

と?そんな彼を待っていたのは??

「あ〜あ、居た居たっ!!葛城、それじゃ行こうかっ!!」

「ええっ!?行こうかって…俺……今からやっとこさ焼肉を食べ??」

とまぁ～…そんなようやく食べ初めてようとする彼に何故か偶然なのか??、彼の隣側に座っていた美琴様っ!!

正に待っていましたっ!!と、言わんばかりに?まるで極上なおもちゃに食い付く子供のように??嬉しそうな表情で、勝負しに行こうぜっ!?

とまぁ～…先程前にマリオンが作ったスープやその他の料理で満足なのか…対する只今かなり空腹状態の光雄の事情なんかお構い無しの彼女っ!!

そんな彼女に対し…なんとも泣きそうな表情の光雄なのだが??

ハァァ――どおしてこう次から次えと……もう今日は朝っぱらから色々あってマジ限界なんだけど…このままじゃ俺…餓死寸前なんだけど……

「ねえ、まだ皆始まったばかりだし、その後でも十分なんじゃないっ??」

「うえっ??だからっいや…それとこれとは別でせめて一口だけでもっ!!」

「ほらほらっだからさぁ～運動の後の方が美味しいとか言うじゃないっ！？」

「う　ぅ……」

だぁぁぁぁっ！！あぁ～もぅっ！！…行けばいいんでしょ行けばっ！！くそぉ～っ！！御坂さんと言いマリオンと言いどうしてこうみんな自己中のコンコンチキなんかっ！！……

いや…でも待てよっ！？…もしここでその場凌ぎで断り、後々引き摺るっつー事になっても後々面倒だしな～……ハァァ――――……ったくもぅ…仕方ないっ…

と、とうとう何かしらスイッチが入ったのか、そんな中、皆の様子をチラ見しつつ、

まぁ…いくらこいつ等でも今からあのすんげぇ～量を食べ切るのは相当時間かかりそうだし…

ええいっ！！ままよっ！！こうなったら一丁彼女と一戦適当に交えそれから、

残りの食材をゆっくりと食らうっ！！

まぁ～その方が後々楽しみだしなっ！！やはり俺は昔からどんな時も、”好物は最後まで大事に取って置き食べるっ！！”だったしな～…

んじゃ、そうと決まりゃ～…ちと腹ペコで辛いがっ！！

と？突然立ち上がり、

「ああ…皆っ！！悪りっ、俺ちょっと席外すけど…後よろしくやっといてくれ、」

と？そんな一言を告げつつ自分の分と御坂さんの取って置いといてくれ…とマリオンに言伝し、

しかし…マリオンはそんなのお構い無しみたいに？？

「よぉ～しっ！！これっ！！私の獲物なんだからねっ！！」

「ああ～っ！！そんなのズルいんだよっ！！水色っ！！」

「けっ！？ねぇ～知ってる？おチビちゃんっ！！先手必勝っつー言葉をっ！！」

「むむむっ！！それじゃ仕方がないから当麻の分全部貰うからいいもん」

「ハァ～……不幸だ…」

と、只今そんなんお構い無しみたいに当然スルー…その焼肉争奪戦の真っ最中なのである…と言うか?何かメインヒロイン同士の戦いみたいな?別の意味で……(汗)

「……うぐ…マリオンちゃんまで(涙)」

「あははっ…あのさぁ~悪いんだけど…皆食べるのに夢中で聞いて無いみたいみたいね…」

「ハァ~…もうどーでも良くなって来たわ…俺(汗)」

そんな事を呟きつつ片手を頭にあてがい突っ伏する光雄…その光雄の背中を押すように美琴は??

「ああ~はいはい…そんな事良いから早くちゃっちゃと初めましょ?」

と?なんとも可哀想な彼を宥めるように

そして彼が苦労して買って来たそんな大切なお肉達に名残惜しむように、彼は美琴を連れ学生寮の外に赴くのであった…

◆◇◆◇◆……

そして更に数分後…そのまま美琴を連れ…学生寮前の片側一車線の道路沿いを抜け…二人は河川敷に、

う～ん……やっぱここら変で広い場所と言えばここ位しか無いよな…

まぁ～マリオンには、皆の前じゃ魔術は絶対禁止!!とか言われてるしっ!!…しかも今考えてみるといくらＬＥＶＥＬ５とは言え…相手はやはり女子中学生…

仕方がないっ…かなり辛いが逃げの一手で彼女の電池切れをさそ??

と、瞬間彼の眼前に眩ゆい閃光が走り!!瞬間、遥か後側の地面にあっという間に着弾っ!!

「ええっ??ってち……ちょ――――っと御坂さんっ!?早いっ…早いって!!」

「ふふっ!!ねぇ～…葛城っ!!知ってる??以前アンタの身体検査(システムスキャン)…まるで流星の如く新生第四が誕生したと、凄い騒ぎだったんだから…んで、そん時からかな??一度アンタと本気で相対したいと思ってたんだけどさぁ～……アンタの連れ…」

「えっ??マリオンかっ!?」

「そっ、そのマリオンさんに悪いと思って手は出さなかった訳よ…」

「で!?今は……まさかっ!?」

「そうっ…だからさぁ～そのマリオンさんもここには居ない…だからっ!!」

そんな事を言いつつ更に彼女の身体から眩ばゆい電気が迸り!!

「そんな訳でっ！！思いっきり行くから覚悟なさいっ！！」

「んげぇっ！？ちょっ！？こんな広範囲にっ！？」

更に高速で彼の周りに襲いかかる容赦無い電撃！！その鮮やかな蒼白い光りが河川敷の漆黒の闇を明るく照らしながら！！

そして、グワッ！！と、彼の周りの地面を刈り取り抉るかのように再び着弾っ！！

瞬間ブワッ！！と立ち込める砂煙！！正に次の瞬間やったっ！！と言わんばかりにニンマリする美琴……

しかし！！その彼女の余裕な表情がみるみる変わり真剣な眼差しに？？

「くっ！！さっきの一撃は流石にヤバかったぜっ！！」

「ええっ！？でも何で？？確かに手応え？？……くっ！！」

と、何で？？みたいな首を傾げる美琴に対し、すかさず彼も遂に演算を開始！！彼女と同じように自身の能力を使用し、一気に空中にズバッ！！と飛び上がる光雄っ！！

「はんっ！！そう…さっきの電撃を能力でギリギリ回避してたのねっ！！やるじゃないっ！！」

「さあっ！！御坂さんっ！！どおする？？俺は能力で空を飛べるっ！！アンタは飛べないっ！！そしてっ！！俺はっ！！」

そんな事を言いつつ自分の両手を広げ更に演算っ！！そして両手から光りの粒子を撒き散らしつつ、それ等が一つの塊に具現化！！

瞬間！！空中から一気光速で彼女の懐に飛び込みつつ

これで、御坂さんの首筋に俺の光剣を突き付ければ勝負は決まりだなっ！！

と、直上の彼を睨み付ける彼女の懐めがけ一瞬で詰め寄り？？

「えっ！？」

しかし！！その場に彼女の姿は居ないのである、

そんな空振りみたいにバランスを崩す彼の真横から差し迫る気配を感じとり？？

「うわわっ！！まさかっ！？」

「遅いっ！！チェイサーッ！！」

そんな反応する間もなく容赦無い美琴の渾身の回し蹴りが彼の顔面に差し迫り？

更に自分の身体を仰け反るような体制でひねり紙一重で彼の頭上を通過！！その彼女の蹴りが対象物を失うかのように空を切る！！

更に、かなり無理な体制から自身の周りに粒子を発生させ、仰け反るかのように、瞬間その場から強制的に無理矢理離脱っ！！

その先程まで居た彼の増下から黒い塊が一気に吹き出し、一つの黒い壁が彼女の能力で具現化！！

突如そんな地面からいきなり飛び出す磁力を浴びた砂鉄！！しかもその砂鉄の塊が離脱する彼をまるで生き物のように形を変えて追尾！！

「くううっ!?避けられな!?」

と、グワン……と地響きを立てつつ鉄橋の恥側のコンクリート事粉砕!!その爆発なのか陸橋がグラグラと揺れ…たちまち周りに立ち込める砂煙!!

更にかなりヒートアップしてるのか、

「留めよっ!!食らいなさいっ!!」

と、掛け声と共に瞬間高電圧の塊を右手のひらに形成!!その立ち込める砂煙の保々中心部に狙いを定め!!留めと言わんばかりに更に最大出力１０億Ｖ（ボルト）にも達する高電圧の電撃の槍を容赦無く撃ち込む美琴!!

瞬間周りを巻き込みながら地響きを立てつつ大音量が!!

そして、どうよっ!!これでっ!!と、かなり不適な笑みを浮かべ勝利を確信する彼女なのだが??

「うぉぉぉ――――――っ!!」

と、そんな爆風から鉄橋の骨組み越しに遥か上空にめがけ飛び出す光雄っ!!

「ふふ…そうこなくちゃねっ…」

そんな光雄に対しクスリ…と、笑い…彼女自身も身体から電気を発しながら、今度は自身の身体を浮かせつつ…瞬間!!

ズバンッ!!と、今彼が居る鉄橋の上側目指して、飛び立ち、地上戦から空中戦に展望!!

「なっ!!まさかっ!?飛んだっ!?」

「ふふ…空を飛べるのはアンタだけじゃないんだからっ!!」

鉄橋の骨組みを上手い具合に利用しつつ美琴は自身の身体から発する電気を磁力にし、彼目がけそのスピードを利用し差し迫り、光雄と美琴が空中で交差っ!!更にお互いに睨み付けながら離脱!!

「ハァッ…ハァッ…くっ…」

「御坂さんっ何か息が上がって来てないかっ?? もうそろそろ降参っ??」

「くっ誰がっ!!」

しかし…まさかこんな展開になるとは…空中から電撃を連続して撃ち込まれたら今度はマジこちらがやべぇな…空中に逃げたのは誤算だったか??うっ!!頭痛がっ!!

やはり…地上戦に持ち込んだ方が……

そんな事を言いつつ鉄橋の路面上に頭を押さえつつ着地…

そんな彼に気付きその彼の向こう側…更に相対するように美琴も路面に両足をつけ、

「ねえっ…葛城っこのままじゃあ拉致が開かないからさぁ～アンタのご自慢の『超高密度収縮粒子砲』とやらを撃ち込んで来なさい」

「私の…最大出力の超電磁砲（レールガン）と勝負よっ!!」

と、このまま戦い続けても拉致が開かないと判断!!お互いの最大の技同士でぶつかり合おうとする美琴……

しかし…そんな事を言いだす美琴に光雄は??

「おいっ!!正気かっ??んな物お互いにぶつけ合ったらどちらかが死ぬぞっ??」

と、

しかしそんな事を言いだす美琴はハッタリなのか、自身の体力も限界みたいなのである、しかし…自分は彼光雄と同じくＬＥＶＥＬ５、しかもかなり自分に対するプライドが高いのか…第三位と第四位…自身よりも格下のそんな彼光雄に対し、絶対にこの勝負は負けられ無いのである…

しかし…そんな強がりな彼女の精神とは裏腹に…先程からの連続する能力の使用で体力が限界なのか…突然両手を着いてしまう彼女…

そんな美琴に自身もふらつきながらも、詰め寄り肩を貸す光雄……

「うえっ!?ちょっ!!いい一体何をっ!?」

「ったくほらっ…御坂さんっ肩を貸すから」

「ひゃああっ!?こらっ！しかもアンタ…まだ勝負の途中でしょっ??」

「いや…ごめんっ！！実は言うとぶっちゃけ俺も先程から力の出しすぎでそんな必殺技も出せなかったんだ、だからあん時、もし御坂さんが超電磁砲（レールガン）をぶっぱなすって言った時は正直負けたな、と」

「しかも自分自身…能力使用限界だから演算すらも無理だから…だからさぁ～……俺…悔しいけど」

と、そんな事を言いつつ自分から降参した光雄…
そんな光雄に対し、かなり煮え切れて無いのか不機嫌な美琴なのだが…

事実上、美琴の勝ちと言う事で無事終了したのである、

◆◇◆◇◆◇……

そして、なんだかんだでその”勝負”は終了し、お互いにヘトヘトになりつつようやっと学生寮に到着した光雄、これでやっと食に有り付けるぞぉ――っ！！とまぁ、気合いを入れる彼をを待ち構えていたのは？

「うげげっ！？さっ？？酒くっさっ！！しかも！？そ…そんな……俺腹ペコ過ぎて、」

「あ～あっ…一体誰よ…酒何か持ち出したバカは？しかも黒子達も…みんな死んじゃってるし…」

そう…そんな彼等を待ち構えていたのは、無惨にも既に底を尽き、全滅状態の肉やら料理類、しかも…オリアナや五和達筆頭に酒皆に蔓延したのか、しっちゃかめっちゃかな惨状にごちゃ寝状態の皆……

そんな惨状の前に両手を突き

「終わった……（涙）」

と??その場で崩れ落ちる何ともまぁ～…結局無駄に食材をパシられ挙げ句の果てにゃ～…隣側で佇む美琴に勝負やらで付き合わされ??

しかしそんな可哀想な状態の彼の肩を叩きつつ??

「だったらさぁ～…こんな事に付き合ってくれたお礼に私が慢るから…だから…あの…」

と??そんな光雄に救いの手を差し伸べる美琴…

「えっ??そ…それっ!?マジですかいっ!?」

「そっ!!お・お・マジっ!!だからさぁ～…そんな所で突っ伏してないで元気出しなさいって…ほらっ!!」

と、そんな事を言いつつ光雄は彼女と二人でファミレスに赴くのであった…

美琴は…その彼の連れ…マリオンの寝顔を見つつ彼女に対する後ろめたい気持ちを押さえつつ…

次回へ続くっ!!

第六十六話　好物は最後まで大事にとっておくと、食べられちゃうよっ！！（後

ふふふ……てな訳で、なんだかんだでぐだぐだ感のような話しだが？

次回っ！！いよいよ原作回に突入っ！！

そんな訳でっ

次回もお楽しみに～…（笑）

第六十七話　あの～…公道での"ストリップ"は犯罪です

とまぁ～…いよいよ前回パートからガラリとかわり？

いよいよ原作回かっ！？

みたいな…

そんな訳でっ！！

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～…（笑）

第六十七話　あの～…公道での"ストリップ"は犯罪です

……――英国、ロンドン…聖（セント）ジョージ大聖堂、

その教会から更に奥側に位置する…ごく有りふれた一つの小さな池に反るようにある何処かしらの修道院の敷地内に設置してある庭園なのだが……

とても静かな、そんな静寂な雰囲気が漂うそんな庭園なのである…

そう、ロンドンとその周辺には修道院や様々な城の廃棄…主に、スコトニ城…ビーバー城…その周辺に存在する数々の庭園が存在するのである、

しかし…ドイツベルリンの世界遺産…かつての世界大戦で焼かれながらもその美しき姿を残す、ポツダム・サンスーシ宮殿の凄く広大な庭園や…

かの有名なイタリア、ローマ…バチカン大聖堂のベルベデーレ庭園と比較すれば、そんなに広くは無く丁度良い広さと言った方が良い…

英国式庭園、その庭園を囲むような周辺に小さな池があり、その手前側に設置してある白い小さな机と椅子……

その小さな机の上に設置してあるノートパソコン型の液晶画面、

その画面と相対するように座る1人の少女が居るのである……

そして、机の恥側に置いてある紅茶を一口含みながらそんな液晶画面に映る人物と密会中なのだが??

『そうか…学園都市に何者かが侵入し、何かを企んでいると?』

「その様子だと、”そなた”はご存知無いにけるねっ!!」

『ふん……何が言いたい、』

「既にそちの所にかのローマ正教下の、オスマンの魔術師が一名…その輩に誘われるかのようにもう二名が滞在…」

と、いかにも真意を突かれたような、少女のその一言で液晶画面に映る人物がピクリ…と一瞬眉を顰めるが、再び平然を取り戻す、その様子を更に収穫有りと睨み…更に少女は口を開き…

「更にそのオスマンの一名を狙うかのように同じくローマ正教から魔術師が数名侵入してそうろうなりけるよ…そちが、何を企んでいるか知りにけるが…下手したら最悪な状況になりけるっ!!そちは事の重大さをお分かりになりてっ!?」

と、彼女は荒らぶる口調で先程まで手にしていた紅茶のカップを乱暴置くと、

かなり不安げに心配してか、

更に真剣な眼差しで液晶画面に映り込む男か女か…老人か少年少女かも解らない人物に話しこみ、

『ふふふ…成る程……そんな事か、貴方のご忠告には大変感謝するが、しかし…あのローマ法皇が…そのような小さな…尚且つそんな詰まらん事で動く筈が無いと思うのだがねぇ～…』

「うふふ…そちは、その事の重大さが分からぬ物なら…お教えしよう…その一名……『アクエリアスの涙』、更にその者に尽くしたもうもう一名、『天使の雫』、それら奪おうと躍起になっている者達……それだけでも学園都市が戦場になろう火種が存在しているのに…そちは、何も”関係無い”と言い切れるのかっ!?アレイスター…我わは何を考えてるかも知れないローマ正教…いや、あのかつてのおぞましきオスマン帝国との”戦争”になりうる学園都市の心配を思い…」

しかしそんな彼女の忠告にもふふ…と、不敵な笑みを浮かべながら聞き流すような素振りを見せるアレイスター……

『まぁ～良い…でも貴女がそこまで心配して言う執拗では無いのですかな?、どちらにせよ、オスマンは帝国を支える者の疾走から内側から滅んだと聞くがねぇ～…それに、学園都市側はいたって何事も無くですよ…最大主教、それと……その妙な”日本語”を無理し

て使う執拗も”無しにけるそうろう”ですかな？…ふふ…』

「むぐっ！？――――――！！―」

『それでは、良い紅茶タイムを…』

「……（汗）」

（注：かなり気にしてる事言われ謎の固まった状態のローラ（笑）…）

そんな彼女に詰め寄る人物達がカチャリ…と、もう冷めている彼女の紅茶と、新しく作りたての紅茶とを取り替えつつ一礼をし、後ろに下がって行く…

そして、彼女は、出来たての紅茶を口元に持って行き…香りをたしなめつつ…庭園の景色を眺めながら……ふと思い出し…

そう言えば、その彼女…マリオンさんと葛城さんの護衛に付けたステイルは、ちゃんと合流出来たのかしら……それにしても、以前のあのオスマン絡みの事件…あの禁断の遺跡にかんしてもローマ法皇はご存知無し…とか言っていたわよね……でも、何かこのまま無事に何事も無ければ良いのですが……

と、そんな事を思いつつその透き通るような真夏特有の空を仰ぎつつ午後の紅茶タイムを嗜むローラ・スチュアートなのであった……

――――――――――……

――――――――……

――――――……

――……

――……

◇◆◇◆◇……

―――…

……―――一方所変わってここは日本国、　関東地方の西側に位置する街、

学園都市、第七学区内の国道から小さな片側一車線の通りに右折し、少し進んだ先に建っている　赤煉瓦（あかれんが）の巨大な建物、

その建物の丁度ロビー入口付近に佇む数名の人物が何かしら話し込んでいるのである、

「さっきは色々とありがとなっ！！何かさぁ～…あのまま部屋を放置しても良かったんだけどまさか白井さんまで手伝ってもらっちゃって」

「当然ですの…まぁ～もっともぉ～？お隣さんの好（よしみ）で色々と頼って下されば良いですのに、」

「っつーかさぁ～…アンタは私達そっちのけで食ってばっかだけどね…こっちは後から来てからあの量を片付けるの大変だったんだから…」

そんな不機嫌そうな素振りで腕を組みつつ、黒子になにかしら文句を付けようとする美琴…

そんな彼女達に気付き、慌ててそんな喧嘩じみた様子を停めようと、前に出る光雄なのだが!?

もっとも、周りから見れば喧嘩じみた口調の彼女達にしてみれば何時もと変わらないパフォーマンスなのであるが…??

「いっ!?……いいからっ!!二人ともストップストップっ!!…」

「「あんっ!?」」

「うげっ!?……だっ…だからっ!俺全然気にしてないしっ!!こんなのいつもマリオンとかで日常茶番時で慣れてるし…だから御坂さんも白井さんもこんな所で喧嘩は?……って?一体何を言ってんだ俺は!?」

「ハァ〜……ったく…」

「「そ・れ・だ・か・らっ!!アンタはマリオンさんやみんなに舐められっ放しなのっ!!」」

「あなたの連れ…マリオンさんが居ませんから、この最だからあなたに忠告しますけど…あなたっ!!この優しすぎる性格少しは治したほうがよろしくてよっ!!」

と?いきなり黒子達は、光雄の普段からの”よそよそしい”ような、なんとも他人行儀なたいどが
普段から気になっていたみたいのご様子で??
彼の普段からの連れ、マリオンが居ない事を余所に??
ズビシッ!!とまぁ〜そんな彼を心配してか、指摘をし始めるのである…

しかし、その黒子の一言になにかしら気迫負けなのか?たじろぎ出す光雄

「へっ??……で…でもこれはっ…俺の昔からの?」

更に、その様子に拍車を掛けるが如く?彼女の隣側で片手を腰に当てつつ佇む美琴まで?彼に相対するように振り向きつつずいっ!?っと??そのマヌケ面に詰め寄りつつ口を開き?

「ったく…アンタ男でしょっ!?後さぁ～マリオンさんにもそうなんだけどさぁ～…私達もマリオンもアンタの年下なんだからっ!!」

「そうそう、前から気にしていたのですけれどわたくしとか呼ぶ時も呼び捨てで結構っ!!ましてや”さん”付けなんかよそよそしいったりゃありませんのっ!!」

と、正に?二人の矛先は完璧にその場で冷や汗をかきつつ固まる光雄に向けられ、次々と命中弾を浴びせるように?散々と言われ、一言も言い返せない可愛そうな光雄っ…(汗)

「はっ…ははっ…(汗)それはごもっともなんすが…でも白井さん?」

「だからっ!!その態度がっ!!」

「は……はぁ……(汗)」

とまぁ～…なんだかんだであの光雄の部屋の焼肉パーティー後の惨状を後から起きて来た(強制的に電撃で?)黒子と常盤台コンビと三人でせっせと片付け、爆睡中のマリオン筆頭にその他のメンバー達を上手く寝かせつつ、

只今、常盤台学生寮外に設置してある、この近所のドデカイゴミ捨て場で大量のゴミや残飯等を捨て終わり現在に至るのであるっ！！

「うぅ……（汗）」

と、先程からこの年下二人に『だからアンタは”ヘタレ”』だの『”威張れ”』だの散々頭ごなしに説教され、何故かかなり凹む光雄なのだが、その彼に？何かしら思い出したみたいに両手をポンッ…と叩きつつ口を開く黒子…

「あ～…そうでしたわっ！？、ここのゴミ置場ですけれど、週に二回づつこの近所に住む学生達で二名づつ交代で掃除するみたですの、その内回覧回って来るみたいですわよ…」

「えっ？？そんな決まり事…」

「あ～…そうそう、だからさぁ～ご近所だから色々と情報交換で…だからっ！！…その……けっ…携帯課しなさいっ！！」

「「……えっ？？」」

「……お姉様っ！？…」

「……へっ？？別に携帯なんか関係無いと思うが…はいっ、これっ、手に入れるの大変だったんだから落とすなよ」

と、そんな事を言いつつ光雄は美琴に携帯を手渡し　彼女はそそくさと自分の携帯と照らし合わせつつ器用に番号交換をするのである…

「ああ…それと、マリオンの番号、一番下にあるから…」

「ええっ？……そっ…そうね…たしかに有ったわ、これでよしっと！！」

そして、なにかしら情報を得たのか？コクりっ…と頷きつつ、彼の携帯を黒子に渡しつつ黒子も小さく頷き？自身のスマートな端末と照らし合わせ番号交換……

そんな二人の様子を観察しつつ一体何を企んでいるのかっ！？みたいな？かなり不安げな表情の光雄なのだが？？

そんな情報交換やら会話が終わり？？

「んじゃ…行こっか…黒子っお願いっ」

「はいですのっ！！…それでは明日お会いしますわね…」

「んじゃ葛城っ…明日っおやすみっ！！」

「ああ…気を付けてな…それじゃおやすみっ！！」

そんな事を言いつつ、目の前から一瞬で二人の姿は消え…次にその学生寮の遥か上の階が明かりを灯すのだが？？……なにかしらその階から『不規則っ！！』だの？暫らくしてから『くろこぉぉ～っｗｗ』だの？？それを聞き流すように？…（汗）、ああ…多分”アイツ等”部屋の前で出くわしたのかっ！？……

とまぁ～…やべっ！！このまま巻き添えはごめんだっ！？と？その場から一目散に逃げ帰るように？

光雄は反対側に建つ自分のショボい学生寮に避難したのであるっ！？…と言うか見捨ててないか？こいつ…（汗）

そんな中、後ろを振り向きつつ御坂さん達か…と…ふふっ…と苦笑しながら…

◇◆◇◆◇◆◇……

そして、時間はさかのぼり次の日??

昨日の朝からの様々な出来事がたたってか自分の部屋のソファーで目を覚ました光雄…

既に時計は午前１１時を指し、朝寝坊所か、もうすぐ昼にさしかかろうとする時間…何とかまだ眠り足りないのか、自分の目を擦りつつ未だ思考が定まらない状態で自分が寝ていたであろう、ソファーから起きだし周りを見渡す光雄…

しかし彼の目に映った物とは?

えっ!?あれれっ!?
たしか…俺っ!?昨日……あれから御坂さんや黒子さん等と別れてから自分の部屋でそっとマリオン達に気付かれないようソファーで寝たまでは良いが?……

「えっ?…何で?リナさんかっ!?」

と?只今上半身をお越しつつ目の前に佇む人物をマジマジと見入る彼なのだが…

「ったく…一つだけ君に忠告する事がある…僕は訳あって君に会いに来たのだがね～…僕は”リナ”っつー名前でも無いのだが…もう僕の事を忘れたのかっ！？」

と？何故かその寝呆け眼な彼にいきなり人違いされたのが気になったのか？

不機嫌そうに彼の顔前に詰め寄りちゃんと把握できるようにハッキリと言うステイル……というか…そんな顔近づけるのも何かしら怪しいから…周りから見ればかなり怪しげな関係？？にみえちゃうから……別の意味で…（汗）

と？そんな事を言いつつ赤髪の長身の神父らしき人物はため息混じりで？？

「まったく…こんな任務が無ければ未だにロンドンで有意義に過ごせていたのだが……」

そんな中段々と自分自身思考が回復したみたいで？

「って?まさかっ!!ステイルさん?」

そう、既に肝心のマリオン達は昨日のあの出来事…
『とある時空の狭間での事件』を伝える為に、エクスマスが居る学舎の園にある教会に、既に出かけているみたいなのである

そう…昨日からかなり疲れ果てているであろう光雄をそっと寝かしつつ部屋の机に、置き手紙を設置し、既に彼女達の姿は何処にも居ないのであるが…

洗顔後、机の前から手紙を手に取りつつ広げ、マリオンの手書きなのか、
彼が理解する為に?普段から使うイタリア話では無く、慣れない日本語で綴られた?なんともまぁ~…まるで小学生が書くような?普通じゃ読み辛い内容なのだが?光雄は普段から読み慣れているようで?スラスラと見入るように読み上げる光雄…

その内容とは?今朝早くこの部屋に只今隣側に佇む彼ステイルが訳あって英国からわざわざ光雄に会いに来た事、

それともう一つ…昨日の焼肉パーティで只今空っぽの状態の冷蔵

庫にマリオン達が帰宅するまでに夕飯用の食材を調達し、ちゃんと留守番をする事等が書かれているのである…

そんな内容の書かれた手紙を器用に折り畳みつつ、

何か置いてきぼりを食ったみたいに少々ため息をしつつ、彼も又食材を調達する為に学生寮を後にするのである……

◇◆◇◆◇◆……

更に数分後…

只今そんな彼は隣側を歩く長身の神父、ステイルと共に、渋々と学生寮から又々近くのとあるスーパーにパシられ向かう最中、

思わぬ人物達と出くわすのであるが??

「あ～…あの～…所で大変聞き辛いのだが、ステイルさん…」

「んっ!?君とわざわざ馴れ合いはごめん被りたいのだが…なんだ??」

「……うぅっ……っつ――か何でわざわざ英国から遥々学園都市まで来たんすかっ!?しかも寄りにもよって、何故俺の学生寮にっ!?」

その彼の質問に、暫らく外方を向きつつ深々と喫煙しながら黙り込み?

一旦その煙草の煙を思いっきり吐き捨てるように口を開く彼…

「……そうだな、まさか君の身体から”魔力”を感じるようになったのは意外だったよ…まぁ～そのだ漏れ状態の魔力をサーチして…そのお陰で君が居る学生寮まで来れたのは良かったがな…」

更に彼は、光雄に対し忠告をするように?

「あ～…そうそう、今までと違い…君の身体から大量の魔力を感じるのだが…もしそれが原因で君にとって良からぬ連中が嗅ぎ付けたらそれこそ身を危険に曝す事になりかねんしな…まぁ～もっとも僕達みたいに自身からの魔力の無駄な放出をコントロール出来ればの

話しだが…それは後々君の連れの彼女から教わるとして……」

「で??ステイルさん…あなたの…目的はなんなんです?」

「ふふ…そうだな…忘れていたよ、今君が持つ膨大な魔力の源(みなもと)…『天使の雫…』あれは大変危険な物なのだが…”あれ”を付け狙う魔術師達は五万と居る、だから事態が大きくなる前に”あれ”を早々この僕に手渡せば総て、事足りるのだがねぇ〜…」

「えっ??――――――!!」

そんな…この俺の事が原因でステイルさんが??わざわざ”それ”を伝える為だけに?……いや…まてよっ!?彼の所属する魔術組織…たしか、英国にあるイギリス清教…そしてそのトップに立つ、『必要悪の教会(ネセサリウス)』のあのローラ・スチュアートかっ!?

たかが俺一人魔力を得た事が…そんなに話しが大きくなってんのかっ!?やはり俺の身体に宿る精霊…『天使の雫』が原因か…

しかし…ここで手放す訳には……せっかく…こいつのお陰で俺が今この世界でやるべき事を見いだせそうなのに……そんな……

そんな唐突な様々な事態で混乱する光雄……しかし自身が胸を張って彼に言い切る答えを見つけだしたみたいで…彼に対し…キッ！！と睨み付けるような素振りで口を開き…

「ステイルさん…あなたの忠告は大変ありがたい、でもこれだけは、俺の…この身体に宿る『天使の雫』だけはどうしてもゆずれないっ！！」

「そうか…まぁ～それも君が考え抜いた一つの答えには変わらないがね…仕方ない……」

その一言と同時に一気に彼の周りから非常に高濃度の魔力を感じる光雄……これはヤバイと…

瞬間、ステイルの表情が突然冷酷な物に変貌し、彼の周りの空気が変わったような？なにかしら彼に対し、敵意を露にするのだが？

そんな彼に何かしら危機感を感じつつ身構える光雄っ！！

正に？突然やって来たかのような一触即発な状況の中、そんな二人の間に割って入るような、危機感の欠片も無い声…

「「っつ――――――!?」」

「うぉ～いっ…なんだステイルに…光雄かっ!?」

そう、そんな二人の前に向こう側から大きく手を振りながら何かしらのジェスチャーを送る当麻が居たのである、

そのマヌケ面丸出しのツンツン頭に、なにやらかなり膨大なため息混じりの呆れ果てた表情になるステイル…

「ハァ～……誰かと思えば…忘れもしないその顔…上条当麻かっ!!」

そんな頭ごなしに見下したような素振りの彼に対し…当麻は?意外な一言をそんな彼…ステイルに質問するのだが?

「おおい…丁度良い所で会ったな?…」

「ふふ…たしかにな…君との悪い縁は未だ現在のようだな…」

「所でステイルに光雄っ…おまえ等今暇かっ?」

「まぁ～…そうだな…暇と言えば暇かもな…」

と？当麻の質問に答えつつ片手で器用に喫煙しつつ答えるステイル

「だったらさぁ～この人の駐車場探すの手伝ってくれないかなぁ～…」

「「なっ！？」」

と？なにかしらそんな彼もその隣に佇む女性の事で悩んでいるご様子で？いきなりそんな中知り合いが目の前に来るのをまってましたと言わんばかりに、ニッコリと爽やかに？言い切るのだが？

そのとある女性との出会いがきっかけでとんでもない事件に巻き込まれつつある事を未だ知らない光雄とステイルなのであるっ！！

又々無理やりだが？

次回へ続くっ！？

第六十七話　あの～…公道での"ストリップ"は犯罪です

いやいやｗｗ

今回もかなりぐだぐだみたいな…（汗）

次回っ！！いよいよそんな彼女のストリップショーの始まり始まり

（えっ！？

いやいや…違うからっ（汗）

そんな訳でっ

次回もお楽しみに～…（汗）

第六十八話　あの～っ…公道でのストリップは犯罪ですよっ（笑）……――その2

てな訳でこんな時間帯だが行きますっ！！

前回の続きだが…いよいよ主人公達はあの噂のあのお方と出くわしっ！！

そんな訳でっ

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～…（汗）

第六十八話　あの～っ…公道でのストリップは犯罪ですよっ（笑）……――その2

光雄達が、第七学区付近の駅前広場付近で、てんやわんややっとる頃、

ここは、同じく第七学区内の恥側に位置する学舎の薗の奥側にあるエクスマスが経営しているとある教会…

その小さな教会内入り口付近の広場…

そこの恥側のレトロチックな扉が独特の軋む音を響かせながら開き、午後の陽射しが天井からステンドグラス越しに射し込む中を、コツコツ…と紫色のブーツの音を響かせつつ手前側から一気に歩きだす人物が…　トルコ系民族の中じゃ珍しい薄い水色ショートの髪がステンドグラス越しの陽射しを受け綺麗な菫色に染まり、それが歩く度に揺れる…

そんな幻想的になる小さな少女が進む先には、教会内広場の反対側に設置してある大きな十字架があり、其処から裏側の壁際にある小さな扉がある、その扉の手前で一旦足を止め、…

「ふぅ…」

と…一呼吸おいてからゆっくりと、扉の下側に手を持って行き、取っ手を掴みゆっくりと押して行く、そしてそのまま一歩前に進みつつ手を後ろにやりつつ器用に扉を閉めて、

「あの～…失礼しますっ…」

「あっ！！マリオンちゃん？それと……」

「ええ…今日はオリアナさんは何か仕事があるとかで私一人なんだっ…あとエクスマスさんっ！！あの～…その…この間あなたから頂いたあのまあるい石……」

「そう…その様子だとヤッパダメみたいだったのね…ごめんなさいねっ…その代わり…」

と…そんな事を言いつつなにか代わりの物は？？みたいに席を立ち探しに行こうとする彼女なのだが？

「いいえっ！！まって！！あの石役に立ったから、それでその事を伝えに来たんだけど……」

と、席を立とうとするエクスマスに対して大丈夫だからと手の平を前に突き出しつつ慌てるように言うマリオン、

「うんっ！！後…これっ！！ありがとうねっ…」

と、自身の常に持ち歩く大きな青いバックを下に置き、ゴソリ…と…そこから大きな水晶を持ち出し、その部屋の中央にある小さな机の上に置きつつ…首を傾げるかのようにして可愛らしく微笑み…

エクスマスは、そんな生き生きとした彼女の様子を眺めつつ、なにかしら安心したのか、

「あらあら…マリオンちゃんその様子じゃなにかしら良い事があったみたいね…もしかして、噂のあの坊や……とか??いいから言ってみなさい…」

「えっ??わわわっ!!…私そんな表情してたっ!??…」

と、行きなりそんな表情のマリオンの思考を読み取るように口を開くエクスマス…

そんなエクスマスの顔を眺めつついきなり光雄の事を言われ何かしら頬を赤くし、下を向いてしまう彼女……

「うんっ……実は、理解し難いと思うんだけど、エクスマスさんから頂いた資料を元に…私達…本当に異世界を旅してきたの…」

と、一言それを告げると同時に再びエクスマスが座る位置にゆっ

くりと歩み寄りつつ、
さっき迄付けていた紫の手袋を起用に引っ張り脱ぎながら手前側の机の上に折り畳み、
更に首元に手をやりカチャリ…と、自身が身に付けていた紫のマントを取り外しつつ目の前に設置してあるフックに引っ掛け…白を主張とした銀色の刺繍の入ったTシャツと、紫の短いスカートだけのラフな姿になり、
近くにある椅子を引き腰掛け…

落ち着いたみたいの彼女に、更に小さな机を挟み相対するようにエクスマスは質問し、

「そうそう…後でコーヒーを持って来るね、それで話しの続き、聞かせてくれる?……」

「うんっ…それでその異世界に囚われている人がいて、光雄と一緒に助けようと、一緒に考え、そして三人で、そのエクスマスさんから頂いた紙に印された場所に行ったの、」

「そんな人が居たんだ……で?それで??」

「うんっ…それで、やっとの事で、その彼がこの地に降り立った船があって、んで、エクスマスさんから頂いたあのまあるい石が役に立ち私達はそこからその船を使い脱出を試み、」

「そんな中…とても恐ろしい怪物が私達を襲い……実はその時光雄

が…又…又々格好よく私の事を…その……あのっ…」

と?なにやら昨日の出来事を思い出す度に?更にとぎまぎと?謎の挙動不審に陥る妙なマリオン……

そして、あの出来事を総て言い切った彼女は?なにやら更に燃え尽きたみたいに、机に突っ伏してしまい?エクスマスは何かしら今回の事で?収穫があったみたいにふふふ……と?マリオンの様子を眺めつつ優しい笑顔で…色んな意味で彼女の閉ざされた心を救ってくれた彼…光雄の事を思いだしていたのである

「こんなにあの心を閉ざしていたあの子をここまで感情豊かに導いてくれたあの坊や、彼が居なかったらあの子はこの先も…ずっと永遠に自分の血の宿命に苦しめられていたかもね…あの坊や…葛城光雄君には、本当…感謝だけじゃ物足りない程に何とお礼を言って良いのやら…」

と、そんな事を呟きつつ未だに突っ伏したままのマリオンを眺めていたのである……

◆◇◆◇◆◇◆……

一方そんな頃、その噂の光雄はというとっ!?

この身長で何故か１４才?という突っ込みは置いといてっ!!

いかにも年上の風格を漂わせる、エセ神父っ!!ステイル君?を引き連れ、
マリオンからの置き手紙に書いてあった、夕飯に使用する為の食材を買いに、近くのスーパーに赴くのだが??

「まったく、僕達は確かに暇だとは言ったが……何故君の”お人好し”に僕達も巻き込まれなくちゃいけないのかね～…葛城光雄君もそう思わないか?」

「へっ??ま……まぁ～…そりゃ～たしかに」

いや…ステイルさん俺に話し振らなくても…

と言うか、知ってるからっ！！しかもコイツ…あの恐怖っ！！脱ぎ女だからっ！！

つっーかこのシチュエーション、あの後たしか御坂さんが現れ…
…あらわ……って！？
何でっ！！全然現居ねーしっ！！しかもあれかっ！？あれなんかっ？？
もしやこのムサイ神父様とこの御坂さんイベントをやれってかっ！？
うっはぁ――――……何でよりにもよってっ！？
うしっ！！こーなったらコイツ等テキト～にあしらって…

「なあ…上条さん、あの俺…？」

「えっ？？…そうかそうかっ！！流石光雄っ！！引き受けてくれるかっ！！えぇ～と、俺今から用事があって…」

「いや…そうじゃなくてですねっ！？だからっ！！俺……」

「って！？」

「いや～…君達本当にすまないね～…実は訳あってこの変に車を停めたんだが、…何処に停めたか解らなくなってね」

「「へっ？？」」

「途方に暮れていた所をそこの坊やに助けられたんだが…」

「ま！！そんな所だから、おまえ等どうせ暇なんだからいいだろっ！？」

「……やれやれ…何を根拠に…上条当麻っ、君には大変失望したよ…まさか自分の頼まれ事を人に押し付けてまで…」

と、さっき迄吸っていたタバコを右手に持ちつつヒラヒラさせながら…上から目線ではき捨てるようにあしらう彼…

それに対して何かしら言いたげな当麻と？

先程までの光雄に対しての矛先は完全に当麻の方へ向けられ

何で常日頃からこの二人は相性が悪いのかっ！？と？　そんな事を思いつつ二人の間に割って入る光雄なのだが？

「っつーか、二人ともやめやめっ！！しかもステイルさんまで、こんな場所で何ルーンカード何か持ち出してっ！！」

しかし、その行為が仇となってか？今度は、迂闊に二人の間に割って入った光雄に彼の矛先の梶は向くのである、

「ほぅ…葛城光雄っ、君はもっと利口かと思ったら奴に味方するか…良かろう…あいつ共々消し灰になりたいかっ!?」

「うえっ!?ちょっ??」

「って!?ステイルさんっ??何を唱え初!?……うげっ!?」

と?慌てふためく彼を無視しつつ、行きなり光雄達に唱え初めちゃった彼…(汗)

「…――灰は灰に……塵は塵に…吸血殺しの?」

「いや…だからっ!?そんな魔術よかステイルさんっ!!あっち…ほらほらんな事をやってるから…」

と?そんな三人仲良く馴れ合っている間……

ヤハリ午後のギラギラ照りつける炎天下に長時間佇むのは辛い用で?

予想通りに遂にブラウスを脱ぎ始めちゃった彼女…(汗)

「「「なっ!?……」」」

「いや～…流石に炎天下の中暫らく歩いたからねぇ～」

と?その彼女にいち早く顔を赤らめながら近づき彼女のブラウスを両手に掴みつつ

「いっ!?いいから…はっ…早く服を着て下さいっ!!」

そんな固まるムサイ野郎等に囲まれつつ堂々と脱ぎ始めブラジャー姿の彼女……しかもそのような情景に当麻は勇敢にも自分から彼女のブラウスを手に持ち早く着てくれと言いわんばかりに押し付けるのだが??彼等の周りを行き来する通行人達から見れば当然!?

「ああっ!!あれっ!!」

「なになに??どうしたのっ!?って!?ひぃぃっ!!」

「キャアッ!!変な”神父”や”変質者”にあの人襲われてるわっ!!」

「おいっ!!早くっ!!警備員(アンチスキル)に通報しろっ!!」

と?正に突然、混乱(カオス)状態を創り出してしまった光雄達!?

そんな中当麻は?彼女のブラウスをその場で固まる光雄に押し付

けつつ？

「誤解だぁぁぁ――…ｗｗ」

とまぁ～謎の雄叫びを叫びながら疾走し？その当麻の行為に遂にキレたのか？

「おいっ！！あくまでもその場を放置して逃げるかっ！！」

と！？そんな彼を追い掛け始めるステイルっ！！

そんな逃亡劇に乗じて光雄もその場から離脱を試みるのだが？？

突然真後ろから？ガシリ……と！？

「ひぃっ！？」

と！？いきなり肩をしっかりと捕まれる光雄っ！！

そんな中恐る恐る冷や汗をかきつつ真後ろを振り向く光雄が見た物はっ！？

「ねぇ～葛城っ？？普段から”変態”さんなアンタなら分かるけどさぁ～…まさかあのバカや彼方のステイルさんまで……っとにもぅ～…一体全体みんなして何をやってるのっ！？」

「うっげぇ――――っ!!…御坂…さんかっ!?…何故今頃っ!?終わった……（涙）」

「っつーかみんなっ!!何故俺を見捨てて行くっ!?みんな俺を置いて行くな――――――っ!!」

「はいはい…分かったから…ったく、こんな王道でっ!!」

「ぐはっ!!」

「あの、すみません…お怪我は有りませんでしたか?」

と!?なにかしら勘違いしてるのか、光雄達が脱がしたと間違え思いっきりドツき、その彼女に先程のブラウスを手渡す美琴、

更に?結局どうしても逃げる事が出来ず?渋々とふてくされつつも彼女等と共に駐車場を探す羽目になってしまった光雄なのである……（汗）

そんな中…ふと、今朝自分の部屋の机に置いてあったマリオンに頼まれた、買い出しの紙をそっと広げ、眺めつつ……果たして夕方までに終わるかどうか…と？更に冷や汗をかきつつ？？あの名台詞を呟く彼……

「……――不幸だ……」

と？

頭から角を出して怒り狂う恐ろしいマリオンの顔が浮かんでいたのであるっ！！

◆◇◆◇◆◇……

更に？逃亡しちゃった当麻やステイル…そして逃げ遅れた可哀想な光雄と？そんな状況になってる事態も全然知らないマリオンはというとっ！？…

先程のエクスマスの教会での用事も無事に済み、学舎の園から出入口付近のロビーにそそくさと学生寮に帰宅途中なのである、

そんな最中…彼女はというと？

何か今日朝から身体中かなりダルいんだけどな…
やっぱ寝不足なのかな？
まぁ、さっきエクスマスさんも少しは身体を休める事も大事と言われたし、
家に付いてからどうせだったら留守番中の光雄を誘って、ゆっくりと温泉でも良いかな？？たしか…
以前上条さんの連れ、禁書目録（インデックス）ちゃんが牛乳がとても美味しい銭湯があるんだよっ！！
とか言ってたし……

いっちょ思いきって私の方から誘ってみるのも良いかしらねっ！！
でも光雄の奴、一様置き手紙置いといたし、ひょっとしたら既に料理なんか並べちゃって私の帰るのをまだかまだかと待っていたりしてっ！？

あ！！でも”スティルさん”がっ！！　何か光雄に用事があるとか無いとか……うぅ～…何でよりにもよって今日なのよっ！！ああ～もうタイミング無いったらありゃしないわっ！！

それにしても何でわざわざ遥々英国から学園都市（こちら）へ来たんだろ…
……う……もぅ～っ！！せっかく明日までオリアナが居ないのにっ！！いつもいつもダメダメだわ…私……

ああっ！！何か知らないけどむしゃくしゃ……

はっ！？

でも…もしステイルさんが既に用事が済んで居なかったら、私…光雄と……あの時の昨日の続きを……

うふふっ！？

って！？一体全体なにを想像してんのよっ！！まったく汚らわしいっ！！

とまぁ～教会から光雄と合流する為に学生寮に向かう途中…なにやら考え込み中の彼女、

周りの事も全然おかまいなしみたいな？…しかもなにやらかなり、ヒロイン的じゃ～ない行為、まるで光雄のエロ妄想病が既に彼女にも憑依しちゃってんのか？みたいな……

そんな何を期待しているのか？しかし…その彼女の思考とは裏腹に？そんな二人を引き裂くが如く

光雄は又もや美琴に捕まり共に行動しているのだが？？……

そう…光雄とマリオン、そんな二人はお互い引かれ合えば合う程二人の運命は困難な状況になるのか！？

又々無理やりだが？次回へ続くっ！！

第六十八話　あの～っ…公道でのストリップは犯罪ですよっ（笑）……――その2

いやいや……なかなか物語が進まないのだが…（汗）
いい加減にちゃっちゃと勧めて最終決戦に早めに行けたらですよ……

次回っ！！
更に交差するそれぞれの想いっ！？…というか、ヤッパ恋愛事は作者的にゃ～無理があるかも…（汗）

そんな訳でっ
次回もお楽しみに～っ！！

第六十九話　あの～公道でのストリップ行為は犯罪ですよっ！？……――その３

と？又々こんな時間帯だが？

彼と出かける為に足早に学生寮に向かうマリオン…そして、二人の運命は皮肉にも……

てな訳でっ！？

今回はちと短いが…

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～…

第六十九話　あの～公道でのストリップ行為は犯罪ですよっ！？……――その３―

……――午後の日差しが照りしきる、ここ学園都市、第七学区の国道沿いの街路樹が続く歩道…

そう、夏休み中の時期を利用し、その街路樹沿いに続くカフェや喫茶店、その店外の木陰に設置してある白い机や椅子に座りランチを食し、仲の良い友達等や、はたまた恋人達が一夏の思い出の１ページを刻むように…過ごす……

そんな中を突っ切るように１人の幼い少女が歩く…

その足取りは軽く、歩く度に少女の綺麗な水色の髪が揺れ…顔立ちは幼いながらも何処か遠い異国の貴賓を漂わせ…その目線は木陰で過ごす恋人達に……

……――自身の好意の人と重ね合いながら――…

そう、

……――この晴れやかな雲１つ無い青空に溶け込むように、

彼女の心も、あらゆる意味で自分を…そんな自分の奥深くに潜む薄暗い闇さえも眩しく照らしてくれた…　自身のそんな心に…まるで天使のように優しく手を差し延べ救ってくれた、１人の少年の事

を想いながら――…

自然に自分自身のなにかが、そんなとても熱い物が込み上げる、
そんな感覚を押し殺すように立ち止まり、木陰の下にかがみ込み、
赤煉瓦（レンガ）がちりばめられた路面に自身の常に持ち歩く青い大きなバックを置き、

そのバックに取付けてあるボタンに手をやり、瞬間何かしらの術が溶けたのか、まるで封印が解かれた宝箱のようにバックの口が開き…

その中に手を入れつつ…

「ん～……あれっ??あったあった！これっ！！」

と、1人呟きつつ自身のバックから取り出した1つの水色の携帯、
水色と言っても少しパールがかかったような独自の輝きを醸し出す携帯、

それを手に取りつつ、街路樹下の椅子に腰を下ろしつつ器用に足を組み、片手でパチンッ！と、開き…素早く慣れた手つきでボタンを押して行く彼女、

その彼女が持つ携帯もその彼、光雄と、先週巨大ショッピングモール、セブンスミスト内で、カップルだけが持てる企画の中を、と

ある事件に巻き込まれつつもやっと手に入れた、彼女にとってはとても思い出深い宝物なのである……

そして、ボタンをクリックしつつ液晶画面に映る、彼女の大切な人の名前…

そして、最後に一押しすればその人物と繋がる、そんな簡単な行為事態も、何をためらうのか、指が止まり、押せないでいるのである、

そんな中彼女は液晶画面に映る名前を未だ眺め固まりながら、

「はぁ～……ま…まぁ～今すぐ掛けなくても、あと少しで学生寮だし、そん時に誘えば…だねっ！！」

そんな事を自分に言い聞かせるように携帯を閉じ再び青いバックにしまい込み…席を立ち、再び彼が待つ学生寮に向けて歩きだすマリオン…

…ほぉ～んと…私って一体なにしてんだろ、別に常日頃からアイツと一緒に住んでいる訳だし、誘おうとすれば何時でも誘える訳だし……何を今更一緒に出かけるなんてっ！！

とにかく今日は何だろう、この胸が張り裂けるような、こんなドキドキした感覚は……何か……私……

変なのかな??

ううんっ！！とにかく早くアイツ、光雄に会って、――――そして――――そし…て…一緒に温泉――――…

さあっ！！行くよわたしっ！！絶対待っていなさいよっ！！光雄……

と、なにかしら自身に気合いを入れ、言い聞かせる彼女

そして、更に足取りは軽く、そんな事を胸に秘めつつ彼と合流する為に、急いで学生寮に向かうのであった、

◇◆◇◆◇◆……

……――そんな彼女と彼に貸せられた運命なのか皮肉にもそんな二人はすれ違う――…

一方ここは、先程と同じく第七学区内…駅前から続く国道沿いの街路樹が並ぶ歩道、先程までマリオンが居た反対側を挟み

同じく午後の日差しが照りつける中三人の人物が、学生二名と女性一名がその街路樹下に設置してある小さな机に相対するように腰掛け、涼んでいるのである…

そんな中の一人、葛城光雄は自身の紺色のズボンのポケットから彼女と同じ型式の薄いピンクのパールがかった色違いの携帯を取出し器用に端末を操作し、

着信履歴やらメール受信履歴を色々と眺めつつため息混じりで呟く……

「結局何も音沙汰無し…か」と……

くそぅ～…上条さん、メール送ったのに何で一言も連絡して来ないんか？未だそれともまだステイルさんと楽しい楽しい追い駆けっこ中なんか？

あぁ～もうっ！！こっちはタイムリミットが差し迫る中行動してるっつーのにっ！！

それにしてもステイルさん……俺に用事があるとか無いとか言って起きながらあの態度と言い……しかも肝心の俺様をそっちのけで奴とどっか行っちゃうしな～……

あ～あ……今朝、後もう少し早起きしてれば多分俺も今頃マリオンと一緒に……うぅぅ～っ！！何か無性に腹が立って来たっ

!!これと言うものの全部、上条(アイツ)のせいだよこんちくしょ～っ!!
結局アイツの尻拭い全部俺が引き受けなきゃ行けない事になるではないかっ!!

いや…でもこれで”アイツ”に一つ貸しが出来たっつー事だよなっ!!ふっふっふ……ハァ――ッハッハッｗｗ
まぁ良い…上条当麻っ!!この代償は高く付くぞ…貴様の行い…万死に値するっ!!この俺様のこの能力で貴様の??……うげぁっ!?

「熱ちいっ!!あちちちっ!?」

と!?さっきまで脳内トリップ中で固まる光雄の頬にかなり熱々のジュースを押し付けつつ??半強制的に現実(こちら)に引き戻す美琴……

「ったく…アンタはゼ○かっ!?…なぁ～にを片目に手を翳してギ○ス発動みたいな?某場違いな番組のセリフを言ってんじゃコラッ!!」

「ふぇっ!?…」

「ほぉ～らっ…んな下らん事よかあの人がわざわざ買って来てくれたんだからっ!!いいから有り難くお飲みっ……」

そんな事を言いつつ彼の座る座席の目の前にコトリ…と、ジュースを置きつついきなり？いいから飲めと？？

そのジュースを眺めつつ光雄は何かしら頭を傾げ？

「あ…あのぅ～…このうだるような熱さの中ジュースは大変恐縮に有難いのですが…何故ホット？しかもスープカレーだし…」

そんな事を言いつつ目の前にあるありがた～いジュースに？なにやらご不満なご様子の光雄に対し、突然席を立つ彼女なのだが？

「ああすまないね…別のを買って…」

「ああっ！！ほらっ！！んな事言うから…ほら葛城っ！！アンタさぁ～せっかくわざわざあの人が慢ってくれた好意を…だからアンタは？」

「へっ！？…ああ分かったから飲めばいいんでしょ？飲めばっ！！…というかアンタの分…これ」

「えっ！？”やしの実サイダー”だけど……」

うっはぁ――――……

くそっ！！御坂さんっ…この俺様に飲めとか言いながら自分はちゃっかり好物ゲットしてるしっ！！…なんなんだよこの差別っ！！

う～くそ～っ！！絶対これわざとでしょ？…わざとだよねっ！？
えっ！？言ってみろよこの目の下クマ吾郎と、ワガママツンデレ少女っ！！いや…と言うかビリデレかっ！！

言えない…絶対文句が言いたくてもコイツ等だけは絶対言えねぇ～っ！！何故なら言ったとたんこの俺様が一瞬で”コイツ等”に？この世から抹殺しかねんっ！！

正に今ある俺様に貸せられた状況は？？
や…やべぇ～よ…これ…正に絶対絶命だよ……逃げ道なし……いや？

「……ちら？」

「あんっ！？なんか言いたそうねぇ～…」

「いや…な…なんでも無いっす…（涙）」

もう覚悟をくくり、この俺様がこの溶解炉を飲み干せば簡単な事じゃ～ないですかいとっつぁんよぉ～……

あはっ！？

そうと決まりゃ～……一気に……んぐっ！？

うっげぇぇぇ――――――――――っ!?

「ゲホッゴホッウボラッ!?」

「うわわっ!?ちょっ??大丈夫??」

と?普段から慣れない物は慣れないみたいで?そんなチャレンジャー精神旺盛なのか?バカみたいに妙なジュースを思いっきり飲み干す勢いで?彼はなんとも無謀にも一気飲みを決行!!しかし、結果は相当キツかったみたいで?涙目で思いっきり蒸せつつ飲んだジュースを吹き出す始末っ!!

その突然の彼の様子?驚き仰け反りながらも心配してか声をかける美琴なのだが?

ある一点を見つめつつ冷や汗をかく二人っ!!

そんな二人が見つめる先には?なんとも先程光雄がジュースを吹き出した時に運が悪かったのか?

相対するように座る彼女の黒いスカートにもろに着弾っ!!

彼女の服にも?黄色い染みがっ!?

「あっ…あわわわわ…(汗)」

「ちょっ??葛城っ!!一体なんて事するのよっ!!す…すすすみませんっ!!今すぐ…って!?」

「ああ…気にする事は無いさ…汚れた服を全部脱げば…」

「ひぇっ??」

「うわわわわっ??こっこここんな所で?」

「見るなっ!!」

そう、光雄はすっかり忘れていた…目の前に座るこの女性…木山春生は科学者である他に噂の”脱ぎ女”である事を??

そう、次の瞬間一体何が彼に起こったのか?隣側に佇む美琴の電撃によって?彼の意識が”それ”を見る事無く意識が遠退いて行った…というか一番の被害者は彼かもっ（汗）

◆◇◆◇◆◇……

一方光雄等が街路樹下で又々いつもの”アホ?”な事態に陥っている頃所変わって彼の学生寮では??

「……――――光雄っ……」

そんな一言を呟きつつ1人の少女が、誰も居ない無人になった光雄の部屋で佇んでいた、そんな彼女の後ろ姿はなにかしら喪の悲しくも寂しそうに感じる……

あははっ!!やっぱそうだよねっ!!私ったら、本当にバカなんだから……

光雄(アイツ)が大人しくじっとしてる筈が無いじゃない…きっと買い出しに出かけ多分又々誰かしらと出くわして又々アイツ御坂さんに捕まっちゃってんかな?…本当に、あれっ??なに?何で??おかしいなっ!!私ったら……なんで?目がこんなに霞んで、

ううん、きっと多分ステイルさんも一緒だからそうだっ!!きっと……きっと上条さんとかと一緒に行動してるんだよっ!!……でも、もしかして……又

そんな事を思いつつゆっくりと部屋の中を歩き……

そして、彼が数時間前までに寝ていたであろうソファーに腰を掛けつつ

あっ…ここ、アイツの…光雄の魔力を少しだけ感じるかも、さっきまで居たんだな……

と、腰をかけつつその目線の先に見える小さな机を見つめつつ昨日まであの喧しいほどに賑やかだった彼の笑顔や声を思い出すかのように彼女の脳裏に浮かび、

その目線の先に無造作に置いてある小さな緑色の携帯みたいな装置が目に入り…無意識に彼女はそっと、その装置を手に取り、眺め…

えっ??なに?この機械……光雄のかな?

音楽プレイヤー?……なにこれっ!?

更に彼女はその昨日誰かしらの落とし物なのか?それとも彼の持ち物なのか分からない…そんなプレイヤーを器用に耳に掛け……そして……

光雄の音楽プレイヤー??一体どんな曲が?ちょっとだけ……良いよねっ、

そう、そんなちょっとした出来心が彼女の身にとんでもない事態を招く結果になろうとは……

……――その数分後ソファーに寄りかかるように彼女、マリオンは深い眠りに陥るのである――……

◇◆◇◆◇◆…

一方その頃再び光雄為はというと…

先程から場所は変わり三人はとある施設内にある洗濯コーナーで美琴は先程の春生のブラウスとスカートを器用に乾燥機から取出しアイロンをかけ、隣側の更衣室内にいる春生と会話中なのである、

「本当にすみませんでした…まさかこんな事になるなんて…」

「いや…こちらこそ色々と突き合わせてしまってすまないね…」

と、更衣室となにかしらの扉を挟んで会話していたのである……

「そうか…先程から何処かで見かけたと思ったら、あの彼がねぇ～」

「そうなんですよ、あの～所で？」

「そうか、私か…申し訳ない…すっかり忘れていたよ…私は主に脳生理学研究等を研究している木山春生と申すものだ」

「あの～大脳生理学と言うと？能力者から普段から無意識に放出している微弱な脳波…ＡＩＭ拡散力場とか…ですか？」

「そうだっ、もう学校で習ったか？」

「は…はあ……」

「所で先程の話の続きだが…彼方側の彼はもしかして？あと君は？」

「そうなんですよ…もうばれていましたか？彼方の彼は……」

と、その会話中に光雄はなにかしらの違和感なのか？胸騒ぎを押さえつつ？洗濯コーナーの一室から離れ、外側で何気無く自身の携帯を取出し片手で開き見るのだが？

えっ！？新着メール？？って！？マリオンっ！？

そう、そんな何時もと変わらない仕草でそのメールを人知れずクリックし除くと？

そう、その内容を見つつ光雄の顔は引き連る……

「……っつ！！――――――！？」

マリオンがっ！！

そして、彼は慌てるように春生や美琴になにかしら伝えに行くのであるがっ！！

果たしてこの後に待ち受ける光雄の運転はっ！？

と？又々無理やりだが次回へ続くっ！！

第六十九話　あの～公道でのストリップ行為は犯罪ですよっ！？……――その３―

と？更にすれ違う主人公とヒロイン！！

そして光雄は１人ある決心をする？？

てな訳で

次回は一気に加速しますっ！！

そんな感じで

次回もお楽しみに～（笑）

第七十話　……――巷に雨が降る如く――……（前書き）

さてさて…いよいよそれぞれが動き出すこのパート…

果たして、当麻はっ！！謎の敵に襲撃され？？

てな訳で？だんだんと盛り上がって来ましたこのパートっ！！

そんな感じで

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～っ！！

第七十話　……――巷に雨が降る如く――……

「ハァッ…ハァッ…ハァッ…ああ――――くそぅっ!!まったくしつこいぞっ!!ステイルっ!!」

「ふうっ……ふうっ……上条当麻っ!!もう降参しろっ!!僕は以前からそんな君の行為が気に入らなかったっ!!」

「ハァッ…ハァッ…なっなにをぅっ!!」

「君の身体から滲み出る忌まわしきフラグ体質っ!!そのくせ鈍感過ぎるその態度っ!!禁書目録（インデックス）だけなら未だしも…まさかあの最大主教（アークビショップ）までも従わせるかぁぁ――――っ!!」

と?そんな一言に突然止まり、なにかしら首を傾げつつ考え込む当麻?

「ハァッ…ハァッ…最大主教（アークビショップ）??…もしかして、あの『ゴザル』とか『ありける』っつー奴か?以前土御門から聞いた…んで?誰だ?ソイツ…」

そんな突然急停車する当麻につんのめりながらも、肩で息を吐きながら…

「君が知らなくてもあちらさんはかなり慕っているのだがねぇ～…」

と？

そんな二人はいつの間にか路地裏の広場に…更に自分達以外の誰かしらの気配に事に気付きつつお互いに向き合いながらも警戒するのである……

「なあ……ステイル…」

「ああ…分かっている……おいっ！！さっきから僕達の事を探っているようだが…残念だったなっ！！…いい加減姿を現したらどうだ！？」

そのステイルの一言で気配がばれたみたいで？

更に？そんな二人の目の前に突如現れた人物…その黒い漆黒のマントをはためかせ長い白髪（はくはつ）をなびかせながら…そしてゆっくりと…

「ふふふ……流石にこれ以上は自身の魔力は消せないか……」

瞬間その路地裏に散らばる細かなゴミクズやその他が音も無くある一点に収縮して行く…まるで先程とは違う大気の流れと共に……

更に…その者は黒きマントの懐から一枚のカードを取出し読み上げ…その人物から発声られる一言が現実に……

「…――我に従わぬ哀れな罪人に祝福のあらん事を――…」

『――その刃は大気…その力は疾風…そしてっ!!対象物を切り刻み駆逐せよっ!!――』

瞬間!!轟っ!!と周りから発生られる凄まじい風切り音と共にまるで巨大な刃が複数!!

四方から地面をガリガリと抉りながらステイル達に差し迫る!!

「くっ!!」

「ステイル下がれっ!!」

そんな一言を叫びつつ身構えるステイルの眼前に飛び出す当麻！！

すかさず右手を凪ぎ払い……瞬間…バギンッ！！と？何かしらガラスが割れるような音源と共に、

あっという間に先程の不可解な現象を打ち消してしまう当麻なのである！！

「なっ！？おまえっ！！その技！？れ……錬金術かっ！？」

「ふんっ…いかにも……我はアガラスカ・クエル・レイ…無論我々チューリッヒ派の一人だが？噂には聞いたが貴様があの『幻想殺し（イマジンブレイカー）』をその身に宿す者だとは…」

「おまえっ！！……おまえの目的はなんだっ！！」

◆◇◆◇◆◇……

一方その頃…

ここは、先程と同じく学園都市、第七学区内にあるある施設、その施設内にあるクリーニング店前では、

「そうか…あなたの同居人が急用じゃ仕方ないな……すまないな、ここまで付き合わせてしまって、」

「いえっ！！こちらこそあなた様のお車を探す手伝いが出来なくて…」

「ふっ…別に構わないさ、後はあの子と探すし…」

「はあ……本当にすいませんっ！！」

そんな会話をしている少年と女性…その二人が見つめる先に佇む一人の少女と……

しかし、その少女はその施設に設置してあるなにかしの端末を両手に持ちその端末の液晶画面に移りこむ目まぐるしく変わる映像とデータをリンクしつつ、

そして!!

あっ!!これこれっ!!正にビンゴだわっ!!さっき言ってた木山さんの車のナンバーと止めた時刻っ!!よぅ～しっ!!間違い無いわねっ!!

「あのっ!!木山さんっ!!ありましたよ、」

「って!?あれっ!?アイツは?」

そして見事その端末と自分の能力を使用し、彼女の車が駐車してある場所を突き止めた美琴、

早速その駐車場に向かう為に足早に春生が佇む場所に近づくのだが?春生ともう一人の少年…光雄は先程の、彼の大事な連れからのメールで、ちょうど自身の学生寮に向かいそんな二人に深々と頭を下げつつ別れようとするのだが??

「まってっ!!」

「えっ!?御坂さん?でも悪いっ!!俺どうしても家に帰らないといけない用事が?」

「って!?木山……さんっ!?」

そんな光雄に二人が口を開き?

「そんな血相を変える程急ぎだったら、今から走って行くより」

「そっ!!せっかく車が見つかったんだし…序でに私も送ってもらっちゃおっかな?あの〜…」

「…別に構わんよ……駐車場探してくれたお礼もしたいし…それじゃ行こうか…」

「は…はあ……本当に何もかもすいません…木山さんっ…よろしくお願いしますっ!!」

そして三人で足早に先程美琴が見付けた彼女の駐車場目指して赴くのである…

◇◆◇◆◇◆◇……

そして…数分後…

第七学区のとある施設前にある駐車場で…只今春生が自身の駐車してある番号を出入口付近に設置してある端末に入力し料金を支払っている最中なのだが？

その彼女に近づく光雄…そして彼は？一体何を思ったのか？？

「あ…あの～…送って貰う序でに、車を外へ移動させましょうか？」

「えっ！？ああ…宜しく頼む…これがキーだ…後この荷物も先に載せておいてくれたら助かるが…」

「はいっ！！喜んでっ！！」

そんな爽やかな笑顔で彼女からキーを受け取り駆け足で彼女の駐車してある車まで向かうのだが？

その様子を腕を組みつつ頭を傾げつつ眺める美琴…

あれっ？？アイツ……木山さんからなにかしら荷物とキーを受け取って一体彼女の車で何を？？

そして？先程から感じていた違和感に気付きつつ目を見開き？？

えええっ!?まさかっ!!ちょっ!!あのバカ!!

そう…彼はいくらなんでも１６歳…まさかあの光雄が車を運転出来るとは全く予想外の展開に混乱する美琴!!

そんな美琴を横目に光雄は??何故か、慣れた手付きでキーを押しつつ?青いガヤルドのドアを開き?

ううわ……さすがイタ車だっ!!ええっ!?たしか俺が知ってるガヤルドはガルウィングじゃ無かったが…

もしかして、特注か??んで…ヤッパ内装は２シーターかっ!!後は……あっ!!これだこれだっ!!座席後ろ側の荷物置き専用ケースっ!!

ヤハリここの造りはＭＲ－２と対策無いんだな……これで良しっ!!　後は?…

そんな事を思いつつシートに腰掛けつつハンドル横にキーを突き刺し……左側に設置してある始動スイッチを押しつつ…

あれっ!?クラッチが……そうかっ!!たしかコイツはパドルシフトだからクラッチ無いのかっ!!さてとっ!!

そしていよいよエンジンを始動!!瞬間シート後方にあるＶ１２

が産声を上げ…更にアクセルを吹かし…
そのサウンドに酔い痴れる彼なのだが!?

「うはぁ――――っ!!このレスポンスっ!!痺れる～っ!!」

「ＧＴ－Ｒやスープラも試乗したがっ!!なんかこうっ!!…吹け上がりが違うなっ!!」

「さてっと…よろしくなっ!!相棒っ!!」

「へぇぇ～っ!?アンタこれ……分かるんだ…」

「あんっ!?分かるも何も普段から国産ばっか乗ってるとさぁ――…ヤッパこう…しかもイタ車だぜ?イタ車っ!!んなのこんな時じゃ無いと滅多にってぇぇ――――っ!?……むぐぐっ!?しまっ!!」

そう……何故かしら自分の隣席に座りつつ不敵な笑顔で睨みつける美琴の顔を見つつ、瞬間我に帰り??慌てて両手で口をつぐみつつ思い出す光雄っ!!

自分は今１６歳の高校生であって?そんな学生がどう逆立ちしたって運転免許所か?試乗なんて到底不可能なのである??

うわわっ!?ややや……やっちまったぜおいっ!!ついつい…い

つもの親切心で駐車場から道路に移動させ……只の癖で思わず乗っちゃった…テヘ??

みたいなオチなら良いが……どどど――――すんのよこれっ!!やべぇマジ超――――ヤバイんだけどぉっ!!

しかしやってもーたのは仕方がないっ!!いくら頭が良くても所詮中学生……な…何とかこの俺様の生前の２０年間培った叡知でなんとか上手く誤魔化し切り抜けるしかないなっ……しかし…どどっ…ど――しよ――（汗）

「あ……あのですねっ!!み…御坂さんっ!?これには深――い訳？」

「あ～あはいはい…質問が悪かったわね～……まぁ～私だって人に言えない事あるしさぁ～…ま!!アンタみたいに無断で車乗り回す位まだ可愛いと思うよ…」

「へっ!?……あっ…あのっ（汗）それだけっ!?」

「あんっ!?べ…別にアンタにこんな事出来るとか…こんなハンドル握って1人でかっこつけちゃってるからとか……まぁ…ちょっと驚いただけよ……何か文句でも?」

「……（汗）」

っつーかなにそれっ！！何故ここで赤くなるっ！？

何か恐えーよ…

それに何か違うよっ！！コイツ御坂じゃねーよ…

しかも奴は超勘違いしてるしっ！！

俺昔から無断じゃねーからね…ちゃーんと正々堂々と免許持ってたんだからねっ！！……いや……もう……どーでも良いや……はは

はっ

そんな謎の自爆寸前の思考を無理やりねじ伏せつつ……

只今駐車場の外側で待つ春生が佇む場所まで……彼は、

この世界で最初で最後の美琴との超短めなドライブをするのであった？？……　っつーかそれだけでも無断試乗は犯罪ですよっ！！

◇◆◇◆◇◆……

そして、何だかんだで無事に自分の学生寮前まで送って貰い……
部屋まで赴く光雄達なのだが！？

あっれぇ～っ！？おっかしいな～……一体何処に！？

そう…只今光雄は？自分の部屋のリビングの恥側に設置してある彼女…マリオンが何時も使用するベットの前に佇みつつ…顎に手をやり首をかしげ考え込んでいるのだが？？

と？その頃、彼の部屋の扉の前で片手を腰にあてがい佇む美琴なのだが？突然頬にポツリ……と？
水滴が当たる冷たい感触でふと気付きつつ先程まで晴れ渡っていた空がいつの間にか薄暗くなり…曇っているのに気付く……

あれっ？？何でだろ……たしか、樹形図の設計者（ツリーダイヤグラム）じゃあ今日は1日晴れとか言っていたのにな～

更に？ポツリ…ポツリと？次々に水滴が渇いたコンクリートやアスファルトの地面に当たり次々に黒い染みを造り出す……

そして…一筋の稲妻と共にズザァァ――……と、一気に凄まじいスコールが学園都市の街並みを呑み込んで行く……

そう…まるで……マリオンの…彼女が流す涙の如く……

……――そんな突然降りしきる雨――――その水滴が彼の部屋の窓やその他に当たり…無数の水滴が一つになり下に流れて行く――――そして…又雷鳴が――…

そんな音源が響き渡る彼の部屋のソファー……そのソファーに凭れかかるように、目を閉じ…そのサラリとした綺麗な水色の髪が…少し空いた窓から差し込む雨風に揺れる……

その彼女の目の前に1人佇む光雄……

「……――なあ、マリオンっ、おまえそんな所で寝ていると風邪引くぞ？――…」

しかし、彼女はその幸せそうな笑顔で微笑むかのように動かない……

「…――なあ、マリオン、今日さ、俺買い出しに行く途中おまえが好きそうなパスタ屋見付けたんだぜ、だから、今からでも行こうよっ――――…」

そんな語りかける光雄に反応するように、彼女は笑顔のまま…まるで、そんな光雄に反応するかのような……しかし…もう既に彼女

は……

「……――なあ、マリオン――……俺、」

「……――マリオン――……」

彼の脳裏に映る、あの可愛い笑顔、時に怒り、泣き……そして、部屋を見渡し…目の前のあの狭いキッチンで佇み何時も文句を言ってた彼女…

たまたま彼女を挑発してしまい何時も喧嘩していたあの懐かしき日々……　そんな彼の想いも、言葉も、降りしきる雨音に掻き消され…溶け込んで行く……

そして……

いつまで待っても部屋から出て来ない光雄に痺れを切らし、部屋に上がり込む美琴っ！！

「えっ？葛城？？それにマリオン…さんっ！？」

その美琴の表情は引き連る！！…彼女の眼前に部屋のリビングに

設置してあるソファーに寄り添うように死んだように動かないマリオン…

更に、まるで電池が切れたかのようにその彼女を見下ろしつつボーゼンと立ち尽くす光雄の姿が目に入り!!

「一体全体どーしちゃったのよっ!!とにかく早くっ!!ぐずぐずしないっ!!葛城っ!!救急車を呼ぶわよっ!!」

そして、一番冷静になる美琴なのである!!

とにかくっ!!一刻も早く病院にと!!

そして…正にそれを待っていたかのように美琴の携帯が鳴り響き、片手で器用に携帯を開き……

「ああっ!!黒子っ!?今ちょっと手が離せないから後にしてっ!!」

そして、その一言を告げ携帯から耳を話す直前に黒子は??

『そうそうっ！！お姉様っ！！一大事ですのっ！！あの幻想御手使用者達が次々に倒れ…謎の意識不明状態にっ！！』

「えっ！？それどう言う？？……っ！！」

『えっ！？……お姉様っ？…ちょっと、どうしましたですの？？……』

美琴は、そんな黒子からの突然の電話…更にその内容と偶然なのか…

今…彼女の目の前に眠るようにソファーに持たれている意識不明のマリオン…その彼女の両耳にはヘッドホンと…そして、

その手には……

先程と黒子が言っていた証言と同じく小さな音楽プレイヤー…

何故か幻想御手が握られていたのである！！

◆◇◆◇◆◇◆……

「ちっ！！……」

「さあっ！！どおするっ！？幻想殺し（イマジンブレイカー）を宿す者よっ！！」

ここは、先程とと同じく第七学区内のとある路地裏では……

両手に数m（メートル）からなる長剣を具現化させ次々と、当麻やステイル達に斬り付ける謎の魔術師…レイ

その彼は自身が唱える錬金術を利用し…自身の身体に剣を宿し…

…そんな姿が彼の戦闘スタイルなのか…

更に土砂降りの中一旦距離を取り相対する二人…

「ふふふ、我が術式で使用する剣…幾ら貴様がご自慢の右手でかき消そうが幾らでも代わりが生えて来るのでねぇっ！！」

次の瞬間！！降りしきる雨水を振り切るかのように一瞬で当麻の

懐に飛び込むレイ!!

「何回やっても無駄だっ!!」

と同じくレイに向かい右拳を振るう当麻……そして、一瞬ニンマリする当麻…

その彼の表情に気付かないまま懐から両手に力を込め更に一断ち浴びせるかのように…その長身を利用しつつ頭上に大きく振りかぶった瞬間当麻はまるでバレル軌道を描くかのように突然真横に一回転!!

そう…当麻達の作戦なのか…そんな突然の予想外の彼の行動に意表を疲れ仰け反りつつも足が縺れ…そんな彼の目の前に先程ステイルが当麻の背後を狙うように放った炎剣!!それに対応仕切れ無いのでいるレイ!!

瞬間!!グワンッ!!とたちまち爆発に巻き込まれるのだが!?

その爆発の時に発生した煙がはれた頃

その謎の彼の姿は無かったのであるっ!!

「ちっ!!逃げられた??いや…逃がして…くれたのか?」

そう…そんなステイルの呟きは、そんな土砂降りの雨が降りしきる音にかき消されて行ったのである……

果たしてその突然当麻達に襲い掛かった謎の男…レイとは何者なのかっ！！

そして、光雄とマリオンの運命はっ！？

又々無理やりだが次回へ続くっ！！

第七十話　……――巷に雨が降る如く――……（後書き）

とまぁ～…段々と謎めいた展開になりつつあるのだが？

次回っ！！病院に赴く主人公と？そこで再び彼はある人物に遭遇？？

……と言うか…既にネタバレみたいな？？

そんな訳でっ！！

次回もお楽しみに～（汗）

第七十一話　あの～…迂闊な隠密行動は結局ばれちゃうんだよっ！？（前書き）

と？今回も前回の続きなのだが…幻想御手（レベルアッパー）関連の事件を止める為に
主人公は独自のルートで調べるのだが？結局！？

とまぁ～…こんな感じで

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！
始まり始まり～っ

第七十一話　あの～…迂闊な隠密行動は結局ばれちゃうんだよっ！？

――――……

……――雷鳴が轟き未だ横なぶりの雨が降りしきる――――

学園都市の街並みを総て包み込むかのように…雨で出来た霧が街全体を覆い尽くし…そこに浮かび上がるビルの森のシルエットが、あたかもここが偽りの如く…そんな幻想的な世界に誘う……

……――第七学区内にあるとある総合病院、しかしその病院も又、その他の某大学病院よりもかなり規模がでかく、

その病院の巨大な施設の屋上付近には、ヘリポートを設け…独自の専用機も存在するのである…

その病院の一階付近の裏口には、雨が降りしきる中幾つものパトライトが周辺の壁やガラスをキラキラと照らす…

そう…数台の救急車が停車しているのである…

その後部から次々と、様々な患者達がたんかに乗せられ、複数の

看護婦達と共にガラガラと小走りに緊急治療室に運ばれて行く……

その中の1人マリオンも同じく光雄の付き添いの元彼女と一緒に緊急治療室へ……

「心配無いからな……ここの病院はデカイから、そう不安になる事は無いよっ！！」

「それにおまえには…この俺が何時も付いててやるからっ！！…」

そんな必死に彼女の白い手をしっかり握りながら語り掛け…一緒に駆けて行く光雄、

そうだよな…たしかにあの時俺の部屋で…意識が無かったアイツがしっかり握っていたあの緑色の薄い音楽プレイヤー、幻想御手（レベルアッパー）……

もしそうだとしたら、俺が、俺だけが知っている、この幻想御手を巡る一連の事件……

そしてっ！！その打開策を、幻想御手（レベルアッパー）の治療用プログラムが存在している事を……

と、その前にマリオンを早くこの病院に入院させ…それから奴が…あの数時間前にお世話になったあの方…木山さんに…あの事件を起こす前に俺の全能力で絶対とめさせなきゃ！！

あの人の抱えてる苦悩も……俺が背負い…総てを俺がっ！！終わらせるっ！！…はは…今になって忘れてたよマリオン――アンタとの約束を――アンタと誓ったあのリナさんとの――――

―――――――――

――そんな事を思いつつ彼女を載せたタンカと一緒に駆けて行く光雄…彼女…マリオンの寝顔を優しい笑顔で見つめながら――

――マリオン――俺の　この力がこの命を司る俺の身体に宿るこの能力を――どれ程通用するか知らないが、この世界を、この混迷する世界を正しく導く力…この俺に課せられた使命を…何か…何かさぁ――…最近何となく解るんだ…

そしたら俺…本当に!?

えっ??

だ…誰だコイツっ!?

「――――!?――っつ」

「あの～…貴方は此方の方のご兄弟かご家族様でしょうか？」

「えっ？……そう…そうですが？俺の……俺の大事なというかアンタ医者だろっ！？あのですねぇ～……そんな手続き云々よかあいつ…マリオンの事を早くお願いしますよっ！！」

そのマリオンが緊急治療室に運ばれる中…その病院の医師らしい人物が、なにかしらカルテを片手に光雄達の前に立ちはだかるように質問して来るのである…

「そうですね～ふむ…只今当病院も同じような住所や身分不定の患者が次々に運ばれていまして」

「で…でもさぁ～、そんな今の状況を分かって聞いてるんですかっ？彼女は…俺の…俺の大切な家族なんですよっ！！だからっ！！」

光雄は目の前に立つ眼鏡を器用に片手で上げる医師らしき人物に捕まりしかも自身の大切な人を身分不詳扱いされ、

それを何とかして弁解しようと両手を激しく降り医師にくって掛かるように必死に説得するのである、

そう…確かにここ学園都市云々以前に、身分不詳の輩を診察しないという決まりは証明されて無い筈なのだが？？この医師は…一体何を根拠にこのような状況下で光雄に絡んで来るのか分からないのである、

「…うぅ〜ん…困りましたね…そこまで言うのでしたら、”あなた様でも構いません”から、身分証を…あ！でしたらそこにサインと君のＤＮＡ提供先に連絡を？」

って？なんなんだコイツは？？いや…そんな事より早く彼女を…とりあえず当たり障り無いに越した事無いな…とりあえずはっ…

「はい…そしたらマリオンの入院手続きを？…」

「早くっ！！……君が代わりに此方の手続きを済ませれば彼女を助けて上げないことも無いのだからっ！！…」

と…何かしら引っ掛かるような証言になる医師…そんな医師の表情を眺めつつ警戒する光雄、そう、コイツ、ひょっとしたら何処かしらの研究員じゃないかと？

そんな事を思いつつ、自分が今渡された書類にサインすれば…そう…分かっていながらも自身の犠牲で彼女を入院させる事が出来ればと？

と？そんなやりとりの最中…その様子を遠くから見ていたのか？そんな人物が光雄達に近づき？

「あ～……おほんっ！！」

「「へっ！？……」」

「岸君、ここは良いから…アンタは…9番の診察室を見てくれたまえっ！！」

「ちっ！！……は……はぁ…わかりました、それでは失礼します」

その、自分の身分証とか資料云々と喧しい医師を、咳払い一つで黙らせた、

そんな突然やってきた謎の医師に？光雄はそんな人物の特徴のある顔や姿に戦慄し？

空いた口が塞がらなくパクパクと？？

「んっ？なんだね？私の顔に何か！？……」

「あっ！！あなたはもしやっ！？」

「んっ？君はあの彼女のもしかして彼氏さんだったね？それと先程からこんなにご熱心に…すまないね～旦那様でしたかな？」

「うぇっ!?……だっ?…旦那って…（汗）
違いますからねっ!!、只の友達だからねっ…いや…友達なんかっ??
たっ…確かにコイツはお…俺の同居人だが…か…かか勘違いしないで下さいよねっ!!」

「いやいや…ジョークだよジョーク…そんなに顔を赤らめて必死に否定してるという事は??」

「うはっ!?……」

「はっはっは!!…本当に君は面白い子だね…」

うがぁぁぁ〜……（汗）
いっ!?一難去って又一難ってかっ!?
くっそぅぅ〜…こんのリアルゲコ太っ!?…いや…冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）かっ??俺様は生前から原作で知って居るが…コイツの性格って?……うぅ〜…

そう…光雄の目の前に現れたその人物とは??
彼が生前からよく知るあの人物でもあるのである!!

しかも確かにこの世界じゃぁー身分証明やら経歴みたいな住民票すらも全然持って無い光雄とマリオンにとって、目の前のお方は？大変有り難くそっと胸を撫で下ろし、何とかこれで一安心なのであった……

◇◆◇◆◇◆……

一方光雄達がそんなやりとりをしている頃、光雄達とは違う方法で、この病院に慌ててやって来た人物が…

その病院の一階受付前のロビー下に停車するタクシーから下車する美琴…、

そして彼女が来るのを待ち侘びていたかのように、向こう側から詰め寄る人物達が、

「ええっ？黒子？それに初春さんに佐天さんも？」

「お姉様っ…まさかあんな悪影響があるとは…突然にあの幻想御手（レベルアッパー）使用者達が次々に謎の意識不明障害にっ！！まったく信じられませ

んの…」

「後御坂さんっ…信じられないと思いますが…あのマリオンさんが運ばれてきまして…先程葛城君と一緒に…でもなんでマリオンが？」

「それ…それ私が、さっき葛城と会って…多分その間にマリオンさんが…もし気がついていたら…もう少し早く彼女に会ってたら……くっ…」

そんな自身の腑甲斐なさなのか…美琴は先程の部屋での光雄のあの悲惨な表情を思い出し…

拳を堅く握りしめ…自分がもう少し早くあの学生寮に赴いていれば、もしかしたら止める事が出来たかもしれないっ！！使用前に間に合ったかもしれないとと、既に過ぎ去った事を悔やんでいるのである！！

「うん…そうね…それでその人達の状態は？後一体何がどうなってるのよ…」

「ええ…それで、そちらの専門家が間もなく此方に来てくれると思うのですが…」

「えっ？？その専門のお方って？？」

その黒子の一言が何かしら引っ掛かるようで腕を組みつつ首を傾

げ考え込む美琴…そんな二人のやりとりに隣側に佇む飾利が口を開き…

「とりあえず待ち合わせ場所に早く行きましょう」

と…

その後当病院内の待ち合わせ場所でもある休憩所であの大脳生理学を研究している科学者の一人木山春生（きやま・はるみ）と合流後…彼女達は幻想御手（レベルアッパー）関係の様々な事や…患者達の事…

そして彼女にその本体でもある小さな音楽プレイヤーを手渡専門家の方向から調べて貰う事になったのである…

◆◇◆◇◆◇……

その日から数日後…

美琴達はぞろぞろとそのとある人物に呼ばれ、その病院に再び赴き…只今三階付近にあるエレベーターから通路を抜けてその先のそ

の人物が待っている場所まで向かうのである、

「あっ！！あれ…もしかして、葛城君じゃないですか？」

「「えっ？？たしかに…」」

と？その通路側の一室から一礼しつつ出てくる所をその向こう側から辞任する涙子…

その涙子に反応するその他のメンバーなのだが？…そんな彼に一声かける黒子、

「葛城君っ！！マリオンさんはっ？？大丈夫ですのっ？？」

「えっ！？……あの……白井さんかっ？？それにみんなまでっ！？ああ…とりあえず未だ意識は無いが…大丈夫だよ…それにアイツ…」

そんな遠くを見るような仕草で通路側の窓の外の晴れ晴れとした空を見つめる彼…その何とも切ないような表情に窓から差し込むそよ風に独特の薄いピンクの髪がサラリと揺れる…

そんな彼の横顔を眺めながら黒子は…ヤハリ、いくら平然を装っても分かりますのその気持ち…そう…わたくしも、もしお姉様が同じ境遇にあわれたら…

そんな不思議なやりとりに美琴は？？

「ははぁ～ん…黒子もしかしてアンタ葛城に？」

と？？

「「へっ？？」」

「んなっ！？なななんですのっ！？私は葛城君がっ！！あの殿方のお気持ちは分かると？」

「うへっ？し…白井さ？ぐへぇぇ――――――っ！？いでででででっ！！ギブギブギブだからっ！！一体俺がなにを～っ！？」

「きぃぃ――――――っ！！こんな奴に同情したわたくしが間違いですのっ！！葛城っ！！このまま永遠の眠りに？」

「ちょ？白井さんっ！！マジ死ぬからこれ以上くっ首がっ！？」

とまぁ～…突然一体何にスイッチが入ったのやら…（汗）突然光雄を襲い出す始末……

そんなやりとりの最中…彼が出て来た一室から別の人物が席を立ちつつ光雄達に詰め寄るのである…

「あの…もしかして、君達は葛城君の知り合いかね？」

「えっ？？……」

と？そんな、なんとも特徴のある人物の顔をマジマジと見入る者が？

「リアルゲコ！？……むぐぐっ！？」

「むぐぅ――――！？むぐ――――――っ！！」

と？ヤハリ予想通りの反応の彼女に？冷や汗をかきつつ慌てるように口封じを瞬時に行う光雄っ！？　それをジタバタとまるで陸揚げされた魚の如くもがく美琴なのだが？

「あの～…私の顔が何だね？」

「いっ！？……いいえっ！？…只の空耳ですよっ！！あはっ……あははは っ（笑）」

っつ―かやべぇ～よ超地雷だよ…ったくなんでコイツ奴…
わざとかっ！？みんなしてわざと俺様に散々地雷を仕掛ける気なんかっ！？
しかもよって集って……っつーか一体全体なんなんだよ――――っ！！
俺のっ！！この俺様の目の下は熊五郎保管計画が台無しじゃ――――ないですかいとっつあんよ――――っ！！それともって！？……
あぢっ！！「う〝ぁぢぢぢ――――っ！！」

「うっげっ！？お…俺の手がぁぁ――――っ！？」
「ハァッ…ハァッ…っ！！たく…自業自得よっ！！いい加減放れろやっ！！窒息死してしまうだろがぁっ！！」

「あ…あははっ…悪い悪いっ…（笑）」

とまぁ～…そんな二人はヤハリ？コントじみた事態になる始末…（汗）

そんな光雄達を隣側から見ていた涙子は？

ヤハリこの二人なら行けるっ！！とまぁ～…なにやら別の意味で期待を膨らませていたのであるが…（汗）

更に数分後先程まで光雄達が居た一室にそのカエル顔の医師がパソコンを眺めつつ座りその彼を取り囲むかのように佇む光雄を含筆頭に

その他のメンバーが佇みながら、皆の目線は彼が操作するパソコンの液晶画面に集中するのである…

そんな中、カエル顔の医師はなにかしらを調べていたらしく説明を初るのであるが？

「そうそう…先程葛城君に見せていたのだがねぇ～、彼の連れマリオンさんが持っていた音楽プレイヤーを調べていた所、幻想御手（レベルアッパー）の患者達の脳波に共通するパターンが見つかったんだよ…」

と？そんな事を言いつつ手際よくキーボードを操作するカエル顔の医師…

「そうっこのグラフがね、私が独自で調べた所幻想御手（レベルアッパー）使用者に共通する動きなのだがね…」

「ええ――と？それは…何ですの？」

と？更に両腕を組みつつ首を傾げる黒子、

そんな様子の黒子を横目にカエル顔の医師は？

「そうだね～…人間の脳波は活動によって波が揺らぐのは知っているだろ？」

「ええ……」

「それを無理に正せば、当然人体の活動に気性をきたすだろうね」

そんな事を言われつつ真剣に彼の言葉に耳を貸す４人…その中の光雄が口を開き…

「だからさぁ～…アイツ…マリオンもそうだけどようはその幻想御手（レベルアッパー）によって…」

「無理矢理脳波をいじくられその使用者達が皆植物状態にさせられたっ…っつー事だよ」

更に光雄は彼のパソコンに手を伸ばし操作を初めつつ

「だからさっ…そんな脳波パターンの中に一つだけ共通するある特定の脳波パターンがある訳よっ！！」

「で？それって？一体……！！もしかして葛城さんっ！！まさかっ！？」

その光雄の言葉にいち早く反応する涙子、その彼女の表情はある結論が分かったのか？なにかしら同様を隠せない様子なのである…

更に？光雄に変わり再び口を開き語りだすカエル顔の医師…

「そうだね…葛城君の意見を元に調べた結果…そのパターンに登録されているある人物の脳波がマリオンさんやその他の患者達のものと一致してるをだよね…まったく本当に良く出来てるよこいつは」

そう…黒子達は戦略する…その脳波パターンを共用する中心的人物…

そんな中…一番同様が隠せない涙子…そう、その涙子の最愛の親友でもある飾利は事もあろうに…その人物…

木山春生の元に…数日前に調べて貰う為に彼女に渡した幻想御（レベルアッパー）の結果を聞きに赴いているのである！！

初春が…危ないっ！！

そう…そんな動揺を隠せない涙子…その彼女の表情を見つつ分かっていたのか…ポンッ…と彼女の肩を叩きつつその一室から一人出て行こうとする光雄…

そして振り向く涙子に光雄はそっと優しく微笑みながら…

「……――大丈夫だよ…俺が守るから――」

と？そんな一言を言いつつ彼の顔をじっと見つめる涙子に見送られつつ一室を後にしたのである……

◇◆◇◆◇◆…

そして…そんな彼…光雄はゆっくりと一室を後にしつつある広い休憩室の窓際に佇み…　そして…一言自身に言い聞かせるようにポツリと……

「んじゃ…ちょっくら行って来るよ、マリオン…」

と、

更にそっと目を閉じ同時に演算、そして能力を使用したみたいに彼の周りに光りの粒子をはためかせ…キラキラと輝かせながら浮遊するようにあっと言う間に休憩室前の窓から飛び出し、急降下しつつ地面にダイブ!!そして地面スレスレで自身の粒子を加速させつつ水平飛行をし…そんな彼を仰け反りながら避ける人々……

「おいっ!!気をつけろっ!!」
とか

「キャアッ!!危ないわねぇっ!!」

とか、彼が過ぎ去った後から罵声する人々、
そんな人達を後方に気にしながらも彼の勢いは止まらない!!

更にその建物の丁度外側にの更に広い敷地に勢い良く飛び出し際に更に瞬間ブワアッ!!と、

その敷地内の保々中央に設置してある噴水用の水溜まりに巨大な水柱を立てつつ更に周りを巻き込むかのように眩ゆいばかりの粒子を自身から放出!!

そして、先程の加速を生かし、　まるでカタパルトから発艦する艦載機の如く光速であっという間に凄まじい勢いで飛び立ち、
その余波が大気を震わす！！……
更に数秒後…ズドン……と、何かしら壁にぶち当たるような音源が空に響き渡り、彼の速度は…音の壁を突破したのである！！

「うぉぉぉ――――っ！！いっけぇぇぇ――――――――――――――ッ！！」

そして、彼はそのままの軌道であの忌まわしき第二学区へ向かう！！

そう…飾利を助け、あの木山春生の暴走を止める為に…

更に次回へ続くっ！！

第七十一話　あの～…迂闊な隠密行動は結局ばれちゃうんだよっ！？（後書き）

いやいや…なにやらシリアスで行きたいがやはりこの主人公は？

んで！次回っ！！いよいよ彼はあの木山春生の前に立ちはだかり…果たしてっ！？

そんな訳でっ！！次回もお楽しみに～…

第七十二話　とある瓦礫の魔法大戦（前書き）

さて…前回に引き続き行かしてもらいます。

そんな訳で

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～…

第七十二話　とある瓦礫の魔法大戦

――――――――――……

――――――……

――――…

「ここだなっ…まったくあの葛城光雄もやらかしてくれるよ……自身の師に対して……」

「おいおいっ…つか…こんな所で愚痴溢すなよなぁ～…こちとら散々追い回され、挙げ句の果てにゃ～…」

「ったくにゃ～にゃ～うるせいぜよっ！！んなことより戦力は多いに越した事は無いからにゃ～…」

「おい…てめぇ―こそにゃ～にゃ～うるせえだろっ？？」

「「っつ――か…は・や・く・し・ろコノヤロウ～ッ！！」」

「あぁ～もぉ～っ！！はいはいわかったからやりゃ～いいんでしょうがぁ～っ！！その後どうなっても知らんぞっ！！…」

と?突然その狭い空間に響き渡る甲高い独自の音源が!?……そして…

というか…コイツ等は一体全体何処で?ナニをしてるのやら……
その答えは、この時間軸から数十分後明らかになるのだが…!?

――――――……

◇◆◇◆◇◆……

……――ある科学は言った…人の脳は、本来用いるスペックの３０％（パーセント）程度の力しか発揮していないと言う事を…
ある宗教的な人物は述べた…人という生き物は、自身の身体に秘めるとてつもない力を封印（リミッター）させられ、
常に人生経験を通して、様々な輪廻を繰り返し神に近い存在に到達する目的である事を…

……――人…世界…そして自身に秘められた能力や生命の謎…その

総ての応えの謎を説き明かすには…人類は未だ若すぎるのかも知れない……

――西暦２０ＸＸ年、人は遂に自身の封印（リミッター）と言う名のパンドラの箱に…手を出す　そう…決して絶対に開けてはならない禁断の箱を…その絶対的な力…能力を――

――――――――――……

◆◇◆◇◆◇……

ここは学園都市第二学区を一直線に結ぶ高速道路…しかし…時間的には昼過ぎの筈なのだが、なにかしらの通路封鎖中なのか、一般車は愚か一台も走行していないのである……

そんな無人と化した高速道路上に、一台のスポーツカーが周りの静寂を打ち消すようにＶ１０独自の甲高いエキゾーストを醸し出しつつ通過するっ！！

最高速３０９ｋｍ（キロメートル）に達する速度で軽快に走行中なのである…

そして、そのコクピット内には、只今ハンドルを握る女性と、そ

の助手席側のシートに座る学生が…

しかし、その学生の両手には拘束するかのような手錠を掛けられているのである、

運転席側のシートに身を静める女性…木山春生がバックミラー越しに映るその隣席に座る学生の花飾りをチラ見しつつポツリと…

「本当にすまないねぇ～…所でその頭の花は何の意味だ？もしかして君の能力？」

「いいえっ…これは只の造花です…」

「……」

というか…そんなお互いに無言状態の空気を逆に冷やすよ～な…

…（汗）

と？？少々間を開けてから車内窓の景色を眺めていた飾利だが…

春生の方に振り向きつつ彼女の横顔を…更にその目を真っ直ぐに見つめ突き刺さるように突然口を開き…

「そんな事より一帯あなたの目的は何ですか?あんなわざわざ『幻想御手(レベルアッパー)』を造りあげ…」

「それにっ!!あれによって眠った人達も一敗いるんですよっ!!私の…いえ、私達の大切な友達だって…」

「そうか…」

「そんなっ!!そんな一言?」

「そうだな…まずは『幻想御手(レベルアッパー)』、あれは単に複数の使用者達の脳を使用し、尚且つ高度な演算を可能にする…」

「えっ??それって?」

「そう…それを用い…あるシュミレーションを行えるよいになる…」

その春生の説明を頷きつつ真剣に聞き入る飾利…その度に頭の花も揺れ…

「あの…さっきおっしゃってたシュミレーションは一体どんな事するんですか?」

「そう…あの『樹形図の設計者(ツリーダイヤグラム)』の使用申し入れをしたのだが…数日前に謎の現象で跡形も無く消滅してね~」

「その代わりになる高度な演算装置が必要なんだ…それに…」

そして、その言葉と同時に自身が身に着けている白衣のポケットからなにかしらを取出しそっと隣席で彼女を見つめる飾利の手に載せ…

その小さな黒いなにかのチップをマジマジと魅入る飾利…

そんな飾利に一言告げるように

「まぁ…そのシュミレーションさえ無事に終われば皆を解放するつもりだ…」

「後これを君に預けておくのも良いかもな…」

「えっ??そんな…でもこれって?」

「ああ…これはその『幻想御手(レベルアッパー)』をアンインストールする治療用プログラムだ…」

「でも何で私?……って!?」

「キャアッ！！」

と、突然の急ブレーキに驚き手に持つ治療用プログラムチップを落としそうになる飾利？

そんな状況の中春生は車のダッシュボード中央に設置してある液晶画面を真剣な表情で見つめる…

「ちっ！！もう踏み込んだか…たしかに君との交信が途絶えてから動き出したにしては早すぎる……んっ！？」

「あの…木山さんっ！！あれっ！！」

そんな一言を言いつつ、自分達の位置から前方約５００ｍ（メートル）先に展開する幾つものパトライトに目を見開き見つめる飾利！！

「ふぅ～……統括理事め…もう嗅ぎてけたか…」

と…

更にため息をつきつつサイドブレーキを押しつつドアを開け…車外に赴こうとする春生…

その春生を見つめる飾利に口を開き…

「後いい忘れていたが、その『幻想御手（レベルアッパー）』に関する総てのデータ―…こうゆう事態を想定して総て消去してある…」

「だから『幻想御手（レベルアッパー）』使用者を起こせるのは君が持つそれだけだ…大切にしたまえ…」

と、その一言を飾利に告げ車外に出て行ったのである…

◇◆◇◆◇……

「木山春生だなっ!!『幻想御手（レベルアッパー）』の製造っ!!ならびにその散布の容疑者として拘留するじゃんっ!!」

「直ちに無駄な抵抗は止めて大人しく此方に来るじゃんっ!!」

その停車した車のドアを開けて、此方側に相対するように佇む春生に対し…ズラリと高速道路上を封鎖するように展開する多数の装甲車やパトカー…

その周りには複数の警備員達が自動小銃を此方に向け…その中心に立ちながらパトカーに設置したマイクを片手に彼女に対して投稿を呼び掛ける黄泉川愛穂(よみかわあいほ)……

軸線上に佇む彼女…木山春生を見つめつつ…

普通は、大抵の容疑者やその他云々の犯罪者達はそれぞれが違えど、

その大多数は、まるで当たり前のようにその場を逃れる為に逃走、若しくは少しだけの勝路を見いだし抵抗して来るのが…

今まで彼女に確保された者達の行動パターンなのであるが、目の前の女性にかんしては、無駄な抵抗は愚か…その自分の呼掛けに素直に従い…おおじるのである…

しかしそんな様子を見つつ…なにか…なにかがおかしいと?彼女の直感なのか…そんな不安感は現実の物に!?

警備員達に対し春生はやはり観念したのか黙ったまま両手を上げ、下を向きつつ一歩々々ゆっくりと近づき…

その肩よりやや下まで伸びた茶髪が風になびき揺れながら…その少しウェーブがかかった独自の形が揺れ…その髪に隠れ顔はよく見えないのである…

そして、そのまま観念したように警備員(アンチスキル)達の目の前までゆっくりとした足取りで此方に側に赴き…

下をむきつつその口元が、クスリ…と笑ったかのように見えた瞬間っ！！

突然周りから響き渡る複数の発砲音！！…

「なっ！！何事だっ！！」

「俺っ？？俺の身体が勝手にっ？？」

「やっ…バカ冗談は寄せってっ！？撃つな！！」

更に複数の警備員達（アンチスキル）がお互い同士撃ちを初め次々と地面に崩れ落ちて行く！！

更に不適な笑顔を醸しつつ右手を翳し演算を開始する春生…

「なっ！！アイツ…学生じゃ無いのに能力者だとっ！？」

「まずい……全員一旦引くじゃんっ！！」

そんな皆が信じられない表情で見つめる中…彼女…春生の手の平の大気が揺らぎ…収縮され…更に、轟っ！！と巨大な渦の塊に変貌っ！！

それを振りかぶるように身構える警備員(アンチスキル)達に向かって撃ち出され！！その巨大な渦が差し迫る！！

瞬間！！グワン…と何かしらにぶち当たる轟音が周りを揺さぶり…

その衝撃波で路面のアスファルトの破片やら壁のコンクリートの破片が飛び散り…辺りに立ち込める砂埃…それが風に流され…一人の人物のシルエットが浮かび上がり…

そんな様子の中身構えていた愛穂はゆっくりと目を開き…周りを煌びやかな光りの粒子が舞っているのに気付き？…

「なっ！！おまえっ！！まさか上条と一緒に居た学生じゃんっ！！」

と…？

「へっ？？何故知ってる？しかも上条って……ハァ～…つかせっかくさぁ～かっちょ良く登場したのに上条って……」

「えっ？？あなたもしかしてっ！？」

と？その春生との間を挟むように佇む一人の学生…　そんな彼に指をさしながらもしかしてっ！？

とまぁ～期待を膨らます警備員（アンチスキル）？？……もといっ！！とてもキュートなメガネっ子、鉄装綴里（てっそうつづり）

「うおっ！？そうそうもしかして？」

「子萌先生のお知り合いの学生っ！？」

「……（汗）」

「ええっ？私っ間違ってた？」

「ハァ――――…（汗）」

「っつ～か…なにそれっ！！それかっ！？俺様の存在ってそれだけかっ？えっ？？上条ぅ～っ！？お知り合いっ！？俺はしゅ？……ハァ～もぅ～良いっすよそれでっ……」

「ふふ…」

「へっ??今笑ったねっ!!笑いましたねっ!!木山さんまで……ハァ――――…マジ俺主役だから…超かっこいい感じに表れたからっ!!」

と?なんともタイミングが良いのか悪いのか…この主役って……(汗)

と?突然上空から颯爽と飛来っ!!&先程警備員(アンチスキル)に放った能力を自身の光弾で撃ち消した光雄なのだが?やはり…なにやら彼女達には?彼の存在はかなり薄いようで?それに自己嫌悪なのか…それに凹む光雄なのであった……(汗)

◆◇◆◇◆◇……

そう…所変わってここは学園都市第七学区内にある総合病院…

同じく当院内の三階…そこから更に恥側に位置する小さな一室では、

窓際の白いベッドに腰を掛けている人物を数人の人物がぞろぞろ

と取り囲むように佇みまながら、何かしら会話をし、只今密会中のようである…

その数人の輩の中心に位置する人物が、更にギシリ…とベッドに腰を沈めつつ
自身のベッドの保々真下に置いてあった紙袋を引っ張りだし、片手を突っ込みガサゴソと手探りで漁りながら、目の前の人物達と会話しているのである……

「うんっ…そんな事態になっちゃってんの？」

「ああ…でも僕達が出くわしたその輩はマリオン…君の連れを探しているみたいだったな……たしか名前は…」

「レイとか名乗ってた人かもねっ……そう私は知ってるよっ、元オスマン帝國第六十四代神官に仕える親衛隊だって、その同じ親衛隊だった私の父の知り合いで、父が亡くなってからあの人行方を暗まして…」

ヤハリその謎の人物は彼女の知り合いみたいなようで…その”行方不明”という単語に反応する当麻…

「行方をっ!?それで?」

「うんっ、そう…それからだいぶ時が経つかな?…あの時…事情があって私がローマに居た頃…上からの命令で、私の持ってる『アクエリアスの涙』と瓜二つの魔法石『ドラゴンの瞳』を同じくローマから持ち出し、学園都市に逃げ込んだ魔術師を追っていた時に、突然出くわして…命を狙われて」

「そんな事あったのかよっ!!…あの野郎〜っ!!…よりにもよってこんな幼気な女の子をっ!!」

「ううん?…でもそんとき偶々出会った光雄に助けられたから、今ここに、生きて居るんだけどね…」

その…なにかしら頬を染めつつ俯く彼女…その表情になにかしら咳払いしながら外方を向くステイルなのだが?

「まっ……おほんっ!!それで奴の正体が分かったよ…しかし葛城光雄も今は、とある事情でマリオンと同じのを…」

「んだなっ!!今一番今危険なのは光雄だな……よしっ!!行くか…ステイルっ!!」

と?なにかしら確信したのか、頷く二人なのだが?

そんな為にわざわざ植物状態のマリオンから発する微弱な魔力を頼りに赴き…常識外れの方法で半強制に起こした当麻…
その当麻の顔を覗き込むような形でにっこりと微笑み出すマリオン…

「ねぇ…後一つだけ言わせてっ！！」

「んあっ！？っつーか何だ？マリオ？」

瞬間彼の頬に何かしら生暖かい感触がっ！？瞬間彼を取り巻く空気が変わり？

顔を引く尽かせたステイルや…何故か？一体何に反応したのだか？只今病室の外に居た元春までもが？当麻に詰め寄り？

「こんの～っ！！又してもっ！！殺すっ！！」

とか？

「これで君を永遠の眠りにつかせる事が出来るよっ！！」

だの？いきなり二人して彼に今正に襲いかかるかのような始末っ！！（笑）

そしてっ??

そんな様子をにっこりと微笑みながら見つめる彼女…

「また、あなたに助けられましたねっ!!本当…私っ……不安だったから…もうこのまま光雄や皆に会えないかもと…あっ!!今度もし宜しければ光雄と二人でお礼を?」

そのマリオンの一言で只今デットヒートだった三人は止まり??そして当麻はそんな彼女に応えるかのように…自身の特徴的なツンツン頭をポリポリと、片手でかきつつ

「ああ……ええ~と……まぁ~結果はどうであれ、今こうして助かったんだから…別に気にする事無いさ…」

「えっ??でもっ…」

「だからさぁ~おまえや光雄も…もし本当に幾ら頑張っても努力しても駄目な時…そんな時は黙って自分達だけで引きこもらないで…俺やステイル…それに、今は居ないが御坂だって居るんだし…」

「……うんっ」

「そん時は遠慮なんてするなよなぁ～…その事もアイツ…光雄にも言っといてくれよっ！！アイツの悪いクセだし…何でもかんでも自分に背負い込むたちなんだからアイツはっ！！…」

「うんっ！！ありがとねっ！！」

「ああ…そん時は、この俺がそんな幻想なんか何時でも掻き消してやるからさっ！！」

その当麻の器のでかさや彼のやさしさに目を見開き…黙り込む彼女……

この人はそんな様々な人達の悩みを全部その右手で救って来たのかと…

「うんっ！！分かったっ！！改めて、これからも宜しくねっ！！上条当麻さんっ！！」

そして…彼女は先程の紙袋から自身が身に付けていた霊装を取出し、病室の前のトイレで着替え…その他の仲間達と光雄と合流する為に彼女の持つ携帯のＧＰＳを頼りに向かうのであった……

そしてマリオン達もあの木山春生との戦いに身を投じる事に…更にその後に確実に光雄の身体から発する魔力をサーチし現れるであろう彼女…マリオンや光雄達の宿敵…その人物と会う為に……

更に当麻達よりも一足早く混戦になりつつある第二学区の現場を目指し、一台のタクシーもスピードを上げつつ向かっているのだが？その車内後席に座る学生達も又この戦場に吸い寄せられるが如く誘う……

そして、更にその場所へ不適な笑みを浮かべながら向かう一人の謎の魔術師と……

その第二学区を舞台に科学側と魔術側……そう…様々な役者達の戦いの狼煙が上がるのである！！

又々無理やりだが次回へ続くっ！！

第七十二話　とある瓦礫の魔法大戦（後書き）

いやいや……かなり無理矢理な展開だが…

次回もこのままの勢いで行かせて頂きます。

では…

次回もお楽しみに。

第七十三話　とある瓦礫の魔法大戦……――その２――……（前書き）

さてさて…今回は前回の続きだが？主人公達が居る場所目指し近づく一人の魔術師…その彼に体し突然襲いかかる輩が？？

そんな訳でっ

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！

始まり始まり～…

第七十三話　とある瓦礫の魔法大戦……――その２――……

ここは学園都市第二学区内…同じく第一学区から二十三学区に振り分けられたこの街の中では一番敷地が広く設けられ、その敷地を利用し、警備員（アンチスキル）の演習場や…様々なその地形を生かした研究所が存在しているのである…

午後の真夏の太陽が大地に降注ぎ、灼熱のアスファルトに、ユラユラと大気が霞む中……

浮かぶ黒いシルエット…その身に纏う耳元まである大きなエリを折り曲げ足元まである黒いマントに身を包み、約２ｍ（メートル）まで達する白髪の男……

この真夏の景色には不具合な、まるで別次元から抜け出たような容姿を醸し出しながら…

その先にあるなにかしらの力か異常な魔力に導かれるが如く、光雄達が居るとある高速道路前に、ゆっくりとした足取りで向かっているのである…

「…ふっ…この地に哀しみの精霊（マナ）が再び満たされるか……それに引かれてその悪しき死神達が血の匂いに嗅ぎつける…いや…違うな…」

「これはまるで一人の意志に何百…いや数万の怨念…苦悩…災いを総て飲み干し…、ふふふ……なかなか学園（ここ）都市も面白い事をする……」

と、この先に、彼にとってなにかしらを感じるのか…ふっ…と目を細め苦笑しながら呟く……

そして、そんな彼の後を先程から追尾しているナニカの気配に気付きつつ、

立ち止まり…クク…っと、口元を引き吊りながら更に悪魔が囁くが如く口を開く彼…

「……ふふっ…又貴様か、我も人気者になったものだな…まったく…」

「ったくよォォ〜…そのグダグダと喋りヤガル減らず口っ!!、やァ〜っとみつけたぜェ〜…この三下がァァ!!なァ〜魔法使いクン??」

「ふふ…まぁ良い…しかし我が独学型『ヘルメス学類型チューリッヒ派正統錬金(マルスエグザエル)』に又懲りずに挑むか、能力者よ…だが忠告して置こう…”無駄な事だと”、その安いプライドが…そんな降らん物にこだわれば何時かは命を落とす事に?……んん??」

「吠えてンじゃァァネェ――――ゾォ!!この三下ガァァ――――ッ!!」

瞬間!!ドガァ!!と、その細身の少年が為せる技とは思えない

ような、半径４～５ｍ（メートル）は降らない巨大なクレーターを形成と同時に周りを揺さ振る地響きを立て、まるで白い弾丸の如くその黒服の男に襲いかかる！！

その大気すらも切り裂くように彼が用いる常識破りな能力『反射（ベクトル）』で彼の眼前に僅か数秒足らずで迫り、更に両手を伸ばし身体を捕らえ！！その指先が数ｍｍ（ミリ）でも触れ…自身の能力で彼の血液を瞬時に逆流！！

と、本来はその時点で勝負が着いた恥なのであるが！？

しかしっ！？

「ふっ……止まれっ！！」

「なンダァァ～！？」

「くッそっガァァッ！！何故だッ！！かッ身体がうごかねネェッ！！一体奴の能力はどうなっていやがるッ！！」

「ふふふ……はぁ～っ！！はぁはぁ――――…」

「クッ！！」

「言ったろ？何度やろうが我が魔術に屈する事になると……」

その白い髪の少年が奴の身体を瞬時に指先が触れる直前に同じく

彼も同時に懐から一枚のカードを取出し一声ポツリと呟き、

瞬間、まるで世界の刻が止まったかのように金縛りに掛り制止する少年っ!!

その彼も又本来はこの街の能力者達の頂点に位置する『ＬＥＶＥＬ５第一位』に君臨する最強の能力者の筈なのである!!

それ故にそんな何処の馬の骨か知れないような外側の人間にましてや敗北なんか許されない事なのだが、そんな自身のプライドをズタズタにされさらに嘲笑うそんな輩を睨みつけ、

クッ!!落ち着け…確かに奴の妙な能力は言葉一つで総て可能…しかしありえネェ…こんなヨォ～馬鹿馬鹿しい能力が在る訳無いデショウガァァッ!!

あのヤロ～の身なり…奴の…あのくそッタレみてェ～な服…しかも魔術だァァ～!?ありえネェ～しョォォ～…

ンなオカルトは常識的に存在しネェ～ンだヨォォ～…、チッ…何か秘密が…何か有るはず何だヨォ…ッツーか言葉??そうカッ!!何ンだ何ンだなんなんデスカァァ～??ンナ簡単な事じゃンかヨォ……奴はその一声で非現実を可能にする能力?…だッたらヨォ!!……ッツ……又……くそッ!!俺の…意識が……一度じゃ無く二度まで……も……

そして、そんな彼の魔術を撃ち破る可能性がある方法を見いだした彼…

一方通行なのであるが、又しても自身の意識が遠退き…地面に崩れる彼……

そんな遠のく意識の中…彼の口元はククッ！！と嘲笑うが如く不適な笑みを浮かべていたのである……

次に出逢った時を楽しみにしつつ……

――――――――……

――――――――……

――――――……

――……

――……

◇◆◇◆◇◆……

――あっ！！――

「おい…あっちに誰か倒れてないかっ？この近くの学生だな…」

「ああっ！！本当だっ！！」

「あの人…真っ白な髪…ねえ、上条さんっ！！この人？」

「ああ……きっと、奴に、あのレイって野郎にやられたんだぜ…くそっ！！後一歩…後少し俺達が来るのがはやかったらっ！！…にしてもコイツ……まっ！！まさかっ！？」

「ああ…かみやんもコイツの顔知ってるんかにゃ？
そう…彼は、『一方通行（いっぽうつうこう）』文字通り、学園都市最強のＬＥＶＥＬ５の一人だぜぃ、」

「ねぇ～…っとにもぅ～そんな名前とかより早くっ！！早くこの人を助けてあげなきゃダメでしょっ！？」

「ああっ悪い！！マリオン…つかおまえ治癒魔術使えんじゃ～…」

「んな事っ!!言われなくてもやってんでしょ?ほらっ!!ここは私が引き受けるからっ!!あなたたちは早く第二学区へ向かってっ!!!」

その彼女に後押しされるかのように渋々光雄が居る第二学区へ向かう当麻達なのである…

そして、彼女は自身の隣にそっと意識が無い彼を寝かせ、器用に常に持ち歩く青いバックから様々な道具を取出しつつあちこちに設置し…

彼に向かって杖を向け魔法陣を描き…蒼白い光が辺りを採らし、自身の身体に宿る精霊達に語り掛け何かを唱え初め、治癒の術を開始し始めたのである…

◆◇◆◇◆◇……

更に数分後…彼女の努力の甲斐もあり何とか意識が回復し始めた彼…

……――んあッ？、此処は？…そうか又奴にッ、ククッ…又負けたンかヨォ……ッたく笑えネェ～ヨ…最強ォォ……

そんな自分の片手を上に上げ…何とも切ない表情の彼……そんな彼を覗き混むような、綺麗な水色の髪の見知らぬ少女に気が付き…

「あン？……」

「あっ！！意識が戻ったみたいねっ！！良かった～…」

「おいッ…俺にナニをしたっ！！てメェ～…」

「まだ動いちゃだめっ！！」

「っつ！！」

そう…あれから奴に再びなにかしらの魔術をかけられ、自身の生命力を根こそぎ消耗し…危険だった状態の彼に、治癒術で回復させたマリオン、

その、以前にも似たような輩に助けられた事を思い出しつつ、上半身を起こしつつ目の前に座る少女を睨み付ける彼なのだが…

「んでっ！！はいこれっ！！」

「あンッ？？……おィ…これ？」

その彼に突然ある怪しげな物を隣側に置いてある彼女の青い大きなバックから取出しつつ手渡すのであるが??
それを自身の目の前に持って行き…瞬間彼の顔が冷や汗をかきつつ凍り付き?…(笑)

「アア〜?ハイポだァァ〜?」
と…?

「いいから早くの・み・な・さ・いっ!!」

とまぁ〜…その気迫に負けたのか「わァァ〜たよォォ〜飲みゃいいンでしョ〜がァ〜っ!!」
と…?一気にそんな怪しげな魔法アイテムを飲み干した彼……しかし…その後再び意識を失った事は、置いといてっ…(汗)

それから数分の後…完全に回復する彼……
しかしその彼女の理解不能な服装や装備に気付き、またしてもコイツも
先程の奴と同じく外部の人間かと思いつつ質問する彼なのだが?

「おィ……」

「おいじゃないよっ!!私はマリオン・オヴ・シュペーという名前があるんだからっ!!」

「ッツーか…俺はテメェ～の名前なんざ聞きたく…」

「名前……そっ！！あなたの名前はっ？？」

そんな彼の睨み付けるような目に対し、真っ直ぐに見つめる見知らぬ彼女の表情を眺めつつ…片手で頭をかきめしりながら、ため息を吐きつつ…コイツには心底かなわねぇーなと……

「一方通行…」

と……なにやらこそばゆいのか、外方を向きつつボソリとはき捨てる彼…そんな彼のまるで能力名そのままのような名に顎に手を当てつつ首を傾げ…それからニッコリと優しく微笑みつつ…

「んじゃこの出会いも何かの縁だしっ…これからもよろしくねっ！！一方通行さんっ！！」

こんなにも人見知り無くせっして来る馬鹿もいるもんだと目を見開き…驚く彼…そんな彼が反応する間もなく突然小走りで駆け出す彼女……そして未だに黙り込む彼に振り向きつつ…

「私っ！！早く行かなくちゃいけない用事があるからっ！！又今度

会ったら又よろしくねっ！！」

そんな言葉を最後に大きく手をふり…あっという間に小さくなる彼女……そして、

「マリオンか……不思議なヤロ～だったな？……チッ馬鹿馬鹿しィ…」

そんないつの間にかそんな彼女のペースにはまりふくよかな表情の自身にいい聞かせるように舌打ちし…

自身の腕時計を見つつ、とある場所に赴く為に逆方向に歩きだす彼…

そんな先程のあの彼女の笑顔を気にしつつ…今から行うであろう事に後ろめたい気持ちを押し殺し…

もう一度舌打ちをした…

又無理やりだが次回へ続く…

第七十三話　とある瓦礫の魔法大戦……――その２――……（後書き）

とまぁ～…今回は、ヒロインと一方君を出会わせたく書きました、

やはり学園都市最強の彼でも彼女にはなにかしら苦手のようですね…（汗）

んで

次回はいよいよ本来の展開に戻りますっ！！

そんな訳で

次回もお楽しみに…

第七十四話　とある瓦礫の魔法大戦……――その３――……（前書き）

さてさて、又々行きますこの魔法大戦シリーズ??

と?今回はいよいよ我等が主役、葛城光雄ＶＳ木山春生戦なのだが?はたしてどうなる事やら…（汗）

そんな訳でっ!!
今回もちと短いが
光速の超高密度収縮粒子砲戦記っ
始まり始まり～…

第七十四話　とある瓦礫の魔法大戦……――その3――……

午後の日差しが降り注ぐここ学園都市第二学区……その学区内を一直線に走る高速道路、
普段はこの時刻ならば周辺施設へと荷物を運ぶトラックや、その他の施設関係の車が行き交う騒音で喧しい筈が、

現在何処かしらの施設関係の都合なのか…全面通行禁止の為、そんな喧しい騒音所か、物音一つ無い、
そんな静寂ガ支配する中…ただ、周辺の施設内にある木々やその他に止まる、無数の蝉（せみ）の鳴き声だけが響き渡る……

そんな高速道路上に、突然その静寂を突き破るかのような閃光が幾つも走り……その数秒後…

ズドンッ！！…と、鈍い音源と同時に周りに地響きが、更に続け様に連続して起こる爆発！！
瞬間、『ギッ！！』
と？腹の底から断末魔のような叫びを残し…一斉に飛び立つ蝉達……

その砂誇りが立ち込める中をキラキラと光る光学系独自の輝きと共に二人のシルエットが互いに交じりあい火花を散らすように接触っ！！…
そして双方同時にそのままの勢いで交差し砂誇りから勢い良く離脱っ！！…更にお互いに一旦距離を取りつつ、相対するように光剣を手に持ち身構えるのである……

「うっそぉ～んっ…マジデスカ～??こ～の俺様と同じ攻撃方法ってぇ～?もぅ～しらないッ!!……」

「……ふふ…君は本当に面白いな葛城君?…しかし光学系能力ではこんな使い方もあるのかね?…これではまるでイン○ィニ?」

「ちょ?……ちょ――――っとっ!!ストップストォ――――ップっ!!」

「んっ??なんだね?私は素直に…」

「ハァッ…ハァッ……だっ??だから違うからねっ!!これは俺様が独学でつちかった方法だからねっ!!」

と?なんともかなりヤバイネタに両手をむけあたふたとストップをかける間抜けな彼…そんな彼の様子や先程からの態度にまたしてもなかったのか?顔を引く尽かせつつ粒子を加速させ上昇っ!!

「ふふふ?…」

と?笑い出す彼女…その彼女の様子になにやらかなり気にそぐわ

「ふっふっふ……だったらさぁ～…」

そんな一言を告げつつ右手を天高く掲げ…自身の手の平に能力を集中させ…

光の粒子の塊がグルグルと回転しながら…最初は小さく…

そしてそれは段々と彼の数倍…いや…数十倍もの巨大な粒子の塊に変貌!!

「ふっふっふっ……ささささぁ～て御立ち合い…この葛城光雄直々による『光学使い（プラトニックマスター）』たる数々の奥義??…

……ってエエエ――――――ッ!?」

「ちょ??……」

そんな大技を繰り出そうとする上空の彼に対し…右手を伸ばし、更に指先から赤い光の塊が輝くと同時に一筋のレーザービームが瞬間彼に向け撃ち込まれ…

只今彼自身が頭上に形成している巨大な光る球体に着弾!!更にそのまま球体を貫通し…

瞬間…ギョバッ!!と?鈍い音を立てつつ四散!?

「なっ!?…パルス…レーザーだとっ!?」

「なんだこんな物か…」

「にっ!?にゃぁ～におぅ～っ!!だったらっ!!」

と?なんとも本来光学系能力者の彼はそれなりに今まで培った技にこだわりがあるようで?

そんな必死になる彼の攻撃を尽く同系統らしからぬ能力を使用し打ち負かす春生……と?

今度はお互いに複数の光弾を形成し弾幕同士撃ち合いに?

そんな二人の砲撃戦で?第二学区の上空を鮮やかに一面を光のコントラストに変貌!!……

いや…これはこれで東○系ネタをわざと披露してるよーな……(汗)

とまぁ～その高速道路上でなにやらお互いに光学系能力同士でぶつかり合っているこの二人…

というかなにやらお互いに楽しんでいるような感じにも見えるなんとも周りからして見ればいい迷惑な二人でもある……(汗)

そんな様子をその向こう側から見つめる警備員(アンチスキル)達なのだが?

「あの～…黄泉川さんっ？？」

「えっ？何だ？あの学生のネタじゃん？」

「……（汗）」

「じゃ無くてっ！！あれっ！あれですよっ！！今の内にっ！！」

と？只今お互いに盛り上がりつつある能力バトル中の光雄達……その更に向こう側に先程春生が乗って来た青いスポーツカーが停車しているのであるが…

その車内に先程からの爆発やその他の余波を受けたのか…気を失っているみたいな一人の学生を確認し…今の内に助け出そうと…

「ああっ……了解したじゃんっ！！鉄装っ！！あの少年が木山春生を引き付けている、今の内に人質確保じゃんっ！！残りの者はその間に援護じゃん！！」

「「了解っ！！」」

「分かりましたっ！！」

と？先程まで二人の様子を見ていただけの警備員達（アンチスキル）が再び行動を開始するのを横目に…春生は…ふふっ…と、口元を歪ませながら…

「ふふふ……たしかに私達の隙をついての迅速な行動流石だな…しかし…」

と？そんな春生の様子にお構い無しにさっきから自身の事で必死に話し掛けてる光雄なのだが？

「って！？おいっ！！木山さん……っつーか聞いてる？？さっきから俺が言ってる事…実は聞いて無いでしょっ！！」

「ああ…すまんな、聞いてなかった…」

「……（汗）」

えっ？ええっ！？ズバリ即答デスカ？そうデスカっ！！あぁ～もうっ！！この俺様の能力をネタ扱いするわ馬鹿にするわ…

「あはっ？？……プッン！！」

そうかそうか……そこまで舐めきった態度……あ…あははははっ……

ダァァァ――――ッ!!あァ～もゥ～ッ!!『多重能力（マルチスキル）』だかなんだかしらねェェ～が…

この俺様をあまり舐めてるとォォ～……

禁断の”魔術”……唱えちゃうぞっ!!

と?なにやらかなり更に?ご機嫌がそぐわないのか?先程から舐められっぱなしのご様子な彼は?

とうとう堪忍袋が限界のようで??　自分の連れのマリオンに能力者相手に絶対使用禁止っ!!と?封じられてる自身の身に宿る別のチート能力に手を出そうと?顔を引く尽かせる彼!!……

というか、そんな様子もなんとも間抜けなのだが…（笑）

「って!?あのですねぇ～…木山さん?…これは忠告ですからねっ!?幾らアンタが多彩な能力を使えるからってさぁ～…あの……（汗）」

「って!?…」

「ふふ…悪いな…本当はもう少し君と遊んでいたかったんだがねぇ～……残念だが私には時間が無くて…」

と?そんなキョトンとする彼を含むその向こう側に飾利の乗る青いスポーツカーに近づく警備員(アンチスキル)達もろとも巻き込みながら…

今度は、彼女の翳した手から発する高周波で、高速道路ごと粉砕!!

「うっげぇぇぇ～!!そっそんな不意討ちっ!!卑怯者がぁぁぁ――――…」

と?光雄は、そんな意味不明な断末魔を最後に地面に向かってまっ逆さまに落ちて行ったのである?…(笑)

◇◆◇◆◇◆◇……

更に数分後…

先程光雄と春生で一戦交えたこの高速道路の真下付近に急停車した一台のタクシー！！

その車内から

「ありがとうっ！！お釣りは要らないからっ！！」

と？そんな言葉を後に慌てて飛び出す二人の学生達…そんな一人…黒子は、その変わり果てた高速道路を見上げ…凍り付く…

「お姉様っ…一体全体この有様は何ですのっ！？……」

「ええ…とても信じられないけど…まさか…あの木山さんが！？」

彼女達の目に入った変わり果てた道路…更になにかしらのとてつもない力が加わったのか…

まるで、爆撃機に襲われたような、市街地での戦場のような有様に…ただ、ボーゼンと立ち尽くす…

そんな黒子の肩をポン…て叩き…

「黒子っ！！早く初春さんをっ！！」

「わかりましたの…お姉様は？」

「うんっ…アイツを…木山さんを止めて来るっ」

その一言をかわきりにお互いに行動をし始める二人…

そして、美琴は…半分崩壊した高速道路に設置してある非常階段を渇いた音を立てつつ駆け上がり、その道路上で佇み…唖然とする…

「こ…これは一体なんなのよっ…」

その美琴の一言を背後で流しつつゆっくりとこちら側に振り向く春生……

「やあ……葛城君かと思ったが…なんだ君か…」

と…

その振り向いた彼女の顔の変貌ぶりに驚きながら美琴は？

「まさかっ!?これ全部アンタの仕業なの?……それにアンタ……」

更に自身に宿る電気を迸らせ、怒りが込み上げるが如く…
彼女の特徴のある肩までの茶髪も、そんな彼女の怒りと共にフワリ…と騒ぎ立て…バチバチと!!

「もしかして、先に来た筈の葛城も!?」

「……ふふふ…だとしたらどうするのだ?……」

「だったらねぇ～…アンタを倒してからゆっくりと聞くわよっ!!」

「ふふふっ…そうか……はたして一万の脳を滑る私に適うかな?」

正に一触即発な相対する二人…そしてっ!!周りを眩しく照らしながら彼女の電撃が大気を切り裂き光速で春生に襲いかかり!!

それを合図に、再び能力バトルの第二幕が開かれたっ!!

又々無理やりだが次回へ続くっ！！

第七十四話　とある瓦礫の魔法大戦……――その３――……（後書き）

と？いよいよおっぱじまった美琴ＶＳ春生、しかしその二人に乱戦するバカが？？

次回も引き続き

お楽しみに～…

第七十五話　とある瓦礫の魔法大戦……――その４――……（前書き）

さてさて…又々前回の続きだが？主人公達がいる場所とは正反対の地点からこの話は始まるっ！！

という訳でっ
光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！
始まり始まり～…

第七十五話　とある瓦礫の魔法大戦……――その４――……

……――召喚術式――……

その歴史は古く、数々の失われた禁断の魔術の一つでもある、――かつてそれは伝説上の様々な創造上の生物が口伝え…若しくは書物だけの存在なのだが、有名な『炎龍（ドラゴン）』やその他の『不死鳥（フェニックス）』や、かつて世界を恐怖に染め上げた数々の生物達……しかし、そのような生物が実在したのかと問えば…空想上の産物の一つになってしまうのだが……人々の歩んで来た歴史の中では少なからず目撃例もある事はたしかなのである…

そして、現代…学園都市の片隅で…その古（いにしえ）から伝われし禁断の封印を解こうとする輩が存在する――……

◇◆◇◆◇◆……

ここは、一件何の変哲も無い第二学区内のとある施設の廃墟…

ここもかつては様々な研究開発がなされていたようで、地上から約３０ｍ（メートル）にも達する巨大なビーカーを中心にした広場のような研究室に、

周りに同じく様々な調整層がズラリと並ぶ……

そう…かつてそこが生物学専門のバイオ研究施設であった証でもある……

その広場を抜け…更に先には、まるで巨人が使用するような巨大な扉が待ち構え、しかし…もう電力は既に止まっているみたいで動かない、開かずの扉でもある…

そんな施設の扉の前に小さく揺れる人影が近づき…　その近くで待ち構えていたのか、施設内の奥から顔をだすように黒服のシスターが現れ、　その人物に接触を測るように近づき……
その特長のある真っ赤な前髪を揺らしながら必死に身体を動かし話し掛けるのである…

「あっ！！やっと来ましたのね…もぅ～…遅いですよ～…アタイ待ちくたびれたからねっ！！」

そんな小さな身体を利用し、両手でその相対する男の礼服の裾を摘んで器用にグイグイと引っ張るシスター…
その相対するように佇む男も又、
そのシスターと同じく、全身緑色の何処かの礼服みたいな服装に身を包む…
背丈はそれ程高くなく、髪は金髪…更にその顔も頬は少しこけ…その細身の身体を包む礼服も少しダブついたような、
なんとも一件ぱっとしないような青年なのである…

「すまないですね……まぁ～そうあせらずとも、事前に連絡しましたよ…それに、あの警備員達（アンチスキル）、偽造パスポートかなんだかで喧しいから少々記憶を消させてもらいましたけど……」

「ふぅ～ん？アンタも随分と大胆な事をするね…」

「ふふふ……そんな怪しげな事言わないでくださいよ…もっとも私は、学園都市の警備網に覚られる事無く、ちゃんと平和的に赴いたのですから…」

「へ～？、そうなんだ、でも私と同じく不法侵入っつー事はたしかなんだけどね…まぁ～どっちにしろ目的はアンタも私と同じく、あの生意気な…」

「そうですね、かつての我々を裏切り禁断の魔術を復活させようと企む…
あの危険な錬金術師を消す目的は同じですが…
まぁ～私はついでに…少々気になる人物と接触するのもわざわざここに来た目的なんですがね～…」

「ネェネェ～それってさぁ～もしかして私やアニェーゼ様の知り合いのマリオンちゃんやレイヤー様…とか？たしかこの街に来ているみたいなんだけどなぁ～…」

「マリオンですか…たしかあのオスマンの親衛隊のシュペー家のアイツの娘でしたかな？まぁ～それも何かの縁ですかね…この街に居たとは…それよりも今は…」

そんな首を傾げ考え込む緑色の礼服の男…
その彼の目の前からその先にある巨大な扉の前まで駆け出しピョンピョン飛び跳ねるような仕草で指を差すシスター…

「はいっ！！ここ、ここの扉の先になにかあるっ！！と？アタイは睨んでいるんですが…ダイナマイトなんかあれば一頃なんだけど、ここには無いしなぁ～……どーやっても無理なのは分かっているんだけどね～…」

と、そんな巨大な重機でも持ち込まない限りは不可能な…そんな巨大な扉を開けてくれとせがむシスターなのだが……

そんな彼女に対し…やれやれといった感じでその扉の前に佇み…そっと右手を翳しその手の平にはなにかしらの白い小麦粉のような物が収縮され…それが段々と何かしらの巨大なある物が形成される！！

『……――優先する、その扉を下位に――小麦粉を上位に――…』

その言葉と同時に右手を斜め上から凪ぎ払う……
瞬間！！メキメキッ！！…と５～６ｍ（メートル）位の巨大な”白い刃”が大

気を無理矢理その質量で押し切りその巨大な鉄の扉がまるで紙切れのように破片を撒き散らし粉砕!!

周りに轟ッ!!と凄まじい風圧と砂煙が立ち込める……

正に彼が解き放った常識破りな魔術は、巨大なるギロチンその物なのである!!

「さあ、ダイナマイトよりも簡単でしょ?」

「ふえぇ~…分かっているけど…アンタそれやりすぎじゃないの?」

「そうですか?しかしこの技も手加減するの大変なんですよ…」

と?そんな会話をしつつシスター達は、先程彼の魔術で粉々になった扉の残骸を踏み越え内部に侵入するのであった……

◆◇◆◇◆……

一方その巨大施設の廃墟の外側では?、既に活動停止してから長いのか、周りは錆で真っ赤に染まり、更に遥か上まである巨大なレ

ール式クレーンや、
それを取り囲むかのような高い壁に囲まれた場所に響き渡る少女の声…

「第９９６４回実験開始まで、まだ１５分間ありますが…又考え事ですか？…と、ミサカは最近のあなたの様子に疑問を投げ掛け…」

「…――セーヨ……」

「はいっ？今あなたの思考回路を分析した結果……いまの発言はいささ……」

「うッせ――ッてんだロゥッ！！この人形風情がァァッ！！」

「えっ？？……」

「チッ……」

ったくョ～…なんだッてんだ……この苛立ちみたいな感覚はョ～……先程のあのヤロウと言いこの何ともザラつく嫌な感覚……気のせいなんか？

それにアイツのあのクソッタレ魔法使いのヤロウにも似た…この圧迫感……チッ……馬鹿馬鹿しッ…

「えっ？ええっ！？間もなく実験開始ですが、一体何処へ行くので

すか?と、ミサカはそんなあなたの軽率な行動を指摘します…あなたはこの実験の意味が?……」

「ああ……悪りィ～な…ちとシラケちッたわ……」

と?第二学区内のこのとある研究施設の廃墟を睨みつけながら白髪の少年は、捨て台詞を言いつつ…その場を後にする、

只今から行われる学園都市の最重要実験を前にして… 自身の苛立ち…それに胸騒ぎと、今までの人生の中で全く経験していない、この”焦り”という感情から来る衝動が支配し、その少年を駆り立てる……

そして、再び歩きだす少年……今の彼にとっての壁になるあの憎っくき魔術師と、因縁の決着を付ける為に…更に何かしらの気配をその向こう側の廃墟の暗闇に潜むナニカを確かめる為に……

「ったクョ～……もしあのクソッタレヤロウだとしたら借りはキッチリ代えさせて貰うからなァァ～…」

しかし…突然彼の目の前に現れたのは、その彼の思考とは全然違う人物達が現れ…

「あン？……オイオイ…誰かと思えば又々よそ者ッてかァァ～？」

「おやおや？…この私達の人払いの術式に引っ掛かるとは、そこの少年…君はたしか？……」

「んだァァ～？このバカみてェ～な三下はヨゥ～…」

「ふふふ……言ってくれますね…私は三下と言う名前では無く…」

「…――『神の右席』…とでも名乗りましょうかねぇ～」

正に…前回の謎の錬金術師に引き続き、最悪の魔術師が今正に学園都市最強を誇る彼と対峙する！！

正に一触即発…果たして、そんな彼はこの最大の危機からどう展開するのか！！

◇◆◇◆◇◆◇……

そして、そんな頃ここは、未だ戦場と化す学園都市、第二学区を通る高速道路前……

その向こう側まで続く幹線道路のアスファルトをガリガリと引き裂きながら路面を削り、巻き上げられた破片が宙を舞いながら一人の学生に差し迫り、それをワンシテップでいとも簡単に回避!!

「ふっ!!噂に聞いていたけれど、アンタのその『多重能力(マルチスキル)』、本物みたいねっ!!」

更にそのままの回避軌道のまま、その学生も相対する人物に右手を伸ばし、その指先から電気を発生!!

あっという間に空を切り裂き紫電がその人物に光速で捉え!!

そして、ズドンッ…!!とまるで落雷の直撃を受けたのかのような大音量がその静寂な空間に響き渡る!!

「ふふ…その寸分狂わぬ電撃…流石だな、先程の少年とは大違いか…」

「なっ!?効いてないって?うそっ!?」

その解き放った電撃をいとも簡単に何かしらのフィールドを展開…それに着弾した電撃は無惨にも四散する…

更に彼女は、美琴に対し右手をかざしつつ彼女の手から発っせられる音波攻撃で…美琴の周りの路面が粉々に粉砕され…更に地響きと同時に高速道路事ヒビが！！

「えっ？ちちちょっと！？」

しかし？そんな時周りに降りしきる光りの粒子に気付く春生…

「ふっ…ようやく戻って来たか…まったくたいした演出だよ君は…」

と！？その春生が見上げる中ゆっくりとその上空に浮遊する彼……

「えっ？アイツ…まさか！？」

美琴もそんな春生の様子に気付き同じく真上を仰ぎ…

「ふふふ……さぁ～…さっきの仕返しと行こうじゃないかっ！！木山さんっ！！」

と！？正にその相対する二人の間にさっそうと復活を遂げた彼…

光雄なのだが？

「ふふふ…それにしても君はまったく面白いな…そのコスプレ、一体いつ着替えたのかね？」

「へっ？？」

「ハァ――――…にしてもアンタのその格好……一体何のゲームキャラなのよっ！！……もしかしてF〇とか？」

「って！？ななな……っつーか御坂さんまで…（汗）」

と！？ヤハリいくら頑張って演出しても格好がつかないこの主役って…（汗）

更に…又々無理やりだが次回へつづくっ！！

第七十五話　とある瓦礫の魔法大戦……――その４――……（後書き）

いやいや…この緑色の礼服の男は皆さん知ってる通り『左方のテッラ』様ですよね…

この彼との絡みは以前から出したかったのでやっと念願叶いですっ！！

あとはどうやって主役との絡みに持って行くか？ですが…ちょっちやりすぎて一方君に絡めてしまい…（汗）多分彼…一方君に！？

まっ？まぁ～…それは置いといて、次回っ！！主役と春生バトル再開と…ヒロイン達御一行と黒子…そしてっ！！あの謎の錬金術師の絡みまで行きたいですね…

という訳で

次回もお楽しみに～

第七十六話　とある瓦礫の魔法大戦……――その5――……（前書き）

さぁ～て…お待たせしましたこの魔法大戦シリーズ！！
今回はいよいよ主人公達と合流を果たすヒロイン…しかしそんな感動の再開どころか意外な展開にっ！！

てな訳で
光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ！！
始まり始まり～っ

第七十六話　とある瓦礫の魔法大戦……――その5――…

只今光雄達が”てんやわんや？”大騒ぎになっている第二学区の高速道路前へゾロゾロと向かっているこの怪しげなパーティー…

本来は勇者？筆頭に剣士→僧侶→魔法使いと？バランス良くまとめあげるはずなのだが？

このメンバー…勇者らしからぬ当麻筆頭に？全員魔法使い？…もといっ！！ステイルを含む全部魔術師と？かなり異質なメンバーなのである…というか剣士いねーし…

そんな中、先程から一人携帯を開き、その液晶画面に映る地図と睨めっこしながら歩く土御門元春なのだが？

「おかしいにゃ～…えぇ～とっ…たしかここの道順で大丈夫だと思うんだが…」

「なあ…人の物そんなに勝手にいじって良いんか？、…後でアイツの水弾食らうのはごめんだからな～…」

と、そんな携帯と睨み合う元春の真後ろから、ぬっ？と、その特徴的なツンツン頭を除かせ彼にそんな意味ありげな事を話し掛ける当麻なのだが？

その彼のセリフに反応したのか？口元をニヤケさせつつ、振り向き？

「ほぅ～？？流石（さっすが）かみやん…もう既にマリオンちゃんからの熱～い調教受けてるんですかいっ？…」

「って!?違うっつーのっ!!だから俺は……って!?」

「ほぅ～ほぅ～…コイツが気になると?まぁ～もっともぉ～??この携帯を預けてそれを頼りに向かってくれっつー事を言ったのは彼女だしにゃ～……それともかみやん?……惚れたんかにゃ?」

「うぐぅっ!?んなわけねぇーだろーがぁっ!!」

と?なにやら妙な事態になりつつあるこの怪しげな野郎共に、そそくさと息をきらして足速に近づく人物が到着したのであるが?

そんな事にも気が付かずに未だに口論中の彼等

そんな彼等の様子を可愛らしく子首をかしげつつ様子を伺うマリオン…(汗)

「おいっ!!君達はそんなにアイツの連れを奪いたいのかな?そんな人の彼女を乗っ取るなんてこの僕は…」

「「って!?違うだろがぁぁっ!!」」

「ったく!!うるせいぞおまえらっ!!」

「青髪ピアスじゃ～あ、あるまいし、上条さんは人様の彼女を奪う真似はしね～っつぅのっ!ましてやセクシーな寮監さんならまだしも、あんな”ペチャパイ”ロリボディー”しかもまだ”ガキ”じゃね～かっ!?……」

しかし？なにやら元春達に指を勢い良く差しつつ妙な説教をしだす当麻…その背後に近づく、とても恐ろし～い影に気付き冷や汗をかきつつ当麻だけ残し…後退りしはじめる元春達？…そしてっ！！背後の気配に気付き？まるでカラクリ人形の如くゆっくりと振り向いた当麻の形相は硬直するっ！？（笑）

「えっ？……えぇ～と…」

「うんっ…さっき追い付いたっ！！……んで？なになにっ！？”ペチャパイ”や”ロリ”がなんたらてっ？……へ～え？いったい誰の事を言ってるのかにゃ～？」

「「――――うぐぅっ！？」」

「えっ？えぇ～と……あ…あの～さっしの事をお聞きしますが…マリオン様っ？その魔法陣は一体？」

「ねえ知ってる？上条さん、光雄もそうなんだけどさぁ～…この私をロリ扱いした者達の悲惨な末路を…あのアホ作者ですら知ってるよっ！！……うふふ？」

と？一体なにに反応したのか！？ニッコリと可愛らしい笑顔だが、顔を引く尽かせつつ目を座らせる恐ろし～い魔女のような形相の彼

女…（笑）

「ううわっ！？ちと待て待て当麻じゃなく何で俺達まで？」

と？なにやら必死になる元春達を含む野郎共に杖を向けつつ彼女はっ！？

「ふふ？……問答無用っ！！クタバレやゴラァァァッ！！」

そして、第二学区の街並みから妙な効果音＆「不幸だぁぁぁ！！…」、と？そんな彼等の悲痛な叫びがこだましたのであった…（笑）

◆◇◆◇◆◇◆……

一方、その彼等の目的地でもある第二学区内を一直線に結ぶ高速道路では？

周りに散らばるゴミやコンクリートの破片が、何者かの高圧電気により大気ごと巻き上げられ宙を舞う…　それを眩ゆく周りを照らしながら相対するように佇む春生目がけ更に襲いかかる美琴の電撃

の槍!!

それを再び自身の身体から発する電磁フィールドでいとも簡単に防ぐ春生!!

「まったく無駄だというのに、往生際が悪いな…」

「なっ!!なにおぅ〜!!…」

そんな二人は只今空中に停滞する光雄なんか上の空みたいで…（汗）

「なぁ……おぉ〜いっ…」

くっそぉ――――…さっきは皆俺様の存在に気付いたくせにまたもや無視ですかっ…しかも俺空気だし…居ても意味ね――しっ!!

別にあの二人は俺が知ってるあの原作通りにバトルしてくれてんのは良いんだが…

と?そんな事を思いつつ周りを見渡す光雄の目に映ったのは…

「あっちに木山さん達…っつー事は?えっ?あの青い車に……白井さんがテレポで近づいて?まさかっ!!初春さんっ!!

そして、只今お互いに一歩も引かず、更に盛り上がってる美琴達を横目に飾利の元へ、上空から急接近をかける光雄…そしてっ！！

◆◇◆◇◆◇……

更に数分後…光雄は、黒子達が居る高速道路上に両足を着け…黒子は、そんな突然に空から舞い降りた光雄に気付き…

「へっ？？葛城？無事でしたの？」

その光雄に向かい、歩み寄りつつ口を開く黒子…
その黒子に光雄は…

「ああ…なんとかな～…所で白井さん、初春さんは？」

「ええ、なんとか、…それにあなたっ！！その格好…またですの？」

と？そんな彼に顔を近付け、その魔法剣士みたいなＲＰＧチックな妙な姿をじろじろと？又コスプレかっ？みたいな口調で指摘する黒子なのだが？

「ああ…まぁ～詳しい話は後でするっ！！所で、彼女……」

と？なにやらそんな自身の姿を言われたのだが、何げにスルーする光雄……というか、わざとその事をごまかしてるよーな（汗）

「ええ…まぁ～少し気絶をしてるみたいですが、初春もいちよう風紀委員（ジャッチメント）ですし…ある程度の訓練は受けていますわ…だから大丈夫だと思いますの」

「ああ……」

そして、その場で黒子が車内から、無事に助け出し…正に？正義のヒーローの如く光雄が彼女を抱き抱え、

ゆっくりと安全な場所に向かうのである

更に…優しくその他の警備員（アンチスキル）達が用意した、マットに寝かせつつ彼女に話し掛ける光雄…

「なあ…初春さん……」

と？

正にそんな彼の声に気付き、そっと目を開く飾利…

……――――――――

「――ここは？……そうだっ！！わたしっ！？……えっ？」

「――かっ！？……葛城…さん？」

「ああ…もう大丈夫だ…だから安心してゆっくり休みたまえ……キリッ」

――そう、そんな飾利のうっすらとした目に映ったのはっ？正しく――――

俺っ！！かなりカッチョェェかもっ！！……更にキリリッ！！

と？

まるでいかにも（バカ？）みたいな…（汗）
その彼のあまりにもわざとらしい演出で冷や汗をかきつつ超顔を引く尽かせる黒子達を無視しつつ…
そんな彼の自称カッチョェェ表情は正に劇画タッチなのだが！？

…（笑）

――――――――――…

――――――……

ヒーローの条件っ！！

その1――カッチョ良く参上っ！！
（注：かっこ恥ずかしい？決めポーズは必見っ！！）

その2――決めセリフッ！！
（注：どんなスーパーヒーローでも最初が肝心っ！！）

その3――ヒロインのピンチにゃ～颯爽と駆けつけるっ！！
（注：これが肝心っ！！）

その4――誰にで……もうぎゃぁぁぁぁっ！？（注：なにやら謎の攻撃にさらされてるっ！？）

「……ったく何時までやらかしてんじゃぁゴラァァァ――ッ！！」

「うぐふぅ――……（涙）」

「……（汗）」
（注：何故か冷や汗をかく初春さんっ！？（笑））

「っとにもぅ～…こら光雄っ！！」

「いぎっ！？……って！？まさかおまえっ！！」

と？得意の自己妄想中の彼を半強制的に現実に引き戻した彼女…
そんな彼女の元気な姿を見上げる光雄…
更に彼女…マリオンは相対するように座りつつポカーンと見つめる彼に…片手を腰にやりつつ自身の水色の髪をフワリ…とかきあげ

ニッカリと微笑む…そして…

「――――待たせたねっ！！み・つ・えっ！！」

「まさかっ！？嘘だろ？だっておま？」

そんなワナワナと指を差す彼の手をそっと掴み…そのままグイッ…と立ち上がらせ、

「所でマリオン？無事だったらなんで連絡？…」

「詳しい話しは後でっ！！それより…」

「ああ…光雄っ！！」

「へっ？？……かっ上条さん？」

「そっ、ここにおまえがやらかした魔力をサーチして来る良からぬ奴が居るっつー訳だにゃ？なぁ～ステイル君っ！？」

「そうだな……まぁ～君の連れをここまで連れて来たのは理由があ

ってなっ…」

「えええっ!?土御門さんにステイルさんまでも?おまえ等一体」

その信じられないような表情で見つめる彼…その自分自身が培った別の力…魔力が原因で此方に赴く輩が居ると?

更に、マリオンは光雄の隣側で未だに混乱しているような素振りで佇む黒子に顔を向け、状況が緊迫しているのか、かなり真剣な表情で口を開き、

「あのっ…白井さんっ!!」

「……えっ?なんですの??しかもあなた…ついさっきまで植物状態じゃ?」

「それは、ううんっ!!詳しい事は後っ!!とにかく此処は危険なのっ!!だから彼方で戦ってるお方と御坂さんっ!!それに警備員(アンチスキル)の方々にもここから早く避難させるように言って頂戴っ!!」

と、そんな目を見開きワナワナとする黒子に踵を返すような素振りで全員避難しろと……

「いや…でも今一番危険なアイツとお姉様は戦ってらっしゃると思うんですけれど…」

更にこの状態に混乱しているのか、何で突然やってきたコイツ等は、こんな事を言いだすかと?

そんな黒子に当麻は?

「ああ～もう…だったらビリビリの所に俺が向かうっ!!だから光雄っ!!」

「ふえっ!?俺っ?俺かっ??」

「おまえは俺が行く間、あの高速の上に居る警備員(アンチスキル)達を説得してくれっ!!頼むっ!!もう時間があまり無いんだっ!!」

と?先程から黒子と一緒にキョトン…としている光雄に頼み込む当麻…

「ああ…なんだか知らないが普通な状況じゃあ無い事位はわかるよっ!!」

そして、光雄は高速道路上に展開する警備員（アンチスキル）達を避難させる為…
そして当麻は只今戦闘中の美琴達を説得する為に同時に駆け出すのである…

◆◇◆◇◆◇……

一方そんな状況になっている第二学区の高速道路から更に反対側に位置するとある巨大な生物学研究所後地では……

グワンッ！！と周りを揺さ振る大音量が周りにこだまし…
その彼の能力で自身の周りの鉄骨をひと蹴りで空高く持ち上げ、そのまま自由落下する鉄骨を軽くコヅキ…グワッ！！と、まるでミサイルの如く相対する男に音速で襲いかかるっ！！

それを何も構える事も無く余裕な表情で一言ポツリ…と唱え…

『……――優先する…鉄骨は下位に――人間は上位に…』

その一言でその男を捉えていた鉄骨達はまるで生き物の如く、グ

ワッ…とその男を避けるように軌道を反れ…
男の立ち位置から遥か後方で次々に着弾っ!!その背後から来る爆風だけがその男の緑色の礼服をバタバタとなびかせる!!

「なッ!?バカなッ!!ありえネェェッ!!」

「ふふふ…そうカッカするものでは無いですよ?少年…戦う相手を見破れ無いままそんなに血気盛んですと…」

「…ふふっ…命を落としますよ……」

「チッ……あのクソッタレカメレオンヤロウ〜…一体なにをしやがった…これも奴の能力ッて奴か……」

更に…身構える彼に向かい…不適な笑顔で嘲笑いながら片手を真上にかざし…

「まったく…そんな敵意剥き出しで、聞き分けの無い少年ですね…でしたら少々脅かしてあげましょうかねぇ〜…」

更に?そんな事を言いつつ彼が上げた手の周りにみるみる内に白い粉が収縮されて行き……

チッ！！来るかッ！！奴も同じくなんか怪しげなトリックを使いやがるッ！！
いや…でもヨゥ～…あのクソッタレ魔法使いもそうだが…
あの手のヤロウ等は能力が発動する前にサイクルタイムが有りやがル……
だッたらッ！！その一瞬にかけてみるしかネェーか……

そんな身構える一方通行に小麦粉が収縮されている手をかざし…
容赦無い一言を唱え…

『…――優先する、人間が下位に――小麦粉が上位に…』

その瞬間を狙っていたのか、彼も同時に演算を開始！！彼の佇む周りの地面を一瞬で巨大なクレーターを造り上げ、ドンッ！！とまるで撃ち出された主砲弾の如く瞬時に飛び出し…その彼が先程まで佇んでいた場所を…白い巨大なギロチンが四方から襲いかかり…それらが対象物を失い空を切り裂く！！

「なっ！！一瞬でっ！？バカなっ！！」

「気付くのが遅いッてんダァァァ！！」

更に奴の懐に飛び込んだ一方通行っ！！それに身構える事無く仰け反るテッラに向け…目一杯に振り込みつつ自身の拳を奴の顔面にクリティカルヒットさせっ！！その彼の能力『反射操作（ベクトル）』も相まって…まるで巨大な重機にでも殴られたかの用に飛ばさた奴の身体は無惨にも建物の窓を突き破り！！内部からグワッ！！と凄まじい音が！！

そう…一方通行は正に、目の前に立ちはだかる最強を誇る魔術師を打ち倒したのであるっ！！

「や……やッたのか？…ケッ！！ったくヨゥ～…奴等の弱点さえ知ッちまえばヨゥ～…たいした事ネェ～じゃネェェか…」

「チッ……待ッていろよ？あのクソッタレ魔法使いヤロウ～…今度はこの俺がテメェ～をぶちのめしてヤッカラヨゥ～……」

「さすがですね…と…ミサカは、そんなあなたの強さを改めて…」

「あン？…おまえ…まだ居たのかよ…」

「あの～……それでは少々時間のズレが生じましたが再開しま？…」

「ああン？……クソ詰まんネェ～…シラケちまッたろガァ…」

「でも少々予定はズレますけど再開…」

「ああ…また今度なァ～…」

そんな一言を告げつつ先程物影から見つめていたミサカを無視しつつ建造物の闇に隠れるように消えていった……

◇◆◇◆◇◆……

…――――ねぇっ――…

「ねぇ～…大丈夫？」

「――――ふふふ…」

「まったくアンタも無茶するから…んで？アイツ…なんか収穫あったの？」

「ああ収穫ですか……しかし以外でしたね、この私とした事が…」

そんな事を言いつつガラガラと、先程の衝撃で瓦礫と化した、研究所の一室から立ち上がり身体に付いた埃を器用に叩くテッラ…

「さてと…余計な寄り道をしてしまいましたね…まぁ…そんな事より」

「うんっ！！この廃棄に残されたデータを収集…これで奴の目的は…」

「ふふ……やはり彼は学園都市であの獰猛な招かざる物を召喚するつもりですね…」

「まぁ…それもそれでこの私の楽しみが増えるという物ですよ……それでは…行きましょうかねぇ～…」

「まさかアンタ…奴の召喚した”アレ”と殺り合うとか？」

「ふふふ……さてね……」

と?そんな何とも楽しげな表情でそんな一言を呟きながら、テッラ達も光雄達が居るあの高速道路前に向かうのであった…

又々無理矢理だが
次回へ続くっ!!

第七十六話　とある瓦礫の魔法大戦……――その5――……（後書き）

いやいや…何かあっという間にあの強敵テッラ様をのしちゃった一方君っ！！
これで彼の登場は…あの妹編まで行かないと出ないっつー事で……
というか…そこまで続くんか？この作品…

んでっ！！次回はいよいよあの謎の錬金術師と主人公達との絡みですねっ！！……えっ？木山さんはって！？もちろん彼女もそしてあの怪獣も？しかも怪獣ＶＳドラ？いやいや……（汗）

そんな訳でまたしても話しがデカクなりつつあるが…（汗）

次回もお楽しみに～…（汗）

第七十七話　とある瓦礫の魔法大戦……――その６――……（前書き）

さてさて、お待たせしました、まだまだ続くこのシリーズ……っつーか一体いつまでっ!?という突っ込みは置いといてっ!!

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ!!

始まり始まり～っ…

第七十七話　とある瓦礫の魔法大戦……――その６――……

……――ここは未だ様々な思惑が交差する戦場の真っ只中の第二学区内の高速道路前……

そこから遥か数ｋｍ（キロメートル）彼方から此方に向かう人物が一人居るのである……

真夏の太陽が、アスファルトに降り注ぎ、その熱量で出来上がった蜃気楼…

更にゆらゆらと、大気が歪む中を、季節外れも度がすぎるみたいな漆黒のマントに身を包み…

その男の目線の遥か先にある、ナニカのチカラに導かれるかのように…

そんな人物と、まるで何処かで繋がっているのか……お互いに、引かれ合うように、彼はその地点まで誘うのである！！

「遂に…遂に見付けたぞ、…このチカラの源……この世界…いやもっと大きなとてつもない内なるチカラをこの距離からもひしひしと感じるっ！！その者が持つ魔力の源…魔法石（マジックストリングス）その身に宿す者！！その者の身体から魔力を総て抉り出し我が頂くとしようぞっ！！ふはは…これで条件は整った……ふっふっ…はぁーっはっはっは――……」

そう…彼は嘲笑う、かつて古(いにしえ)から世界に数百の災いをもたらしたと伝えられるあの禁断の術式を発動させ、

更に彼が用いる深紅のクリスタルと瓜二つの蒼く輝くクリスタル『アクエリアスの涙』と『天使の雫』を奪い3つのクリスタルを本来の1つの形に戻し…

かつてローマと、この世界を二分し支配した最悪の強大国家オスマンを再びこの世界に君臨せしめる為に…

そんな計り知れない野望を抱き…彼は――――……

――――――――……

◆◇◆◇◆◇……

――――――――……

一方そんな差し迫る謎の黒服の男の行動に、いち早く察知し、
その彼の最終目的地でもあるここ第二学区…高速道路前、
そう、この地には、光雄を筆頭にマリオンと、
現、”魔法石を宿す後継者”が二人も揃い、
尚且つ風水的にあらゆる地脈、さらに霊魂が集まるポケットでもある霊脈と、偶然にもその彼が望む絶好の条件が総て整っているのである！！
しかし…風水的に詳しい元春を覗いて…光雄や当麻達は、未だそんな事態になっている事も知らないのである…

そして、そんな中、元春の考えのもと、
マリオンの指示により光雄は高速道路の上の路面上に展開する警備員達（アンチスキル）をある霊脈が集中しない安全地帯に避難誘導をしに…
更に、当麻もその光雄が向かう高速道路の真下に対峙する春生と美琴を説得…警備員達（アンチスキル）と同じく霊脈外に誘導避難させる為に動くのであった……

そして……光雄は又もや上空から飛来する…
しかもその彼の本来魔術師と対峙する時に用いる、『対魔法防御用装備の霊装』に身を包む姿に、気付きつつ指を差しながらなにやら叫ぶメガネっ子？……もといっ！！鉄装綴里（てっそうつづり）なのであるが？

「えっ！！えええ――――っ！？あなたもしかしてっ！？」

「へっ？？……つか又々コスプレとか言うんじゃねぇ～だろ～な～……」

てな感じで、

「またかぁ～っ！？」

と？ため息まじりの彼に向かい更に突っ込みを入れる綴里筆頭に、そんなピョンピョン跳ねながら指を差し叫ぶ…そんな彼女に反応してか、警備員（アンチスキル）のメンバーも？…

「うおっ！？アイツ…まさかっ！？」

とか？

「なぬっ！！あの少年っ！！…今度はあんな姿で一体何をおっぱじめるつもりかっ！？」

みたいな？全員でそんな彼に騒ぎ立てるような始末……（汗）

と？ヤハリそんな彼女の件一声で、いきなりガヤガヤと騒がれるのは流石の彼も恥ずかしいのか、

「へっ??…なっ!!…俺何かしたかぁ～!?」

とまぁ～…空中で器用にも瞬時に仰け反り身構えるのだが?そんな彼に更に留めの一言を言い放つ綴里……（笑）

「あなたもしかしてっ!!イー○のア○ル様っ!?それとも魔法剣士っつー事はF○の赤魔導士や青魔導士……とか??」

「……いや…あのねぇ～…今それを言いに来たんじゃなくて（汗）…」

とまぁ～…そんないきなり彼が一番気にしていそうな一撃を加える彼女……と言うか、流石元ゲーマーだけあって痛い所をつつくのだが…（汗）

「ええ～っ!?それっ!!一体何処で手に入れたのっ!?あっ!?……ごめん…もしかして言いにい?…もし言いにくかったら別に良いよ…お姉さん、子萌先生には内緒にしとくから…」

「いや…だから…そ…そうじゃあ無くてですねぇ～……」

そんな彼女の突っ込みに耐えながらも必死に説得に持って行こうと空中で必死に両手を振りながら訴える彼なのだが??　一度そんな突っ込みに火が点いた彼女達にはいくら理由を並べ言い聞かせたとしてもなにやら焼け石に水のようで?

っつーか全然聞いてねぇーし……（汗）

うっはぁぁ～…そうですか…やっぱそう突っ込んで来るんすよね～……あはは（涙）…

分かっているとはいえ…この俺様の霊装…うへ??……

ダァァァァァ――っ!!…あぁ――くそぅっ!!なんでいつも俺様の姿はこんなネタばかりなんだぁぁぁっ!!　これもやはり原因はあんの”アホ”かっ!?ヤッパあの”アホ作者”の仕業かっ!?

普段から胡散臭いと思っていたんだよっ!!そんな自身がいくらゲーマーやアニオタだからってっ!!ましてやこの”アホ奴”のクソつまんネェェ――こんな作品を盛り上げる為の只のネタに過ぎない事くらいっ!!

しかも最近この番組が人気ガタ落ちっつー事もっ!!それにっ……

「ふえっ?マリオンさ!?」

「ヒィッ!?」

「ふふっ??みぃぃぃ――――つぅぅ――――えぇっ!!久しぶりねぇぇ……アンタがその決して”触れて”はいけない内容に”触れて”しまったのは……うふふ??」

「って!?のわっ!!つかなんでマリオン!?おまっ!!いくらなんでもこの距離を瞬時にテレポ―?? 」

そう…彼は忘れていた……その”番組を?”とか?”作者の内部事情っ!?”やらに迂闊に触れた時にゃ～とても理解不能な状況になりうる事態を??

「って!?うわわっ!!バカやめｗｗ!?」

とまぁ～…またしてもそんな恐ろし～い事態に遭遇しつつもうけっしてこのようなヤバイネタに触れてはいけない事を胸に?彼の意識は遠退いて行ったのであるっ!!（笑）

◆◇◆◇◆◇……

さっ……更に数分後っ！！

「うえっ？？……わわわっ！！私何で？一体どおしたのっ！？」

「いや…マリオン…もう何も考えるな……もうどーでも良いから…
…俺疲れたから…だから…（涙）」

と？そんな光雄の姿にかなりどぎまぎしてる、マリオンなのだが？その彼女が今現在彼の近くに居る事事態の突っ込みは置いといてっ！！その場にいる彼女に警備員（アンチスキル）達の説得を頼み込み……
一番気になる当麻達の元へそそくさと向かう光雄なのであった…（汗）

◇◆◇◆◇◆……

一方その頃、光雄達がいる高速道路上からその真下では？？

先程までの賑やかさから一辺し、再び静けさが支配する高速道路真下…

しかし、先程までの凄まじい春生と当麻との激しい攻防後なのか、更に高速道路は無惨にもその一部だけを残し、瓦礫と化しているのである、

その高速の巨大な柱だけ残し一部が完全に倒壊し、そこから中身の鉄骨が剥き出し更にへしゃげ、その真下に散らばる瓦礫の山を挟み更に相対するように対峙する木山春生と上条当麻、

その彼等の後方に御坂美琴がそんな二人の様子を伺いつつ佇むのである…

「何で?どうしてそんな事を!?」

「ふふふ…さっきも言ったようにあの実験…あれさえ無ければあの子達は…私はあんな降らない実験の為に…」

「そうか…おまえの言いたい事はわかるよ、さっきも言ってたよな…その『暴走能力の法則解折用誘爆実験』…だっけか?」

その当麻の質問に先程までの自身の連続能力使用なのか、

片手で頭を押さえ…その目は真っ赤に充血し…

肩で息をきらしつつなおも何とかもう片方の手で柱を押さえ辛うじて立っている春生…
そしてそんな春生が口を開き…

「そうだ…能力者のＡＩＭ拡散力場を刺激し、その暴走の条件を探る為の実験だ…」

その彼女の先程からの説明を聞き、更に両腕の拳をギリリと強く握りしめる当麻…
更にその彼女と当麻の会話を聞き…美琴も口を開き…

「そんな事の為に…だとしたら何で！！それこそ、警備員（アンチスキル）やその他の裁判所とかに訴えれば…」

と、先程からかなり気が動転しているのか…震える声で彼女に質問するのだが…

「そう…あの実験の悲劇から目を覚まさないあの子達の回復手段を探るため、そしてっ！！その実験の最中に突然に起きたあの飛散な事故を究明する為に
『樹形図の設計者（ツリーダイヤグラム）』の使用許可を申し立てしたが、既に謎の現象で消滅しているのだよ…」

そんな事をはき捨てるように言い放つ春生…更に…

「それに、その実験に加担した者達も…やはり統括理事会がグルなんだ…いくら訴えようが意味は無い…」

そんなかなり卑屈な表情で総て目の前に佇む当麻達に言い切る春生……

そのなんとも、藻掻(もが)けば藻掻(もが)く程、同省(どうしょう)もない

そんな彼女の態度はもはやその相対するように佇む当麻に突き刺さるように…そして…それを総て受け取りながらも毅然とした態度の当麻は…

「そうかよ…でも…でもよっ!!おまえが今やろうとしている事もおかしいだろっ?だからさ…」

「少年っ!!君に…君に何が分かるっ!!」

そんな当麻の説得を聞き流すように彼女の周りに再び能力による渦が巻き起こり…その渦が更に加速して行く…

そんな彼女の態度に強く拳を握りしめ未だに動こうとしない当麻…その当麻に向かい突然襲いかかる春生!!…

しかしその攻撃もやはり右手を凪ぎ払う彼にあっさりと打ち消され!!

更に必死に…そんな自身に貸せられた運命を凪ぎ払うが如く必死に叫ぶ春生!!

「どけっ！！少年っ！！あんな悲劇は二度と繰り返させはしないっ！！」

しかしその一言を言われながらも彼は…そんな彼女の悲惨な過去を…そんな彼女の思いを総てその右手で受け止め言い放つ！！

「ふざけんな……」

と！！

「なんだと？……」

「ふざけんなって言ってんだよっ！！おまえ…そこまでして、そんな自分の頭をいじくって改造してまであの子達を助けたいと思ってんだろっ！！」

更に彼は彼女を救おうと、その彼女の総ての運命を救ってあげようと！！

「君に何がわかるっ！！」

「その降らねえクソッタレな実験の為に…その子供達が犠牲になったのは…この街が悪い…だがな～…その為に…その子供達を救う為だけにおまえは何をしたっ！！」

「黙れ……」

「おまえはそんなこの街総てを敵にまわして…それに何の罪も無い人達まであんなに巻き添えにして…」

「クッ！！……」

「そんな事までして…おまえを信じていた…
どんなに辛くてもそしてっ！！どんな状況になってもそんなおまえだけを信じきっていた、
その子供達の気持ちを知った上できっとその幼気な気持ちを助けたいって願ったんじゃねえのかっ！！
おまえの幸せを誰よりも願っていたんじゃねえのかっ！！」

「知った事を…君に何がわかるっ！！私はっ！！あの子達の為ならなんだってすりっ！！どんな罪だって…君に…そんな私の気持ちが分かるものかっ！！」

「何がわかる？ふざけんなっ！！だったら……あの状況の中あの子供達が信じていた木山春生を…
そんな降らねぇー事の為に総てを捨てるようなおまえになる事を信じていたのかよっ！！
違うだろっ！！そんななにもかも失ったクソッタレなおまえなんか望んじゃいねえっ！！あの子供達が望むのは今のおまえじゃねぇー…
だからこのままその子供達が目を覚まし…
その時に笑顔で迎えてあげれる…
そんなおまえを望んでいるんじゃねぇ～のかよっ！！」

「だったらだったら一体私はどうすればいいんだっ！！私は……私はぁぁぁっ！！」

更に彼女は叫ぶ！！彼女が一番大切な…
その可愛い微笑みを浮かべながら…
そしてそのはかない思い出を何処か遠くに行ってしまったもう喋らない…
けしてあの笑顔を二度と見せない子供達……
その彼女の思いを総てぶつけるように…
更に頭痛に耐えながらも目の前に佇む一人少年…
その少年に総てをぶつけるように彼女は襲いかかり…

そんな彼女に応えるかのように当麻も自身の拳を堅く握りしめ！！

「おまえ…まだわからねぇってんのならっ！！」

「そのふざけた幻想をぶち殺すっ！！」

そして…木山春生は自身の行き場のない暴走をどうしようもない思いを一人の少年（ヒーロー）に総てはき捨てながら　意識を沈めて行った……

そして、光雄も又…そんな春生達の一部始終を美琴の隣側で眺めていたのである……

そして……

又々無理矢理だが次回へ続くっ！！

第七十七話　とある瓦礫の魔法大戦……――その６――……（後書き）

いやいや、今回はぐだぐだ&上条さんの説教で幕をとじましたが、

次回っ！！いよいよバトル開始の予感がっ！？

そんな訳でっ！！

次回もお楽しみに～…

第七十八話　とある瓦礫の魔法大戦……――その7――……（前書き）

さてさて更に続くこのシリーズ？？（またかっ！？）
んで？
今回は普段と違い何時もの三人称じゃぁーなく、一人称に初挑戦してみました
……というか大丈夫なんかいっ！？
っつー訳で今回だけ何故か主役ではなく原作キャラの中じゃあダントツ人気キャラの？美琴さん視点でっ！！

光学の超高密度収縮粒子砲戦記
始まり始まり～…

第七十八話　とある瓦礫の魔法大戦……――その7――……

――先程までのあの騒ぎはまるで偽りの如く、立ち込める突風がいき去ったかのように一つの戦いが終わりを告げ、再び静まり帰る第二学区のとある高速道路前、

その高速道路下に更に応援が来たのか周りを彩るかのように警備員（アンチスキル）の装甲車やパトカーが並び…その先にじっと佇む白井黒子を筆頭にした光雄の仲間達…

その仲間達が見守る中、その半分倒壊した高速道路下の瓦礫をバックに数人のシルエットが浮かぶ、

そんな中目の前の当麻達を見つめながらじっと立ちすくむ一人の幼き少女、彼女は思う、この混沌とする世界も、そして自身を取り巻く世界、そんな世界に芽生えた一握りの小さくても大切な仲間達の事を、そして彼女はその雲一つ無いこの空を仰ぎつつ――……

……――――これで、この事件もアイツが終わらせたのね……と呟く――――……

◆◇◆◇◆◇◆…

――――――――――…

――――――――……

――――――……

――――――……

――

…――そう…何時だってどんなに小さな些細な事でもアイツは自分からホイホイと人の厄介事に首を突っ込んで来る。

ついさっきまでもそんな私達の問題に、突然割り込んで来たと思ったら勝手に戦って、解決してっちゃうんだもん！！

ほぉ～んとお節介なんだからアイツは。

あっ！ううん？、それを言ったら今隣にいる彼、チョッピリ生意

気な、でも危なっかしくてついついほっとけない私の友達の一人、
まぁ今回はその彼がしでかす問題に首を突っ込んだ私も人の事を言えないと思うんだけどね。
はぁ～…それを言ったら私もアイツと一緒だな、たはは…

そんな事を思いながら私は、今隣に居るそいつのあのマヌケっ面をマジマジと見る。

ほぉ～んと、元々は今私達が巻き込まれているこの厄介事もそいつが又々しでかした事なんだけどねっ！！

そして私の目線は、そんな何時ものアホ面な奴から未だ混沌する学園都市第二学区内を一直線に結ぶ高速道路前、その先程から続くそいつを含む能力者同士の激しい戦闘の後を見渡す。

もう一部は既に完全に倒壊し、もうこりゃぁ～始末書じゃあすまないないな。後々てんてこまいになる黒子の顔が目に浮かぶわ…
そんな周りを見渡す私の前に立つアイツが何かしら騒がしくなる様子に気付き私の目線もそっちの方向を見つめる。
一体全体何を騒いでんのよっ！！もしかして又々あの木山さんが抵抗してきたのかしら？？
でもその木山さんもさっきアイツに無理矢理頭を捕まれ彼女の能力も総てアイツのとんでも能力で無効になった恥じゃあ？？

そう…私もアイツに散々と言って良い程チョッカイを出して勝負

を挑んで知ってるけどアイツの右手、　たしか『幻想殺し（イマジンブレイカー）』だっけか？うん、アイツのその右手…以前佐天さんが言ってた噂の都市伝説、『どんな能力でも効かない能力を持つ男』、ほんっ…と、以前から私は知ってたけどアイツの右手、常識破りっつてもんじゃ～あ無いんだからね！！私の渾身の電撃は愚か、『超電磁砲（レールガン）』でさえ何事も無かったように軽くあしらっちゃうんだもん。

まぁ～今はそんな余計な解説よりも、

あの木山さんの普通じゃ無い様子に慌てるアイツ。しかも今私の隣のソイツもそれに気付いたのか慌てだしてる。

かなり苦しみだしてるみたい、んとにもぅ～っ！！あのバカ何やってんのよ！！早く落ち着かせなさいよもぅ～……そんな事を思いながら私の目線は、かなりとんでもない現象を捕えていた。

「な！？なによ？あれ…まさか？胎児…」

「いや…御坂さん、たしかに、あれは胎児と言うより天使に！？」

「御坂っ！！光雄っ！！危ないっ！！」

「「――――ッツ！！――」」

目の前に佇むアイツの声に反応した瞬間！！さっき木山さんの頭

から出てきた謎の生物から発する超音波でその生物が浮かぶ地点の中心から半径約４～５ｍ（メートル）を吹き飛ばす！！

更に勢いを増すその音源に両耳を必死にふさぎながら私の身体も吹き飛ばされるはずが？

「えっ？？？……」

私の目の前にその襲いかかる音源から右手を突き出しながら防ぐアイツとさっきまで私の隣に居た筈の葛城まで両手をその音源に掲げなんかしら唱え、瞬間ソイツの両手から理解不能の蒼い模様を出して、

なに？あの蒼い模様…なんだか光り輝いて、何時も思うんだけどソイツの能力も何かしら理解不能なのよねぇ～…たしかソイツの能力って書籍（バンク）だと『光学使い（プラトニックマスター）』だったけか？文字通りこの世界に存在するあらゆる光を操る能力なのは分かるんだけれど…

そう、ソイツも私と同じくＬＥＶＥＬ５、しかも序列は私の１つ下の第四位、ついこの間身体検査（システムスキャン）の結果、前第四位の麦野沈利（むぎのしずり）を押し退けての序列入りなんだけど、その内ソイツに奪われた序列を取り返しに何時挑んで来るか心配だけどね。

しかもこの前ソイツの彼女？のマリオンさんの隙を付いて以前か

ら念願だったソイツとの対決を実現出来たんだけど……えっ？どっちが勝ったのかって！？

そりゃ～ぁ…もっちろんこの私に決まってんじゃないのっ！！あんな”にわかＬＥＶＥＬ５”にこの私が負ける筈無いっつーのっ！！

でも正直を言えばまぁ～…どちらも電池切れで引き分けみたいなんだけどね。

「うっひゃぁぁぁっ！！マジッ？ちょっ！？御坂さんっ！！何をのんびりしてんのさっ！！上っ！！上を見ろって！！」

「へっ？？今度は一体全体なによっ！！……ってェェェッ！？」

うん、突然葛城の変な叫びに反応して私も上を見る、へっ？？今度は氷？それとも結晶なの？？

でもまったくソイツったら多分そんな事を私に知らせるのも一生懸命なのは分かるんだけれど、その彼のリアクション一つ一つがなんともマヌケなんだもん…

まるで頭上をビシリッ！！と指差し『鳥だっ！！飛行機だっ、○○○○だっ！！』ってねっ！！

そして私の電撃が空中に展開された結晶達を次々に捕えて総てを尽く粉砕っと！！ざっとこんな物よっ！！

でも直ぐに又々空中で形成され…その度に電撃で破壊する。
ここまで再生させるなんて、もうまったくいくら攻撃してもキリがないわねっ！！

って！？えっ？撃ちもらしたっ！！しかも私が撃ちもらした数本の結晶が！？なんで又あんな場所に初春さん達が居るのよっ！！クッ！！間に合わ！？

あっ！！葛城に？アイツも必死に駆け出してるっ！！でもこの距離からじゃあ……お願いっ！！早く気付いてっ！！避けてっ！！でないと……

「うぉぉぉぉぉっ！！」

「かっ…上条さんっ！！」

「「間に合えェェェ――――――――ッ！！」」

「させないよっ！！」

「…――我が前に立ち塞がる総ての悪しき者から守りたまへっ！！『絶対の水壁（Ａｐｕａｌｂｕｌｌｌｆｉｅｌｄ）』っつ！！」

「マリオンかっ！！」

私の撃ち漏らした初春さん目がけて襲いかかる結晶を今度は横から突然飛び出したマリオンさんが又々まか不思議な能力で防いでくれた。

ふぅ～…なんとか危機一髪って所ね
ほぉ～んと、ヒヤヒヤもんだったんだからね。

そして私はそっと胸を撫で下ろし、目の前に佇むマリオンがなにかしら私にジェスチャーを送っているようだ。

「光雄に上条さんっ！！それに御坂さんっ、このままじゃじりそんだわっ、この魔物は危険だからっ、早く私の展開する結界へっ！！」

「んな事っ！！おまえが一番危ねぇじゃあねぇ～かっ！！マリオン

っ！！葛城っ！！一旦引け、ここは俺がやるっ！！だからおまえ達はここに居る御坂と作戦会議だっ！！」

「なぁ～それよかみんなは逃げてくれ、そしてコイツはこの俺が引き受けるっ！！だから…」

「んとにもぅ～バカ光雄っ！！あなたが一番危なっかしいんでしょ？あの時出くわしたモンスターの時だって私は…」

「あぁ～もぅっ！！つか聞けよおまえらっ！！」

その、あの怪物を前に複数バラバラで言い争いを始めるアイツ等を見て私はこれまでと言って良いほどのため息をつく。

ほぉ～んと、皆揃ってバカばっかりね。

なんかさっきから肝心の初春さんそっちのけで、なんか初春さんもどうして良いかオロオロしだしてるし。

にしてもこんな状況下で一番冷静にしていられるのって私位かしらね。

あっ！！そういえば木山さんは？？

そんな事を思いつつ私は周りの状況を分析してみる。

あっちにあの怪物は未だ浮遊している、その真下に…えっ？

流石黒子ねっ木山さんを抱え何処かしらテレポートして行ったみたい、んで？ああっ！！あっちに居る警備員（アンチスキル）達が攻撃を初めている

みたいだ。
えっ??でもあの怪物に当たっているんだけど身体が再生され…
しかも段々と前よりもデカくなってるじゃない!!
ったくコイツ等もコイツ等でこんな状況でも皆して指を差し合ってんのって、
しゃ～ない、私が引き受けるしか無いじゃない。

「ったく……」

「「「――――えっ??????――」」」

その私の目の前でハモるバカどもはスルーして、

「初春さんっ!!まったくダメじゃないっ!!ここは危ないんだから!!」

「あっ!!御坂さんっ!!これ、早くこれをっ!!これを流せばひょっとして…」

目の前に居る初春さんさっきからが大事にそうに手に持っている
黒い小さなチップを私に見せる。

「まさかこれって！！」

「ええ、『幻想御手（レベルアッパー）』をアンインストールする治療用のプログラムですっ！！さっきのあの怪物が木山さんの身体から出てきたのを見てました…だからひょっとしたらこれでっ！！」

「ええっ！？もしかしたらって！？……ううん…分かったわ！！初春さんは早くこれを何処か流せる場所で流して頂戴っ！！」

「はいっ！！あ…御坂さん？」

「ええ…分かっているから大丈夫よっ…あの怪物は私が引き受けるから初春さんも早くっ！！」

「はいっ！！ありがとうございます」

「んじゃ…行きますかっ！！」

「ええっ！！」

そして私はあの怪物を止める為に。駆け出す!!
でもさっきから私の後から付いて来る長身の変な奴って!?

「なっ!?……ち…ちょっとアンタは何で今頃付いて来る訳?? いい加減足手まといなんだけど…（汗）」

「んっ?僕の事かい?…まっ…気にするな…みんな僕の事を忘れているみたいだからさっ!!」

で?今さらステ!?いやいやｗｗ…（汗）
と?そんな訳で又々無理やりだが?
次回へ続くっ!!

第七十八話　とある瓦礫の魔法大戦……――その7――……（後書き）

いやぁ～…ヤッパ普段から慣れた書き方じゃないから……何かしらおかしな点がかなりあるカモ…（汗）

んでっ！！次回はいよいよあの怪物とのバトルをちゃっちゃと終わらして、早くラスボス戦まで行きたいですね。

そんな訳でっ！！

次回もお楽しみに～！！

第七十九話　とある瓦礫の魔法大戦……――その８――……（前書き）

いやいや、大変長らくお待たせしました、更に続くこの魔法大戦シリーズ

今回はいよいよあの怪物とのバトルに本格的に突入するのであるが？
しかし以外な展開に…（汗）

と、そんな訳で
光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ
始まり始まり～…

第七十九話　とある瓦礫の魔法大戦……――その８――……

……――少年は見つめる、そのある種の赤く染まる目の中の独自の色合いの瞳を、

……――少年は見上げる
その正に異質とも言うべき天使にも似た外見を、

……――生物の進化――……そう、それはこの星に最初の生物が誕生してから約４６億年の長きに渡り繰り返されて来た生き残る為のすべなのである。
更に、そのような進化の過程の中でも突然変異で生まれた異種も例外では無いのである。
そして現代、人々の想い、妬み、苦しみ、そして――絶望……そんな数百、数万の人の意志や幾つもの偶然が重なり
この惑星に過去から生息する様々な生物をも凌駕する、文字通り、生物学的に不可能な世界の法則を無視した突然変異の人造生物……

只今、その生物の斜め下辺りに展開するパトカーや装甲車の影か

ら警備員(アンチスキル)達が順次様々な小銃や小火器を撃ち込み、辺りに渇いた銃声や射撃音が鳴り響く。

一体どう言う原理なのか、その攻撃を受けた生物の身体は、あちこちから身体の一部や破片を周りに撒き散らし、一旦ダメージは受けるものの再びそのダメージ以上の勢いで、瞬時再生され、尚も、まるで物量の法則を完全に無視するように急速成長、更に攻撃すればする程質量も増し、どんどん大きくなるのである。

「こりゃダメじゃんよぅ～…なんとか奴を止め、進行方向をそらさないと…」

「えっ?進行方向を止めるって、まさか!?」

奴の進行方向を眺めつつ眉をひそめ、冷や汗を流す愛穂、その隣側に佇む綴里はその彼女の言葉に息を飲み……

「そう、そのまさかじゃん…奴の進行方向…あの原子力研究所じゃん…」

「ううわっ!…だったら戦車でも手配しますか?」

「って…コラッ!手配出来たら戦車だろうが対戦ヘリだろうが手配しているじゃん!それにここであんな重火器もマズいじゃんよ、」

そんな彼女達の会話中にそっと近づき耳元になにかしら許可を求

める隊員が…そして、

「了解っ…ではおまえ等も続けっ！…」

と、その隊員が指示を出し、その他の隊員達が彼に続く、はたしてコイツ等は一体何をおっぱじめるのであるか。

しかし、その生物はそんな下方で展開する警備員達（アンチスキル）なんかお構い無しの如く、正にお約束のどこぞのパニック映画デスカー？みたいに高エネルギーを求めるかのように、原子力研究所を目指し突き進むのである…

◆◇◆◇◆……

更に数分後、

「よぅ～しっ！”そんな事もあろうかとっ”、コイツを持ち込んどいて良かったぜっ…」

と、奥側に停車中の装甲車の後部ラックからガチャリ…と、なにやら何処ぞのゲームキャラが使用するようなドデカイ装備品を取出し器用に組み上げ準備をする警備員（アンチスキル）の隊員、正にフ○ント○ッションかァ～？

っつー突っ込みは置いといて…（汗）

更に複数の隊員を引き連れ、ゆっくりと、尚且つ迅速に、パトカーの影からそっと狙いを定め、奴の背後からスコープ越しにロックオン、

更に彼の潜む位置から約数（メートル）m後方4時と7時方向にも数名が、地対空ミサイルの熱探知センサーで奴を捉え、

お互いに特殊加工を施した防弾チョッキのポケットから無線機を取出しお互いに配置の確認やら着弾予測地点を確認し合い、

『こちら斜め後方用意よしっ！』

『こちらも準備オッケーですっ！』

「よぅ～しっ！上出来だ、既に黄泉川さんから許可が下りてるっ…俺が合図をしたら順次発砲っ！思いっきりあのクソッタレ化け物にプレゼントしてやれっ…」

『了解っ！』

そして、只今空中に停滞する怪物が突然その下側に準備する警備員達の気配に築いたのか、その不気味な眼光をギョロリと向けつつ、ゆっくりと旋回を始める…

スコープ越しにその奴の様子を眺めつつニンマリとする隊員、正にその瞬間を狙っていたかのように指示を出し、

「今だっ！とびっきりのプレゼントをおまえにやるゼェ……食らいなっ！」

瞬間耳をつんざくような轟音と共に奴に向け一斉に放たれる地対空ミサイルやその他の重火器、

更に次々に着弾し周りを揺さ振る爆発音！さらにその爆風に混じり四散する肉片やその他！

正に、いくら巨大生物であっても暑さ数ｃｍを誇る装甲をも紙切れ同然に吹き飛ばすような火薬量には耐えられないのか、

四方から撃ちこまれる容赦無い攻撃に跡形も無くミンチになるのは当たり前なのだが…

「おいっ…ちょっと待て？」

「まさかっ！…いいかんっ…全員退避っ退避ぃぃ――っ！」

そう、そんな攻撃にも物ともせずにそのとてつもない再生力で更に怪物の質量が全長十数m（メートル）を越し、更に巨大化、正にそのような重火器なんかで対象出来る存在では無くなっている状態で、その生物の周りから何かしらの大気を切り裂くような轟音と共に撃ち出される巨大な風の刃により次々に大破させられるパトカーや装甲車達……

更に連続して続く破壊からなんとか命がらがら逃げる警備員（アンチスキル）達に今度は怪物の周りから何かしらの粒子の塊が具現化！

「ううわっ！やられ……って…あれ？」

「まったく…あなたたちっ！この魔物は普通じゃ無いのっ！危ないからあっちに行ってなさいよもぅ～！」

そのとてつもない攻撃を自信の杖を空中に描き巨大な蒼い魔法陣を空中に展開！その彼女が使用する防御結界で怪物から放たれた攻撃を総て遮断したのである！

更に空中に浮遊する怪物に狙いを定め直上から突然襲い来る美琴が放つ大量の砂鉄の黒い渦の塊の質量でまるで巨大な鋼鉄のハンマーに打たれたように遥か先まで吹き飛ばされ、地響きを立てつつ転がる。

そんな様子にポツリ…その場に立ち尽くし自分達の身に一体何が起こったのか把握出来ないで居る隊員達…そんな隊員達に駆けよる当麻とマリオン、

「あ…あの、」

「話は後でっ！それよりあなたたちも早く避難して頂戴っ…」

「それに、上条さんっ、」

「んあ？なんだ？マリオン」

「あいつ、あのバカがあんな場所に…それに初春さんが1人で反対方向に転がる装甲車にいるし、」

「えっ？ああ…わかったよ、ここと初春の事は俺にまかせろっおまえはあいつの所にっ」

「うんっ！ありがとねっ、上条さんっ…」

そしてマリオンは今だにマヌケにも、只今美琴と怪物の戦闘する近くに居る光雄の元に、更に美琴と合流する為に駆け出し、当麻は

その反対側に居る飾利に合流するべく行動を開始して行った。

更に先ほど前にあの怪物と重火器にて対決した警備員（アンチスキル）達は、少年や少女達に助けられた事に自分達の手には負えないあんな化け物をいとも簡単に吹き飛ばした力、能力者達の力をマジマジと見せ付けられ、

先ほどから少し落ち着いたのか、懐からタバコを取出し火を点け、深々とふかしながら只今向こう側であの怪物と対峙する少女達を眺めながら呟くのである。

「あのガキ共にまさか逆に助けられるとは、能力者か……ふっ…かなわないな」

と…未だ混沌とするここ、第二学区の原子力研究所前を見つめる…

「まるで世界が変わったみたいだな…ヤハリ時代にはかなわないな…」

と、そんな言葉をはき捨てるように、先ほど前まで居た、愛穂や綴里達の居る場所まで撤退して行ったのである。

◆◇◆◇◆…

一方その頃光雄はというと…

彼が佇む目線の先で対峙する美琴と怪物との戦闘を眺めつつなにかしら違和感をおぼえているのか、なにやら考え事をしていたのである…

たしか人の脳波パターンを無理矢理繋げそんな人々の意志の集合体だっけか？　ＡＩＭの造り出した怪物、俺は以前原作で見たから知っているし、多分あちら側の初春さん達はあの脳波パターンを消滅する為に行動してるのか…んで、しかも今そいつと戦ってる彼女…御坂さんが留めを刺し、そいつを倒すのも知っている…

しかし今俺が見ている本物は……

「――――っ！！」

そんな事を想いながら佇む光雄に奴が放った攻撃が彼を捉え…

「って…マジ？……あ、あれ？いつの間にか此方に……ヤバッ！俺だけが狙われ？」

瞬間、身構える光雄をその向こう側で察知したのか彼が対処する前に庇う形で眩ゆく光り輝く蒼い魔法陣が展開されそれと共に耳をつんざくような破壊音が！！

「ち、ちょっとぉ――っ…もう光雄っ！！…そこで何マヌケにつっ立っているのよっ！これじゃぁ～良い的じゃないっ！」

「へっ？」

「へじゃ無いっ！只でさえ警備員達（アンチスキル）を守るのに手一杯なんだから余計な仕事を増やすなっ！」

「う……うん、ごめん」

「はァ？なんかそんな素直に返事されると逆に……キモいんだけど…」

「なっ…失礼なっ、あの～マリオンさんっ？いくら常日頃から心に思ってても普通～そこまで言うか？…さっきの一言は傷ついたからね、マジこの俺様のガラスのハートに罅が入ったからねっ！」

「へ～えっ？ねえ光雄っ？知らなかったわ、あなたのハートってそんな繊細なんだぁ～…私はてっきりゴリラかその他みたいな只の”バカ”だと……」

「ななっ！”バカ”とはなんだ”バカ”とはっ…ったく、そう人の事を”バカ”にするほうが”バカ”なんだって？…あれれっ？…そんじゃまるでこの俺様が？」

「そっ、さっすが”バカ光雄”っ、分かっているじゃないっ！」

「ぬぐぐぐ……うぅ～…（涙）」

と、戦闘の最中にいきなり何時ものパフォーマンスを始める二人、…というか何時もの夫婦漫才のよーな…（汗）　しかしそんな敵を目の前にしてこんな何時もの口論を始めるアホな二人はヤハリ敵の良い的な事は当たり前のようで、

「「うわわっ！」」

「バカ光雄っ！んだからひっ着くなっ！！離れろってんでしょうがっ！」

「いや、マリオンっ！そのまま俺の懐に隠れろっ、今度は俺様が防御結界を張るっ！」

「なっ！だからこれ違うよ光雄っ！防御結界は……って？」

「「ひぃ？…しっ触手っ！？」」

しかし、二人共なにやらもみくちゃになりながら今度は魔術の使用方で口論？そんな二人にうねりながら怪物の触手が差し迫り大ピンチに！？

瞬間二人がお互いに抱き合う中、光雄達の佇む真横を凄まじい雷鳴と共に通過する超電磁砲（レールガン）！

「ったく…仲良しなのは分かるんだけどさぁ～二人して何やってんだか…（汗）」

「「ふぇ？」」

と、そんな彼等を危機一髪で触手をことごとく粉砕し救った美琴なのである。

更にそんな美琴は二人して見つめるマリオン達に此方に来いとな

にかしらジェスチャーを送るのであるが、それに反応し、マリオンは光雄を引っ張りながら美琴と合流し、

◆◇◆◇◆……

「なぁ…あの怪物だったらこの俺様の能力でちゃっちゃと？」

「「アンタは黙りなさいっ！」」

「うぐぅ……（汗）」

と、美琴達に怒られながら、かなりイジケる彼をスルーし、二人して作戦会議を始めるのだが？

うぅ～…二人して一体なんなんだよぅ～、せっかくこの俺様の生前に培った目録で奴の攻略方のヒントをわざわざ教えてあげるのにっ！

あ…そうだよ、本来の主役はこの俺様なのだから前半戦はコイツ

等にやらせ、奴が力尽きた頃を見計らい、この俺様が颯爽と登場しつつ、本来の御坂さんじゃ無く、俺の超必殺技で奴を一撃の如く倒し、そしてっ…今までどの二次元作品にもなかった唯一オリ主が奴を倒したっつー伝説をだなっ……って？…あれれっ？

「へっ？」

とまぁ～…そんなアホな何時もの妄想中に、又してもスルーされ、いつのまにか、遥か先で怪物と戦いを始める二人…更に丁度その頃タイミング良く、初春や当麻達が学園都市中に『幻想御手（レベルアッパー）』をアンインストールする治療用プログラムが流され、

それの使用により弱り果てた怪物をマリオンが放った魔術『引き裂かれし水刃（Ｓｐｉｎｅｔｌｓｐｉｔｚｓａｂｅｒ）』により切り刻まれ、最後に留めの美琴の必殺技『超電磁砲（レールガン）』により内部のコア事貫通し、轟音を立てつつ地面に崩れ行く怪物の姿なのである。

「なっ…マジ？」

と、光雄がワナワナと佇む中その怪物をあっという間に倒しお互いに手の平を叩き合う美琴とマリオン…そんな彼女達を祝福するかのように駆け寄る黒子や春生達筆頭に飾利や当麻達
までも、そんな仲間達に囲まれながらニンマリする美琴やマリオン、

そんな様子を遠くから淋しく見つめる彼の淋しそうな背中（笑）

ハァ～……

やっぱ、こんなパターンだとは分かってはいたが……あはは……

ええい！この…この熱い展開は本来主役であるこの俺様の物なのにくそぅっ！

全部あのアイツ等に持って行かれたとは……うぐぐ……（涙）

と、本来自分自身がやるこの展開を総て美琴達に横取りされ地団駄を踏む哀れな主役…光雄なのであった…

もう、どーでも良いから、どーせこの俺様は最初から最後までこんなパターンだから……しかし、

と？なにかしら自身の足元に転がっている妙な人物に気付きその人物にしゃがみ込みながら話しかける彼、その彼に気付いたかのようにその人物は口を開き？

「はァ～…床冷て……」

と？

なんだステイルおまえもか…つかここ床じゃねぇ～し…地面だし…

とまぁ～、そんな彼の足元で俯せに倒れているステイルの頭は、

一体誰にやられたのか一目瞭然の如く、”アフロ”だった（笑）

◆◇◆◇◆◇……

一方そんな第二学区の高速道路前から少し離れた地点をなにかしらの気配や魔力を感じてか、辺りを探索する元春、

「おかしいにゃ～…たしかこの辺りから微弱ながら妙な魔力を感じたんだが…」

「うおっ！ヤハリ…これはっ！祭壇ぜよっ！」

と、その彼の目に映った物とは！？はたしてっ…

と、又々無理矢理だが次回へ続くっ！

第七十九話　とある瓦礫の魔法大戦……――その８――……（後書き）

いや、こんなアッサリと終わってしまうとは……（汗）
まぁ～この展開も結局は主役は活躍せずだったのですが…

次回からようやく登場する主役やヒロイン達にとっての最大の敵しかもその後にあの伝説の化けも？…いやいや
でも…多分このチートメンバーなら楽勝のよーな…（汗）

そんな訳で次回もお楽しみに～（汗）

第八十話　とある瓦礫の魔法戦争……――その９――……（前書き）

いやいや…かなりお待たせしました…この魔法大戦シリーズもいよいよ大詰めという訳でっ！

光学の超高密度収縮粒子砲戦記っ

始まり始まり～っ

第八十話　とある瓦礫の魔法戦争……――その9――…

……――かつて古から伝われし禁断の術式、この世界とは別の法則で行われる魔術が存在していた、

そう、それは強力な魔力を持たない力の無い者達が、強大な魔力を用いる者達に対抗する為の研究から始まり、更に研究、開発を繰り返し最終的に行き着いた禁断の魔術……

『魔界への誘い』の法則によって、生み出された魔術を超えた禁断の魔法兵器達、
魔法工房（マジカルエンチャント）された、この世の常識を無理矢理ねじ曲げたとんでもない魔装兵器達…

その中でもずば抜けて強力な純度が高い魔力を用い、初めて可能にした生物兵器、『深紅の火炎鳥（サラマンダ）』

その神々しい巨大な翼を一度羽ばたかせれば、あらゆる物体がくず切れの如く粉砕され、その鋭い爪は一降りで鋼鉄を切り裂き、その口から発する数億度の火炎流は、あらゆる物をあっという間に消滅させる。

更に、それを生み出した術者をも食い殺し、世界に七日間の災いをもたらしたと書き記されている古の最悪の魔物が現代に蘇ろうと

しているのである。

◆◇◆◇◆◇……

「こ、この地面に描かれた魔法陣は？…この祭壇の術式、初めて見るぜよ…」

只今、先程の戦闘があった学園都市、第二学区高速道路前から数百ｍ先にある地点で元春は見知らぬ祭壇を発見し、近づきマジマジと見入る、

その彼の佇む位置から直径４～５ｍ位に描かれた魔法陣、その周りを取り囲むように無数に設置されている蝋燭

更に目線を魔法陣の中心付近まで持って行き、その中央付近に設置されている容器と共に周りに設置してあるナニカ……

◇◆◇◆◇……

更にその祭壇に近づき、

「ヤハリ……まさかここまでとは」

元春の嫌な予感が的中し、その彼が見つめる眼前に展開されている妙な祭壇の形、一番奥に見えるだだっ広い台らしき場所に巨大な魔法陣が描かれており、その中心部に何かしらが入っていた容器があり、その容器からドロリ…と、薄い色素の培養液、若しくは生物の体液らしき液体が漏れ周りに散らばっている、

元春は、その謎の液体から発する独自の匂いに鼻を押さえつつ足早に、設置してある階段を登りその祭壇中心部に近づく、

そして、台の上に設置してある容器の中を覗き、しかしその中身は空っぽだった…

更に容器中に付着した液体を指で触り、手前に持って行き撮む…

そのザラリとした手触りからして彼は思い出す…この培養液は、間違いなく学園都市制と、

そう、彼は知っていた…この培養液を用いる人物を、『アレイスター・クロウリ』推定年齢１７００歳を越えると言う怪物…学園都(こ)

市の統括理事長、この街を束ねる最高権力者の彼は、その巨大な培養液に満たされた生命維持装置の中で過ごしている事を…
彼はそんな人物とも知り合いでもあり、もちつもたれつの関係でもある。

そして、そんな事を思いつつこの謎の液体を見つめる彼の近くに、いつの間にか佇む人物の気配に気付き振り向く。

「だっ誰だっ！」

「ふふ…そうカッカするものでは無いですよ、別にあなた方に危害を加える者では無いです…」

「おまえは？…」

「ふ…まぁコイツを仕掛けたとある人物を始末に来た者…とでも言いましょうかね、それに、この祭壇あなたもお気づきとは思いますが、文字どおりかつて我々がもっとも恐れる封印さるし術式…『龍宮の砦（Ｄｒａｇｏｎ－Ｓｅｙｆｒｉｅｄ）』を強引に学園都市の技術を借り、現代に蘇らせたのでしょう…」

「ドラゴン、ザイフリート？そんな術式聞いた事無いぜよ…」

「そうですねぇ～…そのまじゅ…」

「そうっ！魔法だよっ、ゲームでよくいう召喚魔法っつー奴、その方が分かりやすいっしょ？…」

更に、元春と相対するように立つ緑色の礼服の男の真後ろからヒョッコリと顔を出しつつ二人の会話に割り込む赤髪のシスター…

「なっ！アンタ等のその身なり…まさか…ローマ正教のアニェーゼ部隊の輩か！？」

「又々～…そんな怖い顔しちゃってさっ、でもまぁ～正解とは言いにくいんだけどローマ正教なのは当たってる」

「ったく…冗談キツいぜよ、以前から学園都市に侵入した者達が居ると聞いていたんだがにゃ～…アンタ等だったとは…で？アンタ等は一体、つか場合によっちゃ…」

と、両腕を組み、眉を顰めるような素振りを見せる元春の問をそっちのけでヅカヅカと彼の目の前まで詰め寄るシスター。

「まったく、初対面のレディーに失礼でしょっ！アタイはリエ、んで後ろのアイツは、」

「知ってるぜ！アンタ等はローマの俺達で言う暗部って奴だろ？んでアンタ等を差し向けるっつー事は只事じゃ～ぁねぇ～っつぅ～訳だにゃ…」

とまぁ～彼等の佇む前で腕を組みつつ自慢のグラサンを片手で器用に上げつつ相対する輩の姿や仕草でズバリ当ててしまう彼、

「ふふ…まぁ～そんな所でしょうかね、ま！積もる話は後回しにして、とりあえず我々と君と目的は一緒でしょうし、」

そして、突如出会った元春と共にこの二人も同じ目的なのか、祭壇を後にし共にあの錬金術師を追う事になるのである。

しかし元春はこの者達から発せられる普通じゃない魔力に警戒する。

…――コイツ等も何れは敵体するかも知れないと…

◆◇◆◇◆◇

一方その頃先程までの激しい戦闘で瓦礫と化した第二学区高速道路前では、

高速道路下の周りに先程前の怪物に破壊された数台のパトカーや装甲車を撤去作業する為に原子力研究所から『ＭＡＲ（先進状況救助隊）』所属の駆動鎧が赴き、その部隊の隊長である人物が愛穂と共に指示を出している最中なのである。

そして、その向こう側に更に応援に来た装甲車がパトライトを点灯しながら数台停車している、

そこにこの一連の事件を引き起こした志望者である春生を警備員（アンチスキル）達が連行する所なのである。

そんな中、周り取り囲む警備員（アンチスキル）達を払いのけつつ彼女の前に佇むマリオン達、

「あっ、あのっ！……って上条さんっ…ちょ」

「ああ悪いっ、木山さんだっけか？おまえが言ってた子供達の事は俺達が探して何とかしてやる、信じるも信じないも勝手だと思うけどさぁ～…俺のこの右手はどんな物だろうと…」

と、自身の右手を眺めつつ、春生の抱える眠り続ける子供達を助け出そうと決心する当麻なのだが、

春生はそんな当麻に対し苦笑しながら口を開き、

「いや、もういいよ少年、君達にこれ以上迷惑はかけられないし、君に言われた通りもう一度最初からやり直すさ、理論を組み立てる事は刑務所の中だろうと世界の果てだろうと私の頭脳は常にここにあるのだから、」

と、横目で当麻達を眺めながら言い放つ春生、その彼女の表情は自身の中の何かが吹っ切れたのか、かなり爽やかな笑顔なのである。

更にその当麻の斜め後ろに佇む水色の髪の少女、マリオンの既に彼女のトレードマークになりつつある独自の霊装、

耳元辺りで折り曲げている大きなエリ、更にそこから首辺りにある何かしらの紋章の入った留め具に挟み　更に足元まで身体を被う対魔法防御用の鮮やかな紫のマントから両手を出し、まか不思議な杖を胸元辺りで掴み…

何ともいかにも魔法使い若しくは魔法少女チックな姿を、マジマジと見つめつつ

「たしか…君の能力を先程から見さしてもらったが、まさかとは思ったが、もしかして科学側(こちら)の人間とは違う種族かな？以前にも事例があってな、少なからず君と同じ能力の者達が居てね、実に興味深い能力だなと…たしか…ええっと…ま…魔法使い？…いや違うか…まじゅ？」

「あっ！」

その”魔術”と言うオカルトなワードを何故か知ってる春生に、自身が持つ杖を更に強く握り、一瞬彼女から後退りするマリオン、その彼女と春生の間に割り込む形で口を挟む当麻、

「あ～あ～すまんっ！コイツ、ちょーっと変わった能力を使う子なんだけどさぁ～」

「ちょっと上条さん？」

「ええーと…書籍(バンク)じゃ水流操作系(アクアマスター)でＬＥＶＥＬ３って所か、」

彼の真後ろに佇むマリオンに、横目でさり気なく合図を送る当麻、自分自身の身体の事は、絶対に伏せろと、そんな当麻の気遣いに目を見開きつつも分かったらしく相づちするマリオン、

更に当麻は春生の目の前まで近づき片手で器用に頭をかきつつ会話する。

その彼の自分に対しての気遣いに又々驚かされつつもマリオンは、一呼吸置いてから今度は自分の連れでもある光雄と合流し、今から訪れるであろう謎の錬金術師、レイに対しての作戦会議をしようと思いつつ辺りを見渡すマリオン、　更にその彼女が佇む位置の近くで先程までの一部始終を見ていた美琴と突然目が合い、

「そっ、分かったでしょ?アイツはああ言う奴なんだって、自分の悩みや不安より他人の事に真剣になる、ほぉ～んと、只バカっつーか何っつーか…」

「えっ?、ええ…上条さんの事ね、ううん、あんな人なの?でもいくらなんでも…でも、今回の私の能力に対してのフォローもそうなんだけどって?御坂さん?まさか私の能力を知ってる!?」

一瞬ビクリ…と、かなり怪しげに美琴の顔を冷や汗をかきつつ見つめながら更に同様しだす彼女……というか、ここまで魔術をバリバリに使っていたら誰でも気付くような…（汗）

しかしそんな彼女の不安要素は全然見当違いなのか、勝手に空回りしているみたいのようで、美琴は当たり前のように彼女と相対するように片手を腰にあてがい、

「で？アンタ何を疑いの眼差ししてんのよ、書籍（バンク）とは違うアンタの能力って原石でしょ？まぁ～知ってんのは私とアイツや葛城位だし、黒子にだって話してないし……」

「へっ？…わわわっ！御坂さんごめんなさいっ！私…そんな疑うとか…うぅ～（汗）」

とまぁ～美琴は彼女の能力を原石と言い放ち、
結局本当に自分が正真正銘の魔術師だと言う事を知ってるのは当麻と光雄を含む魔術サイドの面子位で、その事にそっと胸を撫で下ろすマリオンであった

そして、そんな事をやっている内に当麻も春生との会話が終わったみたいのようで合流、
そして、マリオンは二人を連れ、今度こそ光雄とこの後の確実に来るであろう本当の戦いの準備をするべく合流するために探すのである。

◇◆◇◆◇◆……

一方その頃光雄はというと……

「召喚術式？……って、まさか？とある学校で成績準にクラスが分けられ召喚獣を使いバトルする”あれ”か？……たしか、バ〇とテストのしょう……」

バキッ！「ふぐぉっ！？」

「っ……突然なにすんだこのロリコン神父がァ……」

「まったく…君には危機感っつーのは無いのかね？そんなヤバイネタを……いや…そうじゃなくて」

「ふぅ～痛て……だから召喚魔法っしょ？んなの誰でも分かるっつぅ～のっ！」

と、なにやらマリオン達がいる場所から更に高速道路の真下付近で瓦礫に腰を掛けステイルの突っ込みがかなり痛かったらしく両手で頭を抱えつつ涙目で見上げる光雄と、その光雄を見下ろす形で顔を引く尽かせつつ相対するように佇むステイルと、そんな彼等は既に例の錬金術師に対しての作戦会議中みたいなのである。

更にステイルは只今両手で頭を押さえつつ、涙目、更に目遣いの表情で見つめる光雄になにかしら恥ずかしいのか、違和感を感じつつ外方を向きながら会話するのだが？……っつーか何げに怪しげなこの二人って（汗）

「っつーか、んな事言われてもさぁ～…分からんから素直に質問してんでしょうがァ」

「まったく…それ位君の師でもあるマリオンに教わっているもんだと思っていたが…」

「ようは、魔術っつーのは基本的に発動させる者の魔力が強いか弱いかによって威力が違って来るものなのだがねぇ～」

と、そんな事を言いつつ懐から自身が使用する一枚のルーンカードを取出し、器用に片手でそのカードの先端から炎を具現化させる彼、

「だから基本的に僕達を含む魔術師は魔法を使用する時に綴られた基本的な言葉を唱える時に、魔力…即ち自身の身体に宿る生命力（マナ）を燃焼させ初めて使用するのは分かるよね…」

「ああ…ようは車や乗り物で言えばそれらを動かすガソリンみたい

なもんっしょ？…んな事…俺自身もそれは経験積みだから、」

「で、その使用する魔術の威力や力は、自身に宿る生命力（マナ）が強ければ強い程威力は増す、それと召喚魔法とどう関係が？」

「だからさぁ～…もしその自身に宿る魔力が弱い奴が強大な魔術師に対抗するとしたら？」

そのステイルの光雄に対してかなり分かりやすく説明しているのか、そのステイルの努力の甲斐があってか、なにかしら気付き両手をポン…と叩く光雄、

「……あっ！その為の召喚…？」

と、その光雄の態度にかなり満足したのか、片手の炎を自身がくわえた新たなタバコに火を点けるように持って行き、一呼吸吹かすと同時に、自身の手に掴むルーンカードの火を消し懐にしまいこみつつ、ふ…と苦笑する彼、

そんな彼等に向こう側から近づく輩に気付きつつ、

「まっ！そう言う訳さ……おっ！葛城光雄っ…続きは後にしよう、彼方側の用事はすんだみたいだな、ようやく君の師がおでましだからな…」

「えっ？…」

と、相対するステイルと光雄の間に両手を腰にやりつつ佇みニッコリ微笑むマリオン、

「コラ光雄っ！…っつーかさぁ～、二人して何話してたのかなぁ～？……と、冗談は後にして、」

「ああ……分かってる、」

「それじゃ～あ初めよっか…作戦会議をっ！」

と、いよいよ来るべき新たな戦いの為の準備を始める光雄達なのである。

と、又々無理矢理だが次回っ！いよいよ最終決戦へ！

第八十話　とある瓦礫の魔法戦争……――その9――……（後書き）

いや…今回からかなりマニアックに、尚且つゲームチックになるよーな…（汗）

んでっ次回からいよいよバトル回に再び突入する予感が…（汗）
というか…このまま行ったらかなりヤバゲな展開にっ!?

そんな訳で
次回もお楽しみに～…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9567r/

光学の超高密度収縮粒子砲戦記

2011年11月28日04時50分発行